福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群6

－桑原金屎古墳、元岡石ヶ原古墳、元岡・桑原遺跡群
第22・27・28・34次調査の報告－

２００６

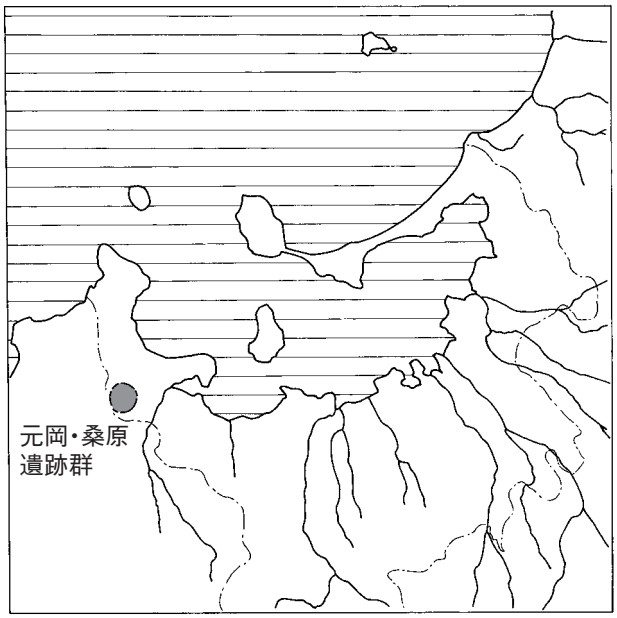
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群6

－桑原金屎古墳、元岡石ヶ原古墳、元岡・桑原遺跡群
第22・27・28・34次調査の報告－



調査次数	調査番号	遺跡略号
桑原金屎古墳	9657	ＫＫＡ－１
元岡石ヶ原古墳第１次調査	9658	ＭＯＩ－１
元岡石ヶ原古墳第２次調査	0340	ＭＯＩ－２
（元岡・桑原遺跡群第35次調査		ＭＯＴ－３５）
元岡・桑原遺跡群第22次調査	0033	ＭＯＴ－２２
元岡・桑原遺跡群第27次調査	0153	ＭＯＴ－２７
元岡・桑原遺跡群第28次調査	0154	ＭＯＴ－２８
元岡・桑原遺跡群第34次調査	0310	ＭＯＴ－３４

２００６

福岡市教育委員会

1. 桑原金屎古墳調査状況空撮（西から）

2. 桑原金屎古墳調査状況全景空撮（北から）

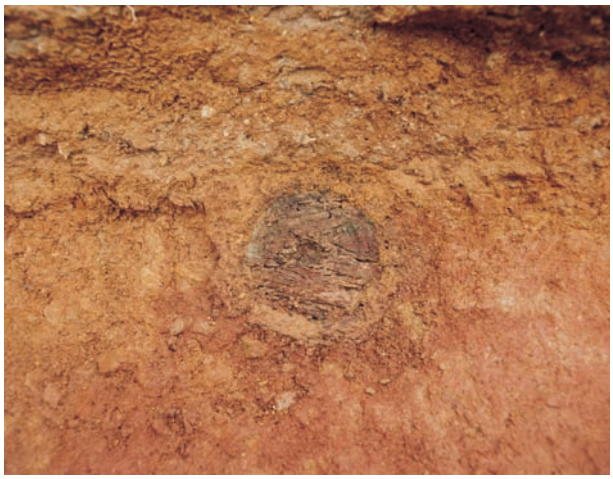
1. 桑原金屎古墳調査状況（前方後円墳部分）空撮（北から）

2. 主体部木棺遺物出土状況（東から）

1. 木棺頭部付近遺物出土状況（左：菱雲紋鏡，右：芝草紋鏡）（東から）

2. 墳頂部周囲および主体部墓壙調査状況空撮（東から）

1. 主体部墓壙調査状況（東から）



2. 木棺出土芝草紋鏡取り上げ後木棺木質痕跡（南から）

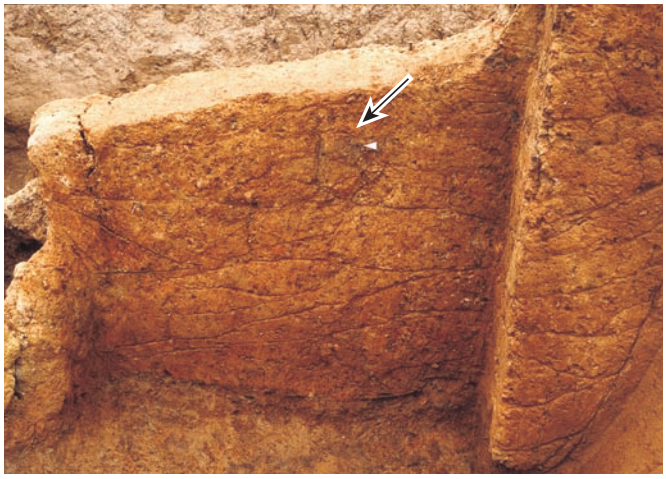
3. 墓壙 5 区埋土中ガラス小玉出土状況（南から）

4. 墳頂部・墓壙 6 区南側土層東半（北から）

5. 墳頂部・墓壙 6 区南側土層西半（北から）

1. 墳頂部・墓壙 5 区北側土層西半（南から）

2. 墳頂部・墓壙 5 区北側土層東半（南から）



3. 墳頂部・墓壙 5 区北側土層ガラス小玉出土位置（南から）

4. 墓壙 1 区北側土層（主軸南側）（南から）

5. 墓壙 2 区南側土層（墓壙下半）（主軸北側）（北から）

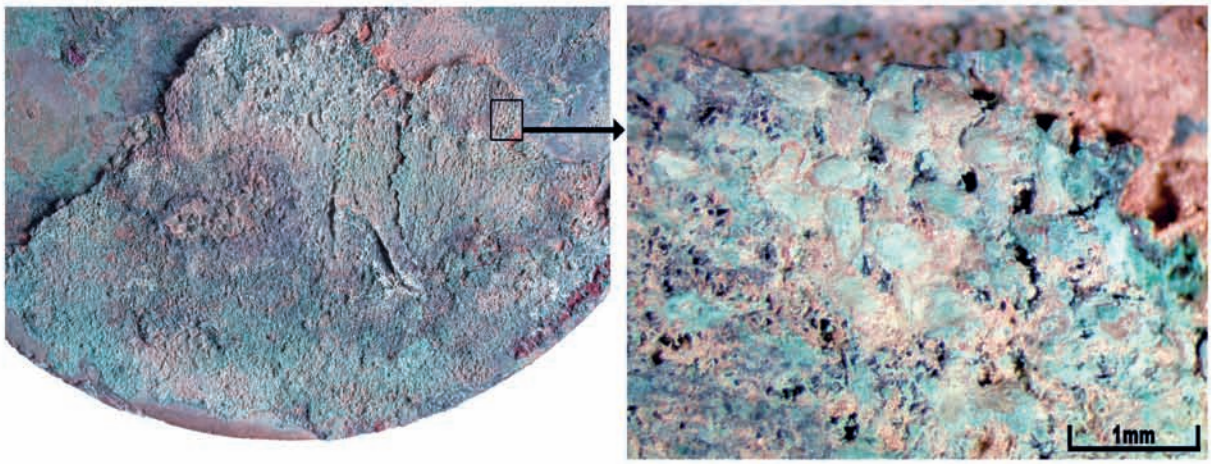
6. 墳頂部・墓壙 2 区南側土層（墓壙上半）（北から）

7. 墳頂部・墓壙 2 区西側土層（墓壙横断北側）（東から）

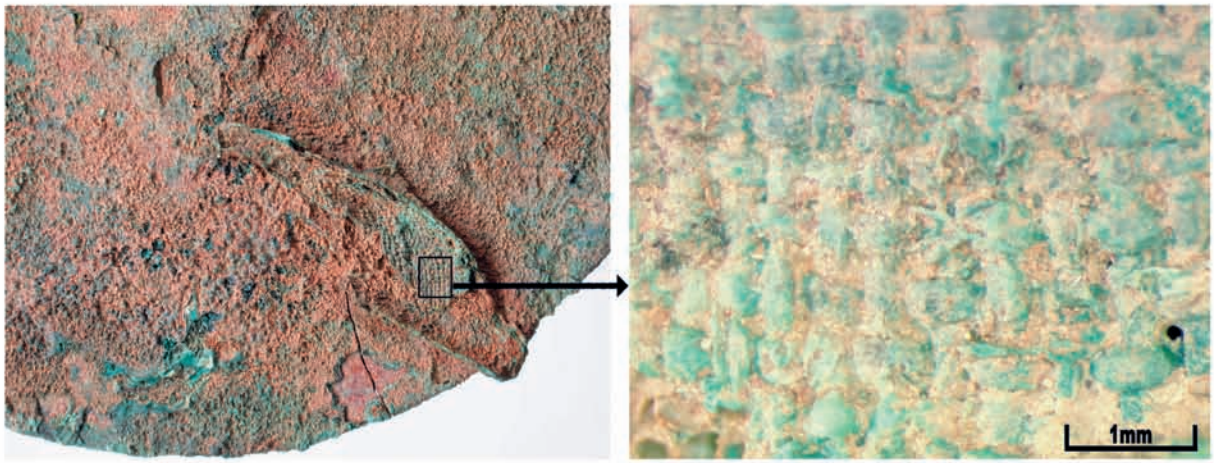
8. 墳頂部・墓壙 6 区西側土層（墓壙横断北側）（東から）

主体部出土鏡　鏡背面写真（原寸）
（上：1. 菱雲紋鏡，下：2. 芝草紋鏡）

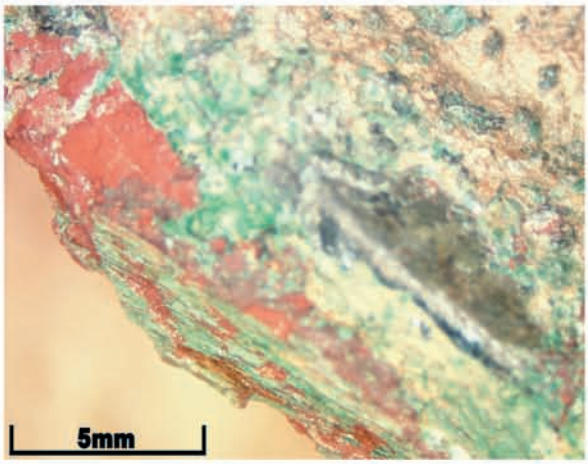
主体部出土鏡　鏡面写真（原寸）
（上：1. 菱雲紋鏡，下：2. 芝草紋鏡）



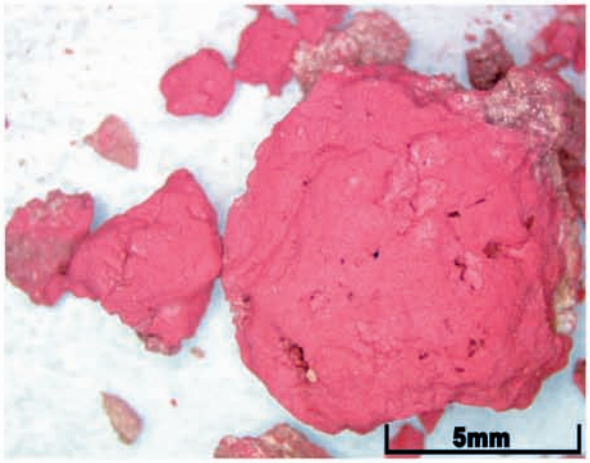
1. 菱雲紋鏡付着織物顕微鏡写真（約20倍）



2. 芝草紋鏡付着織物顕微鏡写真（約20倍）



3. 芝草紋鏡付着赤色顔料及び木質痕の
顕微鏡写真（約6.3倍）



4. 木棺内より採取された赤色顔料の
顕微鏡写真（約6.3倍）

5. ガラス小玉顕微鏡写真（約20倍）

鏡付着織物片、赤色顔料、ガラス玉の顕微鏡写真

1. 石ヶ原古墳全景（北から）

2. 石ヶ原古墳全景（俯瞰）（西から）

1. 墳丘半掘（北から）

2. 土層1（北から）

3. 土層2（北から）

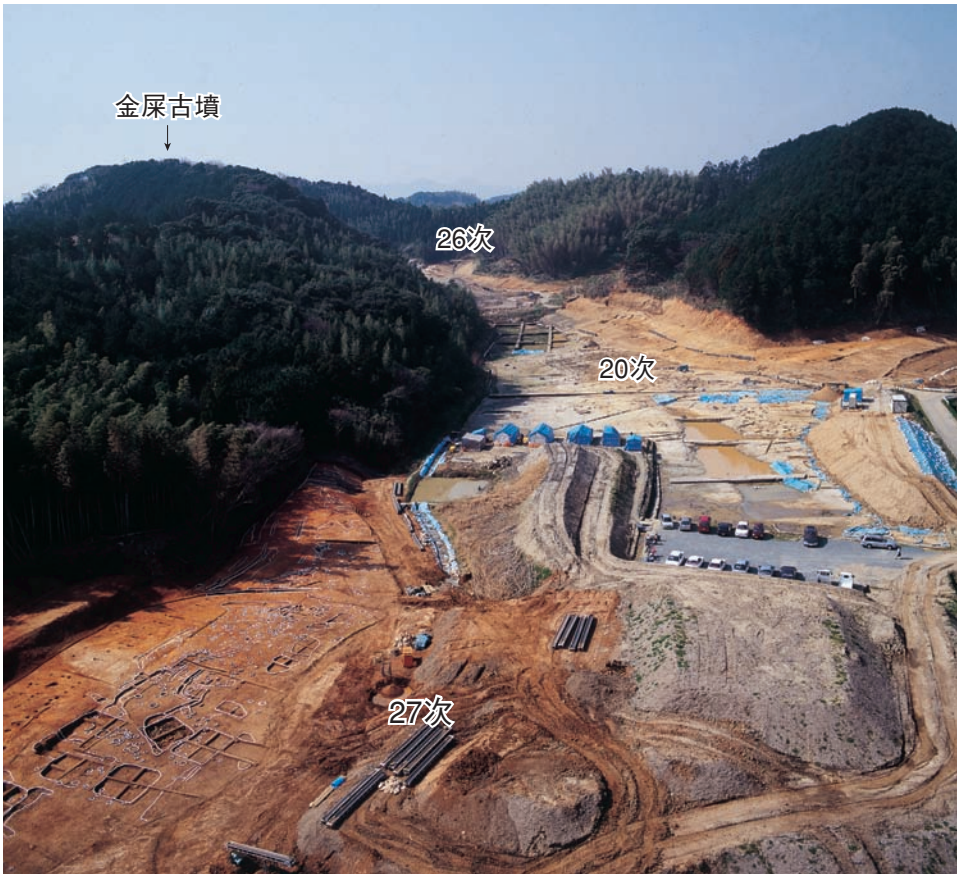
器台

台付子持瑟

鹿形装飾（瑟）

皮袋形瓶

石ヶ原古墳出土遺物



1. 元岡・桑原遺跡群航空写真（第27次から第20次調査区を望む）

2. 第27次全景（左上第24次調査区）

1. 第27次調査区全景（北西から）

2. SC-16と周辺の住居址群（北から）

1. SC-16全景（東から）

2. SC-16南側検出状況（南から）

1. SC-16南側（東から）（焼落ちた粘土、材、土器等検出状況）

2. SC-16他完掘状況（北西から）

1. 第27次調査区完掘状況（北西から）

2. 出土鉄器・金環・玉

序

福岡市は大陸に近いという地理的条件から、外来文化の流入の窓口、大陸との貿易基地として古くからの歴史を有しています。現在も歴史的、地理的に関係の深いアジアとのつながりを重視し、「アジアの交流拠点都市」として、アジアの様々な地域との学術・文化などの交流を行っています。

現在、九州大学は「時代の変化に応じて自立的に変革し、活力を維持し続ける開かれた研究大学の構築」をコンセプトに、箱崎地区、六本松地区、原町地区のキャンパスを統合移転し、世界的レベルでの研究・教育拠点を創造するために、福岡市西区元岡・桑原地区、前原市、志摩町にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めており、その一部は平成17年度にすでに開校したところであります。

また本市も、九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角的連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点からも対応を行っております。こうした中、九州大学統合移転用地内の埋蔵文化財の発掘調査についても、平成７年度から本市教育委員会が取り組んでいるところであります。

本書は、九州大学統合移転事業に伴い実施した、元岡・桑原遺跡群第22・27・28・34次調査、元岡石ヶ原古墳第１・２次調査および桑原金屎古墳第１次調査の成果を報告するものであります。とりわけ２基の前方後円墳の調査成果については、本地域の古代史を明らかにする上で特に重要なものであると考えられます。本書が市民の皆様の文化財保護のより一層のご理解の一助となり、また学術研究の資料として活用していただければ幸いであります。

なおこれらの調査のうち、古墳時代後期の前方後円墳である元岡石ヶ原古墳をはじめとする調査地点の多くは新キャンパス建設に伴う造成のため十分な記録保存に努めることになりましたが、主に古墳時代の集落が検出された第27次調査地点の一部と確認調査を行った古墳時代前期の前方後円墳である桑原金屎古墳については、九州大学、福岡市土地開発公社をはじめとする関係各位の文化財に対する深いご理解とご協力により、現地において現状保存することが出来ました。今後、新キャンパスにおいて研究・教育に活用されることが望まれます。

最後に、調査を委託された福岡市土地開発公社、調査にご協力いただいた九州大学および都市整備局大学移転対策部、並びに元岡地区、桑原地区の地元の方々をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成18年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　植木 とみ子

例　言

1．本書は、九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が1996～2003度に行った桑原金屎古墳第１次調査、元岡石ヶ原古墳第１・２次調査（第２次調査は元岡・桑原遺跡群第35次調査と同一）、元岡・桑原遺跡群第22・27・28・34次調査の報告書である。

2．本書で報告する調査の主要な細目は以下の通りである。詳細は各章（各報告）の例言および本文、巻末抄録を参照されたい。

章	調査番号	遺跡名・調査次数	担　当　者	所　在　地	調 査 期 間
Ⅱ	9657	桑原金屎古墳第１次調査	山崎純男、池崎譲二、久住猛雄	大字桑原字金屎地内	1995.08.20～1996.11.29
Ⅲ	9658	元岡石ヶ原古墳第１次調査	池崎譲二、松浦一之介	大字元岡字石ヶ原地内	1996.08.27～1996.11.29
	0340	元岡石ヶ原古墳第２次調査	濱石哲也、菅波正人、池田祐司	（同上）	2003.05.20～2005.01.12
Ⅳ	0033	元岡・桑原遺跡群第22次調査	松村道博	大字桑原字戸山地内	2000.04.13～2000.10.20
Ⅴ	0153	元岡・桑原遺跡群第27次調査	二宮忠司	大字桑原字戸山地内	2001.12.01～2002.08.29
Ⅵ	0154	元岡・桑原遺跡群第28次調査	吉留秀敏、屋山　洋	大字元岡字池ノ浦地内	2002.02.01～2002.06.30
Ⅶ	0310	元岡・桑原遺跡群第34次調査	屋山　洋	大字元岡字石ヶ原地内	2003.04.01～2003.08.12

3．本書に掲載した遺構実測図の作成は各調査の担当者の他、発掘調査員・発掘技能員などが行った。また、本書に掲載した遺物実測図の作成は各調査の担当者の他、整理調査員・整理技能員などが行った。また、本書に掲載した挿図の製図（トレース）は各調査の担当者の他、整理調査員・整理技能員・整理作業員などが行った。これらについての詳細は各報告の例言を参照されたい。

4．本書に掲載した遺構写真および遺物写真の撮影は、空中写真撮影を除き各調査の担当者のほか本市教育委員会文化財担当専門職員が行った。空中写真の撮影は、桑原金屎古墳第１次調査は株式会社写測エンジニアリング、元岡石ヶ原古墳第１・２次調査は朝日航洋株式会社、元岡・桑原遺跡群第22次および第27次調査は有限会社空中写真企画にそれぞれ業務委託して行ったものである。

5．本書に掲載する遺構図などの方位については、国土座標を用いたものと磁北を用いるものがある。また国土座標系については、現在標準になっている世界測地系が普及する前の調査が多いため、日本測地系を使用しているものが多いので注意されたい。これらについては詳しくは各報告の例言を参照されたい。また国土座標やレベルについては、九州大学移転予定地内に設置された測量基準杭から移動して求めたものである。

6．本書の全体的な編集は各調査（各章）の編集担当者と協議の上、久住猛雄が行った。各報告（各章）の執筆・編集は、各調査の諸担当者と協議の上、以下の者が行った。

「Ⅰ　はじめに」は、１～３を菅波正人が、４を久住猛雄が執筆した。「Ⅱ　桑原金屎古墳の調査」は久住が編集を行い、自然科学分析について片多雅樹・比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）が執筆した他は久住が執筆した。「Ⅲ　元岡石ヶ原古墳の調査」は菅波が編集・執筆を行った。「Ⅳ　第22次調査の記録」は松村道博が編集・執筆を行った。「Ⅴ　第27次調査の記録」は二宮忠司が主に編集・執筆を行い、大庭友子（整理調査員）が編集・執筆を補助した。また金属器については比佐が執筆・報告した。「Ⅵ　第28次調査の記録」は屋山洋が編集を行い、執筆は屋山と吉留秀敏が行った。「Ⅶ　第34次調査の記録」は屋山が編集を行い、今回報告する元岡古墳群Ｊ群１号墳の石室部分についての過去の緊急調査（桑原古墳群第１次調査）の報告は力武卓治が、また「金製細型耳環」についての考察は比佐が執筆を行ったが、他は屋山が執筆した。

7．本書巻末には調査概要を記した報告書抄録を掲載している。なお抄録における「書名」は、仕様書との統一から『元岡・桑原遺跡群６』とし、これまで、『元岡・桑原遺跡群５』までは「書名」としていた『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』を「副書名」とした。

8．本調査に関わる記録類（図面・写真等）と出土遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。教育普及や学術研究のために資料が広く活用されることを望む。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに（菅波・久住）…… 1
　1．調査に至る経緯 …… 3
　2．調査の組織 …… 3
　3．これまでの調査経過 …… 4
　Tab.1　九州大学統合移転地内（元岡・桑原遺跡群）発掘調査一覧 …… 5
　4．遺跡の位置と周辺の歴史的環境 …… 8

Ⅱ　桑原金屎古墳の調査（久住） …… 15
　例言 …… 17
　1．調査の概要 …… 19
　2．調査の記録 …… 23
　　1）古墳の立地 …… 23
　　2）墳丘の調査 …… 23
　　3）主体部の調査 …… 52
　　4）出土遺物 …… 56
　　5）出土遺物の自然科学的分析（片多・比佐） …… 60
　3．小結 …… 63
　　1）墳丘と古墳の時期について …… 63
　　2）主体部の構造 …… 63
　　3）銅鏡について …… 64

Ⅲ　元岡石ヶ原古墳の調査（菅波） …… 87
　例言 …… 89
　1．調査の概要 …… 91
　2．調査の記録 …… 94
　　1）立地 …… 94
　　2）墳丘 …… 94
　　3）横穴式石室 …… 101
　　4）出土遺物 …… 101
　　遺物観察表１ …… 107
　　遺物観察表２ …… 108
　3．小結 …… 117
　　1）墳丘について …… 117
　　2）石室について …… 118
　　3）古墳の位置づけについて …… 119
　　4）石室の移築について …… 120

Ⅳ　第22次調査の記録（松村） …… 145
　例言 …… 147
　1．はじめに …… 149
　2．遺跡の位置と地形 …… 150
　3．遺構と遺物 …… 150
　　1）掘立柱建物 …… 151
　　2）溝状遺構 …… 157
　　3）製鉄関連遺構 …… 158
　　4）井戸状遺構 …… 161
　　5）焼土坑 …… 162
　　6）不定形土坑 …… 162
　　7）包含層・遺構検出面・ピットの出土遺物 …… 167
　　8）上層の遺構 …… 168
　4．小結 …… 170

Ⅴ　第27次調査の記録（二宮） …… 183
　例言 …… 185
　1．調査概要 …… 189
　2．検出遺構 …… 191
　　1）住居址 …… 191
　　2）掘立柱建物 …… 201
　　3）土壙 …… 205
　　4）溝状遺構 …… 205
　3．出土遺物 …… 209
　　1）住居址内土器 …… 209
　　2）土壙溝状遺構内土器 …… 224
　　3）包含層の土器 …… 228
　　4）出土石器 …… 231
　　5）金属器 …… 236

Ⅵ　第28次調査の記録（屋山・吉留） …… 261
　例言 …… 263
　1．はじめに …… 266
　2．28次周辺（瓜尾西地区）試掘調査の報告 …… 267
　　・28次調査SX001出土石器について …… 269
　　1）調査の経過 …… 267
　　2）調査の結果 …… 267
　　3）縄文包含層の調査（Fig.3・4） …… 268
　3．調査の記録 …… 271
　　1）Ａ区の調査 …… 271
　　2）Ｂ区の調査 …… 271
　　Tab.1　黒曜石計測表 …… 277
　　3）Ｃ区の調査 …… 279
　　4）小結 …… 279
　4．瓜尾西試掘調査出土動物遺存体について …… 279
　　Tab.2　出土動物表 …… 280

Ⅶ　第34次調査の記録（屋山・力武） …… 285
　例言 …… 287
　1．はじめに …… 289
　2．昭和61年の調査に至る経過 …… 291
　3．古墳群の位置と環境 …… 292
　4．１号墳の調査 …… 293
　　・福岡市内における「金製細型耳環」の出土事例と耳環研究に関する問題提起（比佐） …… 302
　　Tab.1　福岡市内出土金製細型耳環一覧 …… 304
　5．平成15年度の調査 …… 306
　　1）１号墳 …… 306
　　2）２号墳 …… 308
　　3）３号墳 …… 310
　　Tab.2　ガラス小玉計測表 …… 314
　　4）小結 …… 314

挿 図 目 次

（Ⅰ　はじめに）

Fig. 1　元岡・桑原遺跡群調査地点位置図（1/15,000）…… 6
Fig. 2　元岡・桑原遺跡群位置図（1/25,000）…… 7
Fig. 3　元岡・桑原遺跡群と周辺の主要遺跡（1/100,000）…… 9

（Ⅱ　桑原金屎古墳の調査）

Fig. 1　桑原金屎古墳の位置（1/3,000）…… 18
Fig. 2　桑原金屎古墳地形測量図（1/300）…… 20
Fig. 3　桑原金屎１・２号墳調査区配置図・墳丘遺存図（1/200）…… 22
Fig. 4　桑原金屎３号墳（？）調査区配置図・墳丘遺存図（1/200）…… 23
Fig. 5　１号墳後円部調査区墳丘遺存・地山整形図（1/100）…… 25
Fig. 6　A1トレンチ南側土層図（1/60）…… 25
Fig. 7　Ｅトレンチ南側土層図（1/60）…… 26
Fig. 8　Ｅトレンチ西側土層図（１）（1/60）…… 26
Fig. 9　Ｅトレンチ西側土層図（２）（1/80）…… 26
Fig.10　Ｄトレンチ東側土層図（１）（1/60）…… 27
Fig.11　Ｄトレンチ東側土層図（２）（1/80）…… 27
Fig.12　Ｄトレンチ西側土層図（1/60）…… 28
Fig.13　Ｂトレンチ西側土層図（1/60）…… 29
Fig.14　Ｂトレンチ東側土層図（1/60）…… 29
Fig.15　１号墳前方部調査区墳丘遺存・地山整形図（1/100）…… 30
Fig.16　Ｆトレンチ東側土層図（1/60）…… 31
Fig.17　Ｆトレンチ北側土層図（1/60）…… 31
Fig.18　Ｇトレンチ東側土層図（１）（1/60）…… 32
Fig.19　Ｇトレンチ東側土層図（２）（1/80）…… 32
Fig.20　Ｇトレンチ南側土層図（1/60）…… 32
Fig.21　Ｆトレンチ西側土層図（1/60）…… 33
Fig.22　Ｈトレンチ東側土層図（１）（1/60）…… 33
Fig.23　Ｈトレンチ東側土層図（２）（1/80）…… 33
Fig.24　Ｇトレンチ西側土層図（1/60）…… 34
Fig.25　Ｉトレンチ東側土層図（１）（1/60）…… 35
Fig.26　Ｉトレンチ東側土層図（２）（1/80）…… 35
Fig.27　Ｊトレンチ東側土層図（1/60）…… 35
Fig.28　Ｊトレンチ北側土層図（1/60）…… 36
Fig.29　Ｋトレンチ南側土層図（1/60）…… 36
Fig.30　Ｋトレンチ東側土層図（1/60）…… 36
Fig.31　C1トレンチ南側土層図（1/60）…… 37
Fig.32　C1・C2トレンチ南側土層図（1/60）…… 37
Fig.33　C1トレンチ北側土層図（1/60）…… 37
Fig.34　C1・C2トレンチ北側土層図（1/60）…… 37
Fig.35　２号墳調査区墳丘遺存・地山整形図（1/100）…… 38
Fig.36　C2トレンチ北側土層図（１）（1/60）…… 39
Fig.37　C2トレンチ北側土層図（２）（1/60）…… 39
Fig.38　C2トレンチ南側土層図（１）（1/60）…… 39
Fig.39　C2トレンチ南側土層図（２）（1/60）…… 39
Fig.40　Ｋトレンチ西側土層図（1/60）…… 40
Fig.41　Ｊトレンチ西側土層図（1/60）…… 40
Fig.42　Ｌトレンチ東側土層図および北側延長断面図（1/80）…… 41
Fig.43　Ｌトレンチ東側土層図（1/60）…… 41
Fig.44　Ｌトレンチ北側土層図（1/60）…… 41
Fig.45　Ｍトレンチ東側土層図（1/80）…… 42
Fig.46　A2・A3トレンチ南側土層図（1/80）…… 42
Fig.47　Ｎトレンチ西側土層図（1/80）…… 43
Fig.48　Ｏトレンチ西側土層図（1/80）…… 43
Fig.49　Ｔトレンチ西側土層図（1/80）…… 43
Fig.50　Ｕトレンチ西側土層図（1/80）…… 44
Fig.51　３号墳（？）調査区墳丘遺存・地山整形図（1/100）…… 44
Fig.52　Ｐ・Ｑトレンチ（３号墳横断）西側土層図（1/60）…… 44
Fig.53　A3・A4トレンチ南側土層図（1/80）…… 45
Fig.54　Ｐトレンチ西側土層図（1/80）…… 45
Fig.55　Ｑトレンチ西側土層図（1/80）…… 45
Fig.56　Ｒトレンチ北側土層図（1/80）…… 46
Fig.57　Ｒトレンチ西側土層図（1/80）…… 46
Fig.58　Ｓトレンチ南側土層図（左）・Ｓトレンチ西側土層図（右）（1/80）…… 46
Fig.59　１号墳墳頂部主体部平面図（1/40）…… 49
Fig.60　墳頂部主体部A-B横断土層図（1/40）…… 50
Fig.61　墳頂部主体部B5-B3（棺主軸）縦断土層図（1/40）…… 51
Fig.62　墳頂部主体部C-D（墳丘仮主軸）縦断土層図（1/40）…… 51
Fig.63　墳頂部主体部墓壙１・２区東側横断土層図（1/40）…… 52
Fig.64　墳頂部主体部墓壙３・４区西側横断土層図（1/40）…… 52
Fig.65　墳頂部主体部墓壙５・６区西側横断土層図（1/40）…… 52
Fig.66　主体部粘土槨落ち込み確認状況図（1/40）…… 53
Fig.67　粘土槨および木棺平面図・断面図・出土状況図（1/20）…… 54
Fig.68　墳頂部SD01（G1-G2）土層図（1/40）…… 55
Fig.69　墳頂部６区北側（I1-I2）土層図（1/40）… 55
Fig.70　主体部出土菱雲紋鏡実測図（1/1）…… 56
Fig.71　主体部出土芝草紋鏡実測図（1/1）…… 57
Fig.72　古墳出土土器実測図（1/3）…… 59
Fig.73　調査区出土石器実測図（1/1）…… 59
Fig.74　墓壙出土ガラス小玉実測図（1/1）…… 61
Fig.75　芝草紋鏡付着赤色顔料の電子顕微鏡写真（約2000倍）（Ph. 3）と同視野における蛍光Ｘ線分析スペクトル…… 62
Fig.76　木棺内より採取された水銀朱の蛍光Ｘ線分析スペクトル…… 62
Fig.77　ガラス小玉の蛍光Ｘ線分析スペクトル…… 62
Fig.78　１・２号墳墳丘推定復元平面図（1/300）… 63
Fig.79　１号墳後円部横断面推定復元図（1/200）… 63

Fig.80　１・２号墳主軸縦断面推定復元図（1/200）…… 63
Fig.81　主体部構築過程復元模式図（1/100）…… 64
Fig.82　芝草紋鏡類例図（野間３号墳出土鏡）（1/2）…… 64

（Ⅲ　元岡石ヶ原古墳の調査）
Fig. 1　石ヶ原古墳位置図（1/4000）…… 92
Fig. 2　石ヶ原古墳位置図（1/1000）…… 93
Fig. 3　石ヶ原古墳現況測量図（1/300）…… 95
Fig. 4　石ヶ原古墳墳丘遺存状況測量図（1/300）… 96
Fig. 5　石ヶ原古墳墳丘土層実測図１（1/100）…… 97
Fig. 6　石ヶ原古墳墳丘土層実測図２（1/100）…… 98
Fig. 7　石ヶ原古墳墳丘土層実測図３（1/200）…… 99
Fig. 8　石ヶ原古墳地山整形測量図（1/300）…… 100
Fig. 9　石ヶ原古墳石室実測図（1/40）…… 102
Fig.10　石ヶ原古墳羨道部及び閉塞石実測図（1/40）…… 103
Fig.11　石ヶ原古墳墓道実測図（1/60）…… 104
Fig.12　石ヶ原古墳石室掘り方実測図（1/40）… 105
Fig.13　出土須恵器実測図１（1/3）…… 109
Fig.14　出土須恵器実測図２（1/3）…… 110
Fig.15　出土須恵器実測図３（1/3）…… 111
Fig.16　出土須恵器実測図４（1/4）…… 112
Fig.17　出土須恵器実測図５（1/4）…… 113
Fig.18　出土須恵器実測図６（1/3, 1/4）…… 114
Fig.19　出土須恵器実測図７（1/3, 1/4）…… 115
Fig.20　出土土師器実測図及び鉄製品実測図（1/3, 1/2）…… 116
Fig.21　石ヶ原古墳墳丘復元図（1/600）…… 117
Fig.22　石ヶ原古墳石室復元図（1/40）…… 118
Fig.23　元岡村古墳出土須恵器 …… 119

（Ⅳ　第22次調査の記録）
付図　第22次調査遺構全体実測図（1/300）
Fig. 1　第22次調査地点周辺地形測量図（1/2,000）…… 149
Fig. 2　土層実測図（1/80）…… 150
Fig. 3　SB01・SB02実測図（1/60）…… 151
Fig. 4　SB03・SB04実測図（1/60）…… 152
Fig. 5　SB05実測図（1/60）…… 153
Fig. 6　SB06・SB07実測図（1/60）…… 154
Fig. 7　SB08実測図（1/60）…… 155
Fig. 8　掘立柱建物出土土器実測図（1/3）…… 155
Fig. 9　SD06・SD15土層実測図（1/40）…… 156
Fig.10　溝状遺構出土遺物実測図（1/3）…… 156
Fig.11　１号製鉄遺構実測図（1/40）…… 158
Fig.12　１号製鉄遺構出土遺物実測図（1/3）…… 159
Fig.13　２号製鉄遺構・SP100実測図（1/40, 1/20）…… 159
Fig.14　SP100出土羽口実測図（1/3）…… 160
Fig.15　SE01・SE02実測図（1/30）…… 160
Fig.16　SE02出土遺物実測図（1/3）…… 161
Fig.17　SF01・SF02実測図（1/30）…… 161
Fig.18　SX05・SX06実測図（1/100）…… 163
Fig.19　SX05出土土器実測図（1/3, 1/6）…… 164
Fig.20　SX06出土土器実測図（1/3, 1/6）…… 165
Fig.21　包含層・遺構検出面出土土器実測図（1/3, 1/4）…… 166
Fig.22　ピット出土土器実測図（1/3）…… 167
Fig.23　上面遺構実測図（1/160）…… 168
Fig.24　上面遺構出土遺物実測図（1/3）…… 169

（Ⅴ　第27次調査の記録）
Fig. 1　第27次調査区と周辺の遺跡（1/4,000）… 186
Fig. 2　第27次と他の調査区の位置図（1/2000）… 187
Fig. 3　第27次調査位置図（1/1000）…… 188
Fig. 4　第27次調査遺構配置図（1/400）…… 190
Fig. 5　遺構配置図－１（1/200）…… 192
Fig. 6　遺構配置図－２（1/200）…… 193
Fig. 7　住居址－１（SC-01～07）実測図（1/80）…… 194
Fig. 8　住居址－２（SC-08･10･11･13）実測図（1/80）…… 195
Fig. 9　住居址－３（SC-09･12･14･15）実測図（1/80）…… 196
Fig.10　住居址－４（SC-16）実測図（1/40）…… 198
Fig.11　住居址－５（SC-18･19）実測図（1/80）… 199
Fig.12　住居址－６（SC-20～25）実測図（1/80）…… 200
Fig.13　掘立柱建物－１（SB-01～08）実測図（1/80）…… 203
Fig.14　掘立柱建物－２（SB-09～18）実測図（1/80）…… 204
Fig.15　土壙状遺構－１（SO-1, SS-7･8, SK-01～5･7･22）実測図（1/40, 1/60）…… 205
Fig.16　土壙状遺構－２（SK-08～16）実測図（1/60）…… 207
Fig.17　土壙状・溝状遺構（SK-18～21, SD-01･02･04･09･10･13･18･25）実測図（1/60, 1/100）… 208
Fig.18　住居址内出土土器－１（SC-01･02･04）実測図（1/3, 1/4）…… 210
Fig.19　住居址内出土土器－２（SC-05～07）実測図（1/3, 1/4）…… 211
Fig.20　住居址内出土土器－３（SC-08･10）実測図（1/3）…… 213
Fig.21　住居址内出土土器－４（SC-11～14）実測図（1/3）…… 215
Fig.22　住居址内出土土器－５（SC-15･16）実測図（1/3）…… 217
Fig.23　住居址内出土土器－６（SC-16）実測図（1/3, 1/4）…… 218
Fig.24　住居址内出土土器－７（SC-16）実測図（1/4）…… 219
Fig.25　住居址内出土土器－８（SC-16～20）実測図（1/3）…… 221
Fig.26　住居址内出土土器－９（SC-21～23･25）実測図（1/3）…… 223

Fig.27　土壙状遺構他出土土器－１（SK-01･05～07）実測図（1/3,1/4）…… 225
Fig.28　土壙状遺構他出土土器－２（SK-10･12･17, SD, Pit出土）実測図（1/3, 1/4）…… 227
Fig.29　包含層出土土器実測図（1/3, 1/4）…… 229
Fig.30　出土石器－１実測図（3/4）…… 230
Fig.31　出土石器－２実測図（3/4, 1/3）…… 232
Fig.32　出土石器－３実測図（1/2, 1/3）…… 233
Fig.33　出土石器－４実測図（1/3, 1/4）…… 235
Fig.34　金属器実測図（1/1, 1/2）…… 236

（Ⅵ　第28次調査の記録）
Fig. 1　第28次調査地点位置図（1/8,000）…… 265
Fig. 2　調査区トレンチ配置図（1/2,000）…… 266
Fig. 3　試掘トレンチＴ10～13（1/200）…… 267
Fig. 4　試掘トレンチ出土土器（1/4）…… 269
Fig. 5　SX001出土石器（2/3, 1/3）…… 270
Fig. 6　調査区配置図（1/1,000）…… 271
Fig. 7　Ａ区測量図（1/200）…… 272
Fig. 8　Ｂ区全体図（1/400）…… 273
Fig. 9　Ｂ区溝土層図（1/60, SD005は1/40）…… 274
Fig.10　Ｂ区溝出土遺物１（1/3, 一部2/3, 1/1）… 275
Fig.11　Ｂ区溝出土遺物２（1/3）…… 275
Fig.12　Ｂ区遺構実測図（1/30, SX008は1/20）… 278
Fig.13　Ｃ区全体図（1/300）…… 279

（Ⅶ　第34次調査の記録）
Fig. 1　34次調査地点位置図（1/4,000）…… 289
Fig. 2　調査区周辺図（1/2,000）…… 290
Fig. 3　調査区地形測量図（1/400）…… 折り込み
Fig. 4　墳丘遺存図（1/400）…… 291
Fig. 5　１号墳現況測量図（1/100）…… 292
Fig. 6　１号墳測量図（1/100）…… 294
Fig. 7　１号墳石室実測図（1/100）…… 296
Fig. 8　１号墳石室掘り方出土遺物実測図（1/3）…… 297
Fig. 9　１号墳墳丘出土遺物実測図１（1/3）…… 299
Fig.10　１号墳墳丘出土遺物実測図２（1/3）…… 300
Fig.11　想定される耳環の構造と種類 …… 304
Fig.12　耳環の計測部位模式図 …… 304
Fig.13　金製細型耳環実測図（1/1）…… 304
Fig.14　２号墳墳丘遺存図･地山整形図（1/200）… 305
Fig.15　２号墳墳丘土層図（1/80）…… 306
Fig.16　２号墳石室実測図（1/60）…… 307
Fig.17　２号墳羨道・墓道土層図（1/40）…… 307
Fig.18　墳丘上遺物出土状況（1/20）…… 308
Fig.19　２号墳出土遺物実測図（1/3）…… 309
Fig.20　３号墳墳丘遺存図（1/200）…… 310
Fig.21　石室上面敷石実測図（1/40）…… 311
Fig.22　石室下面敷石実測図（1/40）…… 312
Fig.23　側壁掘り込み実測図（1/60）…… 312
Fig.24　３号墳出土遺物実測図（1/3, 1/1）…… 313
Fig.25　Ｔ14出土遺物（1/3）…… 314

本文中写真（Ph.－）目次

（Ⅱ　桑原金屎古墳の調査）
Ph. 1　菱雲紋鏡Ｘ線写真（実大）…… 56
Ph. 2　芝草紋鏡Ｘ線写真（実大）…… 57
Ph. 3　菱雲紋鏡写真（ほぼ実大）…… 58
Ph. 4　芝草紋鏡写真（ほぼ実大）…… 58
Ph. 5　芝草紋鏡付着赤色顔料の電子顕微鏡写真（約2000倍）…… 62
Ph. 6　芝草紋鏡の類例（野間３号墳出土鏡）…… 64

（Ⅲ　元岡石ヶ原古墳の調査）
Ph. 1　石室解体風景 …… 120

（Ⅳ　第22次調査の記録）
Ph. 1　SD03全景…… 168
Ph. 2　木樋全景 …… 168

（Ⅵ　第28次調査の記録）
Ph. 1　Ｂ区出土黒曜石１ …… 276
Ph. 2　Ｂ区出土黒曜石２ …… 277
Ph. 3　試掘トレンチ出土動物遺存体 …… 280

（Ⅶ　第34次調査の記録）
Ph. 1　調査前の崖面（昭和61年）（南より）…… 293
Ph. 2　作業風景（北東より）…… 294
Ph. 3　石室掘り方（北西より）…… 295
Ph. 4　３トレンチの土層（南西より）…… 295
Ph. 5　３トレンチ（南より）…… 295
Ph. 6　羨道より玄門（西より）…… 296
Ph. 7　玄室より羨道（東より）…… 296
Ph. 8　掘り方出土の遺物 …… 298
Ph. 9　墳丘出土の遺物 …… 301
Ph.10　金製細型耳環写真 …… 304
Ph.11　１号墳周溝（北より）…… 314

巻頭図版（カラー）目次

（桑原金屎古墳）
巻頭図版１
１．桑原金屎古墳調査状況空撮（西から）
２．桑原金屎古墳調査状況全景空撮（北から）
巻頭図版２
１．桑原金屎古墳調査状況（前方後円墳部分）空撮（北から）
２．主体部木棺遺物出土状況（東から）
巻頭図版３
１．木棺頭部付近遺物出土状況（左：菱雲紋鏡、右：芝草紋鏡）（東から）
２．墳頂部周囲および主体部墓壙調査状況空撮（東から）
巻頭図版４
１．主体部墓壙調査状況（東から）
２．木棺出土芝草紋鏡取り上げ後木棺木質痕跡（南から）
３．墓壙５区埋土中ガラス小玉出土状況（南から）
４．墳頂部・墓壙６区南側土層東半（北から）
５．墳頂部・墓壙６区南側土層西半（北から）
巻頭図版５
１．墳頂部・墓壙５区北側土層西半（南から）
２．墳頂部・墓壙５区北側土層東半（南から）
３．墳頂部・墓壙５区北側土層ガラス小玉出土位置（南から）
４．墓壙１区北側土層（主軸南側）（南から）
５．墓壙２区南側土層（墓壙下半）（主軸北側）（北から）
６．墳頂部・墓壙２区南側土層（墓壙上半）（北から）
７．墳頂部・墓壙２区西側土層（墓壙横断北側）（東から）
８．墳頂部・墓壙６区西側土層（墓壙横断北側）（東から）
巻頭図版６　主体部出土鏡　鏡背面写真（原寸）
１．菱雲紋鏡
２．芝草紋鏡
巻頭図版７　主体部出土鏡　鏡面写真（原寸）
１．菱雲紋鏡
２．芝草紋鏡
巻頭図版８　鏡付着織物片、赤色顔料、ガラス玉の顕微鏡写真
１．菱雲紋鏡付着織物顕微鏡写真（約20倍）
２．芝草紋鏡付着織物顕微鏡写真（約20倍）
３．芝草紋鏡付着赤色顔料及び木質痕の顕微鏡写真（約6.3倍）
４．木棺内より採取された赤色顔料の顕微鏡写真（約6.3倍）
５．ガラス小玉顕微鏡写真（約20倍）

（元岡石ヶ原古墳）
巻頭図版９
１．石ヶ原古墳全景（北から）
２．石ヶ原古墳全景（俯瞰）（西から）
巻頭図版10
１．墳丘半掘（北から）
２．土層１（北から）
３．土層２（北から）
巻頭図版11　石ヶ原古墳出土遺物

（第27次調査）
巻頭図版12
１．元岡・桑原遺跡群航空写真（第27次から第20次調査区を望む）
２．第27次全景（左上第24次調査区）
巻頭図版13
１．第27次調査区全景（東から）
２．SC-16と周辺の住居址群（北から）
巻頭図版14
１．SC-16全景（東から）
２．SC-16南側検出状況（南から）
巻頭図版15
１．SC-16南側（東から）（焼落ちた粘土、材、土器等検出状況）
２．SC-16他完掘状況（北から）
巻頭図版16
１．第27次調査区完掘状況（北から）
２．出土鉄器・金環・玉

図 版 目 次

（Ⅱ　桑原金屎古墳の調査）
PL. 1 …… 65
１．桑原金屎古墳調査状況空撮（南から）
２．桑原金屎古墳調査状況空撮（西から）
PL. 2 …… 66
１．主体部木棺西半遺物出土状況（東から）
２．木棺遺物出土状況（東から）
３．主体部木棺出土状況清掃作業状況（西から）
４．木棺内土層状況（西から）
PL. 3 …… 67
１．粘土槨木棺内東半 棺床・断面状況（西から）
２．墳頂部周囲および主体部墓壙調査状況空撮（東から）
PL. 4 …… 68
１．棺内菱雲紋鏡出土状況（北から）
２．棺内芝草紋鏡出土状況（南から）
３．粘土槨・木棺全景（西から）
４．主体部墓壙調査状況（北から）
PL. 5 …… 69
１．主体部墓壙調査状況（南から）
２．主体部墓壙および墳頂部周囲調査状況（西から）
PL. 6 …… 70
１．墳頂部および後円部東方斜面調査状況(西から)
２．粘土槨木棺内西半 棺床・断面状況（東から）
３．墳頂部墓壙５区西側土層南半（墓壙上半およびSD01土層）（東から）
４．墳頂部SD01（第２主体？）（東から）
５．墳頂部SD01土層（３区東側土層）（西から）
PL. 7 …… 71
１．墓壙１区北側土層（主軸南側）（南から）
２．墓壙１区東側土層（墓壙横断南側）（西から）
３．墓壙２区南側土層（主軸北側）（北から）
４．墓壙２区南側土層（主軸北側・墓壙上半）（北から）
５．墓壙２区東側土層（墓壙上半）（西から）
６．墓壙２区東側土層（墓壙横断北側）（西から）
７．墓壙３区西側土層（墓壙横断南側）（東から）
８．墓壙４区西側土層（墓壙横断北側）（東から）
PL. 8 …… 72
１．墓壙４区東側土層（墓壙横断北側）（西から）
２．墓壙５区西側土層（墓壙横断南側）（東から）
３．墓壙５区北側土層（主軸南側）・ガラス小玉出土位置（南から）

4．墳頂部・墓壙５区北側土層東半（南から）
5．墳頂部・墓壙５区北側土層（南から）
PL. 9 …… 73
1．墓壙６区西側土層（墓壙横断北側）（東から）
2．墳頂部・墓壙６区南側土層（主軸北側）（北から）
3．墳頂部・墓壙６区南側土層（墓壙東側作業道部分）（北から）
PL.10 …… 74
1．Ａ１トレンチ西・南側土層（墳頂部６区南側土層）（北から）
2．墳頂部５区地山整形面（東から）
3．墳頂部６区北側土層（南から）
4．墳頂部６区墓壙外周盛土基部（南から）
5．墳頂部６区墓壙外周盛土基部（北から）
6．墳頂部６区墓壙外周盛土基部（西から）
7．Ａ１トレンチ中（墳端付近）・南側土層（北から）
8．Ａ１トレンチ西・南側土層（北から）
PL.11 …… 75
1．Ａ１トレンチ南側土層・後円部北東側（北東から）
2．Ａ１トレンチ北側土層・後円部南東側（南から）
3．Ａ１トレンチ東・南側土層（北から）
4．Ａ２トレンチ北側土層（南から）
PL.12 …… 76
1．Ａ３トレンチ南側土層（北から）
2．Ａ４トレンチ南側土層※後方はＲ区（北東から）
3．Ｂトレンチ北（墳頂部南）・東側土層（西から）
4．Ｂトレンチ中（墳端前後）・東側土層（西から）
5．Ｂトレンチ中（墳端前後）・西側土層（南東から）
6．Ｂトレンチ中（墳端前後）・東側土層（南東から）
7．Ｃ１トレンチ全景・南側土層（北東から）
8．Ｃ１トレンチ全景・南側土層（北西から）
PL.13 …… 77
1．Ｃ１トレンチ西（前方部）・北側土層（南から）
2．Ｃ１トレンチ東（墳頂部側）・北側土層（南から）
3．Ｃ２トレンチ全景（東から）
4．Ｃ２トレンチ中～西調査状況（東から）
5．Ｃ２トレンチ東南側土層（北から）
6．Ｃ２トレンチ東～中（１・２号墳間溝）・南側土層（北から）
7．Ｃ２トレンチ西（２号墳西側墳端）・南側土層（北から）
PL.14 …… 78
1．Ｃ２トレンチ東・北側土層（南から）
2．Ｃ２トレンチ東～中（１・２号墳間溝）・北側土層（南から）
3．Ｃ２トレンチ西（２号墳西側墳端）・北側土層（南から）
4．Ｃ２トレンチ西・北側土層（２号墳西側テラス）
5．Ｄトレンチ上・西側土層（東から）
6．Ｄトレンチ上～中（テラス？）・西側土層（東から）
7．Ｄトレンチ中（墳端前後）・西側土層（東から）
8．Ｄトレンチ下・西側土層（東から）
PL.15 …… 79
1．Ｄトレンチ中（墳端前後）・東側土層（西から）
2．Ｄトレンチ上～中・東側土層（西から）
3．Ｅ区西側土層・後円部北東地山整形状況（東から）
4．Ｅ区南側土層・後円部北東地山整形面状況（北から）
5．Ｆ区東側土層上半・墳端検出状況（南側くびれ部）（西から）
6．Ｆ区北側土層（南から）
PL.16 …… 80
1．Ｆ区東側土層・南側くびれ部検出状況（西から）
2．Ｆ区西側土層（東から）
3．Ｆ区西側土層上半（東から）
4．Ｇ区西側土層・前方部北側縁検出状況（東から）
5．Ｇ区西側土層南半（東から）
PL.17 …… 81
1．Ｇ区東側土層・北側くびれ部検出状況（西から）
2．Ｇ区東側土層南半・北側くびれ部検出状況近景（西から）
3．Ｇ区北側土層・北側くびれ部検出状況（北から）
PL.18 …… 82
1．Ｋ区調査状況（前方部北西側）・東側土層（西から）
2．Ｋ区調査状況・西側土層（２号墳北東側）（東から）
3．Ｋ区南側土層（１・２号墳間溝）（北から）
4．Ｈトレンチ東側土層（北西から）
5．Ｉトレンチ調査状況（南から）
6．Ｉトレンチ中～南（墳端付近）・東側土層（西から）
PL.19 …… 83
1．Ｊ区調査状況・東側土層（西から）
2．Ｊ区東側土層北半（西から）
3．Ｊ区西側土層（２号墳南東側※掘りすぎている）（東から）
4．Ｊ区北側土層・前方部南西側墳端検出状況（南から）
5．Ｌ区北側土層・２号墳西側墳端確認状況（南から）
6．Ｌ区北側土層中央（２号墳西側墳端）（南から）
7．Ｌ区調査状況・東側土層（２号墳南西側）（西から）
8．Ｍトレンチ調査状況（南から）
PL.20 …… 84
1．Ｎトレンチ調査状況・西側土層（南東から）
2．Ｏトレンチ調査状況・西側土層（北東から）
3．Ｔトレンチ調査状況（南西から）
4．Ｕトレンチ調査状況（北西から）
5．ＰトレンチＲ区西側土層（南東から）
6．Ｑトレンチ調査状況・西側土層（北東から）
7．Ｒ区調査状況・西側土層（東から）
8．Ｓ区調査状況・西側土層（東から）
PL.21 …… 85
1．菱雲紋鏡　鈕孔１側俯瞰写真
2．菱雲紋鏡　鈕孔２側俯瞰写真
3．芝草紋鏡　鈕孔１側俯瞰写真
4．芝草紋鏡　鈕孔２側俯瞰写真
5．出土土器片Ａ（粘土槨内）写真
6．出土土器片Ｂ（周囲採集）写真
PL.22 …… 86
1．菱雲紋鏡付着織物繊維断面の電子顕微鏡写真
2．芝草紋鏡付着織物繊維断面の電子顕微鏡写真

（Ⅲ　元岡石ヶ原古墳の調査）
PL. 1 …… 121
1．石ヶ原古墳遠景（北から）
2．石ヶ原古墳遠景（今津湾を望む）（西から）
PL. 2 …… 122
1．石ヶ原古墳遠景（柑子岳を望む）（南から）

2．除草後墳丘現況（北から）
PL. 3 …… 123
1．除草後後円部現況（北から）
2．除草後前方部現況（北から）
3．除草後墳丘現況（南から）
4．除草後墳丘現況（西から）
5．表土除去後現況（南から）
PL. 4 …… 124
1．表土除去後前方部（東から）
2．表土除去後後円部（西から）
3．表土除去後全景（西から）
4．表土除去後前方部端（西から）
5．表土除去後全景（北から）
PL. 5 …… 125
1．墳丘遺存状況（西から）
2．墳丘遺存状況（北から）
PL. 6 …… 126
1．後円部墳丘遺存状況（俯瞰）（西から）
2．墳丘遺存状況（俯瞰）（北から）
PL. 7 …… 127
1．前方部Ⅴ区遺物出土状況（東から）
2．前方部Ⅹ区柱穴掘り下げ（東から）
3．後円部ⅩⅣ区テラス（南から）
4．後円部ⅩⅡ区盛土地滑り状況（南から）
5．後円部ⅩⅡ区盛土地滑り状況（北から）
PL. 8 …… 128
1．後円部ⅩⅡ区１次墳丘（東から）
2．１トレンチ土層（西から）
3．１トレンチ土層（北から）
4．１トレンチ土層（北から）
5．１トレンチ土層（北から）
6．１トレンチ土層（北から）
PL. 9 …… 129
1．後円部ⅩⅢ区１次墳丘（西から）
2．２トレンチ土層（東から）
3．２トレンチ土層（北から）
4．２トレンチ土層（北から）
5．２トレンチ土層（北から）
6．２トレンチ土層（北から）
PL.10 …… 130
1．地山整形遠景（東から）
2．地山整形（俯瞰）（南から）
PL.11 …… 131
1．後円部地山整形（俯瞰）（南から）
2．前方部地山整形面（俯瞰）（南から）
PL.12 …… 132
1．地山整形（後円部から前方部を望む）（東から）
2．地山整形全景（北から）
3．後円部地山整形（西から）
4．後円部地山整形（北から）
5．後円部地山整形（西から）
6．前方部地山整形面（東から）
PL.13 …… 133
1．後円部と前方部間の溝（北から）
2．後円部と前方部間の溝（南から）
3．後円部周溝（南から）
4．後円部周溝（南から）
5．後円部周溝（北から）
6．後円部周溝（北から）
PL.14 …… 134
1．石室検出状況（南から）
2．石室検出状況（西から）
PL.15 …… 135
1．表土除去後石室（南から）
2．石室完掘（北から）
PL.16 …… 136
1．石室右壁（西から）
2．羨道及び閉塞石検出状況（北から）
PL.17 …… 137
1．羨道閉塞石検出状況（南から）
2．羨道敷石（北から）
3．羨道敷石（東から）
4．表土除去後墓道（南から）
5．墓道半掘（北から）
6．墓道土層堆積（西から）
PL.18 …… 138
1．石室および掘り方（南から）
2．石室および掘り方（南から）
3．石室および掘り方（南西から）
4．石室および掘り方（北から）
5．石室掘り方（南から）
6．石室掘り方（北から）
PL.19　遺物写真１ …… 139
PL.20　遺物写真２ …… 140
PL.21　遺物写真３ …… 141
PL.22　遺物写真４ …… 142
PL.23　遺物写真５ …… 143
PL.24　遺物写真６ …… 144

（Ⅳ　第22次調査の記録）
PL. 1 …… 171
1．調査地点遺跡遠景（北東より）
2．Ⅰ区遺構全景
PL. 2 …… 172
1．Ⅱ区遺構全景（北東より）
2．掘立柱建物群
PL. 3 …… 173
1．SB02～SB07掘立柱建物
2．SB05～07掘立柱建物
PL. 4 …… 174
1．SB02～04掘立柱建物全景（北東より)
2．SB01掘立柱建物（北東より）
3．SB06掘立柱建物（北西より）
PL. 5 …… 175
1．SD06西半部全景（南東より）
2．Ⅱ区溝状遺構（北東より）
PL. 6 …… 176
1．１号製鉄遺構全景（北西より）
2．１号製鉄遺構鉄滓・炉壁など出土状況（北から）
PL. 7 …… 177
1．１号製鉄遺構完掘状況（南東より）
2．２号製鉄遺構完掘状況（南西より）
PL. 8 …… 178
1．SP100鉄滓出土状況
2．SE02礫検出状況（南東より）
PL. 9 …… 179
1．SE02完掘状況（南東より）
2．SF01全景（北東より）
PL.10 …… 180
1．SF02全景（北東より）
2．SX05全景（北東より）
PL.11 …… 181
1．木樋全景（北東より）
2．木樋接合部全景（南西より）
PL.12　出土遺物 …… 182

（Ⅴ・第27次調査の記録）
PL. 1 …… 239
1．第27次調査全景（北東から）（西側調査区20次調査、西山側金屎前方後円墳）

２．第27次調査全景（北西から）
PL. 2 …… 240
１．東側調査区遠景（北西から）
２．中央部調査区遠景（北西から）
PL. 3 …… 241
１．東側調査区遠景（西から）
２．西側調査区遠景（北西から）
PL. 4 …… 242
１．東側調査区近景（北西から）
２．中央部調査区近景（北西から）
PL. 5 …… 243
１．SC-10～14･16･23（東から）
２．SC-01･02近景（東から）
PL. 6 …… 244
１．SC-16と柱穴群（北から）
２．SC-16焼土と土器検出状況（南から）
PL. 7 …… 245
１．SC-16焼土と土器検出状況（東から）
２．SC-16鉄製鎌と土器出土状態（東から）
PL. 8 …… 246
１．調査区全景（北西から）
２．調査区東側全景（北西から）
３．SC-01･02完掘状況（北西から）
４．SC-02～10完掘状況（北西から）
５．SC-06～08、10～14完掘状況（北西から）
６．SC-06～14、16･20･23完掘状況（北西から）
PL. 9 …… 247
１．SC-18･19･21･22･24、SK-01～03他（北西から）
２．SC-09･15～22、SD-01～03他（北西から）
３．SC-15～17、SD-01～03、SK-12･13他（北西から）
４．SC-01、SO-01近景（東から）
５．SC-02調査状況（東から）
６．SC-24完掘状況（北西から）
PL.10 …… 248
１．SC-16焼土と土器検出状況（東から）
２．SC-16焼土と土器検出状況（南から）
３．SC-16南側焼土・土器検出状況（東から）
４．SC-16南側焼土・土器検出状況（東から）
５．SC-16南側焼土・土器近景（南から）
６．SC-16南側焼土・土器近景（西から）
PL.11 …… 249
１．SC-16北側焼土・土器近景（西から）
２．SC-16北側焼土・土器近景（東から）
３．SC-16南側焼土・土器検出状況（南から）
４．SC-16北側焼土・土器検出状況（東から）
５．SC-16鉄製鎌土・土器出土状況（東から）
６．SC-16完掘状況（西から）
PL.12 …… 250
１．西側調査区全景（北西から）
２．SS-05全景（北から）
３．SK-04～07検出状況（北西から）
４．SK-04～07全景（南から）
５．SK-01検出状況（南から）
６．SK-01内出土土器検出状況（南から）
PL.13 …… 251
１．SC-25と鉄滓検出状況（北から）
２．SC-25と鉄滓検出状況（南から）
３．SS-04検出状況（東から）
４．SS-03検出状況（北から）
５．SS-08検出状況（西から）
６．SS-04検出状況（北から）
PL.14　出土土器－１（縮尺1/4）…… 252
PL.15　出土土器－２（縮尺1/3･1/4）…… 253
PL.16　出土土器－３（縮尺1/3･1/4）…… 254
PL.17　出土土器－４（縮尺1/3･縮尺不統一）…… 255
PL.18　出土石器－１（縮尺2/1）…… 256
PL.19　出土石器－２（縮尺1/1）…… 257
PL.20　出土石器－３（縮尺2/3）…… 258
PL.21　出土石器－４（縮尺1/3･1/4）…… 259
PL.22　出土鉄滓（縮尺不統一）…… 260

（Ⅵ　第28次調査の記録）
PL. 1 …… 281
１．Ｂ区全景（東から）
２．Ｂ区全景（西から）
PL. 2 …… 282
１．Ｂ区西側（北東から）
２．Ｂ区西側（北西から）
３．SX001土層Ｂ（東から）
４．SX001土層Ｃ（東から）
５．SX001　鉄滓出土状況（北から）
６．SX001右岸 黒曜石出土状況（北西から）
PL. 3 …… 283
１．SX001　細石刃出土土層
２．細石刃出土礫層上面（東から）
３．SD005（東から）
４．SD005土層（東から）
５．SK003（南から）
６．SK006（東から）
PL. 4 …… 284
１．SX008（北から）
２．Ａ区全景（北から）
３．Ａ区トレンチ（西から）
４．Ｃ区－Ⅱ区（南西から）
５．Ｃ区－Ⅰ区（東から）
６．試掘11トレンチ貝層確認状況（南から）

（Ⅶ　第34次調査の記録）
PL. 1 …… 315
１．調査前遠景（西から）
２．調査区全景（西から）
３．１号墳調査前全景（西から）
４．１号墳北側周溝（西から）
５．２号墳調査前全景（西から）
６．２号墳地山整形面全景（西から）
PL. 2 …… 316
１．２号墳調査前（北から）
２．２号墳全景（北から）
３．２号墳全景（南から）
４．２号墳土層Ｂ（南西から）
５．２号墳土層Ａ（西から）
６．２号墳墳丘遺物出土状況（西から）
PL. 3 …… 317
１．２号墳地山整形状況（北から）
２．２号墳北側周溝土層（南西から）
３．２号墳石室（北から）
４．２号墳羨道部敷石遺存状況（東から）
５．２号墳墓道土層Ｅ（東から）
６．３号墳上面敷石（東から）
PL. 4 …… 318
１．３号墳下面敷石（東から）
２．３号墳側壁（南から）
３．３号墳石室（西から）
４．３号墳上面遺物出土状況（北から）
５．上面鉄鏃出土状況（北から）
６．上面ガラス小玉出土状況（北から）

Ⅰ　はじめに

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

平成６年２月、九州大学から福岡市に新キャンパス大学移転用地の取得の依頼があり、同３月、福岡市、九州大学、福岡市土地開発公社（以下、公社とする）は用地取得について覚書の締結がなされた。事業用地は公社が福岡市に代わり先行取得し、新キャンパス建設のための造成工事を行うこととなった。造成工事に先立ち、平成７年２月九州大学から福岡市に対して事業用地内埋蔵文化財の事前調査の依頼があったことから、公社と福岡市で委託契約を締結して事業用地内の埋蔵文化財の踏査を実施した。平成７年12月、用地の275haの踏査が終了した。平成８年３月、九州大学、福岡市、公社間で「造成に関する覚書」が締結され、その中で公社は「事業用地の造成に関して埋蔵文化財調査等を行うものとする」との一項が盛り込まれたことから以後、埋蔵文化財の調査に関しては公社と福岡市との間で委託契約を締結して事業を進めることとなった。

２．調査の組織

調査委託　福岡市土地開発公社
調査主体　福岡市教育委員会
　教育長　　植木とみ子　（前任）生田征生　町田英俊　西憲一郎
　文化財部長　　山崎純男　（前任）堺　徹　柳田純孝　平塚克則　後藤　直
調査庶務　文化財整備課
　文化財整備課長　榎本精治　（前任）平原義行　上村忠明
　管理係長　　栗須ひろ子　（前任）市坪敏郎　井上和光
　管理係　　鳥越由紀子　（前任）鈴木由喜　中岳　圭　岩屋淳美
調査担当　大規模事業等担当
　課長　　力武卓治　（前任）二宮忠司　山崎純男
　主査　　米倉秀紀　（前任）濱石哲也　松村道博　池崎譲二
　　池田祐司　上角智希　木下博文
　　（前任）小林義彦　吉留秀敏　菅波正人　屋山　洋　久住猛雄　星野恵美
　　松浦一之介
　調査補助　　大庭友子　小杉山大輔　西村直人　濱石正子　水崎るり
　　撫養久美子
　調査調整　　都市整備局大学移転対策部　（当初、大学移転対策局）

３．これまでの調査経過

九州大学統合移転地では平成６年の用地の取得後、埋蔵文化財の踏査、試掘調査を行い、平成８年後半から始まった発掘調査は平成17年度で44ヶ所目（Tab.１参照）となった。これまでの調査経過及び平成14年度までの調査（第30次調査）の概要については概報１（市報第693集　2001）、２（市報第743集　2003）に述べられている。また、第２次調査（市報告書722集　2002）、桑原石ヶ元古墳群（市報告書744集　2003）、第３、４、８、11次調査（市報第829集　2004）、第12、15、24次調査（市報第860集、2005）第13、17、25、29、36次調査（市報第861集　2005）の報告書が刊行されている。平成17年度は４箇所の調査を行った。このうち、31、42、44次調査は九州大学の再取得部分である。事業地の西端の九州大学再取得部分にあたる42次調査では谷の包含層から弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が多量に出土した。最終的には数千箱を超えるものと考えられる。この包含層からは他にも、小銅鐸、銅製鋤先、銅鏃、小型仿製鏡、貨泉等の遺物も出土しており、遺跡の性格が注目される。

元岡・桑原遺跡群ではこれまで旧石器時代から中世にわたる幅広い時期の遺構、遺物が発見されている。旧石器時代では、第３次、20次調査等で、ナイフ形石器、剥片尖頭器、細石核等が出土している。これらの遺物は点在的に出土するが、この時期の明確な遺構は検出されていない。縄文時代では、第３次調査で早期前半の石組炉が20数基発見され、北九州では類例の少ない炉穴も検出された。第３次調査以外では明確な遺構は検出されていないが、周囲には桑原飛櫛貝塚や元岡瓜尾貝塚等があり、他の時期の遺跡の存在が予想される。

弥生時代の遺跡は、調査例は少ない。遺跡群では南西端にある、第42次調査では弥生時代後期～古墳時代初頭の土器や青銅製品等が多数出土している。隣接する前原市域の調査でも多量の遺物が出土しており、拠点的な集落であったと考えられる。弥生時代終末から古墳時代にかけては多くの遺構、遺物が見られるようになり、集落が継続的に営まれていたと考えられる。第20次、27次調査で100軒以上の竪穴住居址が発見され、周囲には金屎古墳、経塚古墳、石ヶ原古墳等の前方後円墳、大型円墳が分布しており、この地域の拠点と考えられる。

古墳では前方後円墳は７基、大型円墳が１基発見されている。周辺にある前原市御道具古墳、泊大塚古墳を含めて、４世紀～６世紀にかけての首長墓の系譜を追うことができる。その内、桑原金屎古墳、元岡Ｅ－１号墳、元岡石ヶ原古墳、経塚古墳の調査が行われている。群集墳は70基あまりが分布し、大半の調査が行われた。群集墳で最も多く分布する桑原石ヶ元古墳群では金銅装単鳳環頭太刀や馬具、鍛冶道具等の豊富な副葬品が出土している。特に鍛冶道具は桑原古墳群Ａ群でも出土しており、工人集団の存在が注目される。

古代では多数の製鉄遺跡が確認されており、これまで50基程の製鉄炉が発見されている。そのうち、第12次調査で27基、第24次調査で７基の製鉄炉が検出され、8000箱以上の製鉄関連遺物（炉壁、鞴羽口、鉄滓等）が出土した。遺跡群で見つかった製鉄遺構は大半が８世紀に位置付けられ、８世紀中頃の対新羅政策に関連する鉄の増産と指摘する意見もある。この他、多くの文字資料が注目される。第７次調査では「壬辰年韓鐵□□」と記された荷札状の木簡、第15次調査では古代の「解除（祓）」に関連する木簡、第20次調査では「太寶元年」や「延暦四年」、「嶋郡赤敷里」等志麻郡内の郷名を記したものがある。

このように本遺跡は多岐に及ぶ複合遺跡であるが、特に古墳時代から古代にかけての遺跡は律令体制成立期の様相を考える上で非常に重要な成果を提供するものである。

Tab.1　九州大学統合移転地内（元岡･桑原遺跡群）発掘調査一覧

調査番号	遺 跡 名	所 在 地	調査年月日	調査面積又は古墳基数	検　出　遺　構	調査後の処置	備　　考
（確認調査）							
9656	桑原石ヶ元古墳群	大字桑原字石ヶ元	H8.11.11～H10.10.31	19基	円墳	保存	
9657	桑原金屎古墳	大字桑原字金屎	H8.8.20～H8.11.29	3 基	前方後円墳１基＋方墳２基か	保存	**本報告第909集**
9658	元岡石ヶ原古墳	大字元岡字石ヶ原	H8.8.27～H8.11.29	1 基	前方後円墳	再調査（第35次）	**本報告第909集**
（発掘調査）							
9602	元岡・桑原遺跡群	大字元岡	H.8.3.11～H8.9.30		試掘		
9656	桑原石ヶ元古墳群	大字桑原字石ヶ元	H9.12.1～H10.10.31	11基	円墳	調査後造成	平成14年度報告第743集
9656	第２次	大字桑原字柿ヶ元	H8.11.11～H9.3.25	3,007㎡	古墳時代～古代溝･土坑、水田、縄文時代包含層･土坑、弥生時代土器溜	調査後造成	平成13年度報告第722集
9763	第３次	大字元岡字 瓜尾	H9.11.19～H11.2.22	3,500㎡、古墳１基	縄文時代石組炉、弥生時代住居址、円墳	調査後造成	平成15年度報告第829集
9764	第４次	大字桑原字石ヶ元	H9.12.1～H10.3.31	1,219㎡	古代～中世掘立柱建物・溝	調査後造成	平成15年度報告第829集
9811	第５次	大字桑原字石ヶ元	H10.4.27～H10.6.23	2,500㎡	古代土壙・包含層	調査後造成	概報１第693集
9812	第６次	大字桑原字 石ヶ元	H10.6.30～H10.8.28	2,800㎡	古墳時代包含層	調査後造成	概報１第693集
9813	第７次	大字元岡字 池ノ浦	H10.5.6～H11.6.11	7,500㎡	古墳時代～古代住居址・掘立柱建物、池状遺構、製鉄炉	調査後造成	
9829	第８次（元岡古墳群Ｍ群）	大字元岡字大坂	H10.9.16～H10.12.25	古墳１基	円墳	調査後造成	平成15年度報告第829集
9851	第９次	大字元岡字池ノ浦	H10.11.2～H10.12.10	190㎡	弥生時代住居址	調査後造成	概報１第693集
9854	第10次	大字桑原字柳ヶ浦	H11.1.6～H11.3.31	1,336㎡	古代～中世包含層	調査後造成	概報１第693集
9855	第11次	大字桑原字柳ヶ浦	H11.1.6～H11.3.20	1,650㎡	古墳時代～古代土壙、包含層	調査後造成	平成15年度報告第829集
9902	第12次	大字桑原字履形	H11.4.1～H12.3.28	5,500㎡	古代製鉄炉	保存	平成16年度報告第860集
9903	第13次（元岡古墳群Ｅ群）	大字元岡字小阪	H11.4.12～H11.9.28	古墳３基	前方後円墳１基、円墳２基	調査後造成	平成16年度報告第861集
9904	第14次	大字桑原字柳ヶ浦	H11.4.22～H11.7.22	1,200㎡	古代包含層	調査後造成	概報１第693集
9923	第15次	大字桑原字履形	H11.6.11.～H11.9.28	3,500㎡	古代包含層、中世水田	調査後造成	平成16年度報告第860集
9933	第16次	大字桑原字牛切	H11..8.2～H11.11.10	2,500㎡	古代包含層	調査後造成	概報１第693集
9934	第17次（元岡古墳群Ｂ群）	大字元岡字池の浦	H11.9.10～H11.12.8	古墳２基	円墳	調査後造成	平成16年度報告第861集
9946	第18次	大字桑原字別府	H11.10.15.～H14.2.20	16,800㎡、古墳２基	古墳時代～古代住居址、掘立柱建物、池状遺構、製鉄炉、円墳	調査後造成	
9947	第19次	大字桑原字牛切	H11.11.18～H11.12.24	3,000㎡	古代包含層	調査後造成	概報２第743集
0001	第20次	大字桑原字戸山	H12.4.5～H15.5.23	20,130㎡	古墳時代住居址、古代掘立柱建物、製鉄炉	内、15,000㎡分を保存予定	
0002	第21次	大字桑原字石ヶ元	H12.4.4～H12.10.20	2,900㎡、古墳３基	石ヶ元古墳群円墳３基、	調査後造成	
0033	第22次	大字桑原字牛坂	H12.4.13～H12.10	3,890㎡	古代掘立柱建物、製鉄関連遺構	調査後造成予定	**本報告第909集**
0019	第23次	大字元岡・桑原	H12.6.5～H12.12.25	9,106㎡	確認調査	7,300㎡は緑地保全地区（保存）	
0034	第24次	大字桑原字金屎	H12.8.21～H15.3.20	5,500㎡	古墳時代住居址、古代製鉄炉	調査中	平成16年度報告第860集
0052	第25次（桑原古墳群Ａ群）	大字桑原字石ヶ原	H12.12.11～H13.11.30	古墳７基	円墳	調査後造成予定	平成16年度報告第861集
0110	第26次	大字桑原字戸山	H13.4.6～H13.11.30	5,487㎡、古墳１基	古墳時代住居址、円墳、古代掘立柱建物	保存3,442㎡	
0153	第27次	大字桑原字戸山	H13.12.1～H14.8.29	4,495㎡	古墳時代住居址	建物位置の変更による保存、1,000㎡	**本報告第909集**
0154	第28次	大字元岡字池ノ浦	H14.2.1～H14.7.4	2,200㎡	古代～中世包含層	調査後造成	**本報告第909集**
0202	第29次（元岡古墳群Ｎ群）	大字元岡字石ヶ原	H14.4.5～H15.9.30	古墳９基	円墳	調査中	平成16年度報告第861集
0240	第30次	大字桑原字牛切	H14.8.1～H14.9.30	2,450㎡	古代包含層	調査後造成予定	
0242	第31次	大字元岡字峰ほか	H14.10.1～	12,000㎡	古代瓦だまり、掘立柱建物、鍛冶炉ほか	調査中	
0255	第32次	大字元岡字宮草	H15.1.20～H15.3.31	1,700㎡		調査中	
0303	第33次	大字桑原字平川	H15.4.7～H15.5.19	古墳１基	円墳	調査後造成	
0310	第34次（元岡古墳群Ｊ群）	大字元岡字石ヶ原	H15.4.1～H15.8.12	古墳３基	円墳	調査後造成	**本報告第909集**
0340	第35次（石ヶ原古墳）	大字元岡字石ヶ原	H15.5.20～	古墳１基	前方後円墳	調査後造成	**本報告第909集**
0341	第36次（経塚古墳）	大字桑原字深田ほか	H15.9.1～	2,200㎡、古墳１基	大型円墳	調査中	
0365	第37次	大字元岡字石ヶ原	H15.10.20～H16.2.26	古墳４基	円墳	調査後造成	平成16年度報告第861集
0371	第38次	大字元岡字大久保	H16.3.8～	7000㎡	中世山城	調査中	
0410	第40次	大字桑原字深田	H16.4.7～H16.4.30	2000㎡	包含層	調査後造成	
0435	第41次		H16.5.7～H16.10.1（中断中）	1570㎡	古代包含層、製鉄関連遺構	調査後造成	
0452	第42次		H16.10.1～	8000㎡	縄文時代晩期～古墳時代初頭自然流路	調査後造成	
0523	第44次		H17.6.1～H17.12.2	1189㎡	古墳～古代集落	調査後造成	
0535	第45次（桑原古墳群Ａ群）		H17.7.20～H17.11.21	1128㎡、古墳３基	円墳	調査後造成	

Fig.1　元岡・桑原遺跡群調査地点位置図（1/15,000）

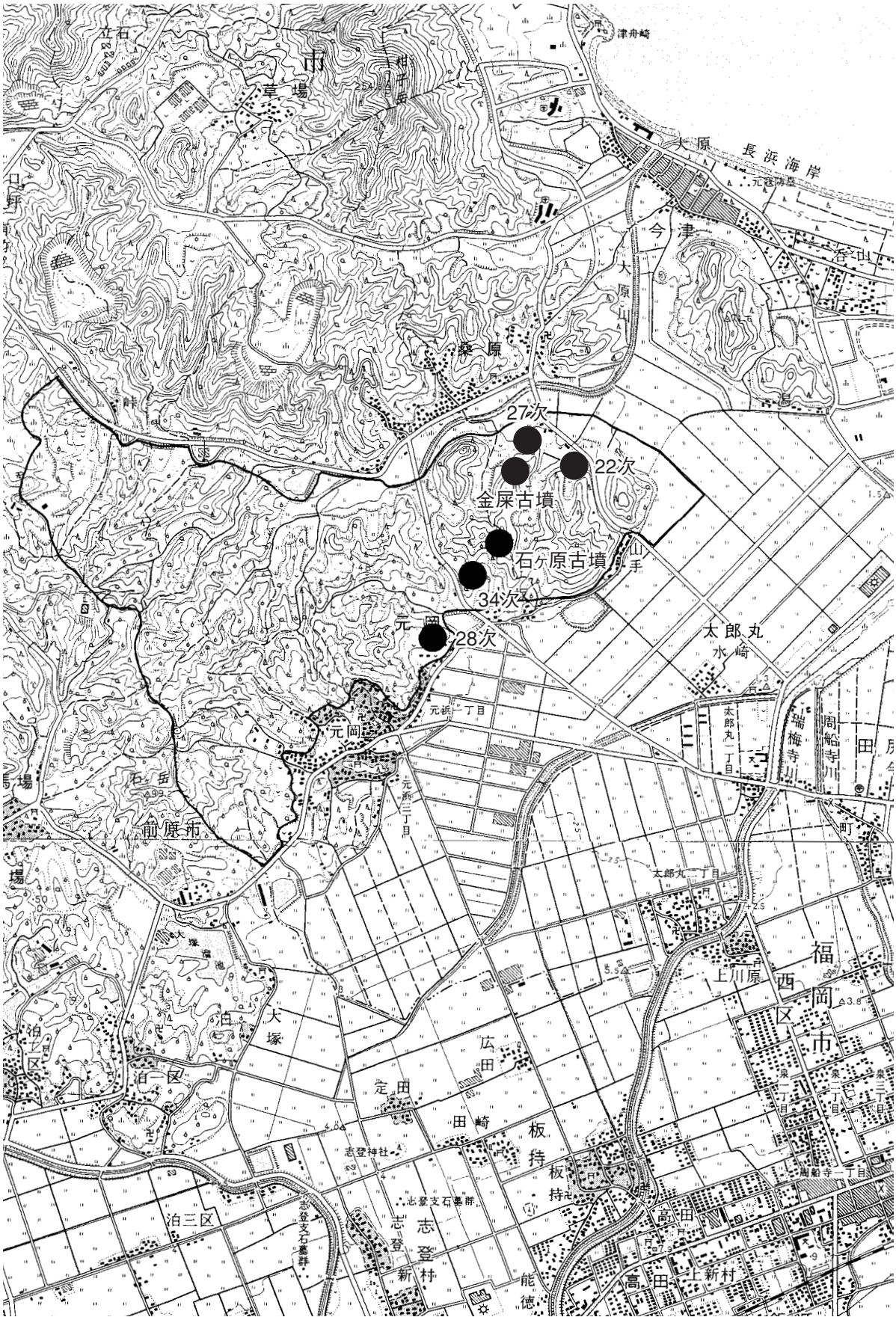


Fig.2　元岡・桑原遺跡群調査地点位置図（1/25,000）

4．遺跡の位置と周辺の歴史的環境（Fig.3）

元岡・桑原遺跡群（１；以下番号はFig.3下参照）は九州大学統合移転事業に伴って発見され、周知の埋蔵文化財包蔵地とした遺跡群である。この範囲内には事業前にもいくつかの遺跡が認められていたが、移転事業に伴う事前の踏査や試掘確認調査により、それまで未発見であった多くの遺跡や古墳が新たに発見されたため、それらをまとめて一つの遺跡群とすることがより適当であると判断されたものである。

元岡・桑原遺跡群は福岡市の西端にあたり、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯にある。丘陵は小河川により樹枝状に侵食された狭い谷が無数に入り込む。遺跡は丘陵上や、枝分かれした谷部に立地する。遺跡群は、旧石器時代から近世にわたる複合遺跡である。縄文時代から中世にかけての集落関連遺構、古代の官衙関連遺構、製鉄・鍛冶等の生産関連遺構、70基以上の後期群集墳や7基の前方後円墳をはじめとする古墳時代の首長墓系列等が認められ、本地域の歴史を復元・考察する上で非常に重要な各時代の調査成果が得られている。周辺地域はこれまで、都市化による開発の影響が少なく、開発を原因とする緊急調査の例が少なかった。逆に言えば後世の開発を免れたために、遺跡の残存状況が良好なものも少なくない。周囲では近年、圃場整備や道路拡幅、新西部埋立場の建設などによって事前の調査が行われ、遺跡の状況が判明しつつある。以下、周辺の遺跡と歴史的環境について述べてみたい。

縄文時代の遺跡では、福岡市では数少ない貝塚が周囲に多く分布している。桑原飛櫛貝塚（13）は主に縄文時代後期の土器や石器、貝輪、骨製品、動植物遺存体等が多量に出土し、貝層中に６体の人骨の埋葬があった。また同時期の貝塚遺跡として、県指定史跡の元岡瓜尾貝塚（８）がある。大原Ｄ遺跡（10）では、縄文時代の草創期から晩期にいたる遺物が多量に出土した。特に、晩期の大量の遺物と、4次調査の草創期の焼失住居の検出が注目される。九大予定地内でも、3次調査で早期の遺構が検出されている。今山遺跡８次調査（132）では縄文時代前期から後期までの土器群とともに石斧などの石器未製品が多く検出され、縄文時代にすでに石器製作地として成立していた状況が判明した。また古今津湾の南岸となる周船寺遺跡群（36）では、縄文後期から晩期の土器･石器の出土が目立っている。

弥生時代では、この地域（福岡市西区西半から前原市・糸島郡）は、古い地名の「怡土」などから魏志倭人伝の「伊都国」に比定される地域でもあり、重要な遺跡が分布している。元岡・桑原地区の周辺では、海岸部に前期の今津貝塚（15）や早期の長浜貝塚等の貝塚があり、丘陵上では小葎遺跡（大原Ｂ遺跡）（12）がある。小葎遺跡は、中期後半から後期後半に至る多量の土器やこの地域特有の玄界灘式石錘などが出土している。外来系土器や鹿？を描いた絵画土器が注目される。今山遺跡（17）は、玄武岩の露頭があり、原石の採取と石斧製作が行われた。大量の石斧の未製品が出土している。ここで作られた石斧は北部九州に広く運ばれている。最近の今山遺跡８次調査の成果等から、弥生時代前期より石斧等の石器を多量に製作するが、中期初頭に至りほぼ太型蛤刃石斧のみを大量に製作している状況が見いだされており、専門工人の集団が成立したとの想定もなされている（註１）。なお今山遺跡の石斧生産は須玖Ⅰ式（中期前半）までであり、ある時期に突然終了した感がある。今山から海岸沿いに南東に長くのびる砂丘上の今宿遺跡では、１次調査において弥生時代前期の甕棺墓地や中期の包含層（集落？）が、５次調査（134）において前期から中期の甕棺・木棺・土壙墓群が検出されている。また今山の対岸になるが今津の呑山遺跡でも玄武岩の露頭があり、小規模ながら石斧製作が行われている。唐泊沖合では広形銅矛が引き揚げられている。九大予定地内では、２次調査（２）で前期から中期初頭、後期後半から終末の土器が出土しているほか、３次調査で中期後半の住居が数棟検出されている。なお当時は縄文時代の海進以来古代まで、今津湾がかなり深く入り込み（古今津湾）、元岡・桑原地区は海岸に臨む立地であったことが注意される。

糸島半島の西側では加布里湾が同様に入り込み（古加布里湾）、古代の志摩郡と怡土郡は多くは入

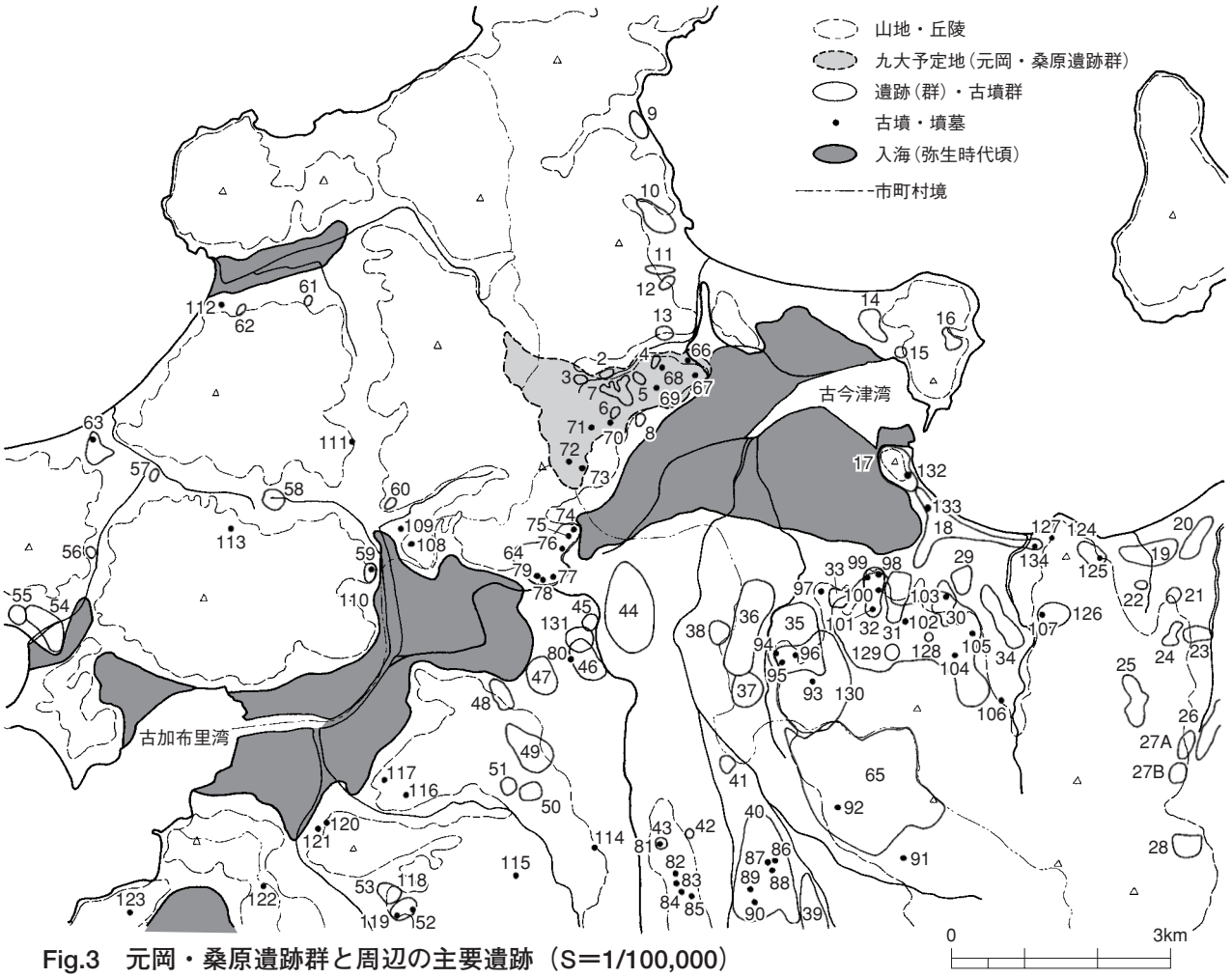


Fig.3　元岡・桑原遺跡群と周辺の主要遺跡（S＝1/100,000）

1. 九州大学移転予定地（元岡・桑原遺跡群）
2. 元岡･桑原遺跡群第２次調査
3. 同・第12次調査
4. 同・第20次調査
5. 同・第18次調査
6. 同・第7次調査
7. 桑原石ヶ元古墳群
8. 元岡瓜尾貝塚
9. 小田遺跡
10. 大原Ｄ遺跡
11. 大原Ａ遺跡
12. 大原Ｂ遺跡（小葎）遺跡
13. 桑原飛櫛貝塚
14. 今津Ａ遺跡
15. 今津貝塚
16. 今津Ｄ古墳群
17. 今山遺跡
18. 今宿遺跡群
19. 生ノ松原遺跡
20. 下山門遺跡
21. 城の原廃寺
22. 斜ヶ浦瓦窯址
23. 湯納遺跡
24. 宮の前遺跡
25. 広石遺跡群・広石古墳群
26. 野方久保遺跡
27. 野方中原遺跡（Ａ）・野方塚原遺跡（Ｂ）
28. 羽根戸南古墳群
29. 今宿五郎江遺跡
30. 大塚遺跡
31. 女原遺跡
32. 徳永Ｂ遺跡
33. 徳永Ａ遺跡
34. 今宿青木遺跡
35. 飯氏遺跡群
36. 周船寺遺跡群
37. 千里遺跡群

（以下・前原市）

38. 高田遺跡群
39. 井原遺跡群
40. 三雲・井原遺跡群
41. 井田用会支石墓群
42. 曽根石ヶ崎支石墓群
43. 平原遺跡
44. 志登遺跡群
45. 志登支石墓群
46. 潤遺跡群
47. 浦志遺跡群
48. 向原（上町）遺跡
49. 篠原遺跡群
50. 上鑵子遺跡
51. 伏龍遺跡
52. 東真方古墳群
53. 東五反田遺跡

（以下・志摩町）

54. 御床松原遺跡
55. 新町遺跡
56. 八熊遺跡
57. 熊添遺跡
58. 一ノ町遺跡
59. 稲葉古墳群
60. 四反田古墳群
61. 吹切遺跡
62. 久米遺跡
63. 大牟田遺跡
64. 泊遺跡群（前原市）
65. 怡土城址

（以下・福岡市）

66. 経塚古墳
67. 塩除古墳（方円）
68. 桑原金屎古墳（方円）
※本報告
69. 元岡石ヶ原古墳（方円）
※本報告
70. 元岡池ノ浦古墳（方円）
71. 元岡Ｅ－１号墳（方円）
72. 峰古墳（方円）
73. 元岡Ｉ－１号墳（方円？）

（以下・前原市）

74. 泊大塚古墳（方円）
75. 御道具山古墳（方円）
76. 泊古墳
77. 泊城崎古墳
78. 泊大日古墳（神仙騎獣鏡）
79. 泊熊野甕棺墓（朱大量、弥生後期後半）
80. 潤神社古墳（方円）
81. 平原１号墓（弥生終末王墓）・平原遺跡（２～５号墓）
82. 先山古墳（方円）
83. ワレ塚古墳（方円）
84. 銭瓶塚古墳（方円）
85. 狐塚古墳
86. 三雲茶白塚古墳？（方円？）
87. 端山古墳（方円）
88. 築山古墳（方円）
89. 三雲南小路遺跡（弥生中期後半王墓）
90. 井原鑓溝遺跡（弥生後期中頃？王墓）
91. 山犬ノ尾Ｃ－１墓（方円）
92. 高祖東谷１号墳（方円）
93. 飯氏Ｂ－14号墳（方円）
94. 飯氏鏡原古墳（方円）
95. 飯氏二塚古墳（方円）
96. 兜塚古墳（方円）
97. 丸隈山古墳（方円）
98. 山ノ鼻２号墳（方円）
99. 山ノ鼻１号墳（方円）
100. 若八幡宮古墳（方円）
101. 下谷古墳（方円）
102. 女原Ｃ－14号墳（方円？）
103. 今宿大塚古墳（方円）
104. 谷上Ｂ－１号墳（方円）
105. 谷上Ｃ－２号墳
106. 本村Ａ－１号墳（方円）
107. 鋤崎古墳（方円）

（以下・志摩町）

108. 権現古墳（方円）
109. 後口古墳
110. 稲葉２号墳（方円）・稲葉１号墳（方方）
111. 開１号墳（方円）
112. 向畑古墳
113. 大上戸古墳

（以下・前原市）

114. 有田１号墳（方円）
115. 井ノ浦古墳
116. 立石１号墳（方円）
117. 砂魚塚古墳
118. 東真方Ｃ－１号墳（方円？）
119. 東真方Ａ－１号墳
120. 神在横畠古墳
121. 釜塚古墳

（以下・二丈町）

122. 一貫山銚子塚古墳（方円）
123. 立野古墳（方円）

（以下・福岡市）

124. 長垂大谷遺跡
125. 長垂大谷７号墳
126. 鋤崎古墳群
127. 長垂山石棺（方格規矩鳥文鏡）
128. 新開窯址群（Ｉ型式古式須恵器）
129. 今宿古墳群（徳永・女原・新開・今宿・谷上・相原・本村）
130. 飯氏古墳群
131. 潤地頭給遺跡（前原市）
132. 今山遺跡８次地点
133. 今宿遺跡３次地点
134. 今宿遺跡５次地点

※「方円」は前方後円墳、「方方」は前方後方墳

海で隔てられ、狭い陸橋がその間にあったような状況である。その陸橋部分で、二つの入海の奥にあたる部分に志登遺跡群（直線的な条溝と掘立柱建物）(44)、浦志遺跡群（小銅鐸・馬韓系両耳付壺模倣土器を出土）(47) のような弥生時代の拠点集落が立地する（以上２遺跡は前原市）。これらは弥生時代中・後期を主体とするが、志登支石墓群（前原市）(45) は弥生時代前期の著名な墳墓遺跡である。また泊遺跡群 (64) には、大量の水銀朱を副葬した泊熊野遺跡（前原市）(79) の後期後半の甕棺墓があり、次の御道具山古墳（前原市）(75) などの古墳時代前期の有力首長墓系列成立の前夜を思わせる。

最近の調査では二つの入海の中間にあたる部分において、志登支石墓群に近接して潤地頭給遺跡（前原市）(131) が発見された（註２）。遺跡は旧河道に挟まれた微高地上に立地している。弥生時代前期末から古墳時代にわたる集落、弥生時代前期末から後期前半の甕棺墓や木棺墓からなる墓地が検出された。墓地では、推定弥生時代終末の「位至三公」銘内行花文鏡を出土した木棺墓や、銅釧や磨製石剣の切先を出土した中期前半（汲田式）の甕棺墓などが注目される。集落では、弥生時代中期（～後期）の大量の土器を出土し集落の南限となる大溝や、弥生時代終末～古墳前期の水晶や碧玉製の玉未製品や玉作工具を多量に出土する工房址群が注目される。特に水晶の玉作は北部九州での消費（出土）が少なく、その流通先は韓半島の可能性もあり興味がもたれる。韓半島系軟質土器とみられる土器も出土しているし、古墳時代初頭の井戸に井戸側に転用された準構造船の部材木製品があり、海を介した交易活動が示唆される。

古今津湾の南東側対岸である今宿地区では、今宿五郎江遺跡（29）が注目される。弥生時代中期後半から後期中頃の大量の土器群を出土した環濠集落であり、特異な型式の小銅鐸が出土している。最近の調査では、「環濠」とされる大溝が検出された部分から西側や北側にも遺構が広がることが確認されており、大溝や遺跡の西側を画する旧河道の弥生時代後期前半から終末期の大量の土器群に混じり、楽浪系土器や韓半島系瓦質土器、鏡片などが出土している。また碧玉および水晶の剥片があり、小規模ながら玉作が行われたとみられる。今宿五郎江遺跡の南側は大塚遺跡（30）であり、遺跡東部（福岡県教育委員会調査『今宿高田遺跡』）では、今宿五郎江遺跡の遺構の減少に対応するように弥生時代終末から古墳時代前期にかけての集落遺構が展開する。今宿五郎江の南東側に位置する今宿青木遺跡（34）でも弥生時代の遺構の展開があり、１次調査では中期前半と後期後半から終末期の集落遺構がある。前者の時期には石斧未成品が、後者には碧玉剥片が伴う（註６）。ここから西に目を転じ、古今津湾南側の丘陵緩斜面に位置する飯氏遺跡群（35）は、弥生時代中期～後期さらには古墳時代前・中期にもおよぶ拠点集落と考えられる。飯氏馬場地区の弥生時代後期の墓地では甕棺墓から後漢の内行花文鏡が出土した（飯氏３次７号甕棺墓）。この後期の甕棺墓は糸島地方に特徴的な壺棺系の「甕棺」である。飯氏遺跡群の北西の周船寺遺跡群（36）では弥生時代早・前期から中期の集落が広がっている。この西に隣接する高田遺跡（前原市）では、弥生前期の水田が検出されている。周船寺遺跡群は早期（突帯文土器期）以来の初期の農耕集落であるが、中期後半頃に衰退し、後期には遺構が全くみられなくなる。これについては、何らかの理由（気象？）により可耕地が変動し、飯氏遺跡群（35）や次の三雲遺跡群（前原市）(40) などに集住した可能性が考えられる。

怡土平野の中央の三雲・井原遺跡群（前原市）(40) は、数十面もの中国鏡や各種青銅器など豊富な副葬品を有する三雲南小路（中期後半）(89) や井原鑓溝（後期中頃か）(90) の弥生時代の王墓があるばかりでなく、規模も80ha前後、中国王朝の朝鮮半島における出先機関である楽浪郡とのつながりを示す楽浪系土器が多く出土するなど、「伊都国」の王都としての質と量を備えている（註３）。国内各地から搬入された外来系土器も多い。近年の調査では、天明年間（1781～1788年）に発見された井原鑓溝（90）の王墓甕棺があったとされる地点に近接して弥生時代後期の木棺・土壙・甕棺墓群が発見され、木棺墓などから内行花文鏡、方格規矩鏡といった中国鏡３面、ガラス小玉数千点が検出された（註４）。墓群の甕棺墓は、飯氏３次７号甕棺墓に類似する壺棺系甕棺墓が多く、青柳種信の『柳園古器略考』に「一つの壺」と記録される井原鑓溝の王墓甕棺を想起させる。また６号木棺墓は

刳抜式（割竹形状）木棺であり、棺外に破砕した方格規矩鏡を副葬するなど次の平原１号墓に通じる様相があることは重要である。三雲遺跡群の西にある曽根丘陵には弥生時代終末期の王墓を含む平原遺跡（前原市）（81）がある。１号方形周溝墓からは超大型倣製鏡５面、方格規矩鏡32面等の計40面の鏡が出土した。その他、ガラス玉多数や大刀が副葬されている。１号墓の時期については諸説あるが、方格規矩鏡群の属性諸要素に型式的混乱があり鋳造技術的に退化していることから後漢後晩期の製作とみられ、周溝最下層で出土した穿孔がある特異な平根鉄鏃は類似例（同様相の銅鏃を含む）が弥生時代終末に多い。周溝を共有しつつ重複関係にある２号周溝墓が古墳時代初頭であることも考慮すれば平原は弥生時代終末になるだろう。なお１号墓の鏡群については、大型倣製鏡だけでなく方格規矩鏡群をも「倣製鏡」とする説もあるが（註５）、少なくとも方格規矩鏡盛期の後漢前期の鏡群ではないとする指摘は重要で一考に値する。平原５号墓も前漢鏡を複数有していたとみられ、周溝の壺棺や高坏は後期初頭～前半であり、中心主体は後期初頭であろう。したがって、三雲南小路１号甕棺（中期後半）→同２号甕棺（中期末）→平原５号墓（後期初頭）→井原鑓溝（後期中頃？）→平原１号墓（終末期古相か）というように現状で５代の王墓が明らかになっており、「世々王有り」という『魏志倭人伝』の「伊都国」の記事を実証している。

曽根丘陵から平野を隔てた西側丘陵上の上鑵子遺跡（前原市）（50）では弥生時代の鋤・鍬類等の農具や運搬具（背負梯子）、楽器（琴）などの多種多様の木製品が出土している。上鑵子遺跡の丘陵を北側に下りるとすでに述べた浦志遺跡のある低地部になるが、丘陵の北側先端部には上町向原遺跡（前原市）（48）があり、弥生時代後期～古墳時代前期の甕棺（壺棺）や石棺からなる墓地がある。時期不詳だが石棺墓？からは全長119.6cmを測る素環頭大刀が出土し、『魏志倭人伝』に言う「五尺刀」に相当する優品であり特筆される。

次に古加布里湾の北側対岸である志摩町方面に目を向けると、初川中流域には拠点集落として一の町遺跡（志摩町）（58）があり、弥生時代中期後半から後期初頭の大型建物を含む建物群や、それとは別に中期前半と後期後半の大型建物が検出されている（註６）。これら大型建物には100㎡を超えるものもみられる。楽浪系土器や鏡片の出土もあり、小平野の中枢としての拠点集落であろう。『魏志倭人伝』の「斯馬国」の中心とする説もある。糸島半島の西側では、引津湾沿岸の砂丘上に立地する御床松原遺跡（54）は弥生時代中期から古墳前・中期に続く拠点集落である。楽浪系土器、貨泉や鏡片の出土がみられ、石錘・土錘や鉄製釣針・アワビオコシなどの漁撈関係遺物も多い。漁撈・交易などの海上活動の拠点とみられる。隣接する新町遺跡（55）は、弥生時代早期から古墳時代前期にいたる墳墓遺跡であり、御床松原に対応する。志摩町北部の野北地区では、久米遺跡（62）の弥生時代前期末から中期中頃の甕棺墓地があり、細形銅剣・銅戈計２本が出土した。なお本地域（Fig.3の範囲）での青銅武器の出土（伝出土含む）は、泊遺跡群（64）で細形銅剣２本、上町向原（48）で細形銅剣２本、三雲・井原遺跡群周辺（39・40）で細形銅剣４本と中国式銅剣１本、今宿遺跡（18）で細形銅剣１本があり、中期初頭から中頃にかけて各地に首長層が台頭してきたことが分かる。

古墳時代では、元岡・桑原地区では塩除古墳（67）、元岡池ノ浦古墳（70）、桑原金屎古墳（68）、元岡Ｅ－１号墳（71）といった前期の前方後円墳がある。峰古墳（72）、元岡Ｉ－１号墳（73）は詳細不明だがあるいは前期になる可能性も否定できない。このうち調査されたものでは、元岡Ｅ－１号墳（ⅢＡ期古相か）からは小型の方格Ｔ字鏡が、桑原金屎古墳（本報告書で詳述）からは菱雲紋鏡と芝草紋鏡が出土した。前者は後世の墳丘改変が顕著で不明な部分があるが30m前後（正確な墳端が不明）の、後者は全長約24mの、いずれも小規模な前方後円墳である。一方、塩除古墳や元岡池ノ浦古墳は、前者が53m前後（註７）、後者が60m前後と一回り大きく（これらの規模は測量調査による推定のため若干の変動がありうる）、時期的にも桑原金屎古墳や元岡Ｅ－１号墳と併行する可能性も高く（例えば元岡池ノ浦古墳の出土土器・埴輪からの推定時期はⅢＡ期新相で桑原金屎古墳とほぼ同じである；註８）、とすれば大小の複数の首長墓系列が存在した可能性がある。御道具山古墳（75）な

どの泊遺跡群（前原市）の立地する丘陵上の前期の前方後円墳も至近の距離であり、同一の首長墓系列とみてもよいだろうと思われる。このうち塩除、元岡池ノ浦（以上，福岡市）、御道具山、泊大塚（74）（以上，前原市）は全長50mをこえるもので、本地域では高ランクの首長墓である。古今津湾の存在を考えれば、これらの前方後円墳の多くは海を見下ろす丘陵上に築造されていることになる。御道具山古墳は調査の結果、全長62mを測り（詳細は未報告）（註９）、出土土器から前期初頭～前期前半である（ⅡＢ期；註10）。泊大塚古墳は、現在は前方部が失われているが、後円部は45mと大きく、全長約75m前後が推定されている。時期は埴輪片が採集されたという説もあるが定かではなく、石室が存在するとの説もあり（註11）、中期～後期の可能性もある。確実な前期の前方後円墳（67，70，75）のうち50m以上のものは古今津湾側に前方部を向けるが泊大塚は逆であり、時期が異なるものである可能性もあろう。このほか泊地区では、三角縁神獣鏡の関連鏡群である神仙騎獣鏡２面（註12）を出土した泊大日古墳（78）は前期初頭の可能性があり（墳丘詳細不明）、泊城崎古墳（77）は中期前半～中頃の大型円墳（径30m前後）で陶質土器が出土しているという（未報告；註13）。

中期以後は首長墓クラスに加えて中小の古墳からなる群集墳が展開する。本書で報告する元岡石ヶ原古墳（69）は横穴式石室を主体とする後期（TK10＝６世紀中頃）の前方後円墳である。経塚古墳は単独の大型円墳（径26～27m）で、円筒埴輪や家形埴輪、初期須恵器が出土している。中期中頃（５世紀中頃）の築造で、埴輪は本地域における窖窯焼成導入期のものであろう。また本地域には群集墳も多く、九大予定地内の丘陵尾根上には桑原石ヶ元古墳群（７）（註20）をはじめとする多数の中小の古墳が分布している。桑原石ヶ元古墳群は、５世紀中頃から７世紀まで築造・経営された古墳群で、鍛冶工具一式や金銅張の馬具、装飾大刀、陶質土器など注目すべき遺物も出土している。また九大予定地内では古墳時代の集落として、２次調査（２）・42次調査では古墳時代前期の遺物を、20次調査（４）では下層の面で中期～後期（５～７世紀）の遺構と遺物を検出した。20次調査では80棟の竪穴住居や溜池状遺構の水辺の祭祀（子持勾玉、滑石製玉類）がある。

九大予定地の西側に接する志摩町では、古加布里湾の奥部で当時の初川の河口付近の両岸に、稲葉１・２号墳（110）と権現古墳（108）の前期初頭～前半の前方後円（方）墳が相次いで作られた。権現古墳は三角縁神獣鏡の関連鏡群とみられる画象鏡を副葬する箱式石棺を主体とするが、墳形から前期初頭であろう（註14）。稲葉１号墳（110）も古い様相があるが、葺石や段築からやや下るⅡＢ～ⅡＣ期とみられる（註15）。近接する稲葉２号墳は前方後方墳で、全長推定21m前後である。出土土器からはやや下ると見られ、夜須町（現・筑前町）の焼ノ峠古墳（ⅡＣ期）に墳形が類似するか。中期前半にはやや川を上った位置に全長90mの開１号墳（111）が築かれたが、規模から地域盟主墳と言える。前期から中期の古式群集墳として四反田古墳群（60）があり、後期末では後口古墳（109）が大型の横穴式石室を持つ首長墓とみられる。引津湾岸の御床松原遺跡（54）は前期から中期までは陶質土器や外来系土器の出土があり、海上交通の拠点として継続している。

元岡・桑原地区とは古今津湾対岸である飯氏・今宿地区には多数の古墳群があり、さらに前期から後期にいたる前方後円墳の首長墓系列がみられる。山ノ鼻２号墳（98）が九州最古の古墳である那珂八幡古墳（博多区）と類似する墳形から最古とみられ、三角縁神獣鏡と三累環頭大刀、方形板革綴短甲を出土した若八幡宮古墳がこれに続く（ⅡＣ期）。山ノ鼻１号墳（99）は全長37mで、出土土器から前期後半（ⅢＡ期）に下る。主体部は破壊されるが箱式石棺の可能性が高く、獣帯鏡？片が出土している。最古式の横穴式石室を持つ鋤崎古墳（全長62m）（107）は中期初頭、古式の横穴式石室の丸隈山古墳（約85m）（97）は中期前半である。いずれも豊富な副葬品を有している。この２古墳は離れているが、両者の埴輪は同一工人集団系統による製作の可能性がある。中期中頃以降のこの地域の盟主墳は飯氏古墳群（130）に移動したとみられる。飯氏鏡原古墳（94）は墳丘の破壊が著しいが、60m以上の造出付円墳ないし前方後円墳とみられ、窖窯焼成導入期の埴輪がある。飯氏古墳群の前方後円墳はこの後、兜塚古墳（TK23期；５世紀末）（96）、飯氏二塚古墳（TK47-MT15期；６世紀初頭）

(95)、子捨塚（飯氏Ａ－４・５号墳)、飯氏Ｂ－14号墳（MT85期）(93）と推移するが、この途中のMT15期には再び今宿地区に地域盟主墳が移動する。これが二重周濠を有する今宿大塚古墳（103）である。下谷古墳（消滅；101）は50m前後の前方後円墳であったと考えられ、前後する時期か（前方部が山側で近在の98～100と逆で時期が異なるか)。谷上Ｂ－１号墳（104）は６世紀中頃（TK10期）の37mの前方後円墳である。本村Ａ－１号墳（消滅；106）や女原Ｃ－14号墳（102）は後期の小型前方後円墳であろう。広義の「今宿古墳群」は、山塊からみた地形区分と首長墓の分布状況から、徳永・女原・新開・今宿・谷上・相原・本村の諸古墳群からなる今宿古墳群（129）と飯氏古墳群（130）に二分されるだろう。前者には鋤崎古墳群（126）も含むが、盟主墳は98（山ノ鼻２号）→100→99→107（鋤崎）→97（丸隈山)、101（下谷）？→103（今宿大塚）→102・106と推移する。一方、飯氏古墳群（130）はこれまで前期の首長墓が不明であったが、近年の踏査（今宿地区古墳群詳細分布調査）により丘陵尾根や頂部に前期から中期前半とみられる全長25mから50m前後までの前方後円墳数基が発見され、中期中頃の飯氏鏡原（94）以前の首長墓系列が存在することが明らかになりつつある。「飯氏山出土」とされる車輪石（前期後半の型式）もそれらの前方後円墳のいずれかから出土した可能性があろう。今後のさらなる分布調査や確認調査の成果が期待される地域である（今宿地区でも前方後円墳がまだ存在する可能性がある)。なお元岡・桑原から泊丘陵の首長墓系列は中期になると一時期勢力に陰りが認められそうなのに対し、今宿・飯氏地区では盟主墳の中心地区の移動はあるものの勢力が連続していることが認められる。なお今宿地域周辺では甲冑が比較的多く出土することも知られる。若八幡宮古墳（100）での前期甲冑の出土が特筆されるが、鋤崎古墳（107）からは長方板革綴短甲が、谷上Ｃ－２号墳（105）や兜塚古墳（96）では甲冑の部材が出土し、今宿平野の東を画す長垂丘陵の長垂大谷7号墳（125）では、小規模な古墳ながら羽毛付きの三尾鉄を伴う衝角付冑が出土した（TK216期；５世紀中頃)。

集落では、飯氏遺跡群（35）に前期から中期の遺構が展開し、女原遺跡では中期前半～中頃の大型建物や韓式系土器、初期須恵器が出土している。今宿遺跡群（18）から今山遺跡（17）の砂丘上には、古墳時代前期の遺構群が分布する。今山８次（132）や今宿５次（134）等では大量の製塩土器片がある。今宿３次（133）では弥生時代終末新相の土器に伴い山陰系土器の搬入品や馬韓系瓦質土器があり、今山８次でも韓半島系土器、山陰系土器や福岡平野産の庄内甕の搬入がみられる。糸島地方の東側の海上交通の拠点であろう。古墳時代初頭前後の「博多湾貿易」前半期の重要拠点との説もある(註16)。徳永Ａ遺跡（33）では、須恵器製作技法による６～７世紀の「赤焼土器」が多量に出土しており、須恵器工人集団との関連が示唆される。新開窯址（128）では５世紀後半（TK208）～６世紀前半（TK10）相当の須恵器が生産されたが、糸島地域には在地的な様相を示す須恵器が古墳や集落から他時期にもよく見られ、他にも周辺地域に須恵器窯址が存在する可能性が高い（土器製作工具の出土から元岡・桑原地区にも存在する可能性がある)。

転じて怡土平野においては、三雲・井原遺跡群（40）は中期前半までは大集落として続いており、韓式系土器、陶質土器の出土も比較的多くみられる。ただし弥生時代終末までの楽浪系土器の出土のような集中性は見られない。中期前半頃からは拠点的な集落は南東の井原遺跡群（39）に移動するようである。古墳時代初頭の古墳はやや不明であるが、前期前半（ⅡＣ期）には三雲の中心に端山古墳(87）が築かれる。全長78mで、墳形は柄鏡形前方後円墳で奈良県の桜井茶臼山古墳に類似する。以後、築山古墳（ⅢＡ期古相）(88）→井原１号墳（ⅢＡ期新相）→茶臼塚古墳？（消滅；86)（註17）と続くが、これらは40～80m前後までの規模であり、周囲の諸地域の傾向と同じであり、弥生時代における当地域の「王墓」の隔絶性のような状況はすでに失われている。中期から後期の前方後円墳などの首長墓系列は西側の曽根丘陵（曾根古墳群）に移る（82～85)。また後期後半（６世紀後半）には古賀崎古墳がある。このように前期から後期までの首長墓系列が存在し、古墳時代においても重要地域（「怡土県」）であったことが伺える。なお糸島地域には大小の前方後円墳が50基以上あり、特に

前期に多いことが特筆され、この点では「伊都国」の威光が残ったとも言えよう。

飛鳥時代（７世紀）から古代においては、推古朝に来目皇子が率いたという対新羅征討軍がこの地域に駐屯したことを日本書紀が記すほか（602年）、雷山神籠石の存在や、８世紀半ば（奈良時代）には怡土城（65）の築造が行われるなど、外交や国防の最前線として重要な地域となった。元岡・桑原地区の調査では６世紀末以降は多くの谷部の調査で飛鳥～奈良時代に続く遺構群を検出しており、製鉄や鍛冶を管理する公的施設を含む可能性が高い。12次調査（３）の大規模な製鉄遺構群（８世紀）、７・18次調査（６・５）の飛鳥～奈良時代の鍛冶炉や製鉄炉を伴う建物群などはこうした時代背景が関連するかもしれない。７次調査では「韓鐵」「嶋里」と記された「壬辰年」（692年？）の木簡が出土した。元岡・桑原地区には大規模な官営製鉄工房群があったとみてよいだろう。この地域は海岸で良好な砂鉄が得られることから、他にも製鉄・鍛冶遺跡が多い。大原Ａ遺跡（11）では製鉄炉と鍛冶炉が検出され、近接する大原Ｄ遺跡（10）では古代の集落が展開している。志摩町の八熊遺跡（56）でも奈良時代の製鉄炉を集中して検出し、官営製鉄工房群の一部であろう。

古代では当該地域は志麻（嶋）郡に属する。文献では、正倉院に現存する大宝二年（702年）の「大領肥君猪手」以下の筑前国嶋郡川邊里戸籍があるが、戸籍と遺跡の実態との対応関係については、『和名抄』に記載された古代の郷の比定の問題も含めて、今後の課題であろう。なお古代の志麻郡の郷は、韓良・久米・登志・明敷・鶏永・川邊・志麻があるが、このうち韓良・久米・鶏永は現在の唐泊・久米・芥屋の各地域への比定で諸説が一致している。登志は登志神社のある今津付近とするのが有力だが「志登」の誤りとの説もある。他は諸説がある。当事業地付近については、志麻郷とする説と川邊郷とする説があるが結論は出ていない。川邊里に「大領」が居住したのなら相当する居館の発見が待たれるが、志摩郡では郡衙も不明な実状である。地名考証のみならず、元岡・桑原地区を含めた周辺の調査研究、出土木簡や古代の遺構の分析が必要であろう。

（註１）中山平次郎博士がすでに予見していたが、その後の下條信行氏の研究や今山遺跡８次調査の成果により実証されつつある。米倉秀紀編2005『今山遺跡　第８次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集。／（註２）江野道和・江崎靖隆編2005『潤地頭給遺跡』前原市文化財調査報告書第90集、江崎靖隆2005「潤地頭給遺跡調査報告」『日・韓交流の考古学』嶺南考古学会・九州考古学会第６回合同考古學大会。／（註３）角浩行2000「伊都国の遺跡と遺物－糸島地区朝鮮半島系遺物について－」『考古學から見た弁・辰韓と倭』嶺南考古学会・九州考古学会第４回合同考古學大会、柳田康雄2002「伊都国研究序説」『九州弥生文化の研究』学生社。／（註４）楢崎直子2005「平成16年度三雲・井原遺跡　鑓溝地区の発掘調査の成果」『平成17年度九州考古学会総会　研究発表資料集』。／（註５）柳田康雄2000「平原王墓出土銅鏡の観察総括」（柳田康雄・角浩行編2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集）。／（註６）河合修2004「「斯馬国」の拠点集落か!?―　一の町遺跡―」『シンポジウム邪馬台国の時代「伊都国」』　前原市教育委員会。／（註７）宮本一夫・辻田淳一郎ほか2005「福岡市西区元岡・塩除古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」『九州考古学』第80号。なお、糸島地域の古墳のデータについては次の文献を参照。第27回九州古墳時代研究会事務局編『糸島の古墳－前方後円墳および関連資料の集成－』。／（註８）池ノ浦古墳の北側斜面になる元岡・桑原遺跡群７次で古墳から流失した壺形埴輪が出土しているが、ⅢＡ期古相の築山古墳（前原市）や卯内尺古墳（南区）よりは新しく、ⅢＢ期の老司古墳（南区）よりは古い特徴を持つ。また採集された円筒埴輪は楕円筒の可能性があるなど鋤崎古墳（ⅢＢ期）より古い。岡部裕俊・河村裕一郎1994「糸島地方の古墳資料集成（その１）」『福岡考古』第16号。なお以前採集された埴輪のうち、肩部に円形透孔があるとされたものは焼成前底部穿孔壺形土器（壺形埴輪）の底部穿孔の誤認である。また「ⅢＡ期」（布留式中相併行）の細分は久住2002「出土土器の位置付けについて」（『元岡・桑原遺跡群１』福岡市埋蔵文化財調査報告書第722集）を参照。／（註９）柳田康雄2005「武器形青銅祭器と大型墳墓の出現」『邪馬台国時代の筑紫と大和』香芝市教育委員会。／（註10）久住猛雄2002「九州における前期古墳の成立」『日本考古学協会2002年度橿原大会研究発表資料集』。なお古式土師器編年は久住1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨによる。／（註11）以前墳頂に熊野神社があり、神殿の下に石畳（天井石？）があり、強く踏むと地下に空洞（石室？）のある音がしたという。由比章祐1990『怡土志摩地理全誌』2　志摩編　糸島新聞社　48-49頁。／（註12）後藤守一1926『漢式鏡』。現在この鏡の所在は不明になっている。面径22cmとされ三角縁神獣鏡に近い。類似する鏡としては美作の郷観音山古墳出土鏡がある。／（註13）柳田康雄1982「糸島の古墳文化」　註17文献。／（註14）岡部裕俊・河合修・江野道和2002「津和崎権現古墳」『福岡考古』第20号。なお前方部側縁ラインは直線的ではなく外反しバチ形となるはずである。また画像鏡は簡略な表現で後漢鏡とは異なり、長方形鈕孔の特徴は三角縁神獣鏡に似る。／（註15）北部九州では段築と葺石を完備する最古の確実例は光正寺古墳（宇美町）と御道具山古墳（前原市）である。他は豊前石塚山（苅田町）や原口古墳（筑紫野市）などⅡＣ期に下るものが多い。なお稲葉１号は那珂八幡古墳（ⅠＢ期）の相似形1/2企画の可能性がある。／（註16）久住猛雄2005「今山遺跡８次調査出土古式土師器について」『今山遺跡　第８次調査』註１文献、久住2004「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人』大阪府立弥生文化博物館。／（註17）端山古墳の東方に位置したらしい茶臼塚古墳の墳丘の残骸とみられるサキゾノⅠ－８地区の盛土から出土した鉄製武器類は中期前半前後の型式である。柳田康雄・小池史哲編1982『三雲遺蹟　Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第63集　56-57頁。

Ⅱ　桑原金屎古墳の調査

（第１次調査：調査番号　９６５７）

例　言

1．本書は、九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が1996（平成８）年度に行った桑原金屎古墳第１次調査（内容確認調査；ＫＫＡ－１）の報告書である。当初、本調査は元岡・桑原遺跡群第１次調査（事前試掘確認調査；ＭＯＴ－１）の一部として行われていたが、調査次数の整理や文書事務の都合上、別の調査名称・番号を付与する必要が生じたため、調査後に上記の調査名称となったものである。

2．調査は、以下の者が各期間についての主な担当者（現場主任）である。当初の平成８年３月～４月の測量調査と、８月～10月の調査は山崎純男（当時，大規模事業等担当課課長）が、途中の平成８年10月～11月は久住猛雄（当時、大規模事業等担当課係員）が、終了時の平成８年11月～平成９年３月は池崎譲二（当時、大規模事業等担当課主査）がそれぞれ主に担当している。

3．本章に使用した測量図・遺構実測図の作成は、山崎純男、池崎譲二、小林義彦、久住猛雄、松浦一之介（以上は当時，大規模事業等担当課）の他、本田浩二郎（平成８年８月まで発掘調査員、現：埋蔵文化財課）、中園聡（現：鹿児島国際大学）、鐘ヶ江賢二（現：鹿児島国際大学）、八丁由香（現：久山町教育委員会）、谷直子、大歯あずさ（以上は当時，発掘調査員）が行った。

4．本章に使用した遺物実測図の作成は、ガラス小玉は比佐陽一郎（埋蔵文化財センター）が、石器は田上勇一郎（埋蔵文化財課）が行い、銅鏡と土器については久住が行った。

5．本章に使用した遺構写真の撮影は、山崎、池崎、久住、中園が行った。ただし空中写真の撮影は株式会社写測エンジニアリングに業務委託して行ったものである。

6．本章に使用した遺物写真の撮影は、銅鏡と赤色顔料，ガラス小玉の巻頭カラー写真およびＸ線写真については片多雅樹（埋蔵文化財センター保存処理担当嘱託職員）および比佐が行い、銅鏡のモノクロ写真と土器については久住が行った。

7．本章に使用した挿図の製図は成清直子、坂井かおり、高山恵子、久住が行った。

8．本書に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものである。国土座標については調査時に移動してくることができなかった。レベルについては、九州大学移転予定地内に設置された測量基準杭から移動したものである。

9．本調査の報告および本章の編集は、他の調査担当者と協議の上、久住猛雄が行った。ただし調査所見などについて必ずしもすり合わせを行っていない部分があり、本報告の内容についての文責は久住にある。執筆は、銅鏡と赤色顔料，ガラス小玉などについての自然科学分析関係は片多および比佐が行ったが、他については久住が行った。

10．本調査に関わる記録類（図面・写真等）と出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。資料が広く活用されることを望む。

Fig.1　桑原金屎古墳の位置（1/3,000）

Ⅱ．桑原金屎古墳の調査

１．調査の概要

桑原金屎古墳（以下では単に「金屎古墳」とも書く）の調査は、移転事業に伴う当初の確認調査（平成７・８年度）の一環として、墳丘の規模・形態と埋葬施設の構造を確認することを目的とした。現況の地形測量から全長30m前後の前方後円墳の可能性が認められたので（Fig.2）、主軸方向に長くトレンチを設定し、さらにその直交方向に複数のトレンチを設定して調査した。またくびれ部や前方部隅角部などでは調査区を面的に広げて確認している（Fig.3）。さらに丘陵尾根の東側や西側にもトレンチを設定して、関連遺構がないか確認した（Fig.4）。墳頂部では、主体部（埋葬施設）として粘土槨を周囲に構築した割竹形木棺を確認し、これを精査している（Fig.59・67）。

調査の結果、予想通り、前方後円墳であることが判明した。墳丘規模は、全長24.0～24.2m前後、後円部径12.5～12.7m、前方部前面幅約12.4m、くびれ部幅7.0mをそれぞれ測る（Fig.3・5・15）。ただし墳裾は地山整形のみであり（前方部前面は浅い周溝状となるが）、何処を墳端とするかは不明瞭な部分があり（後世の溝などによる改変を受けている）、若干前後する可能性もある。墳丘の高さは、後円部東側裾部から墳頂まで約1.8mを測るが、墳裾は痩せ尾根に築造されているためその標高は同一水平面をなさないのが注意される。墳丘の構築は、大半は地山削り出し整形によるが、後円部は１m前後の高さの盛土を施し、前方部にも薄い盛土が認められる。また後円部と前方部の間は、盛土範囲が突出することから「隆起斜道」（註１）があった可能性が高い。前方部前面は浅い小溝で画される。

この西側には方壇状の平坦面が続き、約８m先に溝状の落ち込み（裾部）が認められた。また前方部前面周溝の南北端は、東側の前方部裾部へ続くだけでなく、西側にも折り返して別の両隅角部をなすことが調査中に判明し、また土層観察から一部盛土が認められたことから、この部分についても南北10.0～10.3m、東西8.0～8.4mの長方形をなす別の古墳と推定した（Fig.35）。これを新たに「**桑原金屎２号墳**」（以下「２号墳」とも書く）と命名した。なお前方後円墳部分については、単に「桑原金屎古墳」とするが、区別する場合には「**桑原金屎１号墳**」（以下「１号墳」とも書く）とする。２号墳については主体部は未確認である。さらに図面整理の過程で、１号墳東側に下る丘陵尾根上にもう一つの古墳がある可能性が考えられた（Fig.3）。調査時には盛土（？）らしき層と、中心に遺構の落ち込みが確認されていたが、時間的な制約から十分な調査ができなかったものである。中心部の遺構落ち込みは主体部墓壙の可能性がある。これを「**桑原金屎３号墳**」と仮称する（以下「３号墳」とも書く）。規模や墳形は不十分な確認であり不明な部分が多いが、東西５m前後、南北８m前後の不整長方形かと推定される（Fig.51）。以上、計３基の古墳が調査により確認（または推定）された。

１号墳の主体部の粘土槨は（Fig.59）、後円部中央の墳丘主軸上におよそ位置する。納められた割竹形木棺の長さは約2.7m、幅は50～58cmを測る（Fig.67）。頭位は西とみられ、被葬者頭部付近両側に、いずれも鏡面を内にして銅鏡２面を副葬していた（Fig.67，巻頭図版3-1）。また主体部墓壙は土層の検討や平面的な精査の結果から**構築墓壙**と判断した。詳細は以下の報告で記述したい。なお主体部の出土遺物は、銅鏡２面（巻頭図版６・７）の他、粘土槨落ち込みから古式土師器の壺の胴部小片１点と、墓壙埋土中からガラス小玉１点を検出している。棺内の赤色顔料として、水銀朱とベンガラが検出された。銅鏡は後述するように類例の少ないもので、１面は「**芝草紋鏡**」、もう１面は「**菱雲紋鏡**」である。その他、Ｌ区地山直上とＪ区から石鏃各１点が出土し、調査範囲外であるが東側の金屎池北岸（Fig.1参照）から金屎古墳の丘陵に登る途中の斜面で古式土師器破片を採集している。

（註1）近藤義郎2000『前方後円墳観察への招待』青木書店

・調査の経過

ここで調査の経過について詳しく触れておきたい。まず先行調査として、平成８年３月下旬から４月10日にかけて現況の地形測量を行った。測量調査開始時には、まだ丘陵の樹木が伐採されておらず、林の中で見通しが悪い状況での開始であった。そのため、この時には物理的条件によりやや不十分な測量しかできず、丘陵頂部地形付近のみを測量し、その地形が前方後円墳の可能性が高いことを明らかにしたことで調査を終えた。これは調査年度当初において、前方後円墳ならば事業地の中で保存予定地区として定めて協議する必要があったため、測量調査による確認を急いだためでもあった。

その後しばらく間をおいて、平成８年８月初めより現況の地形測量を再開した。測量再開からまもなくして調査範囲の樹木の伐採が始まり、８月中旬までには見通しが良い状況となり、８月20日までに周辺を含めた地形測量を終えた。８月20日よりトレンチ・調査区を設定し、調査区の掘削を開始した。

なお金屎古墳の単独の調査としては、記録上この８月20日を調査開始日としている。それ以前の測量調査については、九州大学統合移転事業に伴う予定地全体の踏査や試掘・確認調査を行った元岡・桑原遺跡群第１次調査（調査番号9602）に便宜上含めている。

調査区の掘削・調査は、墳頂部の主体部確認と墳丘その他の各トレンチともに平行して進められ

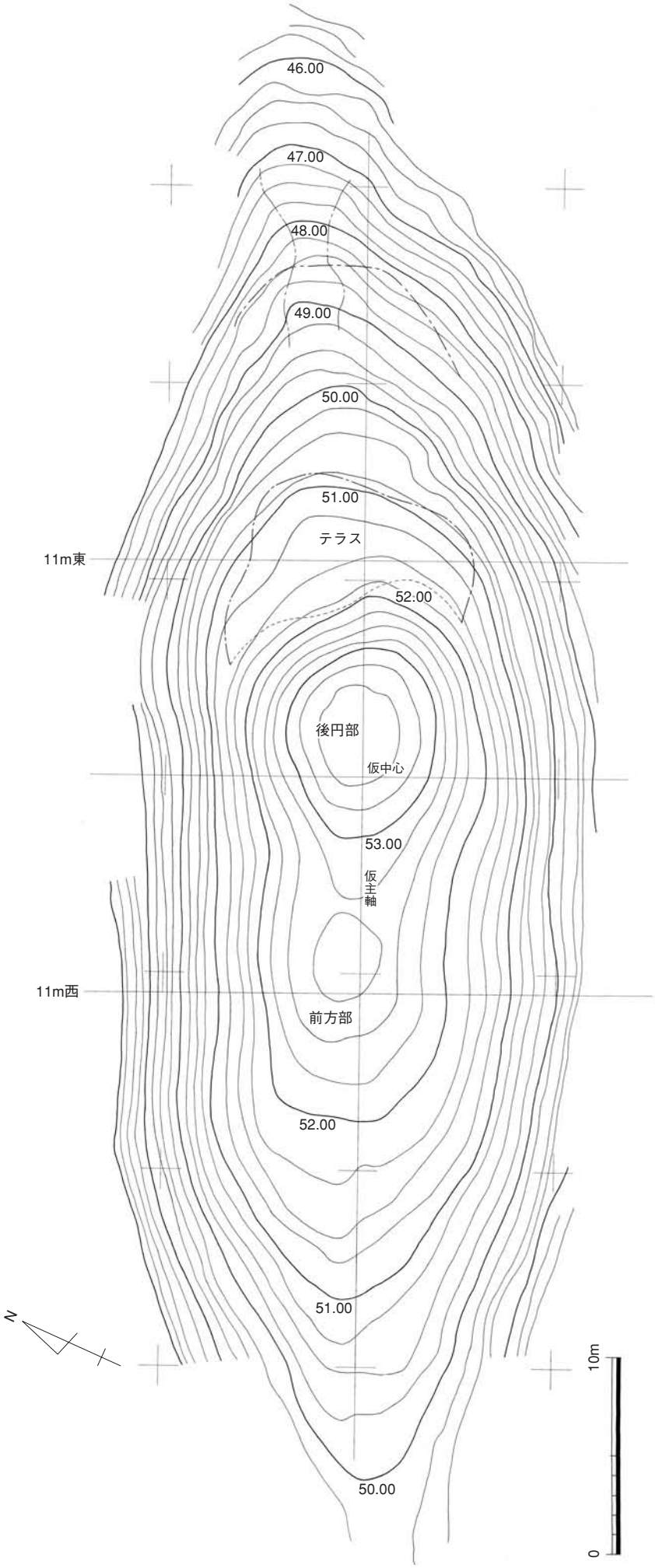


Fig.2　桑原金屎古墳地形測量図（1/300）

た。主体部の調査を急いだのは、保存協議を見越してその内容を早急に明らかにする必要からであった。主体部の調査は、墓壙の確認・掘削、粘土槨の確認・掘削、棺内の精査、出土状況の写真撮影・図面作成、遺物取り上げまでを８月末までに終了している。その後、９月には墳丘および周囲の各トレンチの掘削と墳形の精査を行っているが、墳丘の各トレンチ・調査区については地山まで下げる方針で掘削している。また主体部は棺内の調査の一応の終了後、粘土槨とベルトを残しつつ墓壙全体を底面まで掘削した。この間、墓壙はベルトのみ残してほぼ掘削精査した状態で、９月19日に調査区全体の調査状況を空中撮影している。またこの頃より福岡市土地開発公社、九州大学との保存などを含めた工程協議や事務調整が多くなり、金屎古墳の調査を担当していた山崎（当時、大規模事業等担当課課長）が十分に現場を統括できない状態となり、調査の進行が断続的となり作業が滞ってしまった。こうした理由もあり、９月末までには主体部墓壙を含む各調査区（トレンチ）の掘削はほぼ終了していたが、図面の作成が追いつかず、墳頂部の主体部関係のみの図面ができている状況であった。

10月に入り、本報告の担当者である久住が元岡・桑原遺跡群の調査に合流した。10月上旬は平行して行われていた桑原石ヶ元古墳群の調査（福岡市報告第744集）の全体写真（空撮）の準備を課全体で行っていたが、10月14日より久住が金屎古墳の調査を担当することになった。これまですでにほぼ掘削済みであった各トレンチおよび主体部墓壙の土層の検討と土層図作成および平面図の作成を開始した。平行して各調査区の最終的な精査を行いつつ、部分的に掘削を補足した。また土層の検討がなされたところから各調査区の写真撮影を順次行っていった。しかし、11月11日より久住が元岡・桑原遺跡群第２次調査（福岡市報告第722集）を担当しなければならなくなったため、以後は当時発掘調査員であった中園聡（現、鹿児島国際大学教授）を中心に図面作成と写真撮影を行い、金屎古墳の調査の統括については久住から池崎（当時、大規模事業等担当課主査）に引き継ぎ、残りの調査を進行させることになった。その後、11月28日には墳頂部を再清掃し、タワーを用いて墓壙および周辺の撮影を行った。11月29日までにほとんどの調査区の写真撮影と図面作成を終了し、一応の調査の終了を見た（記録上11月29日付けで調査終了としている）。

しかし、調査終了直後に図面や写真を整理確認する過程で、図面の不足や相互の関係が未調整の部分、写真の未撮影部分が少なからず確認されたことなどにより、平成８年12月途中から平成９年１月中旬まで図面（主にトレンチ土層図およびトレンチ平面図）の作成・修正や写真撮影の補足調査を断続的に行っている。さらに平成９年３月中にも、当初の地形測量図の基準杭の誤差がさらに判明して全体図を修正する必要が生じたことにより、トレンチ平面図の一部修正と測量杭座標の計測・確認を行った。また調査中は、調査区を大きく広げたため土置場に苦慮したなどの理由により廃土のほとんどを丘陵下に廃棄せざるを得なかった。そのため埋め戻しについては苦慮する状況に陥ったが、調査年度中に桑原金屎古墳については現地保存の方向性が示され、少なくとも主体部については早急な保護策を講ずることが求められたため、墳頂部のみは調査年度末の３月下旬に埋め戻しを行っている。

整理作業は、調査年度末までに必要最小限の図面・写真の整理を行っていたが、担当者の異動もあり本格的な整理については長く手がつかないままであった。その後、平成17年度に報告書を刊行することになり、調査関係者の協議により整理報告担当者を久住とし、整理作業と報告書作成を行った。なお平成12年度末に概要報告を出しており（『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概要１』福岡市報告第693集）、今回の整理報告と若干の認識の相違があるが、本報告で訂正されたものとする。

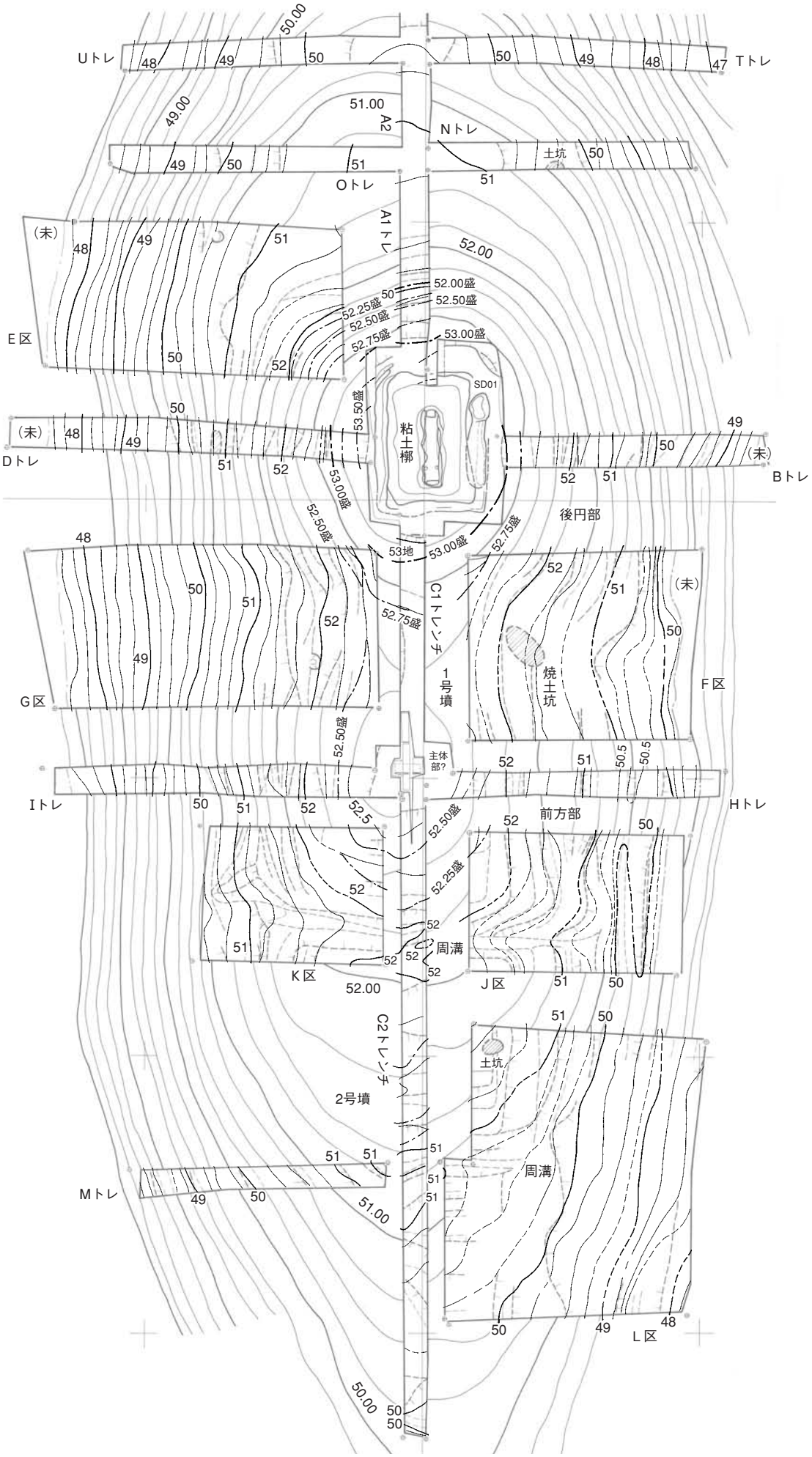


Fig.3　桑原金屏１・２号墳調査区配置図・墳丘遺存図（1/200）

2．調査の記録

1）古墳の立地

桑原金屎古墳は九州大学移転事業地の北東部に位置し、水崎山から西に派生する丘陵が、さらに北側に延びた狭い丘陵の尾根上に立地する（「Ⅰはじめに」Fig.1）。墳頂部の標高は53.77mを測る。なお、北側の丘陵下の平野部との比高差は約35m前後である。金屎古墳の周囲では、北側の丘陵裾では20次・27次調査が、金屎池のある谷を挟んだ南東側では24次調査が行われ、東側約120mの低丘陵上には径30m近い円墳の経塚古墳（古墳時代中期前半～中頃）が立地している（Fig.1）。

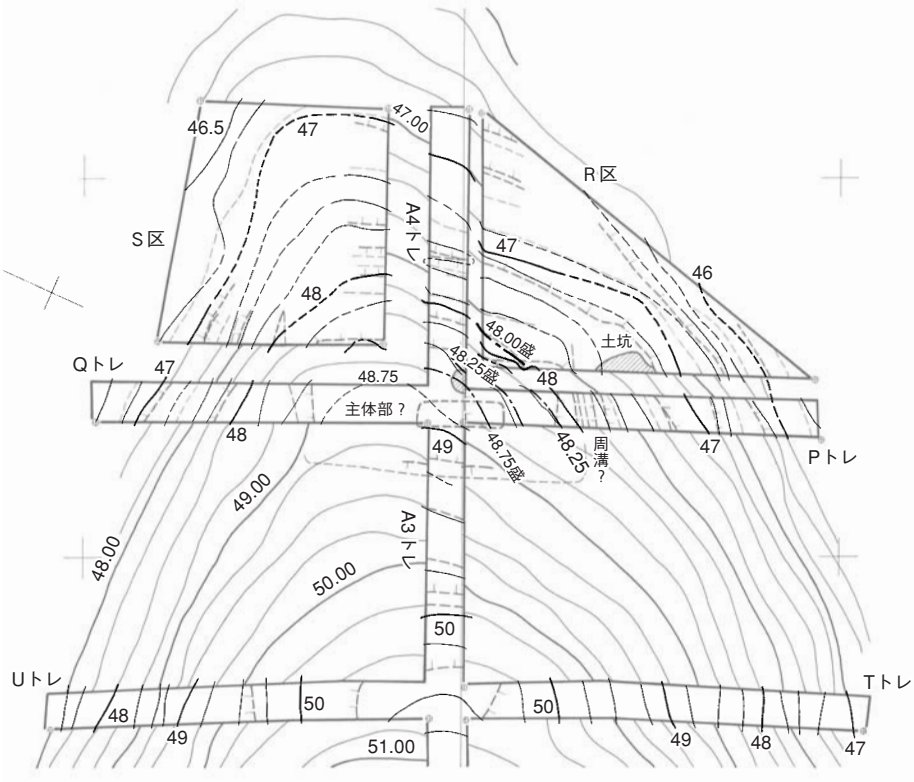


Fig.4　桑原金屎３号墳（？）調査区配置図・墳丘遺存図（1/200）

金屎古墳の立地する丘陵尾根は東西に延び、南北は短くやや急な斜面となる。尾根の中央に前方後円墳があるが、現況測量図では東側の後円部裾は明らかなテラス状地形となり墳裾が看取されたが、前方部と推定された西側は現況地形では墳端がよく分からない状況であった（Fig.2）。

丘陵の地山は第三紀層で、頁岩系岩盤が風化した土（灰白色から淡黄褐色系）の部分や赤褐色粘質土状になる部分があり、岩盤の岩脈が薄層状になっている。ただし本来的な地山と、この上に二次堆積した地山風化流土層や植物の影響で土壌化した層の分離が意外に難しく、また地山自体も場所により特徴が変化するため、地山面の認識が調査当初はあまり分からないまま掘削してしまい、結果として各トレンチの調査においては地山上面より掘りすぎてしまうことが多くなってしまっている。

2）墳丘の調査

主体部の調査と墳丘および周辺の調査は平行して開始・進行したが、まず墳丘の調査について記述する。トレンチは、前方後円墳と考えられた部分のみでなく、丘陵尾根上に広く設定した（Fig.3・4）。

トレンチは、測量時の主軸＝丘陵尾根線上に沿って東西に長いトレンチを設定した（東：Ａトレンチ、西：Ｃトレンチ）。この主軸トレンチから直交する形で、後円部墳端を確認するＢ・Ｄトレンチ、前方部側縁を確認するＨ・Ｉトレンチ、くびれ部を広く確認するＦ・Ｇ調査区（「トレンチ」とするには広いため「区」とする）、前方部隅角を確認するＪ・Ｋ区を設定した。また後円部墳丘範囲をひろく確認するためＥ区を設定した。これら前方後円墳部分の西側では、調査途中でもう一つの古墳（２号墳）がある可能性が考えられたため、これを確認するＬ区・Ｍトレンチを設定した。さらに後円部から東側では、東に長く延ばしたＡトレンチに直交して南側にＮ・Ｔ・Ｐトレンチ、北側にＯ・Ｕ・Ｑトレンチを設定し、Ｑ・Ｐトレンチの東側での丘陵裾が人為的整形の可能性があったためこれ

を確認するＲ・Ｓ区を設定した。主軸東側のＡトレンチは直交するトレンチを境に東からＡ1・Ａ2・Ａ3・Ａ4トレンチとし、Ｃトレンチは前方部頂部を境に東をＣ1トレンチ、西をＣ2トレンチとした。

地形測量および墳丘その他の調査区（トレンチ）の平面図は基本的に平板測量により1/100の図面を作成した。ただし当初の測量段階において、まだ樹木が多く見通しが悪かったためもあるが、基準杭設置やトレンチ位置設定においてやや不正確な部分があり、丘陵尾根外側に向かって誤差が生じてしまった。各トレンチの平面図を作成する段階でこれに気づき、トレンチの位置は途中で計測をやり直し、また測量基準杭を光波測量器により座標を求め、最終的に図面を修正・合成している。地形測量の全体の再計測を行う余裕はなかったが、図面整理の段階で仮中心点から東西に11m（Fig.2参照）より外側の誤差（斜面計測による間延び）は明らかであったので、測量基準点座標の計測およびトレンチ位置により誤差を修正して図面合成をし、さらにトレンチ土層断面をもとに微修正を加えている。

次に各トレンチ（調査区）の平面図についてであるが以下のような問題がある。各調査区の掘削は調査時に地山面まで下げることを基本として進められたようである。しかし結果的に、地山上面の認識が意外に難しかったこともあり、全体として掘りすぎてしまった部分がきわめて多く（これは土層断面の検討から明らかである）、トレンチ平面図（地山面の測量図）は本来的な姿ではない。したがって、これをそのまま使用しても不正確であり無意味であるので、整理過程においてこれを大幅に修正・復元したことを明らかにしておきたい（この点、土層をよく精査しながら慎重にトレンチを掘削・拡張すべきであった）。すなわち、①掘削面をそのまま測量した原平面（測量）図、②調査中に問題に気づき、調査年度中に土層図と現地観察により部分的に修正した平面図、③整理段階において、全体の調整を見ながら全面的に修正・復元した平面図、の三種があり、③を報告している（Fig.3・4）。基本的に土層図（トレンチ両面の図を作成しているものもあり、両面の図はなくても現地で土層を検討して②の図を作成している）により修正・復元しているが、１m幅のトレンチは比較的問題が少ないものの、Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｊ・Ｋ・Ｌ区等については掘削範囲が広いので各面の土層図の地山面や盛土面レベルを基本点としつつ、①の図の等高線や変換線のカーブを参照してこれが本来の地形を一応は平均的に反映していると仮定して最終的に③の図を復元的に作成している（特に土層から掘りすぎが大きいことが判明したＦ・Ｊ・Ｋ・Ｌ区は大幅に修正している）。以上については、各図（原図および③の報告用修正・復元図も含む）ともに収蔵・公開する予定であり、どこをどう修正したか検証できると思われるので、③の修正・復元図を図示し、これをもとに検討・報告することについてご理解を頂きたい。以上の平面図についての問題に加えて、諸般の事情により調査の全期間を通した主任担当者を置くことができず、調査方針や調査内容について一貫した認識を持つことができなかったこと、調査区が多くなったことに比例して必要な図面の数が多くなり各図面の十分な相互調整をする余裕がなかったことなどから、整理過程においては各土層図間の調整を含むこうした図面の「辻褄合わせ」にもっとも苦労したというのが正直なところである。

以下の各トレンチの報告においては、上述のように土層図が重要となる。土層については、一部を除きその検討は久住が行ったが、注記については図面作成のほぼ全期間に関わった発掘調査員が調査を通して行った。そのため、土層の微妙な認識において見解の若干の相違があり、これらは整理報告時に報告者の記憶と主観、および写真による検討により修正し、記述を統一して報告している。

（１）１号墳後円部墳丘の調査（Fig.5）

・**A1トレンチ**（Fig.6－土層注記はＰ.26およびFig.62参照，PL.10－1・7・8，PL.11－1～3）

前方後円墳と考えられた１号墳後円部東側に、調査時の仮主軸上に設定した幅95～105cmのトレンチ。墳裾（墳端）は不明瞭で何処にするか迷ったが、他との関係から土層東ポイント（以下「東Ｐ」

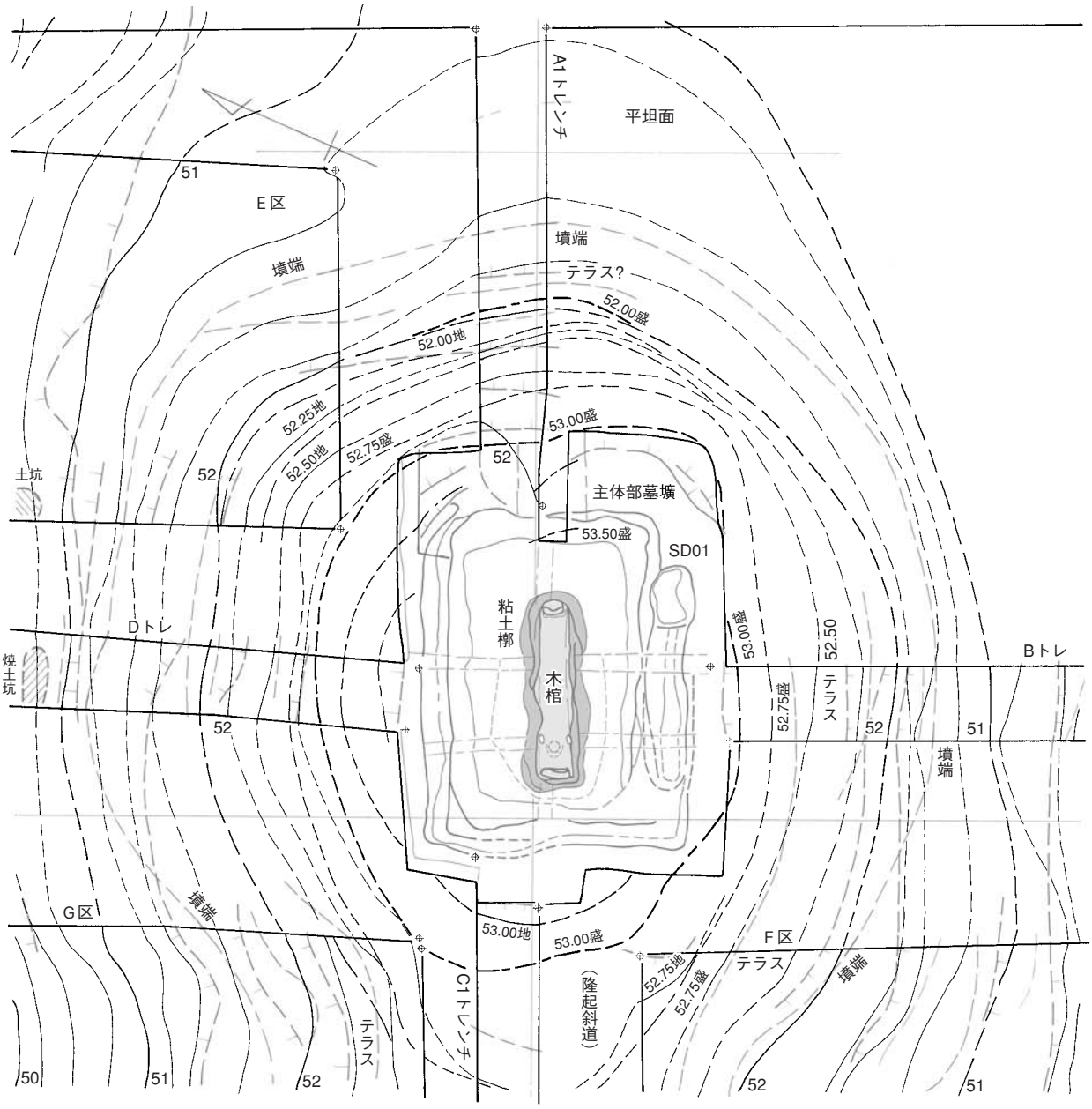


Fig.5　1号墳後円部調査区墳丘遺存・地山整形図（1/100）※調査区外は推定

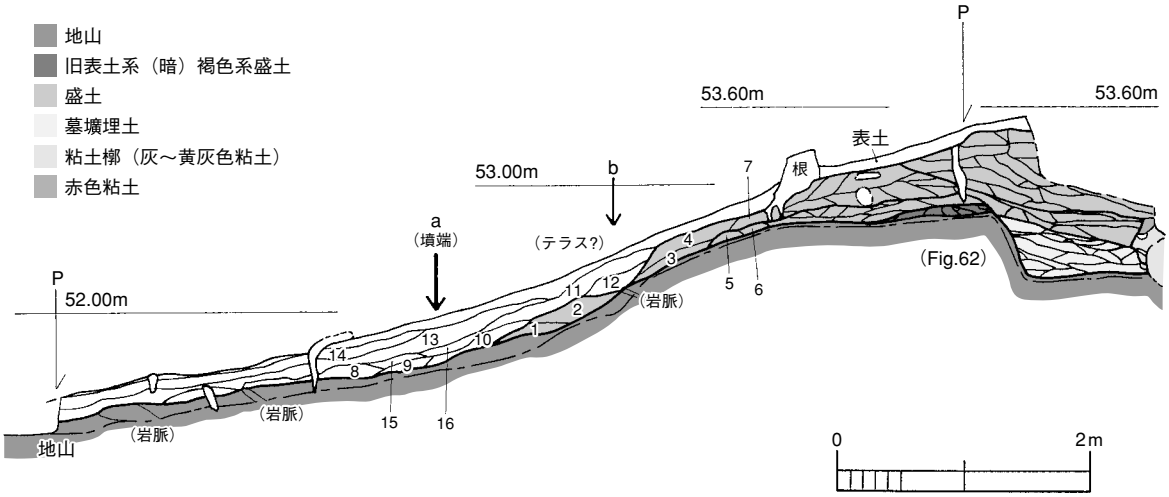


Fig.6　A1トレンチ南側土層（1/60）※注記は次頁

Fig.6土層注記（A1トレンチ南側土層）

1　明褐色土(7.5YR)(２層よりやや明るい)、５ミリ以下レキ含む
2　１層とほぼ同じ(やや暗い)
3　褐色土(7.5YR)、砂礫３ミリ以下含む、炭微量
4　(暗)灰黄褐色土(10YR)(やや粘性)＋黄褐色土(10YR)混じり、暗灰黄褐色土部分に炭含む、旧表土由来
5　明褐色土(7.5YR)(やや粘性)、６層より明るい、砂礫３ミリ以下微量
6　明褐色土(やや粘性)、Fig.62－74層より明るい、砂礫３ミリ以下含む、炭少量
7　にぶい褐色～明褐色土(7.5YR)、レキ５ミリ以下含む、炭少量
8　褐色土(10YR)、レキ５ミリ以下含む、レキ20ミリ以下若干含む、９層よりややしまる
9　褐色土(10YR)、レキ５ミリ以下含む、しまりやや甘い
10　褐色土(10YR)(９層よりやや明るい)レキ５ミリ以下含む、レキ10ミリ以下微量含む
11　明褐色土(7.5YR)、レキ５ミリ以下含む、炭微量、しまりやや甘い
12　褐色土(7.5YR)(やや暗い)、レキ５ミリ以下含む、やや濁る層
13　黄褐色土(10YR)、レキ５ミリ以下含む
14　黄褐色土(10YR)、レキ５ミリ以下含む、植物の影響でやや土壌化
15　褐色土(10YR)、レキ５ミリ以下含む
16　にぶい黄褐色土(10YR)、レキ５ミリ以下含む、レキ10ミリ以下若干含む、しまりやや甘い

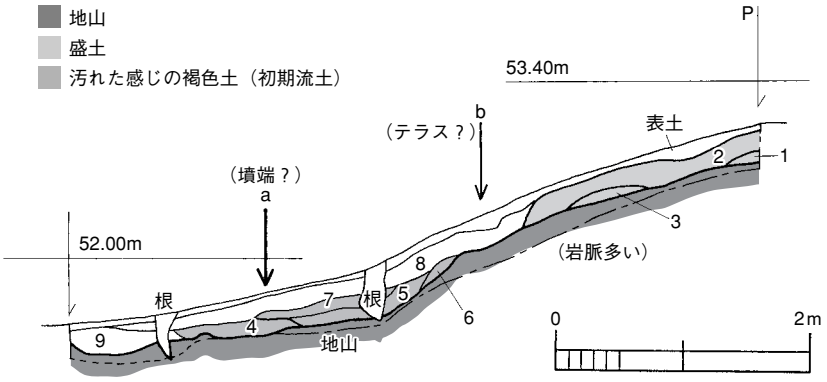


Fig.7　Ｅトレンチ南側土層（1/60）

（Ｅトレンチ南側土層注記）

1　黄褐色土＋明褐色土(シルト質)混じる
2　黄褐色土(盛土？、土壌化やや進む)、レキ10ミリ以下含む
3　黄褐色土～褐色土(10YR)、レキ10ミリ以下含む
4　にぶい黄褐色～黄褐色土(10YR)、レキ5ミリ以下含む
5　褐色土(10YR)、レキ５ミリ以下含む、ややしまりあり、やや濁る
6　黄褐色～褐色土(10YR)、レキ５ミリ以下含む、レキ10ミリ以下少量、やや濁る
7　褐色土(10YR)、５層よりやや暗く濁る、レキ10ミリ以下含む、炭微量
8　黄褐色～褐色土(10YR)、やや赤い感じ(～7.5YR)、レキ10ミリ以下含む、15ミリ前後レキ少量含む、やや土壌化
9　黄褐色～褐色土(10YR)、レキ10ミリ以下含む

とする）から4.15mの a の部分と判断した（標高51.43m）。地山整形で裾状とするが、明確な周溝は無い。なおここからA2トレンチの西端付近（Fig.3）まで平坦面があり（後円部東側の現地表標高50.50～50.75mまでの範囲を外側とする）、おそらくは旧地形の尾根を削って盛土を採取した範囲と推定できよう。盛土は、推定墳端 a から西に0.8mからと、a から西に2.6m以西に観察される。この間の12層はやや暗く土壌化した土層で、これは流土であり、この堆積部分は段築テラスの痕跡（ｂ：標高52.17m）と推測する。この部分のテラスは盛土で整形されている。ただし本来のテラスの推定位置よりは盛土が流失しえぐられたようになっている。トレンチ西側では盛土下に旧表土状の層があるが、一度整地され二次的に盛土として使用されているようである。またトレンチ西側では墓壙壁が見いだされず盛土と墓壙埋土上半が連続している（Fig.62）。主体部の説明のところでも記述するが、墓壙（上半）の壁となる盛土は他の範囲では墓壙（下半）の地山を掘った岩盤起源のレキが多く入る

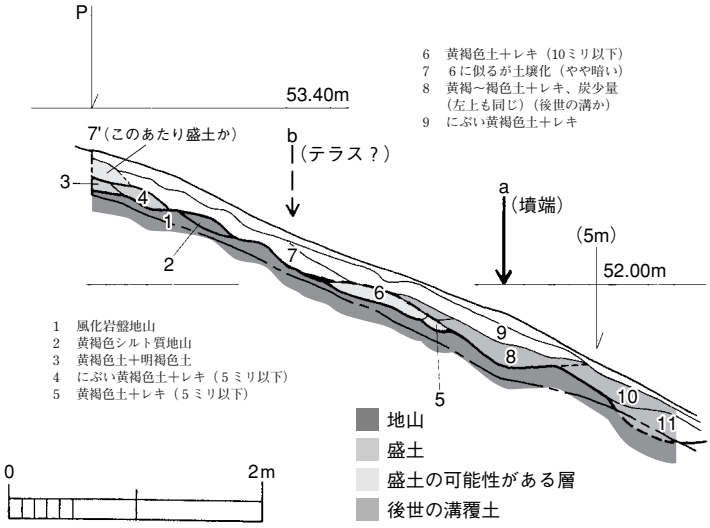


Fig.8　Ｅトレンチ西側土層（１）（1/60）

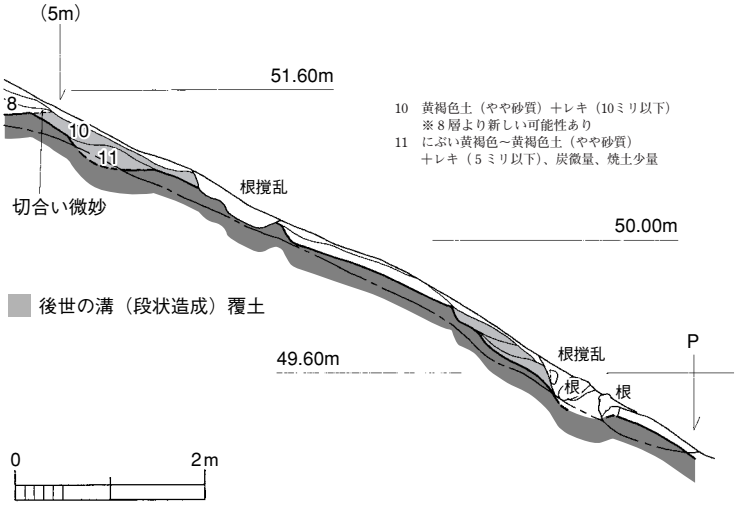


Fig.9　Ｅトレンチ西側土層（２）（1/80）

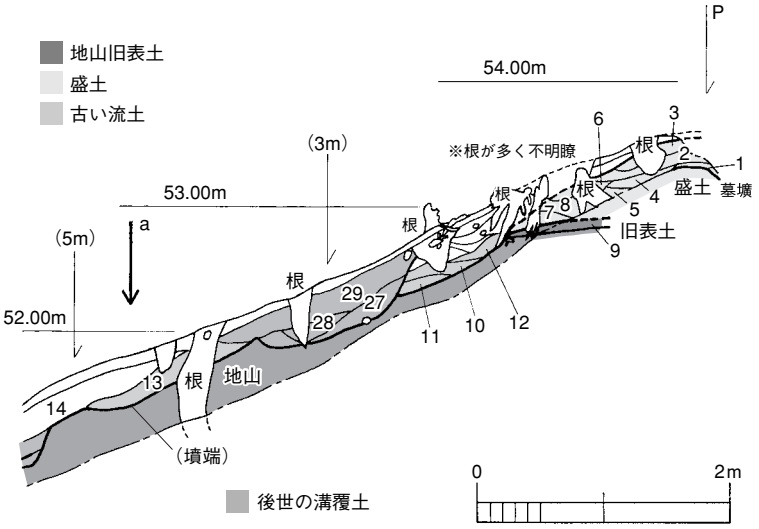
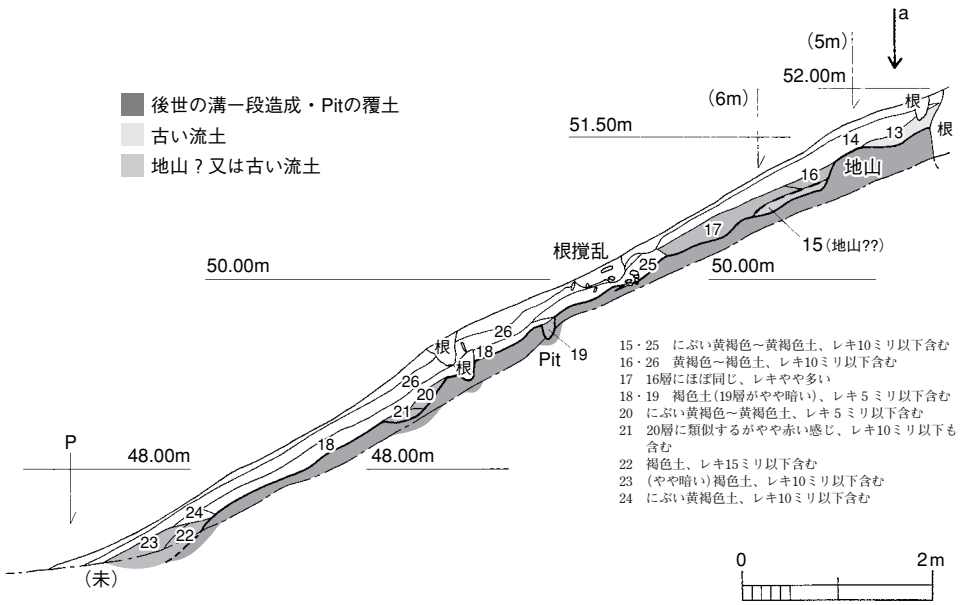


Fig.10　土層注記
1～8　盛土
1　にぶい黄褐色～黄褐色土、レキ10ミリ以下含む、30ミリ以下レキ少量
2・3　黄褐色土(3層がやや明るい)、レキ10ミリ以下(やや多く)含む
4　黄褐色土、レキ15ミリ以下含む
5・7　にぶい黄褐色～黄褐色土、レキ15ミリ以下含む
6　黄褐色～褐色土、レキ10ミリ以下やや多く含む
8　黄褐色～褐色土、レキ20ミリ以下かなり多い
9　旧表土、にぶい(暗)黄褐色土(有機質土)＋黄褐色土が斑状に混じる、レキ5ミリ以下含む、炭・焼土粒少量含む
10・13　黄褐色土、レキ10ミリ以下含む
11　黄褐色土、レキ10ミリ以下やや多く含む
12　ややにぶい黄褐色土、レキ10ミリ以下含む
14　黄褐色～褐色土、レキ10ミリ以下含む、15ミリ以下レキ少量、炭微量
27　黄褐色～褐色土、レキ5ミリ以下含む、レキ20ミリ以下微量
28　にぶい(明)黄褐色土、レキ10ミリ以下やや多く含む、炭少量
29　ややにぶい黄褐色土、レキ5ミリ以下やや多く含む、レキ10ミリ以下若干含む

Fig.10　Dトレンチ東側土層（1）(1/60)



15・25　にぶい黄褐色～黄褐色土、レキ10ミリ以下含む
16・26　黄褐色～褐色土、レキ10ミリ以下含む
17　16層にほぼ同じ、レキやや多い
18・19　褐色土(19層がやや暗い)、レキ5ミリ以下含む
20　にぶい黄褐色～黄褐色土、レキ5ミリ以下含む
21　20層に類似するがやや赤い感じ、レキ10ミリ以下も含む
22　褐色土、レキ15ミリ以下含む
23　(やや暗い)褐色土、レキ10ミリ以下含む
24　にぶい黄褐色土、レキ10ミリ以下含む

Fig.11　Dトレンチ東側土層（2）(1/80)

が、Aトレンチではこれが無く、この方向での盛土過程（墓壙壁形成過程）が異なることを示す。なおAトレンチは土層観察からあまり掘りすぎていないので、平面図の修正は一部に留めた。

・**E区**（Fig.7～9，PL.15－3・4）

後円部北東側を広く確認するための、およそ南北11m×東西5.3mの調査区。土層観察から全体的にやや掘り過ぎていることが分かるが、Fig.3・5のうち墳丘に関係しない調査区中央から北側の平面図は修正していない（他は修正している）。墳端はおよそ問題なく検出できたと考える（Fig.5）。**南側土層**（Fig.7）では墳端がやや不明瞭であったが、他との関係からa（西側Pから3.9m）の標高51.40m前後の地山の凹みと考える。調査時は5層下部付近としたが修正したい。上部には盛土土層が検出できる（1～3層）。西側Pから1.85mまでが盛土だが、この東側は段築テラスの名残であろう（本来はbの箇所まで盛土がありこの東側がテラスか）。**西側土層**（Fig.8・9）では、墳端はa（Fig.8）の部分がその名残と考えるが、他とはやや合わない位置のため（Fig.5）、やや流失していると考えられ（または8層が10層との関係から後世の溝か）、本来はわずかに北側であろう。盛土は墳丘下部にもみられ（5・6層は堆積関係からは盛土か）、この上部の地形変換部分b（7層下）はテラスの痕跡だろう（標高52.10m）。墳丘上部も盛土がみられるが（3・4・7'層）、7'層は南側土層との関係から図面に矛盾が生じるため推測修正したものである。その他、西側斜面の壁中央付近で土坑が検出され、調査区北側の斜面下方でも後世の溝や段造成が検出されている。なお、墳丘部分に関わらない調査区東側の土層図の提示は今回省略している。

・**Dトレンチ**（Fig.10～12，PL.14－5～8，PL.15－1・2）

墳頂部から主軸に直交して北側に延ばした幅110～120cm、13m長のトレンチ。**東側土層**（Fig.10・11）は、特に上半部で木の根の攪乱が多く不明な部分が多い（Fig.10）。墳端は南側Ｐから4.55mのａの部分（13層下）がその名残とみられるが（標高.51.43m）、反対側の西側土層（Fig.11）のａの部分に比べて内側に入っており（Fig.5）、やや流失して築造時よりも内側になってしまったものと考えられる（西側土層のａは本来の墳端を留める）。また東側土層では中位に後世の溝または土坑が入り込み（27～29層）、墳丘下段テラスは不明である。トレンチ上部には旧表土層が認められ（北端上面は標高52.77m）、この上に盛土が確認できる（南側Ｐから1.6mより南）。ただし墳丘は早い段階で流失し、本来はこれより若干北側まで盛土があったと考えられる。墳端より下部では（Fig.11およびFig.12右半・左下）、後世の段造成や溝がいくつか検出できる。**西側土層**（Fig.12）は東側よりも残りが良い。墳端は南側Ｐから4.82mのａの部分であろう（標高51.32m）。この1.56m南側のｂ（南側Ｐから3.26m北）から北側の平坦面は墳丘下段テラスであろう（ｂ：標高51.94m）。さらに墳丘上部の盛土は南側Ｐから1.54m（ｃ：標高52.83m）より南の旧表土層上にあるが、これは本来的な範囲に近く、またこの外側にも段築テラスがあったと考えられる。したがって推定**三段築成**となる。なお土層図にみるようにＤトレンチは全体的に掘りすぎがあり、両側土層により平面図を修正している。

・**Bトレンチ**（Fig.13～14，PL.12－3～6）

墳頂部から主軸に直交して南側に延ばした幅110～120cm、9.5m長のトレンチ。**西側土層**（Fig.13）では、一案は北側Ｐから3.37mのａ２付近が墳端の推定位置であるが（標高51.13m）、反対側（東側土層）での対応点に比べ低く、また外側になってしまうので、北側Ｐから3.02m付近の傾斜変換点（９層下）のａ１を墳端とするべきだろう（標高51.30m）。東側土層よりやや低く、いずれにしても墳裾はやや流失している。北側Ｐから1.98mには傾斜変換点があり（ｂ：標高52.20m）、これは墳丘下段テラスの内端の名残であろう。これは反対側土層もほぼ同じである。さらに北側Ｐから1.0mの部分

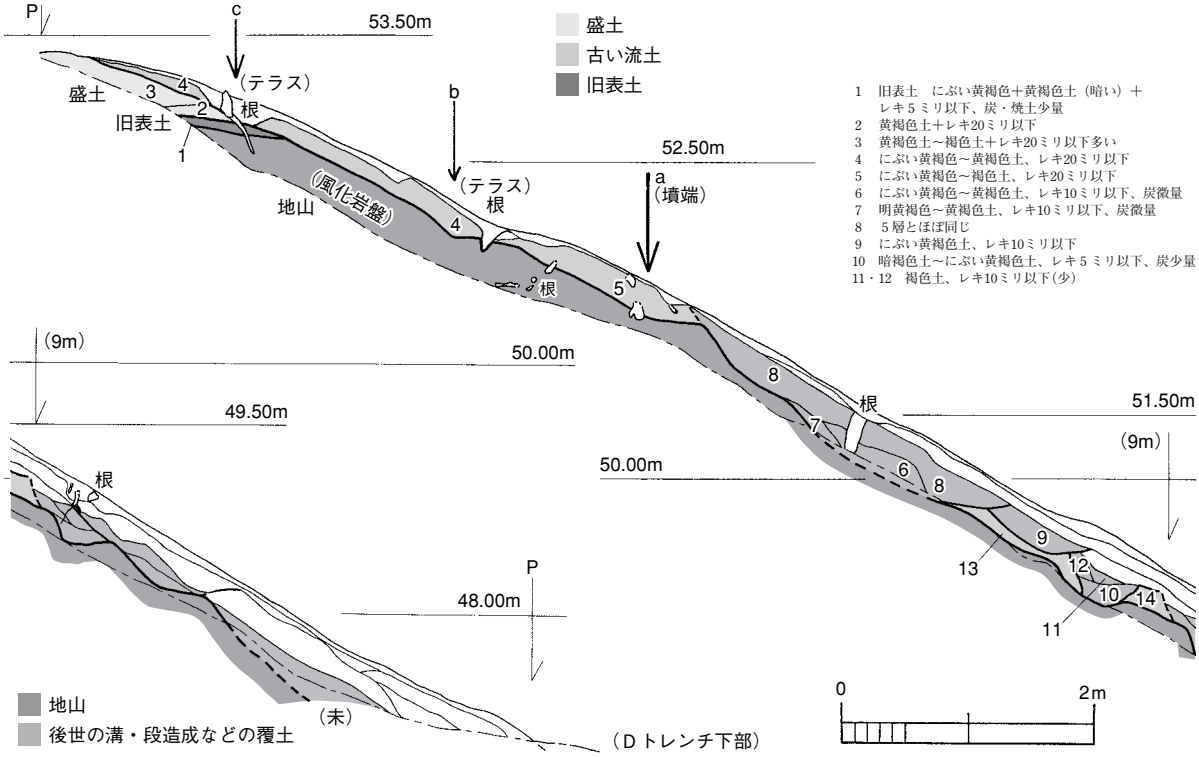


Fig.12　Ｄトレンチ西側土層（1/60）

で傾斜変換点がある（ｃ）。この場合、７層を盛土とみるか否かでレベルが変わるが、６層との堆積関係からは６・７層が盛土である可能性が高く、７層上のｃが上段テラス内端となり標高52.68mとなる（７層下を墳丘遺存面と見た場合は標高52.52m）。いずれにしてもＤトレンチ西側土層と同様に**三段築成**の可能性が示される。一方、**東側土層**（Fig.14）では、北側Ｐから3.33mのａの箇所の地山傾

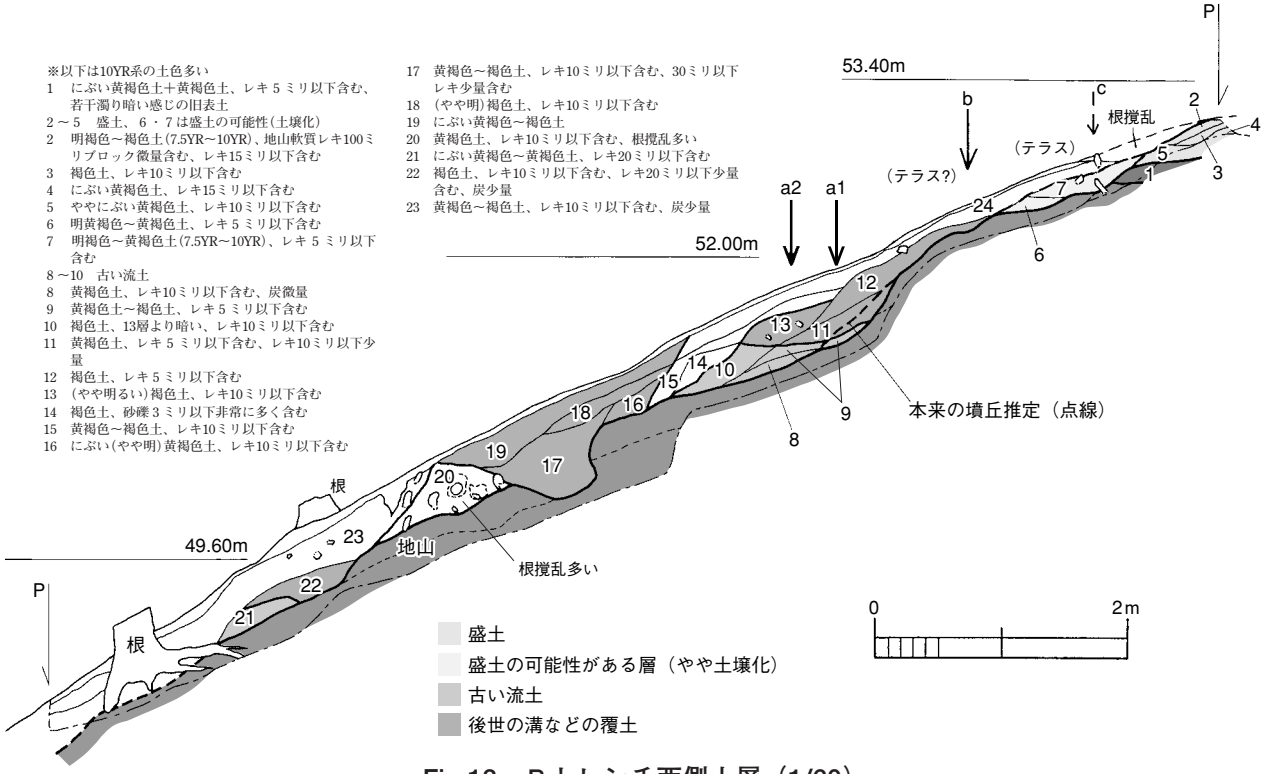


Fig.13　Ｂトレンチ西側土層（1/60）

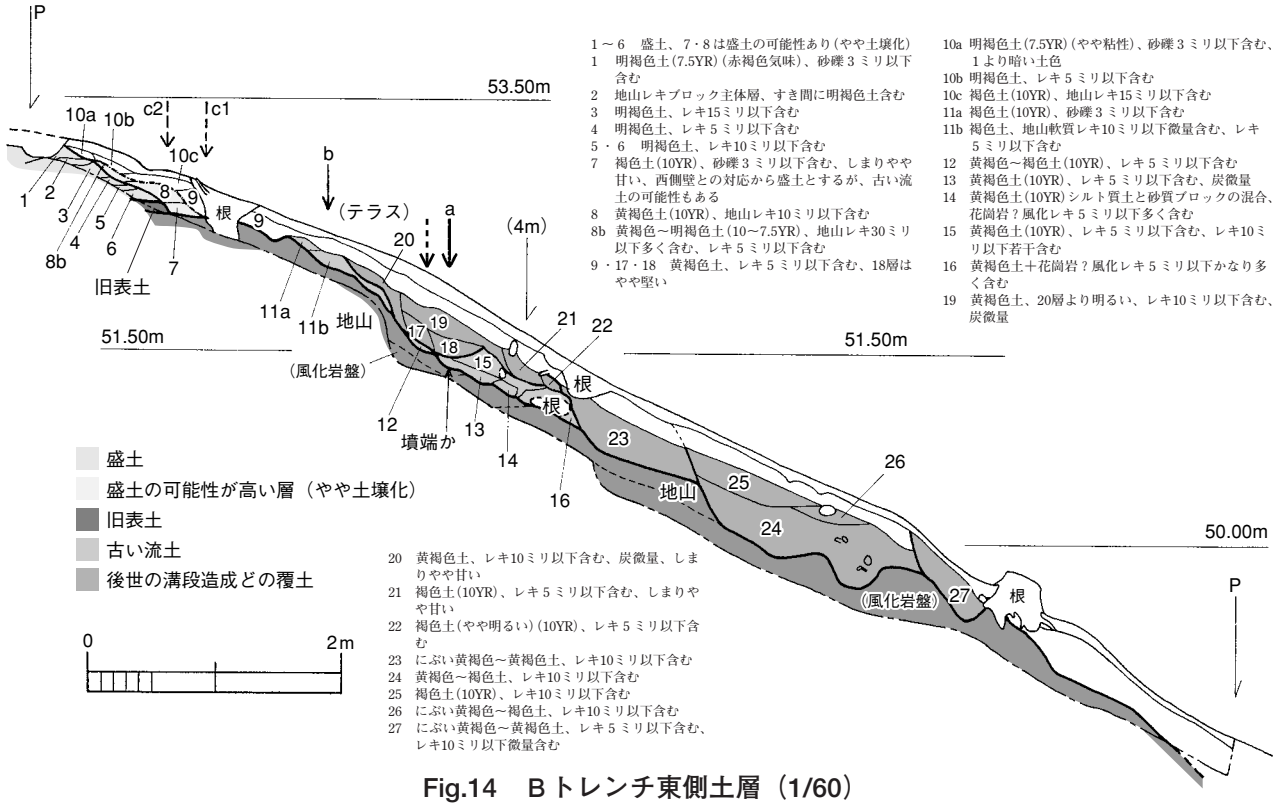


Fig.14　Ｂトレンチ東側土層（1/60）

斜変換点（13層北側下）が墳裾になる可能性が高い。この標高は51.38mで西側土層よりよりも残りが良い。北側Ｐから2.37mに地山の傾斜変換箇所があり（11ｂ層下）、これは下段テラス内端であろう（標高52.18m）。さらに北側Ｐから1.09mのｃ２か、または最も外側で北側Ｐから1.4mのｃ１が上段テラスの内端で（Fig.5ではこの中間とする）、ここでは盛土の端に一致する。Fig.14の１～６層が確実な盛土だが、７・８層もその可能性が強く（または７層はあるいは旧表土層の続きが土壌化したものか）、その場合はテラス面が標高52.67mとなり、西側土層の６・７層が盛土であった場合とほぼ同じである。７・８層が盛土ではない場合はｃ１の７層下がテラス面となるが（標高52.55m）、おそらく前者の可能性の方が高い。なお調査時には、東側土層の17～20層および西側土層の11～13層を周溝と見てこれの下端を墳端とも考えたが、検討の結果これらは後世の溝と考えられ（これらは古い流土層を切っている）、上記のような墳端の認識とする。またトレンチ中位～下位にかけて、後世の大きな溝の存在が断面で確認できる（Fig.13－16～19層、Fig.14－23～25層）ほか、他にもいくつかの溝や段

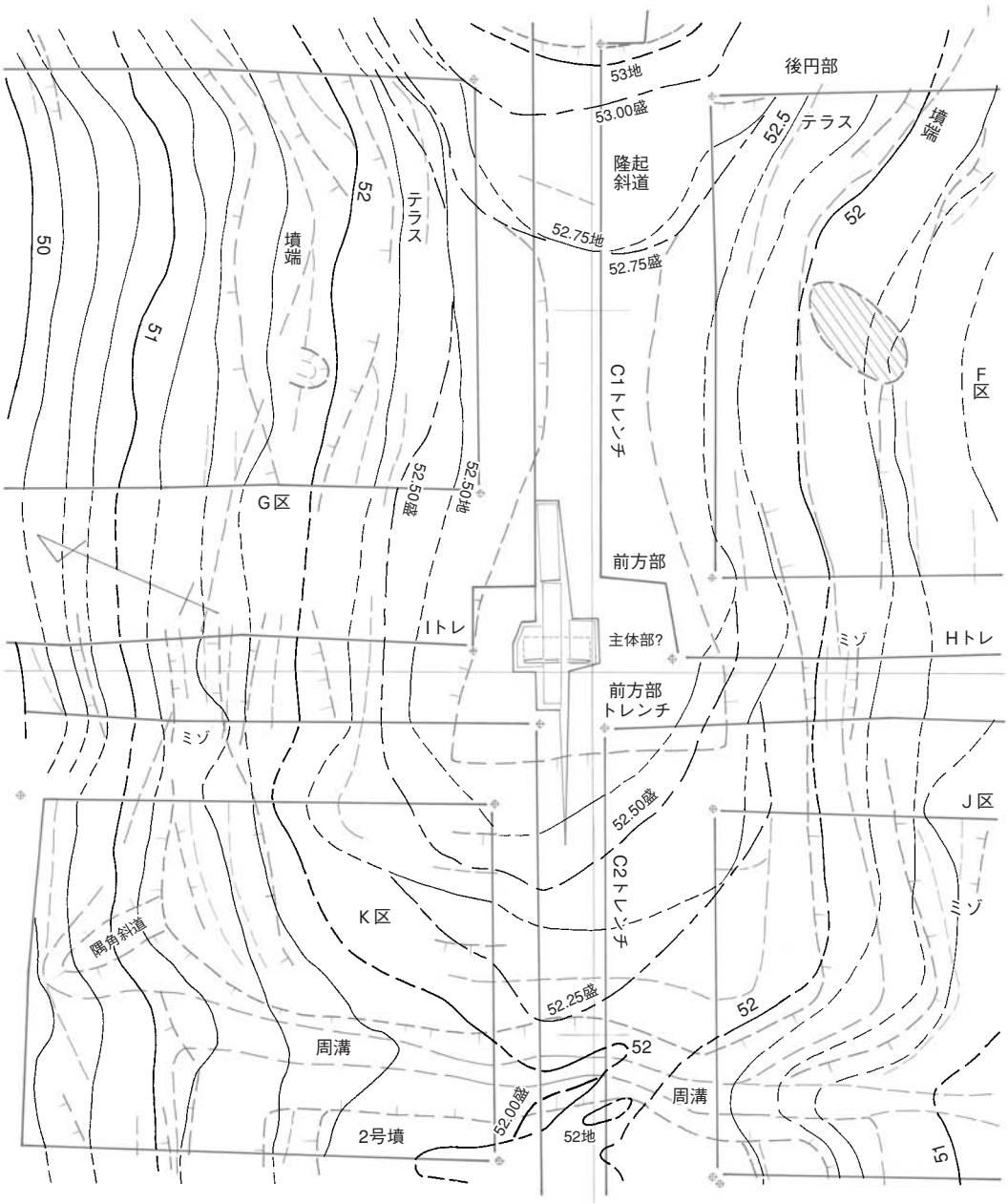


Fig.15　１号墳前方部調査区墳丘遺存・地山整形図（1/100）※調査区外は推定

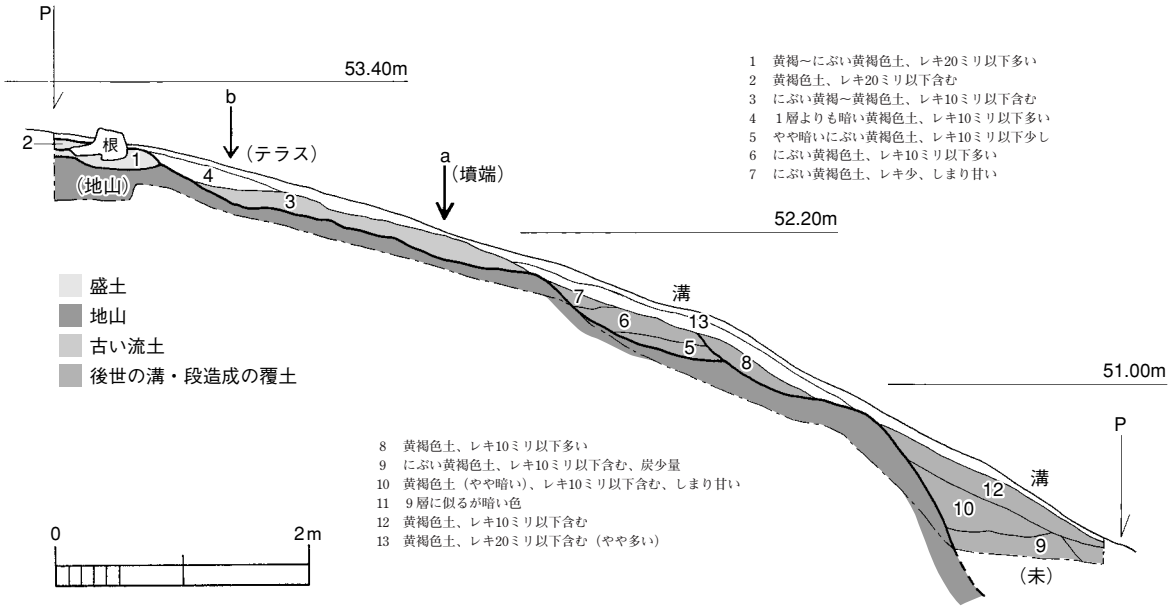
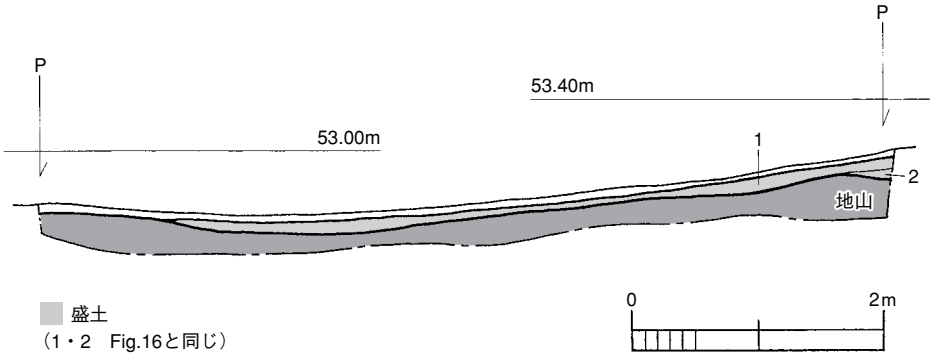


Fig.16　Ｆトレンチ東側土層（1/60）

Fig.17　Ｆトレンチ北側土層（1/60）



造成の存在が分かる。なお本トレンチも全体に（特に中位以下が顕著）掘りすぎているが、両側土層により平面図を修正している。

（２）１号墳くびれ部から前方部墳丘の調査（Fig.15）

・**Ｆ区**（Fig.16・17・21，PL.15－5・6，PL.16－1～3）

Ｆ区は南側のくびれ部から前方部側縁を確認するために広く設定した6.7m×8.0mの調査区（トレンチ）である（Fig.15）。掘削後の土層確認で全体的に掘りすぎがあり（特に調査区北側である上方－Fig.17参照－と下半が顕著）、平面図は復元的に（全体の）修正を行っている。ただし中位の墳端（墳裾）前後の掘りすぎはあまり顕著ではなく、調査で平面的に検出したくびれ部墳端の位置もおよそ問題ないと考える。調査区上方の**北側土層**（Fig.17）をみると地山の上に薄く盛土が遺存するのが分かり、前方部頂部側（西側）で盛土が無くなる。後円部側の**東側土層**（Fig.16）では、北側Ｐから3.08mの部分で地山の傾斜変換点があり（断面ではやや曖昧だが平面的におさえられた）、墳端とみられる（ａ：標高51.80m）。またこれよりやや上がった北側Ｐから1.40mの部分も地山の傾斜変換点があり（ｂ：52.45m）、下段テラスの内端であろう。上部には盛土が確認できる（１・２層）。平面的には墳裾ラインはおよそ52.00m標高のラインの内外に沿うように地山整形されている（くびれ部付近が52.10m前後で、後円部側・前方部側ともにやや低くなっていく）。くびれ部のカーブは地山整形のみであり検出がやや不正確な可能性もあるが、後円部から前方部への移行はあまり鋭角的ではないとみられる。前方部側縁は尾根筋主軸と一度平行してから外側へ開くゆるいバチ形状を呈する。**西側土層**（Fig.21）では、北側Ｐから1.59mのａの部分（標高51.90m前後）で傾斜変換箇所があり（土層断面部

分では残りが悪いが平面的に捉えられた)、墳端であろう。また土層断面では不明確であるが、平面的な検出から（Fig.15)、北側Ｐから0.65m前後に傾斜変換箇所があり、テラスの内端とみられる。

なお、くびれ部の南西側にやや大きな焼土坑らしき落ち込みを確認しているが未調査である。また尾根斜面下方にいくつもの溝が巡るが（Fig.16－５～８層・９～12層，Fig.21－１～５層・６～８層・11-12層)、これらのいくつかは山城（水崎山城）の出城に関連する施設の可能性もあり、検出した焼土坑はそれに伴う狼煙施設などかもしれない。他のトレンチでも同様な遺構をいくつか検出している。

・**Ｇ区**（Fig.18～20・24，PL.16－4・5，PL.17－1～3）

Ｇ区は北側くびれ部から前方部側縁を確認するために広く設定した5.7m×11.7～12.6mの調査区（トレンチ）である（Fig.15)。掘削後の土層確認で全体的に掘りすぎがあり（特に調査南側Fig.20の上方と下半が顕著)、平面図は復元的に修正を行っている（ただし墳丘に無関係の調査区北半はほぼ原図のままである)。しかし中位の墳端（墳裾）前後の掘りすぎはあまり顕著ではなく、Ｆ区と同様に調査で検出したくびれ部墳端の位置もおよそ問題ないだろうと考える。

南側土層（Fig.20）では、地山の風化岩盤上に盛土があることを確認した。Ｆ区側では流失してい

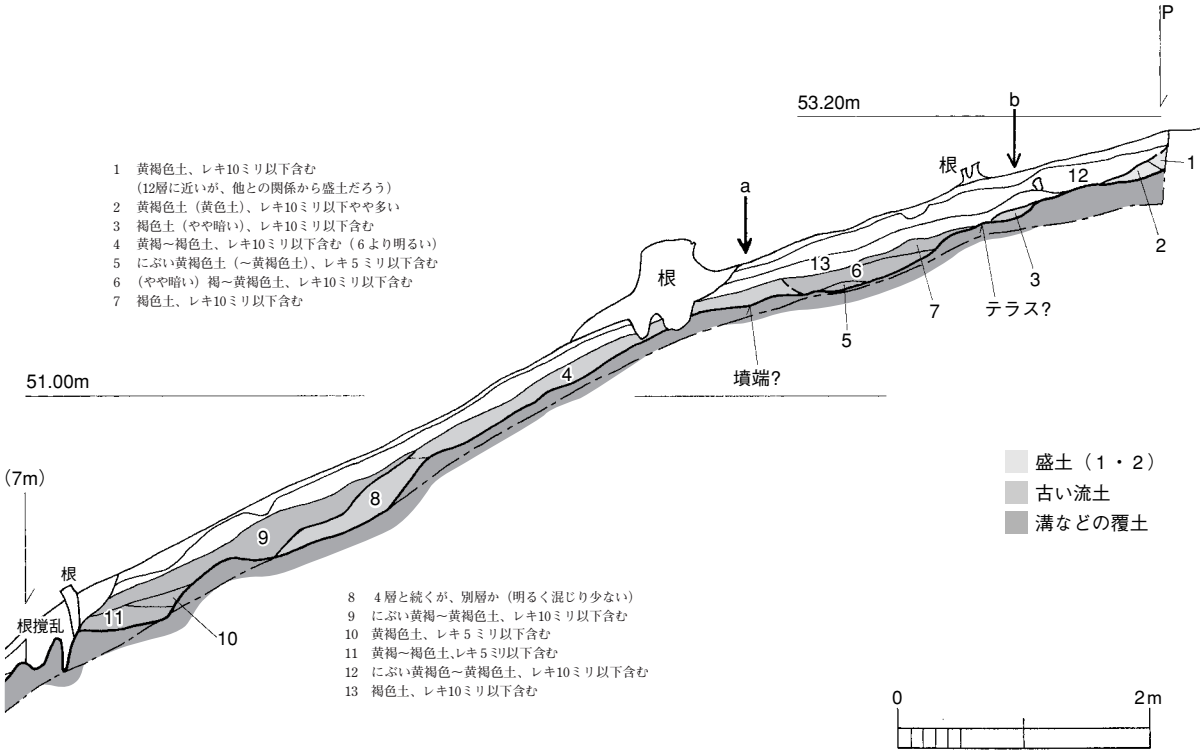


Fig.18　Ｇトレンチ東側土層（１）(1/60)

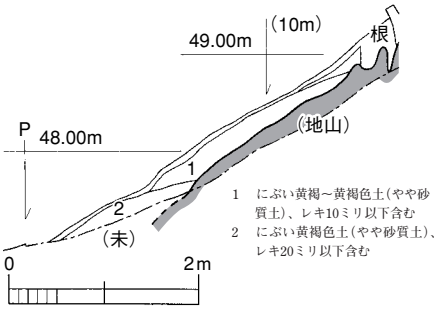


Fig.19　Ｇトレンチ東側土層（２）(1/80)

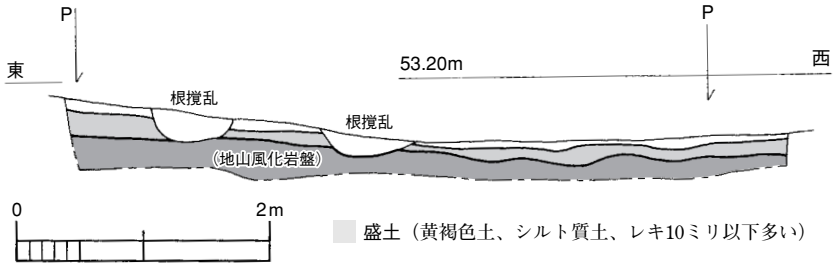


Fig.20　Ｇトレンチ南側土層（1/60）

る部分もあったが、前方部の上半は盛土整形されていると判断できよう。**東側土層**（Fig.18）では、南側Ｐから3.26mの a の部分で地山の傾斜変換点があり、やや不明瞭だが墳端とみられる（標高51.71m）。当初はFig.18－５層の下部付近の傾斜変換点（51.84m）を墳端の候補としていたが、これだと他との関係から平面的にやや内側に入りすぎるので、これは後世の墳裾に沿った溝による改変と判断する。次に南側Ｐから1.16mにも傾斜変換点があり（３層の下）、これは上段テラスの内端とみられる（標高52.42m）。下段テラスについては、墳丘裾部付近を改変した後世の溝により（５～７層）、痕跡も不明となっている。**西側土層**（Fig.24）では、断面では不明瞭だが（平面的におさえられた）、南側Ｐから3.40mの a の部分に傾斜変換点があり（標高51.70m）、これが墳端とみられる。この上部では南側Ｐから2.74mまで盛土が確認される（１・２層）。また地表直下でありやや不安も残るが、盛土上面（墳丘遺存面）の微妙な傾斜変換がある c の部分（南側Ｐから1.20m）は他の箇所との関係から段築テラス内端の痕跡の可能性がある（標高52.40m）。南側Ｐから0.32mの b の部分にも墳丘遺存面の傾斜変換箇所があり、これもテラスの痕跡とも考えたが、他の調査箇所との関係が合わず後世の改変であろう。いずれにしてもＧ区の調査所見からは前方部の段築は２段存在すると言えよう。

墳裾ラインの平面的な検出は、途中やや不明瞭な部分もあったが、くびれ部墳裾はおよそ51.85m前後で、墳端レベルは後円部側・前方部側ともにやや低くなっていく。くびれ部のカーブは地山整形のみであり検出がやや不正確な可能性もあるが、後円部から前方部への移行があまり鋭角的ではないとみられる（Ｆ区よりさらに曖昧か）。前方部側縁はＦ区よりも単純に外へ直線的に開く感じである。

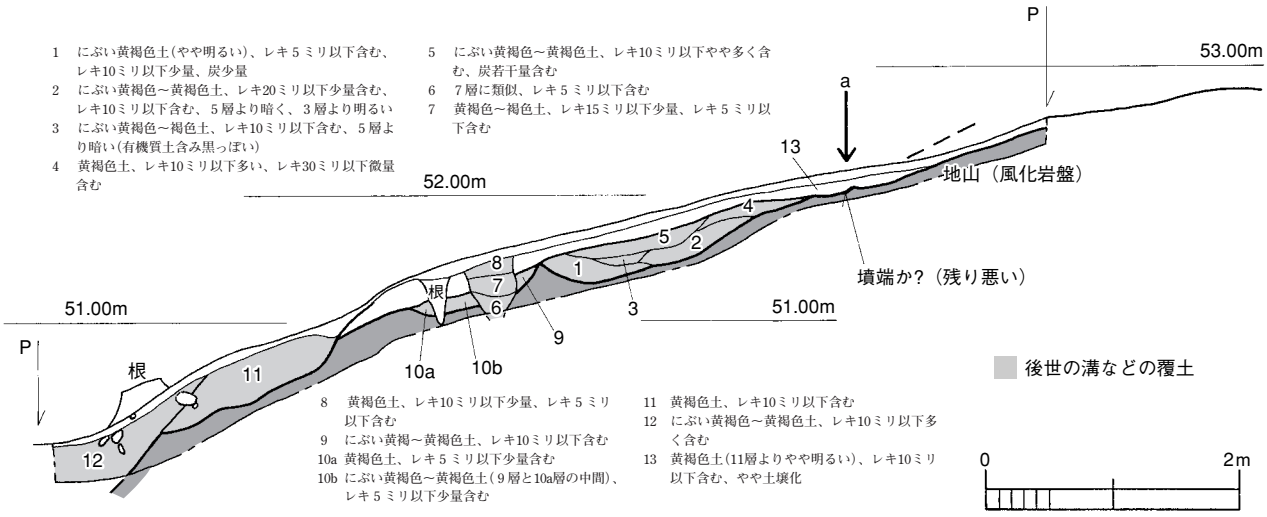


Fig.21　Ｆトレンチ西側土層（1/60）

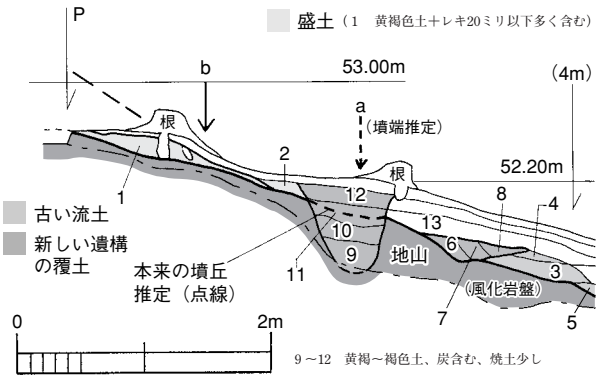


Fig.22　Ｈトレンチ東側土層（１）（1/60）

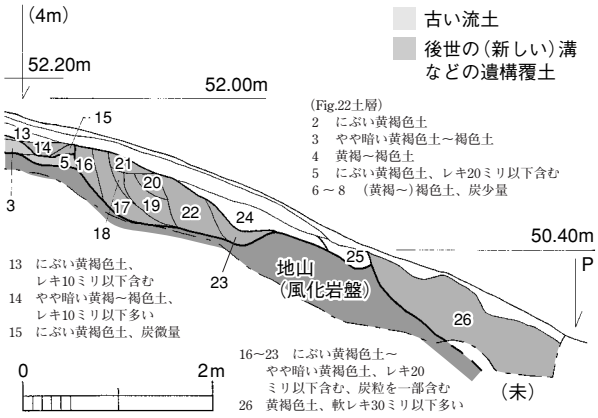


Fig.23　Ｈトレンチ東側土層（２）（1/80）

・**Hトレンチ**（Fig.22・23，PL.18－4）

主軸上のＣトレンチの前方部墳頂トレンチに直交して、南側の前方部側縁の墳端などを確認するために設定した幅85～110cm、10.6m長のトレンチ。土層は東側を図化したが（Fig.22・23）、全体に（特に中位以下）掘りすぎてしまったことが判明したので、反対側の土層も検討して平面図を修正している（Fig.3・15）。**東側土層**（Fig.22）を検討すると、明確な墳端が不明であるが、前後の調査区（Ｆ区・Ｊ区）の検討から、ちょうど９～12層の後世の小溝（土坑？）がある部分に墳端が来ると考えられる。このやや北側の墳丘遺存地山斜面を下ろして復元すると、北側Ｐから2.32m前後、標高51.93m前後に墳端が本来はあったものと考える（ａ）。この上部には北側Ｐから1.63mまで盛土が確認され、また北側Ｐから1.10mの部分に墳丘遺存面の傾斜変換箇所があり（ｂ：標高52.38m）、段築テラス内端の痕跡とみられる（残りが悪く実際は前後するか）。また墳端を切る小溝（９～12層）のほか、下方にも６～８層や13～15層、16～23層、26層のように後世の溝がトレンチに直交し、斜面を走行している。

・**Ｉトレンチ**（Fig.25・26，PL.18－5・6）

主軸上のＣトレンチの前方部墳頂トレンチに直交して、北側の前方部側縁の墳端などを確認するために設定した幅95～120cm、12.5m長のトレンチ。土層は東側を図化したが（Fig.25・26）、全体的に掘りすぎていることが判明したので、反対側の土層も検討して平面図を修正している（Fig.3・15）。

東側土層（Fig.25）を検討すると、南側Ｐから3.74mの箇所（ａ）に傾斜変換点があり（標高51.10m）、墳端の痕跡の可能性がある。ただし、この上の斜面がやや急な感じがあり、Ｇ区西側での対応する点のレベルが51.70m、Ｋ区東側では51.25mであり、前方部隅角に向かって墳端レベルが低くなるとしても、このレベルは低すぎるので、この傾斜変換の凹み（１層下）は後世の溝や段造成による改変の可能性が高く、墳端の位置を反映するが墳端そのものではないと判断する（平面的にはＧ区西からＫ区東までの墳端の推定延長線上に当たる）。当初はこれよりも上のｂの傾斜変換箇所（標高51.43m）を墳端とも認識していたが、土層の検討からこれは確実に後世の溝によるものと判断し

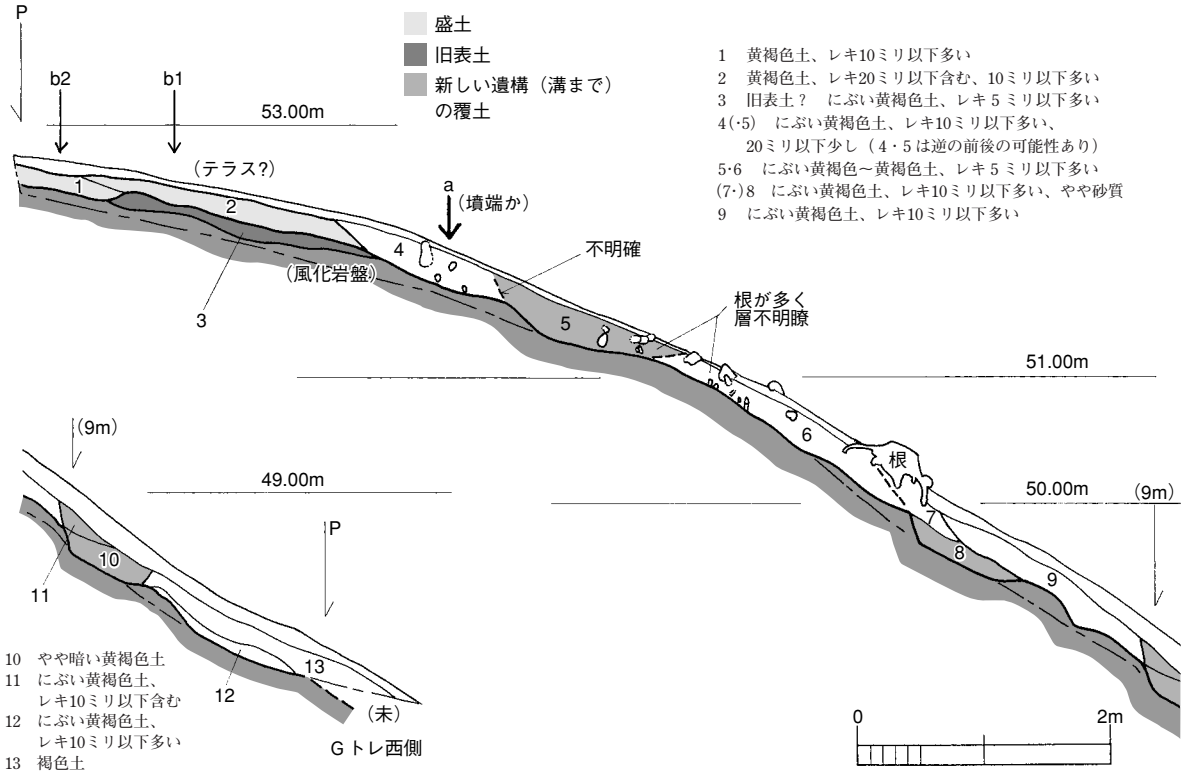


Fig.24　Ｇトレンチ西側土層（1/60）

た。また、南側Ｐから2.59mの箇所に地山面の傾斜変換箇所があり（ｃ）、下段テラスの内端の位置を示すと考えられる（標高51.85m）。次に北側Ｐから1.43mに微妙な傾斜変換点があるが（ｄ：52.39m）、断面では不明確だが平面的におさえられるので、これは上段テラスの内端を示すだろう。さらに南側Ｐから0.67mにも傾斜変換箇所があるが（ｅ）、これは平面的に整合せず、墳丘テラスなどを示すものではない。つまりここでは段築が三段あった蓋然性が高く、前方部の平面観は反対側とは左右非対称であった可能性がある。なお、Ｉトレンチにおいても土層断面の観察から墳丘斜面にいくつかの溝があることが分かる（２層、６～11層、12層）。

・Ｊ区前方部前面・隅角部分（Fig.27・28，PL.19－1・2・4）

Ｊ区は前方部南側隅角から前方部前面南側を確認するために広く設定した5.0m×7.7mの調査区（トレンチ）である（Fig.3）。掘削後の土層確認で全体的にやや顕著な掘りすぎが判明し（Fig.41も参

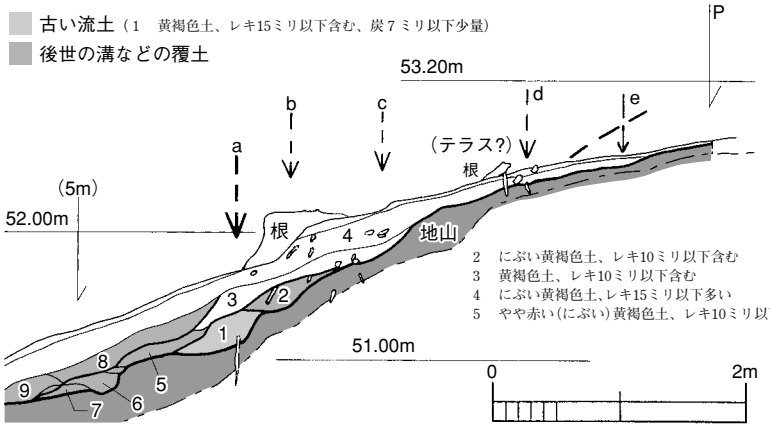


Fig.25　Ｉトレンチ東側土層（１）（1/60）

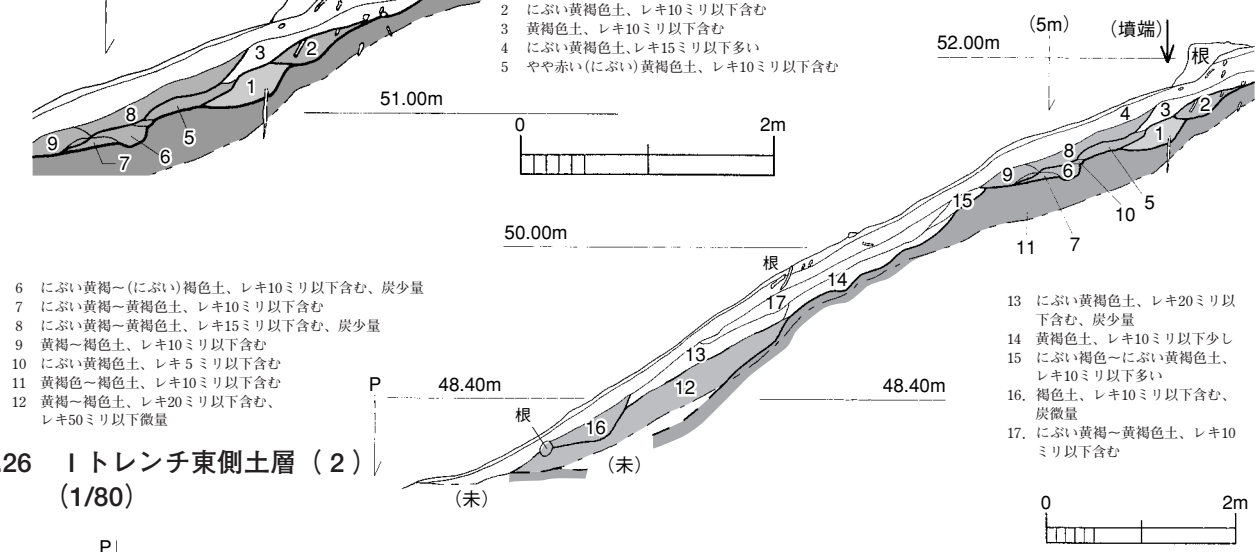


Fig.26　Ｉトレンチ東側土層（２）（1/80）

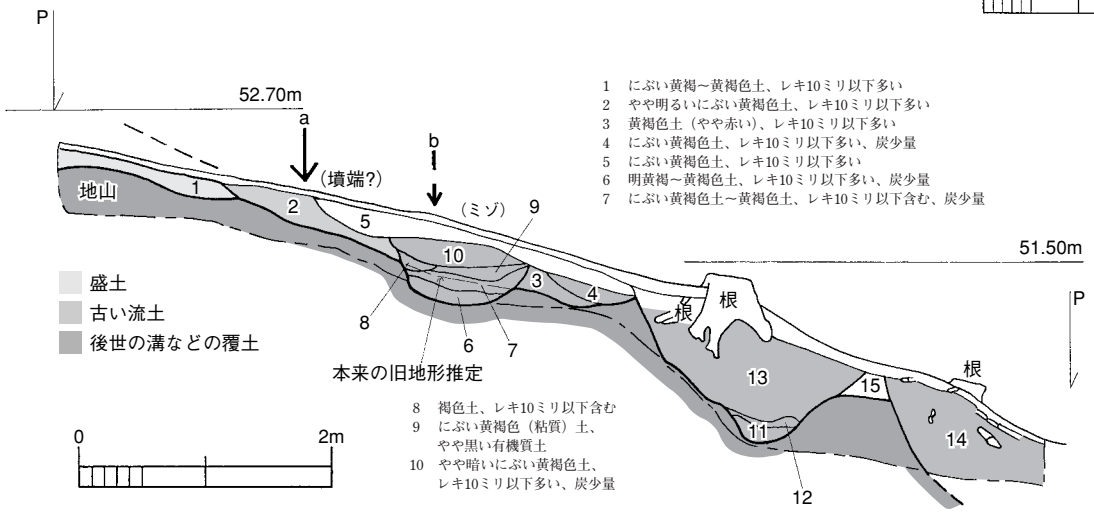


Fig.27　Ｊトレンチ東側土層（1/60）

照)、平面図は全体的に復元的な修正を行っている。ただし中位の墳端前後の掘りすぎは結果的にあまり顕著ではなく、隅角遺存箇所の検出はあまり問題ないと考える。

前方部南側墳端は、**東側土層**(Fig.27)では、北側Pから2.00mに地形変換箇所があり(a:標高52.70m)、これが墳端を示すと考えられるが(Fig.15)、旧地形の流失改変がありやや異同があるかもしれない(F区・Hトレンチとの関係からは本来はやや外側か)。またこの外側に後世の溝(6〜10層)があるが、当初はこの付近を墳端とも認識していた。その場合、北側Pから3.02mの箇所(b:標高51.38m前後)に求められるが、前後の調査区の墳端と合わないためこれを墳端としない。ただし、墳丘周囲に墳丘構築時に整形された段造成があった可能性は否定できず、それにあたる可能性もある。墳端推定箇所(a)より上には盛土が確認される(1層)が、段築テラスは不明である。

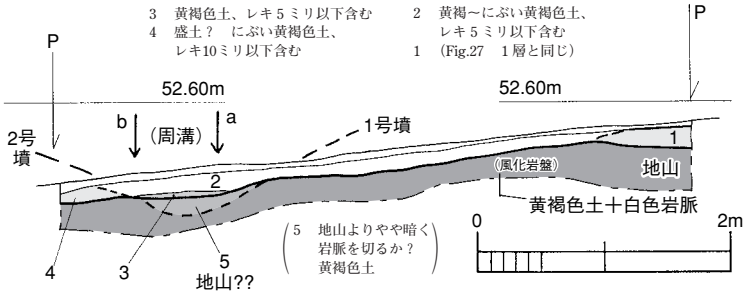


Fig.28 Jトレンチ北側土層(1/60)

墳端遺存線(墳裾)は、この東側断面の推定箇所から南西に延びるが、隅角は整美な鋭角を残さず鈍角的に屈曲して前方部前面に至る(Fig.15)。これは、やや下側(外側)に平行する後世の溝の凹みが走行するように、本来的な屈曲ではなく、後世に墳裾が改変された現状の遺存状況を示すにすぎないと考えられる。**北側土層**(Fig.28)では、東側Pから3.74mの凹み下端が墳端であろう(a:標高51.73m)。2号墳との間は周溝状の凹みとなるが、周溝覆土は僅かにしか遺存していない。ただしこの下部は地山ではない可能性もあるものの(Fig.28参照)、Cトレンチの周溝下端レベルからはこれだとやや下がり過ぎるので(前述の標高51.87mの方が合致する)、古い別の遺構の可能性がある(不明瞭なため遺構とすれば風倒木痕などか)。なお前方部前面レベルは、隅角は低いが、尾根上の前面中央に向かって顕著に高くなっていく。

・**K区前方部前面・隅角部分**(Fig.29・30, PL.18−1・3)

K区は前方部北側隅角から前方部前面北側を確認するために広く設定した4.9m×6.3〜6.5mの調査区(トレンチ)である(Fig.3)。掘削後の土層確認で全体的に掘りすぎがあり(特に中位以下がやや顕著。Fig.40も参照)、平面図は全体的に復元的な修正を行っている。ただし隅角付近はそれほど掘りすぎておらず、隅角遺存箇所の検出はあまり問題ないと考える。前方部南側墳端は、**東側土層**(Fig.30)では、南側Pから4.88mのaの傾斜変換部分であ

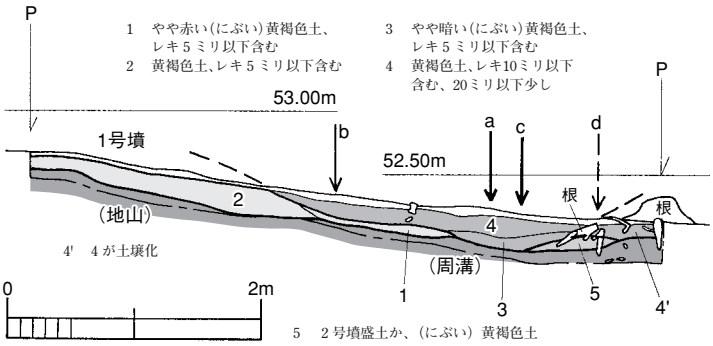


Fig.29 Kトレンチ南側土層(1/60)

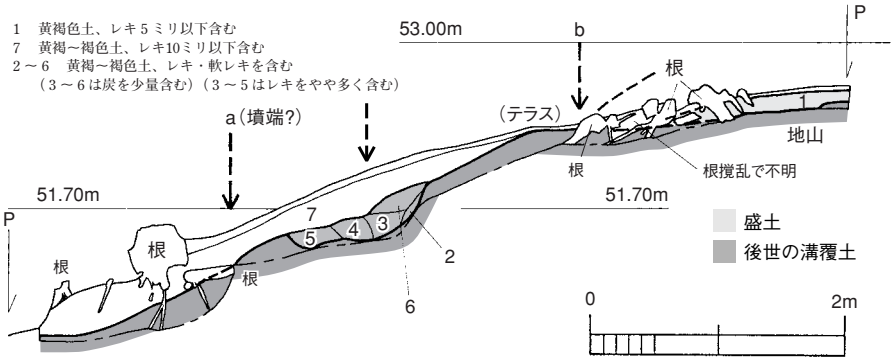


Fig.30 Kトレンチ東側土層(1/60)

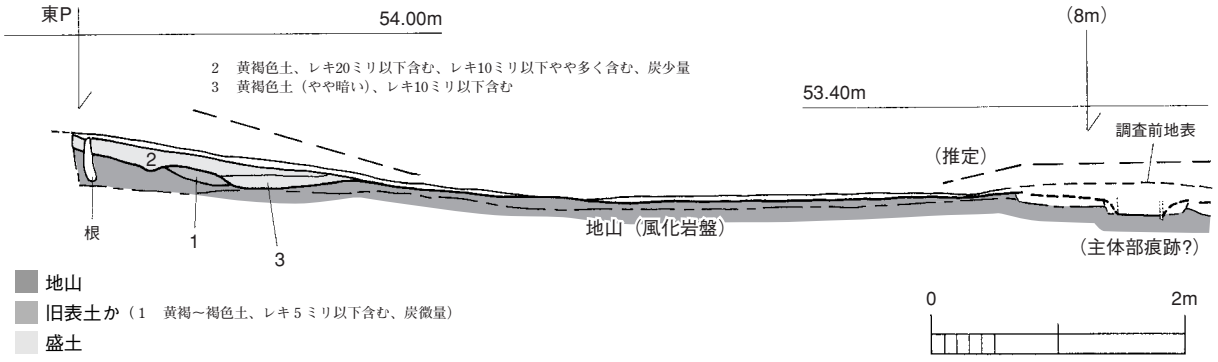


Fig.31　C1トレンチ南側土層（1/60）

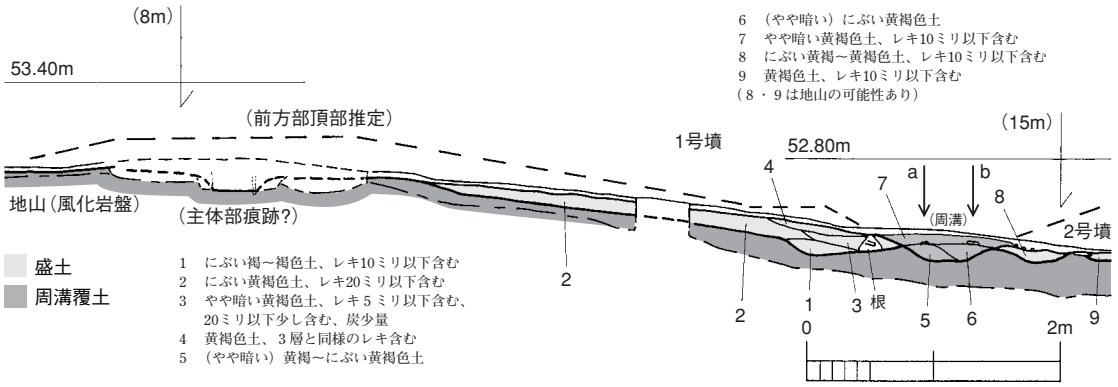


Fig.32　C1・C2トレンチ南側土層（1/60）

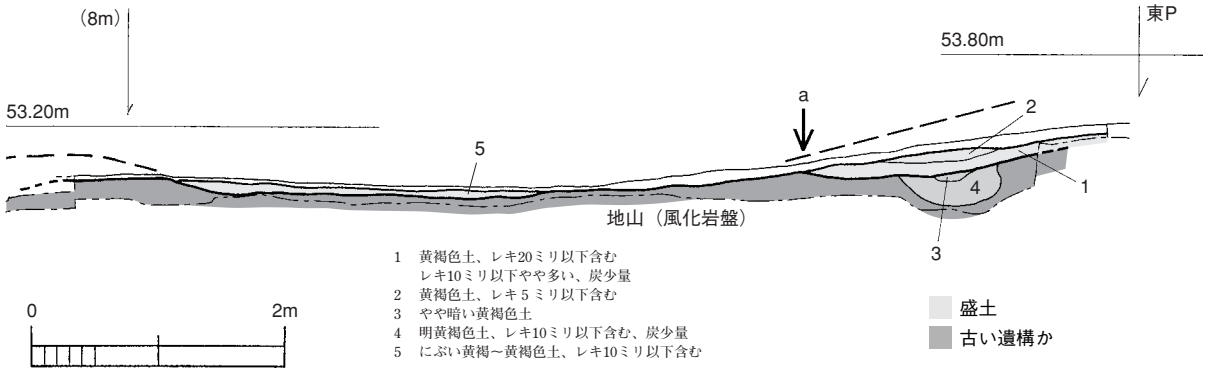


Fig.33　C1トレンチ北側土層（1/60）

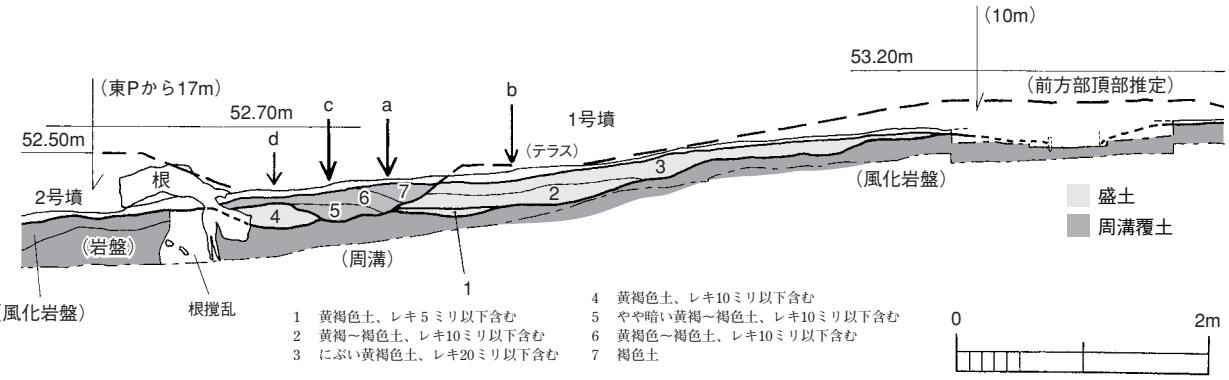


Fig.34　C1・C2トレンチ北側土層（1/60）

ろう（標高51.25m）。土層断面では根があるため不明確だが、平面的に捉えられている。平面的な確認からは、南側Ｐから2.12mの部分に微妙な傾斜変換箇所があり（根攪乱により不明確となるが）、上段テラスの内端と考えられる（ｂ：標高52.32m）。さらにＩトレンチでの認識からはこの下部に下段テラスがあるはずだが、それが考えられる箇所に後世の溝が存在する（Fig.30－２～５層）。溝が後に掘られるのも本来そこにテラスがあったためとも考えられるが、この溝の前後の地山遺存斜面から復元すると、南側Ｐから3.8m前後の箇所（溝上面の３・４層の交点付近）に下段テラスの内端があったと思われる（復元標高51.65m前後）。なお上段テラスより上部には盛土が確認される。

隅角部のレベルは（復元で）50.55m前後で、東側土層の墳端レベルから顕著に下がっている。隅角部は北東側に延びるようにせり出しており、ここから前方部頂へ向かう接線は面状となり、「隅角斜道」とでも表現するような状況である（Fig.15）。前方部隅角は反対側と非対称をなし、このように片側がせり出して緩やかな斜道状になることは他にも類例がある（本書19頁註１，近藤義郎2000）。また前方部側縁のレベルが隅角に向けて著しく下がる例は、丘陵尾根上に無理に前方後円墳を作ろうとした古墳には珍しくないものである（例えば備前車塚古墳）。さらに前方部前面のレベルは、Ｊ区と同様に尾根筋である主軸に向かって高くなっていくのは明白である（前面周溝が深くなっていないため）。前方部前面のこのような特徴は、やはり尾根上の古墳には必ずしも珍しいものではない。

南側土層（Fig.29）では、東側Ｐから3.14mの周溝下端が、平面的な検討と合わせ墳端と考えられる（ａ：標高51.93m）。これよりやや内側から墳丘に向かって盛土がある（１・２層）。東側Ｐから2.41mの墳丘（盛土）遺存面上の傾斜変換箇所であるｂ（標高52.17m）は墳端とするよりは、Ｃトレ

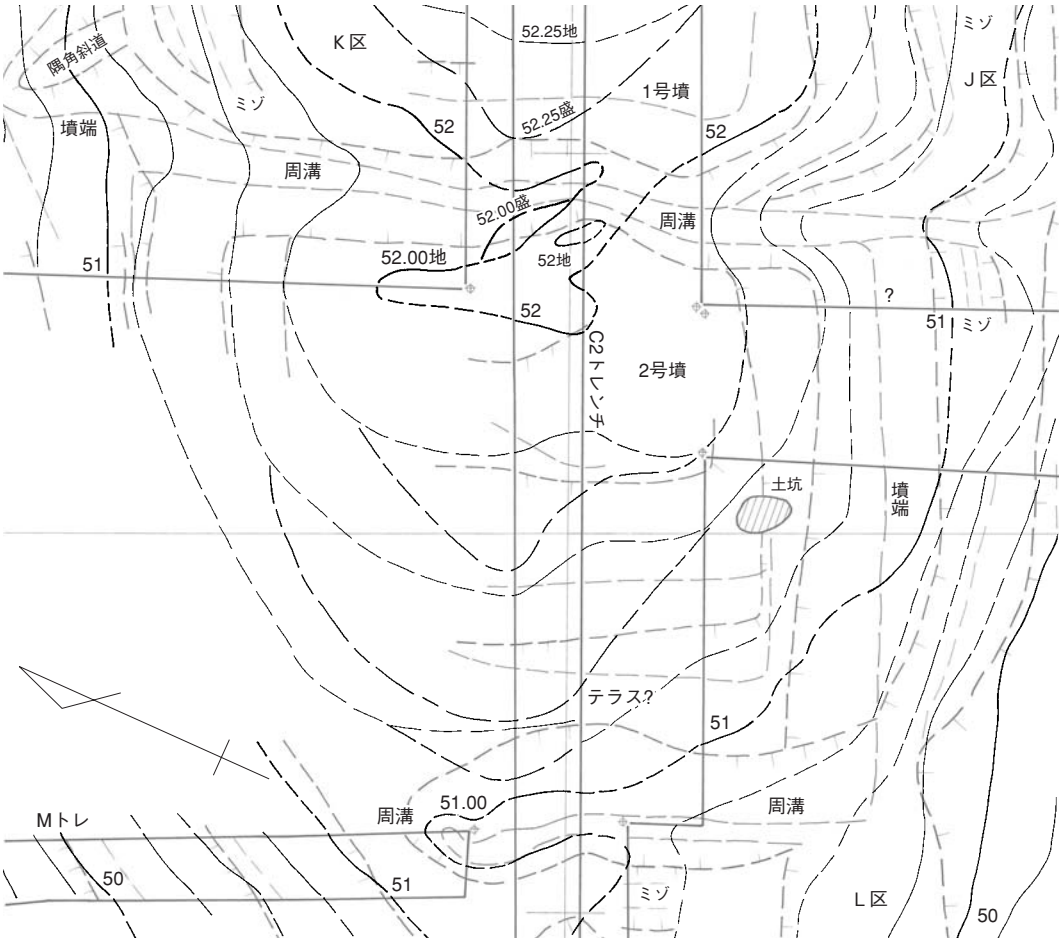


Fig.35　２号墳調査区墳丘遺存・地山整形図（1/100）※調査区外は推定

ンチでの検討を参照すると下段テラスの内端であろう。周溝下端（墳端）から東にむかって低く短い斜面があり、一段テラスをおいて前方部の高まりに移行すると考えられる。

・C1トレンチおよび前方部（頂部）トレンチ（Fig.15・31・33，PL.12−7・8，PL.13−1・2）

後円部から西へ墳丘主軸上（尾根線上）に設定したCトレンチ（80〜90cm幅×32.8m長）のうち、前方部頂部までの9.8m長をC1トレンチとする。前方部トレンチは、C1トレンチとH・Iトレンチ

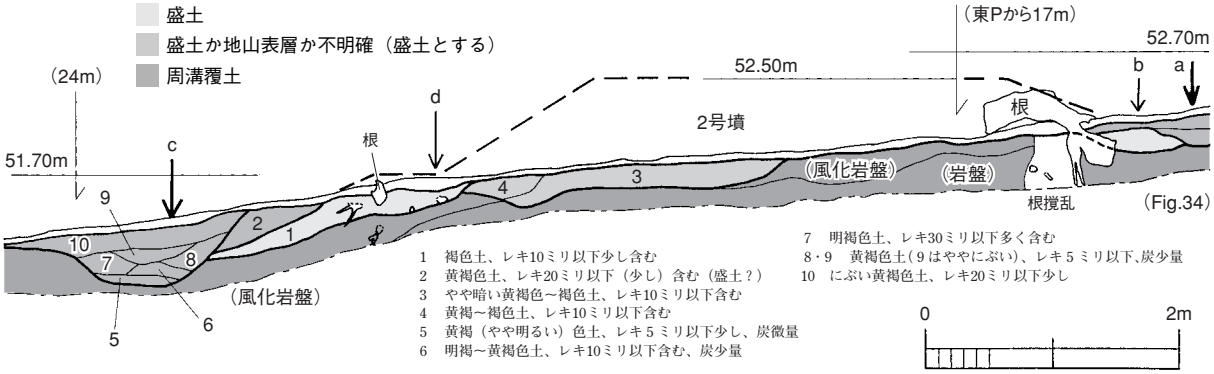


Fig.36　C2トレンチ北側土層（1）（1/60）

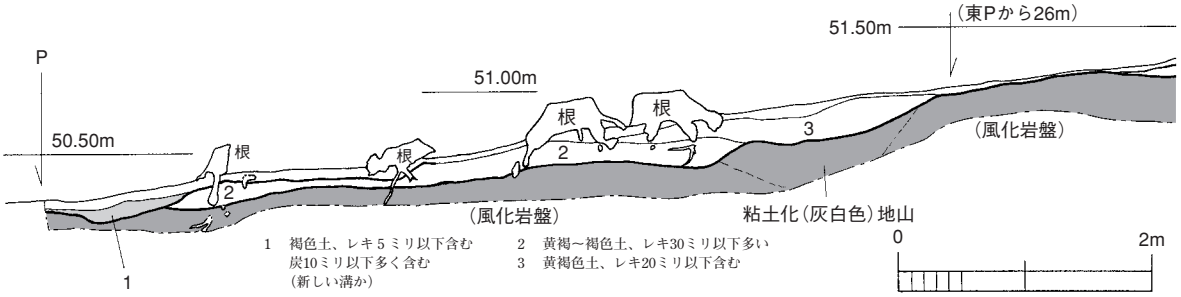


Fig.37　C2トレンチ北側土層（2）（1/60）

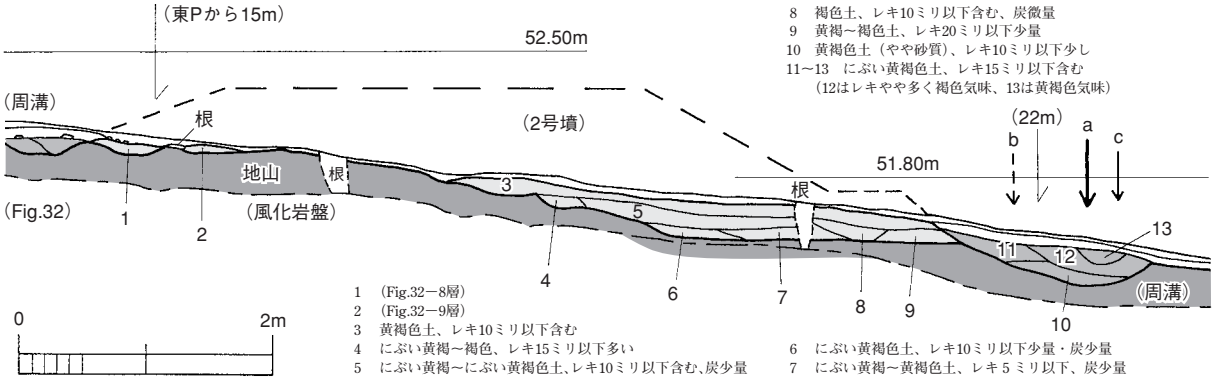


Fig.38　C2トレンチ南側土層（1）（1/60）

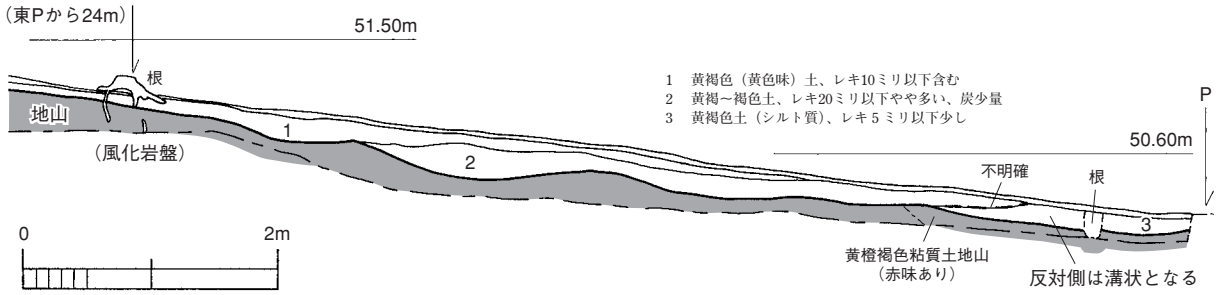


Fig.39　C2トレンチ南側土層（2）（1/60）

が交差する箇所を拡張した部分である（1.9×2.9m）。後円部側などやや掘りすぎがあり、平面図は両側土層図から復元修正している。主軸線上である**南側土層**（Fig.31）では、東側Ｐから2.18mまでは地山上に盛土が確認される。この盛土範囲は後円部中心から測ると東側（Ａトレンチ）よりも外側に広く、前方部への後円部斜面が緩やかだったことを示し、「隆起斜道」が存在したことを示唆する。トレンチ中位から西は地表直下で地山の岩盤となるが、他のトレンチの状況からは本来は薄い盛土があったのが流出してしまったものであろう。前方部頂部では、東側の前方部途中よりも調査前の現況地形にやや高まりがあり（標高52.80m前後）、実際はそれより高かった（53.00m前後か）であろうから、ここにも一定の盛土の存在が推定される。**北側土層**（Fig.33）では、東側Ｐから2.66mの箇所（ａ）まで盛土が確認できる。またトレンチ中央から東にかけて地山の若干の凹みを埋めるように僅かな盛土が遺存している（５層）。なお後円部側盛土の下部の土層断面に遺構らしき層が検出されたが（３・４層）、南側土層には無く、不明瞭なため古い風倒木痕などと考えられ、古墳には無関係であろう。

前方部（頂部）トレンチ（Fig.15）では、その中央を精査中に何かの掘り方らしきものが検出され、さらに僅かに下げて確認しようとしたが、すぐに消えてしまった。わずかに主軸線に直交する90cm長の細い溝が記録できた。この精査時にはベルトを残さずに（Ｈ・Ｉトレンチと交わっていたため）すでに地山面まで下げていたからであるが、確認が十分にできず残念な結果となってしまった。しかし、この細い溝は反対側が不明であったものの、おそらくは組合式木棺などの側板の最下部の痕跡だったと思われ、またこれを検出するために設定した東西90cm×南北120cm前後のサブトレンチに相

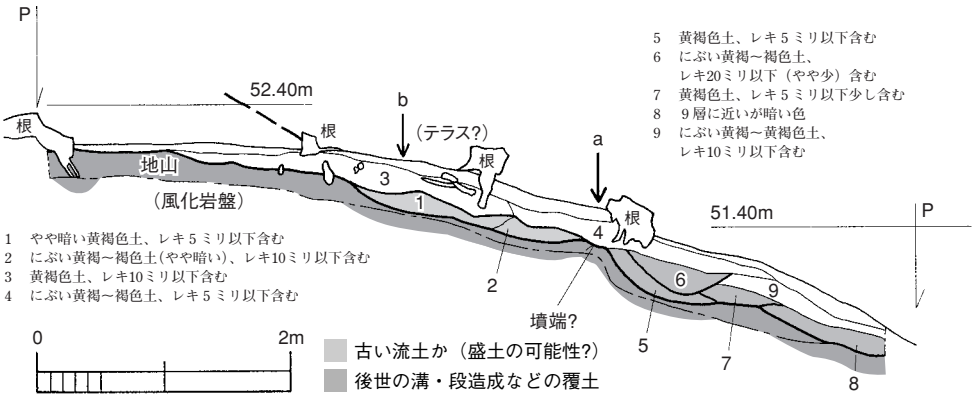


Fig.40　Ｋトレンチ西側土層（1/60）

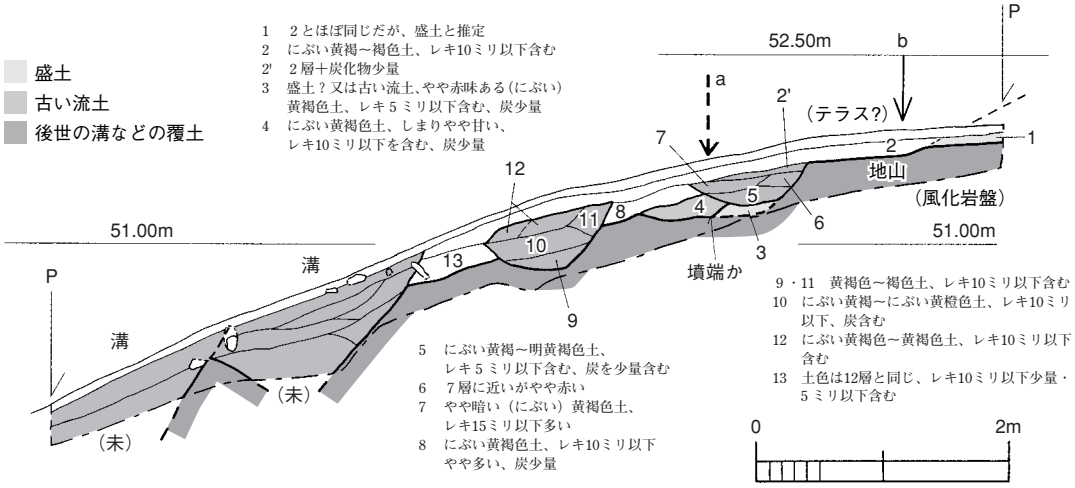


Fig.41　Ｊトレンチ西側土層（1/60）

当する部分がその掘り方であった可能性がある。いずれにしても、最下部が僅かに辛うじて遺存していた前方部**主体部の痕跡**であったと考えられる。

・C2トレンチ（1号墳前方部前面周溝まで）（Fig.15・32・34，PL.13−3〜6，PL.14−1・2）

後円部から西へ墳丘主軸上（尾根線上）に設定したCトレンチのうち、前方部頂部トレンチより西側の端までの23.0m長をC2トレンチとする。本トレンチは両側の土層を検討しており、平面図はそれによりトレンチ全体を修正している。ここでは、1号墳前方部前面周溝までの部分を記す。

南側土層（Fig.32）では、C1トレンチ（南壁）東側Pから13.92mの箇所に周溝下端があり（a：標高52.01m）、これが墳端と考えられる。ここから東へ上る周溝の遺存斜面のうち半分は盛土による整形である（3・4層）。前方部前面のうち少なくとも主軸（中央）前後はかなりの部分を盛土によ

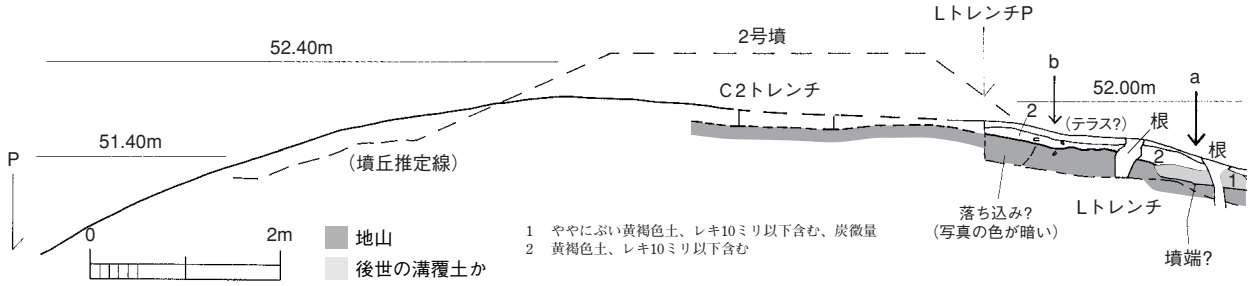


Fig.42　Lトレンチ東側土層および北側延長断面図（1/80）

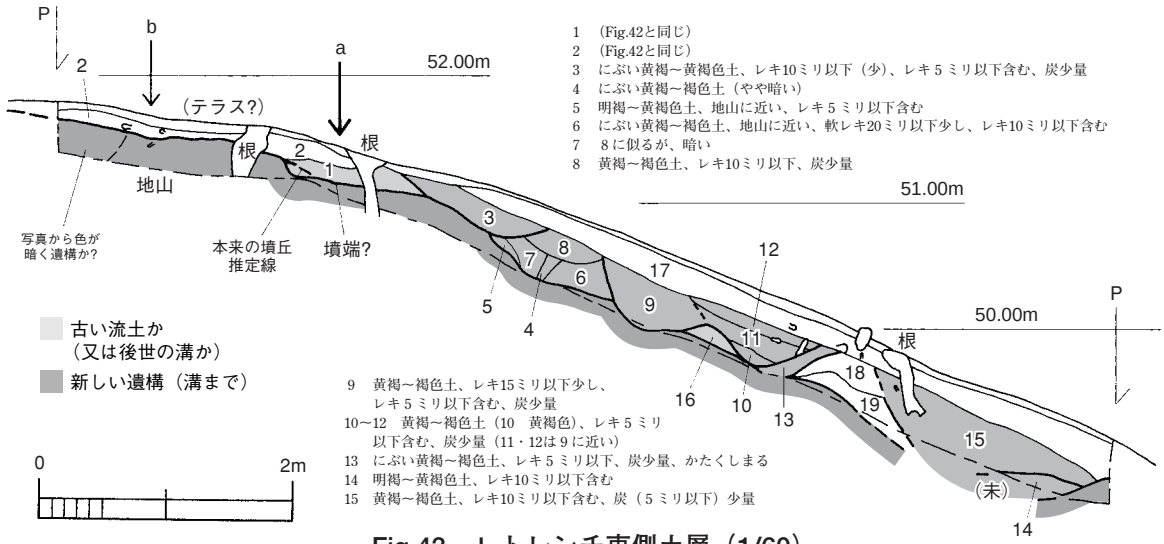


Fig.43　Lトレンチ東側土層（1/60）

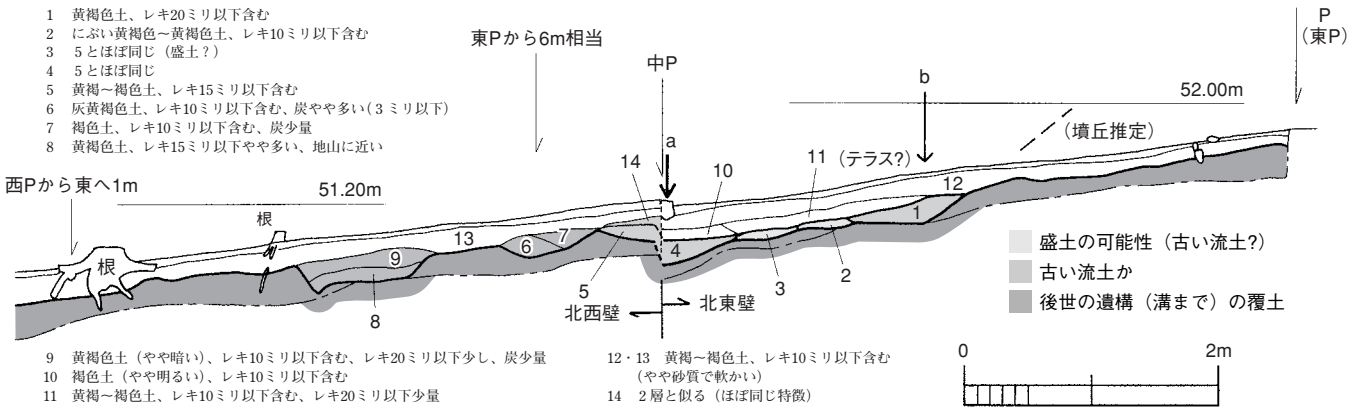


Fig.44　Lトレンチ北側土層（1/60）

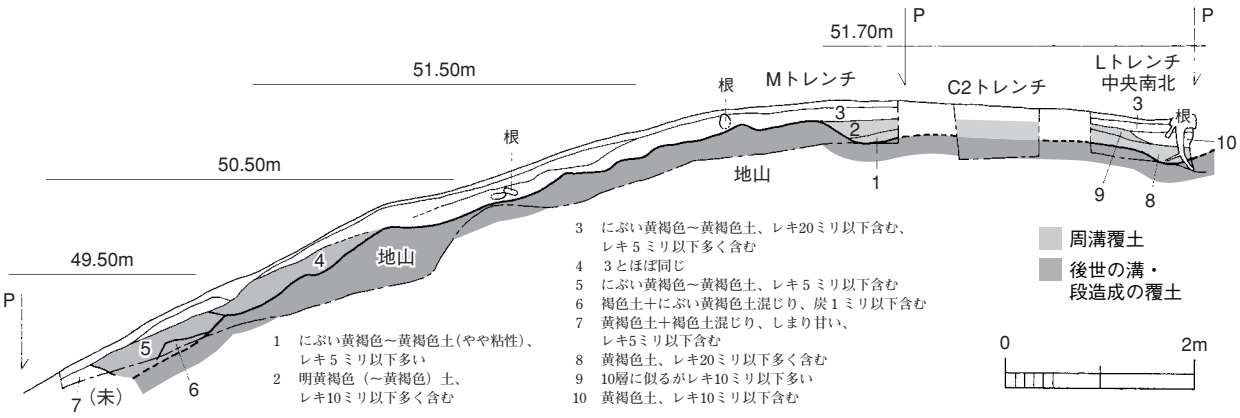


Fig.45　Mトレンチ東側土層（1/80）

り整形している（１～４層）。他の箇所からは２・４層の上あたりでテラスの痕跡が見いだされるが、この土層断面部分では分からない。反対の**北側土層**（Fig.34）では、C1トレンチ（北壁）東側Pから14.66mの箇所で周溝下端となり（ａ：標高52.05m）、これが墳端と考えられる。ここでは周溝基底部から盛土により整形している（１～３層）。墳端ａより東側では、C1トレンチ東側Pから13.67mの墳丘遺存（盛土）面上の傾斜変換箇所があり（ｂ：標高52.32m）、テラスの内端の痕跡とみられる。墳丘盛土は流失しているので本来のテラス内端はこれよりやや東側と考えられるが、K区で想定したように、周溝下端から東側には低く短い斜面があり、途中でテラスをおいて前方部の高まりに移行すると考えられる。なお墳端（前方部前面）のレベルが隅角から前方部中央に向かって高くなるような顕著なレベル差は無いが、このテラス面も必ずしも同一水平面をなさないものと考えられる。

（３）２号墳の調査（Fig.35）

・C2トレンチ（２号墳とその西側）（Fig.32・34・36～39，PL.13－3～6，PL.14－2～4）

１号墳との間の周溝部分の尾根線上である**南側土層**（Fig.32）では、C1トレ（南壁）東側Pから（以下、「南壁東Pから」とする）14.27mの箇所に２号墳側の周溝下端があり（ｂ：標高52.00m）、東側の墳端とみられる。反対側の**北側土層**（Fig.34）では、C1トレ（北壁）東側Pから（以下、「北壁東Pから」とする）15.13mの箇所に２号墳側の周溝下端があり（ｃ：51.98m）、墳端と考えられる。いずれにしても１号墳と２号墳は周溝を共有していることになる。なお南側土層（Fig.32）の８層（周溝より西側）は浅い凹みをなし（反対側のFig.34－４層に対応）、当初はこれが２号墳周溝の可能性があるとも考えたが、それだと土層の関係から主墳である１号墳より先行することになってしまい、他のトレンチ（K・J区）の所見との関係も矛盾が生じるため、これは２号墳築造時の何らかの設計溝で、盛土で埋められたものと考える（したがって周溝の共有から１号墳とは同時築造ということになる）。また南側土層の様相からは、１号墳主軸上での前面周溝（＝２号墳周溝）は、幅が狭くなり、

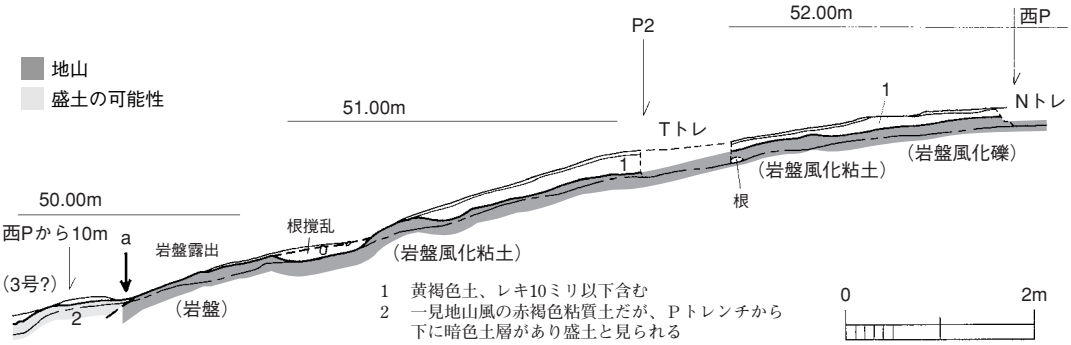


Fig.46　A2・A3トレンチ南側土層（1/80）

2号墳基底部（周溝下端）が1号墳側にやや突出するような平面状況となる（Fig.35）。

トレンチはちょうど2号墳を縦断するように設定されているが、1号墳と共有する東側周溝より西側は地表直下で地山となり、盛土は流失している（Fig.36・38）。主体部らしき掘り込みも検出されず、平面的にはC2トレンチが2号墳の推定主軸よりやや南に寄っているため、より北側に残る可能性も残るが、今後の確認を要するものの、実際は主体部も流失・削平されている可能性が高い。反対側（西側）の墳端は、**北側土層**（Fig.36）を見ると（2号墳の範囲では尾根頂線がC2トレンチ北側となる）、周溝状の落ち込みが北壁東Pから22～24mに認められる。墳端は23.23mのcの箇所と考え

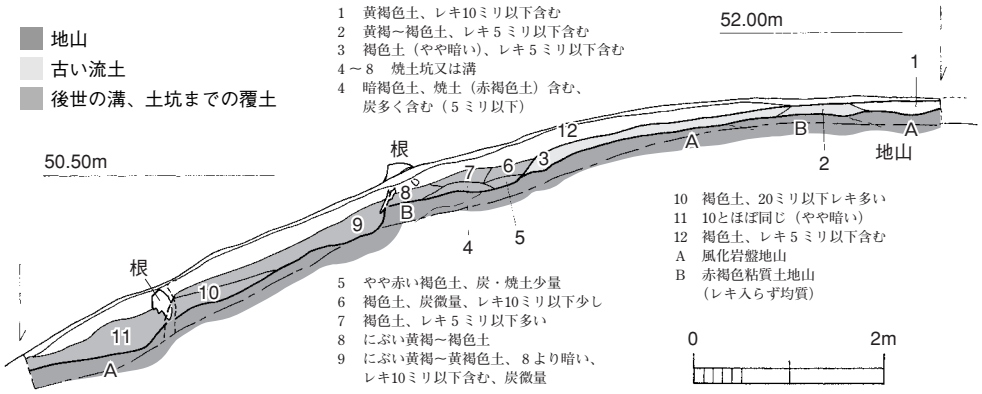


Fig.47　Nトレンチ西側土層（1/80）

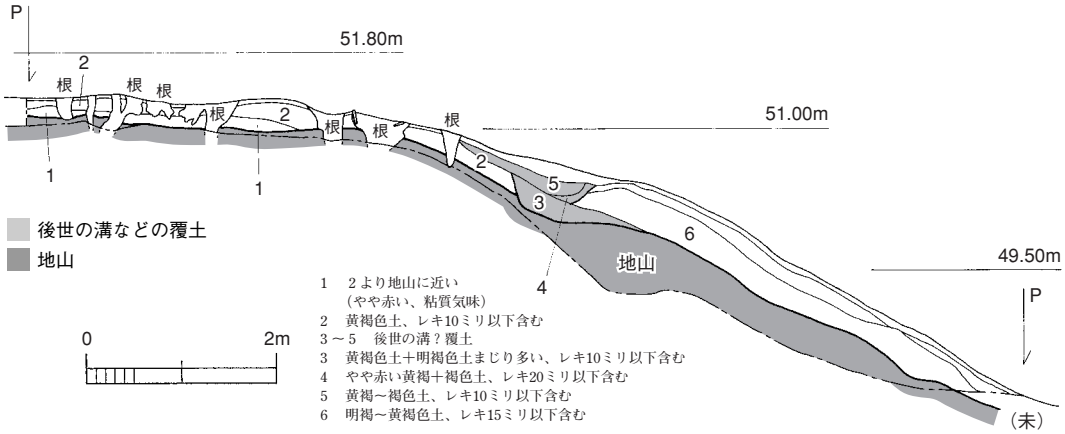


Fig.48　Oトレンチ西側土層（1/80）

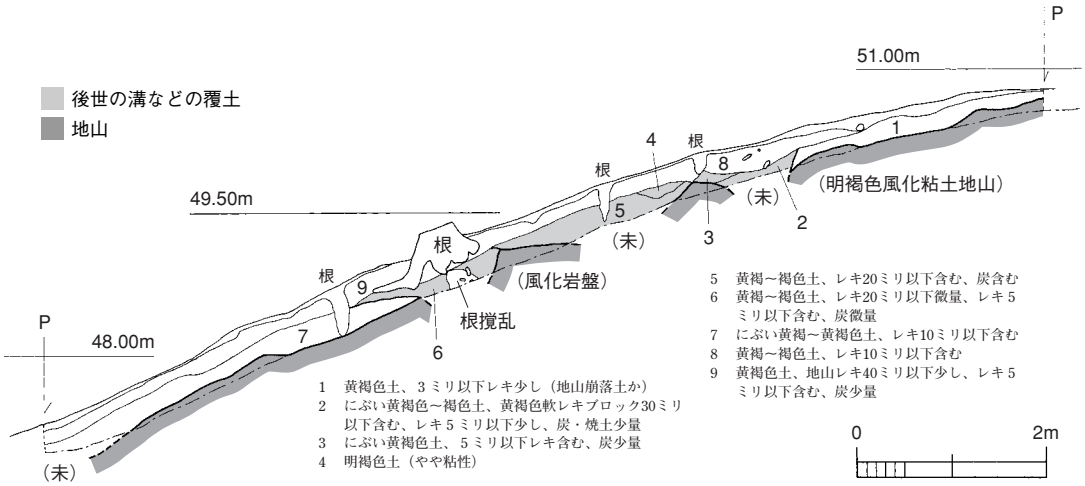


Fig.49　Tトレンチ西側土層（1/80）

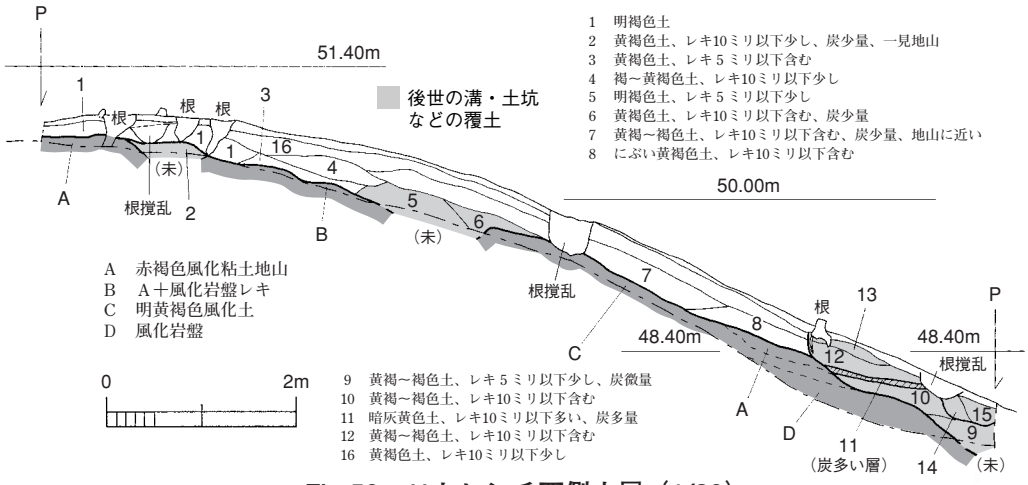


Fig.50　Ｕトレンチ西側土層（1/80）

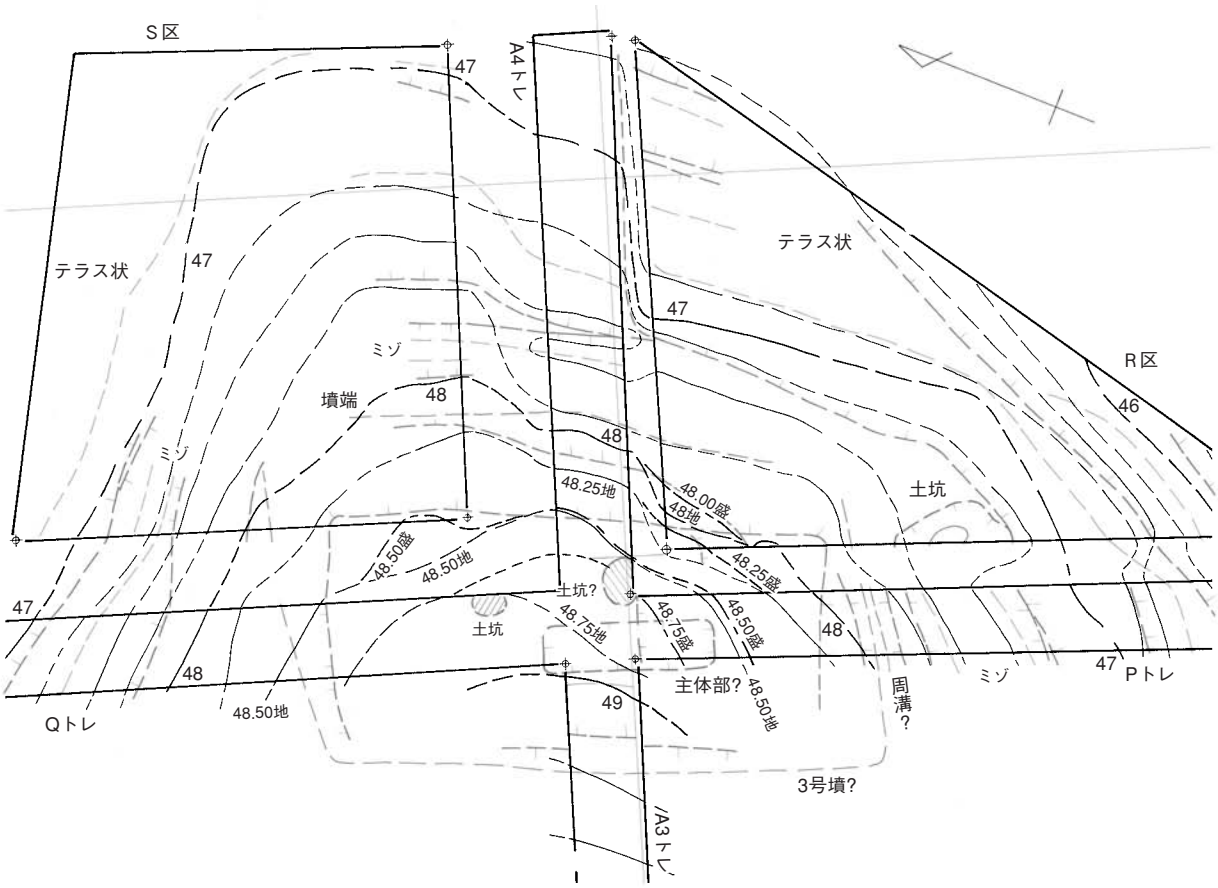


Fig.51　３号墳（？）調査区墳丘遺存・地山整形図（1/100）※調査区外は推定

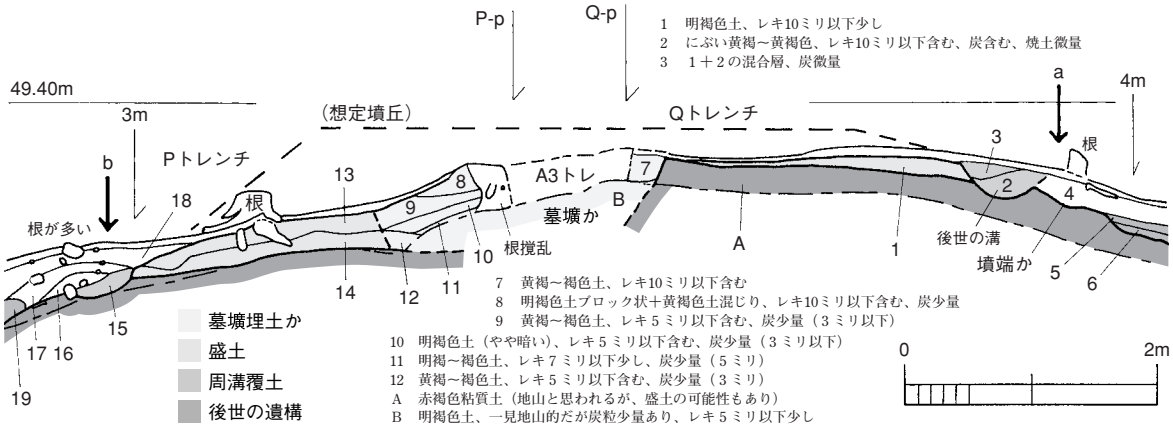


Fig.52　Ｐ・Ｑトレンチ（３号墳横断）西側土層（1/60）

られる（標高50.83m）。周溝覆土のうち２層は当初盛土とも考えたが、反対側土層（Fig.38）の11層と対応すると考え周溝覆土とした。そうすると５～10層は２層を切るようにも見え、これらは周溝の凹みに沿って後世に新たに掘り込まれた溝（土坑？）とも考えられる（その場合は２層下の地山斜面から、本来の周溝下端レベルは51.00m前後に復元される）。2号墳西側周溝の立ち上がりは若干地山を掘削して形成しつつ、多くは盛土により整形される（Fig.36－１層）。また２号墳西側の多くも盛土によるらしい（３・４層）。なお東Ｐから21.15mの箇所に墳丘（盛土）遺存面上の微妙な傾斜変換箇所があり（ｄ）、テラスの内端の痕跡と考えられよう。**南側土層**も観察すると（Fig.38）、南壁東Ｐから21.2～22.9mに周溝が認められる。墳端は、東Ｐから21.81mのｂ（標高51.11m）か、22.39mのａの箇所（50.95m）のいずれかの傾斜変換点だが、反対側土層との関係から後者（ａ）が墳端であろう。南側土層ではテラスの痕跡は不明である。いずれにしても、東側周溝の墳端レベルとは顕著な段差が生じている。なお周溝の東側、２号墳中央より西側の墳丘は、北側土層と同様に盛土（３～９層）により整形・構築されていることが分かる。

またC2トレンチの２号墳西側周溝より西側では（Fig.37・39）、いくつかの段造成や溝が尾根に直交ないし斜交して走っていることが確認されるが、これらは古墳よりは後の時代のものであろう。

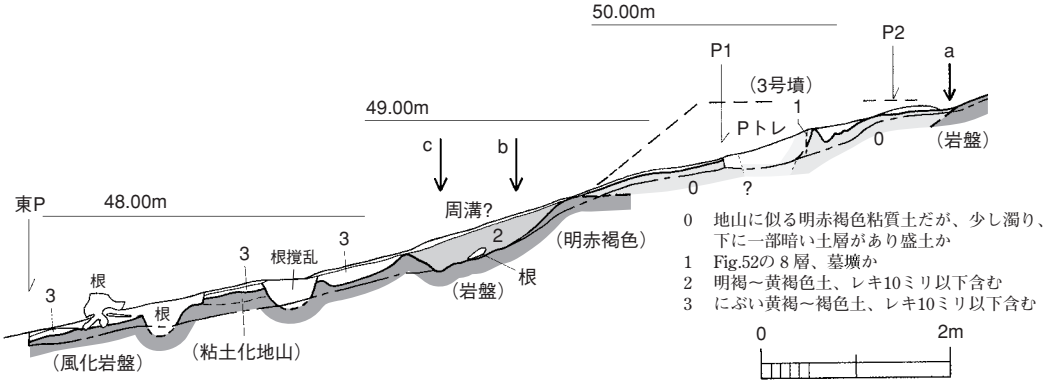


Fig.53　A３・A４トレンチ南側土層（1/80）

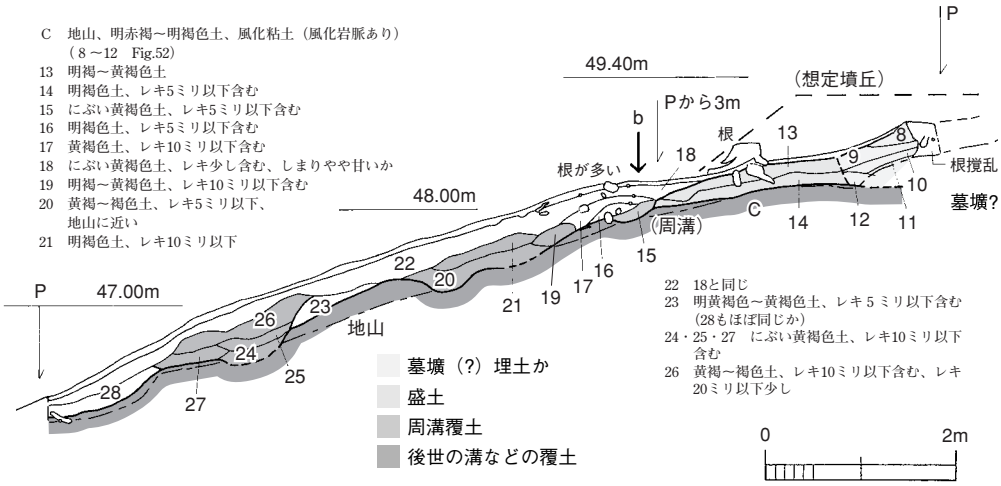


Fig.54　Ｐトレンチ西側土層（1/80）

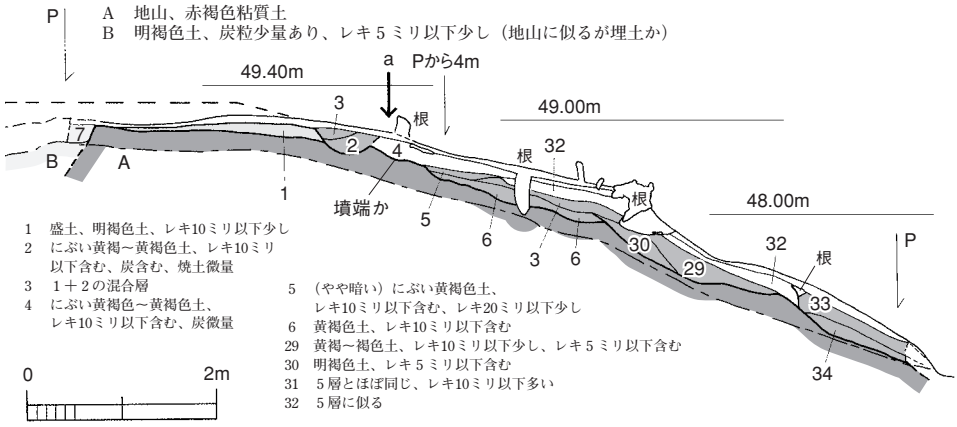


Fig.55　Ｑトレンチ西側土層（1/80）

・**Ｋ区西側**（Fig.3・35・40，PL.18－2・3）

Ｋ区西側土層（Fig.35）を観察すると、南側Ｐから4.44mのあたりに微妙な傾斜変換箇所（ａ：標高51.28m）が認められ（このすぐ下は別の溝により落ち込んでいる）、これが墳端の可能性が高い箇所と考えるが確証は無い。なおこの上部の１・２層は古い流土とするが、あるいは盛土である可能性もある（その場合は後述のテラスの位置がさらに内側になる）。また南側Ｐから2.90mの地山上面（１層下）に傾斜変換箇所があり（ｂ：51.56m）、段築テラスの内端（の痕跡）を示すと考えられよう。

また１号墳と共有する周溝は北側斜面下に向かってレベルが下がっているが、２号墳隅角部分は不明瞭にしか検出されていない（Fig.35では復元的に記入している）。さらに西側土層を見ると墳端推定箇所より下部にはいくつかの溝や段造成が認められるが、これらは後世のものであろう。

・**Ｊ区西側**（Fig.3・35・41，PL.19－3・4）

Ｊ区西側土層（Fig.41）を観察すると、西側のＬ区東側土層との関係から、北側Ｐから2.34mの４層下のａの箇所が墳端になる可能性が高い（標高51.22m）。その場合３層は盛土である可能性があるが、あるいは３・４層ともに後世の掘り込みで（５～７層の新しい溝よりは古い）、墳端は残っていない可能性もある。３層下東寄りを墳端とする案もあるが、それだとＬ区東側の検討結果とは整合しない。平面的には、２号墳の南東隅角は不明確であったので（PL.19－3に見るように掘りすぎてしまっている）、よく分からなくなってしまったというのが正直なところである。これより上の、北側Ｐから0.79mの地山上面に傾斜変換箇所があり（ｂ：51.72m）、これより南側は平坦であり、テラスの存在を示す。さらに西側土層を見ると、推定墳端箇所より南側の斜面にいくつもの溝が走ることが分かる。斜面下方にはやや深い溝もあり、山城等に関連する施設の可能性もある。

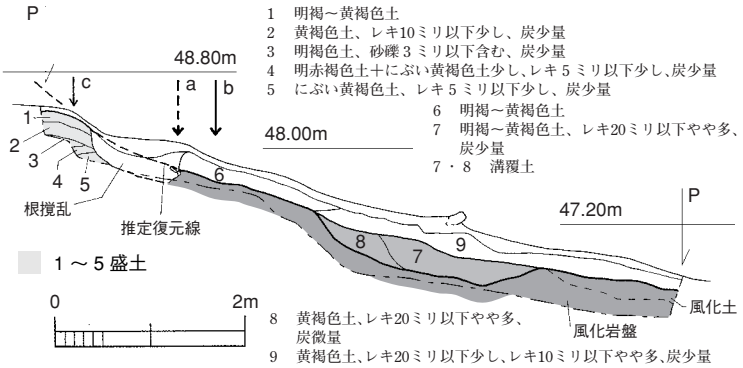


Fig.56　Ｒトレンチ北側土層（1/80）

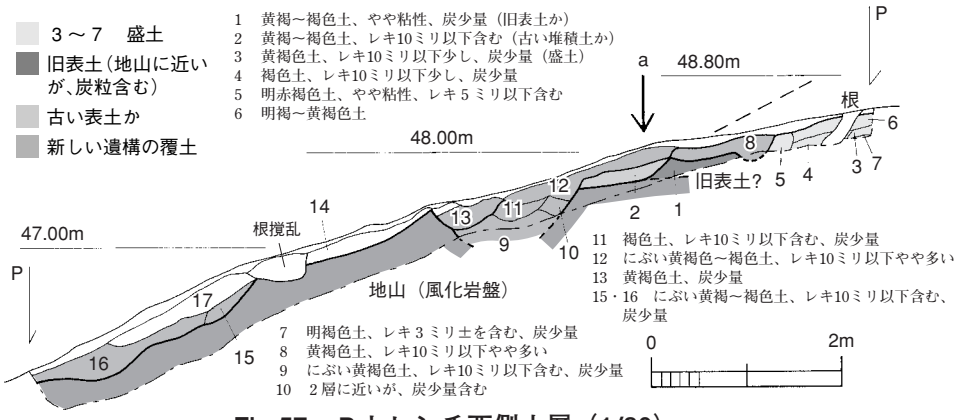


Fig.57　Ｒトレンチ西側土層（1/80）

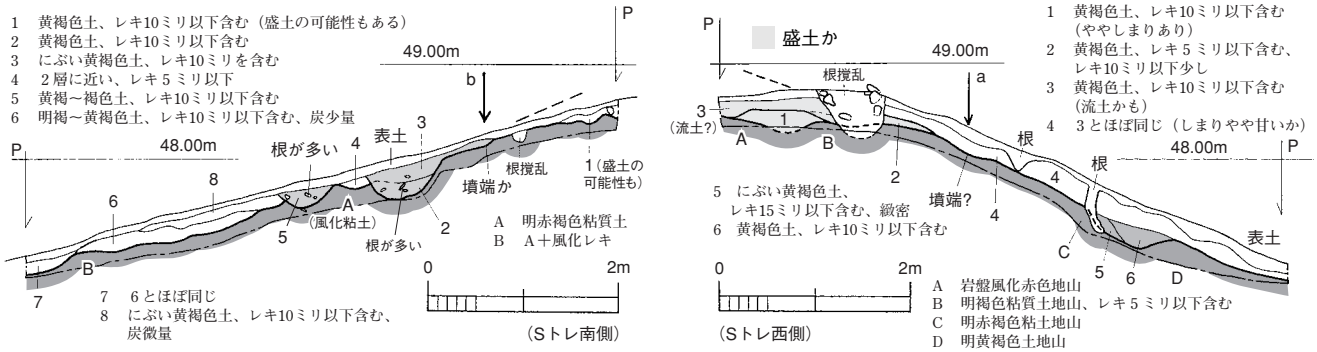


Fig.58　Ｓトレンチ南側土層（左）・Ｓトレンチ西側土層（右）（1/80）

・**Ｌ区**（Fig.3・35・42～44，PL.19－5～7）

２号墳の南西側隅角部分などを広く確認するために設定した。２号墳西側周溝に当たる部分で矩形に屈曲して西半部が幅広くなっている。土層図（Fig.43・44および西側土層）を見るように、全体として掘りすぎてしまっていたので、平面図は大幅な修正を復元的に施している。

東側土層（Fig.42・43）では、北側Ｐから2.24mの地山面に微妙な地形変換箇所があり（ａ：標高51.17m）、墳端の可能性がある。これよりやや北側の可能性もあるが（１層下北寄り）、やや抉られたような斜面であり、これは墳端が流失したものであろう。また北側Ｐから0.74mにも地形変換箇所があり（ｂ：51.51m）、これは段築テラスの内端を示すと考えられる。墳端推定箇所より下には、土層断面に見るように、いくつもの溝や段造成が斜面を走行することが分かるが、これらは後世のものであろう。この東側土層断面ラインを北側に延長して現況地形との関係を図示したが（Fig.42）、２号墳は大幅に墳丘が流失しているのが分かる。Ｃ2トレンチでも述べたが、主体部は遺存していない可能性が高い（おそらくは構築墓壙による比較的浅い主体部であったと考えられよう）。

調査区の北東壁と北西壁を合成した**北側土層**（Fig.44）では、中央に幅1.1mの西側周溝が存在し、東側Ｐから4.97mの箇所に周溝下端があり（ａ：標高50.72m）、墳端と考えられる。この上の墳丘斜面には盛土が僅かに存在する（２・３層）。東側Ｐから2.93mの箇所に傾斜変換点があり（ｂ：50.72m）、段築テラスの内端を示すと考えられる。これらはＣ2トレンチでの観察に対応している。また北側土層西側を見ると、尾根筋に直交する溝の断面が２箇所あるが、これは後世のものであろう。

なおＬ区は西側壁の土層も検討して図化しているが、墳丘部分に関わらないため、本報告ではその提示を省略する（平面図の修正の根拠としては使用している）。

・**Ｍトレンチ**（Fig.45，PL.19－8）

２号墳の北西側を確認しようとした幅85～95cm×8.8m長のトレンチ。**土層**（Fig.45）から全体的に掘りすぎていたので、反対側断面も検討して平面図（Fig.3・35）を修正している。結果的に２号墳の北西側は確認できなかった。これはトレンチ位置が北西隅角部の推定位置から外れているためであり、現状地形の斜面状況から流失が大きいと考えられるため、もう少し東にトレンチを設定してもすでに確認できないものと見られる。トレンチ南側で西側周溝の端を検出した（Fig.45－１・２層）。トレンチ内で周溝が立ち上がり（Fig.35）、西側周溝は北側には延びていなかった可能性が高い。

（４）１号墳東側および３号墳の調査（Fig.3・4・51）

以下については、報告者である久住が他の調査地点を新たに担当せざるをえなかった期間に詳しい検討と図化を行っているため、トレンチの精査や土層の検討にあまり関わっておらず（「調査の経過」参照）、図面による検討をもとに記述・報告する。特に「３号墳」の存在については調査中にはあまり認識しておらず、図面整理の結果から推定した。この点、将来の確認調査が必要かもしれない。

・**Ａ2,Ａ3トレンチ**（Fig.3・4・46，PL.11－4，PL.12－1）

尾根線上（１号墳仮主軸延長上）の東側に設定した全長26.2m（幅90～110cm）のＡトレンチのうち、Ｏ・Ｎトレンチ西側との交点以東をＡ2、Ｕ・Ｔトレンチ西側との交点以東をＡ3、Ｑ・Ｐトレンチ西側以東をＡ4トレンチとした。Ａ2・Ａ3トレンチ部分では特に遺構は無い。Ａ3の東端で「**３号墳**」となるが、これはＡ4トレンチで記述する。なお本トレンチは土層により平面図を修正している。

・**Ｎ,Ｏ,Ｔ,Ｕトレンチ**（Fig.3・47～50，PL.20－1～4）

１号墳の東側で、Ａトレンチに直交して設定したトレンチ。これら４本のトレンチでは古墳に関わる遺構は検出されていない。そのため、土層図からは掘りすぎがあるのは明白だが、平面図は特にほとんど修正していない。各土層を見ると、斜面に沿っていくつかの溝や段造成が走ることが分かる。

またＮトレンチ中位には土坑状の落ち込みがある。これらは後世の遺構であろう。

・**ＰトレンチおよびＱトレンチ**（Fig.51・52・54・55，PL.20－5・6）

両トレンチ土層図を接合したFig.52をみると明白だが、中央やや南側に**墓壙らしき掘り込み**を有する墳丘が存在するのが分かる。**Ｐトレンチ西側土層**を見ると（Fig.52・54）、北側Ｐ（Ｐ-ｐ）から3.22mに傾斜変換箇所があり（ｂ：標高47.90m）、周溝状の凹みを有する墳端とみられる。これより北側は盛土整形される。これを掘り込む８～12層の落ち込みがあり、主体部墓壙の可能性がある（未確認）。ただしこの推定墓壙は平面的にはよく精査していない（Ａ3トレンチ端に落ち込みがあるが東側は不明）。これに対応するのがＱトレンチ側の７・Ｂ層である。

Ｑトレンチ西側土層（Fig.52・55）を見ると、Ｐトレンチと異なり、浅い深度で地山となり（これは盛土の可能性もあるが、地形尾根線はＱトレンチからＳ区へ走行するのでやはり地山の高まりで問題ないだろう）、僅かに薄い盛土の痕跡がある。墳端は分かりにくいが、南側Ｐ（Ｑ-ｐ）から3.47mの傾斜変換箇所であろう（ａ：標高48.58m）。東西の墳端間の距離はおよそ7.6mを測る。その他、両トレンチともに斜面下方に溝や段造成が確認される。なおＰ・Ｑトレンチともに掘りすぎがあり、土層断面から平面図を大幅に修正している。

・**Ａ3東側・Ａ4トレンチ**（Fig.51・53，PL.12－2）

Ａ3トレンチ東側は地表直下で地山となるが、**南側土層**（Fig.53）を見ると、Ｐ2（Fig.53）から西へ2.42mの箇所で傾斜変換箇所があり（ａ：49.12m）、ここが西側墳端の可能性が高い。またこの箇所から東側は盛土のようである。Ａ3トレンチ端で墓壙？の落ち込み（１層）を検出しているが、その反対側は未確認である。東側の墳端は、Ａ4トレンチＰ1から東へ2.16mの箇所と思われるが（ｂ：47.76m）、これはＳ区の墳端に比べて内側（西側）に寄っており、本来の墳端は若干流失している可能性が高い。ただしこの外のｃ（Ｐ1から2.96m）を墳端とすると今度は外になり合致しない。いずれにしても東側は周溝状の凹みで画されるようである。その周溝よりもやや内側から西側が盛土の範囲である。Fig.53に見るように、想定される墳丘は東西でレベル差があり、また低墳丘のやや特異なものと推定される。なお本トレンチは土層により平面図を修正している。

・**Ｒ区**（Fig.51・56・57，PL.20－7）

Ａ4トレンチとＰトレンチの間の斜面に設定した南北8.7m×東西6.8mの直角三角形状の調査区。

北側土層（Fig.56）を見ると、西側Ｐから1.40mの箇所が盛土の端と推定されるが（土層断面ではちょうど根攪乱で不明確）、これが墳端の可能性がある（ａ：標高57.64m）。ただしこれより外側の地山傾斜変換箇所である西側Ｐから1.81mの箇所が墳端にあたる可能性もある（ｂ：47.64m）。なお平面図（Fig.51）ではFig.56－ｃ（西側Ｐから0.28m）の箇所を上端として線を入れているが、本来の墳頂平坦面はさらに上方である。**西側土層**（Fig.57）では、南側Ｐから2.40mの箇所が墳端と考えられるが（ａ：標高47.70m）、この上の８層は新しい遺構（攪乱？）のようである（１層は盛土下の旧表土か）。攪乱？（８層）があるが、本来は墳端近くまで盛土で整形されたようである。また北側・西側土層ともに、墳端以下の斜面に別の溝や段造成が走行することが確認される。

なおＡ4トレンチの復元等高線（地山面）とＲ区のそれはなめらかにつながらず、両トレンチ間に段差があり、Ｒ区側東半が低くなっている（テラス状）。これは古い造成と思われ、金屎古墳造営時の地山整形の可能性もあり、周囲の確認調査が必要であろう。

・**Ｓ区**（Fig.51・58，PL.20－8）

Ａ4とＱトレンチの間の斜面に設定した南北4.9～6.0m×東西6.3m前後の台形状の調査区。

南側土層（Fig.58左）では、西側Ｐから1.39mの箇所に微妙な傾斜変換箇所があり（ａ：標高48.14m）、墳端の痕跡と考えられるが、この上にある土層は東側にある新しい溝（２・３層）の覆土

の可能性があり、本来の墳端自体は遺存しないともみられる。**西側土層**（Fig.58右）では、南側Ｐから2.64mの地山斜面に微妙な傾斜変換箇所があり、Ｑトレンチとの関係からこれが墳端と考えられる。なおこれよりやや上方の南側Ｐから2.28mまでは盛土が確認される（このうち３層が盛土なら南側土層の１層も盛土となる）。調査区下方には土層図にあるように、いくつかの溝がみられるが、後世のものであろう。さらにＳ区北側はテラス状になっている。

なおＳ区およびＲ区は全体的に掘りすぎが顕著であり、土層図をもとに全面的な平面図の修正を行っている。またＳ区西側壁面も土層図があるが、墳丘に関わらないため本報告での提示は省略した。

（※52頁へ）

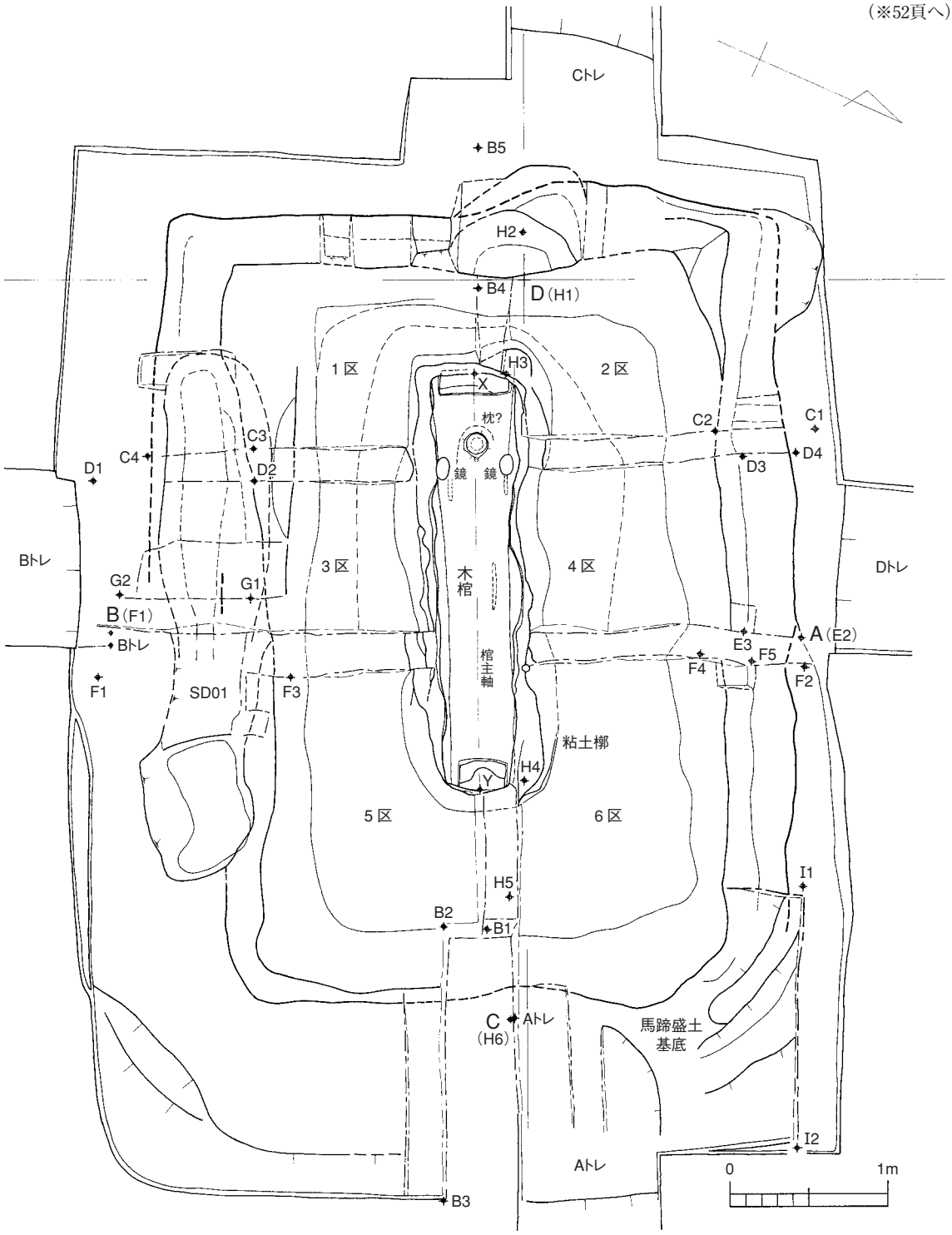


Fig.59　１号墳墳頂部主体部平面図（1/40）

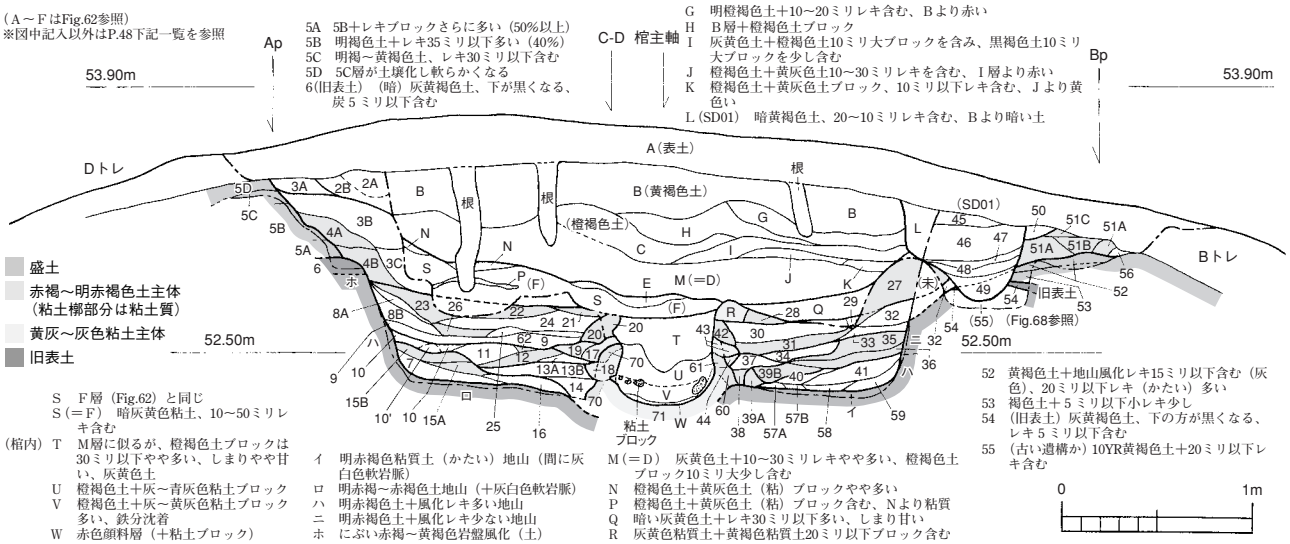


Fig.60　墳頂部主体部Ａ-Ｂ横断土層図（1/40）

Fig.60　土層注記

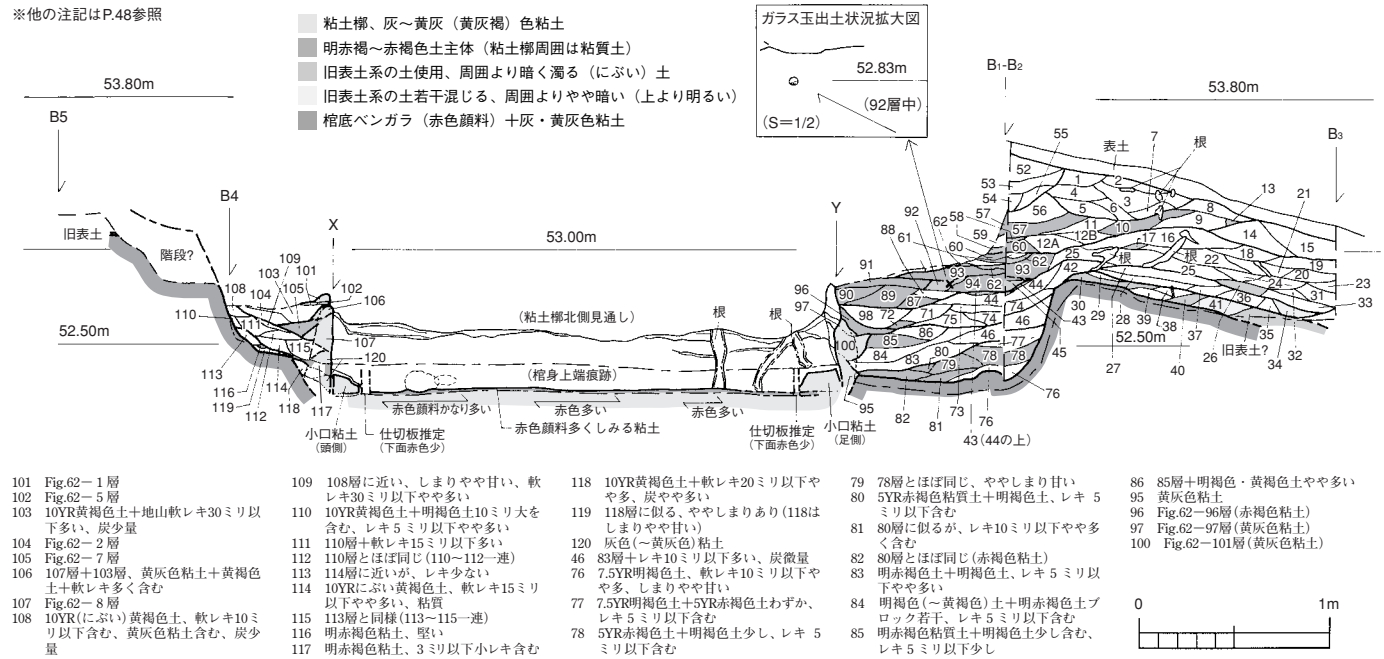
2A　黄褐色（黄灰色）土、20ミリ以下レキブロックを多く含む
2B　黄褐色（黄灰色）土、20ミリ以下レキブロックやや多い
3A　明褐色～明赤褐色土、3Bよりもレキ少ない
3B　明赤褐色土（やや粘性）、20ミリ以下レキを少し、20ミリ大黄褐色土ブロックをやや多く含む
3C　3Bとほぼ同じ、50ミリ以下の地山レキやや多い
4A　赤褐色～赤橙色土、他は4Bと同じ
4B　赤褐色土、明褐色土30ミリ以下混じる。10ミリ以下レキを少し含む
7　ホ層に近い地山の風化レキ＋風化土ブロックによる層（にぶい黄褐色～黄褐色土）
8A　8B層＋炭混じりやや多い
8B　赤褐色土（やや粘性）に明褐色土（粘性少ない）が混じる（４：６）、炭少量、地山風化レキ20ミリ以下含む、堅い層
9　赤褐色粘質土に明褐色土が混じる（６：４）、炭微量
10　明褐色粘質土、明黄褐色地山風化レキ10ミリ大若干含む、(暗) 褐灰色土粒を少量含む、やや堅い
10'　明褐色粘質土、やや堅い
11　地山風化レキブロック20ミリ以下主体層、明褐色～褐色土を間に含む、有機質（暗）褐灰色土粒含
12　赤褐色粘質土、地山レキ15ミリ以下少量含む
13A　13B層＋明褐色土混じり
13B　地山レキブロック50ミリ以下主体層、黄褐色
14　13層に類似する20ミリ前後の地山レキ主体、明褐色土を若干含む
15A　赤褐色粘質土ブロック主体、明褐色土若干含む、有機質（暗）褐灰色土粒微量、やや堅い
15B　15A層＋レキ小ブロック少ない
16　15層に近いが明褐色土が多く赤褐色土がやや少ない、暗褐灰色土粒微量含む
17・18　灰黄色粘土（粘土槨）、５ミリ以下レキを若干含む、鉄分沈着で一部明褐色化
19　橙色～明黄褐色粘土（やや灰色気味）、３ミリ以下砂礫若干含む、鉄分沈着で一部明褐色化
20　赤褐～明赤褐色粘土、３ミリ以下砂礫若干含む
21　赤褐色粘土＋黄褐色土が斑に含む、やや堅い
22・23　赤褐色粘質土＋明褐色土（粘性）が混じる（いずれも30ミリ前後のブロック状）、５ミリ以下レキを含むが４層より少ない、
24　23に類似するが明褐色土多い、５ミリ以下レキ若干含む
25　赤褐色粘質土＋明褐色土（やや粘性）、やや堅い
26　25層に類似するがやや軟らかい
62　９層に類似するが明褐色土がやや多い
27　赤褐色土（やや粘性）＋明褐色土（やや粘性）（いずれも30ミリまでのブロック状）、地山レキ20ミリ以下含み10ミリ以下多い、全体にやや赤い層
28　赤褐～明赤褐色土（やや粘性）、黄褐色土若干混じる、やや堅い、５ミリ以下レキ少量
29　褐色土＋明褐色土、全体的にやや黒い色（有機質）
30　明赤褐色土＋明褐色土、内側がやや堅く外側が軟らかい、５ミリ以下レキ若干、30ミリ以下レキ微量
31　30層に似るが明赤褐色土が多い、堅い
32　赤褐色土（やや粘性）＋明褐色土（やや粘性）、明褐色土が27層よりも多くありやや暗く見える、炭混じり有機質褐色土粒少量含む、15ミリ以下レキを含む
33　赤褐色土（やや粘性）＋明褐色土（やや粘性）、レキ15ミリ以下少量、炭微量
34　黄灰褐色地山風化レキブロック主体層、赤褐色土・明褐色土がすき間に入る
35　赤褐色土（やや粘性）＋明褐色土、レキ10ミリ以下少量、地山レキ30ミリ以下少量
36　(明) 赤褐色粘質土＋褐色土（褐灰色土）（褐色土がやや多い）、地山レキ10ミリ以下若干含む
37　34層に類似（地山風化土ブロック層）、40ミリ大レキ少し含む
38　明赤褐色土＋灰色（褐灰色）粘質土
39A　39B層にほぼ同じだがより粘性がある
39B　明赤褐色粘質土、やや軟らかい、明褐色土混じる、３ミリ以下砂礫含む
40　39層（明赤褐色土＋明褐色土）＋暗灰黄色土（やや粘性）混じる、赤＋黒の斑状の層、３ミリ以下砂礫少量あり
41　39層に類似するが明褐色土多い、５ミリ炭微量あり
42　20層と同じ（明）赤褐色粘土
43・44　17・18層に同じ灰黄色粘土、５ミリ以下レキ若干含む
57A　明赤褐色粘質土
57B　57A層＋黄褐灰色レキブロック
58　やや黄色味ある褐灰色軟質レキブロック＋明褐色（明赤褐色土）
59　明褐色土＋褐灰色土ブロック
60　明赤褐色粘質土、15ミリ以下褐灰～灰色粘質軟質レキブロック含む
61　橙色～明赤褐色粘質土、灰色軟質レキ３ミリ以下含む
70　灰色～灰赤色粘土＋赤褐色粘土のブロック土混合
50　明褐色土、10ミリ以下レキ若干
51A　51Bにほぼ同じだがレキやや少ない
51B　明赤褐色土、20ミリ以下レキ斑状に含む、５ミリ以下レキ若干含む
51C　51A層にほぼ同じ
45～49　SD01覆土
45　黄褐色土、10ミリ以下地山レキ（やや多いか）含む
46　黄褐色～褐色土、10ミリ以下レキ含む、20ミリ以下レキ微量、炭微量
47　黄褐色土＋明褐色土若干混じる、45・46より赤い感じ、炭微量、５ミリ以下レキ若干含む
48　（ややにぶい）黄褐色土＋明褐色土若干混じる、20ミリ以下レキ微量、５ミリ以下レキ若干
49　（ややにぶい）黄褐色土＋赤褐色土10ミリ以下ブロック少量含む、レキ10ミリ以下若干含む、炭微量

Fig.61土層注記（補遺）

71　明褐色土＋明赤褐色土微量、５ミリ以下レキ含む
72　明赤褐色土＋明褐色土少量、３ミリ以下砂礫含む
73　明褐色土＋明赤褐色土混じる、地山軟質レキ20ミリ微量、５ミリ以下レキ含む
74　明褐色土（やや多）＋明赤褐色土、地山軟質レキ微量、10ミリ以下レキ含む
75　74層と似るが明褐色土がより多い
87　赤褐色粘質土＋明褐色土、レキ５ミリ以下含む
88　明褐色土、レキ５ミリ以下含む、炭少量
89　明赤褐色粘質土、明褐色土混じり、地山レキ20ミリ以下やや多い、にぶい黄褐色土粒５ミリ以下を少量含む
90　89層に似るが明赤褐色土がより多い
91　明赤褐色土＋明褐色土、地山軟質レキ10ミリ大微量、レキ５ミリ以下含む、炭微量、上面に炭粒含むにぶい黄褐色土ブロックを少量含む
92　黒褐色～にぶい暗黄褐色土（旧表土由来か）、明赤褐色土・明褐色土を少量含む、炭少量、ガラス小玉１点包含
93　明赤褐色土（やや粘性）＋明褐土混じる、10ミリ以下レキを含む
94　明赤褐色土（やや粘性）＋明褐色土混じる、炭微量、10ミリ以下レキ含む
52　Fig.62－102層
53　Fig.62－103層
54　Fig.62－104層
55　黄褐色土＋明褐色土、レキ10ミリ以下含む、52～54よりやや赤い
56　Fig.62－108層
57　明赤褐色土（やや粘性）＋明褐色土混じり、やや赤い、炭微量、10ミリ以下地山レキ含む
58　オリーブ褐色ブロック土（炭やや多く含む）＋明褐色土混じり、レキ５ミリ以下含む、旧表土由来
59　明褐色土、明赤褐色土10ミリ以下微量含む、炭微量、レキ５ミリ以下含む
60　明赤褐色（やや粘性）＋明褐色土混じり、炭少量、５ミリ以下レキ含む
61　明褐色土、炭微量、レキ５ミリ以下含む
62　58層に類似するがオリーブ褐色土やや少ない、炭化土の下部に焼土化（暗赤褐色）した塊部分あり（旧表土由来だが旧表土を焼いた痕跡か）
63　Fig.62－109層
1　（ややにぶい）黄褐色土（やや暗い）、レキ10ミリ以下含む
2　明褐色～黄褐色土、５ミリ以下レキ含む
3　４・７層に似るが、４層よりやや赤く、７層より赤みが少ない
4　１層に似るがやや赤い（明褐色土）、５層より赤みが少ない、５ミリ以下レキ含む
5　明褐色土、レキ20ミリ以下少量、レキ５ミリ以下含む
6・8・16・21　明褐色土、レキ5ミリ以下含む
7・9　明褐色土～黄褐色土（６・８層より黄色っぽい）、レキ５ミリ以下含む
10　明赤褐色土＋明褐色土少し含む、レキ５ミリ以下含む
11　明褐色土、レキ５ミリ以下やや多く含む
12A　明褐色土、レキ５ミリ以下含む、炭微量
12B　12Aとほぼ同じだがしまり甘い
13　褐色土（10YR）、旧表土由来の暗く濁る土
14　明褐色土＋黄褐色土混じる、炭若干含む
15・18・22　黄褐色土、レキ５ミリ以下含む
17　オリーブ褐色（2.5Y）＋黄褐色土若干混じる、レキ５ミリ以下含む、旧表土由来か
19　明褐色土、レキ10ミリ以下含む
20　黄褐色土＋明褐色土10ミリ大以下をまばらに含む、地山レキ20ミリ以下まばらに含む、レキ10ミリ以下やや多く含む
23　にぶい黄褐色土、レキ５ミリ以下やや多く含む、
24　明褐色土＋黄褐色土混じり、レキ５ミリ以下含む
25　24層に近いが明褐色土大部分で黄褐色土少ない
26　にぶい黄褐色土（10YR）＋黄褐色土５ミリ大を斑状に含む、炭微量、旧表土由来か
27　黄褐色土、地山軟質レキ10ミリ以下やや多く含む
28　27層に似るが地山レキより多く含む
29　黄褐色土、砂礫３ミリ以下含む
30　黄褐色土（2.5Y）、灰黄褐色土を班状に含む、旧表土由来
31　褐色～黄褐色土、レキ５ミリ以下含む
32　黄褐色土、レキ５ミリ以下含む
33　明褐色土、炭微量、砂礫３ミリ以下含む
34　にぶい褐色土（7.5YR）、砂礫３ミリ以下含む、炭微量
35　34層に似るがボソボソ（根の影響か）
36　(濃い) 明褐色土、砂礫３ミリ以下含む
37　明褐色土、地山軟質レキ10ミリ以下含む
38　明褐色土、地山軟質レキ20ミリ以下含む
39　明褐色土、レキ５ミリ以下含む、やや濁った土で旧表土由来か
40　灰黄褐色土（10YR）＋明褐色土混じり、炭微量、旧表土由来
41　明褐色土＋黄褐色土若干混じる、砂礫３ミリ以下含む
42　明褐色土＋明赤褐色土10ミリ大少量含む、地山軟質レキ10ミリ以下含む
43　明褐色土＋暗灰黄色土（2.5Y）有機質土５ミリ大前後を少量含む、レキ５ミリ以下含む、炭微量、旧表土由来
44　明褐色土＋明赤褐色土20ミリ以下少量含む
45　明褐色土＋明赤褐色土10ミリ大、黄褐色土（にぶく有機質土か）５ミリ大を少量含む、レキ５ミリ以下含む

Fig.62土層注記（補遺）

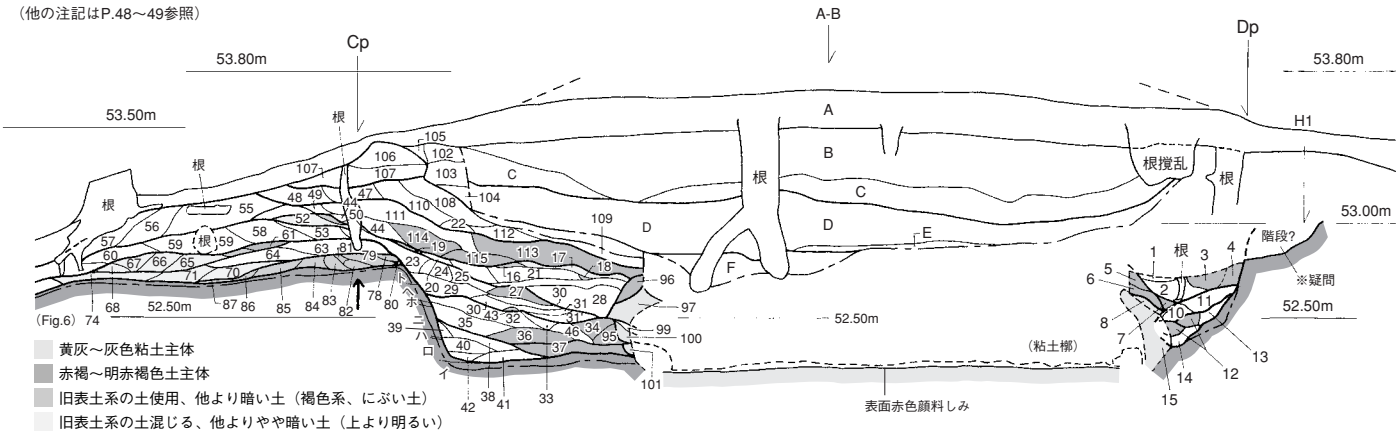
105　黄褐色土、レキ５ミリ以下含む
106　明褐色～褐色土、レキ10ミリ以下含む
107　明褐色土（やや粘性）、レキ10ミリ以下含む
108　明褐色土＋明赤褐色土（やや粘性）20ミリ大以下をまばらに含む、レキ５ミリ以下含む、炭微量
110　明褐色土（やや粘性）
111　褐色～明褐色土＋明赤褐色土（やや粘性）を少量含む
112・33　明褐色土、砂礫３ミリ以下含む
113　明赤褐色土（やや粘性）＋赤褐色土、炭15ミリ以下若干含む
114　明赤褐色土（やや粘性）＋明褐色土混じり、レキ10ミリ以下多い、レキ20ミリ以下少量含む
115　赤褐色（やや粘性）＋明褐色土混じり、炭少量、砂礫3ミリ以下含む
16・22　褐色土＋明褐色土、レキ５ミリ以下含む、炭少量(褐色土内)
17・53　明褐色土、レキ５ミリ以下含む、炭微量(17)～少量(53)
18　にぶい黄褐色土（やや粘性）、砂礫３ミリ以下含む、旧表土由来か
19・49　明褐色土、レキ５ミリ以下含む
20　明赤褐色粘質土＋明褐色土混じり、レキ５ミリ以下含む、炭少量
21・46　明褐色土（やや粘性）、レキ５ミリ以下若干（少量）含む
23　明褐色土（やや粘性）、レキ５ミリ以下含む、炭少量
24　23層とほぼ同じ（やや黄褐色気味）
25　明褐色～橙色土（やや粘性）、レキ５ミリ以下含む
26　橙色土（7.5YR）
27　28層に似るが明赤褐色土がやや多い（25%）
28　明褐色土＋明赤褐色粘質土30ミ大以下まばらに含む（10%）、炭微量
29　明褐色土＋やや濃い明褐色粘質土20ミリ以下を含む（30%）、炭微量、レキ５ミリ以下含む
30　黄褐色土（やや粘性）、砂礫３ミリ以下含む
31　明褐色土（やや粘性）、レキ５ミリ以下若干・10ミリ以下微量含む
32　明褐色土＋明赤褐色粘質土10ミリ大30%含む、炭微量、レキ５ミリ以下若干含む
34　明赤褐色粘質土＋明褐色土若干混じる、レキ５ミリ以下少量含む
35　明褐色土＋赤褐色粘質土10ミリ大含む（10%）、レキ５ミリ以下若干
37　赤褐色粘質土、レキ３ミリ以下若干含む
38・40・54　明褐色土（やや粘性）、砂礫３ミリ以下含む、40層はやや濃い土色
39　黄褐色土、レキ５ミリ以下若干含む、炭微量
41　黄褐色土（やや粘性）、レキ10ミリ以下若干含む
42　明褐色土（やや粘性）＋黄褐色土混じり、レキ５ミリ以下若干含む、しまりやや甘い
43　灰黄褐色土（やや粘性）＋黄褐色土混じり、砂礫３ミリ以下若干含む、旧表土由来？の濁った土層
44　114層に類似、レキがやや少ない（レキは10ミリ以下のみ）
45　にぶい（暗）黄褐色土（旧表土由来）＋黄褐色土混じり、砂礫３ミリ以下含む
47　明褐色土（やや粘性）、レキ５ミリ以下やや多い、10ミリ大レキ微量
48　47層とほぼ同じだがやや薄い（明るい）明褐色土（47層は濃い色）
50・51　褐色土(7.5YR)(やや粘性)＋にぶい黄褐色～褐色土(10YR)を含む、砂礫３ミリ以下若干含む、旧表土由来か(やや濁った色)



101　Fig.62－１層
102　Fig.62－５層
103　10YR黄褐色土＋地山軟レキ30ミリ以下多い、炭少量
104　Fig.62－２層
105　Fig.62－７層
106　107層＋103層、黄灰色粘土＋黄褐色土＋軟レキ多く含む
107　Fig.62－８層
108　10YR(にぶい)黄褐色土、軟レキ10ミリ以下含む、黄灰色粘土含む、炭少量
109　108層に近い、しまりやや甘い、軟レキ30ミリ以下やや多い
110　10YR黄褐色土＋明褐色土10ミリ大を含む、レキ５ミリ以下やや多い
111　110層＋軟レキ15ミリ以下多い
112　110層とほぼ同じ（110～112一連）
113　114層に近いが、レキ少ない
114　10YRにぶい黄褐色土、軟レキ15ミリ以下やや多い、粘質
115　113層と同様（113～115一連）
116　明赤褐色粘土、堅い
117　明赤褐色粘土、３ミリ以下小レキ含む
118　10YR黄褐色土＋軟レキ20ミリ以下やや多、炭やや多い
119　118層に似る、ややしまりあり（118はしまりやや甘い）
120　灰色（～黄灰色）粘土
46　83層＋レキ10ミリ以下多い、炭微量
76　7.5YR明褐色土、軟レキ10ミリ以下やや多、しまりやや甘い
77　7.5YR明褐色土＋5YR赤褐色土わずか、レキ５ミリ以下含む
78　5YR赤褐色土＋明褐色土少し、レキ５ミリ以下含む
79　78層とほぼ同じ、ややしまり甘い
80　5YR赤褐色粘質土＋明褐色土、レキ５ミリ以下含む
81　80層に似るが、レキ10ミリ以下やや多く含む
82　80層とほぼ同じ（赤褐色粘土）
83　明赤褐色土＋明褐色土、レキ５ミリ以下やや多い
84　明褐色（～黄褐色）土＋明赤褐色土ブロック若干、レキ５ミリ以下含む
85　明赤褐色粘質土＋明褐色土少し含む、レキ５ミリ以下少し
86　85層＋明褐色・黄褐色土やや多い
95　黄灰色粘土
96　Fig.62－96層(赤褐色粘土)
97　Fig.62－97層(黄灰色粘土)
100　Fig.62－101層(黄灰色粘土)

0　1m

Fig.61　墳頂部主体部B5-B3（棺主軸）縦断土層図（1/40）



95　明赤褐色粘土＋明褐色土、レキ５ミリ以下少し
96　赤褐色粘土、３ミリ以下小レキ少し
97　2.5Yにぶい黄色粘土(黄灰色粘土)レキ５ミリ以下含む、一部明黄褐色土化
99　7.5YR明褐色土(粘)、炭少量、小レキ３ミリ以下少し
100　2.5Y黄褐色粘土(黄灰褐色)、５ミリ以下レキ少し、炭微量
101　100と同じ、赤色顔料粒子わずかに含む
102　明黄褐色土に地山レキ10ミリ以下含む
103　明黄褐色～黄褐色土に地山レキ20ミリ以下多く含む
104　黄褐色土に明褐色土10ミリ大、レキ10ミリ以下含む
109　明褐色土に明赤褐色土少し混じる
A　表土(植物の影響大きい腐食土)
B　黄褐色土、20ミリ以下レキ多い(しまりやや甘い)
C　橙褐色土(にぶい黄褐色土)、やや粘性、20ミリ以下のレキと黄褐色土を斑状に含む
D　灰黄色土＋橙褐色土、20ミリ以下地山風化レキ含む
E　橙褐色土(やや粘性)、有機質痕跡か
F　暗灰黄色土(粘性あり)、Eの小ブロック土と10～50ミリ風化レキ含む
イ　ややかたい岩脈地山
ロ　軟質化した岩脈
ハ　同上
ニ　明赤褐色粘質土、５ミリ以下小レキ含む
ホ　軟質化した岩脈
ヘ　5YR明赤褐色土(粘)、５ミリ以下レキ少し含む
ト　7.5YR明褐色土地山、ややかたく、10ミリ以下レキ含む
1　10YR黄褐色土＋軟レキ10ミリ以下含む
2　7.5YR明褐色土＋7.5YR橙色土(粘)20ミリ大を含む
3　7.5YR明褐色土＋5YR明赤褐色土30ミリ以下大を含む(やや粘性)、赤く見える
4　３とほぼ同じ、しまりややあり、炭微量
5　10YR黄褐色土＋7.5YR明赤褐色土(粘)を含む、炭微量、やや赤く見える
6　5YR明赤褐色土(粘)
7　５に似るが、明赤褐色土が多い
8　にぶい黄色(2.5Y)土(粘)(黄灰色粘土)、レキ10ミリ以下含む
10　黄褐色(10YR)土＋明褐色(7.5YR)土＋地山軟レキ20ミリ以下多い
11　10YR黄褐色土に7.5YR明褐色土(粘)斑状に含む、軟レキ10ミリ以下多い
12　明赤褐色粘土(5YR)
13　7.5YRの明褐色土にやや暗い7.5YR明褐色土(粘)10ミリ大含む、地山レキ30ミリ以下多い
14　10YR黄褐～にぶい黄褐色土、地山軟レキ20ミリ以下多い、炭微量
15　８層と同じ黄灰色(にぶい黄色)粘土

0　1m

Fig.62　墳頂部主体部C-D（墳丘仮主軸）縦断土層図（1/40）

Fig.62土層注記補遺（続き）

52　明褐色土＋オリーブ(暗)褐色土、砂礫３ミリ以下含む、炭微量
54　明褐色土（やや粘性）、砂礫３ミリ以下含む
55　明褐色土（やや粘性）、レキ５ミリ以下含む、54層より濃い土色
56・57・58　明褐色土（やや粘性）、レキ５ミリ以下含む、57層はやや黄色い（黄褐色気味）、58は炭微量含む
59　56層＋明赤褐色粘質土10ミリ大少量含む、レキ10ミリ以下少量、レキ５ミリ以下含む
60　明褐色土（56～58よりやや濃い色）、レキ５ミリ以下若干含む
61　明赤褐色土（やや粘性）、レキ５ミリ以下少量含む
62　にぶい（暗）黄褐色土（やや粘性）、レキ５ミリ以下含む、旧表土由来
63　灰白色地山軟質レキ20ミリ以下ブロック＋黄褐色土すき間に含む、レキ10ミリ以下含む
64　63層に類似するが軟質レキ10ミリ以下（黄褐色土＋軟質レキ）
65　黄褐色土(やや粘性)、砂礫３ミリ以下若干含む、ややにぶい土色
66・68　褐色土、レキ５ミリ以下含む、65層よりも暗くしまりが甘い
67　褐色土（66層よりややにぶく暗い色）、しまりやや甘い
70　明褐色土、レキ５ミリ以下多く含む、炭微量、濁った色（旧表土由来）
71・72　明褐色土（70層よりやや暗い）、レキ５ミリ以下を含む（72はふつう、71は多い）、炭少量、濁った色（旧表土由来）
73　にぶい褐色～明褐色土、レキ５ミリ以下含む、炭少量、（Fig.6－７層）
74　（やや暗い）明褐色土、砂礫３ミリ以下含む、炭少量、旧表土由来か
75　（やや明るい）明褐色土（やや粘性）、砂礫３ミリ以下含む、炭少量
76　明褐色土（やや粘性）、75層より明るい、砂礫３ミリ以下微量
78・80・82・84・86・87　黄褐色土＋にごった有機質含むにぶい黄褐色土５ミリ大を少量混じる、旧表土由来の土（旧表土を整地したか）
79・85　78層＋黒褐色土部分あり、有機質分多く（黒褐色土）炭もやや多く含む
81　78層他に類似するが黄褐色土がより多い

（※49頁から）

以上、「３号墳」については未確認部分を残したり、調査時に意識的な追求がなされなかったため不明な部分も多く、また現状の墳丘遺存状況（やや不整形）が悪いこともあり確実ではないが、中央やや南側に南北の主体部が推定され、南北7.7m×東西4.8m前後の長方形墳丘が想定される（Fig.51）。

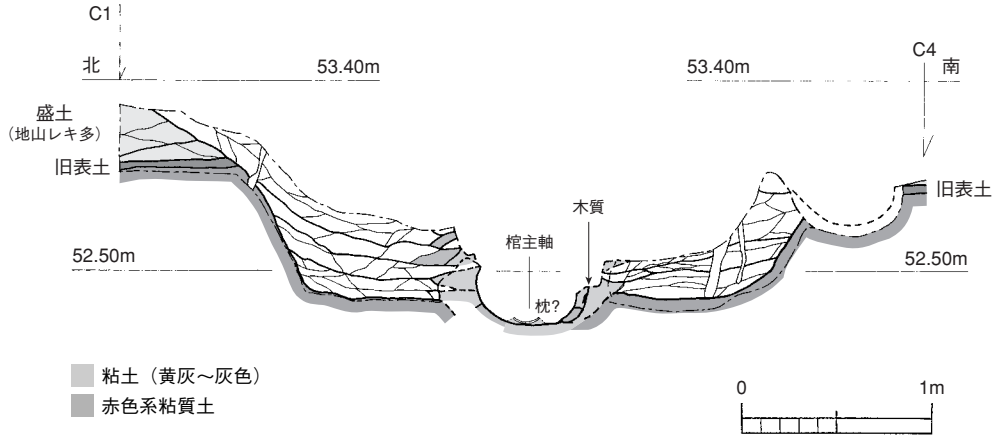


Fig.63　墳頂部主体部墓壙１・２区東側横断土層図（1/40）

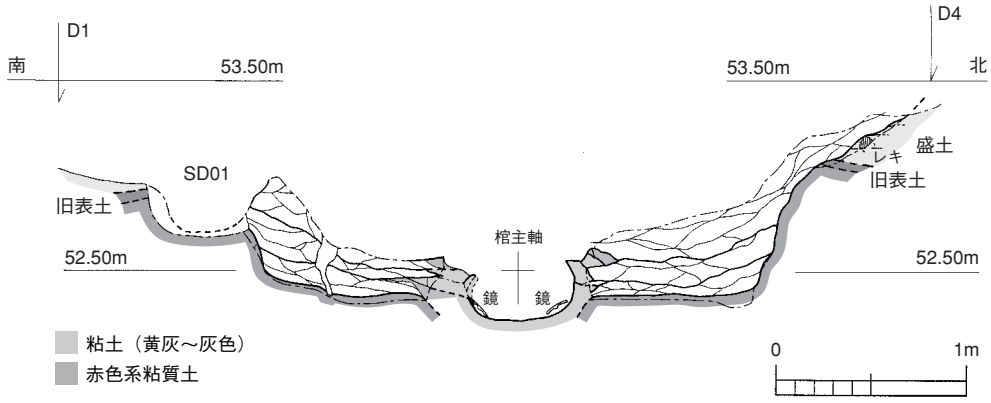


Fig.64　墳頂部主体部墓壙３・４区西側横断土層図（1/40）

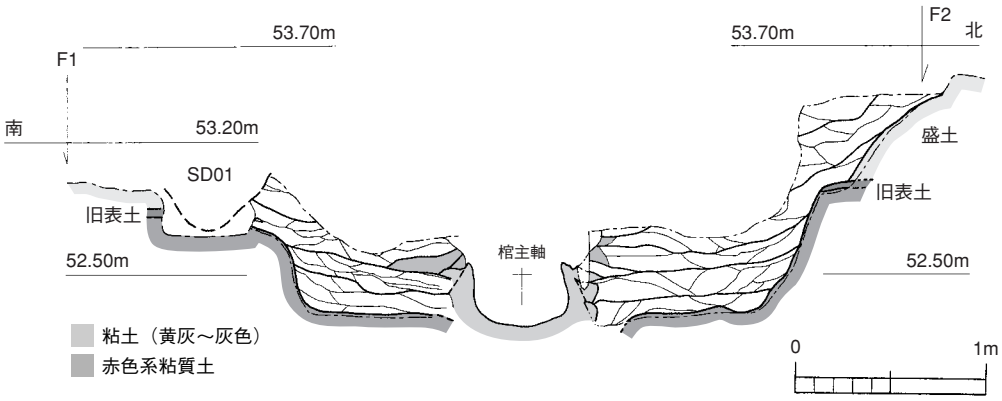


Fig.65　墳頂部主体部墓壙５・６区西側横断土層図（1/40）

３）主体部の調査（Fig.59～69，PL.2－1～9－6）（※挿図は49頁以下）

主体部については、墳丘の報告に多くの紙面を割いてしまったため、紙幅の都合上、十分な記述報告ができない。いずれ詳細を補う機会を設けたいと思う。また編集上の不手際により挿図と本文の説明記述頁が離れてしまい、分かりにくい報告となったことについてはご寛恕願いたい。ただし、各図中に細かい説明を入れているので、それらを参照すればある程度の理解が得られると思う。

主体部（埋葬施設）は、割竹形木棺をおさめた粘土槨である（Fig.59・67）。後円部中央に位置し、木棺の主軸は墳丘主軸とおおむね同じである（わずかに南に寄る）。粘土槨をおさめる**墓壙**は、東西5.2m×南北4.1mである（Fig.59，PL.4－3～6－1）。これは後述する「構築墓壙」の南・西・北側構築壁を含めた数値で、地山上面における規模は、東西4.6～4.8m×南北3.2mである。また掘り方下端は3.9m×2.2～2.4mを測る。墓壙および粘土槨の調査は、6区に分けて精査を行った（Fig.59）。なお墓壙壁西側に「階段」があるとの調査認識もあったが（Fig.61･62）、土層による裏付けが取れず、位置的にも主軸から片寄り、この墓壙西側は作業空間としては狭く、「階段」を設置する意味が無いことから疑問と判断する。

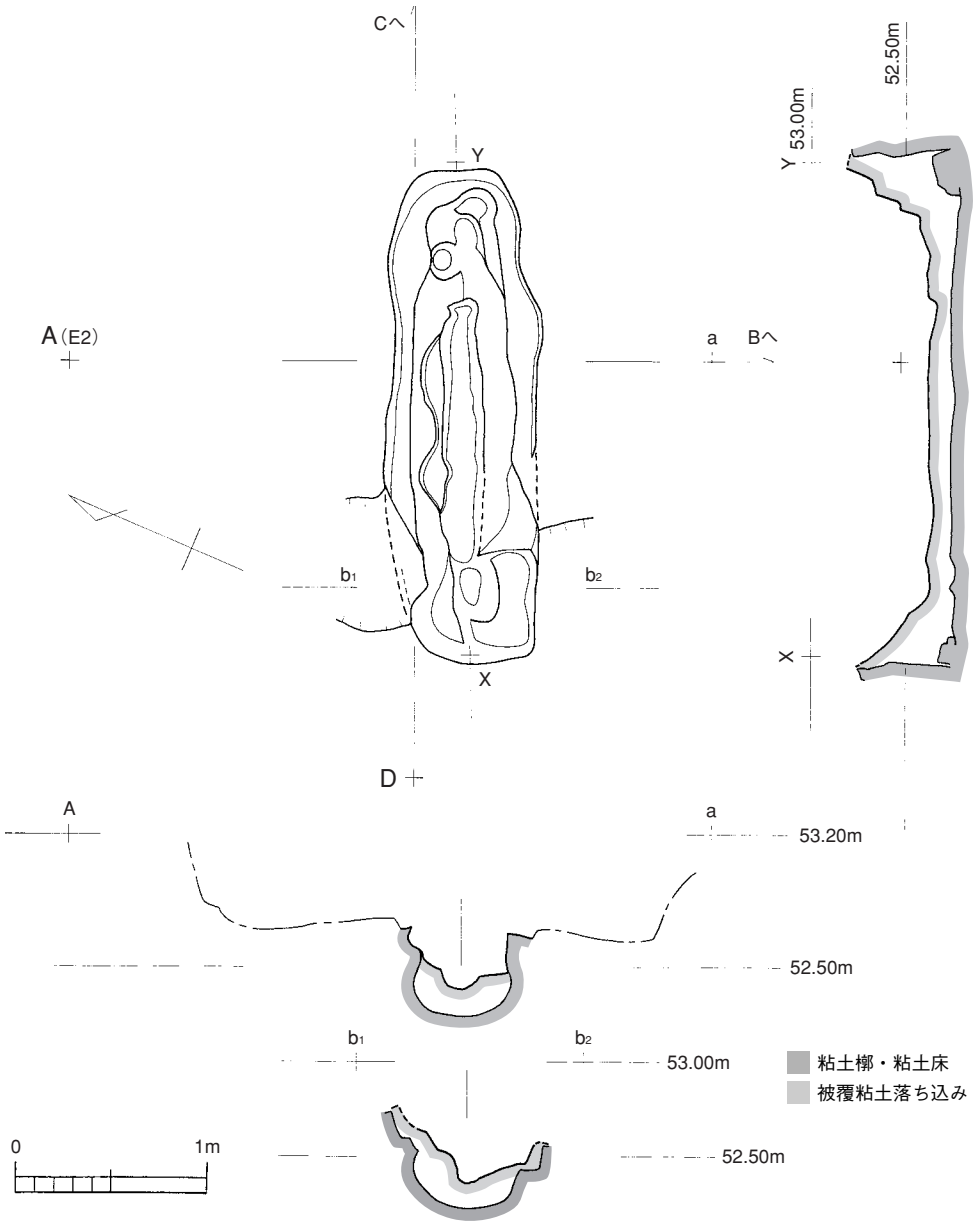


Fig.66　主体部粘土槨落ち込み確認状況図（1/40）

墓壙は、土層の検討や平面的な精査の結果から「**構築墓壙**」と判断したが、その根拠は以下の通りである（巻頭図版4・5も参照）。①地山面よりも上部において、東側縦断土層（Fig.61・62）には墓壙壁が無い。南・西・北側は地山レキが多数入る層が墓壙壁として認識されるが（Fig.60・63～65，PL.7－5・6，PL.8－1）、東側にはこれが無く（PL.8－4・5，PL.9－2～10－1）、墓壙埋土と盛土が一体化し、「作業道」の存在が考えられる。②南・西・北側の地山旧表土より上面の墓壙壁は、地山を掘削した部分の墓壙壁と比較して傾斜顕著に緩やかにし（Fig.65右側のように旧表土面上に極狭のテラス状部分が傾斜変換箇所にある。PL.8－1，PL.9－1参照）、旧表土面より上は掘り込みではなく墓壙壁を盛土構築したとみられる（東側を開放した墓壙周囲の馬蹄形盛土が想定できる）。③東側での作業道の存在の推定に対応し、粘土槨の位置が墓壙の西側に寄っている（東側が作業空間とみられる）。④また墳頂部北東部（墳頂6区）では、「構築墓壙」の構築壁をなす馬蹄形盛土の基底となった地山整形がみられる（Fig.59・69，PL.10－3～6）。以上より、この墓壙は下部が掘り込み墓壙、上部が東

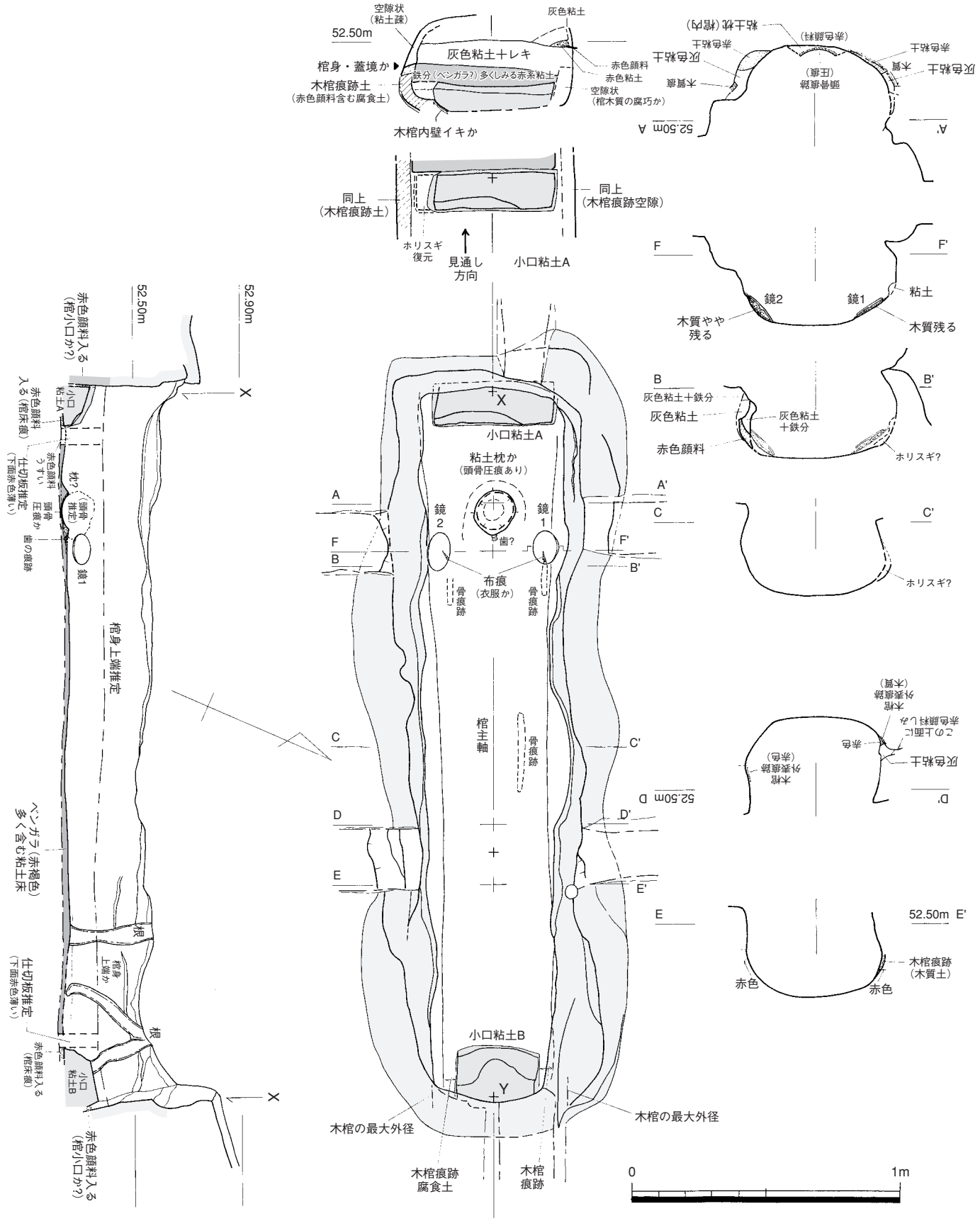


Fig.67　粘土槨・木棺平面図・断面図・出土状況図（1/20）

側に「作業道」を有する構築墓壙であることが認識できる。墓壙構築・盛土過程の大略は以下のように推定される。①旧地表面から長方形の墓壙を掘削し、掘削土を周囲に盛土し周囲に墓壙壁を構築し

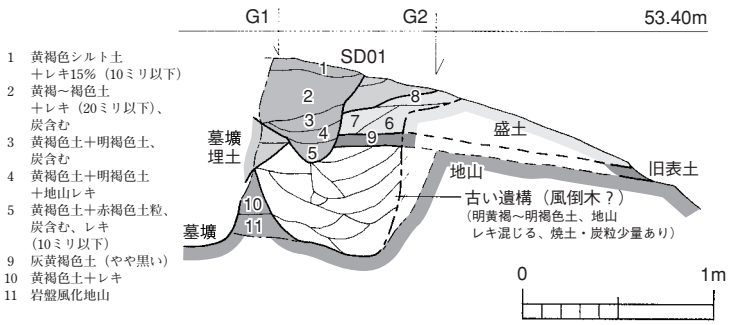


Fig.68　墳頂部SD01（G1-G2）土層図（1/40）

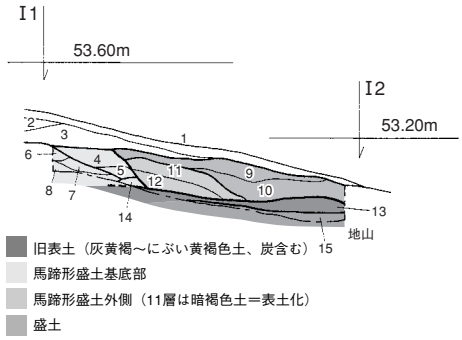


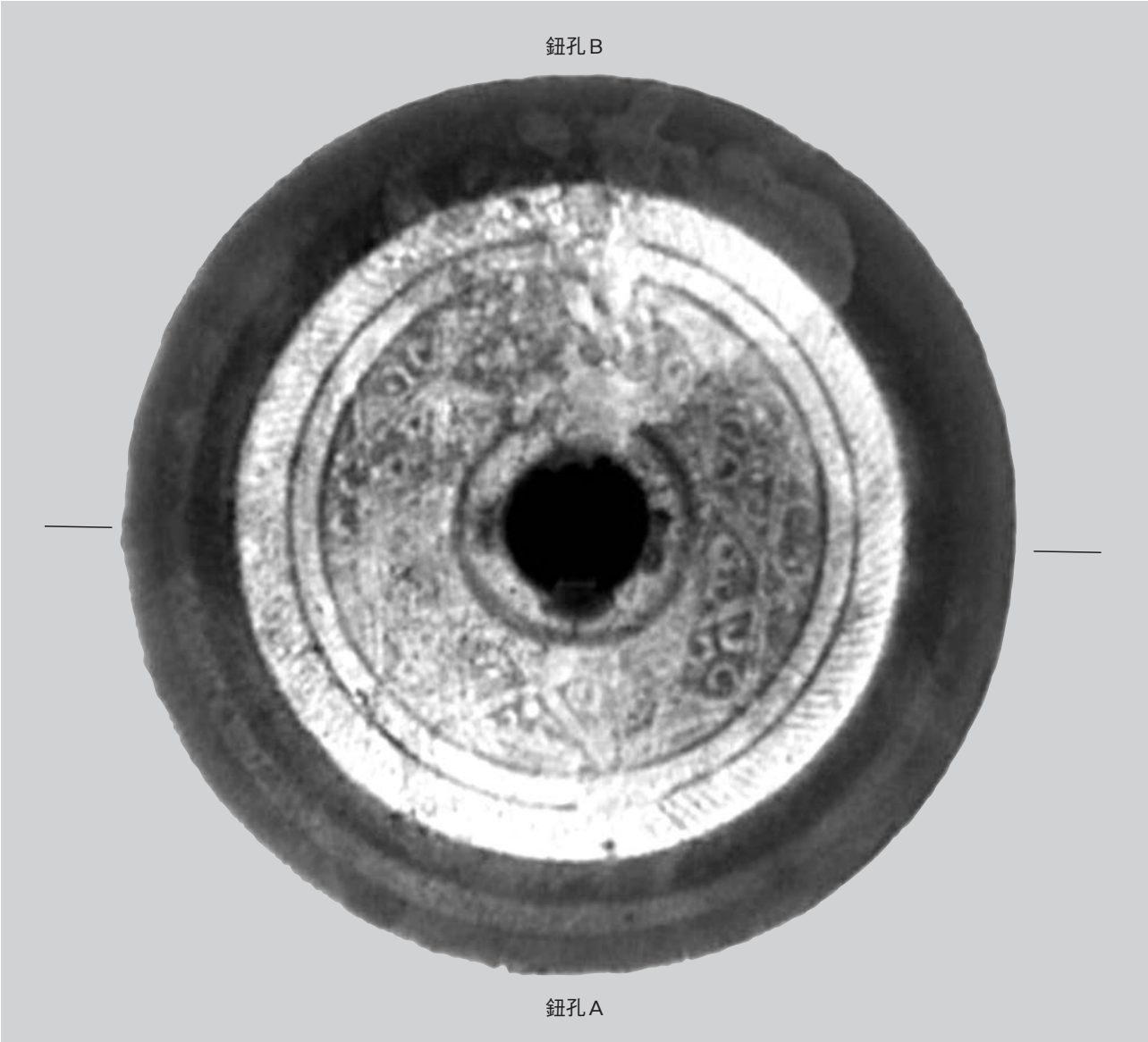
Fig.69　墳頂部６区北側（I1-I2）土層図（1/40）

大きな墓壙状とするが、東側のみは盛土されず作業道を残す。②粘土槨構築・埋葬行為終了後、最終的に墓壙を埋めて後円部上部を盛土する過程の中で東側の作業道も埋めていく。（Fig.81参照）

粘土槨は被覆粘土と地山を掘り込んで作った棺床の粘土床からなる構造である（Fig.60・63～65，PL.4－3）。検出時には被覆粘土の棺内への落ち込みが確認された（Fig.60・66，PL.2－4）。粘土槨は灰色粘土を主に用いるが、途中と被覆粘土の上部には赤褐色粘土も用いる。粘土床から側面の粘土槨の構築には３段階程度の小工程があり、さらに被覆粘土の工程がある。また木棺両小口に粘土塊があり小口の支えとみられる（Fig.67の「小口粘土」）。木棺の長さは2.7m、幅は西側が最大外径67cm、東側が50cmとなる（Fig.67）。底面は丸みを有するも平底気味であるが、**割竹形木棺**としてよいと考える（PL.3－1，PL.6－2）。棺身は低く15～20cmが想定されるが、両側被覆粘土から推定すると棺の高さは36cm前後であろう。木棺の厚みは痕跡から最大５cm前後か（小口側は薄い可能性がある）。縦断面の東西両端には小口板の痕跡があり、また「小口粘土」の内側に仕切板が推定される（Fig.67の縦断面図参照）。なお、可能ならば小口部と横断面の裁割り調査による確認が必要であった。

頭位は棺幅から西とみられ（ただし底面レベルはあまり変わらない）、被葬者頭部付近両側に、いずれも鏡面を内にして**銅鏡２面を副葬**していた（巻頭図版３－1，PL.2－1・2，PL.4－1・2）。南（右）側が「菱雲紋鏡」、北（左）側が「芝草紋鏡」である（ここでの左右は被葬者から見た場合）。鏡の下面には木棺木質が遺存していた（巻頭図版４－2）。なお頭部下には粘土の高まりがあり、頭蓋骨と見られる圧痕が認められた。おそらく棺内に設置された粘土枕であろうと思われる。また下顎骨および歯の痕跡もあった。左右の鏡から東側にかけて腕骨の、棺中央北側には左下肢骨にあたる痕跡土が検出された。左右の鏡の鏡面に布が顕著に付着しているが、これは被葬者の衣服であった可能性が高い。床全面にはベンガラ（**赤色顔料**）が塗布され浸透し（巻頭図版３－1）、頭部（推定顎部分に多い）には水銀朱が撒かれていた（Fig.67，巻頭図版３－2）。副葬品は銅鏡２面のみであり、棺中央より東側は何も検出できなかった。棺内の土は別に取り上げて後に精査したが、他に遺物は無かった。その他、粘土槨落ち込み（Fig.66）から古式土師器の小型甕（壺？）の胴部小片１点と、墓壙埋土中（Fig.61，PL.8－3，巻頭図版４－3）からガラス小玉１点を検出した。小玉の出土は土層精査中に気づいたものだが、墓壙の掘削は短期間で行っているため（棺内埋土のみは全て別に集め後に精査したが墓壙埋土は全て廃土とした）、他にもあった（墓壙を埋める過程の儀礼など）可能性を否定できない。

墳頂部南側には、木棺に平行して**SD01**が検出された（Fig.59，PL.6－3～5）。墓壙を切る。幅50～70cm、3.34m長を測る。SD01は当初、別の木棺痕跡（「第２主体」と仮称）とも認識したが、平面プランがやや不整形であり、断面がＵ字状であるが場所により異なること（Fig.60・68）、掘り方がみられないことなどから埋葬施設ではなく、後世の溝状遺構と判断する。出土遺物はない。またSD01の下の一部には、古墳以前の古い遺構（風倒木痕？）もみられた（Fig.68）。



Ph.1　菱雲紋鏡X線写真（実大）

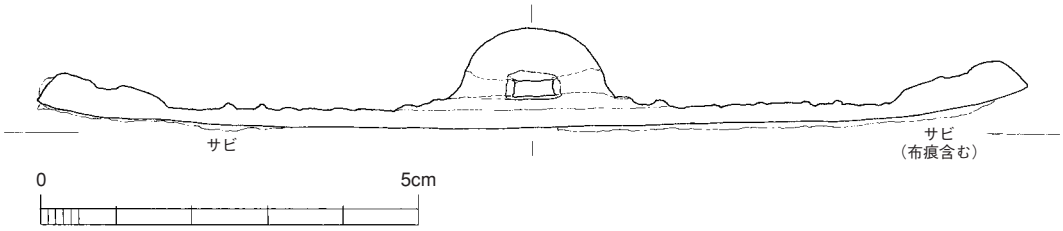
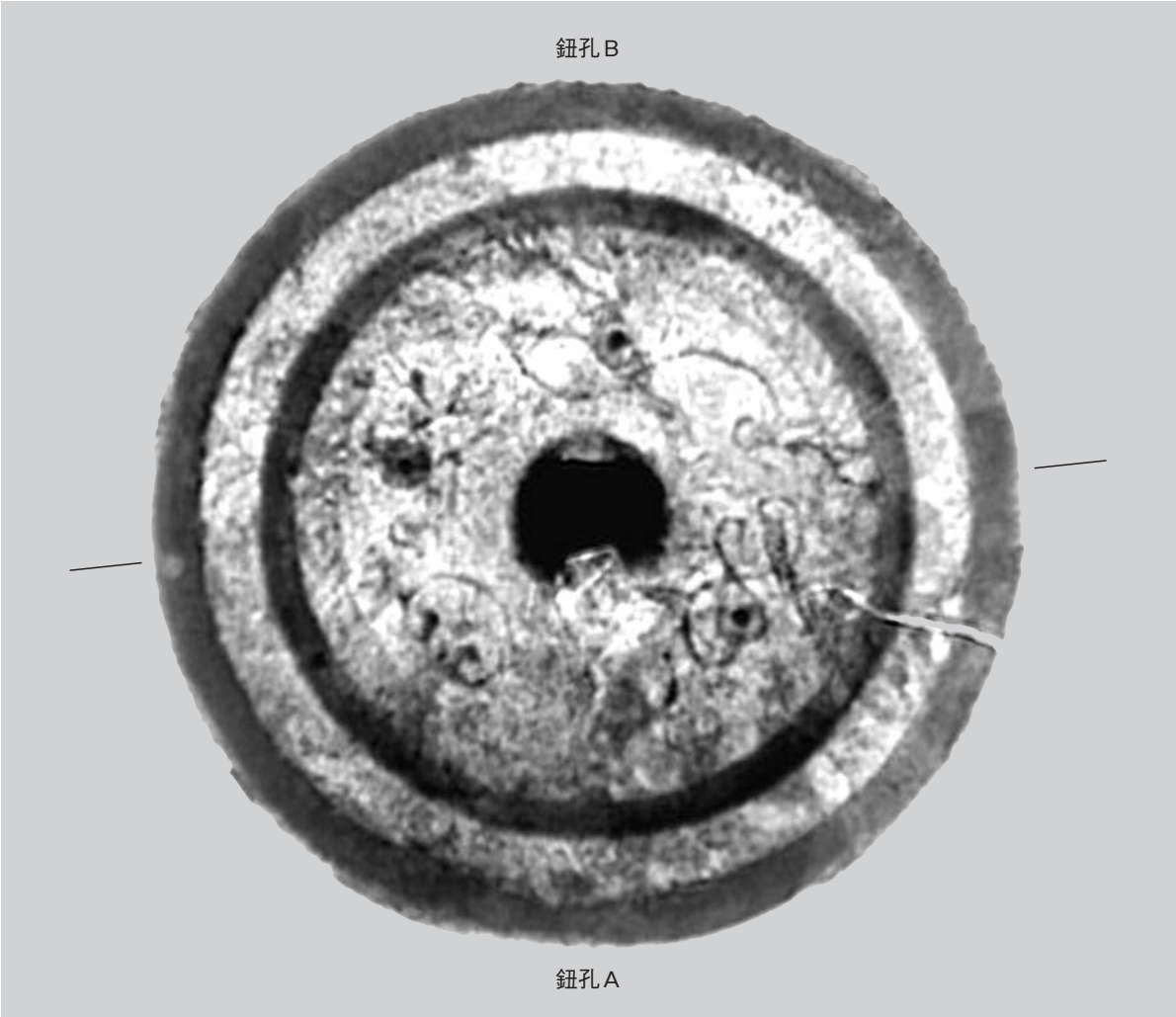


Fig.70　主体部出土菱雲紋鏡実測図（1/1）

4）出土遺物

（1）銅鏡（PL.21－1～4，巻頭図版6・7）

Ph.1（Fig.70）は「**菱雲紋鏡**」である。面径は鈕孔方向で13.2cm、その直交方向で13.15cmを測る。鈕孔部分の高さは13mm、内区の厚さは2～3mm、外区は4～5mmを測る。鏡面の反りが3～5mmある。銹が著しく文様が不明瞭であるが、X線写真である程度判明する。鏡背紋様は類例不詳だが、内区は中央に陽鋳された細い直線紋がある幅3mm前後の凹部が縦横に走り、直線紋が交差した部分は菱形状に陽鋳され（圏線で切られ三角形状になる部分もある）、その間をネガティブな渦紋（雲紋）で埋めるものである。規則的な「菱形文」ではないが、直線紋の交差の結果、それが配置されたように



Ph.2　芝草紋鏡Ｘ線写真（実大）

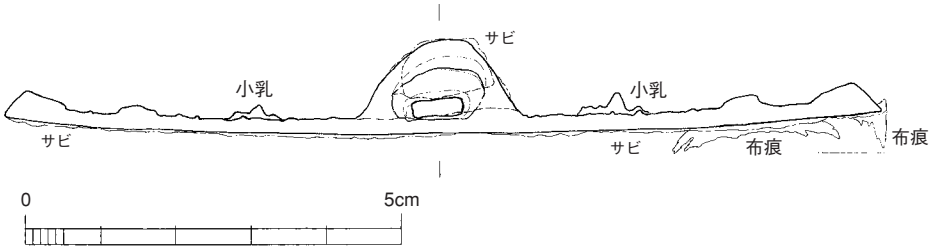


Fig.71　主体部出土芝草紋鏡実測図（1/1）

見え、獣首鏡の外区にみられるような「菱雲紋」状になることからこれを鏡式名称とする。内区周囲は約５mm間の二本の圏線があるが、この間には不鮮明だが小珠点紋が不規則にあるようにも見える。この外側は内側が右に傾く櫛歯紋帯となる。外区は途中に凹帯を有するが、紋様は無いとみられる。外縁はやや外に傾く。鈕座は正円をなさない円圏線の中に小さな変形四葉座を配置するが、銹と鋳ツブレで分かりにくい。鈕孔は鈕孔Ｂ側がやや幅広となる（Ａ：７mm／Ｂ：８mm）。鈕孔Ｂ方向に「湯冷え」の痕跡があり（反対側もやや及ぶ）、内圏線が消失するなど紋様がさらに不鮮明となる。鏡縁・外区などは一部面取りの角を残すが、内区は角に丸味がある部分が多い。また圏線などは裾が広がり曖昧な立ち上がりである（外側二本の圏線は比較的シャープ）。鈕孔は長方形基調で若干地から浮く型式である（PL.21－1・2）。紋様や円圏が対称性を消失し、このような特徴は西晋代に下る中国鏡であろう。

Ph.2（Fig.71）は、「**芝草紋鏡**」である。面径は鈕孔方向で11.60cm、直交方向で11.65cmを測る。銹が著しく文様が不鮮明であるが、４つの小乳とそれを取り込む大小のＳ字（一部逆Ｓ字）をクロス

Ph.3　菱雲紋鏡写真（ほぼ実大）

Ph.4　芝草紋鏡写真（ほぼ実大）

させた細線の「芝草紋」（唐草紋）が４単位認められ、大２小２の２単位の組合せのようである。なお鈕孔Ａ側左は「雲紋」状だが、芝草紋の一部とみられ、右側が鋳造不良と銹で不明になったものであろう。また銹で不明だが、他に渦文状の部分が一部あるようにも見える。小乳の配置がいびつで対称的でない。また小乳は裾部に小円座を有するが鋳造不良により不明瞭であり、小乳の２つは明瞭に立ち上がるが他は鋳造が甘く低い。紋様帯の外側に不鮮明だが圏線があり、その外側は内側が右に傾く櫛歯紋帯となる。外区凹帯は無紋にも見えるが、よく見ると凹帯両端の一部に細圏線がありその間に複線波紋を有する可能性が高い。鈕座は無い。鈕孔は湯廻り不良のためか鈕孔Ａ側が大きく広がり丸味を有するが、本来は長方形基調で若干地から浮いた型式である。鏡面の反りは２～2.5mmを測る。類例や位置づけやは後述するが、西晋末～東晋代に下る中国鏡であろう。なお２面の鏡ともに鏡面に多くの布痕が付着遺存しているが、墓壙埋土出土のガラス小玉とともに次頁以下で詳述する。

（２）土師器（Fig.72，PL.21－5・6）

１は粘土槨被覆粘土の落ち込みから出土した古式土師器の破片。小型甕ないし壺の胴部中位のやや上であろう。小片であるが（PL.21－5）、重要でありあえて図化した。表面はやや摩滅するが、外面はタテハケが認められ、内面はやや左上のケズリである。器壁は５～６mmを測る。色調は内外とも10YR8/6の黄橙色。胎土は、ややきめ細かいが精選されてはいない土に３mm以下の砂礫を含む。石英がやや多く、次に長石を含む。角閃石微細粒をわずか、雲母微細粒をごく稀に含む。ヨコハケの欠如とケズリ方向から、甕ならば古墳時代前期では新しく、小型壺であれば精製器種の胎土ではなくハケメ仕上げであり新しい様相である。２は古墳のある丘陵東側麓の金屎池付近で採集した古式土師器片である。壺の胴部片と思われるが、細片であり表面風化が著しい。胎土・色調は１に類似する。

（３）石器（Fig.73）

１・２とも黒曜石製。１はＪ区付近採集の局部磨製石鏃。長さ18.5mm、最大幅13.5mm、最大厚2.5mmを測る。２はＬ区の２号墳西側周溝地山直上で検出した剥片鏃。長さ23mm、最大幅16mm、最大厚３mmを測る。いずれも縄文時代の所産と考えられ、丘陵上の狩猟活動の痕跡であろうか。

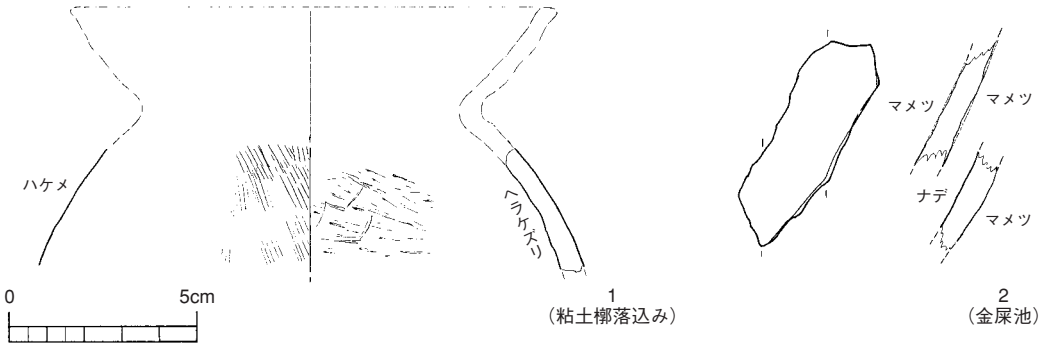


Fig.72　古墳出土土器実測図（1/3）

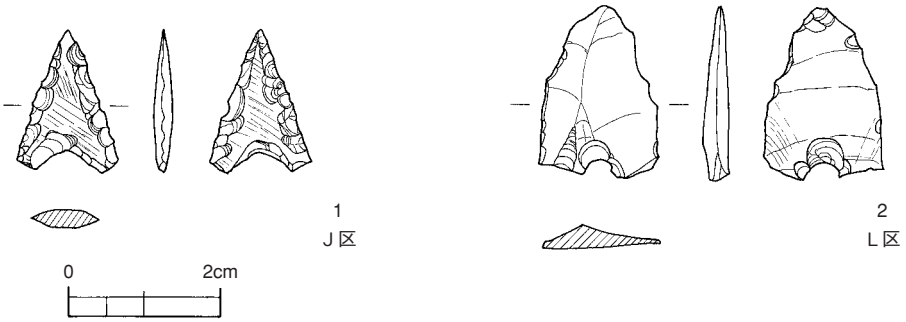


Fig.73　調査区出土石器実測図（1/1）

5）出土遺物の自然科学的分析

－主体部出土鏡付着繊維・赤色顔料及びガラス小玉の自然科学的調査について－

片多雅樹・比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

(1) はじめに

桑原金屎古墳は４世紀後半頃の築造時期が比定される全長24mの前方後円墳で、粘土槨に覆われた割竹形木棺の主体部を有する。木棺の棺床全面には赤色顔料が撒かれており、青銅鏡２面〔菱雲紋鏡（巻頭図版６-１）、芝草紋鏡（巻頭図版６-２）〕が副葬されていた。ここでは２面の鏡に付着していた織物片と、芝草紋鏡に付着及び被葬者の推定頭部付近より採取された赤色顔料、墓壙埋土中より検出されたガラス小玉１点について自然科学的調査を行い幾つかの知見が得られたので、その成果をここに記す。分析装置と測定条件は次の通り。

◇繊維断面と芝草紋鏡付着赤色顔料の観察及び分析…分析走査型電子顕微鏡［PHILIPS社製　XL30］繊維断面試料は無蒸着、低真空モード、反射電子像（組成像）で観察。赤色顔料は試料台に極微量サンプリングし、二次電子像（凹凸像）で観察。分析条件は掲載スペクトル内に記載されている。

◇棺内採取赤色顔料、ガラス小玉の分析…エネルギー分散型微小領域蛍光Ｘ線分析装置［エダックス社製／Eagle μprobe］対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／測定雰囲気：大気／測定範囲0.3mm φ／印加電圧・電流、測定時間は掲載スペクトル内に記載されている。

(2) 鏡付着織物

金属製品に付着して出土した繊維製品の多くは繊維成分が完全に消滅し、付着していた金属製品より析出した錆によって、辛うじて痕跡を形成しているものだが、本試料に関しても同様であり、いずれも緑青色を呈した状態で鏡に付着している。調査はまず実体顕微鏡により織り組織や織り密度を観察し、また電子顕微鏡を用いた繊維断面の形状観察により材質調査を試みた。繊維断面観察には鏡をクリーニングした際表面より剥落した織物片をエポキシ樹脂にて包埋後、繊維断面が出るように切断し鏡面研磨したものを試料に供した。

◇菱雲紋鏡…鏡面の1/3程度の範囲に織物の痕跡が認められる（巻頭図版７-１）。まず実体顕微鏡により観察を行ったが、表面の銹化が著しく明確に織りを検出できる箇所はほとんどなかった。二重に重なっているようにもみえるが、やはり銹化により定かではない。一部織り目が露呈する箇所を観察すると、織り密度は凡そ25×20［本/cm］（２mm角からの復元）で、Ｓ撚りのある糸で織られた平織りの布であることが判る（巻頭図版８-１）。これは過去の類例調査の経験から、絹ではなく麻などの植物性繊維と予想され、繊維断面形状観察では中央に髄腔もつ比較的正円に近い楕円形の単繊維断面が観察された（PL.22-1）。これは明らかに絹ではなく麻などの植物性繊維であることが判る。

◇芝草紋鏡…鏡面の鏡縁付近に２箇所、織物の付着が認められる（巻頭図版７-２）。多いところでは３～４重に重なった状態で付着している。実体顕微鏡による観察では、織り密度は凡そ25×23［本/cm］（２mm角からの復元）で、撚りのない糸を用いた平織りの布であることが判った（巻頭図版８-２）。繊維断面形状観察では扁平な不等辺三角形を呈する単繊維断面が観察され（PL.22-2）、これが絹織物つまりは平絹であることが判った。

(3) 赤色顔料

弥生～古墳時代の出土顔料は酸化第二鉄を主成分とするベンガラと、硫化水銀を主成分とする朱が知られており、蛍光Ｘ線分析ではそれぞれ鉄（Fe）、水銀（Hg）が主要元素として検出されることになる。ここでは芝草文鏡に付着残存するもの、及び棺内被葬者頭部付近より採取された赤色顔料につ

いて成分分析による裏付けを試みた。

◇芝草紋鏡付着赤色顔料…木棺側面部と接していた鏡縁部に銹着した木質に挟まれた状態で赤色顔料が残る（巻頭図版８-３）。その外観からベンガラであると予想され、粒子の形状観察のため一部を採取し電子顕微鏡観察に供した。二次電子像による約1000～5000倍での観察を行ったが、パイプ状を呈する粒子は含まれておらず、微細な粒子が凝集している状況が確認された。また同視野における蛍光Ｘ線による元素分析では、鉄（Fe）以外のピークがほとんど認められない状況であったため（Fig.xx、Ph.3）、若干のピークが検出された銅（Cu）は付着していた鏡の成分と思われ、この赤色顔料がベンガラであると判った。

◇棺内床面被葬者頭部付近採取赤色顔料…鮮やかなピンクがかった赤色を呈し、水銀朱であることが予想された（巻頭図版８-４）。資料の中から最も大きな塊を取り出し、蛍光Ｘ線による元素分析を行ったところ、水銀（Hg）と硫黄（S）が検出され（Fig.xx）、水銀朱であることが確認された。

（4）ガラス小玉

緑色の小玉で、径2.80mm、厚さ2.30mm、孔径0.97mm、重さ0.023gを計る（Fig.xx）。実体顕微鏡による観察では、透明度は低く、緑色の地の中に黄色の微粒子が多数混じり合っている様子が観察される（巻頭図版８-５）。気泡はほとんど見ることはできないが、この黄色の微粒子が孔の長軸に平行して並んでいることから、引き延ばし（後、切断、再加熱）技法により製作されたものと考えられる。色調や製作技法、黄色の微粒子の存在などは、弥生時代終末期を中心に多数見られる高アルミナタイプのソーダ石灰ガラスに共通する要素である。ところが、蛍光Ｘ線による元素分析では、ソーダ石灰ガラスの特徴であるナトリウム（Na）は検出されず、アルミニウム（Al）のピークもそれほど強くはない。何よりカルシウム（Ca）はほとんど見られずカリウム（K）の強いピークが現れる特徴は、このガラスがカリガラス（K_2O-SiO_2系）であることを示している（Fig.12）。この他、鉄（Fe）、銅（Cu）、鉛（Pb）といった発色に関わると見られるピークが明瞭に認められ、この部分では、同色のソーダ石灰ガラスと同じ傾向を示している。カリガラスは南あるいは東アジアを起源とするガラスとされ、日本ではガラス初原期である弥生前期末から存在し、古墳時代後期頃まで流通したようであるが、そのピークは弥生時代後半期から古墳時代前期までと見られている。色調は青紺色や淡青色が大半で、緑色や青緑色の存在も提示されている（肥塚2003）が、筆者が過去調査を行った中に緑色のものは含まれておらず、少なくとも市内では初出である。

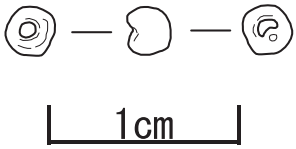


Fig.74　ガラス小玉実測図（2.5倍）

（5）まとめ

以上の調査結果から得られた知見をまとめると、２面の鏡はそれぞれ異なる繊維で織られた平織り布が付着しており、いずれも鏡縁付近まで付着が認められるが、その布で包まれていたのか被せられていたのかは定かではない。棺内床面に撒かれた赤色顔料は被葬者の頭部付近に水銀朱が用いられ、その他の床面、木棺側面にはベンガラが用いられている。ガラス小玉は埋土中より検出されたものではあるが、分析より得られたカリガラスという結果は、本古墳の推定築造時期と矛盾するものではないものと思われる。

〔参考文献〕

布目順郎　1992『目で見る繊維の考古学－繊維遺物資料集成－』染色と生活社

肥塚隆保　2003「日本出土ガラスの考古科学的研究－古代ガラス材質のその歴史的変遷－」『考古科学の総合的研究研究成果報告書』奈良文化財研究所埋蔵文化財センター

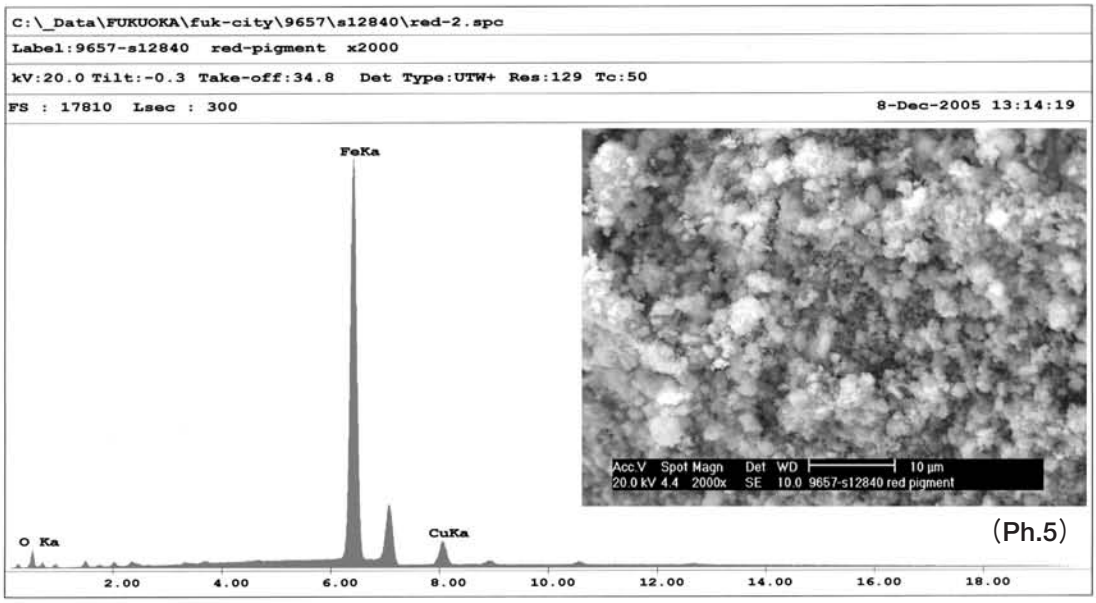


Fig.75　芝草紋鏡付着赤色顔料の電子顕微鏡写真（約2,000倍）(Ph.5)
と同視野における蛍光Ｘ線分析スペクトル

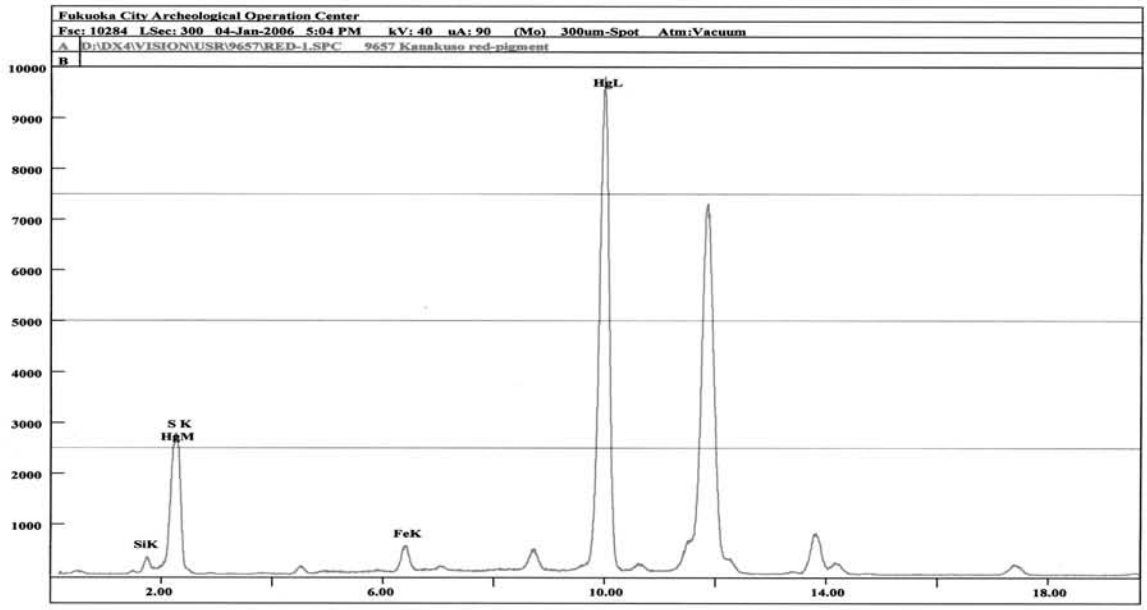


Fig.76　木棺内より採集された水銀朱の蛍光Ｘ線分析スペクトル

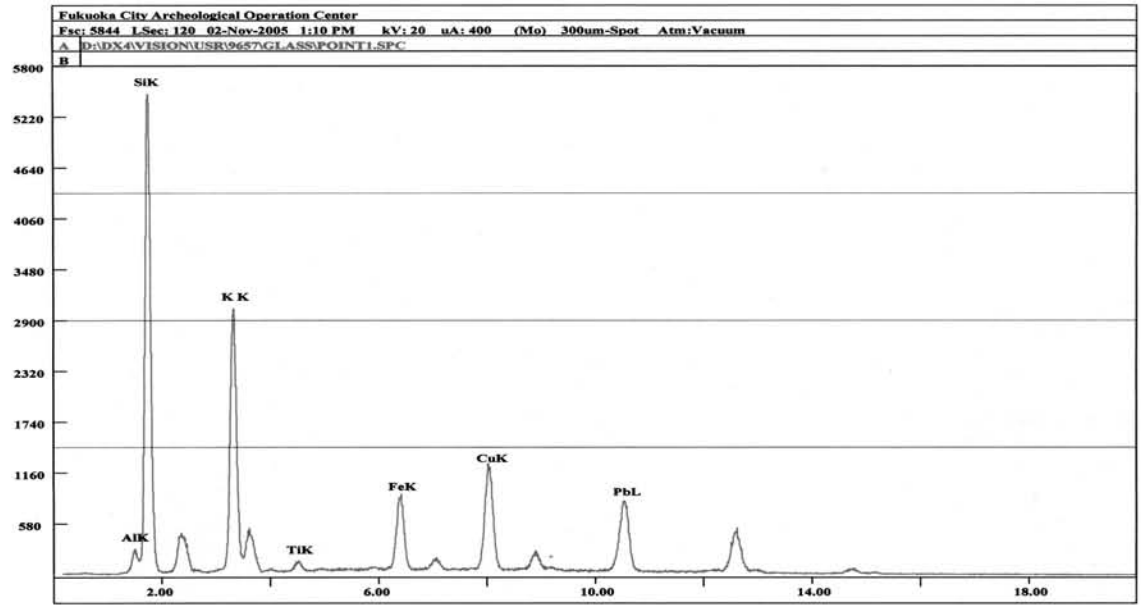


Fig.77　ガラス玉の蛍光Ｘ線分析スペクトル

3．小結

1）墳丘と古墳の時期について

1号墳の墳丘については、墳端や段築テラスなどが判明した箇所のうち、後世の改変や流失が考えられる箇所を除いた点をつないで平面図を復元すると**Fig.78**のようになる（墳丘断面の推定復元図はFig.79・80）。全長は24.0～24.2m、後円部径は12.5～12.7m、前方部前面幅12.4m前後（復元）を測る。墳丘主軸は調査座標軸よりも後円部側がやや南に振れるだろう。いずれにしても左右非対称であり、後円部も整美な正円形ではない。後円部は三段築成で、上段斜面が広く（途中で傾斜が変換すると推定）、中・下段は狭い。前方部は二段築成で後円部の中・下段テラスが連続するが、北側斜面は裾部にもう一段作り三段状となる。くびれ部屈曲は曖昧で鋭角的ではない。後円部墳頂部から前方部の間には「隆起斜道」が想定される。段築テラスや墳裾レベルは同一水平面にはほど遠い。特に墳裾の高低差が顕著で、前方部前面の周溝（2号墳と共有）はかなり浅い掘り込みのため、隅角墳端レベルとは高低差がある。以上のような墳丘の様相からは、一応は設計規格を有しているが（段築構造など）、狭い丘陵尾根上にとにかく「前方後円」を作ることが優先され、対称形や厳密な墳丘規格の遵守は二の次であったということが想定される。丘陵上の小規模な前方後円墳では類似する現象が指摘されることが少なくない（註1）。一方、前方部幅が広がることや段築の特徴は、1号墳が前期古墳でも新しいことを示す。土器片の器面調整や胎土のあり方は元岡・桑原2次SX4041の土器群に類似し、ⅢA期新相（筆者編年）と考えられるのと合致し、『前方後円墳集成』4期前半の墳形として矛盾しない。**2号墳**は、墳丘の上部と北西側の流失が顕著であるが、東西8.0～8.2m、南北9.8～10.3mの方墳に復元できる。西側が裾広がり気味で（墳裾は西側が低い）、段築は二段築成だが、東側は一段状となる。墳丘高は推定図（Fig.80）よりもやや高い可能性もある。

（註1）近藤義郎編1983『吉島古墳』新宮町教育委員会、など。

2）主体部の構造

1号墳の粘土槨は、その粘土床は地山を掘りくぼめ構築するもので都出分類の「NC式」であり前期末に多い型式である（註2）。墓壙の土層観察からは、墓壙掘削土で墓壙上半の壁を形成する「**構築墓壙**」であることが分かり、東側に「作業道」

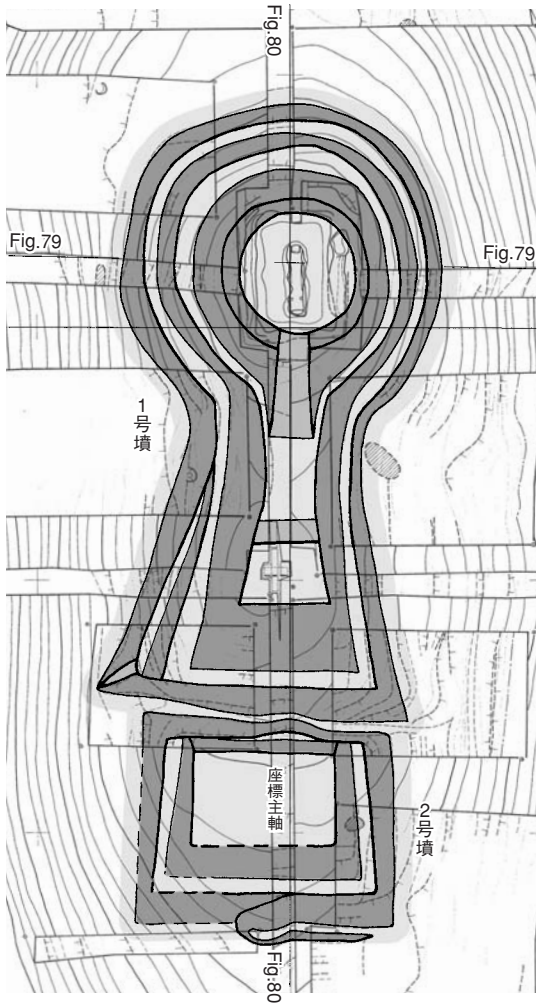


Fig.78　1・2号墳墳丘推定復元平面図（1/300）

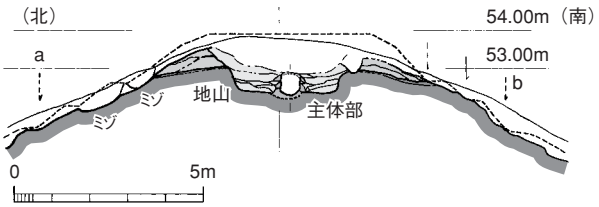


Fig.79　1号墳後円部横断面推定復元図（1/200）

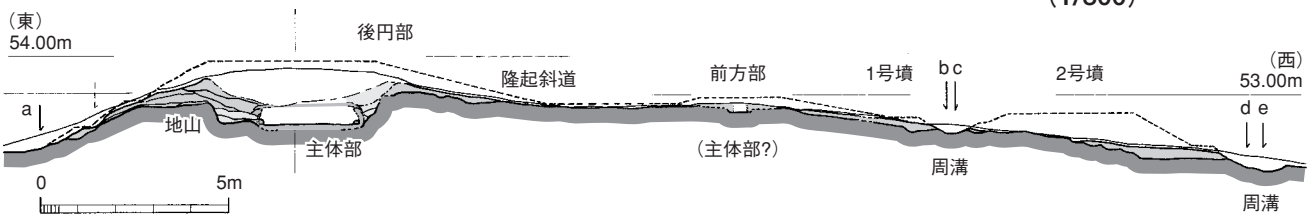


Fig.80　1・2号墳主軸縦断面推定復元図（1/200）

を推定した。主体部の構築過程は、**Fig.81**のように想定する。なお木棺については小口部分の構造に不明な点が残り（小口粘土の機能など）、今後の検討課題としたい。

（註２）都出比呂志1979「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻３号。

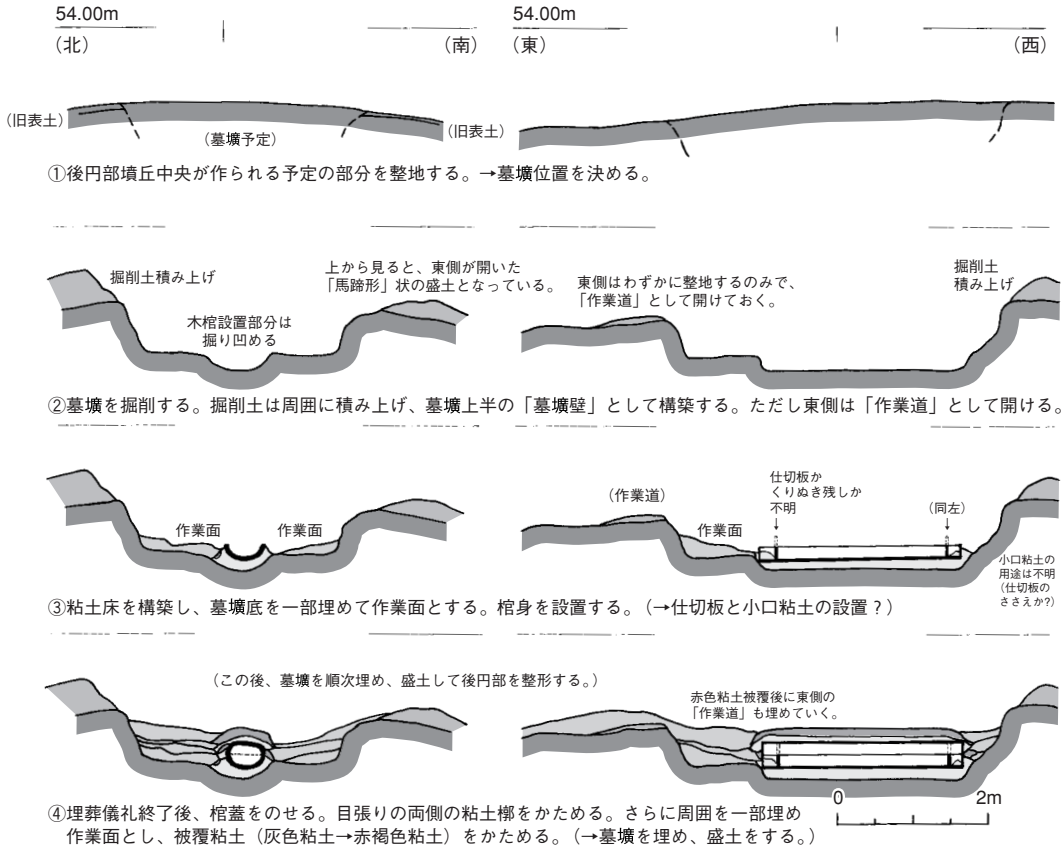


Fig.81　主体部構築過程復元模式図（1/100）

３）銅鏡について

「**芝草紋鏡**」は「雲紋鏡」とする意見もあるが（註３）、紋様は「芝草紋」（註４）の範疇でよいと考える。同型式鏡（紋様構成が類似するもの）は国内に７例ある。その一つの大分市野間３号墳の出土鏡(註５）を資料調査したので図示する（Fig.82）。面径が近似し（11.35cm）、紋様も酷似する。石釧の共伴などから金屎古墳とは前後する時期と考えられる。南区老司古墳２号石室（註６）にもほぼ同面径（約11.5cm）の類似鏡があるが（「変形文鏡」）、副葬時期はわずかに新しい（土師器ⅢＢ期、『集成』４期後半）。これらは同型鏡ではないが、紋様構成などきわめて近い。中国にも類例があり（註７）、西晋末以降と考えられるが、金屎古墳鏡などは紋様・割付の稚拙化や鋳造技術の劣化（野間３号墳鏡は鈕が中心から外れ、また湯廻り不良による鋳造時の小孔がある）から、東晋代に下る可能性がある（註８）。また「**菱雲紋鏡**」は類例が無いが、鈕孔や外区・鏡縁の特徴、変形四葉座から魏晋鏡であり、中国の渦紋鏡（湖北省顎城など）や方格規矩鏡内区外縁に斜行直線紋＋渦紋がある例（註９）から、それら（西晋前期か）より下る西晋後期のものとみたい。

（註３）車崎正彦1999「副葬品の組合せ―古墳出土鏡の構成―」『前方後円墳の出現』雄山閣。（註４）西田守夫1985「漢式鏡の芝草紋」『三上次男先生喜寿記念論文集　考古編』。（註５）賀川光夫編1965『野間古墳群　横尾貝塚　小池原貝塚緊急発掘調査』大分県教育委員会。（註６）福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集。（註７）傅俊山「遼寧錦県右衛郷昌盛漢墓清理簡報」『北方文物』1987年第三期。岡山県双ツ塚鏡が類似型式か。（註８）森下章司1998「古墳時代前期の年代論」『古代』第105号、では「Ｓ字文鏡」を東晋代前期前後に位置づける。（註９）河北省撫寧県留守営鎮馬庄村鏡。福永伸哉氏より御教示。鏡については福永氏のほか、車崎正彦氏、森下章司氏、西川寿勝氏からも類例や位置づけについて御教示を頂いた。記して感謝したい。

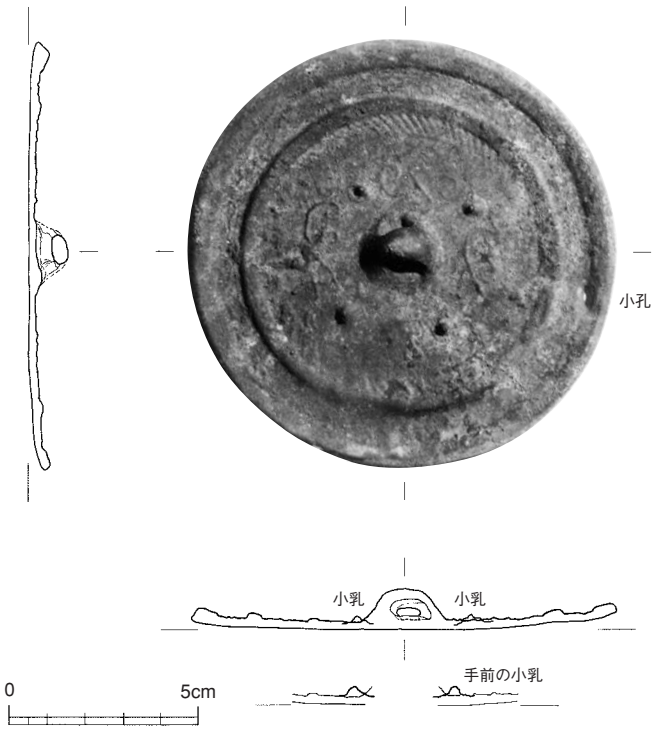
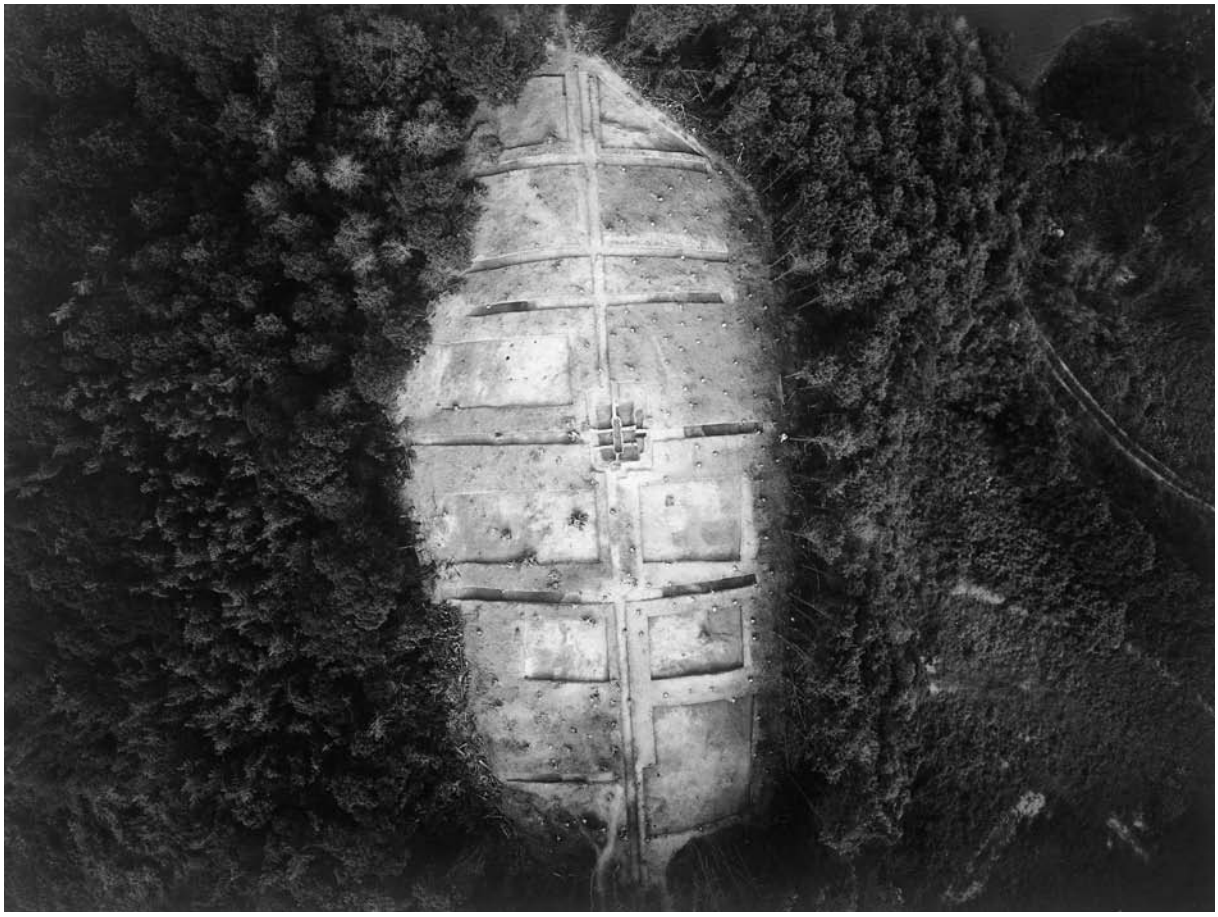


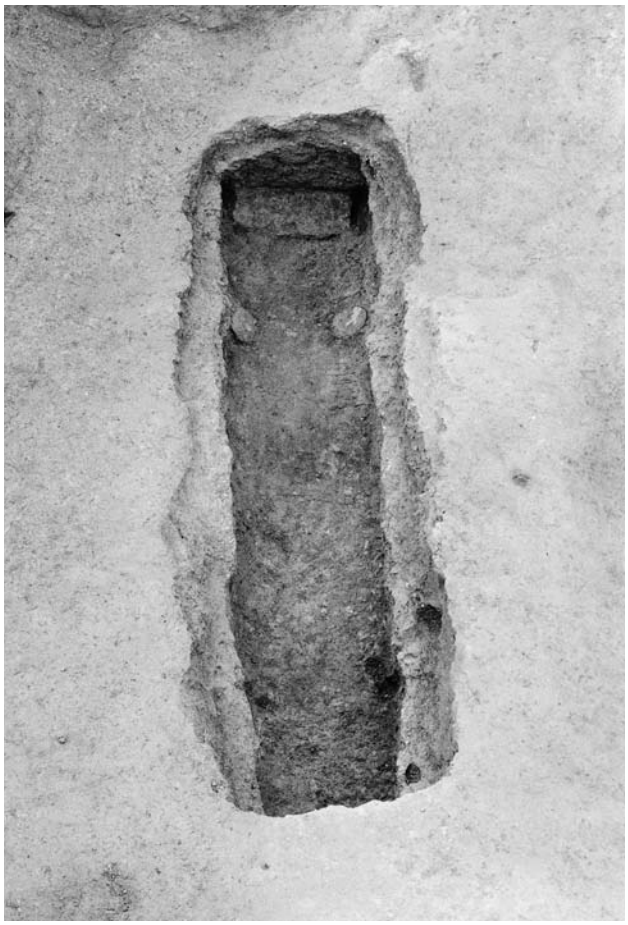
Fig.82　芝草紋鏡類例図（野間３号墳出土鏡）（1/2）

1. 桑原金屎古墳調査状況空撮（南から）



2. 桑原金屎古墳調査状況空撮（西から）

1. 主体部木棺西半遺物出土状況（東から）

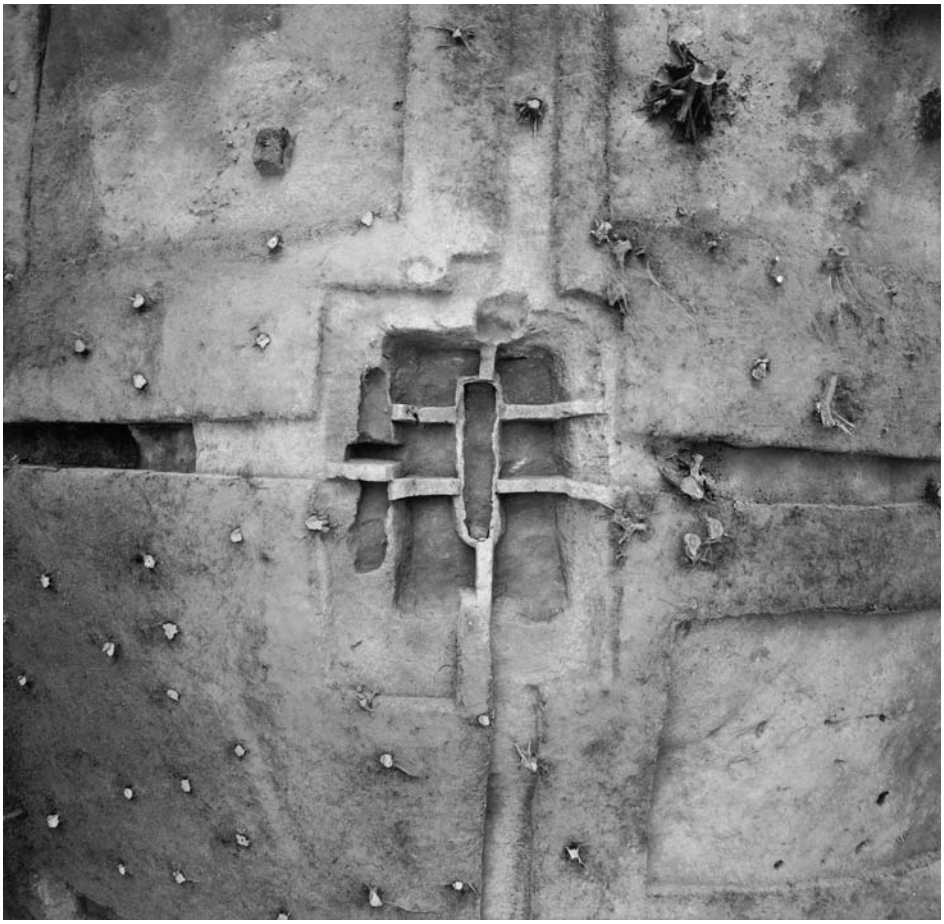


2. 木棺遺物出土状況（東から）

3. 主体部木棺出土状況清掃作業状況（西から）

4. 木棺内土層状況（西から）

1. 粘土槨木棺内東半 棺床・断面状況（西から）

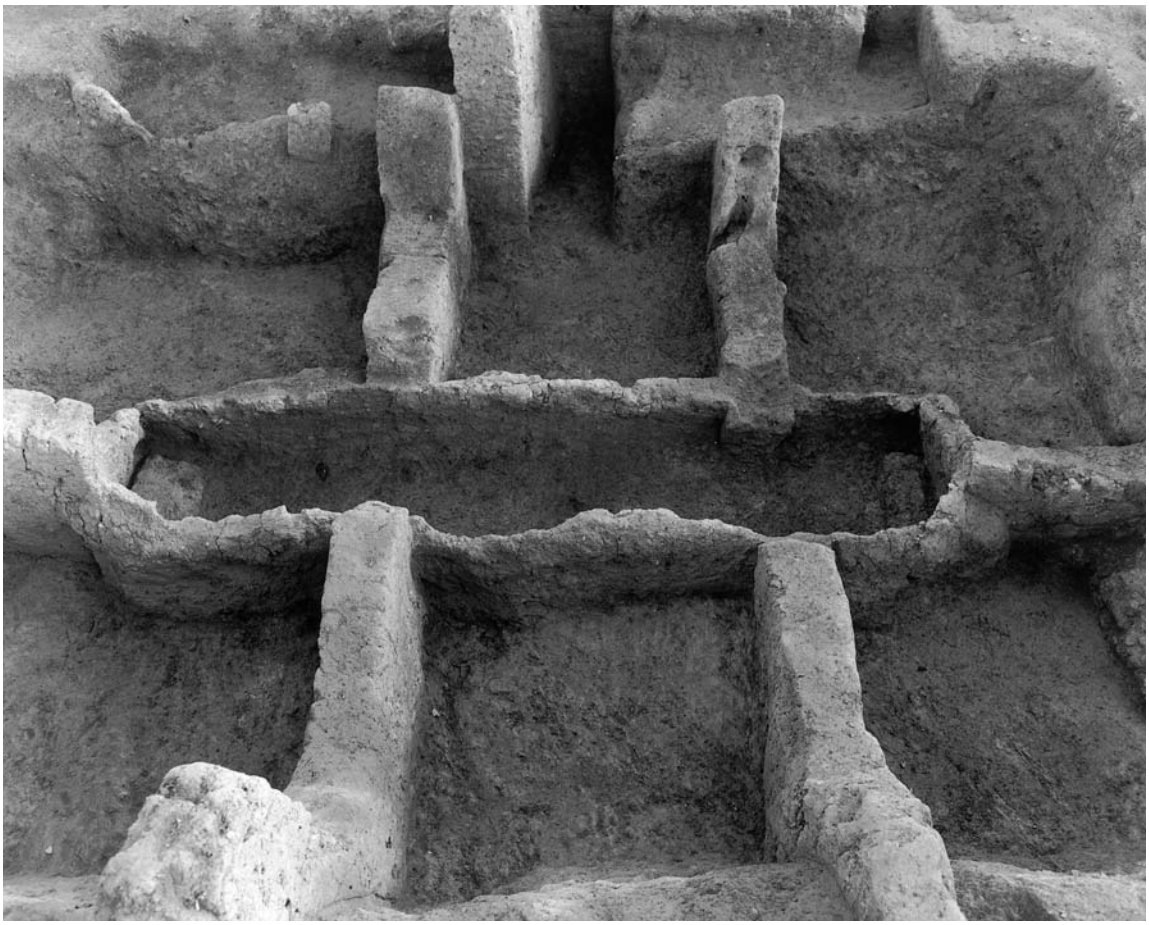


2. 墳頂部周囲および主体部墓壙調査状況空撮（東から）

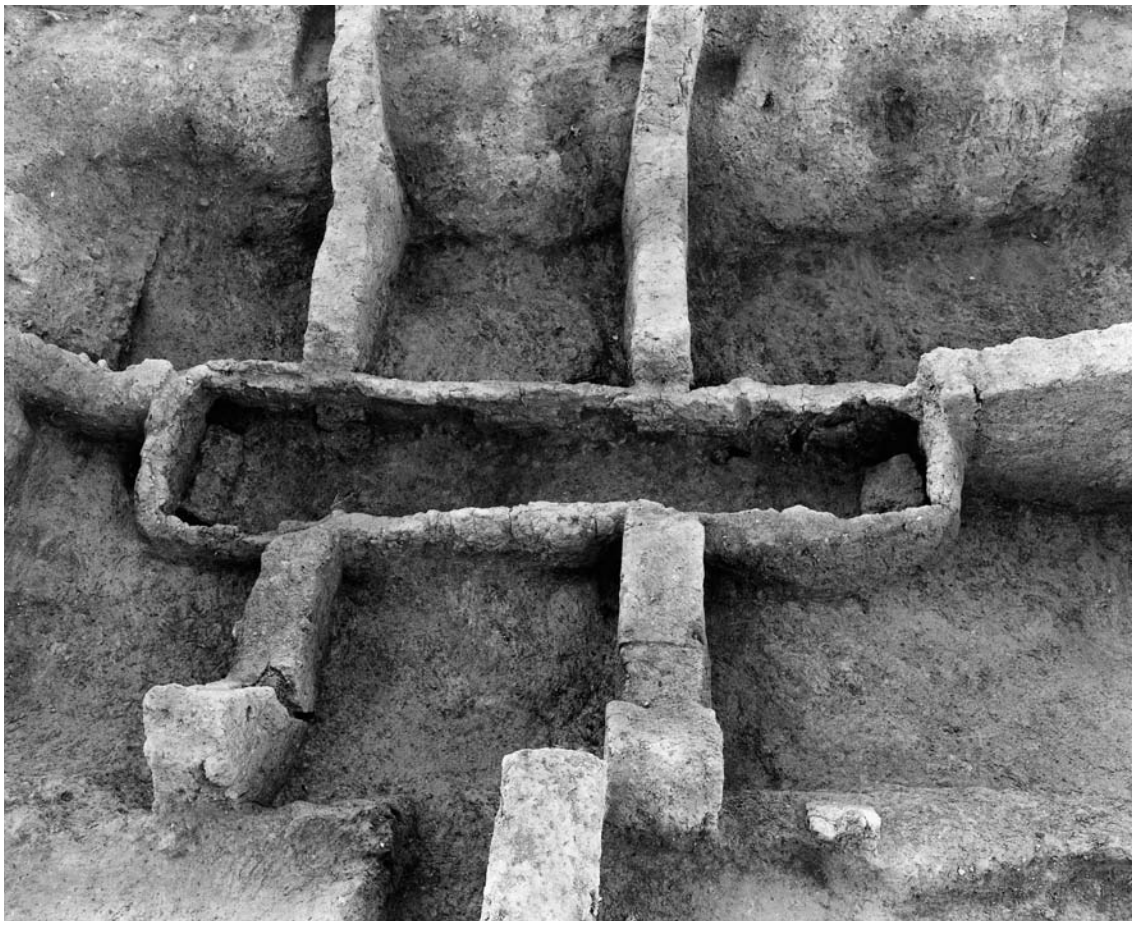
1. 棺内菱雲紋鏡出土状況（北から）

2. 棺内芝草紋鏡出土状況（南から）

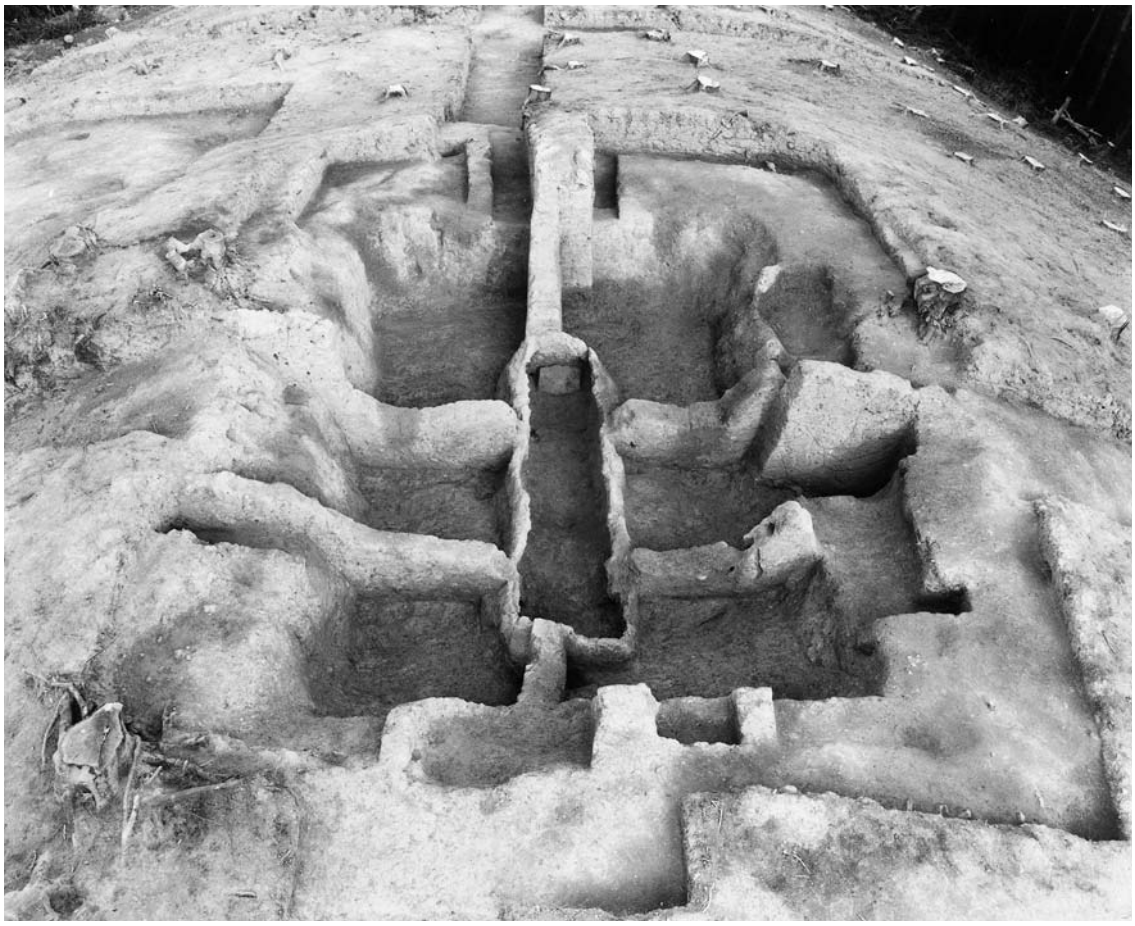
3. 粘土槨・木棺全景（西から）



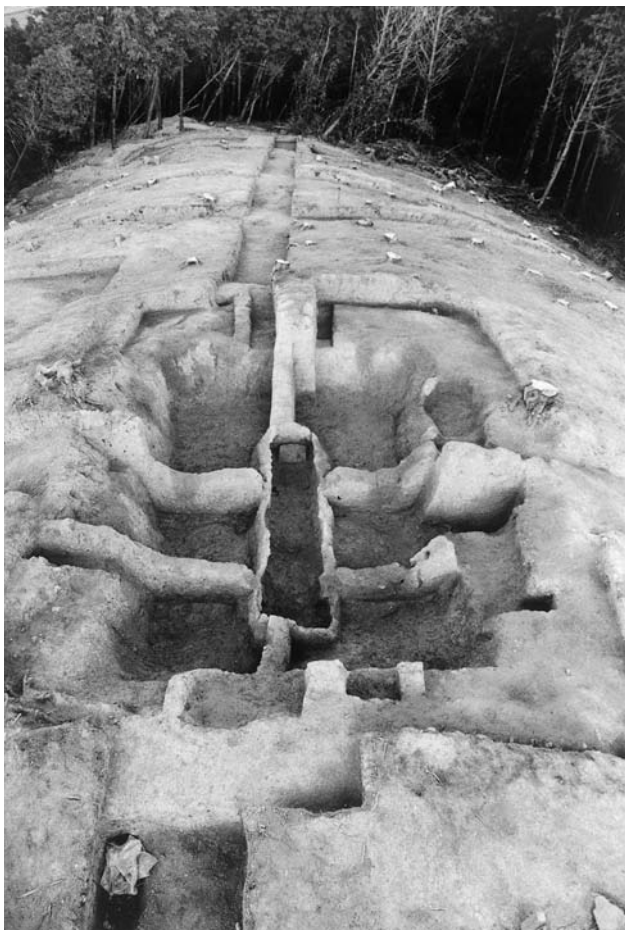
4. 主体部墓壙調査状況（北から）



1. 主体部墓壙調査状況（南から）



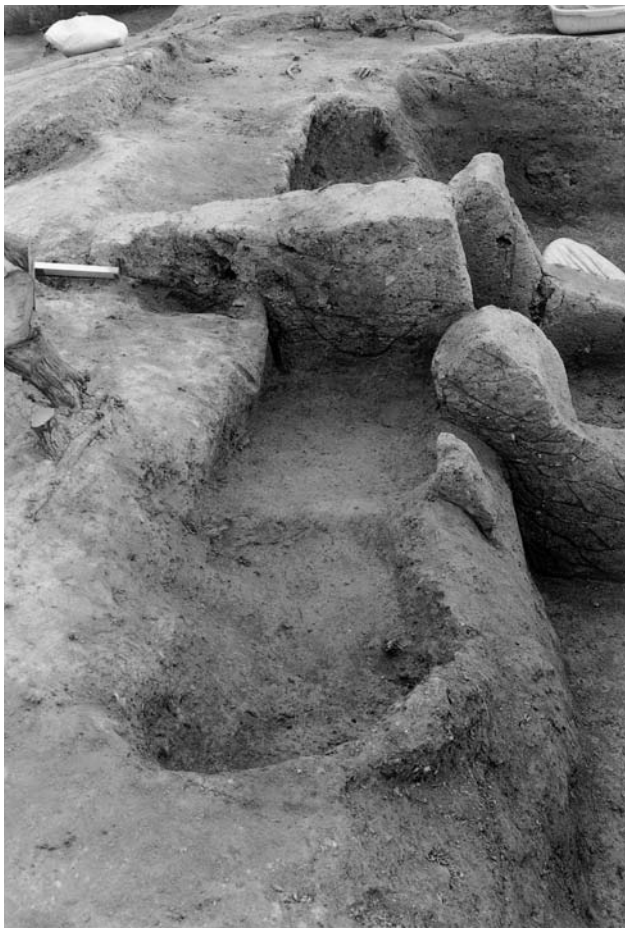
2. 主体部墓壙および墳頂部周囲調査状況（西から）



1. 墳頂部および後円部東方斜面調査状況（西から）

2. 粘土槨木棺内西半 棺床・断面状況（東から）

3. 墳頂部墓壙５区西側土層南半（墓壙上半およびSD01土層）（東から）



4. 墳頂部SD01（第２主体？）（東から）

5. 墳頂部SD01土層（３区東側土層）（西から）

1. 墓壙１区北側土層（主軸南側）（南から）

2. 墓壙１区東側土層（墓壙横断南側）（西から）

3. 墓壙２区南側土層（主軸北側）（北から）

4. 墓壙２区南側土層（主軸北側・墓壙上半）（北から）

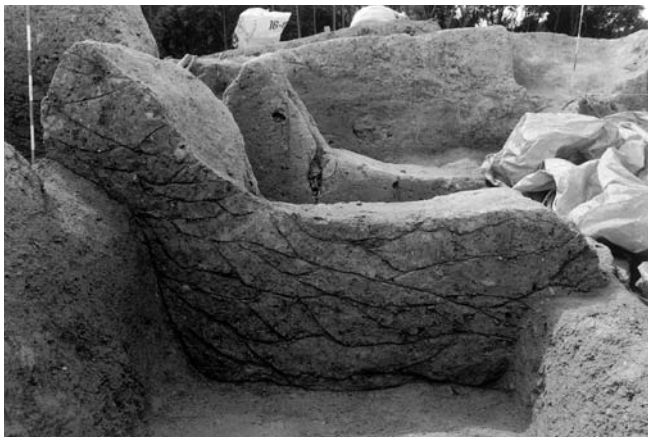
5. 墓壙２区東側土層（墓壙上半）（西から）

6. 墓壙２区東側土層（墓壙横断北側）（西から）

7. 墓壙３区西側土層（墓壙横断南側）（東から）

8. 墓壙４区西側土層（墓壙横断北側）（東から）

1. 墓壙 4 区東側土層（墓壙横断北側）（西から）

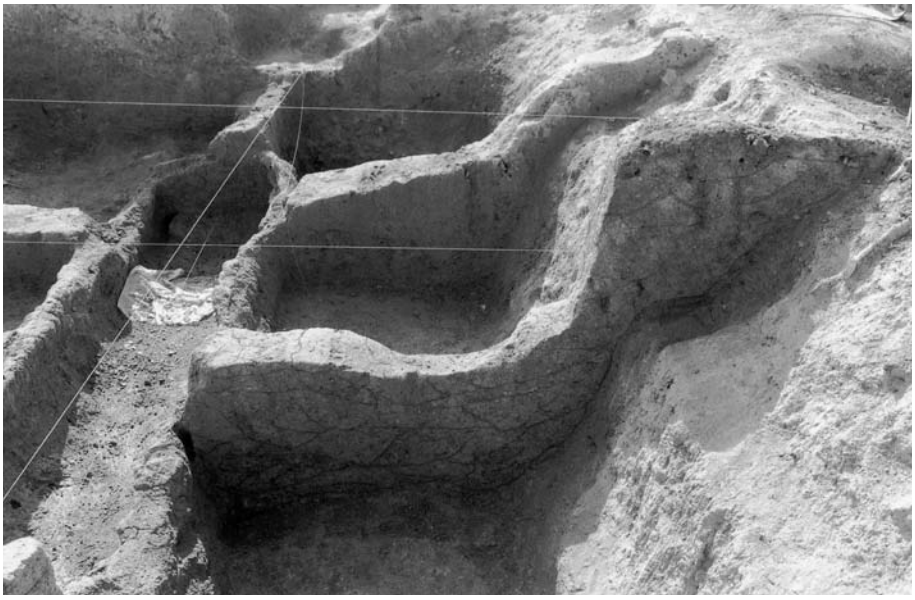


2. 墓壙 5 区西側土層（墓壙横断南側）（東から）

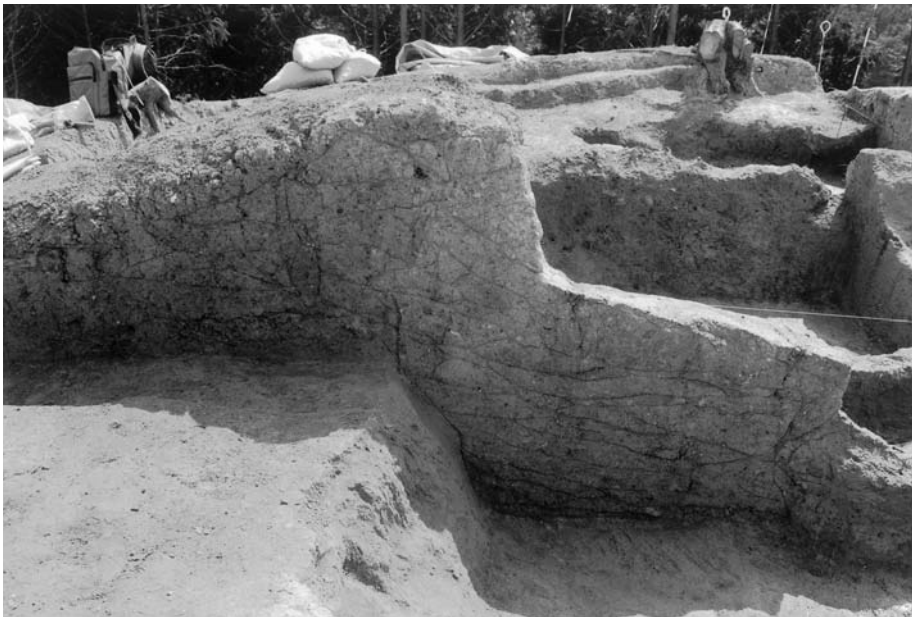
3. 墓壙 5 区北側土層（主軸南側）・ガラス小玉出土位置（南から）

4. 墳頂部・墓壙 5 区北側土層東半（南から）

5. 墳頂部・墓壙 5 区北側土層（南から）



1. 墓壙 6 区西側土層
（墓壙横断北側）
（東から）



2. 墳頂部・墓壙 6 区南
側土層（主軸北側）
（北から）

3. 墳頂部・墓壙 6 区南
側土層（墓壙東側作
業道部分）（北から）

1. A1トレンチ西・南側土層（墳頂部６区南側土層）（北から）

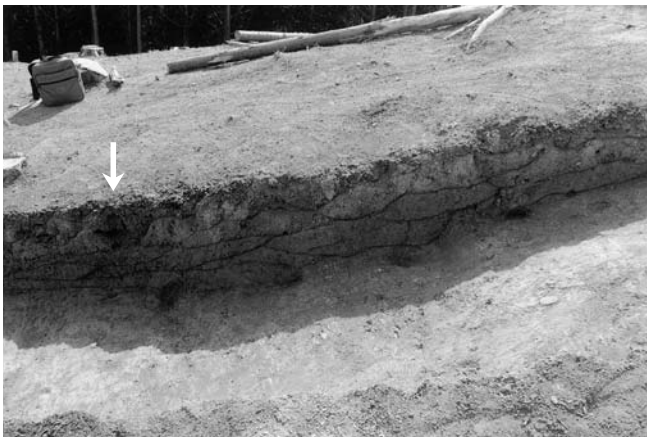
2. 墳頂部５区地山整形面（東から）

3. 墳頂部６区北側土層（南から）

4. 墳頂部６区墓壙外周盛土基部（南から）

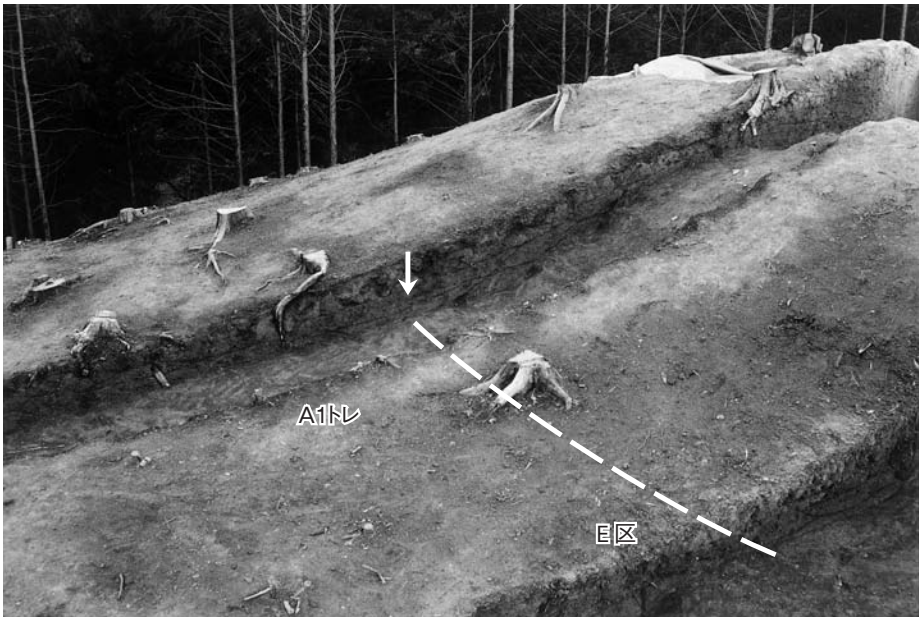
5. 墳頂部６区墓壙外周盛土基部（北から）

6. 墳頂部６区墓壙外周盛土基部（西から）

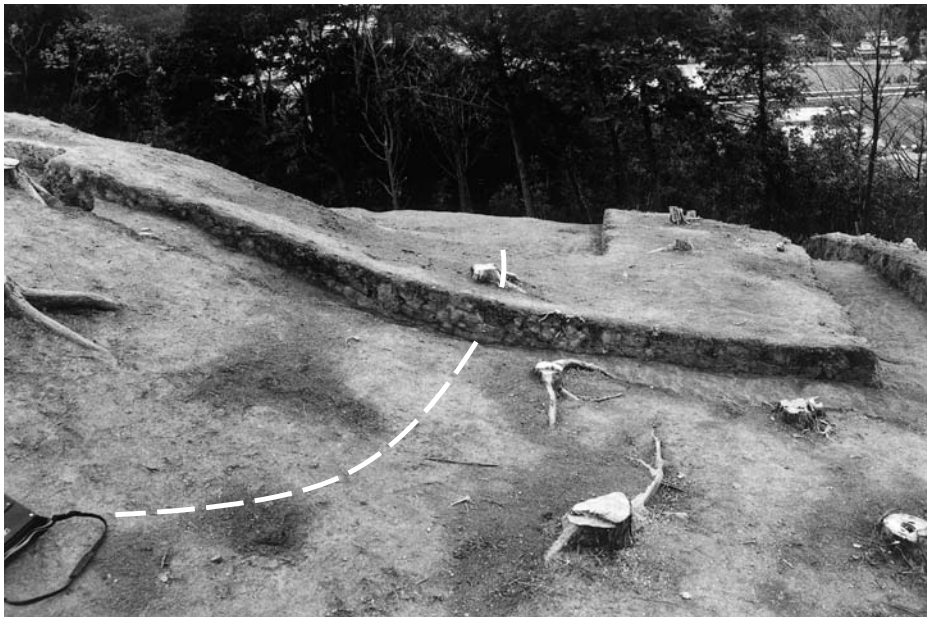


7. A１トレンチ中（墳端付近）・南側土層（北から）

8. A１トレンチ西・南側土層（北から）



1. A1トレンチ南側土層・後円部北東側（北東から）



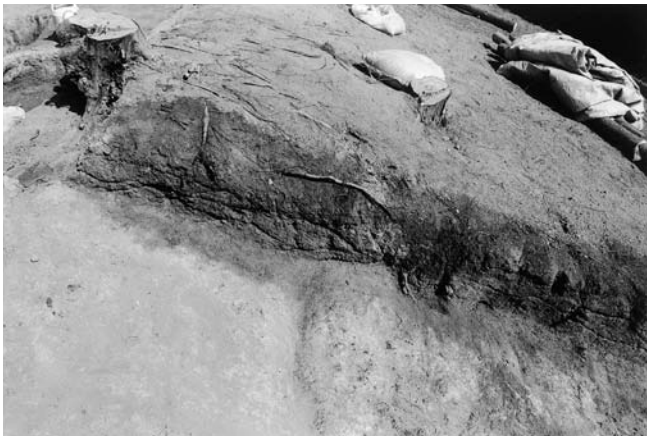
2. A1トレンチ北側土層・後円部南東側（南から）

3. A1トレンチ東・南側土層（北から）

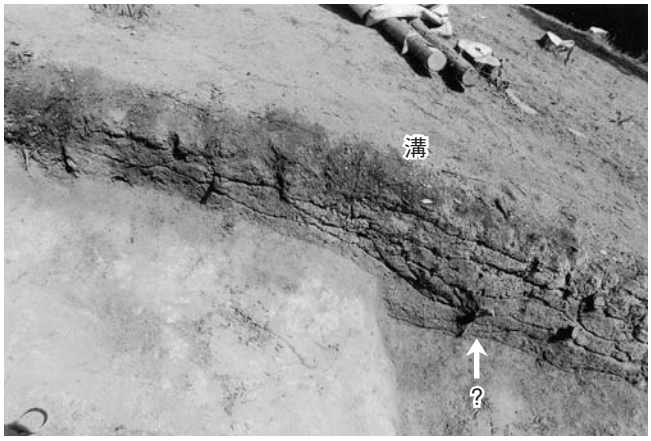
4. A2トレンチ北側土層（南から）

1. A3トレンチ南側土層（北から）

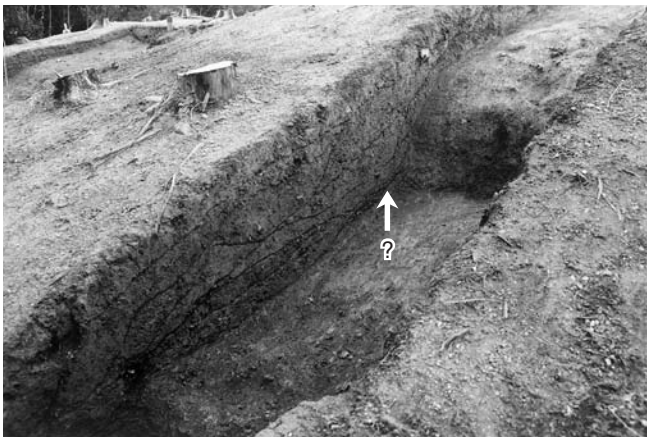
2. A4トレンチ南側土層※後方はR区（北東から）



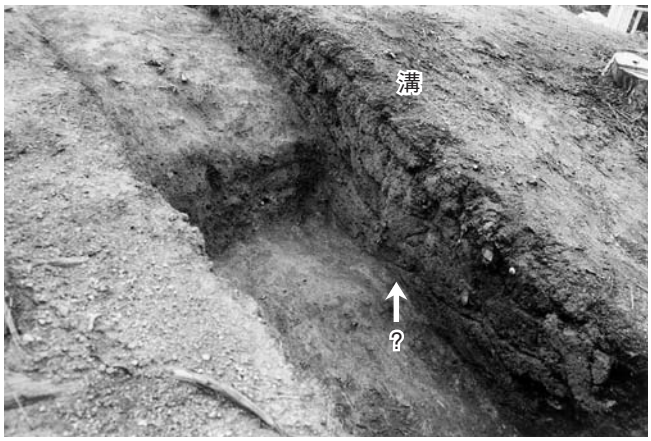
3. Bトレンチ北（墳頂部南）・東側土層（西から）



4. Bトレンチ中（墳端前後）・東側土層（西から）



5. Bトレンチ中（墳端前後）・西側土層（南東から）



6. Bトレンチ中（墳端前後）・東側土層（南東から）

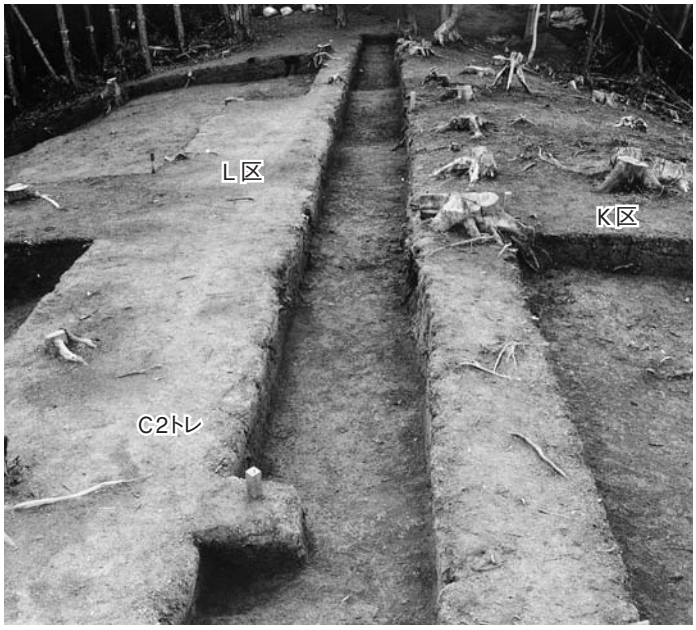
7. C1トレンチ全景・南側土層（北東から）

8. C1トレンチ全景・南側土層（北西から）

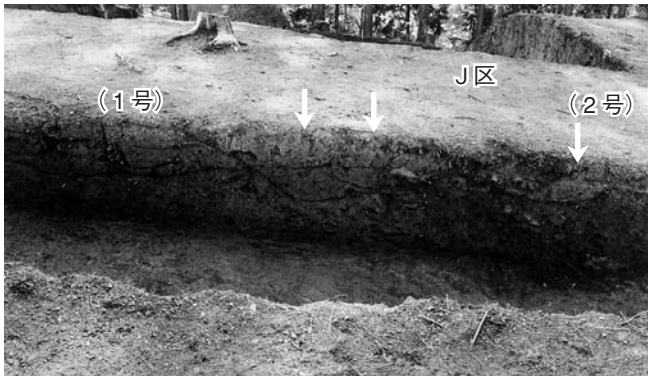
1. C1トレンチ西（前方部）・北側土層（南から）

2. C1トレンチ東（墳頂部側）・北側土層（南から）

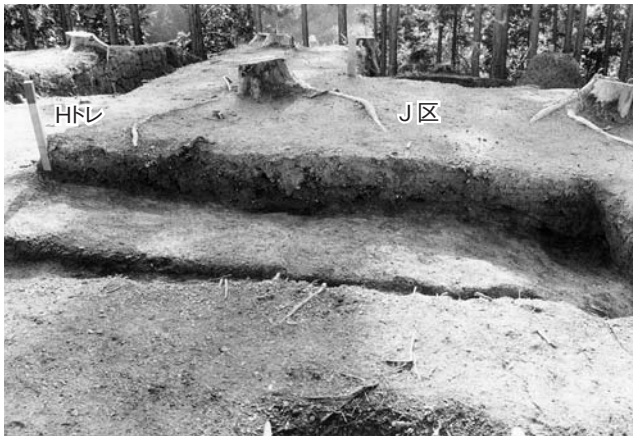
3. C2トレンチ全景（東から）



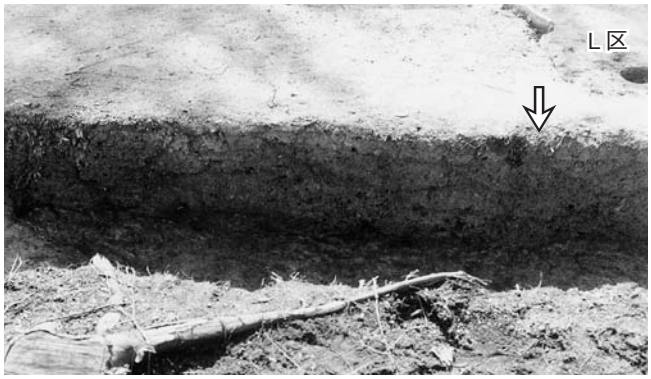
4. C2トレンチ中～西調査状況（東から）



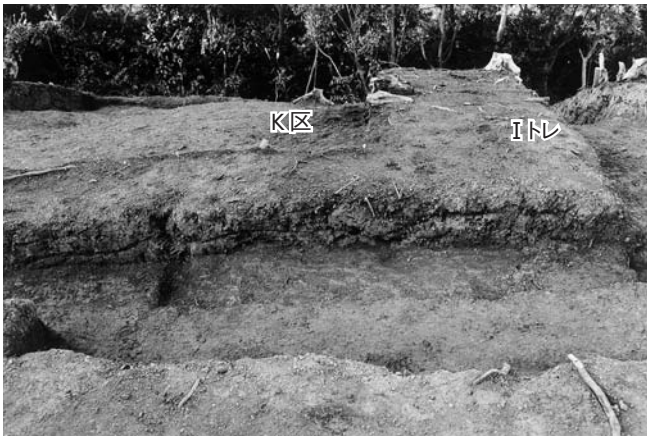
5. C2トレンチ東・南側土層（北から）



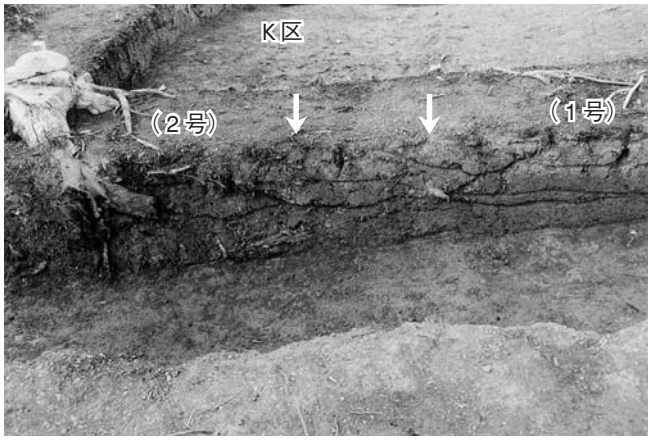
6. C2トレンチ東～中（1・2号墳間溝）・南側土層（北から）



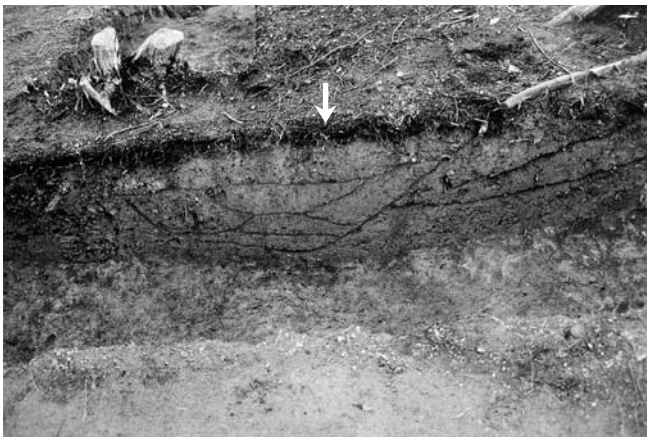
7. C2トレンチ西（2号墳西側墳端）・南側土層（北から）



1. C2トレンチ東・北側土層（南から）



2. C2トレンチ東～中（1・2号墳間溝）・北側土層（南から）

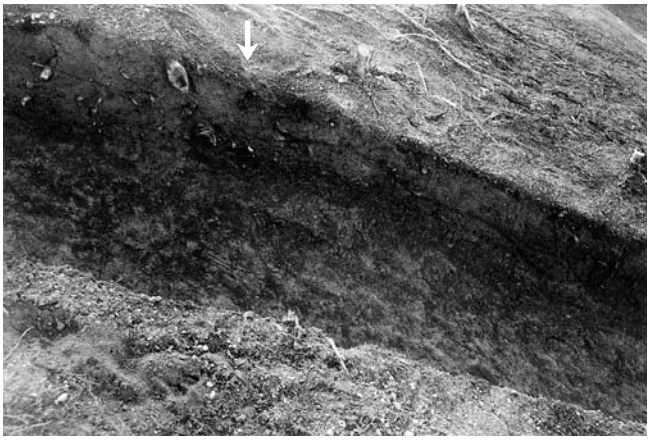


3. C2トレンチ西（2号墳西側墳端）・北側土層（南から）

4. C2トレンチ西・北側土層（2号墳西側テラス）

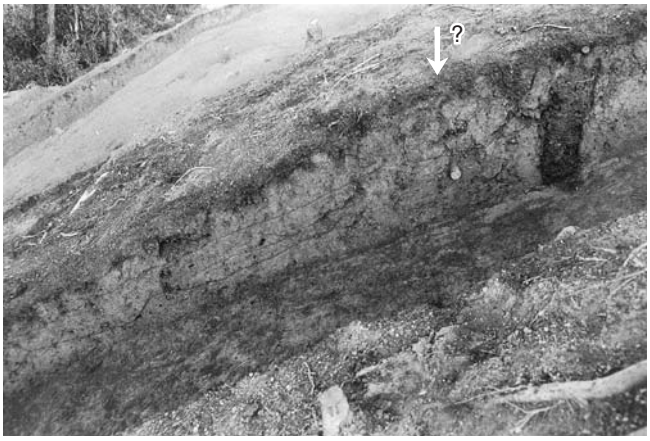
5. Dトレンチ上・西側土層（東から）

6. Dトレンチ上～中（テラス？）・西側土層（東から）



7. Dトレンチ中（墳端前後）・西側土層（東から）

8. Dトレンチ下・西側土層（東から）

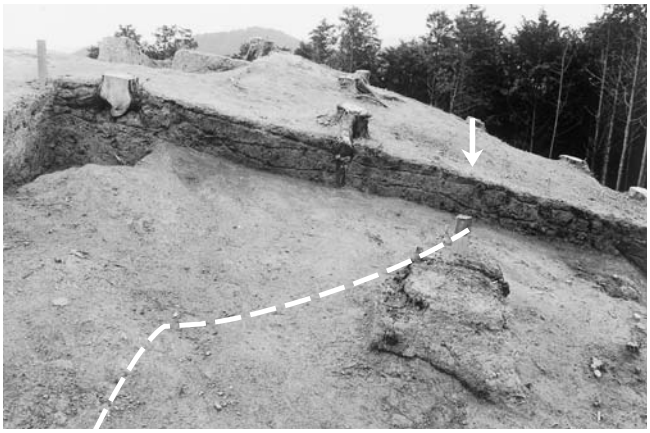


1. Ｄトレンチ中（墳端前後）・東側土層（西から）

2. Ｄトレンチ上～中・東側土層（西から）

3. Ｅ区西側土層・後円部北東地山整形状況（東から）

4. Ｅ区南側土層・後円部北東地山整形面状況（北から）



5. F区東側土層上半・墳端検出状況（南側くびれ部）（西から）

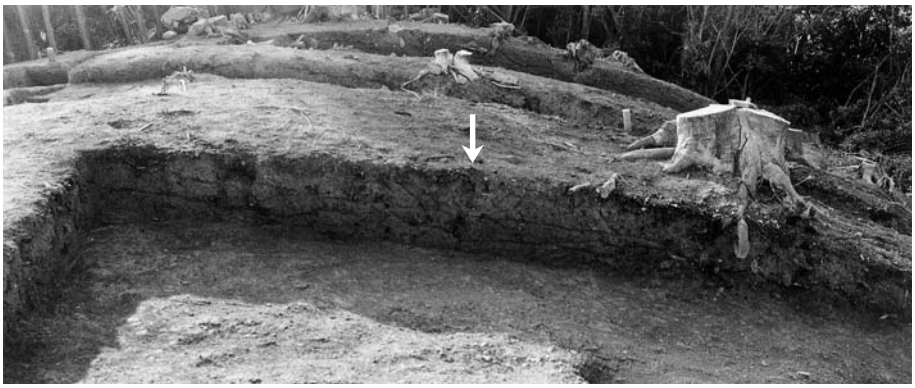
6. Ｆ区北側土層（南から）

1. F区東側土層・南側くびれ部検出状況（西から）

2. F区西側土層（東から）

3. F区西側土層上半（東から）

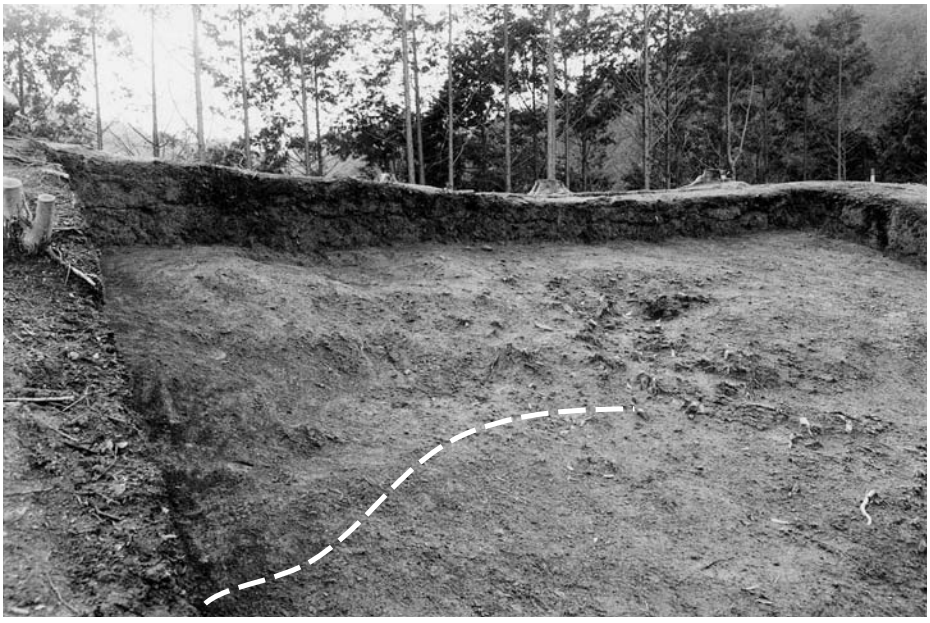
4. G区西側土層・前方部北側縁検出状況（東から）



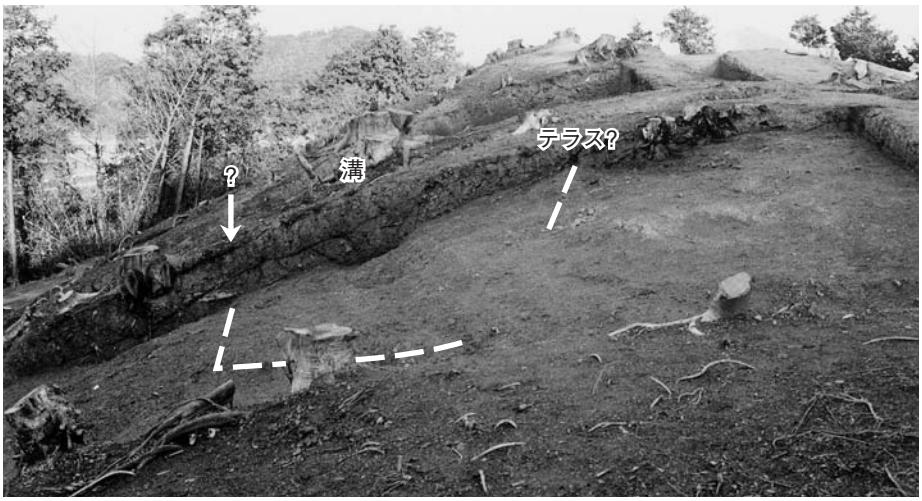
5. G区西側土層南半（東から）

1. G区東側土層・北側くびれ部検出状況（西から）

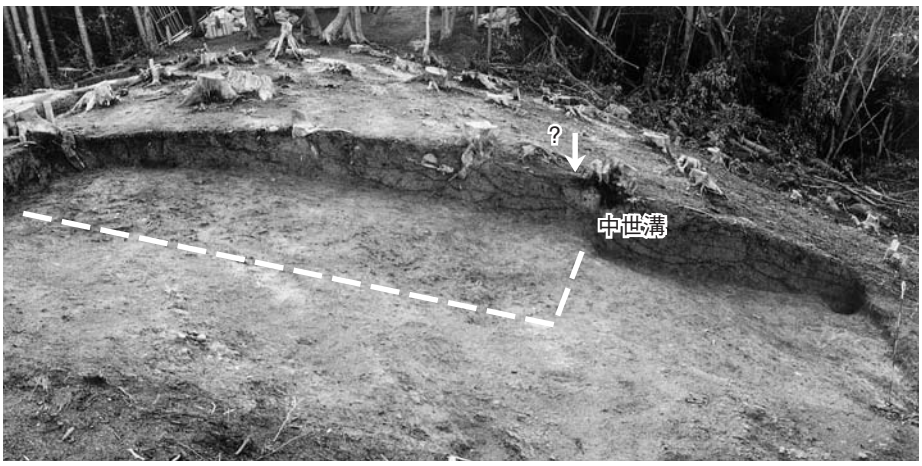
2. G区東側土層・南半・北側くびれ部検出状況近景（西から）



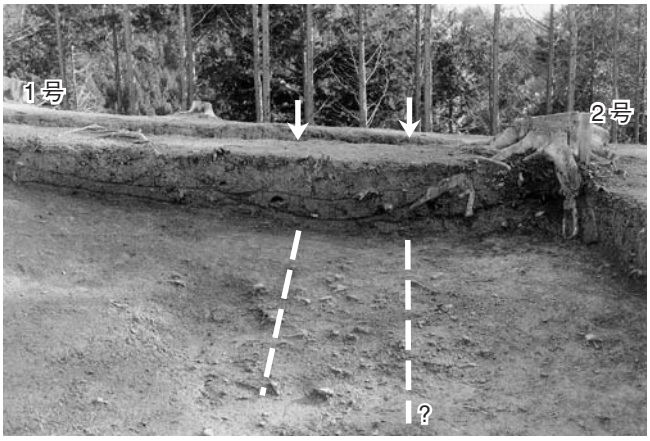
3. G区北側土層・北側くびれ部検出状況（北から）



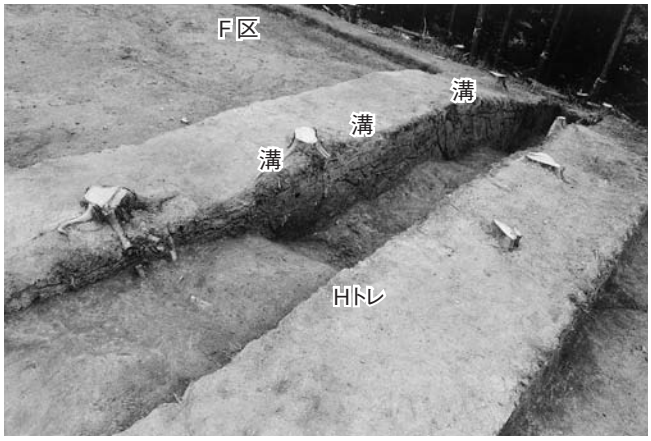
1. Ｋ区調査状況（前方部北西側）・東側土層（西から）



2. Ｋ区調査状況・西側土層（２号墳北東側）（東から）



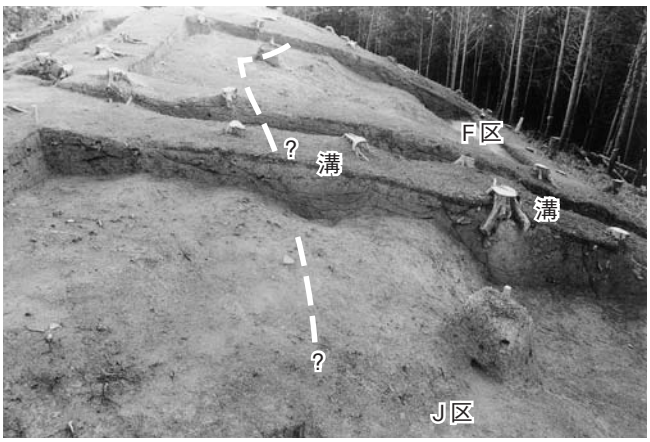
3. Ｋ区南側土層（１・２号墳間溝）（北から）



4. Ｈトレンチ東側土層（北西から）

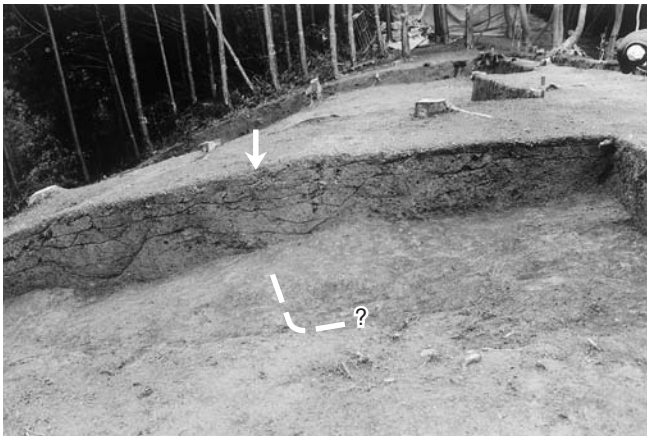
5. Ｉトレンチ調査状況（南から）

6. Ｉトレンチ中～南（墳端付近）・東側土層（西から）

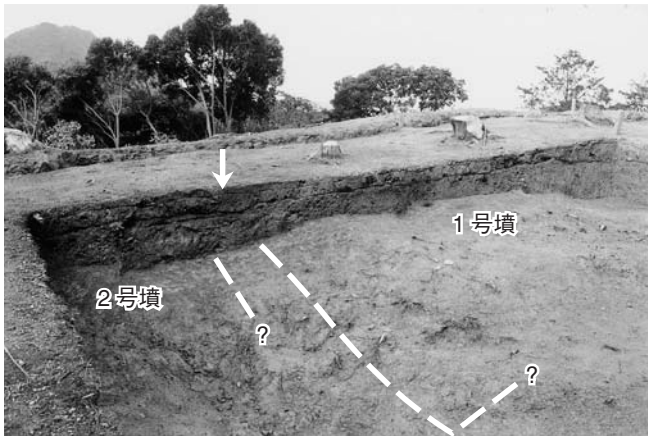


1. J区調査状況・東側土層（西から）

2. J区東側土層北半（西から）

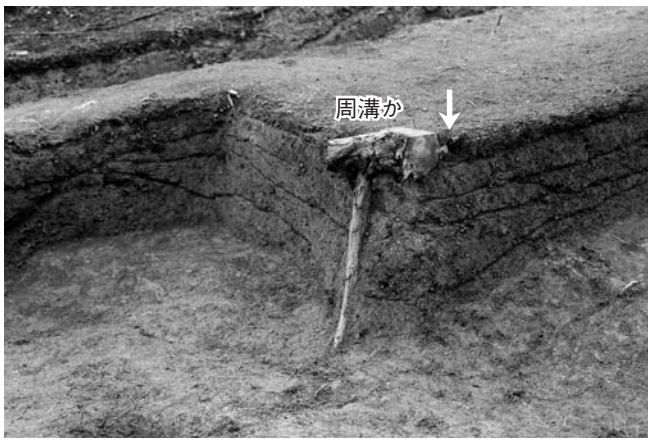


3. J区西側土層（2号墳南東側 ※掘りすぎている）（東から）



4. J区北側土層・前方部南西側墳端検出状況（南から）

5. L区北側土層・2号墳西側墳端確認状況（南から）



6. L区北側土層中央（2号墳西側墳端）（南から）

7. L区調査状況・東側土層（2号墳南西側）（西から）

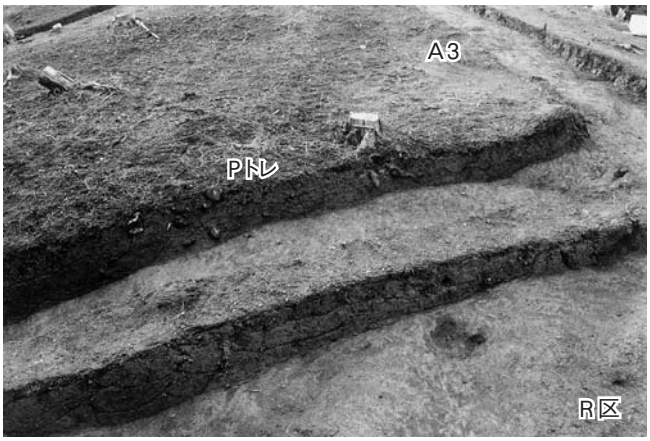
8. Mトレンチ調査状況（南から）

1. Ｎトレンチ調査状況・西側土層（南東から）

2. Ｏトレンチ調査状況・西側土層（北東から）

3. Ｔトレンチ調査状況（南西から）

4. Ｕトレンチ調査状況（北西から）



5. Ｐトレンチ北半およびＲ区西側土層（南東から）

6. Ｑトレンチ調査状況・西側土層（北東から）

7. Ｒ区調査状況・西側土層（東から）

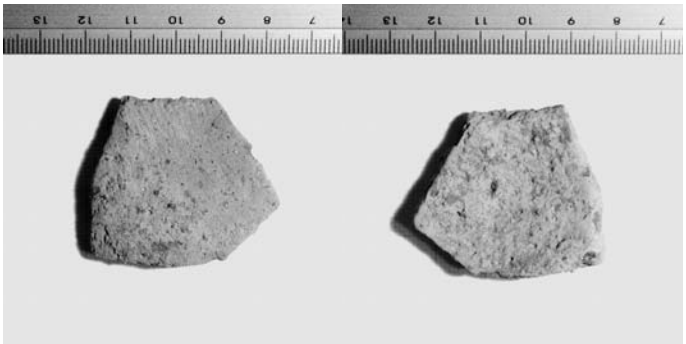
8. Ｓ区調査状況・西側土層（東から）

1. 菱雲紋鏡　鈕孔Ａ側俯瞰写真

2. 菱雲紋鏡　鈕孔Ｂ側俯瞰写真

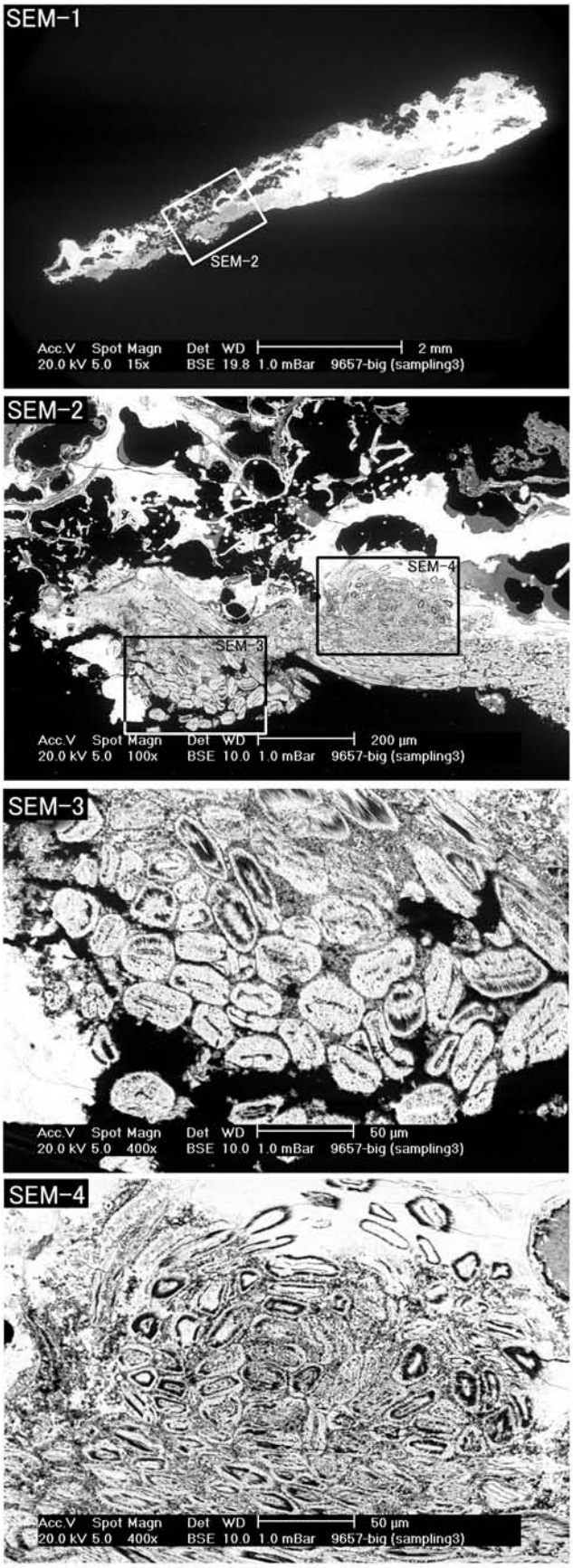
3. 芝草紋鏡　鈕孔Ａ側俯瞰写真

4. 芝草紋鏡　鈕孔Ｂ側俯瞰写真

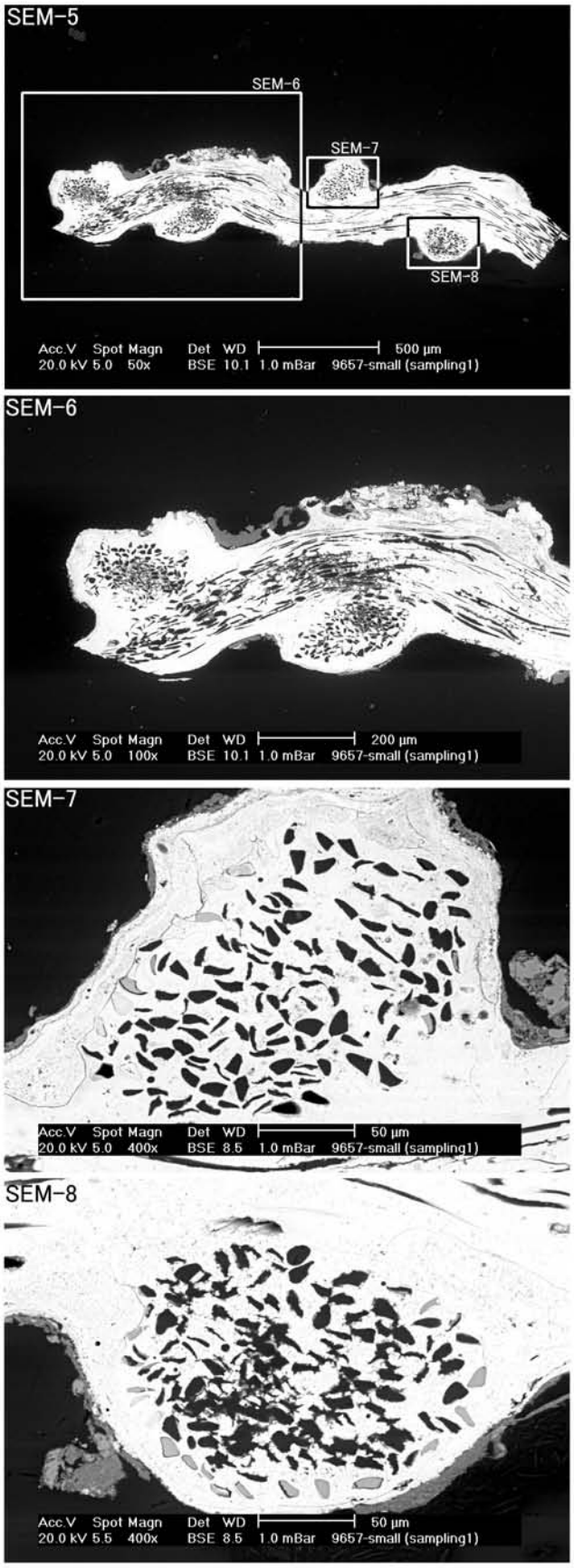


5. 出土土器片Ａ（粘土槨内）写真

6. 出土土器片Ｂ（周囲採集）写真



1. 菱雲紋鏡付着織物繊維断面の電子顕微鏡写真
（上から、約15倍、100倍、400倍、400倍）



2. 芝草紋鏡付着織物繊維断面の電子顕微鏡写真
（上から、約50倍、100倍、400倍、400倍）

Ⅲ　元岡石ヶ原古墳の調査

（第１次・２次調査：調査番号　９６５８・０３４０）

例　言

1．本章は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が1996～2004年度に行った元岡石ヶ原古墳第１次、２次調査の報告書で、元岡・桑原遺跡群の調査では第１次、35次調査に当たる。本書で報告する元岡・桑原遺跡群は縄文時代～中世にかけての複合遺跡で遺跡略号はＭＯＴとしている。遺跡群には多数の群集墳や前方後円墳等も含まれ、それぞれに名称が付けられているが、今回の調査では調査略号は古墳の調査についても「ＭＯＴ」で統一している。

2．本章に使用した遺構実測図は池崎譲二、松浦一之介、濱石哲也、菅波正人、池田祐司、水崎るりが、遺物実測図は林田憲三、菅波が行った。トレースは撫養久美子が行った。

3．本章に使用した写真は松浦、濱石、菅波、池田が撮影した。空中写真については朝日航洋株式会社に撮影を委託した。

4．本章に使用した座標は国土座標第Ⅱ系を使用した。

5．本章の執筆は濱石、池田、松浦と協議の上、菅波正人が行った。

6．今回報告する出土遺物および遺構、遺物の記録類は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

調査番号	調査次数（　）は遺跡内での調査次数	担　当　者	所　在　地	分布地図番号	調 査 期 間	調 査 面 積
9658	第１次（第１次）	池崎、松浦	大字元岡字石ヶ原	桑原129	H8. 8. 27～H8. 11. 29	1,280㎡、古墳１基
0340	第２次（第35次）	濱石、菅波、池田	大字元岡字石ヶ原	桑原129	H15. 5. 20～H17. 1. 12	1,853㎡、古墳１基

１．調査の概要

元岡石ヶ原古墳は、事業地の東側に位置し、同地で最高所である水崎山（標高95.1m）から北西に向かって派生する標高70m程度の狭長な尾根上に立地する前方後円墳である。ここから北に派生する舌状丘陵の先端には、４世紀代の前方後円墳である金屎古墳が立地する。また、南及び西側へ派生する丘陵上には、元岡古墳群Ｊ群、同Ｎ群、桑原古墳群Ａ群などの群集墳が分布する。

元岡石ヶ原古墳の調査は九州大学統合移転に関わる発掘調査で、これまで２度行われている。元岡・桑原遺跡群の調査では第１次調査は第１次、第２次調査は第35次調査に当たる。

第１次調査は平成８年８月27日～同年11月29日にかけて行われた。この時は移転事業の当初にあたり、造成計画は確定していなかったこともあり、調査は墳丘の規模と埋葬主体の構造を明らかにし、その築造年代を比定することを目的として実施した。調査面積は1,280㎡であった。本古墳の周辺は戦後の果樹園の造成により地形が大きく改変されており、墳丘や石室もその影響を受けていた。調査は内部主体を精査し、墳丘に13本のトレンチを設定し、規模を確認した。石室は天井や壁、床面の石の大半が抜き取られ、遺物もほとんど残っていない状態であった。墳丘も前方部の先端やくびれ部付近に後世の撹乱を受けていた。調査は規模、遺存状況の確認を目的としていたので、トレンチを埋め戻して調査は終了した。

第２次調査はこの古墳が第Ⅱ工区の造成を避けられない地点に位置し、現状での保存は困難であることから、記録保存による調査が予定された。しかし、前方後円墳であるこの古墳を造成することには慎重な意見も出された。事業地の造成は九州大学のキャンパス内文化財等の保存、活用の方針から、前方後円墳や多数の副葬品が出土した桑原石ヶ元古墳群、山城などは計画の範囲から外していた。また、調査の結果、奈良時代の大規模製鉄遺跡が発見された第12次調査地点や多数の木簡が発見された第20次調査地点等で、設計の変更による遺跡の保存処置が取られたケースが生じてきた。このようなことから、古墳の調査は、九州大学、福岡市土地公社と協議を行いながら、進めることとなった。

第２次調査は平成15年５月20日から開始した。第１次調査では規模、遺存状況の把握を目的とした部分的なものであったが、この調査では墳丘の表土を除去し、墳丘全体の遺存状況を検出した。また、未調査であった羨道部や墓道部分の構造の把握に努めた。調査の結果、第１次調査で想定した墳丘形や規模が若干修正されることとなった。また、墳丘から須恵器等の遺物が出土し、古墳の時期を示す資料を得ることができた。平成15年９月、古墳の取り扱いはこの時点でも検討中であったことから、九州大学に調査の成果を報告し、有識者を交えて、現地での説明を行なった。その後、古墳の取り扱いは学内の委員会に諮られることとなり、調査はその方針が決定されるまで中断となった。平成16年３月、学内の委員会で古墳の現状での保存ではなく、記録保存とし、古墳の移設等で対応するという方針が出された。その方針を受けて、大学、公社と協議し、調査は記録保存とし、移設等については石室の移築、土層の剥ぎ取り、墳丘のボーリングデータの採取を行なうこととなり、平成16年７月に調査を再開した。墳丘の遺存状況確認までは前年度までに行なっていたので、墳丘の盛土の状況の確認しながら、墳丘の掘り下げを行なった。併せて、墳丘のボーリング調査、土層の剥ぎ取りを行なった。その後、墳丘を除去し、地山整形面を検出して、写真、測量等の記録を作成した。これらの記録作成が終了した後、石室の移設を行なった。石室は将来、復元し、公開展示する計画であるが、移設先が決定していないことから現地からの移動に留めた。石室の移設、土層の剥ぎ取り等は大成エンジニアリング株式会社に委託した。移設作業を含めて、平成17年１月12日に終了した。

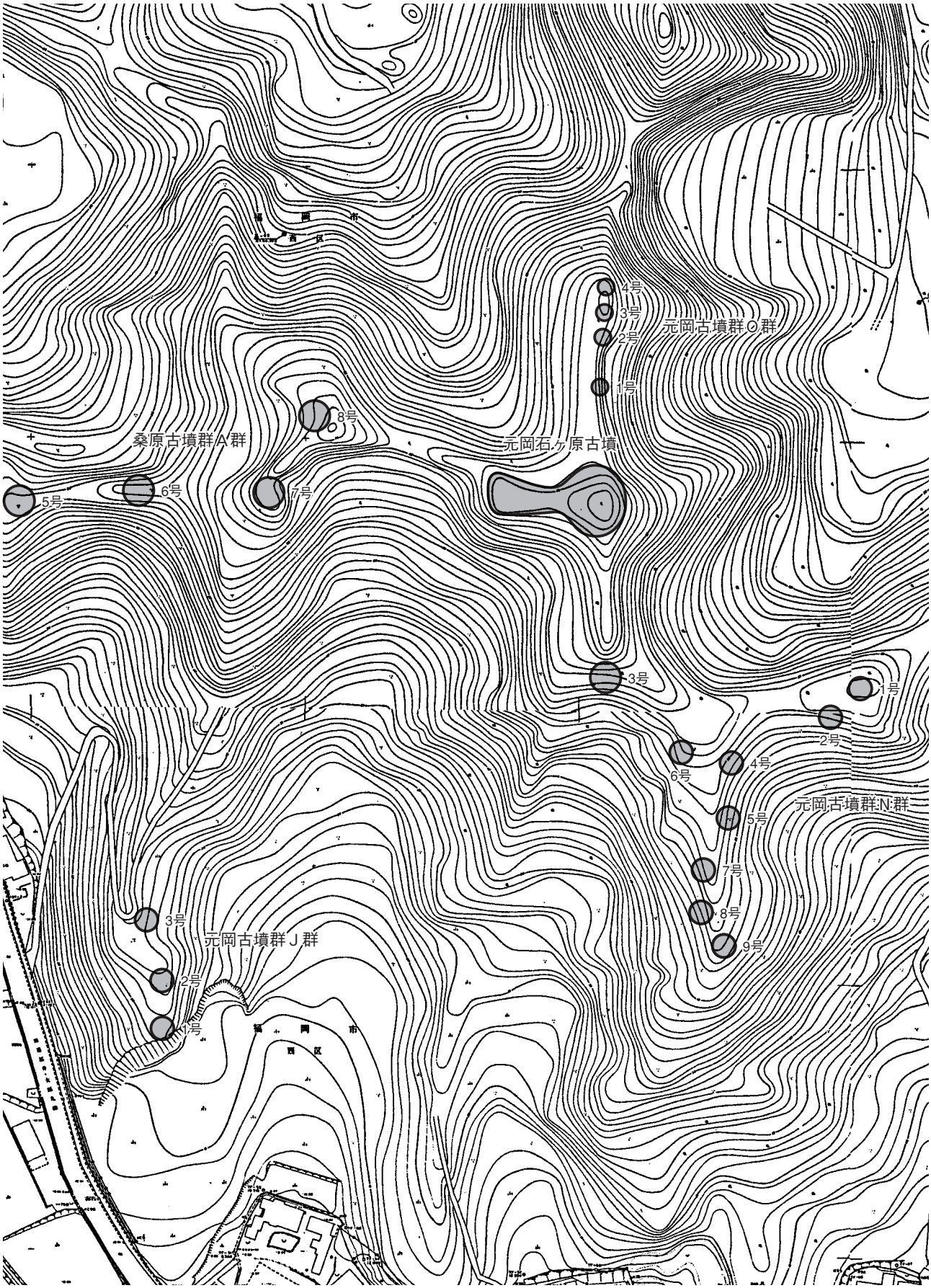


Fig.1　石ヶ原古墳位置図（1/4,000）

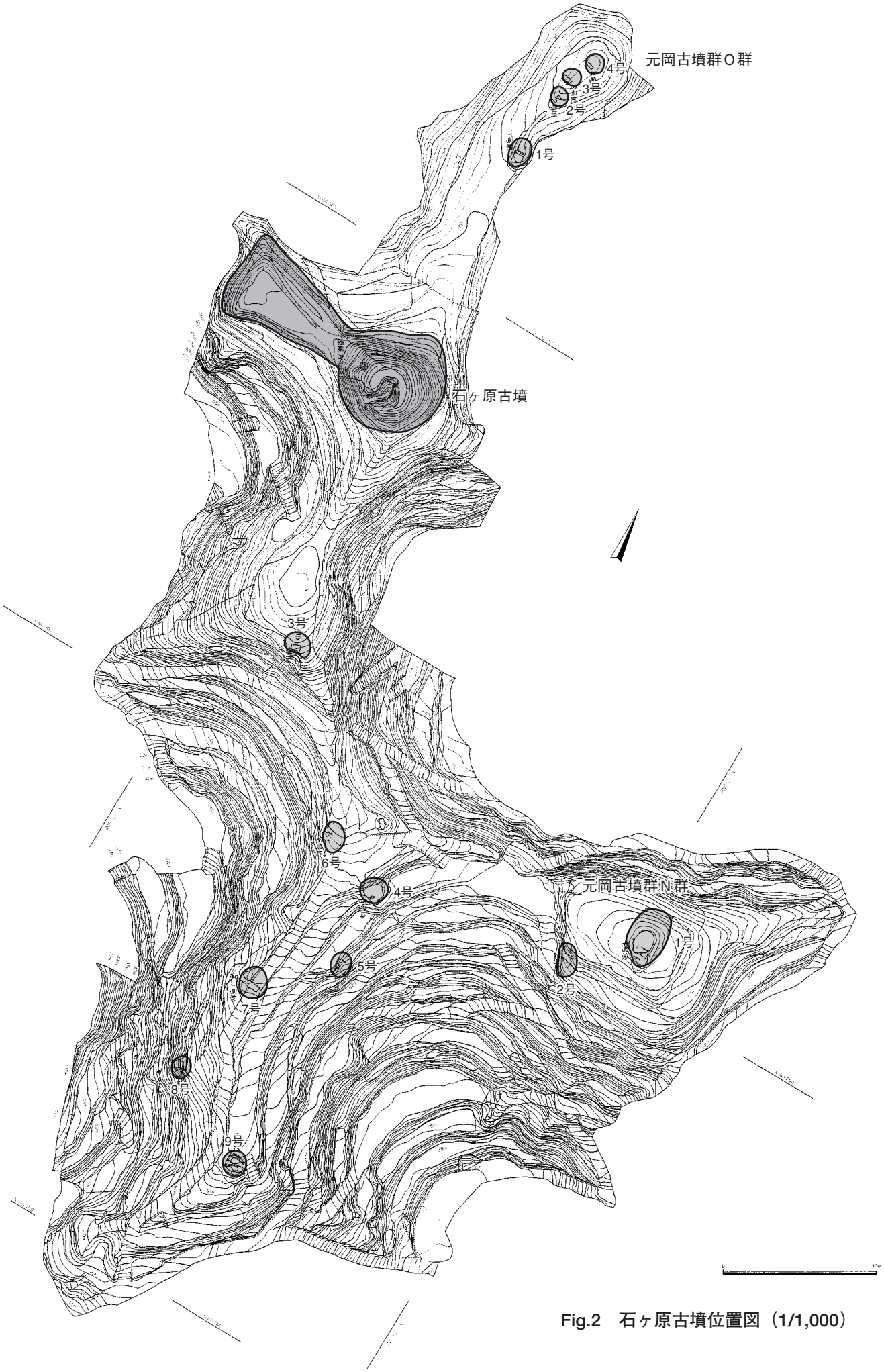


Fig.2　石ヶ原古墳位置図（1/1,000）

２．調査の記録

１）立地

元岡石ヶ原古墳は、水崎山から北西に向かって派生する標高70m程度の狭長な尾根上に立地する前方後円墳である。ここから北に派生する舌状丘陵には元岡古墳群Ｏ群、更にその先端に４世紀代の前方後円墳である金屎古墳が立地する。また、南及び西側へ派生する丘陵上には、元岡古墳群Ｊ群、同Ｎ群、桑原古墳群Ａ群などの群集墳が所在する。本墳はそれらの古墳群の中で、最高所に位置し、今宿、糸島平野が見渡せる場所にある。

古墳が立地する丘陵はＴの字形に南北、東西方向に延びる、幅20～30m程の狭いものである。東側は谷部となり、急激な段差が付く。北側に延びる丘陵には約30mの位置に元岡古墳群Ｏ群が立地する。南側では約40mの位置に元岡古墳群Ｎ群３号墳となり、急激な段差が付く。墳丘は後円部を東側に向けて尾根に沿って構築される。地山は花崗岩のバイラン土で、部分的に岩脈が露出している。

２）墳丘

現況

墳丘は戦後の果樹園の造成等により大きく改変されている。特に後円部の北側からくびれ部にかけての部分と前方部の先端も大きく削り取られている。

規模・構造

墳丘は全長49m、後円部径25m、高さ５m、前方部長26m、前方部幅23m、高さ３m、くびれ部幅11.5mに復元される。後円部は二段築成、前方部一段で、葺石は認められない。後円部の東側に幅１m程のテラスが残る。後円部の北側から東側には幅１～３m程の浅い溝があり、墳丘を整形する際の溝と考えられる。また、前方部との境にも幅１m程の溝が掘られていた。この溝は盛土により埋められていることから、地山整形の際に掘られ、石室構築と１次墳丘の盛土の後に埋められたものと考えられる。後円部は地山整形により高さ３m程の高まりを削り出したと考えられる。一方、前方部の先端は大きく削平を受けていたが、部分的に残る丘陵線上で丘尾切断の溝を確認した。側面は溝は検出されなかった。

後円部の墳丘の構造は１トレンチ、２トレンチ、10トレンチの観察から、石室の構築と並行して構築された１次墳丘と墳丘を整えるための２次墳丘に分けられる。１次墳丘は黄褐色粘質土の土で層状に盛られる。土質に大きな相違は見られない。一方、２次墳丘は赤褐色粘質土と黒色土混じりの黄褐色砂質土の互層となる。１次墳丘と比較すると、締りが弱いようである。また、地表面から地山まで縦方向に多くの亀裂が入り、土層にズレが観察できた。特に２次墳丘で明瞭に現れており、同一の層が約60cmの幅でずれていることが分かった。これらのズレは後円部の各トレンチで観察できたことから石室を中心にして、同心円状に発生していると判断される。墳丘の掘り下げの際も平面的にひび割れのような状態が検出できた。土嚢の積み上げた痕跡とも考慮したが、ずれた土層の隣同士で対応関係があることから、盛土の地滑りなどによって起こったのではないかと判断した。地滑りの原因は定かではないが、狭い丘陵に盛土したことも影響しているのではないかとも考えられる。

前方部は表土の下の盛土は10～40cm程度である。前方部の中央に溝状遺構や柱穴が検出されており、水崎城や戸山城等の中世の山城などによる改変も考えられる。前方部では後円部で見られたような土層のズレは確認できなかった。

遺物はくびれ部付近で須恵器器台等が多数出土した。

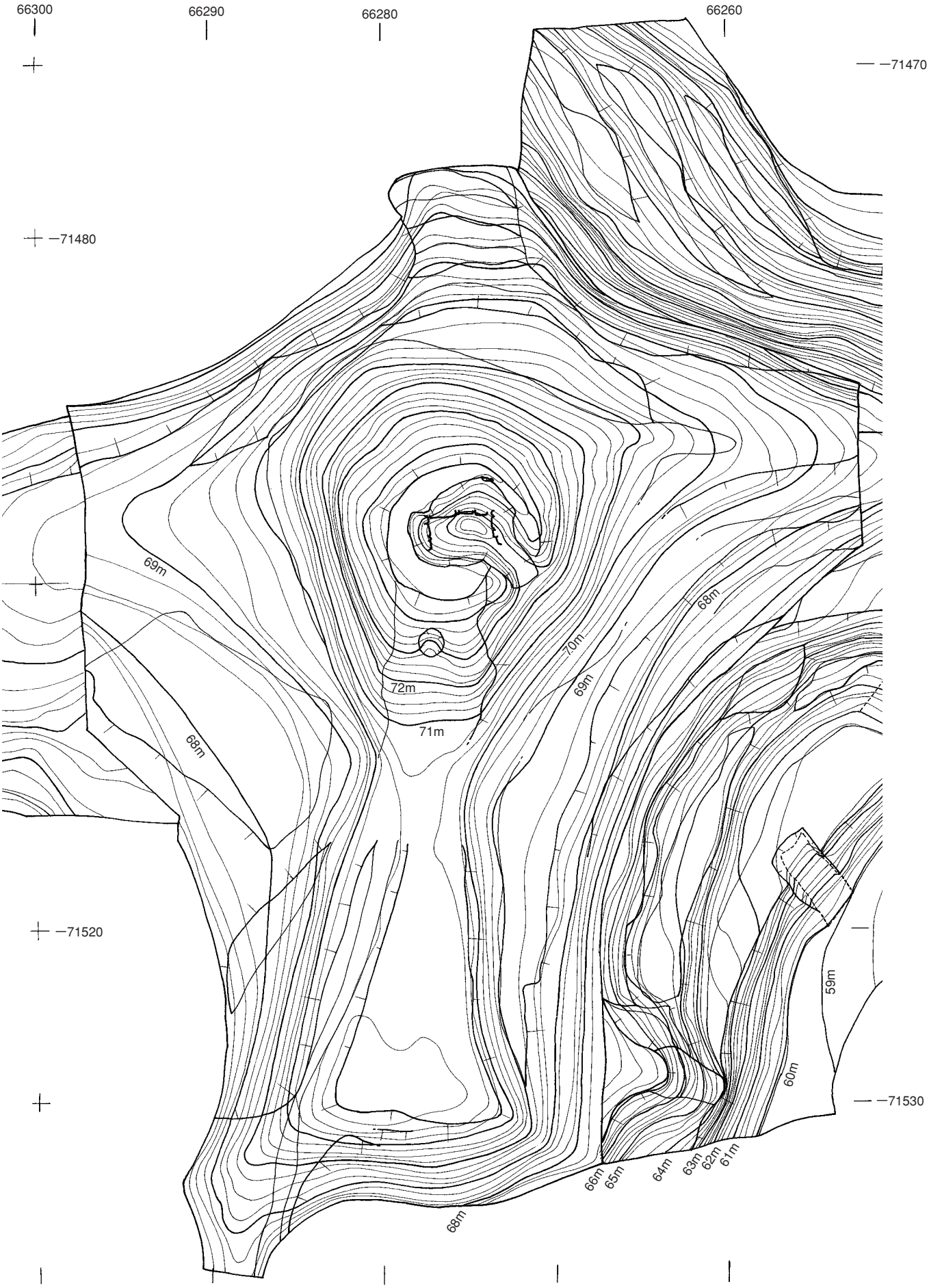


Fig.3　石ヶ原古墳現況測量図（1/300）

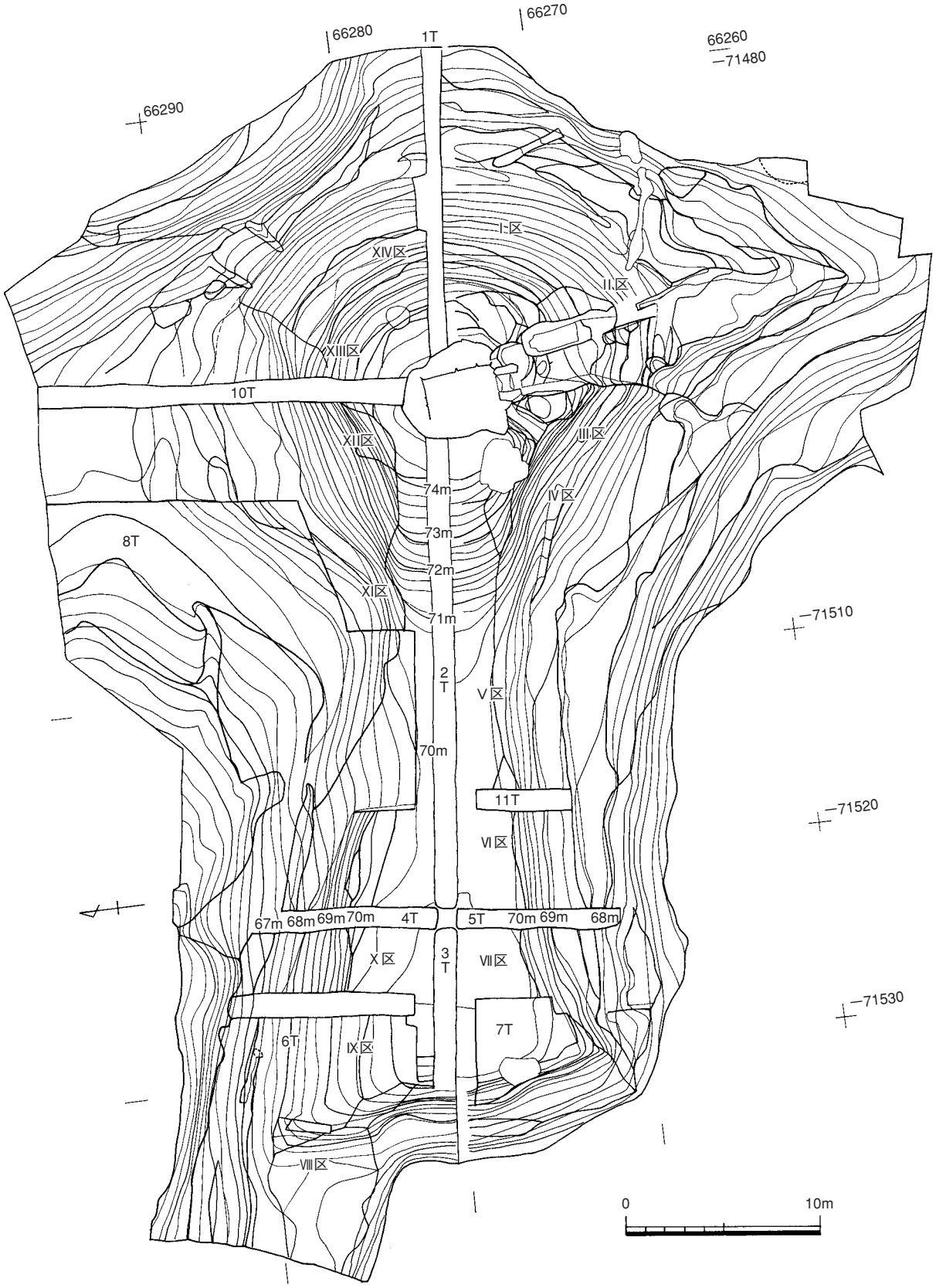


Fig.4　石ヶ原古墳墳丘遺存状況測量図（1/300）

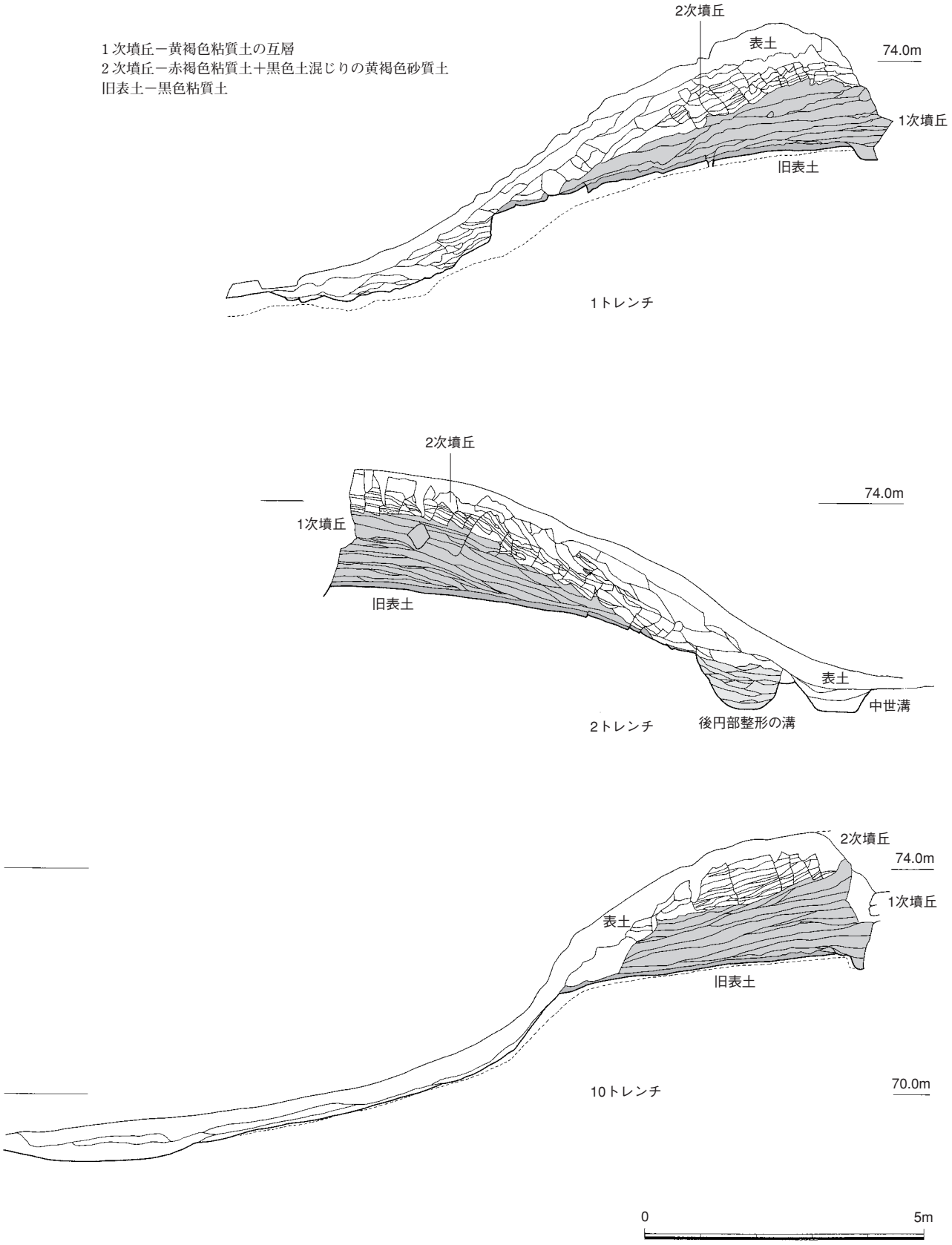


Fig.5　石ヶ原古墳墳丘土層実測図１（1/100）

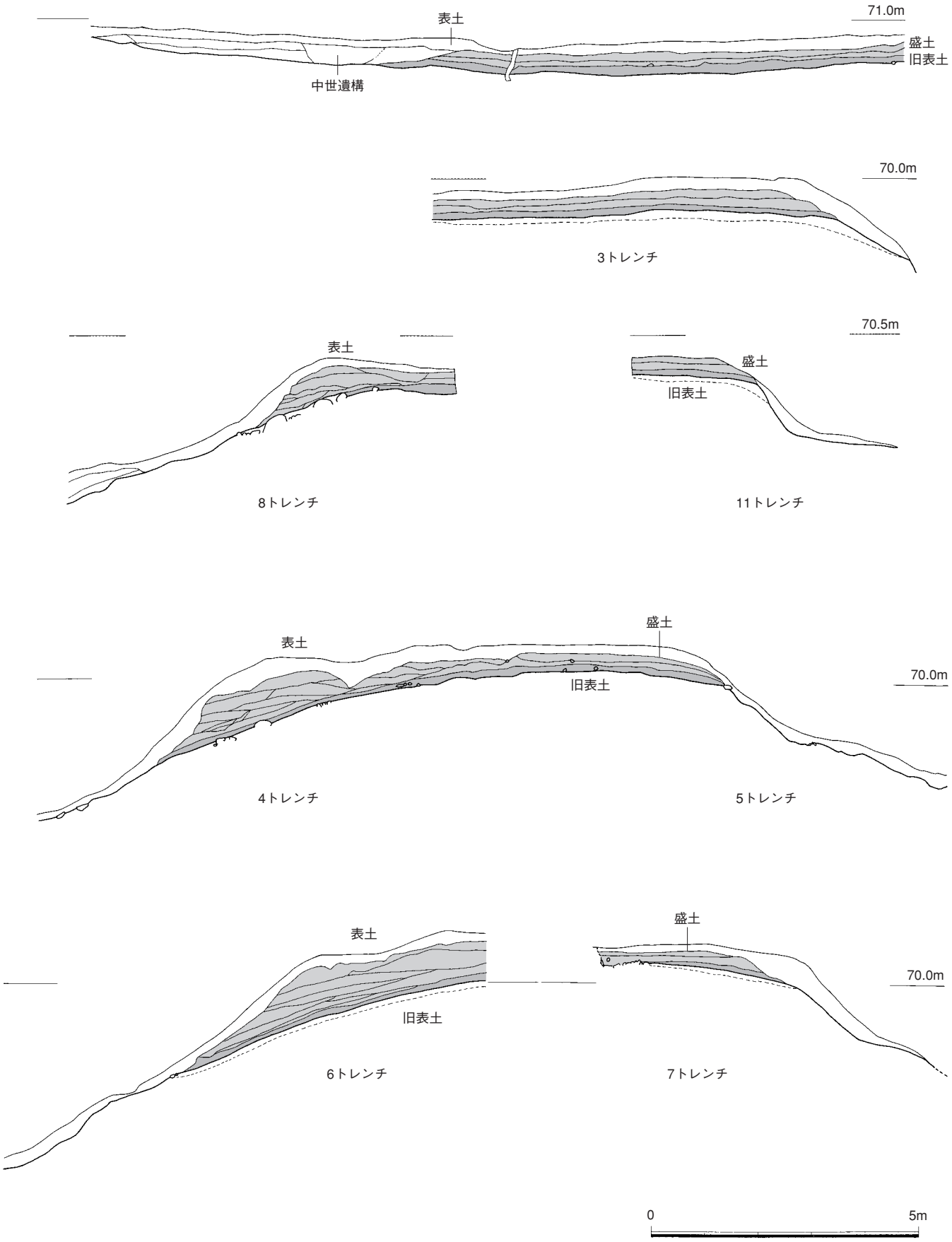


Fig.6　石ヶ原古墳墳丘土層実測図２（1/100）

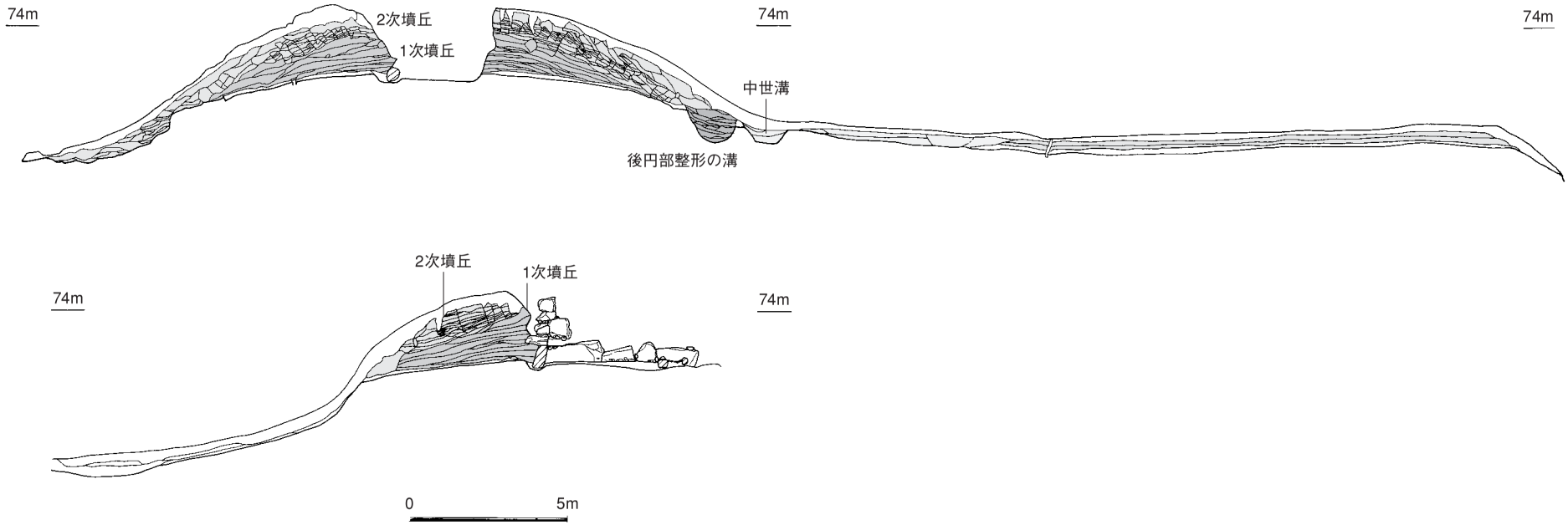


Fig.7　石ヶ原古墳墳丘土層実測図 3（1/200）

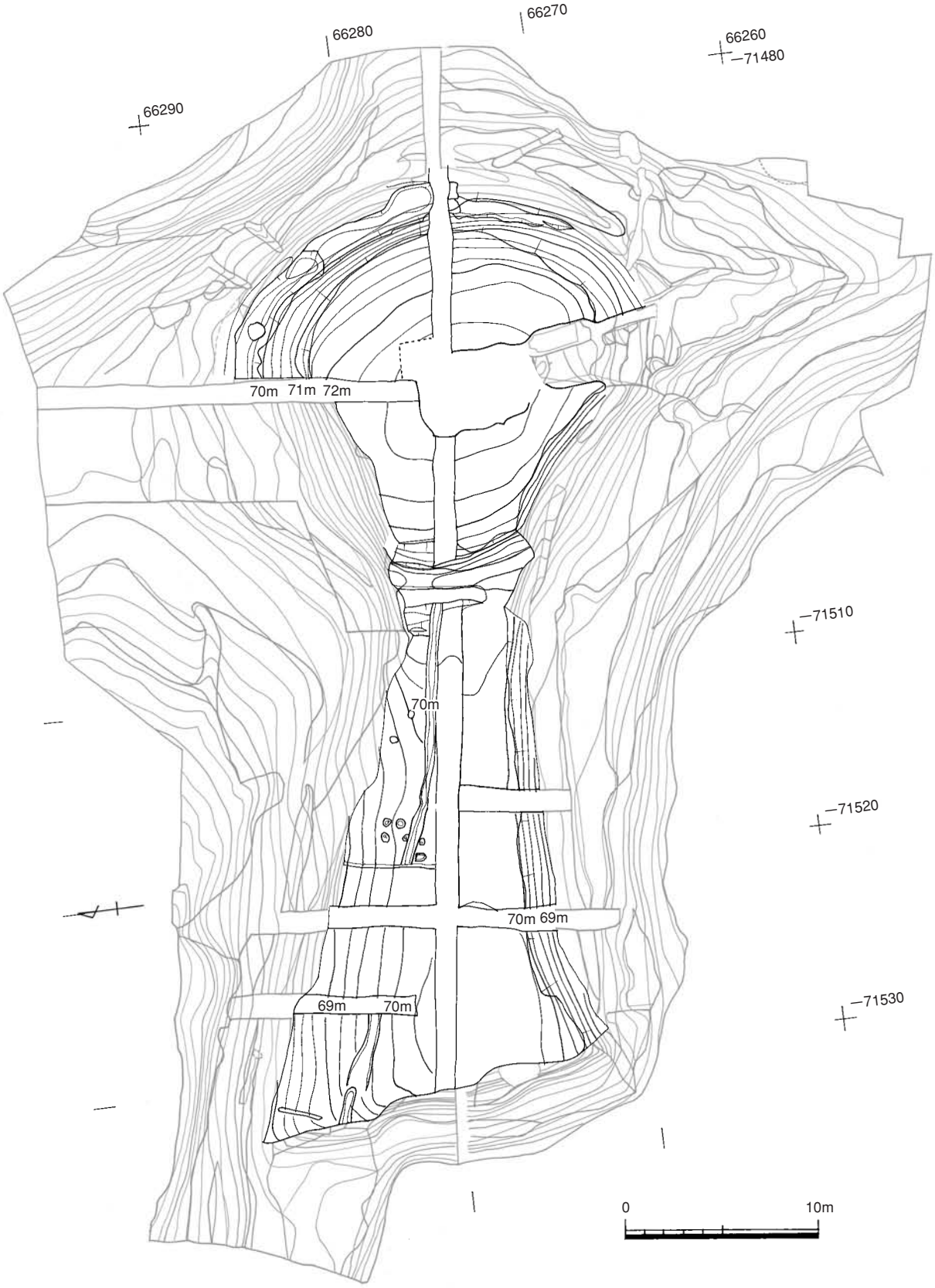


Fig.8　石ヶ原古墳地山整形測量図（1/300）

3）横穴式石室

現況

埋葬施設は、両袖式単室の横穴式石室である。石室の部分は石材の抜き取りのため、大きな窪みの状態であった。また、石室の左袖石側に溝状の掘り込みがあり、石材の抜き取りのためのものではないかと考えられる。

玄室

石室主軸はN－3°－Wで、南側に開口する。ほとんどの石材が抜き取られ、腰石及び右隅角の一部を留めるにすぎない。右隅角は床面より約２mの高さを測る。左側壁は遺存せず、奥壁はくさびで割られていた。右側壁長3.6m、奥壁幅2.1mを測り、奥壁は２石、右側壁は３石を配し腰石としている。石材には花崗岩の転石及び割石を使用する。袖石は横位に配される。幅約30～50°を測る。敷石は羨道部のみ遺存し、玄室部分は攪乱され遺存しない。

羨道

羨道はハの字形に開き、長さ約２m、幅約80cmを測る。右側壁は抜き取られている。床面には２カ所に梱石が配される。第１梱石は細長い花崗岩の転石を使用し、閉塞石の根石としている。第２梱石も同様の石材を用いる。両梱石の間には拳大の礫が敷き詰められる。

閉塞施設

閉塞部は攪乱されていたが、閉塞石には長さ約150cm、幅約80cmの扁平な板石を立てて使用していたものと考えられる。板石の下部には根固めの石が検出された。

墓道

墓道は長さ約６m、幅約３m程あり、墳丘の傾斜に沿って下っていく。墓道の右側で長さ約3.5m、幅1.5m、深さ約60cmの土坑状の遺構を検出した。この遺構は墓道を切るように掘られたものである。盗掘等の後世のものとも考えられたが、埋土には汚れも見られず、方向が羨道に向かっていることなどから、墓道の掘り返しと判断した。

掘り方

石室の掘り方は後円部の中央にあり、墳丘の長軸に対してほぼ直交する。長さ約6.5m、幅約４mを測る。

4）出土遺物

遺物の出土状況

石室や墳丘からは須恵器（坏身、坏蓋、高坏、器台、皮袋形瓶、甕等）、土師器（高坏、小型丸底壷等）、鉄器片（太刀、鉄鏃等）が出土している。しかし、石室内は攪乱が激しく、原位置を保ったものは皆無であった。また、中世の遺物としては、土師器皿や輸入陶磁器類などがごく少量ではあるが出土しており、山城に関連する遺物と推測される。

須恵器

１～６は坏蓋である。坏蓋は１、２のように口縁が垂直に近いものと５、６のように天井部が丸みを帯び、口縁が若干広がるものがある。７～11は坏身である。７の受け部は高く、垂直に立ち上がる。８～11は受け部が内傾して立ち上がり、口径11.3～12.7cmを測る。12～15は高坏の蓋である。12は天井部に撮みが付き、櫛状工具による列点文を施す。13は二列の列点文が巡る。16～19は有蓋高坏である。16は低い脚で、カキ目を施す。17～19は脚部が欠損しているが、底部外面にカキ目を施す。20～23は無蓋高坏である。20は坏部の中位に波状文が巡る。23は脚に長方形の透かしが開けられる。24～

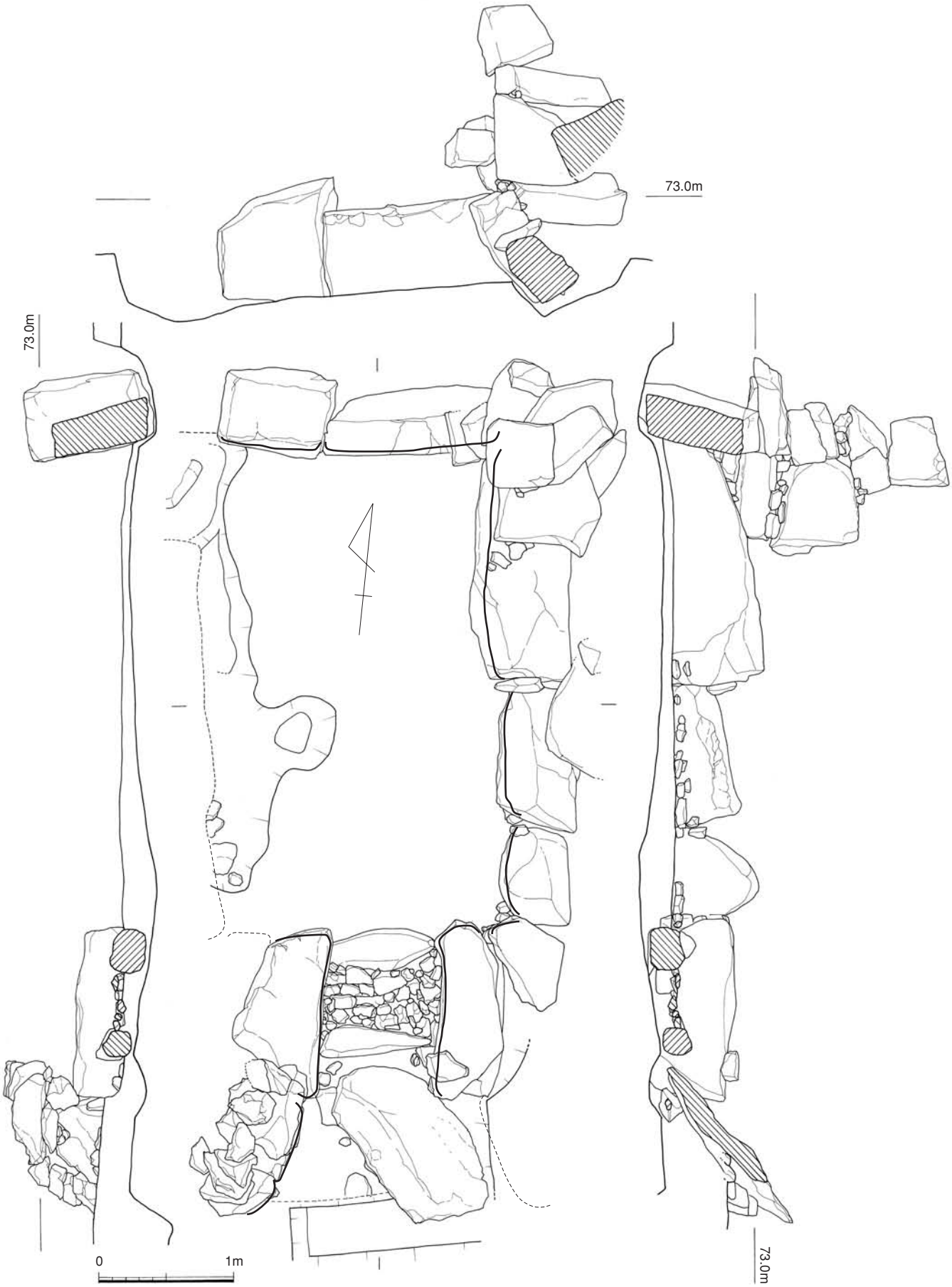


Fig.9　石ヶ原古墳石室実測図（1/40）

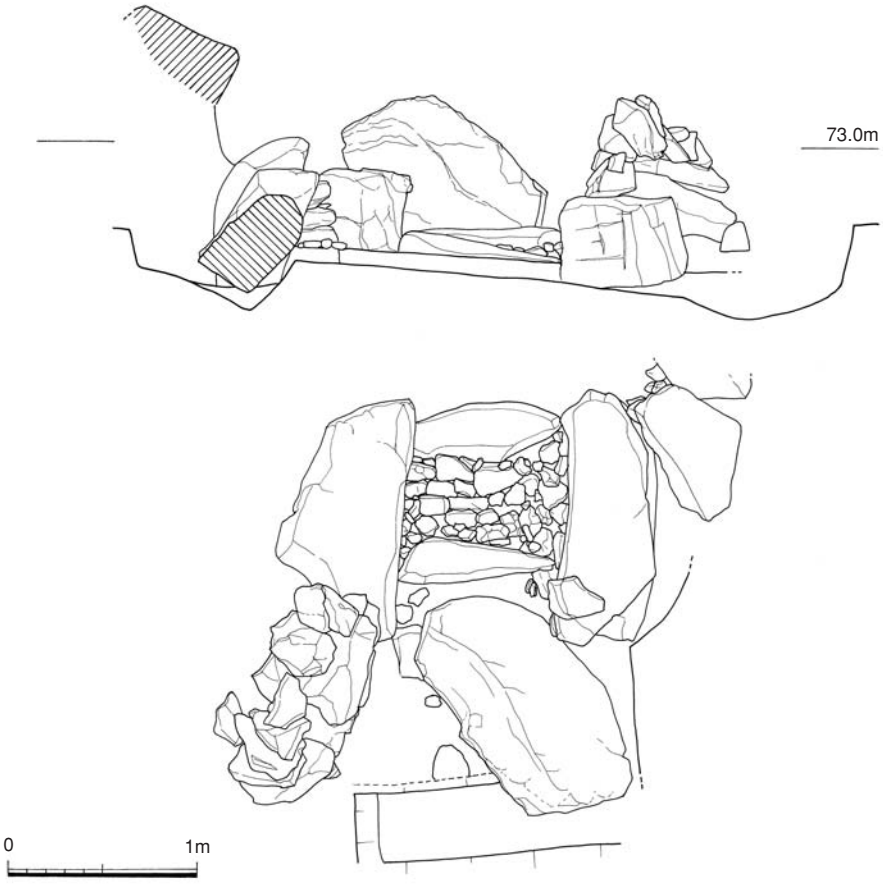
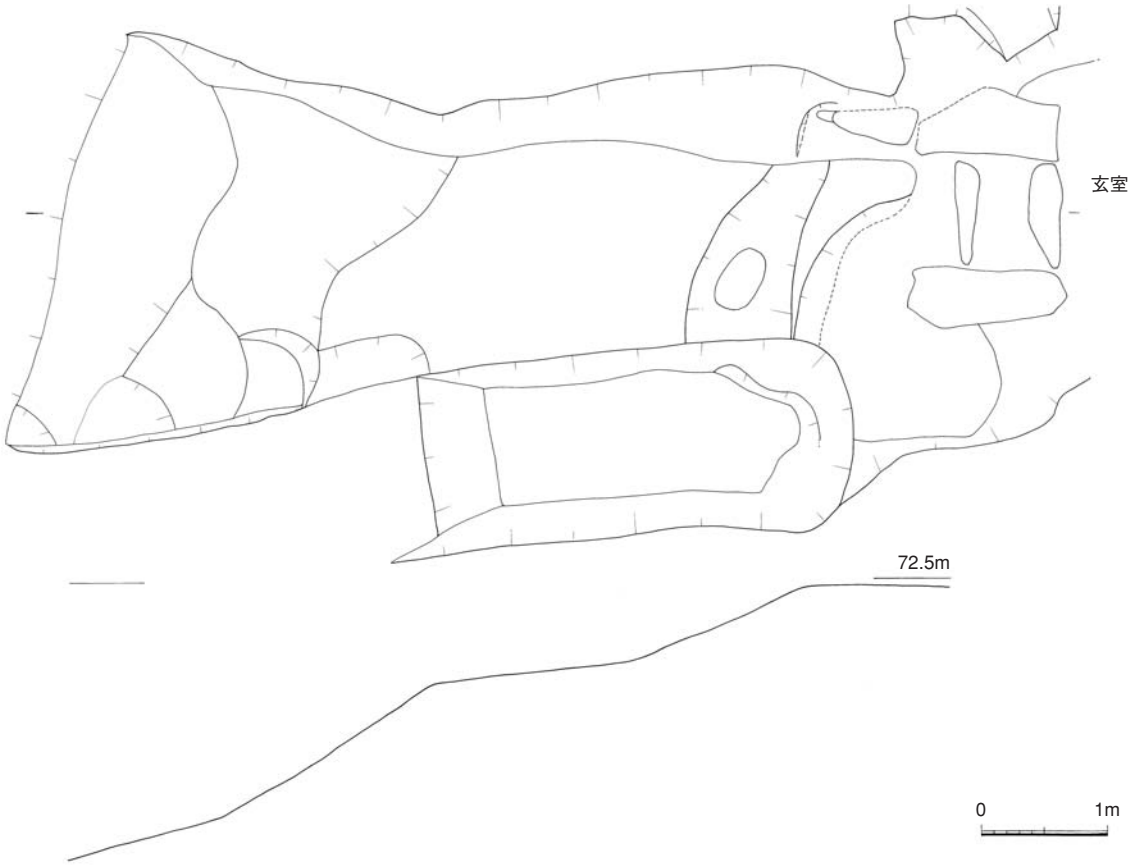


Fig.10　石ヶ原古墳羨道部及び閉塞石実測図（1/40）



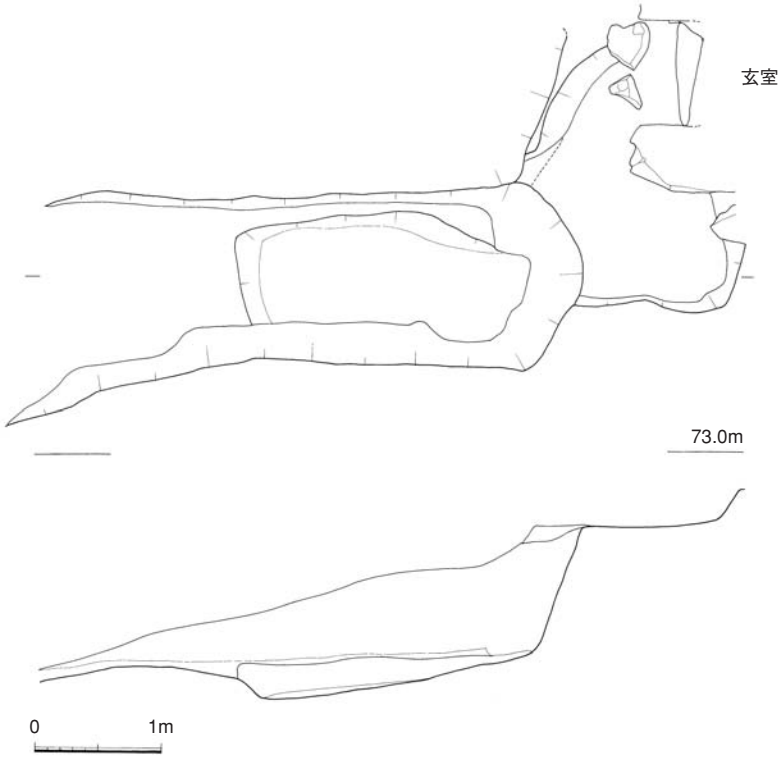


Fig.11　石ヶ原古墳墓道実測図（1/60）

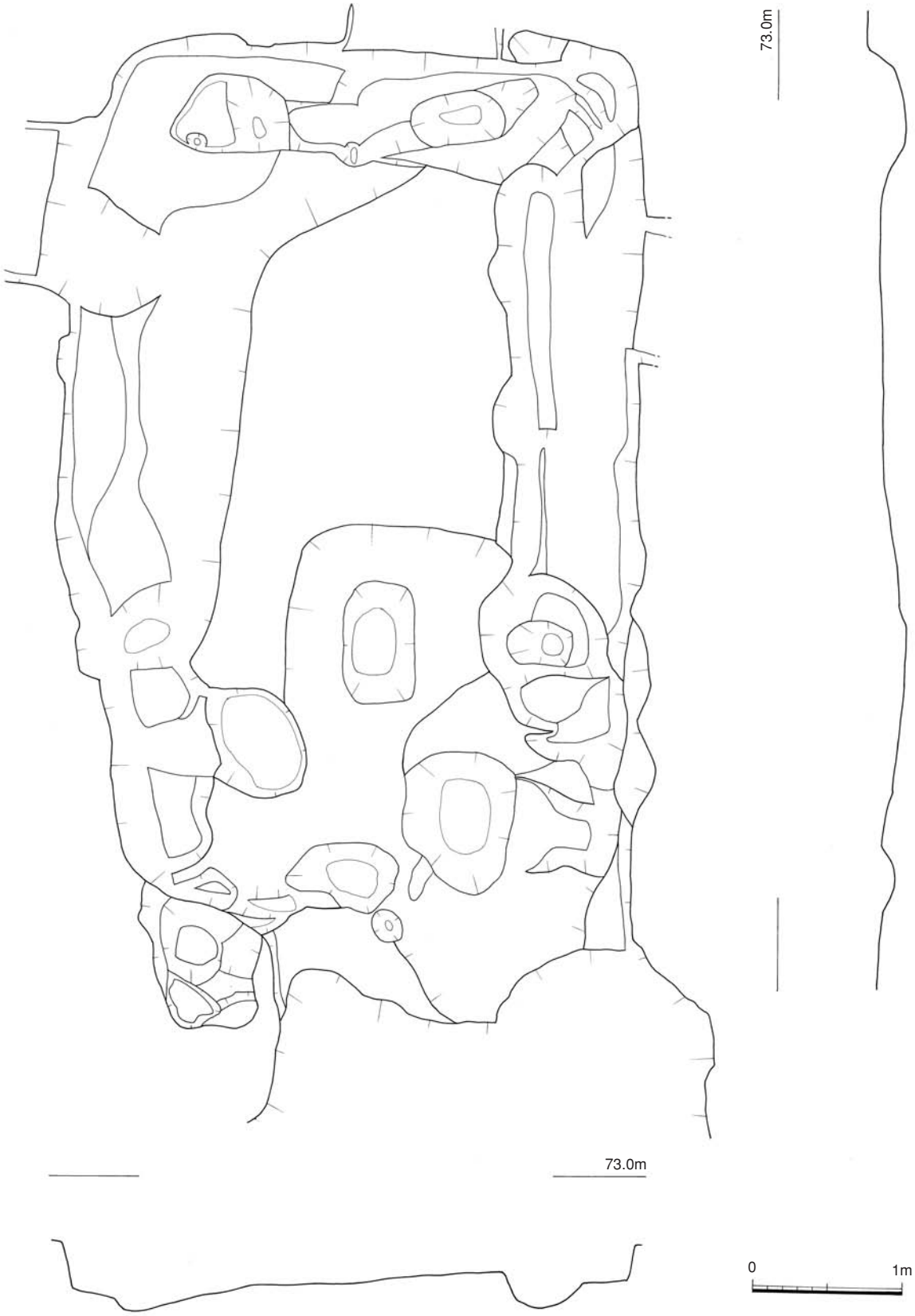


Fig.12　石ヶ原古墳石室掘り方実測図（1/40）

32は高坏の脚である。脚には24～28のように短脚で、一段の透かしが開けられるものと29～32のように長脚で、二段の透かしが開けられるものとがある。33は透かしを持たない。34～40は瓌である。瓌は口頸部の長さが体部を上回る。40は体部で胴最大径よりやや上のところに突起が付く。41は鹿の頭部と考えられるもので、片側は欠損しているが、耳と角の表現を表現する貼り付けがある。また、目と鼻は刺突で表現されている。40、41は接合しないが、胎土や焼成の様子から同一個体と考えられ、40の突起は鹿の尾を表現したものと考えられる。41、42は40と同様に鹿を表現したものと考えられる。41は片側が欠損しているが、耳と角の表現が見られる。42は耳、角は欠損している。41、42も鹿形の瓌の一部と考えられるが、他の瓌との同一個体の認定はできない。43は壺の蓋である。天井部は欠損しているが、櫛状工具による列点文が巡る。口縁にはかえりがつく。44～47は壺である。44、45は口縁に受け部が付く。頸部には波状文、列点文が施される。46は球形の体部で、上半にカキ目が巡る。47は台付の壺で、脚部はカキ目が巡り、透かしが開けられる。48は台付壺の脚である。長方形の透かしが開けられる。49は胴部の孔が見られないが、口頸部の器形の特徴などから台付子持瓌と考えられる。胴部は1/4が欠損しており、その部分に孔があったと考えられる。肩の部分には３個の小型の壺が貼り付けられる。本来は４個あったと考えられる。脚部にはカキ目が巡り、千鳥状に配列される透かしが開けられる。50～53は小型壺で、49に見られるような装飾と考えられる。50～52は無文、53は胴部に櫛状工具による列点文が施される。53は50～52は胎土、焼成も類似しており、一連の装飾と考えられる。53は蓋の装飾の可能性もある。54、55は瓶である。54は肩の部分に櫛状工具による列点文が施される。56～74は器台で、高坏形のものである。56は完形復元できたもので、坏部外面に櫛書の波状文が巡る。脚部は筒状を呈し、裾部付近で広がる。脚部の外面には上から二段は櫛状工具による列点文、それ以下の六段は波状文を施す。透かし孔は上から円形（一段）、長方形（二～三段）、三角形（四～八段）となる。57は筒状の脚部で、上から五段は櫛状工具による列点文、それ以下は波状文を施す。透かし孔は円形（一段）、それ以下は長方形となる。58～63は坏部で、外面には波状文が施される。坏部の下半は叩き目が残る。口縁はやや玉縁状を呈する。64～74は脚部である。脚の上部は筒状を呈し、裾付近で広がる。脚部の透かし孔は長方形、三角形がある。施文は上方の二～三段には列点文が、下方には波状文が施される。75は皮袋形瓶である。胴部の半分のみであるが、表面には突帯と竹管文で皮の綴じを表現している。竹管文は縦方向に施される。突帯には竹管文は施されない。76～79は甕である。76は外面に円形の浮文が付く。80は平底の瓶で底部である。81は皿の底部である。82は鉄鉢形の鉢の底部である。80～82は時期の下るものと考えられる。

土師器

83は坏蓋である。天井部には回転ヘラ削りが施される。84、85は高坏である。86、87は小型丸底壺である。88は小皿である。底部の切り離しは不明。89は碗である。内面には丁寧な磨きが施される。底部は高台が取れている。

金属器

鉄製品はいずれも破損しており、特徴のわかるものを実測した。90～94は大刀である。94は茎部で糸を巻いた痕跡が見られる。95は鉾の袋部と考えられる。木質が残存する。96は不明鉄製品。97～110は鉄鏃である。鉄鏃は有茎の柳葉形で、関部に逆刺が付くものが多い。111は絞具である。112は二本の鋲があり、裏面には木質が残る。113は辻金具。114は小札か。このほか、小片ではあるが、鏡の可能性がある青銅製品の破片出土している。

遺物観察表 1

挿図(Fig.)	図版(PL.)	番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形	法　量(器高×口径×底径(cm))	特　　徴
13	—	1	II区	須恵器	坏蓋	(3.3)×12.8	天井部を欠く。色調は灰色。焼成はやや不良。
13	—	2	V区N0.1	須恵器	坏蓋	(4.1)×13.9	口縁のみ。色調は灰色。焼成は良好。
13	—	3	V区N0.1	須恵器	坏蓋	5.3×13.9	天井部の1/2に回転ヘラ削り。色調は灰色。焼成は良好。
13	19	4	V区墳丘中8トレンチ、XI区墳丘中2トレンチ	須恵器	坏蓋	5.6×15.8	1/2欠損。色調は灰色。焼成は良好。
13	19	5	2トレンチ	須恵器	坏蓋	4.9×15.2	1/6欠損。天井部の2/3が回転ヘラ削り。色調は灰色。焼成は良好。
13	—	6	2トレンチ	須恵器	坏蓋	(3.9)×15.0	天井部を欠く。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
13	—	7	I区	須恵器	坏身	(4.0)×11.4	底部を欠く。色調は淡褐色。焼成は良好。
13	—	8	墓道中	須恵器	坏身	(3.9)×12.3	口縁のみ。色調は灰色。焼成は良好。
13	—	9	IV、V区墳丘中	須恵器	坏身	(4.0)×11.8	底部を欠く。色調は灰色。焼成は良好。
13	—	10	III、IV区表土	須恵器	坏身	(4.9)×12.7	底部を欠く。色調は灰色。焼成はやや不良。
13	—	11	9トレンチ	須恵器	坏身	(3.9)×11.3	底部を欠く。色調は淡灰色。焼成は良好。
13	19	12	石室内、XI区墳丘表土	須恵器	高坏蓋	6.1×15.8	1/2欠損。色調は暗灰色。焼成は良好。
13	—	13	石室盗掘坑	須恵器	高坏蓋	—×—	天井部の一部。色調は灰色。焼成は良好。
13	—	14	V区NO.3	須恵器	高坏蓋	(2.4)×—	天井部のみ。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
13	—	15	石室内	須恵器	高坏蓋	(3.6)×14.0	天井部を欠く。色調は灰色。焼成は良好。
13	—	16	IV、V区墳丘中	須恵器	有蓋高坏	(9.8)×13.6×11.0	坏部と脚部は接合しない。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
13	—	17	VI区ベルト中	須恵器	有蓋高坏	(3.7)×12.5×—	坏部のみ。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
13	—	18	III、IV区表土	須恵器	有蓋高坏	(4.4)×12.3×—	口縁のみ。色調は灰色。焼成は良好。
13	—	19	III区墳丘表土、盗掘坑	須恵器	有蓋高坏	(3.7)×—×—	坏部の一部。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
13	—	20	石室内	須恵器	無蓋高坏	(2.6)×13.0×—	口縁のみ。色調は暗褐色。焼成は良好。
13	—	21	III、IV区表土	須恵器	無蓋高坏	(3.2)×13.1×—	口縁のみ。色調は灰黒色。焼成は良好。
13	19	22	石室内	須恵器	無蓋高坏	(7.4)×9.8×—	脚部が欠損。色調は灰色。焼成は良好。
13	19	23	NO.1	須恵器	無蓋高坏	11.1×11.9×8.8	口縁、脚部の一部が欠損。脚部には一段の長方形の透かし孔。色調は灰黒色。焼成は良好。
14	19	24	V区ベルト	須恵器	高坏脚	(9.1)×—×10.9	脚部のみ。一段の透かし孔。色調は暗褐色。焼成は良好。
14	—	25	V区墳丘中	須恵器	高坏脚	(4.7)×—×10.0	脚部のみ。長方形の透かし孔。色調は灰褐色。焼成は良好。
14	19	26	VII区墳丘表土	須恵器	高坏脚	(10.4)×—×12.9	脚部のみ。色調は灰黒色。焼成は良好。
14	—	27	IV、I区墳丘	須恵器	高坏脚	(4.1)×—×10.3	脚の裾部。長方形の透かし孔。色調は灰色。焼成は良好。
14	—	28	2トレンチ	須恵器	高坏脚	(6.6)×—×9.5	脚部のみ。長方形の透かし孔。色調は灰色。焼成は良好。
14	—	29	V区、VI区ベルト中	須恵器	高坏脚	(9.7)×—×13.0	脚部のみ。2段の透かし孔。色調は灰色。焼成は良好。
14	—	30	IX区墳丘中	須恵器	高坏脚	(10.1)×—×—	脚部のみ。2段の透かし孔。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
14	—	31	2トレンチ	須恵器	高坏脚	(5.0)×—×10.6	脚部のみ。長方形の透かし孔。色調は灰黒色。焼成は良好。
14	—	32	XI区墳丘表土、2トレンチ	須恵器	高坏脚	(5.1)×—×10.0	脚部のみ。2段の透かし孔。色調は灰色。焼成は良好。
14	—	33	2トレンチ	須恵器	高坏脚	(9.4)×—×—	脚部の中位部分。透かし孔は無い。色調は褐色。焼成は良好。
14	19	34	III区墳丘中	須恵器	瓏	(9.0)×13.8	底部を欠く。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
14	—	35	III区墳丘表土、盗掘坑	須恵器	瓏	(4.8)×—	胴部のみ。色調は灰色。焼成は良好。
14	19	36	V区ベルト、9トレンチ	須恵器	瓏	(7.9)×—	1/2欠損。色調は暗灰色。焼成は良好。
14	—	37	IV、V区ベルト中、2トレンチ、IX区墳丘中	須恵器	瓏	14.1×12.5	口縁の一部を欠く。色調は灰褐色。焼成は良好。
14	—	38	III区墳丘表土	須恵器	瓏	(3.8)×—	胴部のみ。色調は灰色。焼成は良好。
14	—	39	IV区ベルト、2トレンチ	須恵器	瓏	(5.2)×—	胴部の1/4が残存。色調は暗褐色。焼成は良好。
14	20	40	IV区ベルト	須恵器	鹿形瓏	—×—	鹿の頭部は　に接合しない。一方の耳と角を欠く。色調は暗褐色。焼成は良好。
14	20	41	2トレンチ	須恵器	鹿形装飾	(6.1)	一方の耳と角を欠く。色調は褐色。焼成は良好。
14	20	42	後円部墳丘表土	須恵器	鹿形装飾	(5.4)	耳と角を欠く。色調は淡褐色。焼成は良好。
15	—	43	8トレンチ	須恵器	壺蓋	(3.8)×(14.0)	撮みと口縁を欠く。色調は灰色。焼成は良好。
15	20	44	III区墳丘表土	須恵器	壺	(7.4)×(11.8)	口縁、体部が欠損。色調は暗灰色。焼成は良好。
15	—	45	石室内	須恵器	壺	(6.5)×—	口縁の一部のみ。色調は暗灰色。焼成は良好。
15	—	46	II、III、IX区墳丘表土、墓道、石室	須恵器	壺	(24.9)×—×—	口縁と底部を欠く。色調は暗灰色。焼成は良好。
15	20	47	I区、IV区墳丘表土、2、9トレンチ、石室内	須恵器	台付壺	(27.0)×11.4×—	脚部を欠く。色調は灰色。焼成は良好。
15	—	48	I区石室内	須恵器	台付壺	(3.7)×—×15.0	脚部のみ。透かし孔あり。色調は灰色。焼成は良好。
15	20	49	IV、V区墳丘中	須恵器	台付子持瓏	27.8×17.0×12.2	肩部から胴部にかけて欠損。肩部に3個の小型壺が付く。本来は4個。脚に長方形の透かし。胴部の中央には円形孔は残っていない。色調は灰色。焼成は良好。
15	—	50	IV区ベルト	須恵器	小型壺	(3.4)×4.0	底部を欠く。色調は灰色。焼成は良好。
15	—	51	2トレンチ、IV区ベルト	須恵器	小型壺	(4.0)×4.4	底部を欠く。色調は灰色。焼成は良好。
15	—	52	IV区ベルト	須恵器	小型壺	(4.8)×4.5	底部を欠く。色調は灰色。焼成は良好。
15	—	53	I区墳丘表土	須恵器	小型壺	(4.7)×7.0	底部を欠く。色調は灰色。焼成は良好。
15	20	54	IV区ベルト、V区墳丘表土	須恵器	瓶	(15.9)×—	口縁と底部を欠く。色調は灰褐色。焼成は良好。
15	—	55	I区墳丘表土	須恵器	壺	(4.8)×7.0	口縁のみ。色調は灰色。焼成は良好。
16	21	56	I区墳丘表土、石室内、墓道、9トレンチ	須恵器	器台	51.1×36.0×38.6	杯部は1/3、脚部は中央部分が1/2欠損。8段の透かし孔。円形、長方形、三角形。色調は灰色。焼成は良好。
16	21	57	石室内、墓道、III、IV区墳丘表土	須恵器	器台	—×43.3×—	脚部の一部を欠く。脚部の透かし孔は円形、長方形。色調は褐色。焼成はやや不良。
17	21	58	III、IV、VII区墳丘表土、9トレンチ	須恵器	器台	(17.9)×38.0×—	脚部及び坏部の1/2欠損。脚部の透かし孔は長方形。色調は暗褐色。焼成はやや不良。

遺物観察表 2

挿図(Fig.)	図版(PL.)	番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形	法　量(器高×口径×底径(cm))	特　　徴
17	21	59	Ⅳ区墳丘表土、9トレンチ	須恵器	器台	(20.1)×41.2×—	脚部の大半は欠損。脚部の透かし孔は長方形。色調は灰褐色。焼成はやや不良。
17	21	60	Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ区墳丘表土	須恵器	器台	(13.4)×36.7×—	脚部を欠く。色調は灰褐色。焼成はやや不良。
17	—	61	Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ区墳丘表土、2トレンチ、Ⅴ区NO.1,2	須恵器	器台	(13.6)×40.0×—	脚部を欠く。色調は淡灰褐色。焼成はやや不良。
17	—	62	8トレンチ	須恵器	器台	(11.7)×29.5×—	坏部のみ。色調は暗褐色。焼成は良好。
17	—	63	Ⅳ区	須恵器	器台	(7.7)×33.5×—	坏部のみ。色調は暗灰色。焼成は良好。
17	—	64	墓道、石室、Ⅰ区墳丘表土	須恵器	器台	(11.9)×—×—	脚部のみ。円形、三角形の透かし孔。色調は暗褐色。焼成は良好。
17	—	65	Ⅲ、Ⅳ区墳丘表土	須恵器	器台	(17.4)×—×—	脚部の中位部分。長方形、三角形の透かし孔。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
17	—	66	Ⅲ区墳丘表土、Ⅴ区NO.2	須恵器	器台	(20.5)×—×—	脚部の中位部分。三角形の透かし孔。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
18	22	67	Ⅳ区ベルト、Ⅴ区墳丘表土、Ⅴ区NO.1	須恵器	器台	(35.0)×—×32.0	杯部を欠く。透かし孔が7段。三角形と長方形。色調は灰黒色。焼成は良好。
18	22	68	Ⅳ区墳丘表土	須恵器	器台	(26.7)×—×32.0	杯部を欠く。透かし孔が5段。三角形と長方形。色調は黄褐色。焼成は不良。
18	22	69	Ⅳ区墳丘表土	須恵器	器台	(21.2)×—×31.0	脚部のみ。三角形の透かし孔。色調は灰色。焼成は良好。
18	—	70	墓道、石室、Ⅰ区墳丘表土	須恵器	器台	(14.4)×—×24.0	脚部のみ。三角形の透かし孔。
18	22	71	Ⅳ区ベルト、2トレンチ	須恵器	器台	(5.2)×—×19.8	脚の裾部。三角形の透かし孔。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
18	—	72	Ⅰ区溝状遺構	須恵器	器台	—×—×—	脚部の一部。長方形の透かし孔。色調は黒褐色。焼成は良好。
18	—	73	Ⅳ区墳丘表土	須恵器	器台	—×—×—	脚部片。長方形の透かし孔。色調は灰色。焼成は良好。
18	—	74	Ⅴ区NO.3	須恵器	器台	—×—×—	脚部の一部のみ。三角形の透かし孔。色調は暗褐色。焼成は良好。
19	22	75	Ⅳ、Ⅴ区墳丘表土、9トレンチ	須恵器	皮袋形瓶	(14.5)×—×—	胴部片。口縁は欠く。色調は淡灰褐色。焼成はやや不良。
19	23	76	Ⅲ、Ⅳ区墳丘表土	須恵器	甕	(12.5)×22.2	口縁のみ。円形の浮文が付く。色調は灰褐色。焼成は良好。
19	—	77	8トレンチ	須恵器	甕	(15.8)×39.2	口縁のみ。色調は灰黒色。焼成は良好。
19	—	78	Ⅺ区墳丘中	須恵器	甕	(8.1)×25.6	口縁のみ。色調は暗灰色。焼成は良好。
19	—	79	墓道	須恵器	甕	—×—×—	口縁片。色調は灰色。焼成は良好。
19	—	80	Ⅴ区墳丘表土	須恵器	瓶	(7.7)×—×12.0	底部のみ。色調は暗褐色。焼成は良好。
19	—	81	XIII区	須恵器	皿か	(1.4)×—×12.0	底部のみ。色調は灰色。焼成は良好。
19	—	82	XIII区	須恵器	鉢	(2.5)×—	底部のみ。色調は淡灰褐色。焼成は良好。
19	—	83	Ⅲ、Ⅳ区墳丘表土	土師器	坏蓋	4.5×14.8	1/2欠損。色調は褐色。焼成は良好。
19	—	84	9トレンチ	土師器	高坏	(3.3)×22.6	口縁のみ。色調は褐色。焼成は良好。
19	23	85	Ⅴ区墳丘表土	土師器	高坏	(8.3)×—×13.5	坏部及び脚部の1/3欠損。色調は明褐色。焼成は良好。
19	23	86	10トレンチ壁面	土師器	小型丸底壺	(6.2)×—	口縁を欠く。色調は赤褐色。焼成は良好。
19	—	87	不明	土師器	小型丸底壺	(10.4)×—	口縁と底部を欠く。色調は暗褐色。焼成は良好。
20	—	88	石室内	土師器	小皿	1.2×8.8×7.6	底部を欠く。色調は淡褐色。焼成は良好。
20	—	89	Ⅲ、Ⅳ区墳丘表土	土師器	椀	(4.2)×16.0×—	高台を欠く。色調は明褐色。焼成は良好。
挿図(Fig.)	図版(PL.)	番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形	法　量(長さ×巾×厚さ(cm))	特　　徴
20	23	90	表採	鉄製品	大刀	(13.0)×2.9×0.9	切先部分。
20	—	91	墓道	鉄製品	大刀	(6.2)×4.1×0.9	身の部分。
20	23	92	表採	鉄製品	大刀	(3.3)×(3.3)×1.3	身の部分で、刃部のみ。
20	23	93	表採	鉄製品	大刀	(4.9)×(4.0)×1.5	身の部分で、刃部のみ。
20	23	94	表採	鉄製品	大刀	(3.3)×(2.1)×0.8	茎部で、糸巻きの痕跡がある。
20	23	95	表採	鉄製品	鉾	(2.8)×(2.9)×0.7	袋部。接合しないが、同一個体か。
20	—	96	Ⅰ区墳丘表土	鉄製品	不明品	(6.4)×(3.0)×1.5	
20	24	97	表採	鉄製品	鉄鏃	(5.8、4.5)×0.9×0.3	先端。
20	24	98	表採	鉄製品	鉄鏃	(2.5)×0.7×0.3	先端。
20	24	99	表採	鉄製品	鉄鏃	(2.8)×1.0×0.3	先端。
20	24	100	表採	鉄製品	鉄鏃	(3.0)×1.0×0.3	先端。
20	24	101	表採	鉄製品	鉄鏃	(4.3)×1.1×0.4	先端。
20	24	102	表採	鉄製品	鉄鏃	(3.2)×1.1×0.3	逆刺～茎部。
20	24	103	表採	鉄製品	鉄鏃	(2.4)×1.4×0.4	逆刺～茎部。
20	24	104	表採	鉄製品	鉄鏃	(3.9)×1.4×0.5	逆刺～茎部。
20	24	105	表採	鉄製品	鉄鏃	(3.0)×1.4×0.4	逆刺～茎部。
20	24	106	表採	鉄製品	鉄鏃	(2.6)×1.3×0.4	逆刺～茎部。
20	24	107	表採	鉄製品	鉄鏃	(2.7)×1.0×0.3	逆刺～茎部。
20	24	108	表採	鉄製品	鉄鏃	(3.4)×(1.0)×0.5	茎部。
20	24	109	表採	鉄製品	鉄鏃	(2.9)×(1.0)×0.4	茎部。
20	24	110	表採	鉄製品	鉄鏃	(4.9)×(0.9)×0.6	茎部。
20	23	111	表採	鉄製品	紋具	4.2×4.3×0.7	完形。
20	—	112	Ⅲ区墳丘表土	鉄製品	留金具	(3.5)×2.1×0.3	鋲が4本残る。
20	23	113	表採	鉄製品	留金具	(2.1)×1.9×0.2	鋲が3本残る。
20	—	114	表採	鉄製品	不明品	(2.5)×1.8×0.3	

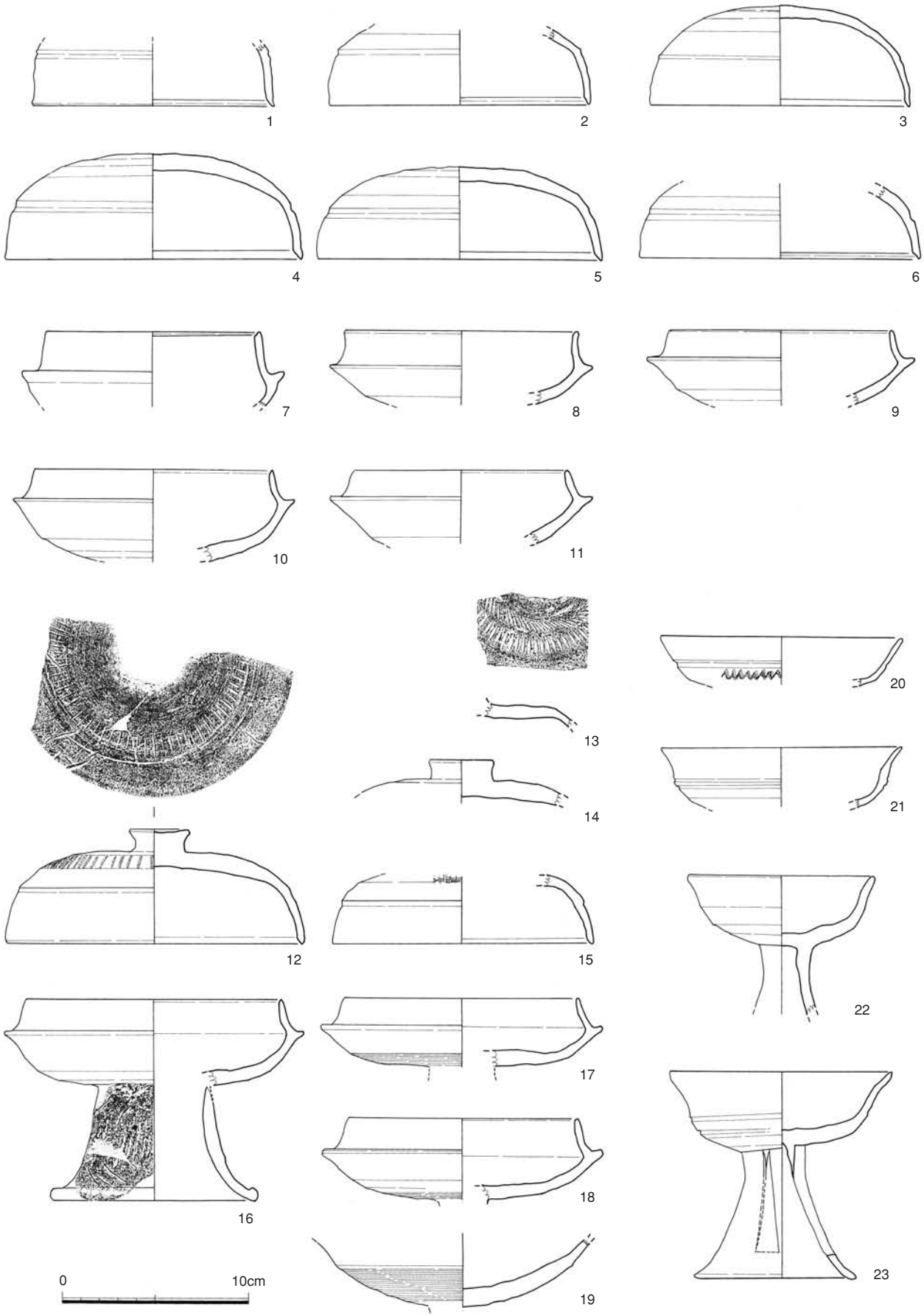


Fig.13　出土須恵器実測図１（1/3）

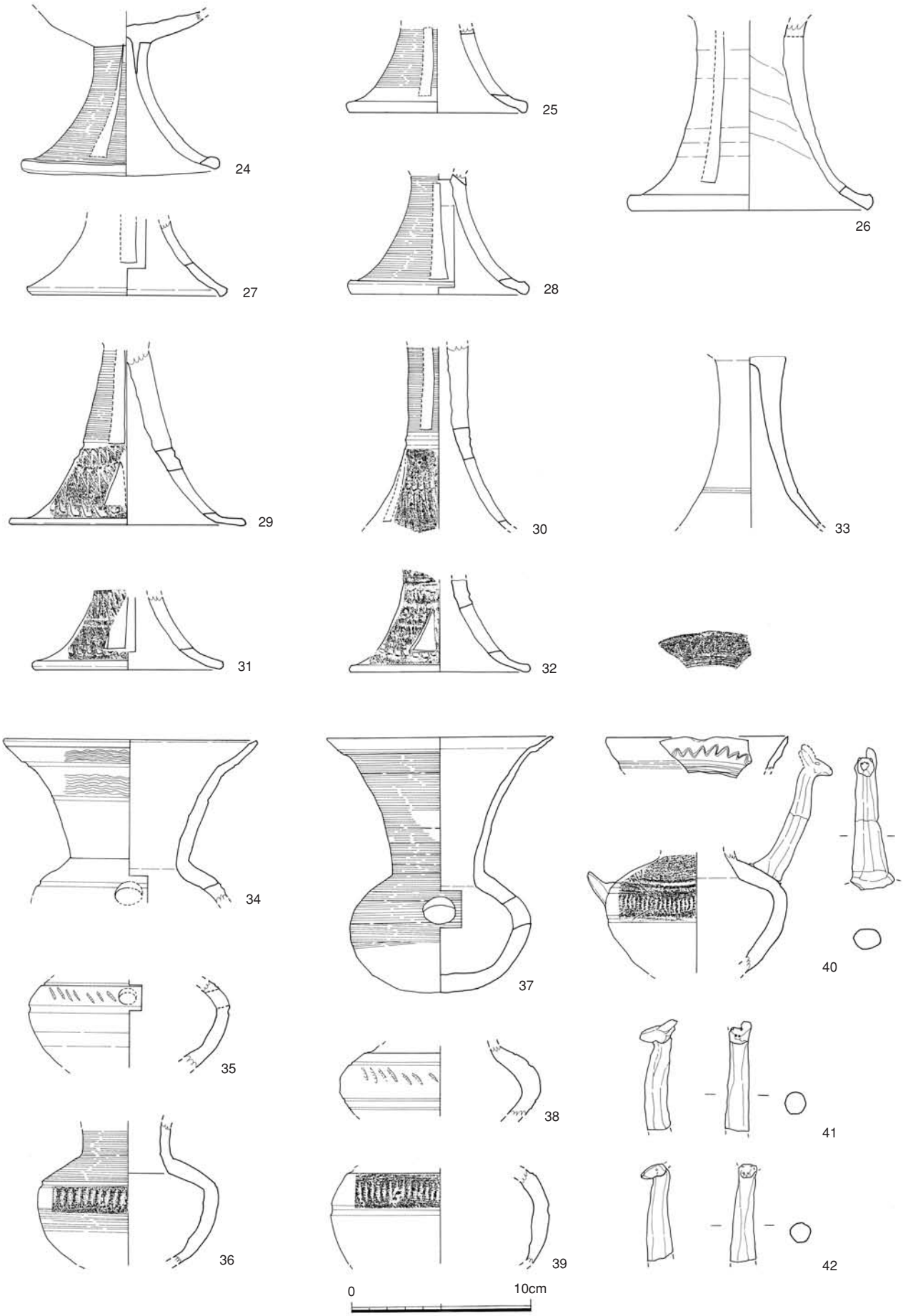


Fig.14　出土須恵器実測図２（1/3）

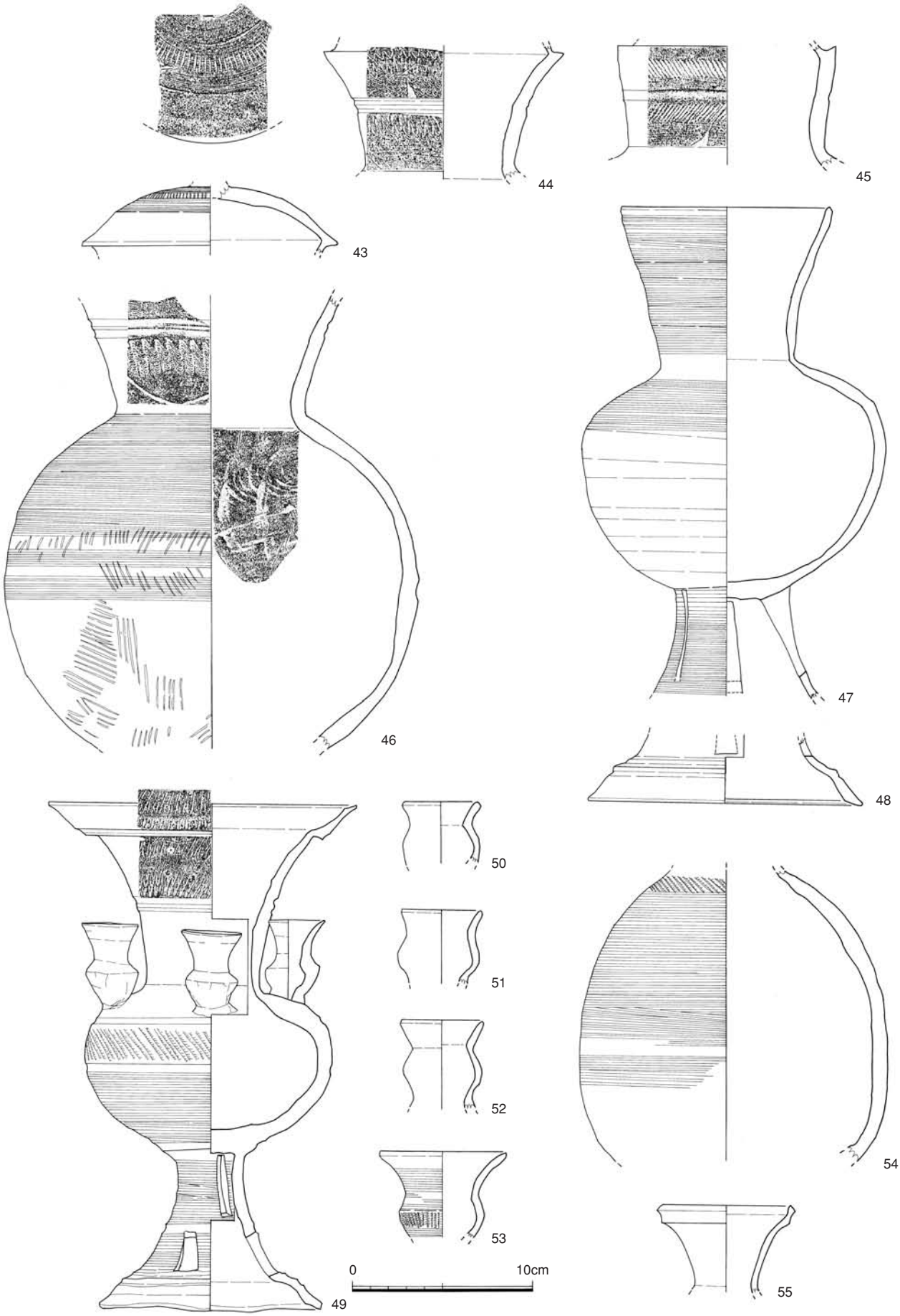


Fig.15　出土須恵器実測図３（1/3）

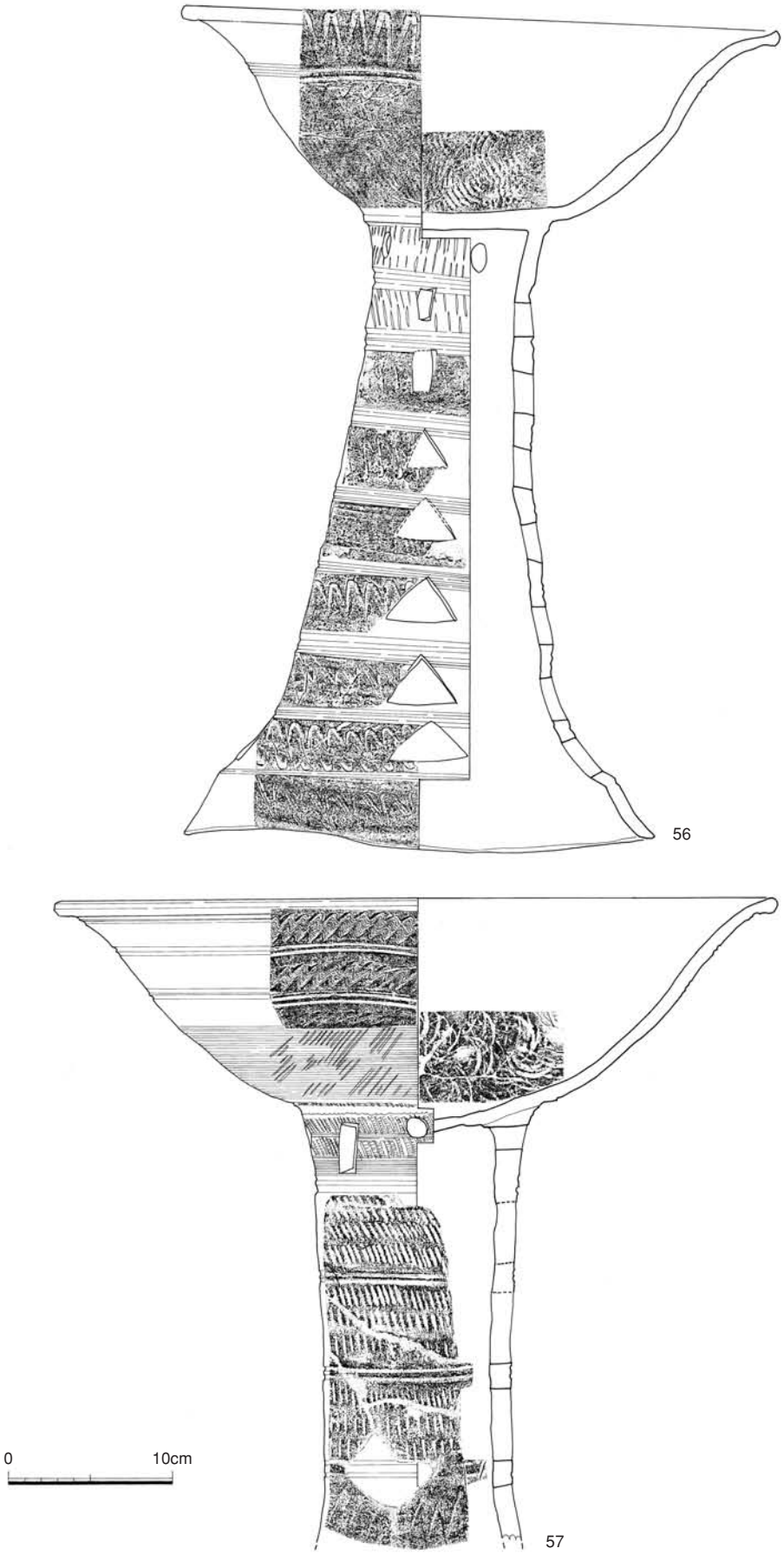


Fig.16　出土須恵器実測図４（1/4）

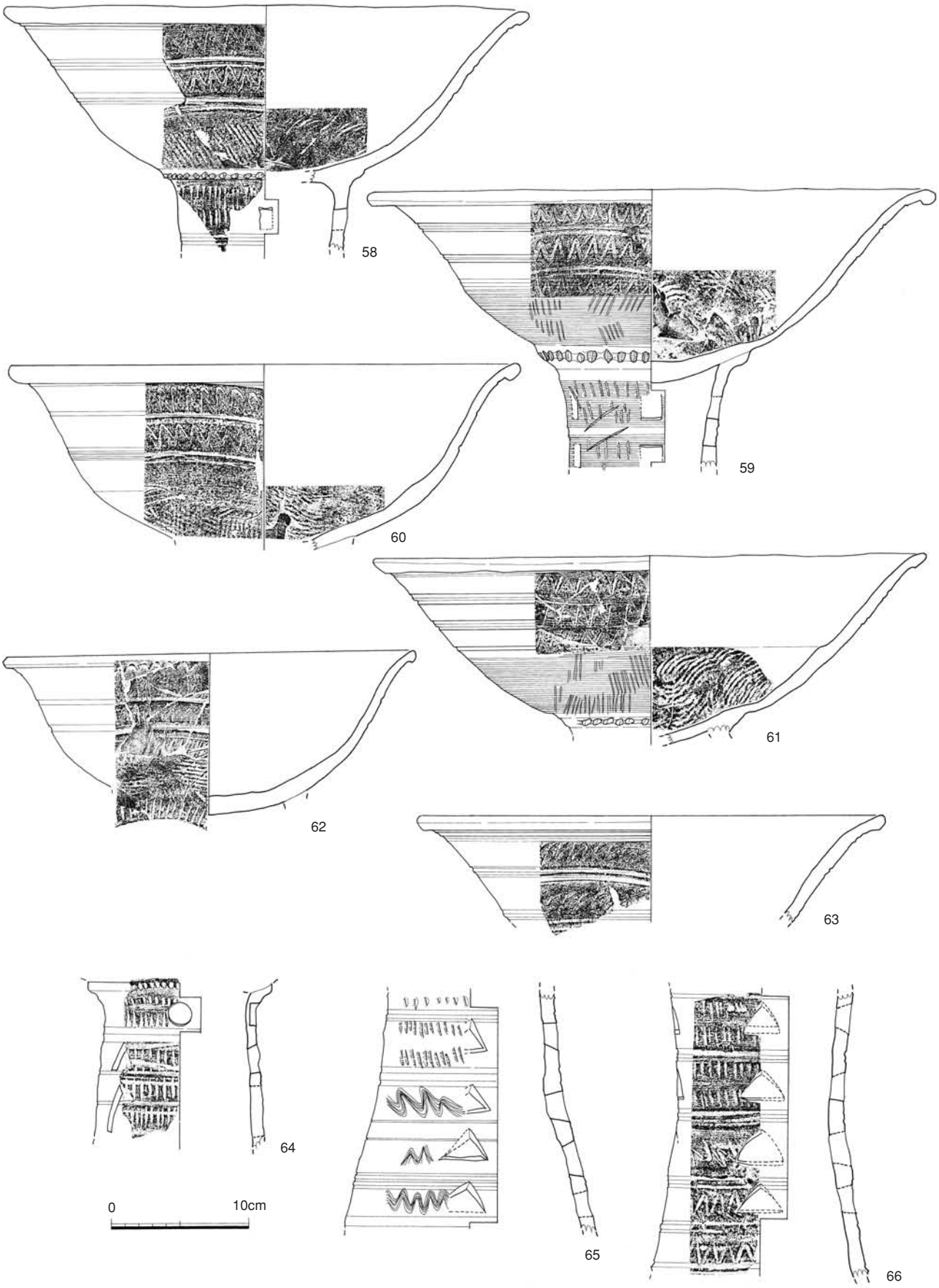


Fig.17　出土須恵器実測図５（1/4）

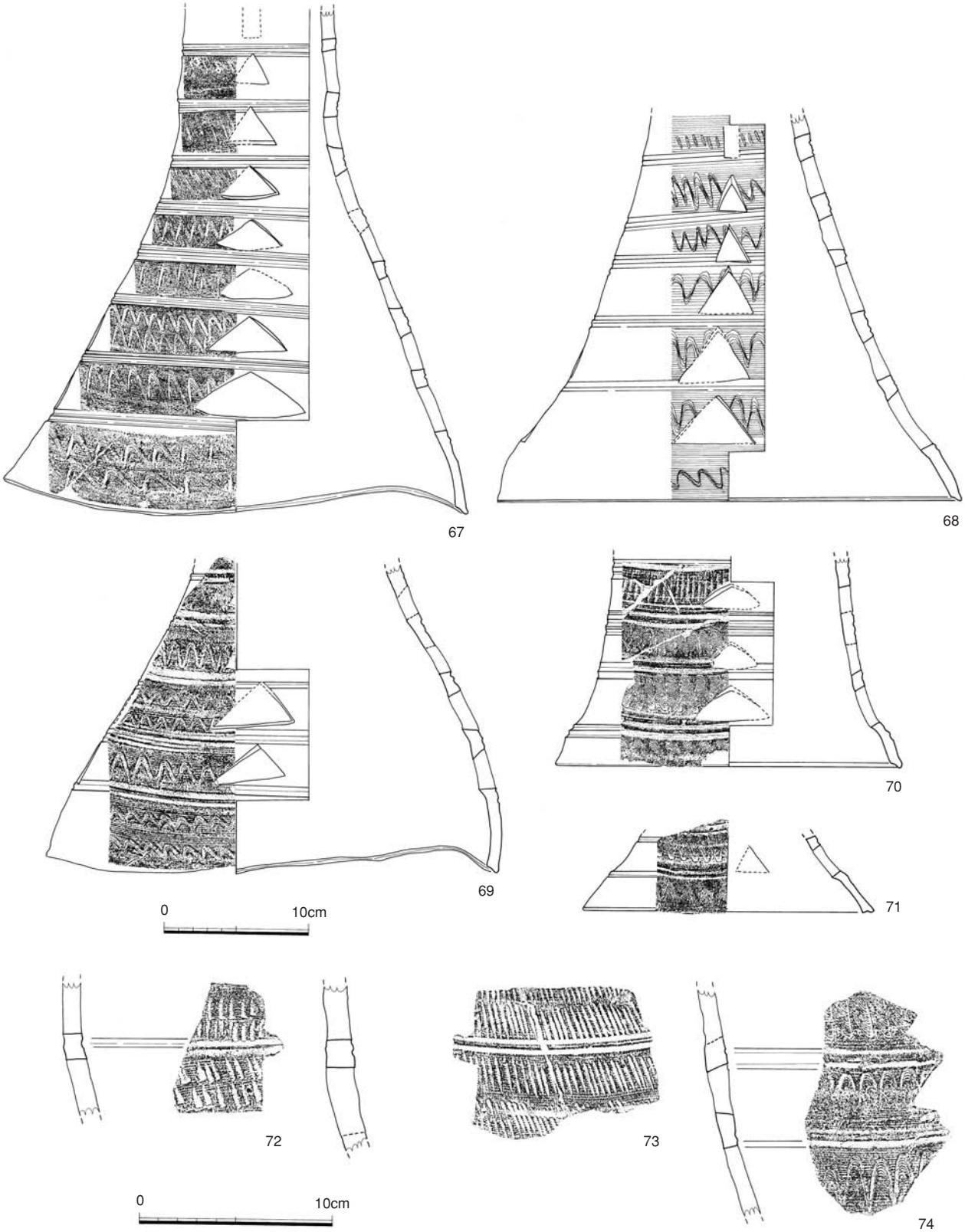


Fig.18　出土須恵器実測図６（1/3、1/4）

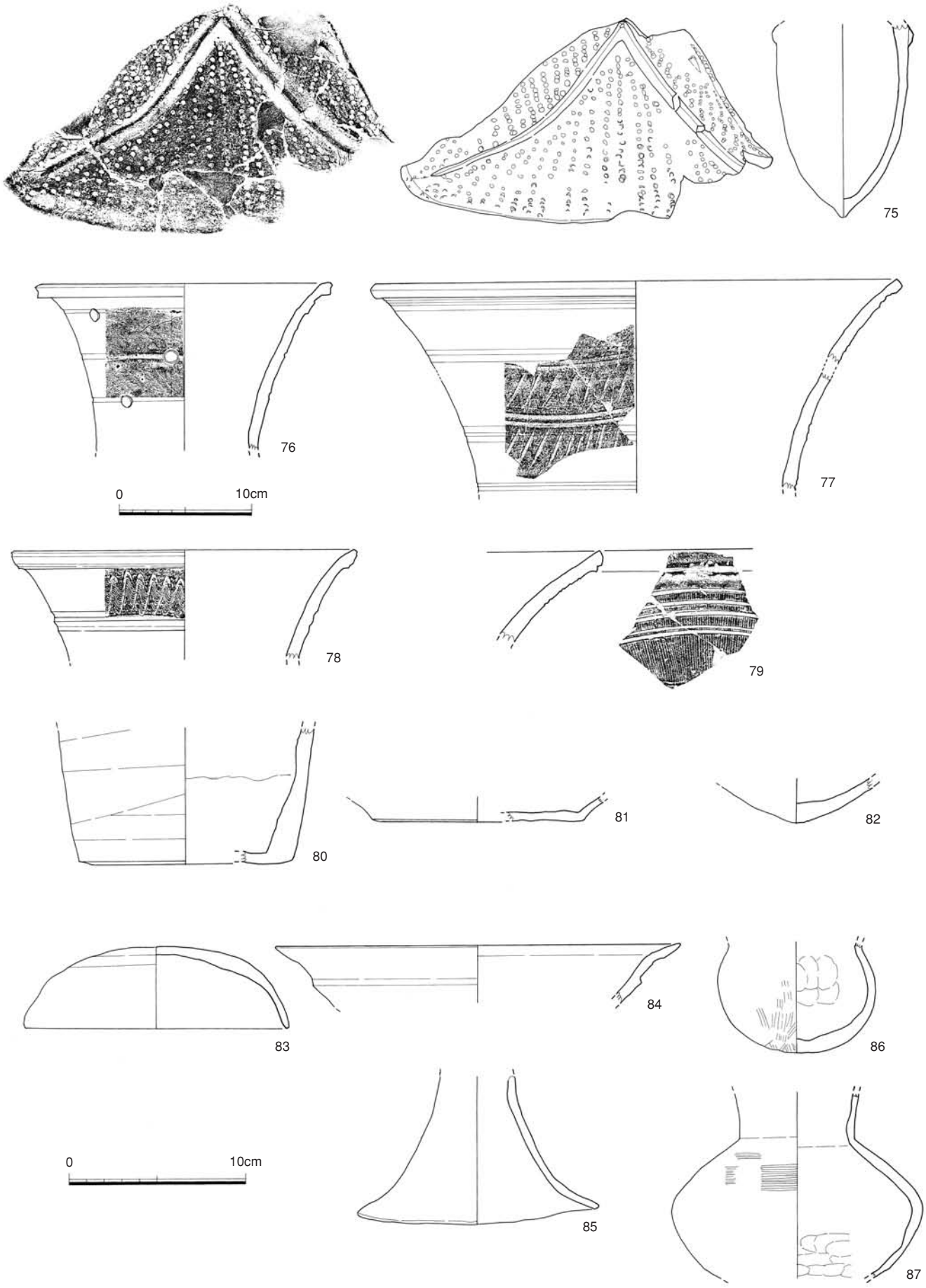


Fig.19　出土須恵器実測図７（1/3、1/4）

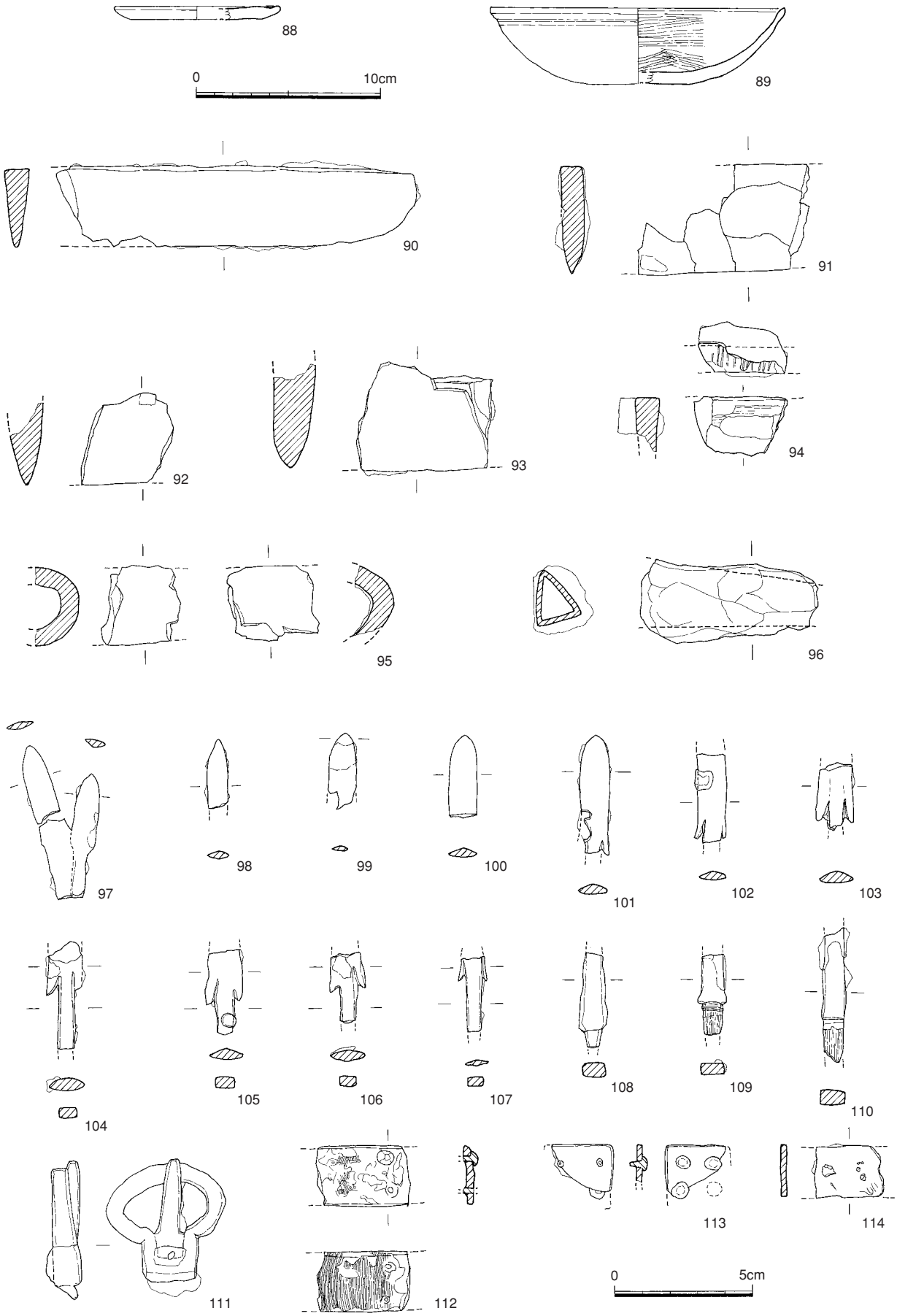


Fig.20　出土土師器実測図及び鉄製品実測図（1/3、1/2）

3．小結

1）墳丘について

現況　本墳は戦後の果樹園の造成等により地形が大きく改変されている。後円部の北側からくびれにかけて大きく削平を受けている。また、前方部の先端も大きく削り取られている。

規模・構造　本墳は全長49m、後円部径25m、高さ５m、前方部長26m、前方部幅23m、高さ３m、くびれ部幅11.5mに復元される。後円部は二段築成、前方部一段で、葺石は認められない。後円部の東側に幅１m程のテラスが残る。後円部の北側から東側には墳丘を整形する際の溝を検出した。また、前方部との境に幅１m程の溝を検出した。地山整形の際に後円部を成形するために掘られ、石室構築と１次墳丘の盛土の後に埋められたものと考えられる。同様の地山成形の例は福岡市神松寺御陵古墳や春日市日拝塚古墳などで見られる。一方、前方部の先端は大きく削平を受けていたが、部分的に残る丘陵線上で丘尾切断の溝を確認した。側面は明瞭な溝は検出されなかった。前方部は後円部に比べ、墳丘は低い。水崎城や戸山城等の中世の山城などによる削平等の影響もあるが、当初より前方部は低かったと考えられる。

後円部の墳丘の構造は石室の構築と並行して構築された１次墳丘と墳丘を整えるための２次墳丘に分けられる。また、地表面から地山まで縦方向に多くの亀裂が入り、土層にズレが観察できた。特に２次墳丘で明瞭に現れていた。これらのズレは盛土の地滑りなどによって起こったのではないかと判断した。地滑りの原因は定かではないが、狭い丘陵に盛土したことも影響しているのではないかとも考えられる。

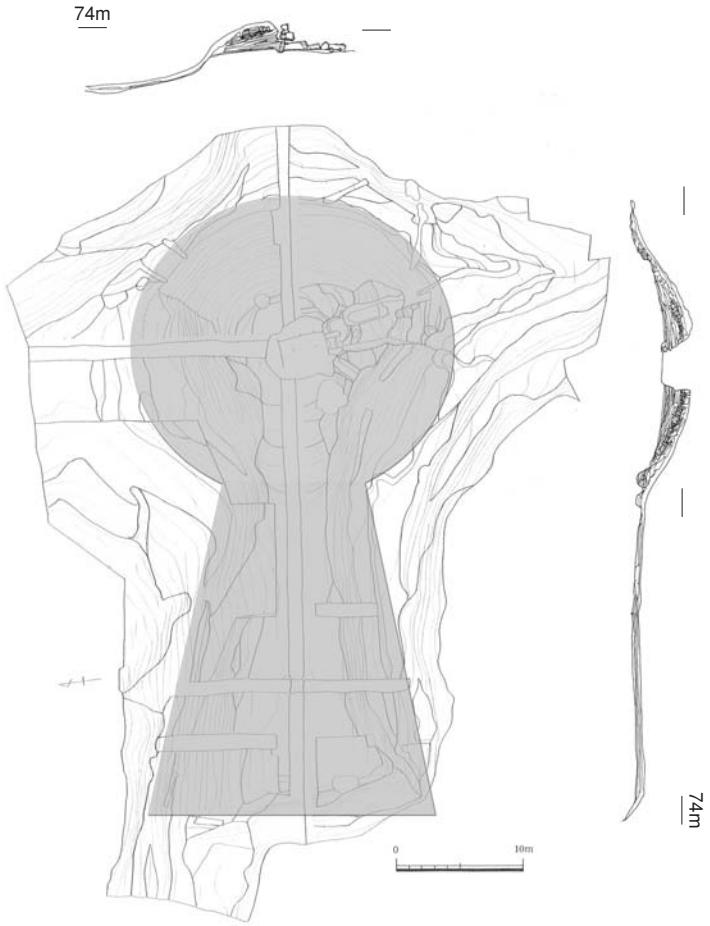


Fig.21　石ヶ原古墳墳丘復元図（1/600）

2）石室について

現況　埋葬施設は、両袖式単室の横穴式石室である。石室の部分は石材の抜き取りのため、大きな窪みの状態であった。また、石室の左袖石側に溝状の掘り込みがあり、石材の抜き取りのためのものではないかと考えられる。

玄室　石室主軸はＮ－３°－Ｗで、南側に開口する。ほとんどの石材が抜き取られ、腰石及び右隅角の一部を留めるにすぎない。右側壁長3.6m、奥壁幅2.1m、右隅角は床面より約２mの高さを測る。平面形は長方形を呈する。長幅比はほぼ２：１となる。石室は墳丘の主軸に対してほぼ直交して配置される。また、石室の奥壁の中心が後円部の中心に対応するように設計される。

羨道　羨道はややハの字形に開き、長さ約２m、幅約80cmを測る。右側壁は抜き取られている。床面には２カ所に梱石が配される。両梱石の間には拳大の礫が敷き詰められる。

閉塞施設　閉塞石には長さ約150cm、幅約80cmの扁平な板石を立てて使用していたものと考えられる。板石の下部には根固めの石が検出された。

墓道　墓道は長さ約６m、幅約３m程あり、墳丘の傾斜に沿って下っていく。墓道の右側で長さ約3.5m、幅1.5m、深さ約60cmの土坑状の遺構を検出した。羨道に対して、方向がずれているが、墓道の掘り返しと考えられる。石室は遺存状況が悪く、埋葬の状態は不明であるが、墓道の状態から追葬があったことは判断できる。

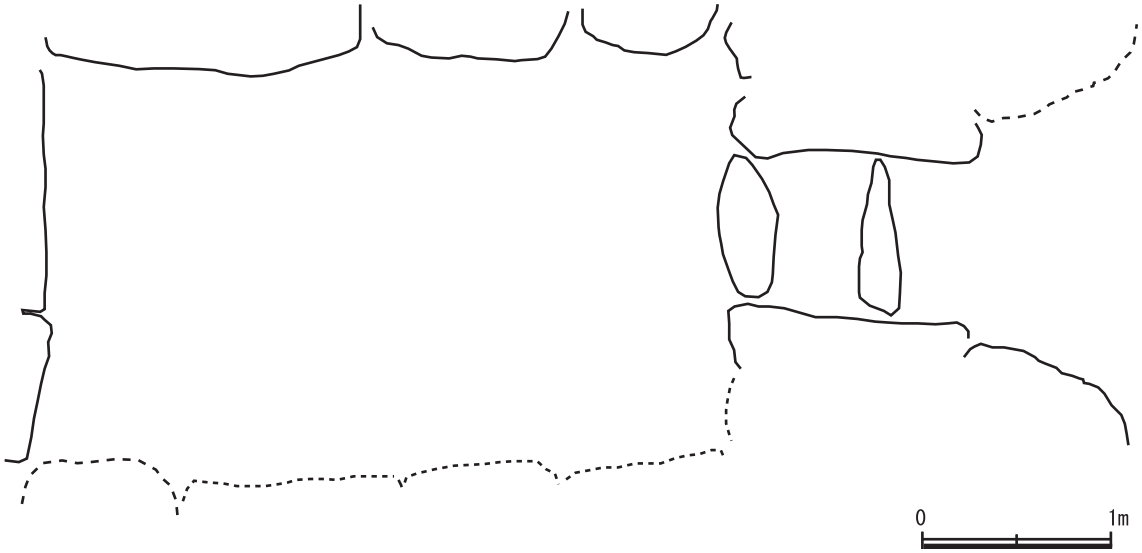


Fig.22　石ヶ原古墳石室復元図（1/40）

墳丘及び石室の規模

全　長	後円部径	高　さ	前方部長	前方部幅	高　さ	くびれ幅
49m	25m	5 m	26m	23m	3 m	11.5m
玄室長	玄室幅	石室高	羨道長	羨道幅	墓道長	墓道幅
3.6m	2.1m	約２m	2 m	0.8m	6 m	3 m

3）古墳の位置づけについて

出土遺物　遺物は石室や墳丘から須恵器（坏身、坏蓋、高坏、器台、皮袋形土器、瓌等）、土師器（高坏、小型丸底壷等）、鉄器片（太刀、鉄鏃等）が出土している。しかし石室内は攪乱が激しく、原位置を保ったものは皆無であった。遺物で最も多い須恵器であるが、皮袋形瓶、鹿形瓌、台付子持瓌器台等の特殊な器種が含まれることが注目される。皮袋形瓶の口縁は欠損しているが、体部に綴じあわせを表現した突帯と竹管文が見られる。宮田浩之氏の集成（1999年）によると、皮袋形瓶は福岡県で23例が知られる。周辺では前原市石川１号墳、福岡市西区小田出土品、福岡市早良区野芥出土品等がある。本例は綴じあわせの表現など比較的忠実に表現されており、古い様相を持つものと考えられる。鹿形瓌は図上復元できるものが１点出土した。瓌の肩部に頭と尻尾が表現される。鹿の頭には角の表現が見られる。また、同様の形態の頭部が２点出土しており、これらも装飾品の可能性が高い。動物の装飾の瓌は宗像市久戸12号墳、苅田町番塚古墳で、鳥形の瓌が、重留窯址では馬形の装飾が出土している。台付子持瓌、子持蓋等の装飾付の須恵器は山田邦和氏の集成（1992年）によると、福岡県内では31例が知られる。周辺では前原市古賀崎古墳で子持壺、子持蓋、多久口木１号墳で子持瓌が出土している。前方後円墳では春日市日拝塚古墳では子持壺や動物装飾付の器台等が出土している。これらのような装飾付の須恵器は九州での出土例も少なく、前方後円墳からまとまって出土することも稀なことであり、被葬者の性格を考える上で注目される。この他、器台は完形復元できるものは少ないが、８個体以上が出土した。いずれも高坏形の器台である。坏部は浅く、口縁端部は丸く仕上げる。脚部は８段程度に分割された文様帯に、円形、長方形、三角形の透かし孔が施される。脚部の形態は筒形を呈し、裾部はやや内湾気味に広がる。明治期に元岡村の古墳で出土したとされる器台があり、形態的な特徴がこれらの資料と似ており、これまでの周辺の調査の状況からも本墳で出土した可能性もある。該期の器台を分類した高橋・小林の編年によると、坏部や脚部の形態の特徴などからⅦ式に位置づけられる資料と考えられる。

時期　出土した須恵器の坏や高坏を見ると、坏は口径13cm前後のものと15cmを越えるものが見られる。また、高坏は長脚で透かしが一段のものと長脚で二段の透かしが入るものが見られる。これらの特徴などからTK10型式期を前後とする時期に位置づけられる資料と考えられる。また、器台はそれらにやや後続する時期に位置づけられる。従って、古墳の築造の時期をTK10型式期の６世紀中頃、追葬の時期をTK10～TK43型式期の６世紀中頃～後半に比定できると考えられる。

糸島半島の東側に位置する元岡・桑原遺跡群には７基の前方後円墳が確認され、周辺にある御道具山古墳、泊大塚古墳を含めて、この地域の首長墓の系譜を追うことができる。すべての古墳の時期は確定されていないが、元岡石ケ原古墳はその中でも最終段階の古墳と考えられる。遺跡群ではこれ以後、群集墳が増加し、桑原石ケ元古墳群のように豊富な副葬品を持つものも見られるようになる。対岸の今宿平野では今宿大塚古墳がほぼ同時期に位置づけられる。今宿平野では今宿大塚古墳以後は30m前後と小型化し、立地も丘陵部に移動し、群集墳も増加する。古墳の被葬者の性格については石室の形態、副葬品等からは明らかにできなかった。今後、周辺の古墳群及び集落遺跡の調査整理を進め、古墳の位置づけについて検討したい。

Fig.23　元岡村古墳出土須恵器

4）石室の移築について

元岡石ヶ原古墳は最初に触れたが、現地での保存が困難ということで、記録保存以外に将来の大学キャンパス内での展示、活用のために以下の措置を行った。これらの資料は九州大学に保管される予定である。

①土層はぎ取り

後円部（石室の東側）、後円部と前方部の接合部分、前方部（北側側面土層）の計３ヶ所（高さ３m×長さ３m、高さ２m×長さ４m、高さ1.5m×長さ４m）の剥ぎ取り。

②石室移設

石室の石材を将来的な復元ができるように石材はナンバーリングし、現地から保管場所に移設。

③ボーリング調査

古墳の墳丘及び基盤地質のコアを採取。後円部、後円部と前方部の接合部の２ヶ所で深さ７m。前方部で深さ３m。

Ph.1　石室解体風景

参考文献

山田邦和『須恵器生産の研究』1998　学生社

宮田浩之「皮袋形須恵器資料集成」『福岡考古』第18号　1999

江藤正澄「奇らしき忌瓶一二」『考古界』第２篇１号　1902

高橋徹・小林昭彦「九州須恵器研究の課題－岩戸山古墳出土須恵器の再検討－」『古代文化』第42巻第４号　1990

1. 石ヶ原古墳遠景（北から）

2. 石ヶ原古墳遠景（今津湾を望む）（西から）

1. 石ヶ原古墳遠景（柑子岳を望む）（南から）

2. 除草後墳丘現況（北から）

1. 除草後後円部現況（北から）

2. 除草後前方部現況（北から）

3. 除草後墳丘現況（南から）

4. 除草後墳丘現況（西から）

5. 表土除去後現況（南から）

1. 表土除去後前方部（東から）

2. 表土除去後後円部（西から）

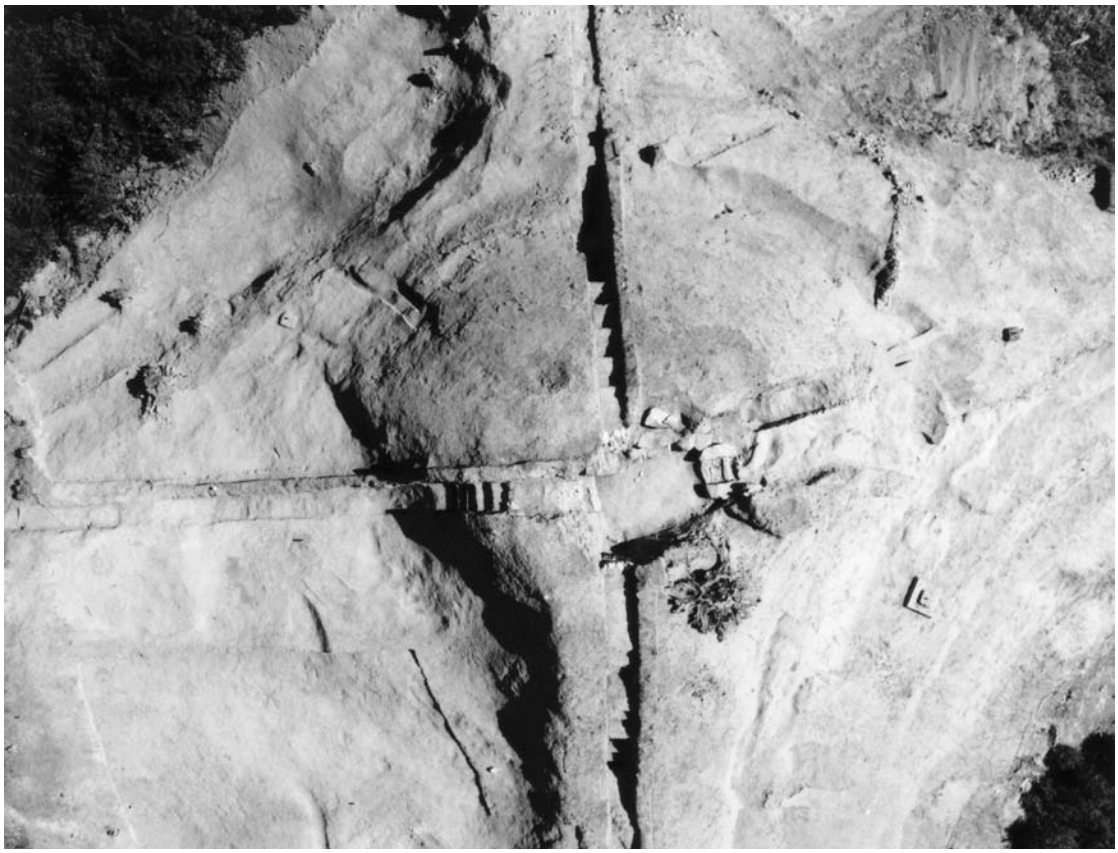
3. 表土除去後全景（西から）

4. 表土除去後前方部端（西から）

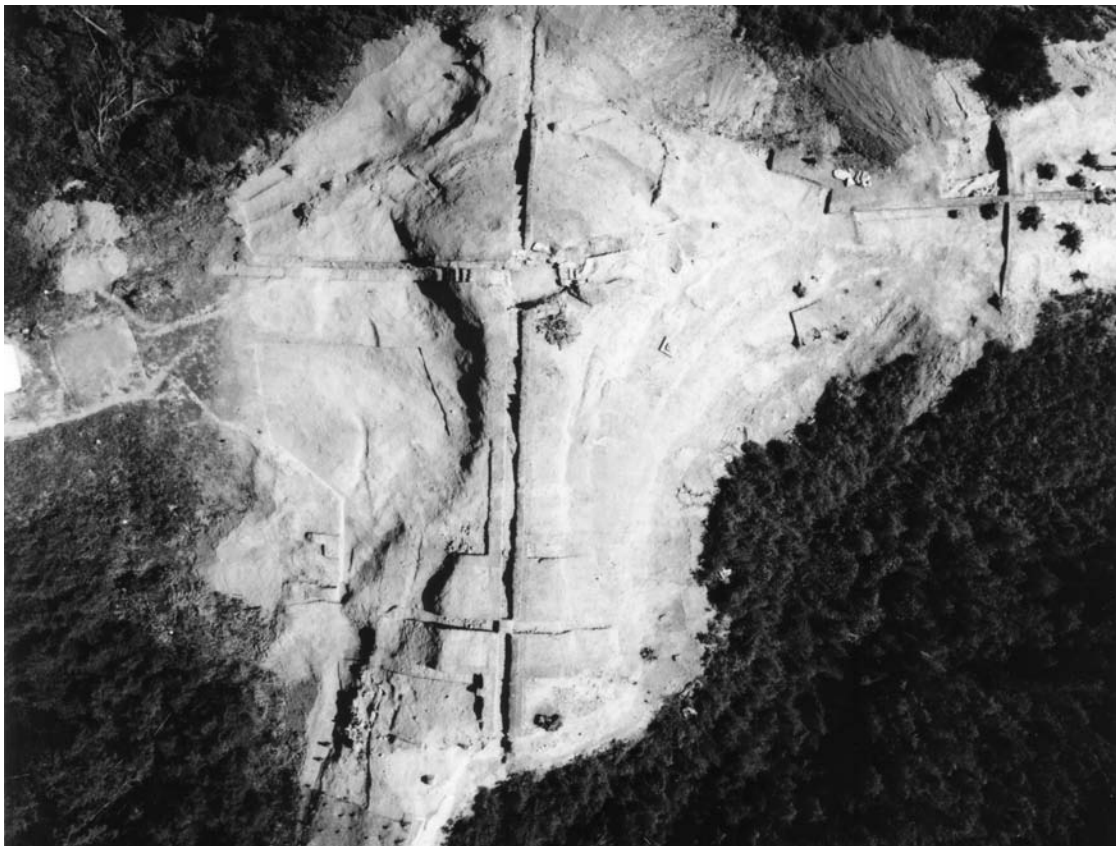
5. 表土除去後全景（北から）

1. 墳丘遺存状況（西から）

2. 墳丘遺存状況（北から）



1. 後円部墳丘遺存状況（俯瞰）（西から）



2. 墳丘遺存状況（俯瞰）（北から）

1. 前方部Ⅴ区遺物出土状況（東から）

2. 前方部Ⅹ区柱穴掘り下げ（東から）

3. 後円部ⅩⅣ区テラス（南から）

4. 後円部XⅡ区盛土地滑り状況（南から）

5. 後円部XⅡ区盛土地滑り状況（北から）

1. 後円部XⅡ区１次墳丘（東から）

2. 1トレンチ土層（西から）

3. 1トレンチ土層（北から）

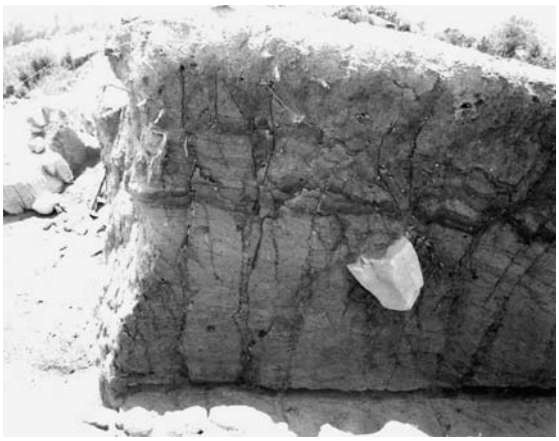
4. 1トレンチ土層（北から）

5. 1トレンチ土層（北から）

6. 1トレンチ土層（北から）

1. 後円部XⅢ区１次墳丘（西から）

2. 2トレンチ土層（東から）



3. 2トレンチ土層（北から）

4. 2トレンチ土層（北から）

5. 2トレンチ土層（北から）

6. 2トレンチ土層（北から）

1. 地山整形遠景（東から）

2. 地山整形（俯瞰）（南から）

1. 後円部地山整形（俯瞰）（南から）

2. 前方部地山整形面（俯瞰）（南から）

1. 地山整形（後円部から前方部を望む）（南から）

2. 地山整形全景（北から）

3. 後円部地山整形（西から）

4. 後円部地山整形（北から）

5. 後円部地山整形（西から）

6. 前方部地山整形面（東から）

1. 後円部と前方部間の溝（北から）

2. 後円部と前方部間の溝（南から）

3. 後円部周溝（南から）

4. 後円部周溝（南から）

5. 後円部周溝（北から）

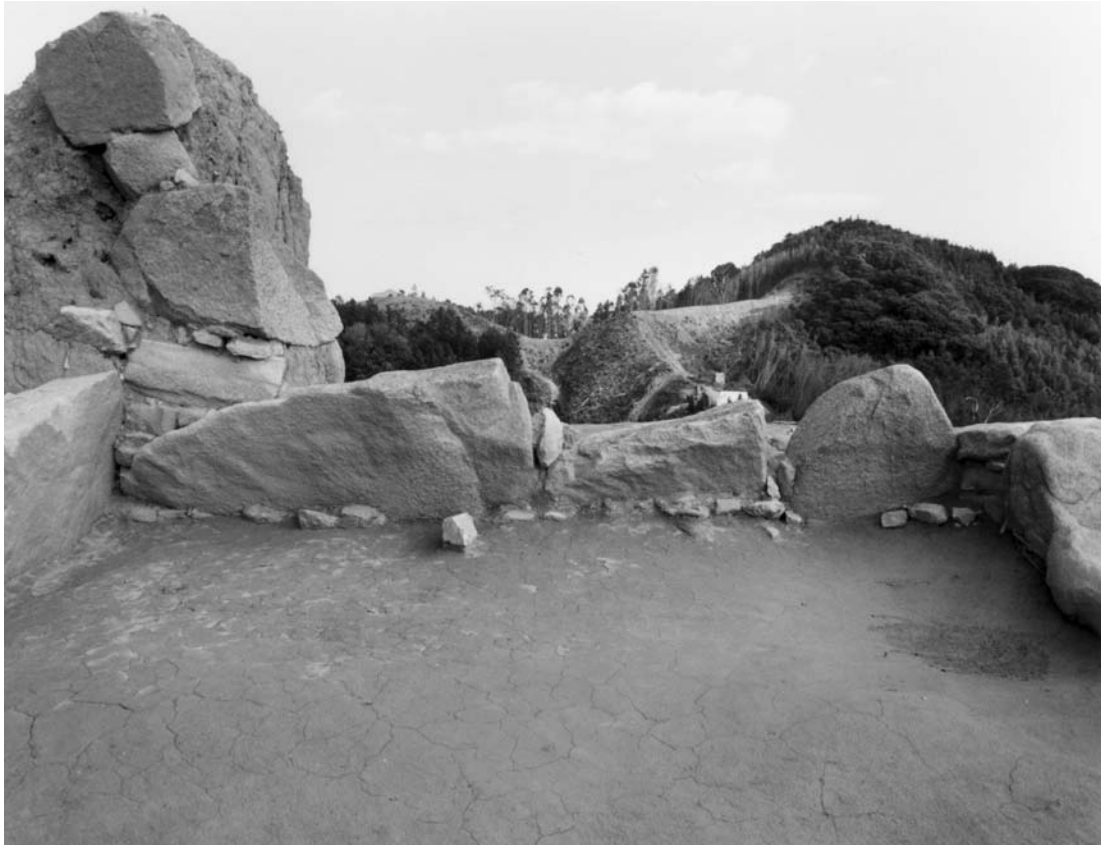
6. 後円部周溝（北から）

1. 石室検出状況（南から）

2. 石室検出状況（西から）

1. 表土除去後石室（南から）

2. 石室完掘（北から）



1. 石室右壁（西から）

2. 羨道及び閉塞石検出状況（北から）

1. 羨道閉塞石検出状況（南から）

2. 羨道敷石（北から）

3. 羨道敷石（東から）

4. 表土除去後墓道（南から）

5. 墓道半掘（北から）

6. 墓道土層堆積（西から）

1. 石室および掘り方（南から）

2. 石室および掘り方（南から）

3. 石室および掘り方（南西から）

4. 石室および掘り方（北から）

5. 石室掘り方（南から）

6. 石室掘り方（北から）

4

5

12

22

23

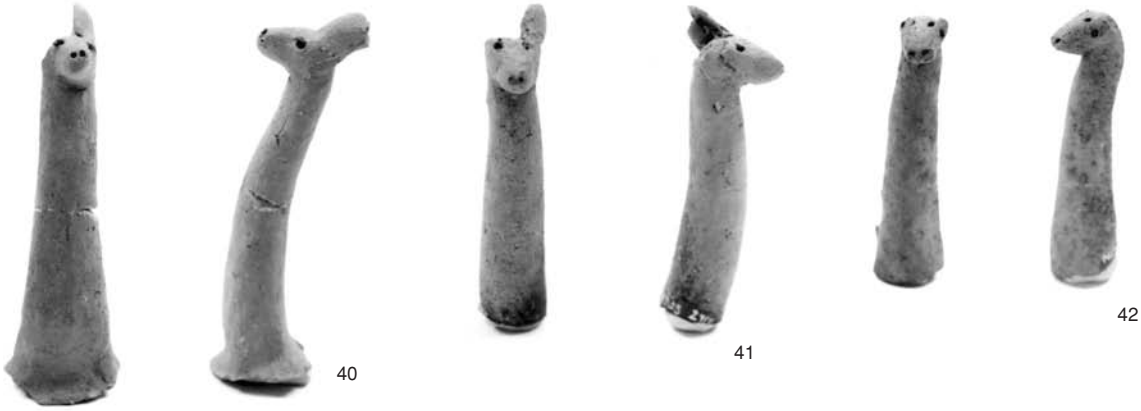
24

26

34

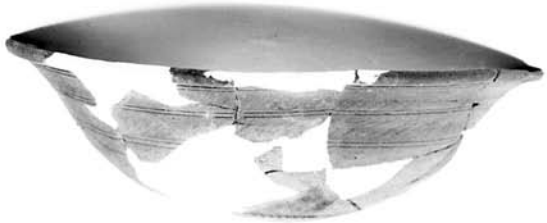
36

遺物写真 1



遺物写真 2

56



57

58

59

60

62

遺物写真 3

67

68

69

71

75

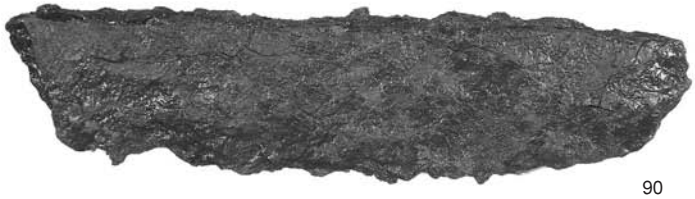
遺物写真 4

76

85

86

青銅器片
（表裏）


90

93

92

94

95

113

111

遺物写真 5

遺物写真 6

Ⅳ　第22次調査の記録

（調査番号　００３３）

例　言

1．本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が2000年に行った元岡・桑原遺跡群第22次発掘調査の報告書である。この事業に関わる埋蔵文化財調査報告書は「九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書　元岡・桑原遺跡群１」（市報告書第722集　2002）をはじめ、順次整理が終了したものから刊行され、これまで「元岡・桑原遺跡群５」まで出版している。

2．発掘調査は大学用地を先行取得した福岡市土地開発公社の委託を受け福岡市教育委員会が実施した。

3．本書では掘立柱建物SB、溝状遺構SD、ピットSP、焼土坑SF、不定形土坑SXの略号を用いた。

4．本書に使用した遺構実測図は松村道博、小杉山大輔、西村直人、水崎るり、石橋忠治が、遺物実測図は濱石正子、撫養久美子、小杉山が行った。またトレースは濱石、撫養が行った。

5．本書に使用した遺構の写真は松村、小杉山が撮影し、俯瞰写真については有限会社空中写真企画に委託した。遺物写真は松村が行った。

6．本書に使用した座標は国土座標第Ⅱ系を使用した。

7．本書の執筆は松村が行った。

8．今回報告する出土遺物及び遺構、遺物の記録類は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

9．本書に関するデータは以下の通りである。

遺跡調査番号	0033	遺 跡 略 号	MOT-22
調 査 地 地 籍	福岡市西区大字桑原字牛坂	分布地図番号	130
調 査 面 積	3,890㎡	開 発 面 積	27.5ha
調 査 期 間	2000年（平成12年）4月13日～2000年10月20日		

Ⅳ　第22次調査の記録

1．はじめに

九州大学統合移転事業用地は福岡市域内の西区大字元岡・桑原地区が大部分を占め一部、前原市、志摩町も含まれ27.5haにもおよぶ広大な面積である。平成８年から確認調査がはじまり、現在も発掘調査中である。そのような状況の中でも、平成17年秋からは工学部の一部から移転が始まり「九州大学伊都キャンパス」へと名称も変わり、新たな歴史を刻み始めている。

第22次調査地点は平成８年度の試掘調査により新たに発見されたB-4遺跡である。試掘トレンチで炉跡、溝状遺構、柱穴などを検出し、その出土遺物から古代から中世にかけての製鉄遺跡ではないかと推定されていた。

調査地は本来棚田状の水田であるが、用地買収後放置された状態が続いたので荒地となっていた。発掘調査は平成12年４月13日に重機による表土剥ぎから着手し、同年10月20日に終了した。

なお、製鉄関連遺物（鉄滓・炉壁・分析等）については今回の報告では除外した。第24次調査の製鉄関連遺物とともに、整理が終わり次第報告する予定である。

所 在 地　福岡市西区大字桑原字牛坂

調査期間　平成12年４月13日～平成12年10月20日

調査面積　3,890㎡

調査補助員　小杉山大輔（現茨城県石岡市教育委員会）　西村直人（現松山市教育委員会）
　　水崎るり　石橋忠治　濱石正子　撫養久美子

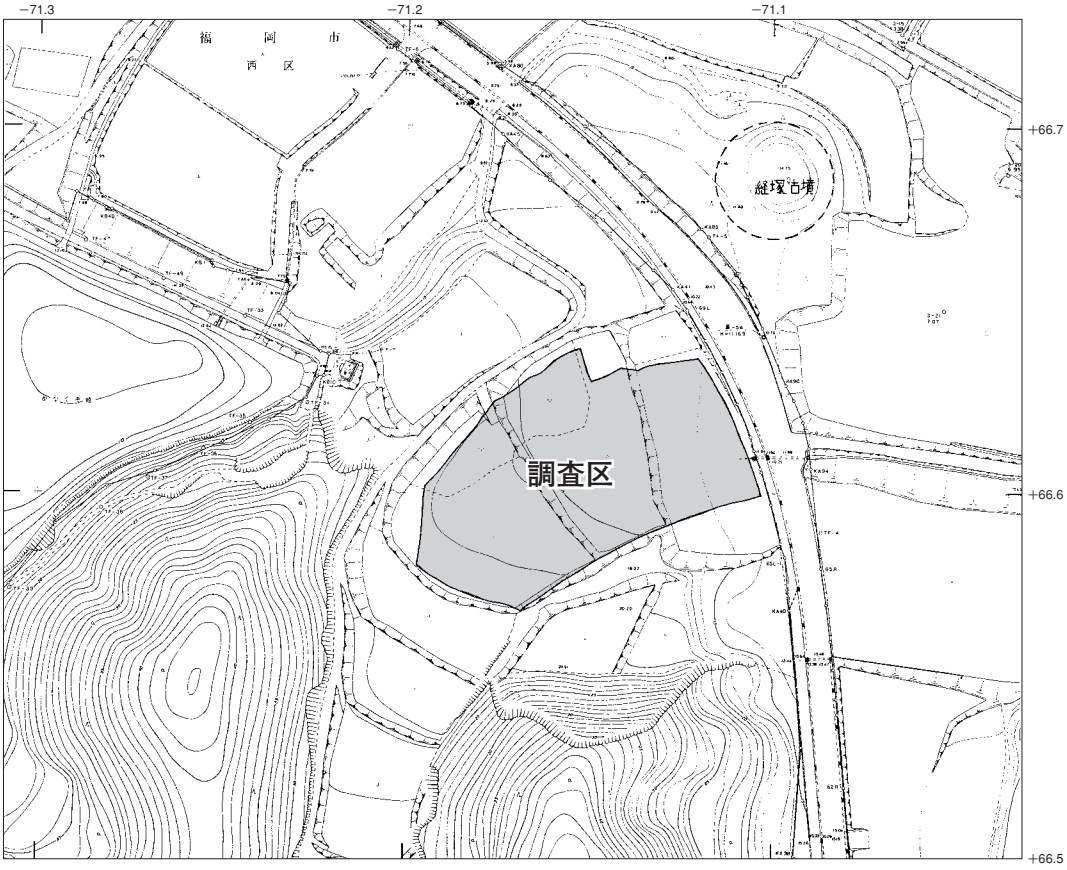


Fig.1　第22次調査地点周辺地形測量図（1/2,000）

2．遺跡の位置と地形

九州大学用地は逆三角形を呈し、その敷地内を道路、字境、尾根線などにより７区分され、東から西に向かってＡ区～Ｇ区と名付けられている。発掘調査は工事に最も早く着手するＣ区、Ｄ区から着手し、その後、Ｂ地区の調査を行った。今回の調査地点は事業地内では東側から二番目の区域のＢ地区、事業地全体の東部、金屎池の東側に位置する。この地区は東を太郎丸集落から中田埋立場に抜ける南北道路に、西側を学園通り線により限られており、低丘陵とその開析谷から構成され平坦地は極めて少ない。調査地点をさらに詳しく見ると低丘陵の水崎山（標高95m）から北へ延びる二つの低丘陵にはさまれた東側に開析する浅い谷部の中腹部に占地し、標高15～17mを測る。調査区の東側は中田埋立場に抜ける道路により寸断され、その東側は大きな落差をもって谷底となる。

先に述べたように平坦地は極めて少ないが、周辺には古墳をはじめとして遺跡が密集している。その状況を見ると北西350mには人骨などが出土している縄文時代後期の飛櫛貝塚がある。第22次調査地を取り囲む西側丘陵の反対斜面には奈良時代の製鉄遺跡である第24次調査地点、その丘陵先端部、第22次調査地点の前面道路を隔て、その北西部に大型円墳の経塚古墳（第36次調査）があり、南東240mの独立丘陵頂部には塩除前方後円墳が所在する。また、東北へ250mの位置には木簡が多く出土した第20次調査地点がある。これら経塚古墳、塩除古墳、20次調査地点は緑地保存される予定である。

3．遺構と遺物

調査地の現況は水田・畑地となっており、試掘調査により遺構面までの深さが１m前後となっていたので、遺構面までの堆積土は機械力を用いて除去した。また排土置き場の関係から２区に分割して調査を行い、西側をⅠ区、東側をⅡ区として、Ⅰ区から実施した。調査区は10mの方眼で区切り、それぞれの区に名称を付した。

調査区の土層は以下の通りである。［E-３区北西壁］ １層ー淡黄褐色土。全体に軟質で締りがない。２層ー緑灰色土。１層と同じく軟質で締りがない。この下層で上面の遺構を確認した。この１、２層は築堤の盛土及び、その流出土であろう。３層ー黄褐色粘質土に少量の黒褐色土が混じった土層である。この面から柱穴が掘りこまれており、部分的にしか遺存していないが、おそらく建物群に伴う整地層の可能性が強い。４層ー黒～暗褐色土。D-２・３区ではあまり遺物を含まないが、F・G-３・４

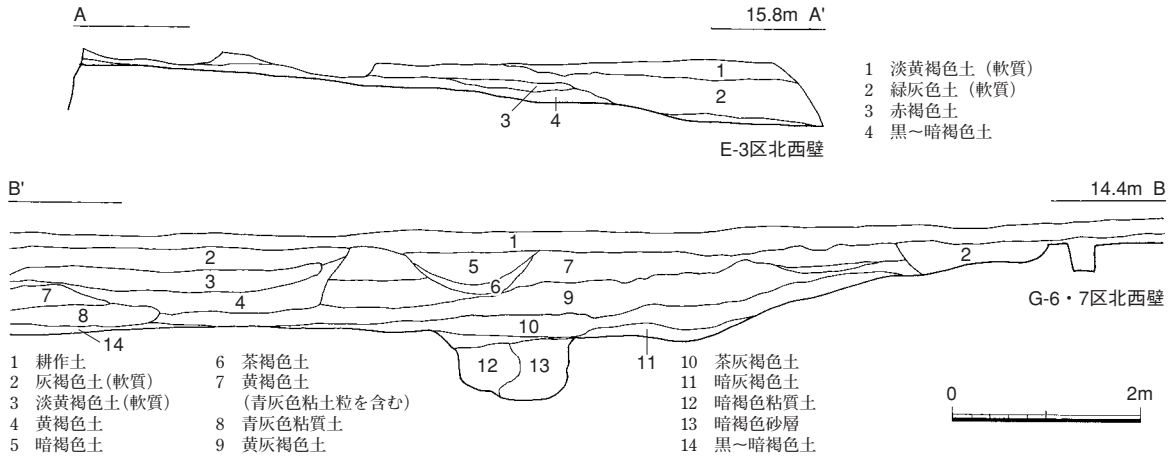


Fig.2　土層実測図（1/80）

区では遺物包含層となる。５層は基盤層の黄褐色粘質土となる。［G-６・７区北西壁］　１層から12層は黄灰褐色土でやわらかく締りがない。中央部は人為的に埋められたものであろう。その下の灰茶褐色土層と暗灰褐色土層からは中世から古代の遺物が出土している。

今回検出した遺構は製鉄炉２基、掘立柱建物７基、井戸２基、溝状遺構数条である。遺構の遺存状況は極めて悪く、比較的良好に残っていたのは削平をかろうじて免れた溜池の堤体の下だけである。その堤の西側は池内に当たり、溜池築造時に大きく掘り下げられ、遺構は完全に消滅し、東側も水田化された時に削平を受け、深く掘り込まれた遺構だけが僅かに遺存しているだけであった。製鉄遺構は炉本体は遺存していないが、炉の下部と廃滓坑だけが確認でき、製鉄炉と推定される。掘立柱建物もその一部が遺存していただけで、全体の様相も明らかではない。

１）掘立柱建物

掘立柱建物は総柱建物が４棟、側柱建物が３棟検出できた。現状では西側に側柱建物、北側に総柱の倉庫が取り付き、直角に曲がる「L」字状の建物配置となっている。

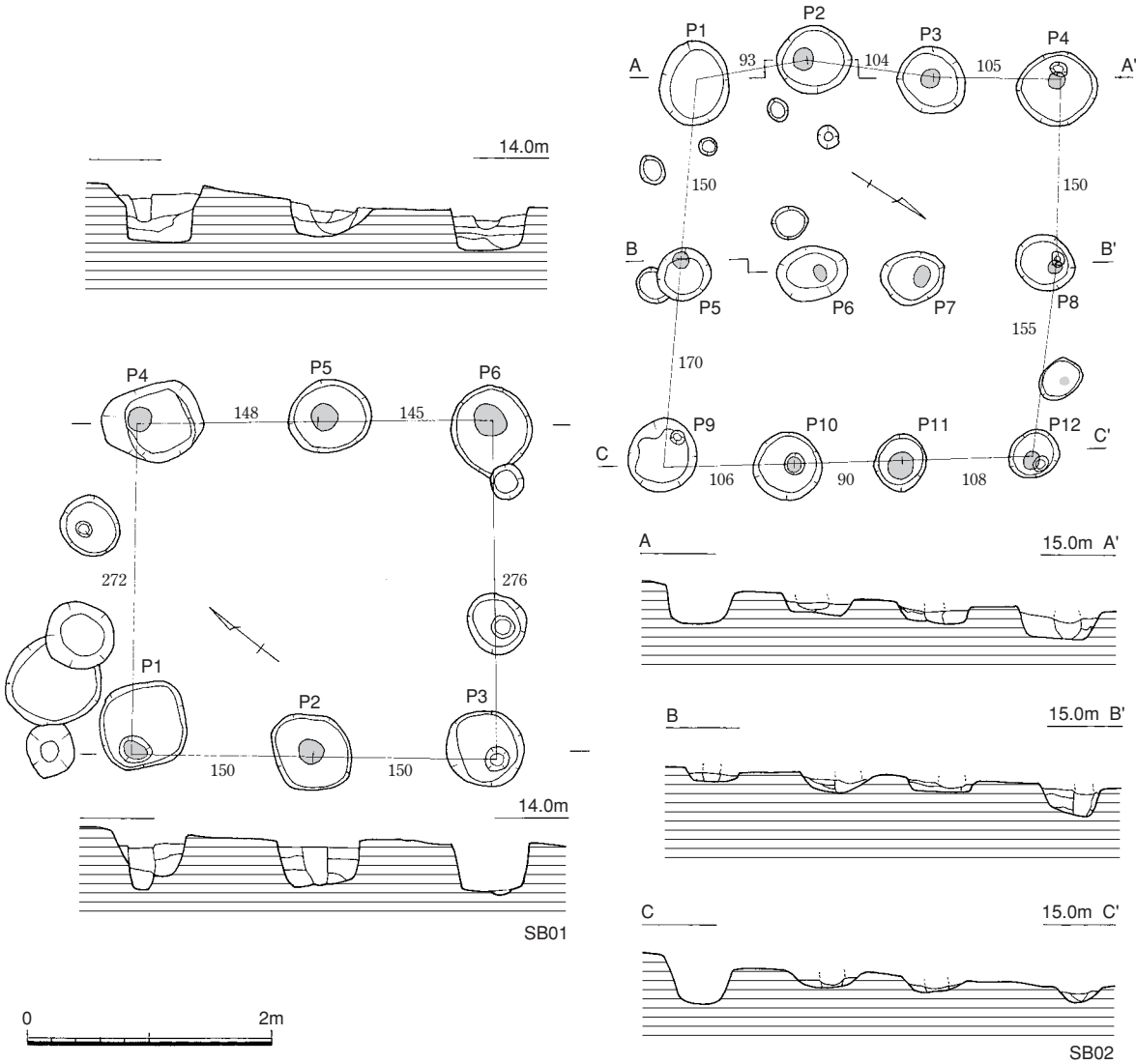


Fig.3　SB01・SB02実測図（1/60）

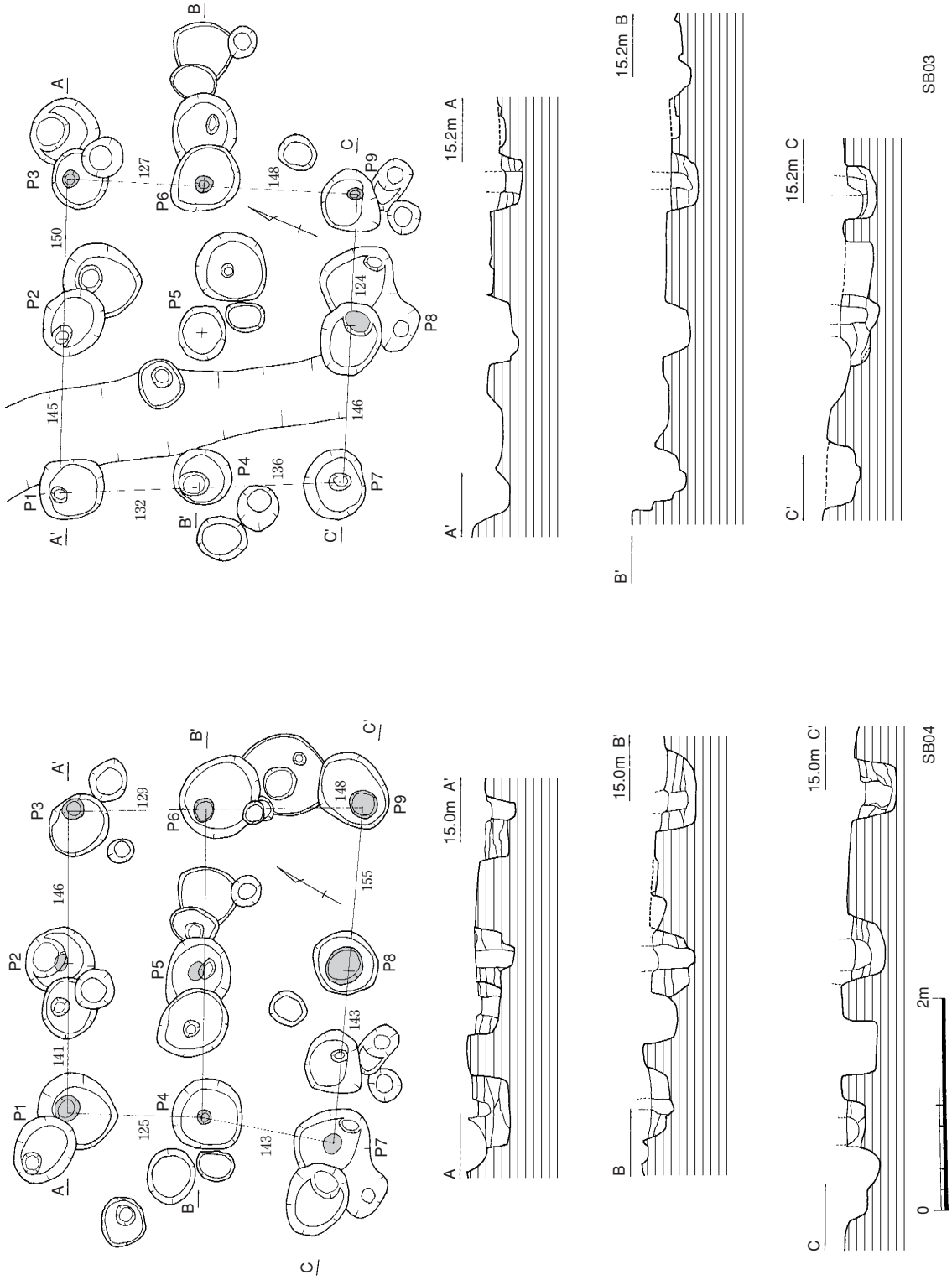


Fig.4　SB03・SB04実測図（1/60）

SB01（Fig.3、PL.4）

建物群の北東隅、F-2区に検出した主軸方位をN-38°-Wにとる1間×2間の側柱建物である。柱穴の掘り方は楕円～円形である。柱穴には直径20～30cmの柱痕跡が残る。柱は掘り方内でほぼ収まるが、P1、P3は掘り方の底より一段深く掘り込まれている。柱穴掘り方はP1は大きい部類で長径70cm、

短径67cm、深さ48cmを測る隅丸長方形を呈する。P5は小さい規模で長径68cm、短径60cm、深さ30cmを測る楕円形である。梁行276cm、桁行293cm、桁行の柱間距離は148cmを測る。

SB02（Fig.3、PL.4）

倉庫群が密集するD、E-3区の北東端に検出した主軸方位をN-57°-Eにとる3間×2間の総柱建物の倉庫である。削平された水田面に位置するため、遺存状態が悪く最も深い柱穴でも深さが20cmほどのもあるが、10cm前後のがほとんどである。建物は柱穴の並びが悪くかなり歪である。柱穴の平面形は楕円～円形で、直径10～15cmの柱痕跡が残る。柱は掘り方内でほぼ収まるが、P4、P8、P12は掘り方の底より一段僅かに深く掘り込まれている。西側の柱穴の平面形は径60cmを測り、比較的大きいが、東側の柱穴の方は一回り小さく径を50cmを測る。建物の規模は梁行315cm、桁行308cm、梁間、桁間の柱間距離はばらつきが大きく82～167cmを測る。

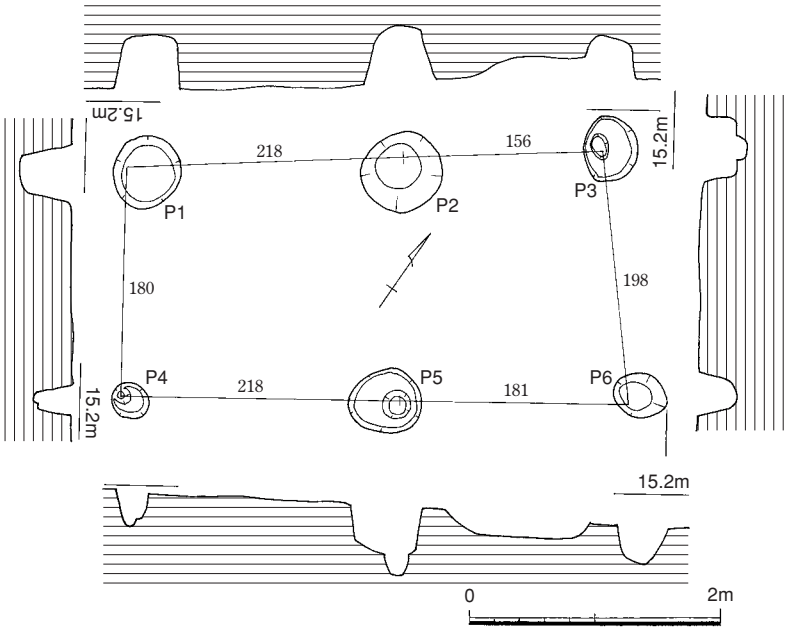


Fig.5　SB05実測図（1/60）

SB03（Fig.4、PL.4）

SB02の西に位置し、2基の総柱建物が重複する古い方の建物である。主軸方位をN-60°-Eにとる2間×2間の総柱建物の倉庫である。池の提体部の一段高い部分に位置するため、遺存状態が比較的良好で柱穴も30～40cmの深さが残っている。建物は柱穴の並びが悪くかなり歪である。柱穴の平面形は楕円～円形、直径50～80cmを測る規模で、直径10～15cmの柱痕跡が残る。柱は掘り方内でほぼ収まるが、P3、P4、P5は掘り方の底より一段僅かに深く掘り込まれている。建物の規模は梁行277cm、265cm、桁行285cm、298cmであるが、柱間距離はばらつきが大きく、梁間が129～148cm、桁間141～155cmを測る。

出土遺物（Fig.8-1）

P-3から1点出土している。1は須恵器の坏蓋である。口径12.4cm、器高3.5cmを測る。天井部は回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデである。胎土には白色砂粒を多く含み、焼成は良好で小豆色～赤褐色を呈する。

SB04（Fig.4、PL.4）

SB03と重複し、その西側に位置するSB03より新しい時期の建物である。主軸方位をN-68°-Eにとる2間×2間の総柱建物の倉庫である。池の提体部の最も高い部分に位置するため、柱穴も30cm前後の深さが残っている。建物は柱穴の並びが悪くかなり歪で台形様を呈する。柱穴の平面形は楕円～円形、直径50～60cmを測る規模で、直径10～15cmの柱痕跡が残る。柱は掘り方内でほぼ収まるが、P2、P4、P7は掘り方の底より一段僅かに深く掘り込まれている。建物の規模は梁行263cm、277cm、桁行287cm、297cmで、柱間距離はばらつきが大きく、梁間が127～148cm、桁間124～150cmを測る。

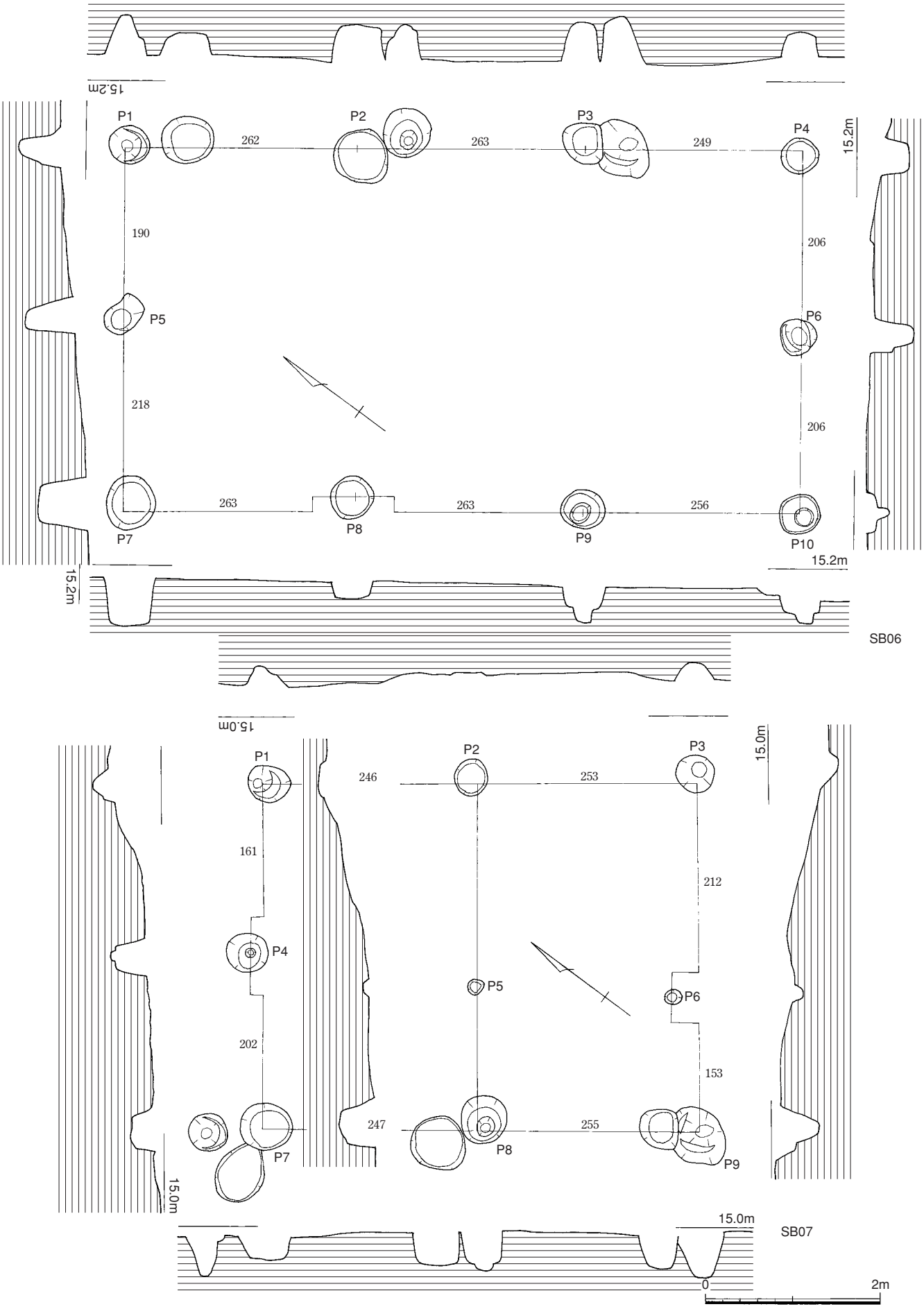


Fig.6　SB06・SB07実測図（1/60）

SB05（Fig.5、PL.3）

SB04の南に位置し、主軸方位をN-51°-Eにとる１間×２間の掘立柱建物である。提体部の最も高い部分に位置するため、柱穴は40～50cm前後の深さが残っているのが多い。建物は柱穴の並びが悪く西側が幅を狭め歪である。柱穴の平面形は楕円～円形、直径50～60cmを測るものと、それより一回り小さい柱穴である。建物の規模は梁行198cm、桁行399cmであるが、柱間距離は統一性に欠け梁間が180、198cm、桁間が156、218cmを測る。

SB06（Fig.6、PL.3）

SB07と一部重複し、その西側に位置する建物である。SB02～SB04の建物群とほぼ直交し、その南側に位置する。主軸方位をN-35°-Wにとる２間×３間の側柱建物である。池の提体部の最も高い部分に位置するため、柱穴も40cm前後の深さが残っている。柱穴の平面形は楕円～円形、直径40cmを測る規模が多く、直径15cmの柱痕跡が残るものがある。柱は掘り方内でほぼ収まるようであるが、P6、P9、P10は掘り方の底より一段僅かに深く掘り込まれている。建物は柱穴の並びが整っている。建物の規模は梁行412cm、桁行782cmである。P8を除き柱筋は通るが、柱間距離は不統一で梁間が190～218cm、桁間249～263cmを測る。

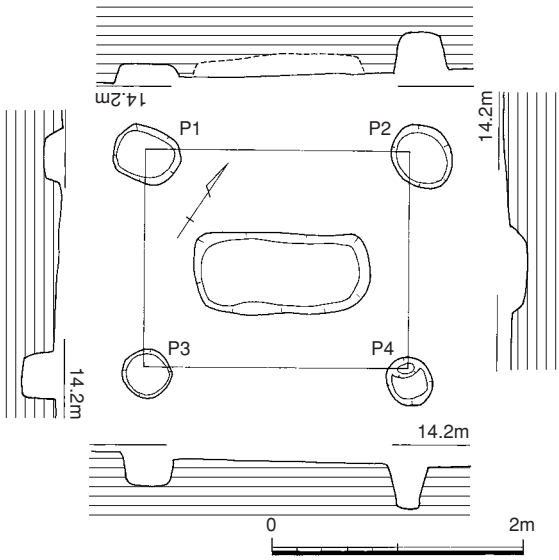


Fig.7　SB08実測図（1/60）

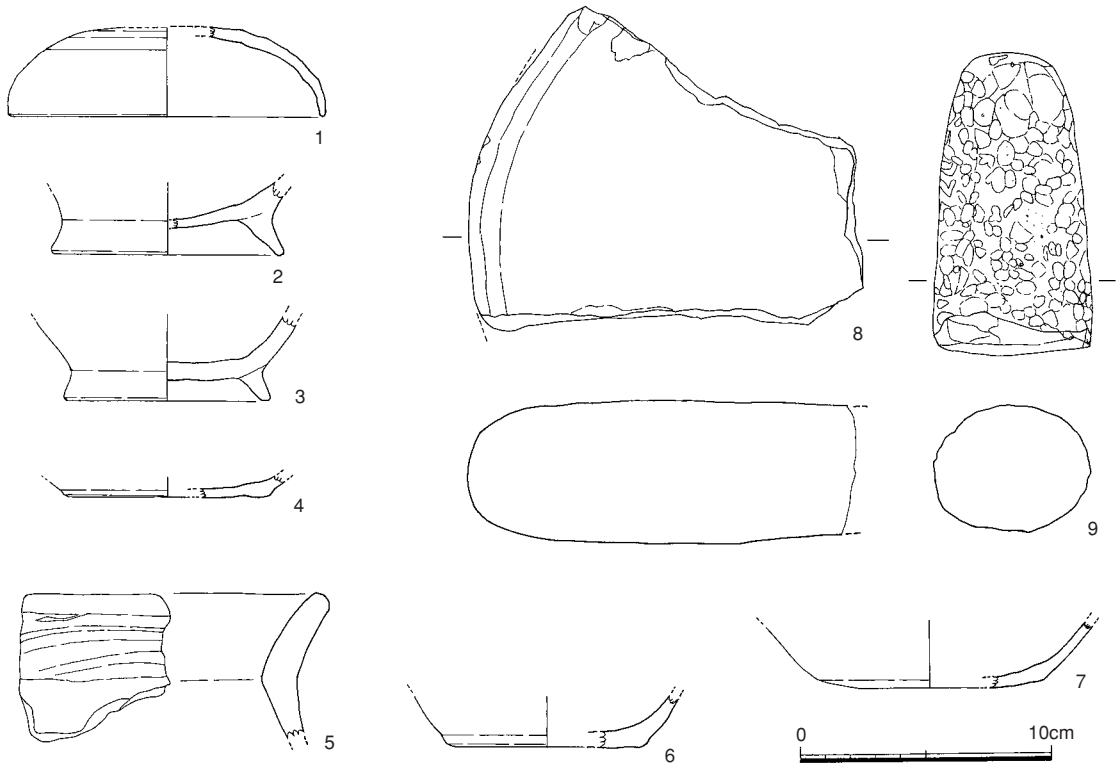


Fig.8　掘立柱建物出土土器実測図（1/3）

出土遺物（Fig.8-2～4、8、9）

P5（３）、P3（４）、P2（８、９）から出土している。４は土師器の平底の坏底部である。内外面とも摩滅して調整は不明。３は須恵器の高台付き底部から体部にかけての破片である。外に開く低い高台で、底部と体部の境に稜をもつ。胎土には白色、黒色砂粒を少量含み、焼成はよく灰色を呈する。２は土師器の高台付椀である。高い貼り付け高台で外に大きく開く。８は砥石の破片で上下両面を使用している。９は石斧の基部の破片である。表面に敲打痕が全面に残り、研磨は行われていない。

SB07（Fig.6、PL.3）

SB06の北東部に位置し、一部柱穴を重複する総柱建物である。主軸方位をN-37°-Wにとる２間×２間の規模である。池の築堤の縁から水田の平坦面にかけて立地するため北東側の柱穴の遺存は悪くP2などは数センチの深さしかない。P4～P6の柱穴の並びが悪く統一制に欠ける。柱穴の平面形は楕円～円形、P5、P6を除き直径40～60cmを測る。建物の規模は梁行363cm、桁行502cmであるが、柱間距離は統一性に欠け梁間が153～202cm、桁間が246～255cmを測る。

総柱建物の倉庫と考えたがP5、P6のピットは他の柱穴と比べ著しく小さく、浅い掘り込みであり、柱筋

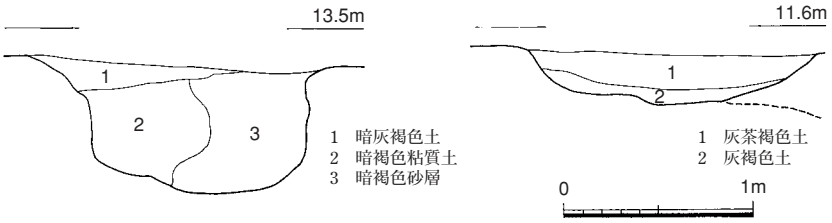


Fig.9　SD06・SD15土層実測図（1/40）

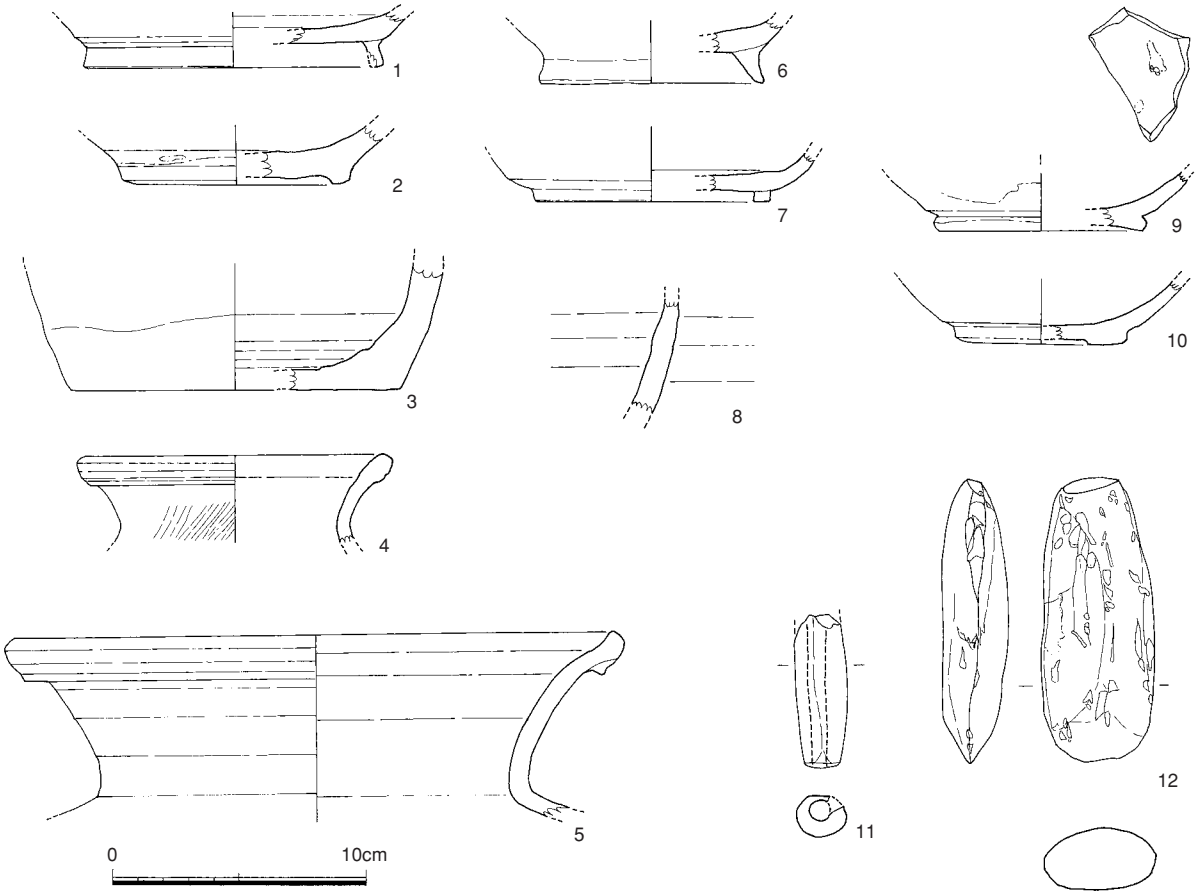


Fig.10　溝状遺構出土遺物実測図（1/3）

が通らないなど総柱建物とするには疑問があり、側柱建物とするべきかもしれない。

出土遺物（Fig.8-5～7）

５は土師器の甕の口縁部から胴部にかけての破片である。全体的に器表面は摩滅しているが、口縁部は横ナデ、頸部外面は横方向のへら痕が残る。内面は暗褐色、外面は黒色を呈する。６、７は土師器の坏底部である。小破片で器表面は摩滅しているので明らかではないがヘラキリ離しの丸底風の底部であろう。

SB08（Fig.7）

SB01の南西４mに位置に検出した主軸方位をN-55°-Eにとる１間×１間の掘立柱建物である。柱穴の掘り方は径40cm前後の楕円形、深さ15～35cmを測る。柱穴の覆土は茶褐色から暗褐色でSB01の覆土とほぼ同じである。中央部には桁行に平行して隅丸長方形の土坑がある。長軸136cm、短軸64cm、深さ14cmを測る断面皿状の浅い土坑である。

２）溝状遺構

SD06（付図、Fig.9、PL.5）

多くの溝状遺構を検出したが、大部分は近・現代の耕作に伴うものである。D-６区からH-５区にかけて位置している。調査区の南端を限るように、丘陵の傾斜地麓と平坦地の縁を沿うように西から東に延びる溝である。幅は２m前後を測り、ほぼ直線的に延びている。覆土は上面を暗灰褐色土に覆われ、その下を暗褐色粘質土と暗褐色細砂層に覆われている。土層から一度埋まった溝が掘り直され、その後洪水か何かで埋まったものと考えられる。壁面は二段に掘り込まれ、上半分は緩やかに、下半分はほぼ垂直か、オーバーハングしている箇所もある。溝には水が流れていたようで、床面の凹凸が激しく、いたる所に円形の窪みができていたり、幅も広まったり狭まったりしている。溝幅は広いところで約2.5m前後を測るが全体に１m前後を測り、深さは50～70cm、全長44mを測る。

出土遺物（Fig.10-1～4、12）

出土した遺物は図示した土器の他に鉄滓も出土しているが、これは製鉄遺構に伴うものであろう。１は須恵器の高台付坏である。角張った高台でハの字に外に開く。２は陶器の壷の底部破片である。低い削り出し高台で、底部外面にかけては露胎のままである。釉は緑をおびる淡灰色の不透明である。焼成は悪く露胎は淡明橙色である。３は須恵器の壷底部である。体部外面の底部際をヘラケズリし、内面には凹凸が残る。４は小形の壷で口縁部を肥厚させる。一部新しい遺物を含むが古代末頃か。

SD15（付図、PL.5）

H-４区からJ-６区に位置する溝である。地形に沿って蛇行しながら東から西に延びている。西端は二股に分岐しているが、削平を受け徐々に浅くなり立ち上がっている。溝の断面は浅い皿状を呈し、中央部より西側の位置で二段に掘り込まれている。黄褐色粘質土に掘り込まれ、覆土は上層が灰茶褐色土、下層が灰褐色土である。規模は幅1.5～２m、長さ38m、もっとも深い所で41cmを測る。当初、埋土が茶褐色であったので中世の溝と考えていたが、近世の遺物も含むことから新しい溝である。

出土遺物（Fig.10-8～10）

10は近世の白磁碗である。釉は半透明の白色でかなり光沢がある。胎土には砂粒を多量に含む白っぽい黄褐色を呈する。幅広の低い高台で体部は内湾して立ち上がる。８は国産陶器の壷で内面に淡緑灰色、外面に黒褐色の釉をかける。９は越州窯系青磁の碗である。胎土は緑灰色で砂粒を含み、淡緑黄褐色の釉を施す。底部から体部にかけて露胎で淡い小豆色を呈する。

他に耕作に伴う溝から須恵器の高台付坏、土師器椀、土錘、石斧等が出土している。

3）製鉄関連遺構

1号製鉄遺構（Fig.11、PL.6）

F・G-7区に位置する。水崎山から北へ延びる丘陵先端部麓の斜面を平坦に造成して構築されたと思われる製鉄遺構である。製鉄炉そのものは確認できなかったが、排滓坑や鉄滓、炉壁、焼土の分布などから製鉄炉が想定できる。製鉄遺構は現状で標高14.5m前後の平坦部に位置しているが、排滓土坑が南側の落際近くまで広がっていることから、炉を築く折に平坦面を造成しているものと推定できる。耕作土の直下で土坑が確認されたことなどから、耕地造成の時点で、ある一定程度の削平は受けていよう。

排滓土坑の東側に鉄滓・炉壁・焼土が集中する部分がある。土坑の東側は平坦面となり、さらにその東側は傾斜面となり、その部分の傾斜に沿って鉄滓類が掻き出された状態で堆積している。平坦面ほど鉄滓類は密集して堆積していない。この層を除去すると南北に各々一個の土坑を掘り窪め北側の土坑は被熱して赤変しているところがある。この土坑は東側を耕作の溝でカットされ全体の形状は明らかではない。平坦面で炉壁・鉄滓類が集中するのは110cm四方にみられ、10cm位の厚さに堆積している。この部分に炉が存在していたものであろう。この鉄滓類はを除去すると人為的に埋められた赤褐色粘質土で覆われる。この面は被熱した痕跡は無く、本来の炉壁の立ち上がりや、あるいは壁面

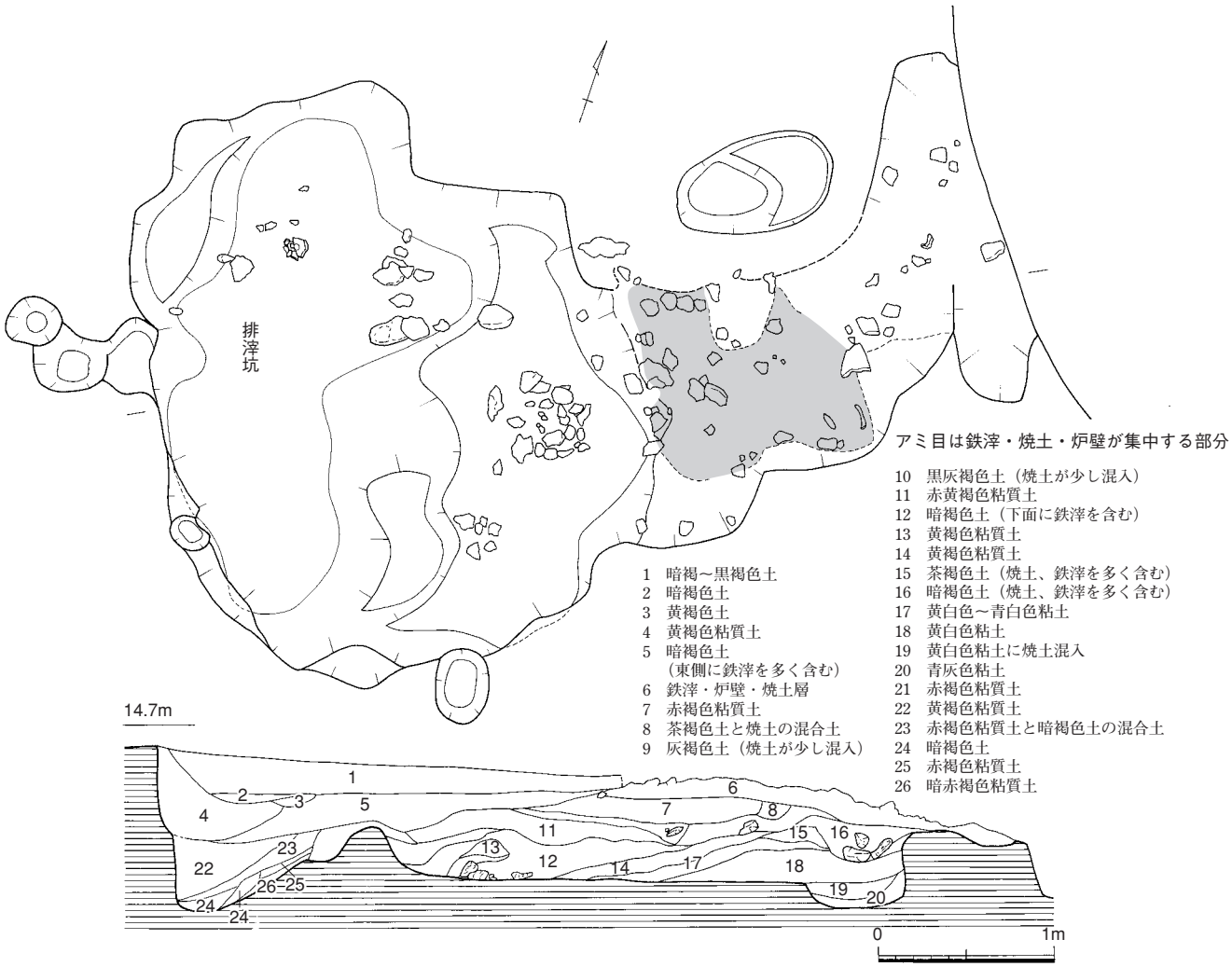


Fig.11　1号製鉄遺構実測図（1/40）

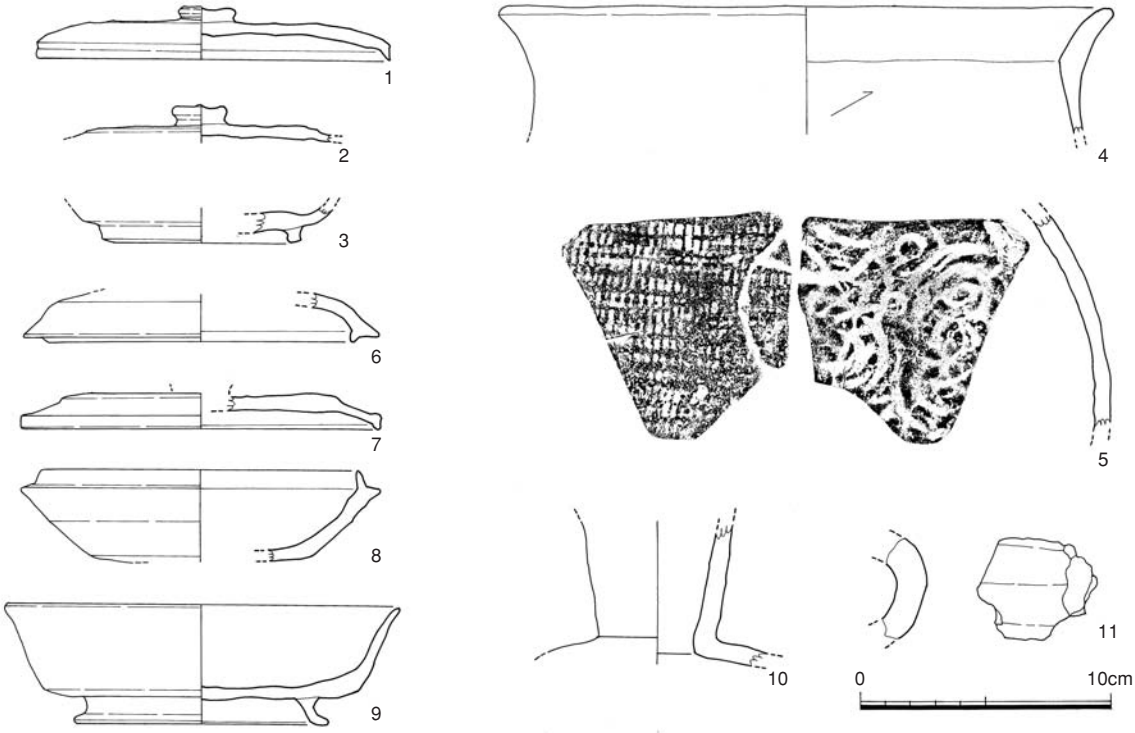


Fig.12　1号製鉄遺構出土遺物実測図（1/3）

が還元した硬化面はない。第24次調査で確認した炉の下部遺構やその下部遺構の覆土となっている砂粒状の焼土・灰層も確認できなかった。しかしながら西側に排滓土坑があり、東側傾斜面に鉄滓類があることなどを考えるとこの部分に炉体が築かれていたが、炉底塊を取り出すときに破壊を受け、耕地整理の時に地下げを受け、炉は完全に消滅したものと考えたい。

出土遺物（Fig.12-1～11、PL.12）

１は西側排滓土坑の下層から出土した須恵器の坏蓋である。天井部はヘラケズリし、中心部にボタン状のつまみが付く。扁平な天井部で端部を屈曲させて口縁部としている。1/2ほどの遺存で口径13.9cm、器高2.1cmを測る。２～５は西側排滓土坑の上層出土である。２は須恵器坏蓋で１と同様な

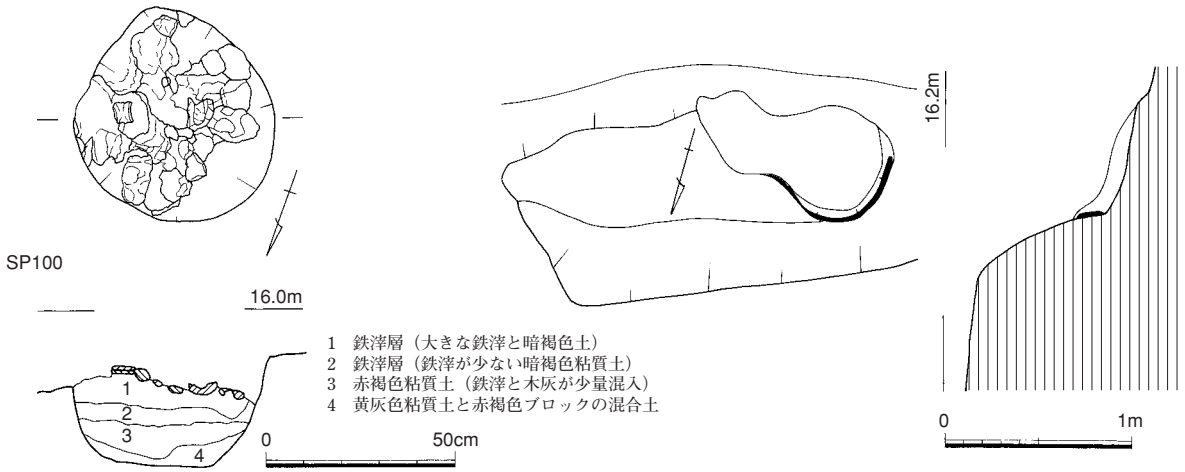


Fig.13　2号製鉄遺構・SP100実測図（1/40、1/20）

特徴をもつ。3も須恵器で高台付坏の底部から体部にかけての破片である。胎土には砂粒を含むが精良で焼成はよく灰色を呈する。4は土師器の甕で胴部内面にヘラケズリが認められるが他は摩滅が著しく調整不明。

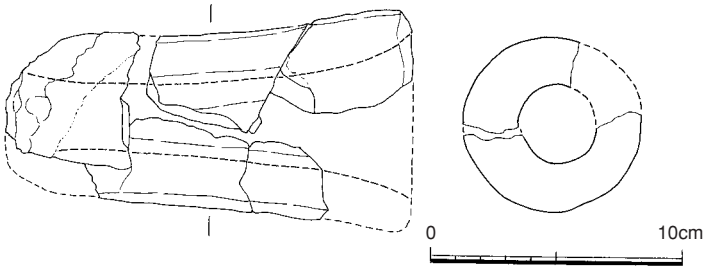


Fig.14　SP100出土羽口実測図（1/3）

6～11は1号製鉄炉の北側に位置するピットから出土したものである。11は円筒状の羽口、他は須恵器である。鉄滓も一緒に出土しているが、1号製鉄炉と関連するものかは明らかではない。6は坏蓋でかえりをもつ。7は天井部を平らにヘラケズリし、端部を屈曲させ口縁部とした扁平な坏蓋である。8は蓋受けをもつ坏身で器高3.5cmを測る。9は1/4程の遺存であるが、復元口径15.5cm、器高4.8cmを測る高台付坏である。胎土には白色砂粒を多く含み、焼成は良く灰黒色を呈する。ヘラ切の底部に貼り付けた高台は高く外に開き、端部は跳ね丸く収まる。体部は内湾して立ち上がり口唇部は丸く収まる。10は壷の頸部から胴部にかけての破片である。11は径5cm前後の鞴の羽口である。先端部は被熱し僅かにガラス質化している。

2号製鉄遺構（Fig.13、PL.7）

C-3区に位置する遺構である。大部分は池の築造により削平を受け壁面と床の一部が確認できるだけで、全体の形状は不明である。現状で規模は直径45cmの半円形、北西側のもっとも深い部分で深さ10cmを測り、壁面は熱を受け赤変している。覆土は焼土粒や木炭混じりの暗褐色土である。床面はほぼ平坦で被熱していない。近くで鉄滓が採集されたので、製鉄遺構としたが焼土坑と考えたほ

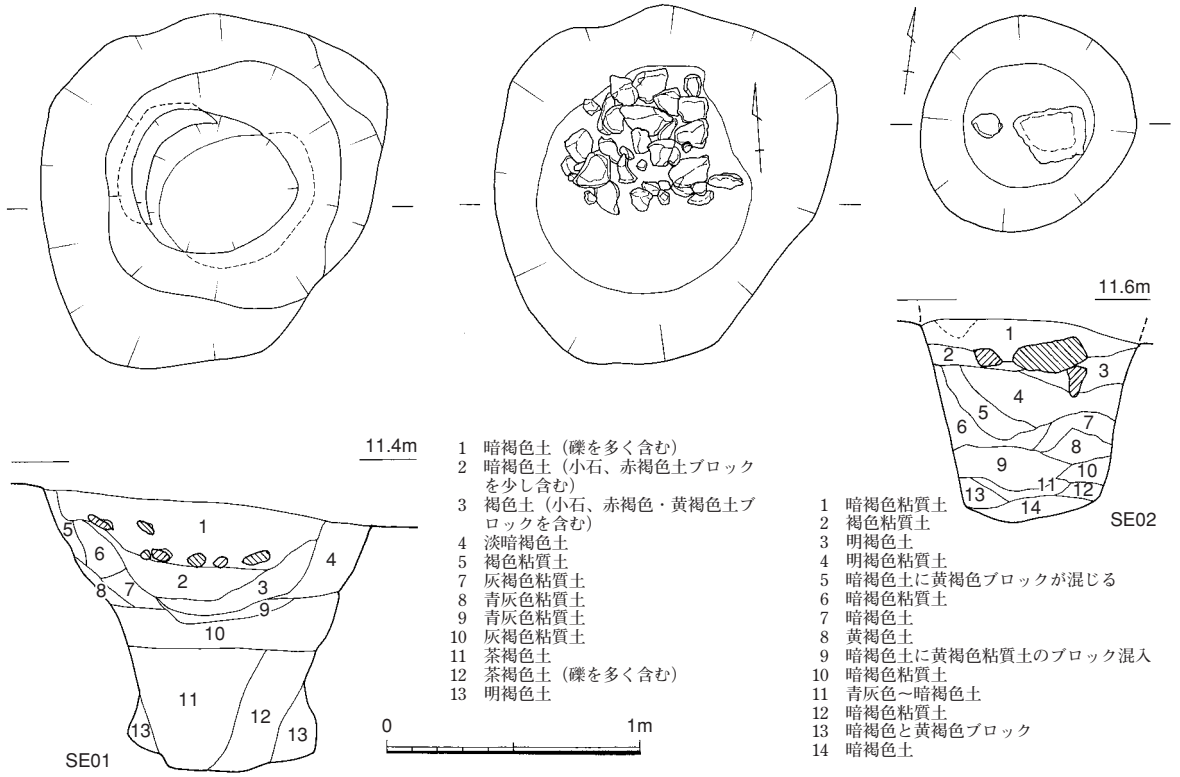


Fig.15　SE01・SE02実測図（1/30）

うが妥当性があろうか。遺物は出土していない。

SP-100（Fig.14、PL.8）

D-3区に位置するピットである。平面形は楕円形で壁面は緩やかに内傾し、床面は平坦である。53×57cm、深さ29cmを測る小規模なピットであるが、上面に鍛冶滓が広がり、10cmの厚さに鍛冶滓を含む暗褐色土が堆積している。ピットの周縁は熱を受け僅かに紫色に変色している部分も見られる。

出土遺物（Fig.14）

鞴の羽口である。一部接合しないが図のようになると思われる。円筒形で基部を太く、先端に向かってやや細くなる。先端部は炉壁にそったかのようにガラス質化した部分と熱を受け変色した部分が見られる。胎土には大きな砂粒を多く含み、焼成はよく灰褐色から黄赤褐色を示す。外面にはヘラによる縦方向の稜線が残る。大きさは中央部での直径7cm・孔径3cm、全長16cmを測る。8世紀代のピットであろう。

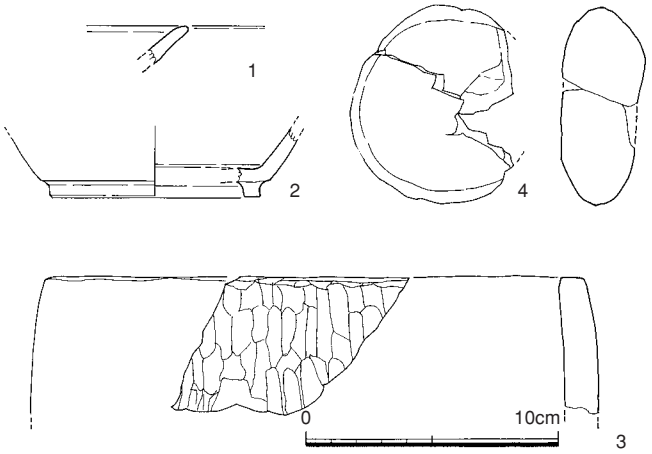


Fig.16　SE02出土遺物実測図（1/3）

4）井戸状遺構

I-4・5区に位置する土坑で2基を検出した。いずれも平面形が円形で、浅い掘り込みであり、黄褐色粘質土までしか掘り込まれていない。湧水層までには至っていないが、SE01は下部にオーバーハングし、水が溜まっていた状況を窺わせる。SE02は井戸であるとは言い切れないが、一応井戸状遺構とする。

SE01（Fig.15）

I-5区に位置する素掘りの井戸状遺構である。平面形は歪な楕円形をしめし、二段に掘り込まれる。最大幅1.5m、深さ1.12mを測る。上半部は緩やかな傾斜であるが、下半部は垂直もしくはオバー

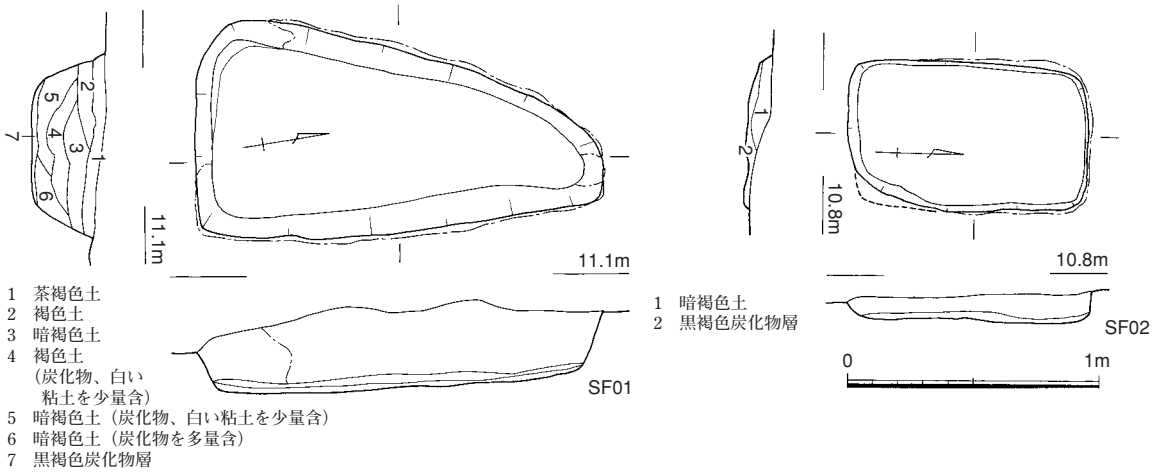


Fig.17　SF01・SF02実測図（1/30）

ハングしている。井戸の埋没後、上層には浅い土坑が掘り込まれている。平面形はほぼ円形で壁面はなだらかで、断面は深鉢状を呈する。掘方が中ほどまで埋まった状態の時点で礫、鉄滓が投棄されている。覆土の下層は茶褐色を呈し、自然堆積であるが、その上の層は水平な土層であることから埋め立てられたものと思える。その上はまた自然堆積である。出土遺物は土師器の甑が1点ある。

SE02（Fig.15、PL.8、9）

Ⅰ-５区に位置するSE01の北13mにある素掘りの井戸状遺構である。平面形は略円形で直径85cm、深さ78cmを測る。壁面は下に向かってすぼまり底部は丸みを帯びる。覆土は上層が褐色土、中層が暗褐色土、下層が黄褐色ブロックが入った暗褐色土となっている。遺物は礫が入った１～３層から出土している。

出土遺物（Fig.16）

１は土師器の坏の口縁部小片である。胎土には砂粒を少し含み、焼成良好で灰白色を示す。２は高台付坏の底部破片である。高台は断面コの字の低い高台で垂直に貼り付けられ、底部と体部の境には稜をもつ。３は滑石製石鍋の破片である。外面には縦方向の鑿の痕が明瞭に残る。復元口径21cmをはかる。４は磨石で径7.8cm、厚さ3.5cmである。８世紀前半の井戸であろう。

５）焼土坑

SF01（Fig.17、PL.9）

SX-05が埋没した後に、その上面の北側縁に築かれた焼土壙である。J-４区に位置する。主軸をほぼ南北にとり、平面形は隅が丸くなった逆三角形を呈する。最大幅は南端で85cm、全長160cm、深さ28cmを測る。各辺はほぼ直線的であるが、北壁のみがやや丸味をもつ。壁面はいずれも緩やかな傾斜を示す。各壁面及び床面は被熱し赤変しており、北端に近い東西の壁面は黒～灰褐色を呈し、還元している。ただSX05と重複している箇所は被熱の度合いが少なかったのか赤変はしていない。覆土の上層は茶褐色から暗褐色土で木炭粒を少し含む。下層は木炭、灰を含む暗褐色土である。最下層は数センチの厚さで木灰、炭化物の層で覆われている。覆土からは出土土器はなく、時期は不明。

SF02（Fig.17、PL.10）

SF01の南２mにあり、同様にSX05の上面、J-４区に位置する焼土坑である。主軸をほぼ南北にとり、平面形は隅が丸くなった隅丸長方形を呈する。遺存状態は悪く南西部は壁面が残っていない。規模は幅59cm、全長95cm、深さ12cmを測る。各辺はほぼ直線的であり、壁面はいずれも緩やかな傾斜を示す。各壁面及び床面は被熱し赤変している。覆土の上層は茶褐色から暗褐色土で木炭粒を少し含む。下層は木炭、灰を含む暗褐色土である。最下層は数センチの厚さで木灰、炭化物の層で覆われている。覆土からは土師器の小破片が出土しているが、時期は明らかではない。

６）不定形土坑

SX05（Fig.18、PL.10）

J-３～４区に位置する大型の土坑である。南東部は耕作による段落ちとなり浅くなり、土坑はさらに南東方向に延びている。最大幅4.12m、現存長11.45mの東西に長い掘り込みで、断面は浅い「V」字状を呈し、深さ1.15mを測る。覆土の上層は黒褐色土で、下層に行くに従い暗褐色から黄褐色土となる。出土土器は下層からまとまって出土している。

出土遺物（Fig.19、PL.12）

１～８は土師器である。１～５は底部ヘラ切りの坏・皿類である。５は口径16.4cmを測る大きい

皿である。胎土に少し砂粒を含むが精良で、焼成も良く橙褐色を呈する。８はほぼ完形品の広口壷である。半球形の胴部に直立する口縁部となる。口縁部内面から外面は研磨が見られる。口径12cm、胴部最大径12.7cm、器高9.8cmを測る。９は須恵器の高台付壷である。丸い底部に低い高台を貼り付ける。10は軟質の緑釉の壷で胴部から底部にかけての破片である。胴部外面は回転ヘラケズリで底部との境には沈線を巡らす。胎土は緻密で精良で白灰色を呈する。器表面の剥離が著しいが胴部外面には黄緑色釉が一部に観察され、本来全体に施されていたものであろう。内底面には釉垂れが数滴認められる。11は越州窯系青磁碗の口縁部破片である。緑褐色の不透明釉で、胎土は白灰色である。12は須恵器の甕で頸部から口縁部を欠損する。最大径を胴部上半にとる倒卵形で、外面は平行叩きの後カキ目状の回転ナデを行い、内面には同心円の当て具痕が残る。胎土には砂粒を含むが精良で焼成堅緻で白灰色を呈する。

SX06（Fig.18）

Ｊ・Ｉ-４・５区に位置する大型の土坑である。南側はSD15と重複し、浅い掘り込みのためそのほとんどが消滅している。遺構は南北が徐々に高くなっており丁度、谷の中央部に掘り込まれている。土

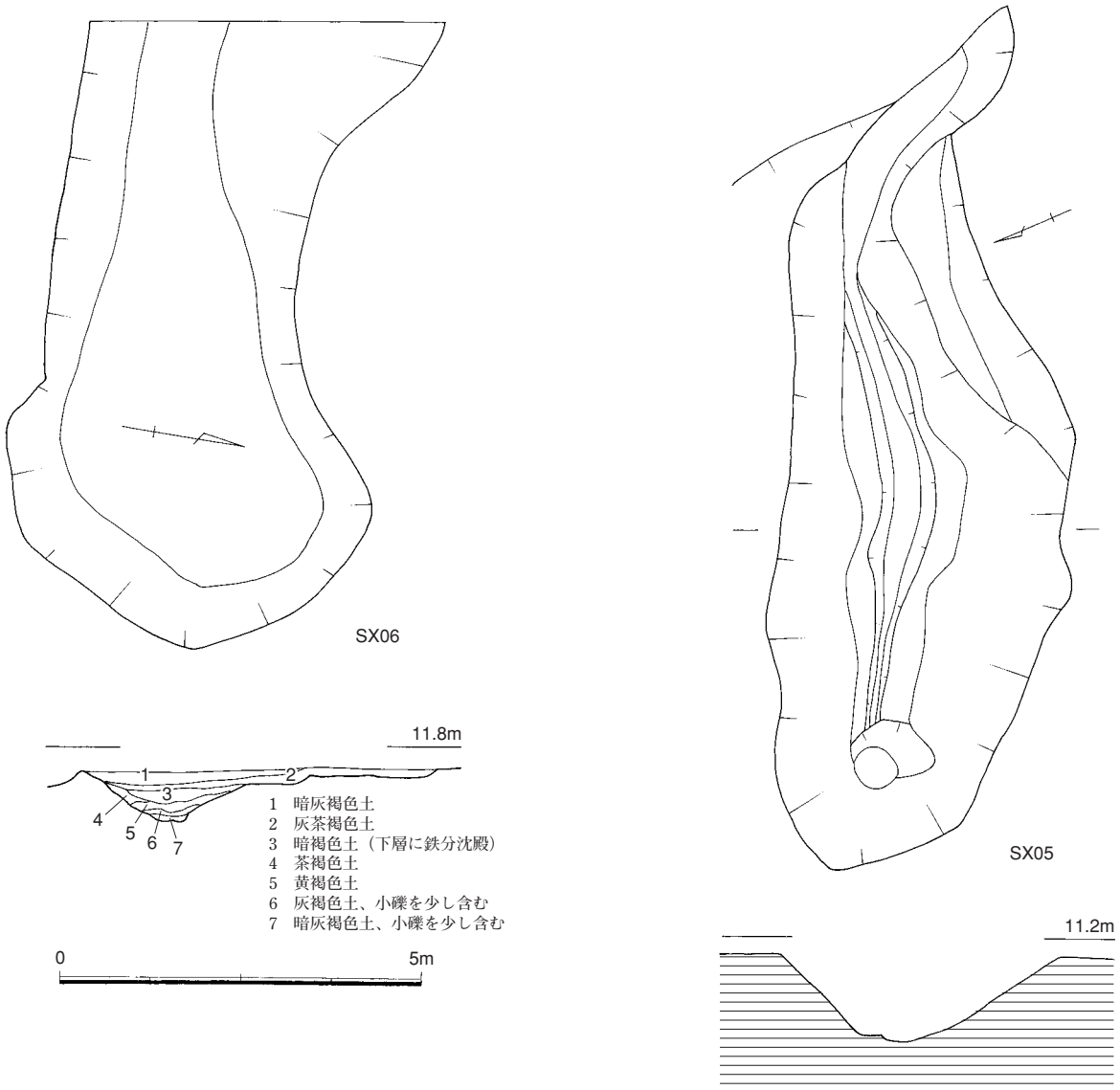


Fig.18　SX05・SX06実測図（1/100）

坑は二段に掘りこまれ、上段の壁面は傾斜が緩やかで下段のはかなり傾斜が強い。東西に細長い不定形の土坑で、規模は東西11.45cm、最大幅4.95m、深さ0.78mを測る。上層は暗灰褐色土、灰茶褐色土で、出土遺物はこの層からの出土である。③層の小礫混じりの暗褐色土の下面には鉄分沈殿層が観察できた。その下は黄褐色土、灰褐色土、暗褐色土で小礫が混じっている。

出土遺物（Fig.20、PL.12）

下層からの出土である。1～14、24は須恵器、15～23は土師器である。1は赤焼須恵器である。復元口径11.5cm、器高2.3cmを測り、胎土には砂粒を多く含み、焼成は良く赤褐～黄褐色を呈する。3は小形品である。天井部にヘラケズリの後にヘラの調整痕が残る。4は壷類の蓋で天井部は平坦で体部に向かい大きく屈曲し肥厚する口縁部となる。5は底部ヘラ切の坏で内面に×印の窯印がある。6～12は高台付坏である。6は高台を底部の内側寄りに貼り付け、体部は緩やかに立ち上がり直線的に開く。7は底部の縁に高台を貼り付け、6に比べて高さが低い。8は底部が丸みをもち、体部は内湾して立ち上がる。13は高坏の脚部である。14は底部に窯印のある椀である。15～22は土師器である。15は須恵器の器形、技法を模した土師器である。天井部外面はヘラケズリで、他は回転ナデである。天井部内面にヘラで「日」と刻書している。16・17は平底の坏である。摩滅が著しく調整は明瞭ではないが底部切り離しはヘラ切りであろう。18は高台付坏である。調整が雑で全体に歪み、高台の接合痕が段になって残る。

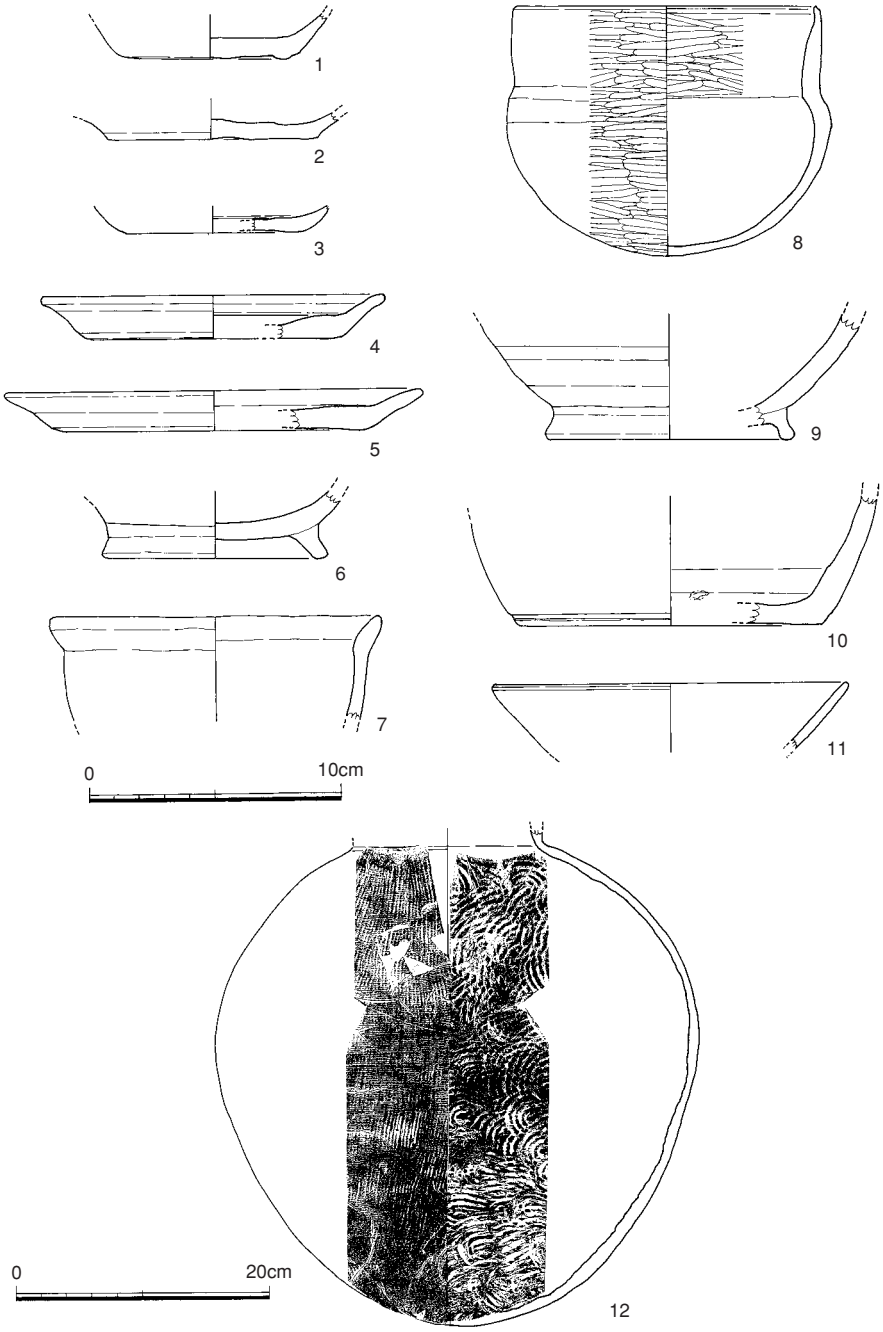


Fig.19　SX05出土土器実測図（1/3、1/6）

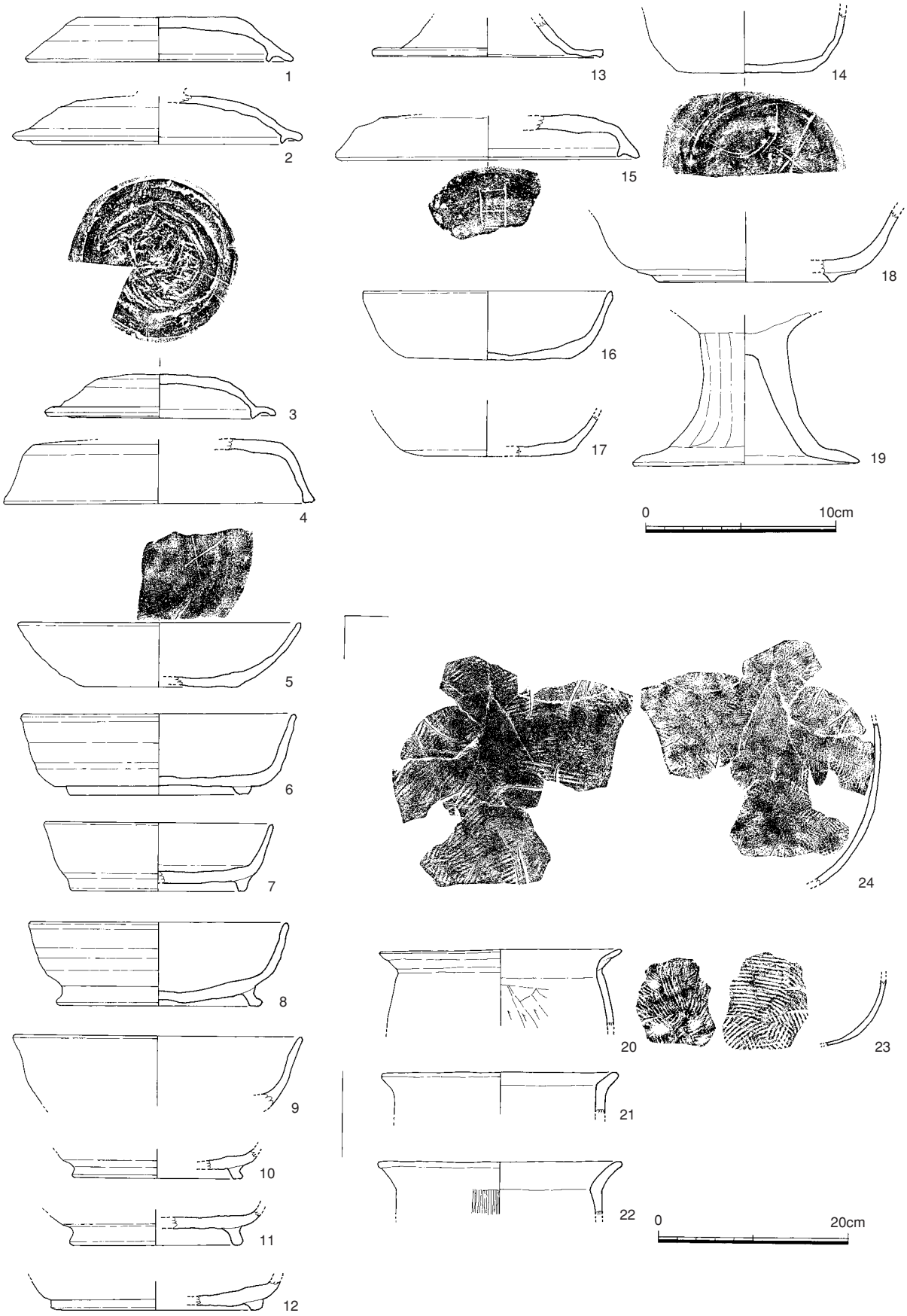


Fig.20　SX06出土土器実測図（1/3、1/6）

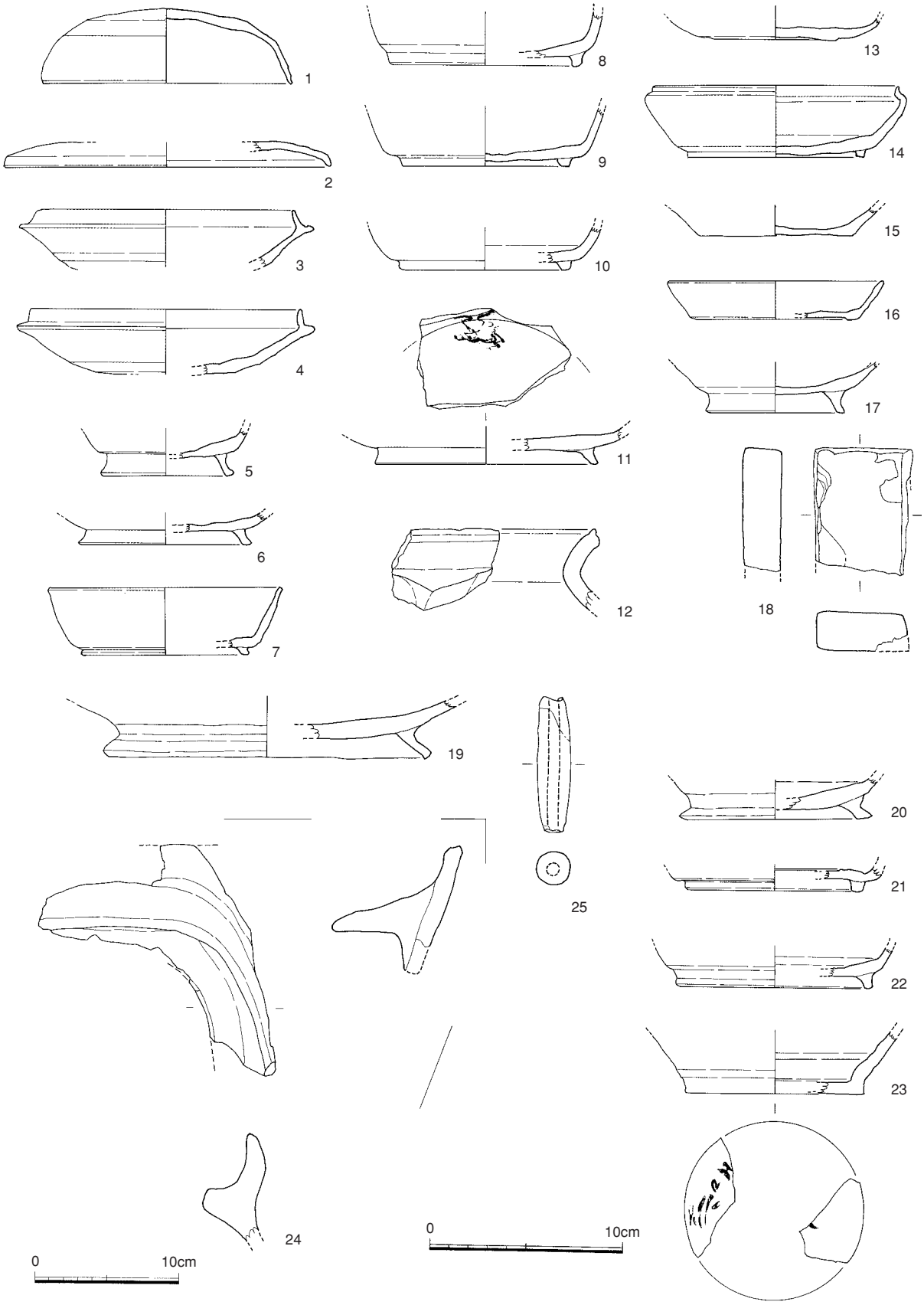


Fig.21　包含層・遺構検出面出土土器実測図（1/3、1/4）

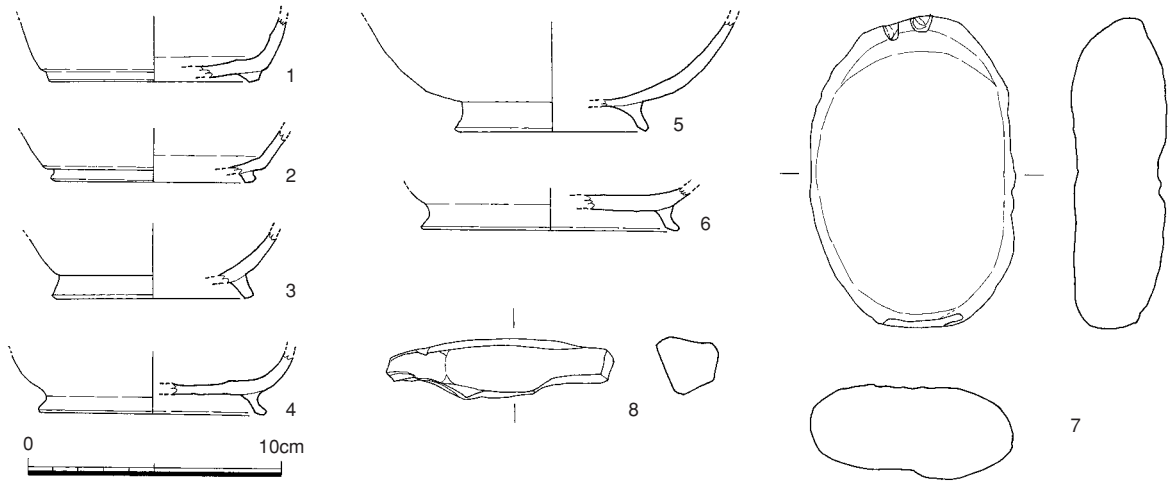


Fig.22　ピット出土土器実測図（1/3）

20～22は口径26cm前後の甕で胴部内面をヘラケズリし、外面に刷毛目が見られる。23は内面に刷毛目、外面に叩きを残す甕である。

7）包含層・遺構検出面・ピットの出土遺物

遺構検出中に出土した遺物や部分的に残っていた茶褐色土、暗褐色土から出土した遺構に伴わないものである。１～18は包含層、19～25は遺構検出時の出土である。１～11は須恵器である。１は坏蓋で天井部は丸くヘラケズリ、体部は立ち上がりが深く、ヨコナデをしている。２は扁平な坏蓋で口径17cm、器高1.3cmを測る。胎土には砂粒を少し含み、焼成は良く色調は灰～暗灰色で、端部は重ね焼のためか輪状に黒色となっている。３、４は坏身で口径13.8cm、器高3.3cmを測る。天井部はヘラケズリ、体部は回転ナデを施す。口縁部は蓋受けからほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸く収まる。５～11は高台付坏の底部から体部にかけての破片である。ハの字に開く高台を貼り付け、７は体部との境に鈍い稜をもち、口縁部に向かい直線的に開く。８～10の高台は低く垂直に貼り付けている。11は内底に墨痕が認められるが残りが悪く文字であるのか明らかではない。14は最大径を口縁下にとる高台付椀である。高台は低く、底部は丸みをもち体部も内湾して立ち上がり、口縁部は屈曲し垂直に立ち上がる。16は平底の坏、17は高台付椀の内黒土器である。18は砂岩製の砥石である。表裏、側面を使用している。19は土師器の高台付盤であろう。底径16.8cmを測り、ハの字状に大きく開く高台を貼り付ける。胎土に石英、金雲母を含み焼成良好で橙褐色である。20は土師器の高台付椀の底部破片、21、22は低い貼り付け高台の須恵器である。23は須恵質の陶器甕の底部破片である。底部糸切で墨痕が認められる。24は移動式竈の焚き口部の破片である。胎土には砂粒を多量に含む。焼成は良く赤味を帯びた黄褐色である。焚口の上部にアーチ状の庇を貼り付け、その先端部は二次熱を受け黒褐色となっている。竈の内面はヘラケズリを行い、外面はナデ調整を行っている。

ピット出土遺物（Fig.22）

３、５は土師器、他の土器は須恵器である。１、２は底部の縁より内側に角張る低い高台を貼り付ける坏である。４、６は底部縁にハの字状に開く丸みをもつ高台を貼り付けている。５は高台付椀で底部が丸い椀にハの字状に開く丸みをもつ高台を貼り付けている。７は花崗岩製の磨石である。12.2×8.2cm、厚さ3.6cmを測る。表裏、側面とも摩滅しているが両端には敲き痕が残る。

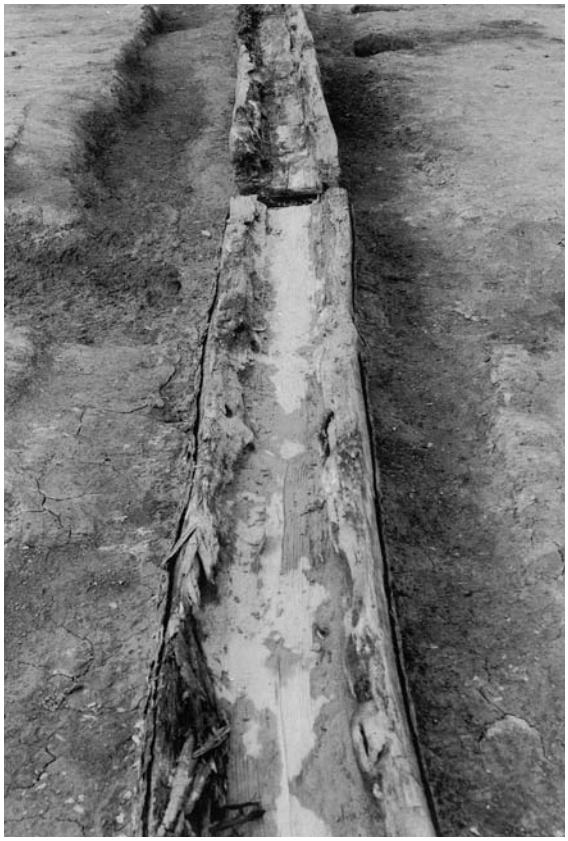
8）上層の遺構

重機で表土剥ぎしている段階でD-2区からD-4区北側に灰褐色土に掘りこまれたピット状の遺構を確認し、調査を実施（Ⅰ面遺構）したがいずれも浅い皿状の掘り込みであり、掘立柱建物とかの類ではなかった。

溜池（付図、PL.1）

池は谷部中央に設けられている。谷の中央部を掘り窪め、両側の丘陵斜面を掘削し、谷の出口を

Ph.1　SD03全景



Ph.2　木樋全景

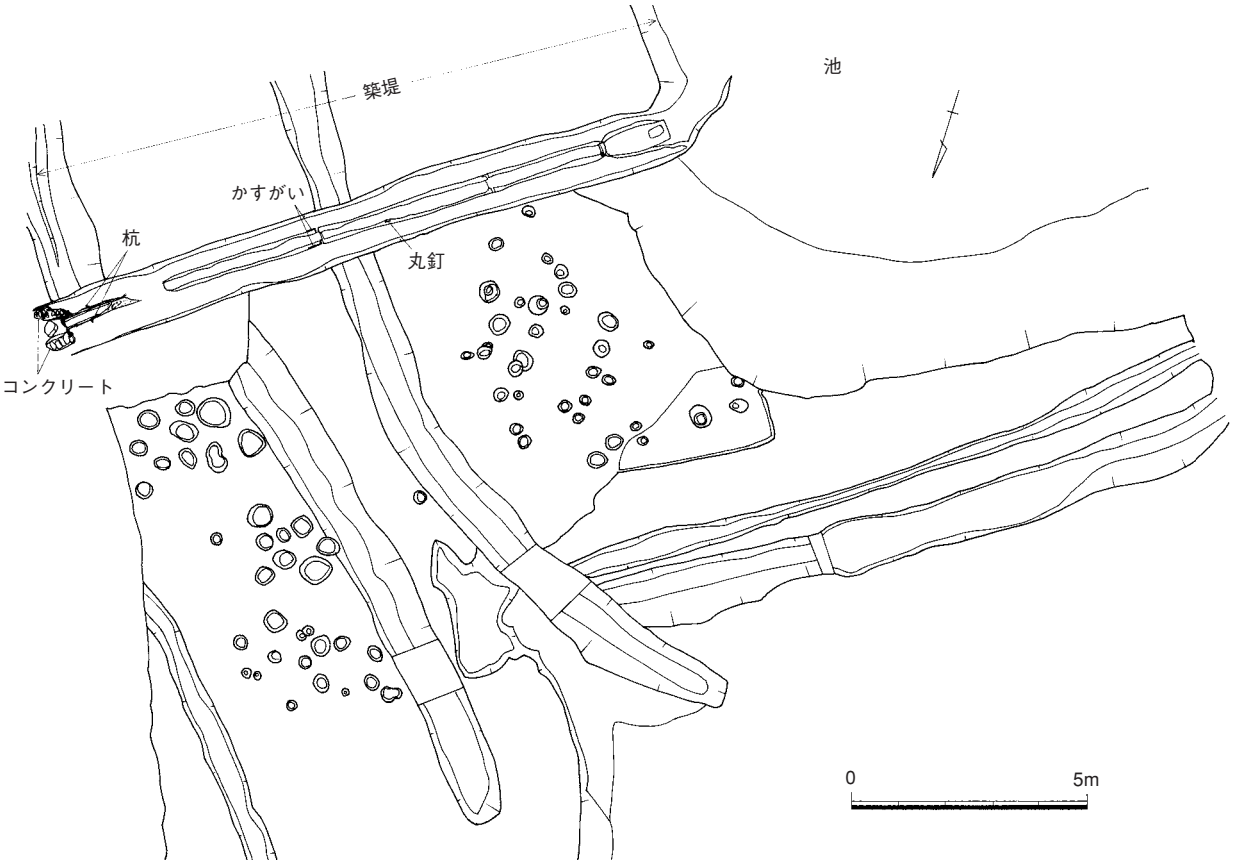


Fig.23　上面遺構実測図（1/160）

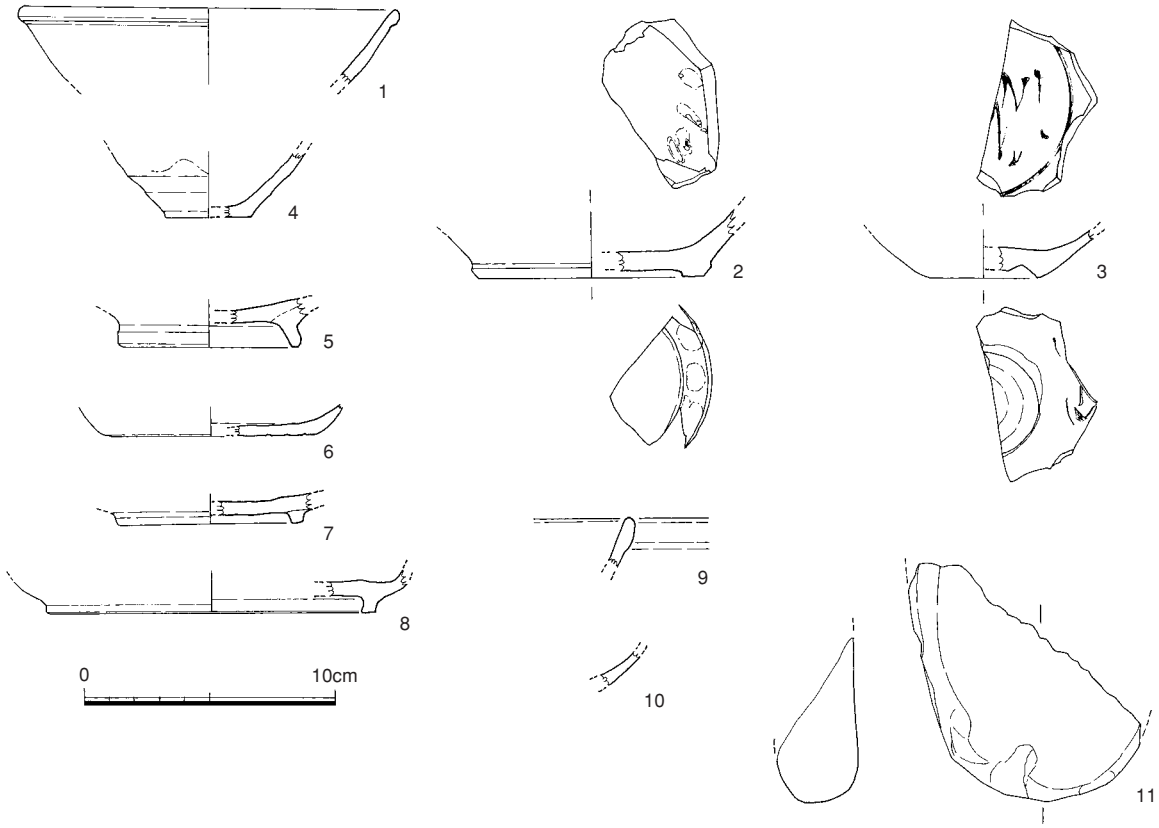


Fig.24　上面遺構出土遺物実測図（1/3）

塞き止め、堤体を築きその北東部に排水施設を設けている。溜池の規模は底面で南北28m、東西21mを測る。堤体は基底部での幅13m前後を測る。盛り土は残存していなかったが調査区北側に一部が残っており、それから判断すると2.5m以上の高さまであったことが分かる。池内部には溜池を放棄した後、水田耕作に伴う暗渠排水が縦横に巡らされている。Ⅰ面の遺構を切り込んで木樋及び堤体下の溝SD-03が掘りこまれている。排水施設は幅1.25m、深さ45cm、長さ13.6mの溝を掘り、その中心部に木樋を埋設している。径40cm弱、長さ2.23～3.85mの部材の接合部に凹凸の抉き込みをいれ、さらに側面を鎹や丸釘で留め補強し、４本の部材を繋ぎ合わせ全長11.9ｍの導水部となっている。木樋は上部蓋部分は遺存してなく下部のみが残っている。丸木の側面を面取りし、下面は樹皮を付けたままになっている。流入部には長方形の孔を有する板材を敷き、樋との接合部をコンクリートで埋めている。樋の上面中央部を幅20cm、深さ８cm前後の大きさに「コ」の字に掘り窪め、導水部としている。排水部の先端をコンクリートで固め、その上に縦長の川原石を重ね「ハ」の字状にしている。

SD03（付図）

SD03は堤体の基盤層の黄褐色粘質土までも掘り込んでいる。溝は提体に沿って、その中央部を南東－北西方向に直線的に延び北東端部で弓状に湾曲し、現状で全長44ｍを測る。南東端は調査区内では収まらずさらに延びている。溝は断面箱型で規模は幅95cm前後、深さは最も深いところで70cmを測る。溝内は池の内部を掘り下げた時に発生した黄褐色土や黒褐色土の大小の土塊で一時的に埋められたものであろう。この溝の機能であるが、木樋を設置する溝に切られていることや覆土が拳大の土塊で人為的に埋められていること、あるいは堤体に平行して掘削されていることなどから池の築堤に伴う排水施設であると考えられる。

出土遺物（Fig.24）

木樋の掘り方や堤体の盛土からは現代までの丸釘や陶磁器が出土しているが、それらの遺物については割愛し、古い遺物についてのみ記載する。

１～４は堤体の盛土からの出土、５～11はSD03出土である。１～３は輸入磁器である。１は白磁碗で口縁部が玉縁状に肥厚する。復元口径15cm、胎土は砂粒を少し含む白灰色、釉は少し青みがかった白色の透明釉である。２は越州窯系青磁碗、淡緑灰色の不透明釉で胎土は淡灰色で砂粒を含む。3は碁笥底の染付け碗である。見込みに圏線と草文を描く。やや青みがかった半透明の灰白色釉に藍色の染付けを行う。４は底部糸切の陶器である。胎土には灰色砂粒を少量含み、釉は茶色を帯びた緑灰色で細かい貫入がはいる。体部外面の底部近くから底部にかけて露胎のままである。５～11はSD03出土の遺物である。５は高台付埦、６は底部ヘラ切の坏の土師器である。７、８は須恵器の高台付坏である。断面コの字状の低い高台を貼り付ける。９は小玉縁の白磁碗、10は龍泉窯系青磁碗である。11は花崗岩製の磨石で1/2以上を欠損する。

４．小結

今回の調査地点は溜池の築造や耕地造成により削平を受けて、遺構の遺存状態は極めて悪かったが掘立柱建物８棟、製鉄炉２基、鍛冶関連ピット１基、井戸２基を検出できたことは幸いであった。

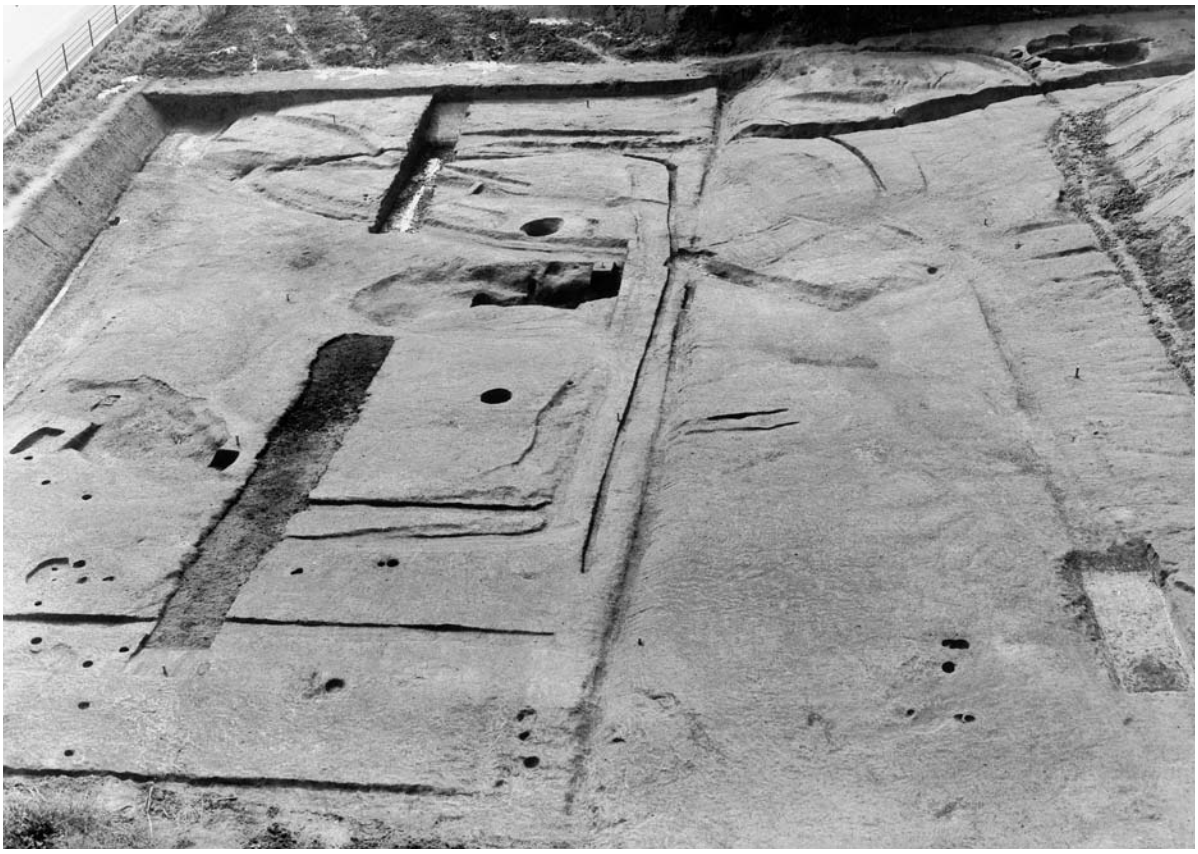
掘立柱建物は総柱建物が３棟、側柱建物が４棟、１間×１間で内部に長方形土坑を有する建物が１棟である。建物の配置は逆Ｌ字状を呈するが、堤体部の削平が比較的少ない箇所での配置であり、本来の形態は明らかではない。総柱建物は建物群の西隅に３棟重複している。SB03がSB04に切られ、建物位置が重複していること、柱穴の規模、形態も似通っていることなどから立替と考えられ、またSB02とは柱穴の掘り方も小さく、柱も細く規模も異なるり、さらには柱筋も各々違えていることから１棟毎の３時期の倉庫と推定されよう。側柱建物SB05～SB07は総柱建物と直角近く曲がって、その南東部に主軸を北西－南東にとって配置されている。SB06とSB07とは切り合い、SB01は単独に位置することなどから、少なくとも３時期の建物であると考えられよう。

元岡遺跡群でこれまで製鉄遺構が検出されたのは７次、12次、18次、20次、24次調査である。12次調査の製鉄遺構は同時期に数基の炉が操業したことが窺われ、総数34基であったが、24次調査では同一箇所に繰り返し炉を築いたり、あるいは丘陵の下から上に向かい順次築いている。また18次調査では数基検出したものの分散し構築されている。時期的にも連続するものではなく、１基ごとに時間幅をもって操業したものであろう。今回の22次調査では１基を検出し、ある程度の削平による喪失を考慮しても、７次、18次調査と同じように単独もしくは数基が点在し、同時にいくつもの炉が操業したものではなく、単独に１基だけが操業したものと考えられる。少なくともいくつかの炉が同時に操業していたとは到底考えられない。

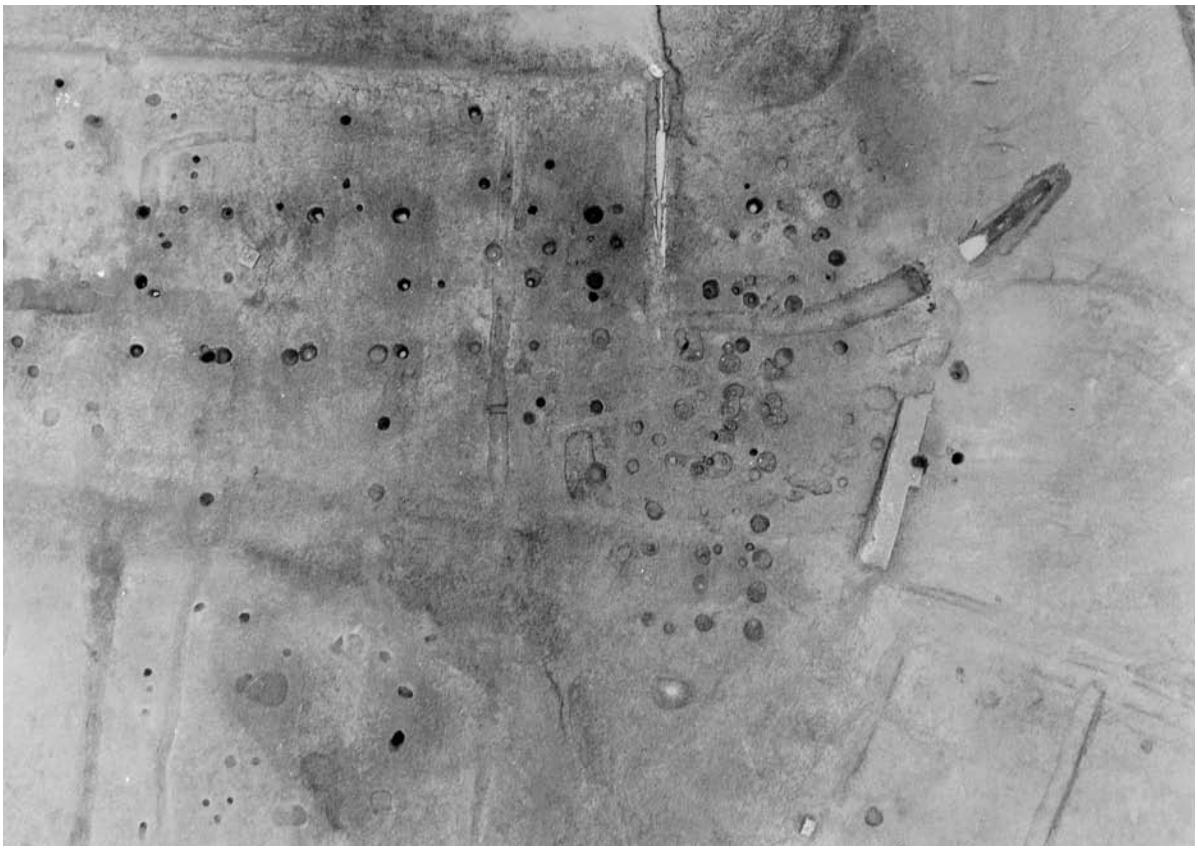
掘立柱建物、製鉄遺構の時期は８～９世紀と推定される。包含層からの出土遺物に越州窯系青磁碗や、緑釉陶器、刻書土器等が出土していること、あるいは20次調査地点と距離的にも、約250mと近くに位置し、同一時期であることから、この調査区の建物なども公的施設の一端を担っていた可能性がある。両者にはなんらかの関係があることは明らかではあるが、20次調査の遺物等が未整理な現時点ではこれ以上の検討するを行うことはできない。また今回調査した22次調査地点の北東100mの位置の試掘調査で遺構が確認された。その調査も近々行われるので、今後それらの成果をも含めて総合的に検討する必要があろう。

1　調査地点遺跡遠景（北東より）

2　Ⅰ区遺構全景

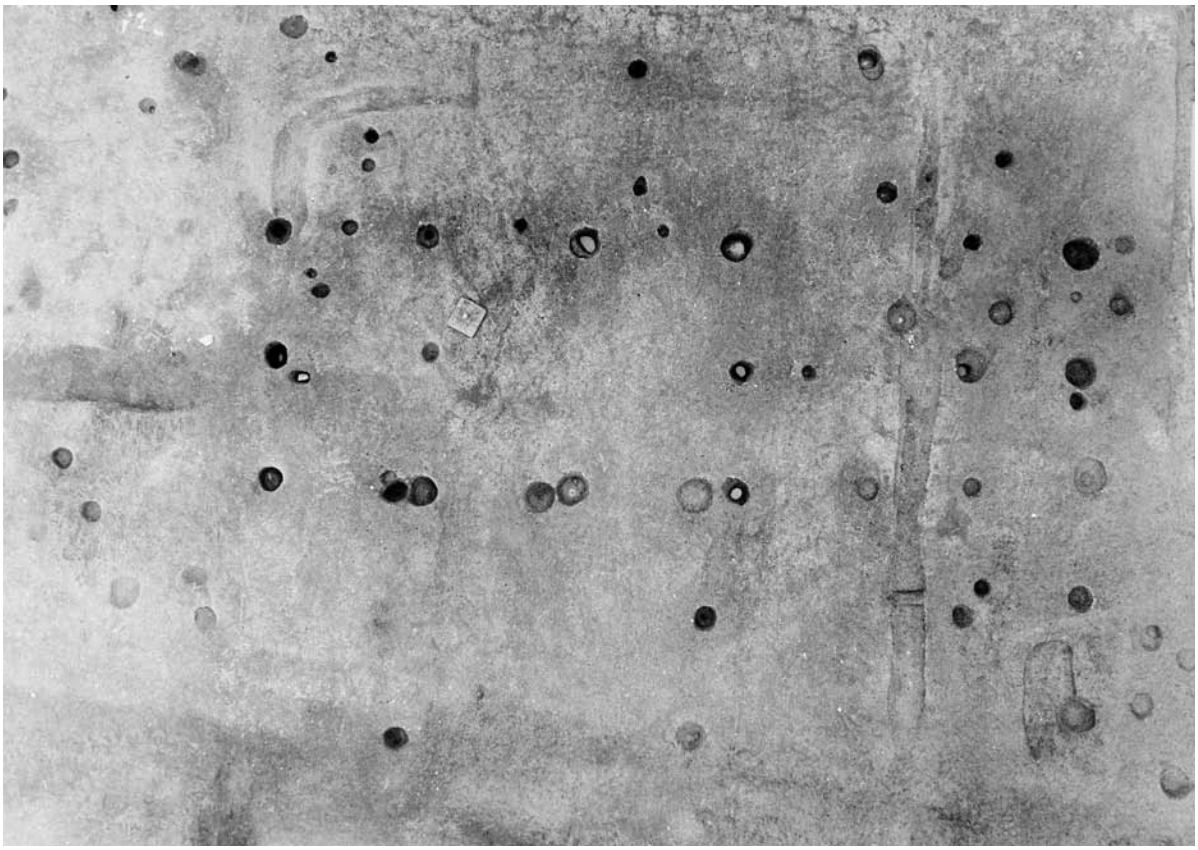


1　Ⅱ区遺構全景（北東より）

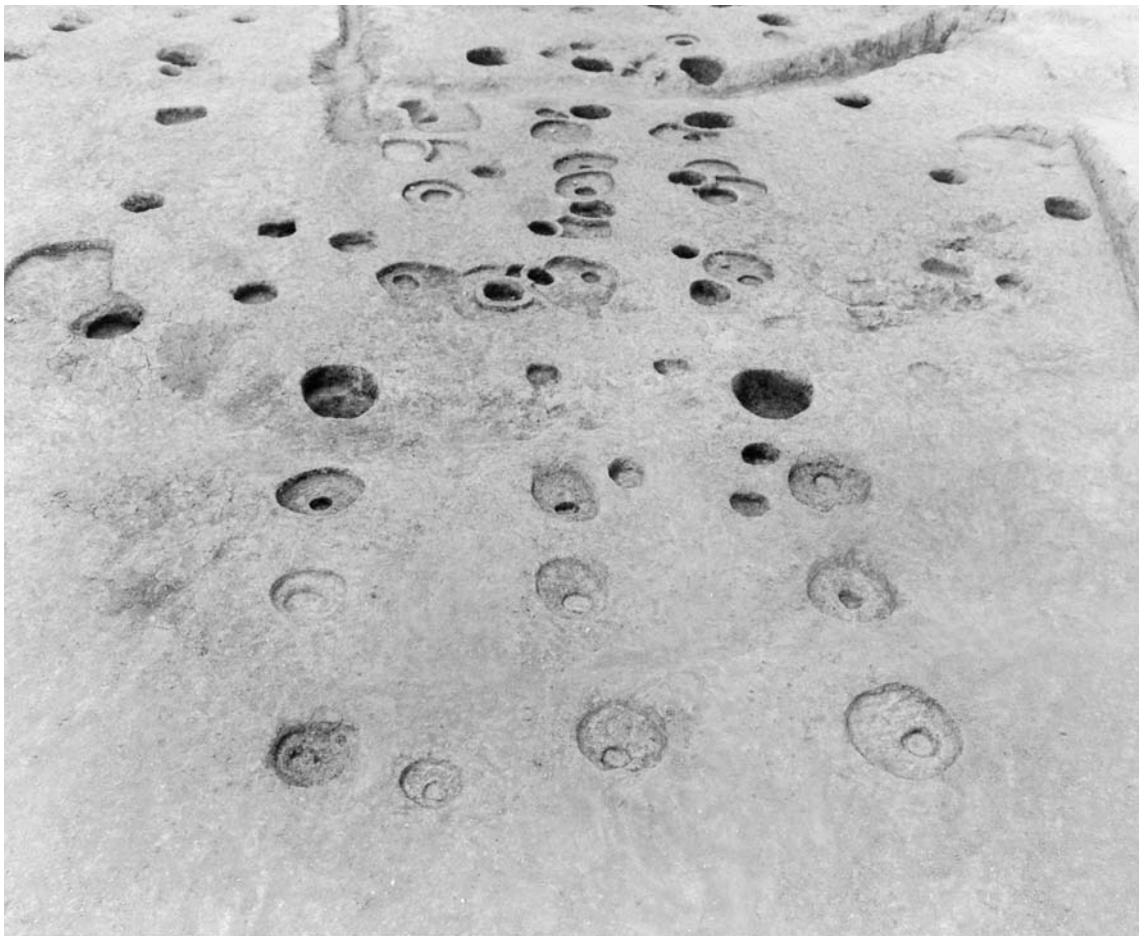


2　掘立柱建物群

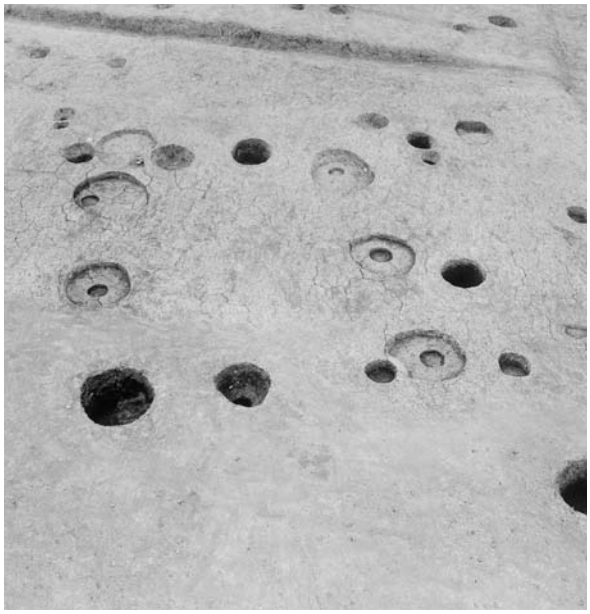
1　SB02～SB07掘立柱建物



2　SB05～SB07掘立柱建物



1　SB02～04掘立柱建物全景（北東より）



2　SB01掘立柱建物（北東より）

3　SB06掘立柱建物（北西より）

1　SD06西半部全景（南東より）

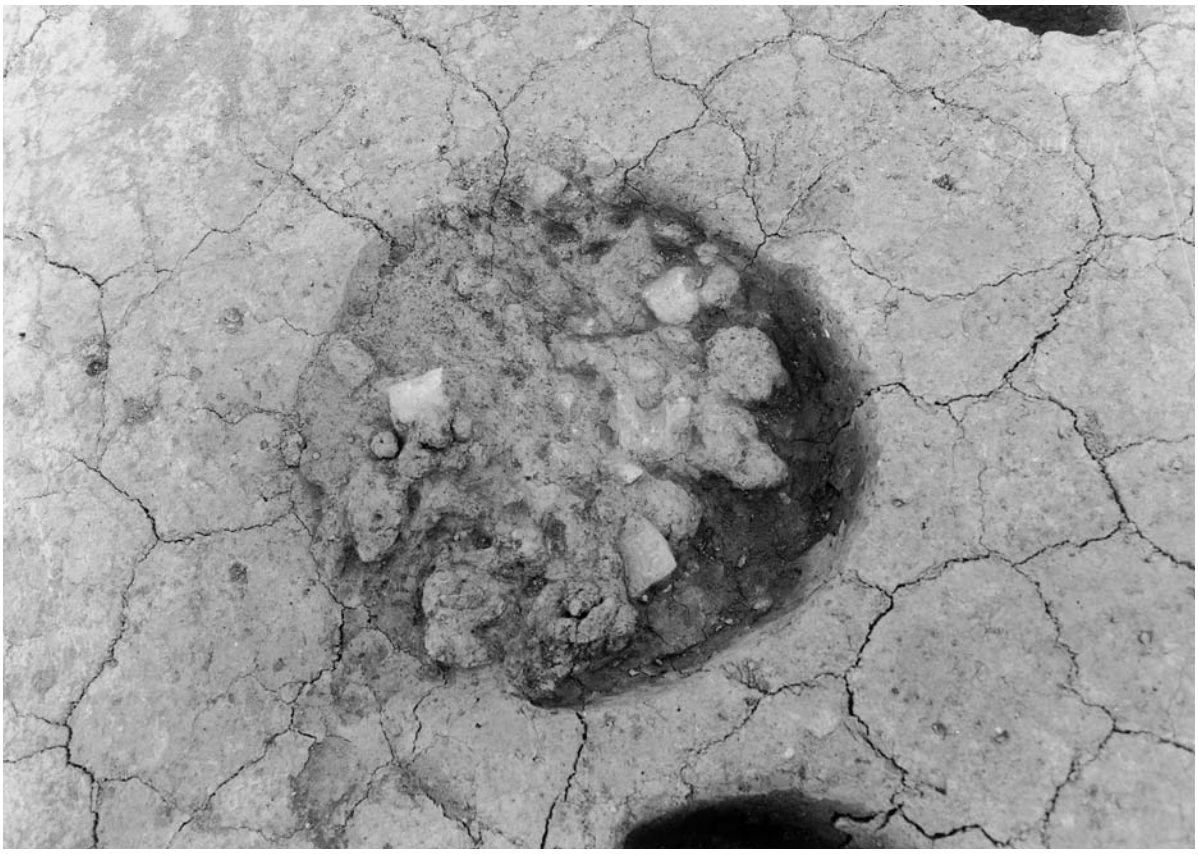
2　Ⅱ区溝状遺構（北東より）

1　1号製鉄遺構全景（北西より）

2　1号製鉄遺構鉄滓・炉壁など出土状況（北より）

1　1号製鉄遺構完掘状況（南東より）

2　2号製鉄遺構完掘状況（南西より）

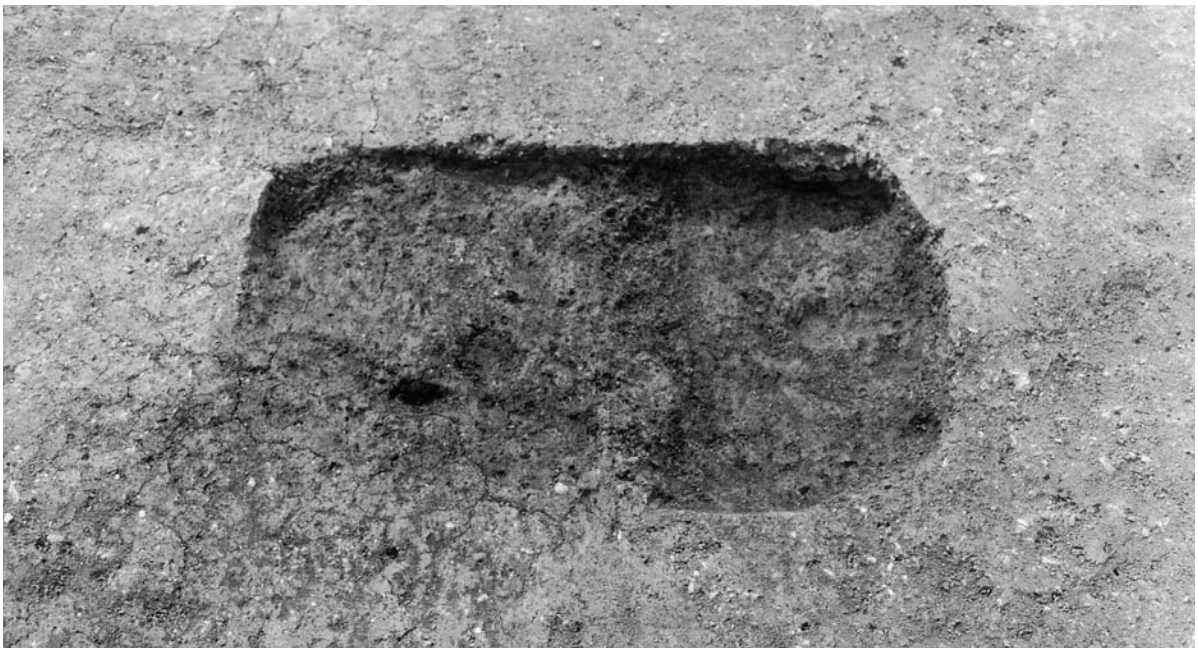


1　SP100鉄滓出土状況

2　SE02礫検出状況（南東より）

1　SE02完掘状況（南東より）

2　SF01全景（北東より）



1　SF02全景
（北東より）

2　SX05全景
（北東より）

1　木樋全景（北東より）

2　木樋接合部全景（南西より）

出土遺物

1　1号製鉄炉　　2・3　SX05　　4～8　SX06　　10・11　包含層

Ⅴ　第27次調査

（調査番号　０１５３）

例　言

1．本書は、九州大学統合移転事業に伴い、事前の発掘調査を実施した福岡市西区大字桑原地区に所在する元岡・桑原遺跡群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査・整理報告に関しては、福岡市土地開発公社と委託契約を締結し、福岡市教育委員会が、2001年に行った元岡・桑原遺跡群第27次調査の報告書である。

3．本書で報告する元岡・桑原遺跡群第27次調査の略号はMOT－27、調査番号0153である。

4．発掘調査で検出した各遺構は、その種類ごとに記号を付し、竪穴住居址をSC、掘立柱建物をSB、溝状遺構をSD、土壙をSK、鉄滓を含むピットをSS、伏焼土壙をSO、ピットをPitと表記した。

5．本書に使用した遺構実測図の作成は、二宮忠司、大庭友子、石橋忠治、吉岡員代、小山不志代が行い、遺物の実測は大庭が行い、一部を上角智希が行った。拓影は牛尾美保子、海内美也子、武田祐子が行った。トレースは大庭が行った。

6．鉄器・玉に関しては、埋蔵文化財センターの比佐陽一郎が分析・原稿・写真を受け持った。

7．本書に使用した写真は、空中写真を㈲空中写真企画に委託し、他は二宮、大庭が行った。

8．本書に使用した座標は国土座標Ⅱ系を使用した。

9．第27次調査の執筆及び編集は、二宮、大庭が行った。

10．第27次調査に関する調査記録・出土遺物類は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。

Fig.1　第27次調査区と周辺遺跡（縮尺1/4,000）

Fig.2　第27次と他の調査区の位置図（縮尺1/2,000）

Fig.3　第27次調査位置図（縮尺1/1,000）

Ⅰ．第27次調査の記録

1．調査概要

調査番号：0153

調査略号：MTO－27

調査期間：平成13年12月１日～平成14年８月29日

調査面積：4,495㎡

調査地点の地番は福岡市西区大字桑原字戸山529外、座標軸　X 66.750Y-71.350を中心として、その周辺4,495㎡が調査対象範囲である。国土地理院発行1/50,000（前原）左上端から右に42.8cm、下に14.9cm、北緯33°35′58″東経130°13′56″に位置する。東側は九州大学移転用地の東側を通る環境道路が南北に通り、北側には桑原飛櫛縄文貝塚が位置する。その間は約250mあり、桑原飛櫛貝塚は北側台地の南側低地に位置し、調査区と桑原飛櫛貝塚間は大きく今津湾の河口となり、本来、大原川の流れが今津湾に流れていたことから、河川敷及び湿地帯と考えられる。東側には経塚古墳・塩除前方後円墳があり、その東対岸には、弥生時代前期の玄武岩石斧の生産地である呑山遺跡がある。

調査地は金屎前方後円墳から派生した東側に延びる台地の北側斜面に位置する。東西に延びる三段の斜面があるが、上方二段は住宅・鶏舎小屋によってほとんどが削平され遺構は残っていない。辛うじて三段目に遺構が認められる。調査対象面積4,495㎡のうち遺構が遺存したのは、三段目の2,200㎡で、一・二段目は養鶏小屋等により著しく削平を受け、基盤の玄武岩バイランド土である赤土が露出していた。

検出された遺構は奈良時代の鍛冶炉４基、伏焼土壙１基、鉄滓が集中的に検出できる固まりがあり、一応遺構と見なしSSの記号を付した５基がある。古墳時代竪穴住居址が25軒、溝状遺構が24条、土壙22基、掘立柱建物が18棟である。この他に多くの溝状遺構が検出されたが、後世の建物、特に鶏舎小屋の痕跡やゴミ穴であった。奈良時代の遺構は、その殆どが削平を受け遺存状態は悪い。古墳時代の遺構は、西側に第20次調査区が位置し、住居址群等の状態は第20次調査の範囲までつづくと考えられ、全体の住居址数は100基を越すものと考えられる。統合移転用地の中で、平坦地と呼べる地点は、ここしかなく、この地に住居址群が100軒以上存在したことが容易に伺える。又、古代において倉庫群が建並ぶ立地として選ばれたこと、川と入り江が近い等の好条件の立地であったことが伺える。

古墳時代竪穴住居址群

25基の竪穴式住居址が検出された。三段目もかなり削平を受け全体的に残りが悪い。ただ部分的に非常に残りがよい部分もある。SC-01は一辺3.6mを測る方形の竪穴式住居址であるが、南面は深さが0.9mと深く本来の形状を保っているものと思われるが、北面は0.2mと残りが悪い。またSC-16は火災によって家を放棄した状態で検出された。柱と共に焼けた粘土が多量に検出され、その状態から屋根の上に粘土を貼り付けたと思われる形跡が観察できる。時期的には切り合い関係もあるが、古墳時代に属するものである。

溝状遺構

台地の傾斜に沿って24条の溝状遺構が検出された。その殆どが削平されている。出土遺物から住居址と同時期であろう。この他多くの溝状遺構が検出されたが後世のものである。

鉄滓分布

９ケ所に鉄滓を包含した土壙が検出された。小型で計が30～80cm前後のものが殆どである。時期的には鉄滓と共伴して土器が出土していることから奈良時代と考えられる。

Fig.4　第27次調査遺構配置図（縮尺1/400）

2．検出遺構

調査区はヤツデ状に広がった台地の先端部に位置し、北側に傾斜する斜面に広がっている。元岡・桑原遺跡群のその殆どが花崗岩バイラン土であるのに対して、第24次、27次調査地区は玄武岩のバイラン土で、糸島半島の東に見られる花崗岩と玄武岩との接合がここでも見られる。そのため土質は赤い粘質を持ついわゆる赤土である。南側の第一面・中間部の第二面は鶏舎があり、このためにその大部分が削平され、遺構は全く残っていなかった。第三面も南側は削平を受けていたが、北側沿辺部はかろうじて残りの良い状態で検出された。

検出された遺構は奈良時代の鍛冶炉４基、伏焼土壙１基、鉄滓が集中的に検出できる土壙があり、一応遺構と見なしSSの記号を付した遺構が５基。古墳時代竪穴住居址が25軒、溝状遺構が24条、土壙22基、掘立柱建物が18棟である。この他に多くの溝状遺構が検出されたが、後世の建物、特に鶏舎小屋の痕跡やゴミ穴であった。

１）住居址

25軒の竪穴式住居址が検出された。三段目もかなり削平を受け全体的に残りが悪い。ただ部分的に非常に残りがよい部分もある。SC-01は一辺3.6mを測る方形の竪穴式住居址であるが、南面は深さが0.9mと深く本来の形状を保っているものと思われるが、北面は0.2mと残りが悪い。またSC-16は火災によって家を放棄した状態で検出された。柱と共に焼けた粘土が多量に検出され、その状態から屋根の上に粘土を貼り付けたと思われる形跡が観察できる。時期的には切り合い関係もあるが、殆ど古墳時代中期に属するものである。

SC-01（Fig.4・5・7・18　PL.1～5）

北東隅から検出した。南北に長軸を持つやや長方形の竪穴住居址である。南側は非常に残りがよいが、北側は削平を受け、又、現代の排水溝により破壊されている。４本柱で、南側の壁高は0.9mと高く本来の高さを維持していると思われる。東西は3.8m、南北4.2m＋αであろう。出土遺物はFig.18の１～13であるが、３・４を除けばほぼ同時期を示し、古墳時代中期である。

SC-02（Fig.4・5・7・18　PL.1～5）

SC-01の西側から検出した。ほぼ正方形の形状を呈する竪穴住居址である。これも南側は残りがよいが、北側は削平を受けている。４本柱で、南側の壁高は44cmで、SC-01と比べると削平を受けている。北側内部に竈をもつ。東西は3.6m、南北3.4mである。出土遺物はFig.18の14～16で、SC-01とほぼ同時期を示す。

SC-03～05（Fig.4・5・7・18・19　PL.1～5）

SC-02の西側から検出した。三軒とも切り合い関係があり、新しい順から02→03→04→05である。02から切られているため全容は定かでないが、三軒とも正方形の形状を呈する竪穴住居址と考えられる。全体的に削平を受け、10cmしか残っていない。東西は3.5～４m、南北3.4～４mであろう。出土遺物はFig.18・19の17～31で、ほぼ同時期を示す。

SC-06～08（Fig.4・5・7・8・19・20　PL.1～5）

SC-05の西側から検出した。三軒とも切り合い関係があり、新しい順から06→08→07である。06は一辺が3.4m、08は５m、07は最も小さな住居址で2.8mの正方形を呈する。06は南側に竈を配し、08は北側に竈を持つが、06によって、一部破壊されている。全体的に削平を受けているが、壁高は40～60cm程残っている。出土遺物はFig.19・20の32～56である。06に古いタイプの土器が混在し、07に新しい須恵器があり切り合い関係とは多少異なる。ただ総合的に切り合い関係と同じであろう。

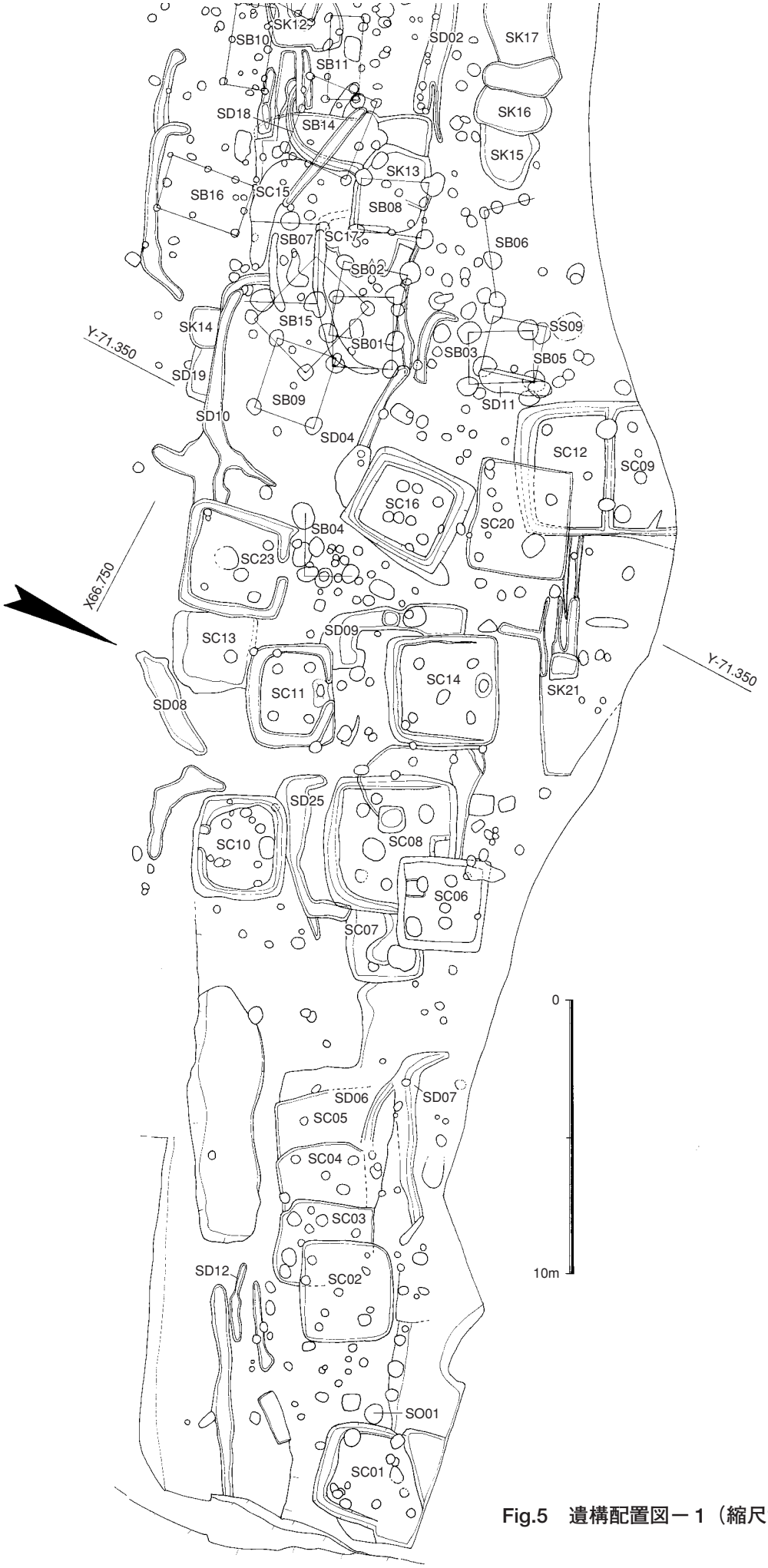


Fig.5　遺構配置図－１（縮尺1/200）

Fig.6　遺構配置図－２（縮尺1/200）

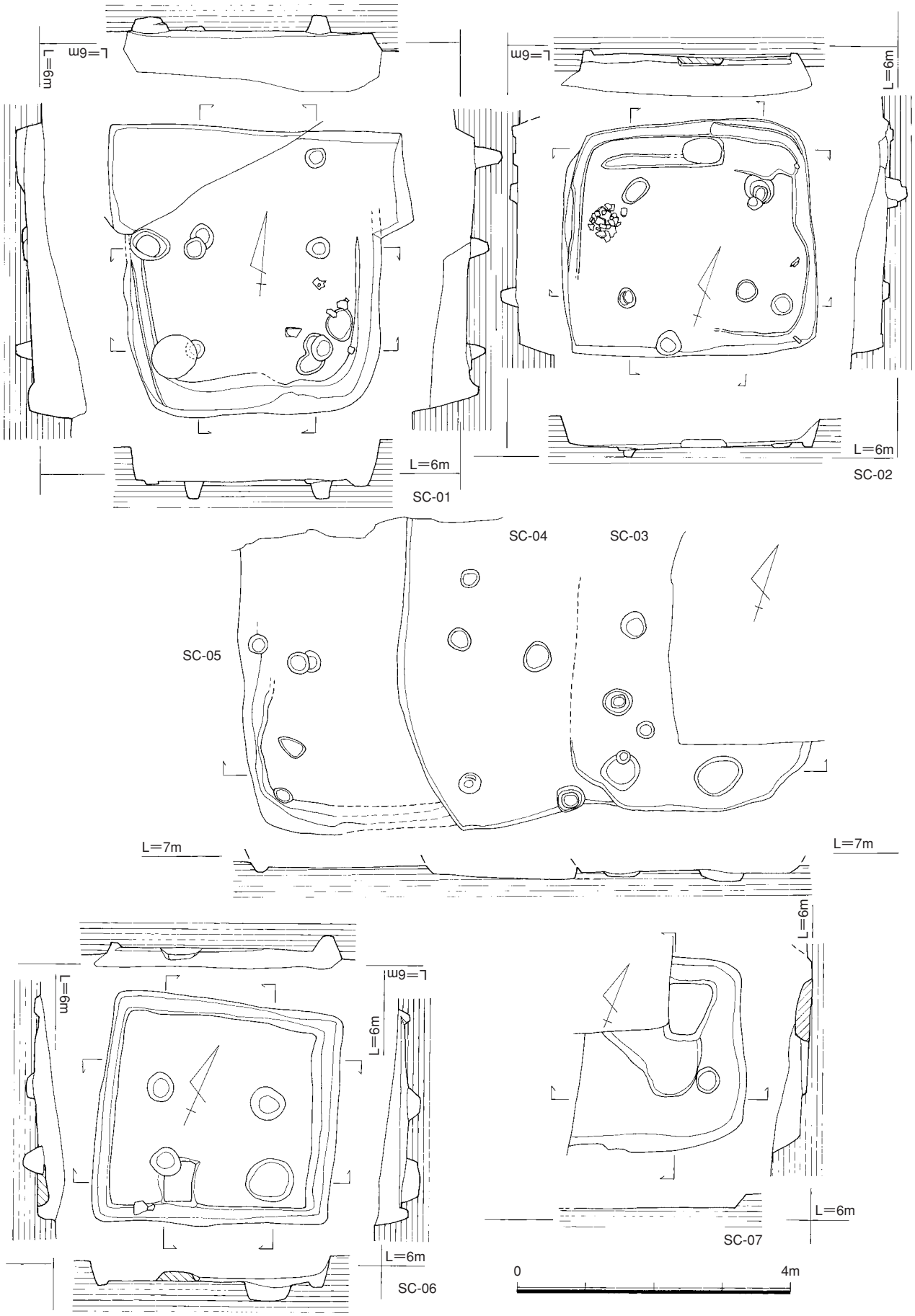


Fig.7　住居址－1（SC-01～07）実測図（縮尺1/80）

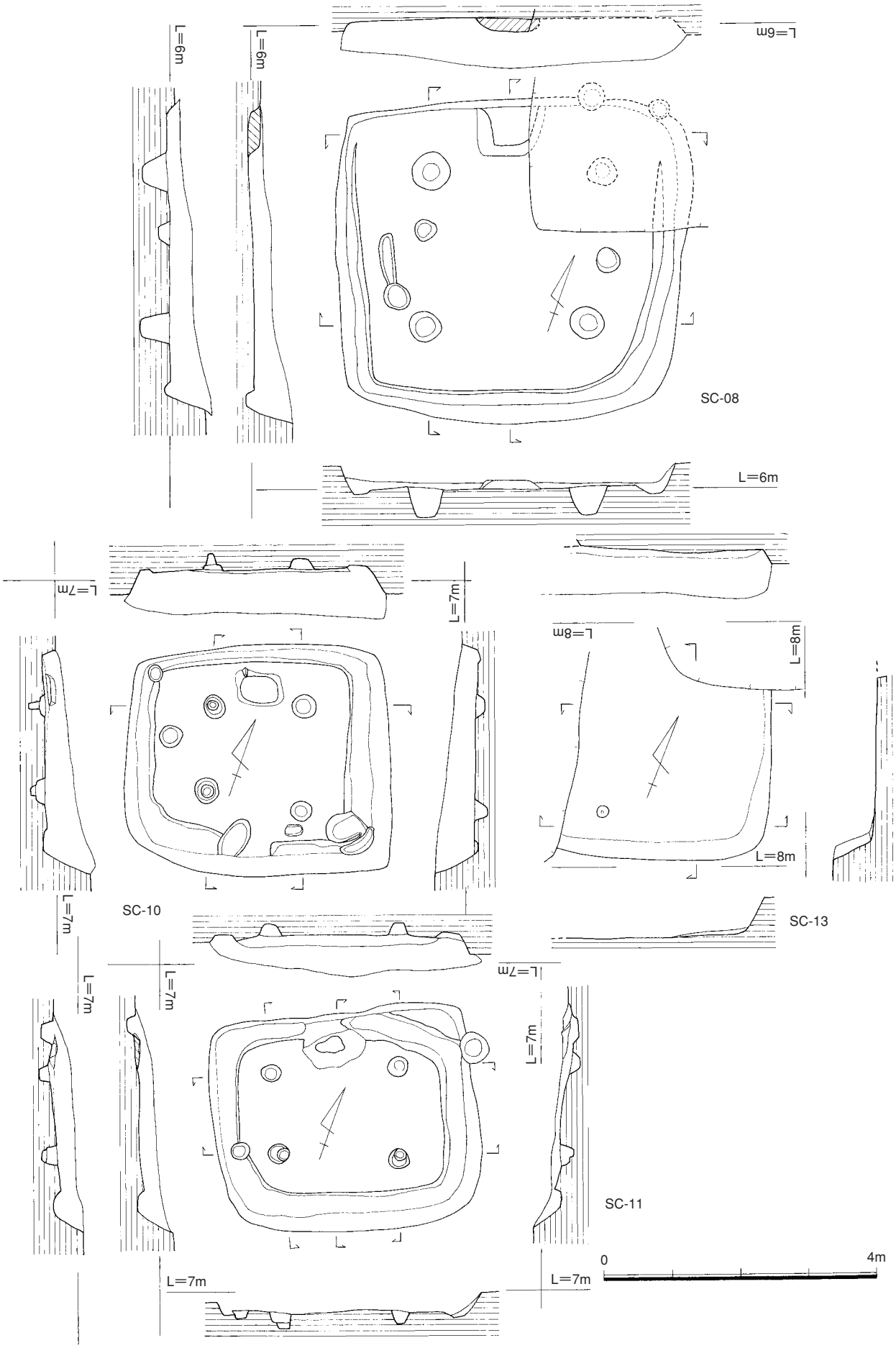


Fig.8　住居址－2（SC-08・10・11・13）実測図（縮尺1/80）

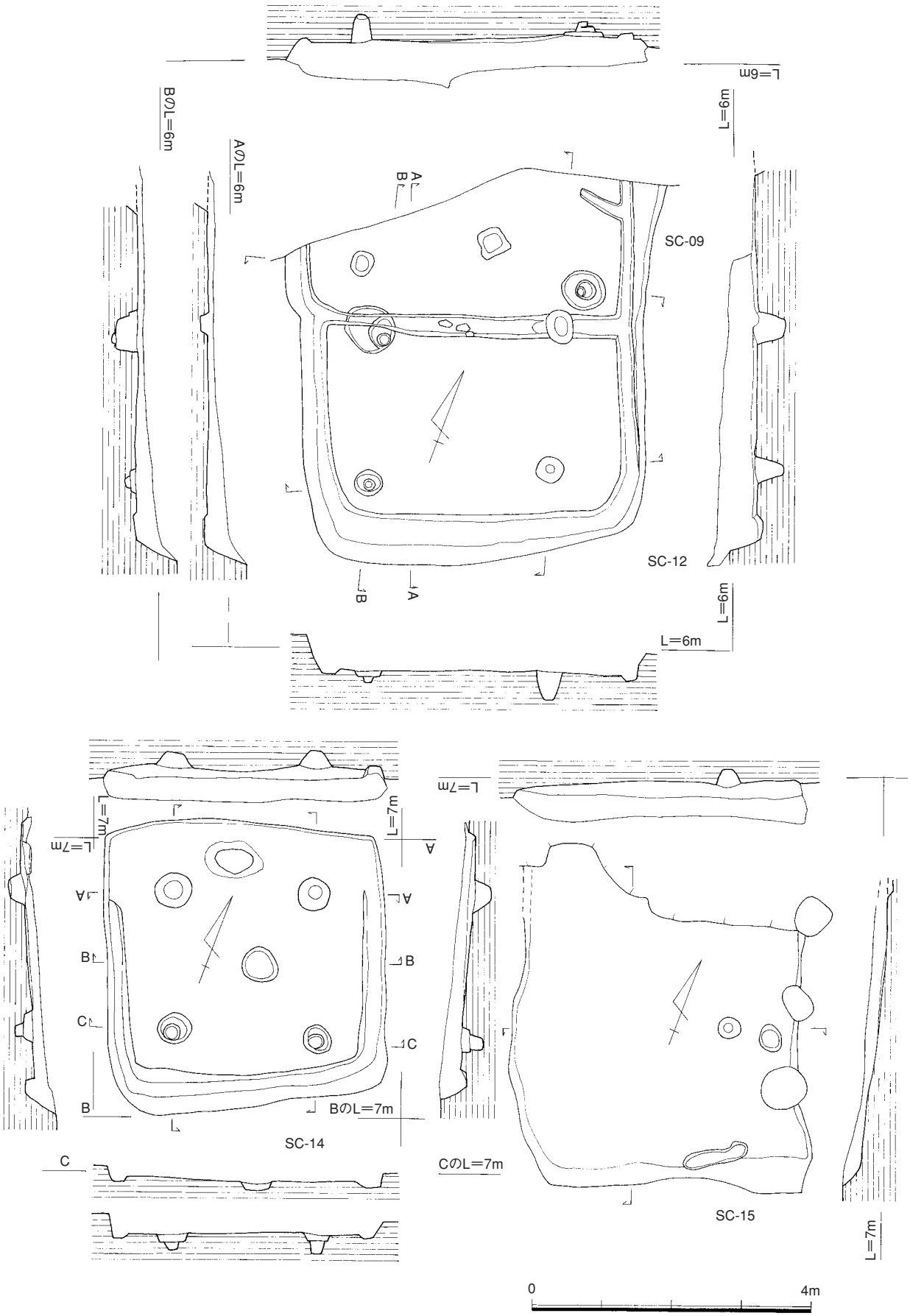


Fig.9　住居址ー3（SC-09・12・14・15）実測図（縮尺1/80）

SC-10・14（Fig.4・5・8・9・20・21　PL.1～5）

SC-10はSC-08の南側に位置し、東西3.9m、南北3.4mのやや長方形の竪穴住居址である。14は08の西側に位置し、東西４m、南北4.2mの正方形を呈する。全体的に削平を受けてはいるが、南側は残りが良く40～80cmに対し北側は10～30cmしか残っていない。両方とも北側に竈を持ち、４本柱である。出土遺物はSC-10がFig.20の57～73、14がFig.21の95～106で、SC-10が古く14が新しい時期を示す。

SC-11・13・23（Fig.4・5・8・12・21・26　PL.1～5）

SC-10の西側から検出した。SC-13は11に北東隅を、23から西壁を切られている。11は東西が４m、南北が3.2mで、北側に竈を配し、４本柱の竪穴住居址、23は一辺４mの正方形を呈し、４本柱で、竈の検出はない。13は定かでないが一辺３mの住居址と考えられ、柱穴の検出はなかった。北側は３軒とも削平を受けているが南側の壁高は60cm程残っている。出土遺物はFig.21の74～80がSC-11、91～94がSC-13、Fig.26の190～197がSC-23である。出土遺物から切り合い関係と異なるが、全体的に見れば13→11→23となり、総合的に切り合い関係と同じである。

SC-16（Fig.4・5・10・22～25　PL.1～12）

SC-14の西側、20の南側から検出した。検出した段階で、焼けた粘土、木材、土器や鉄器等が散在し全面に灰・炭をかぶった状況であった。焼けた粘土は、全面から厚さ10cmで覆われていた。東西が3.5m、南北が４mで４本柱である。遺存状態は良く、南壁で60cm、北壁で30cm残る。図上では粘土の上に土器がのった状態であるが、床面に張り付いた土器も多い。竈は無い。出土遺物はFig.22～25の114～155である。多少古手の土器が混じるが、須恵器・土師器に時期的相違はない。

このSC-16は火災にあったことを物語るもので、そのままの状態で検出された。又、屋根の上に粘土を貼り付け北風を防いだと考えられ、これらは考古学・古代建築学の上で非常に貴重な発見である。

SC-09・12・20（Fig.4・5・9・12・21・25　PL.1～5）

SC-16の北側から検出した。３軒は切り合い関係にある。新しい方から09→12→20である。09は北側を現代用水路で破壊されているが、東西5.2mの方形と考えられる。12は東西が4.9m、南北が5.2mの方形である。４本柱である。20は北西隅をSC-12によって切られている。東西3.6m、南北４mの方形を呈する。壁高は50～60cm程残っているが、北側は削平され20cm程度しか残っていない。出土遺物はFig.21の81～90がSC-12、Fig.25の175～183がSC-20である。SC-09は出土遺物がない。

SC-15・17（Fig.4・5・9・25　PL.1～5）

SC-23の西側から検出した。遺存状態が悪く両方とも壁溝を検出にとどまった。切り合い関係があり、17が15を切る。SC-15が東西４m、南北５m程度の方形を呈する。SC-17は東西３m、南北２m程度であるが、定かではない。出土遺物はFig.25の156～164がSC-17で、SC-15は出土遺物がない。

SC-18・19・21・22（Fig.4・6・11・12・25・26　PL.1～5）

SC-18はSD-01から切られる形で検出した。又、SC-21・22を切る。南側が不規則な形状を呈し、南北に長い。東西４m、南北５mを計る。SC-19はSC-21の北側から検出され、SC-21を切り、SK-10によって切られている。遺存状態は悪い。東西4.4m、南北５mを計る。SC-21・22は遺存状態が悪く、殆どその形状が分からない。出土遺物はFig.25の165～171がSC-18で、SC-19は172～174、SC-21がFig.26の184、22が185～189である。遺物的には混雑しているが、時期的には変わらない。

SC-24・25（Fig.4・6・12・26・30　PL.1～5）

SC-24は西側のSS-02北側から検出した。現代の用水路により北側を削平されている。東西４m、南北4.4mを測る。SC-25はSC-24の西側から検出され、南東隅の一部が検出された。両方とも遺存状態は悪い。出土遺物はFig.26の198がSC-25で、SC-24はFig.30の24である。

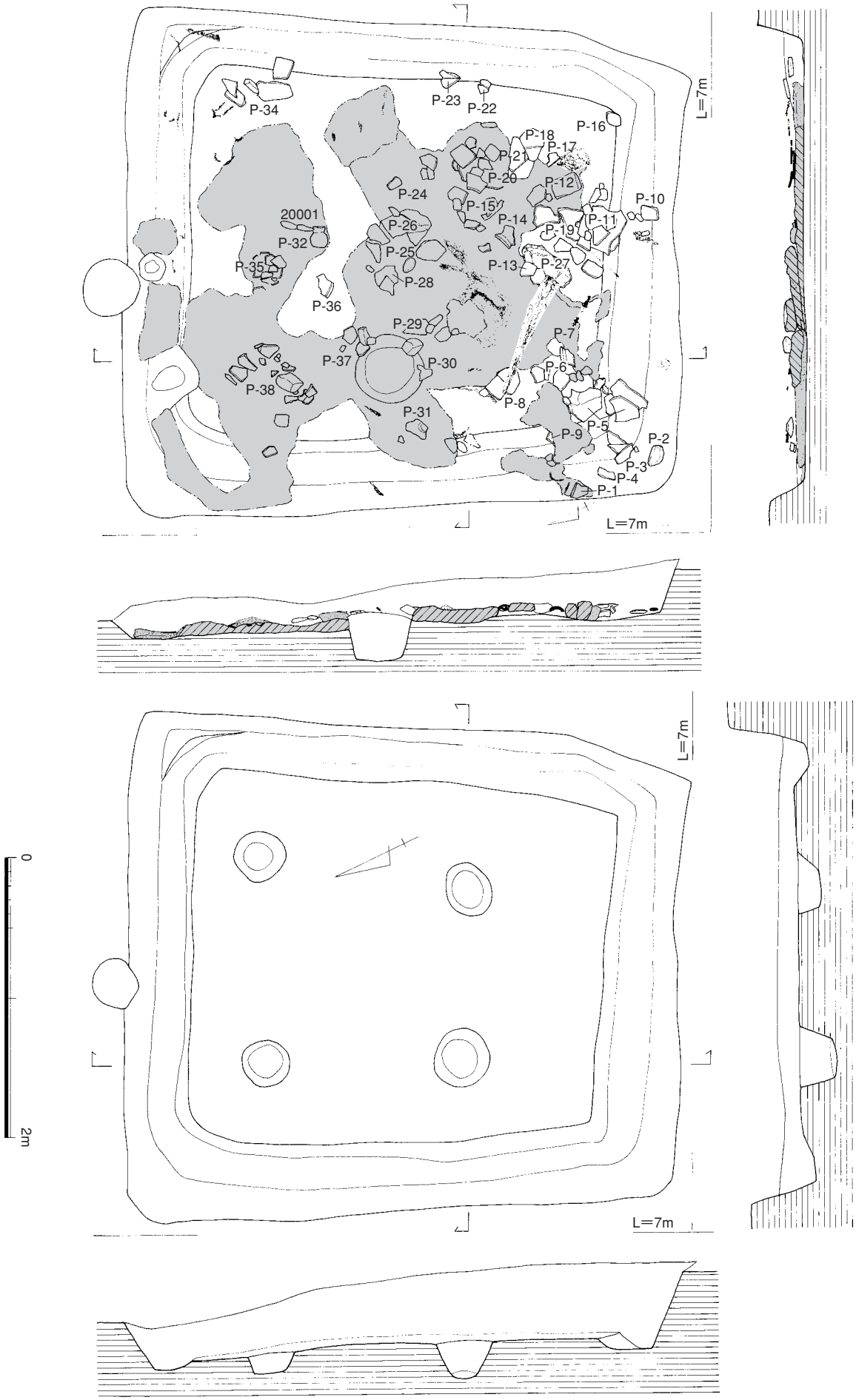


Fig.10　住居址－4（SC-16）実測図（縮尺1/40）※アミ部分は焼土

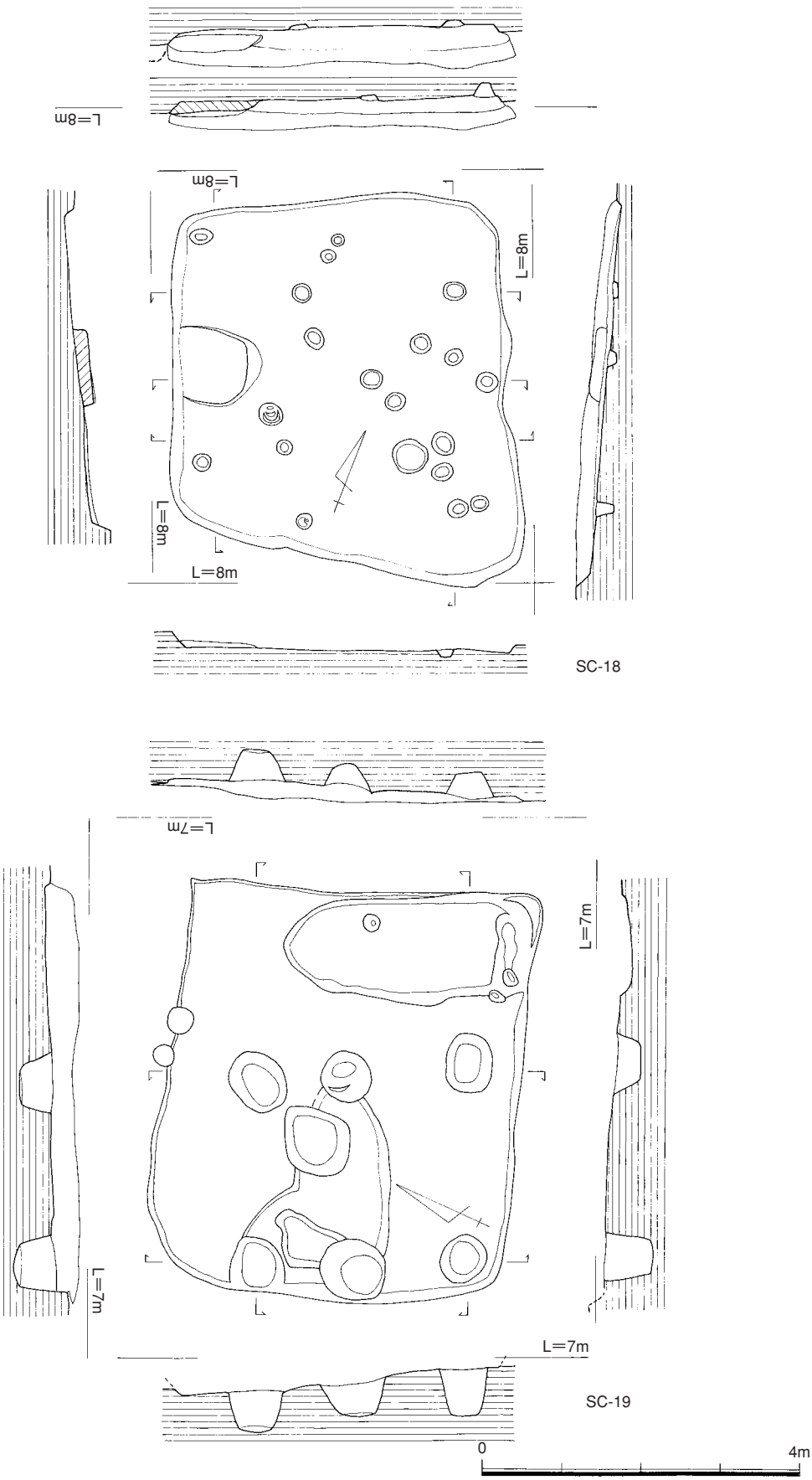


Fig.11　住居址－5（SC-18・19）実測図（縮尺1/80）

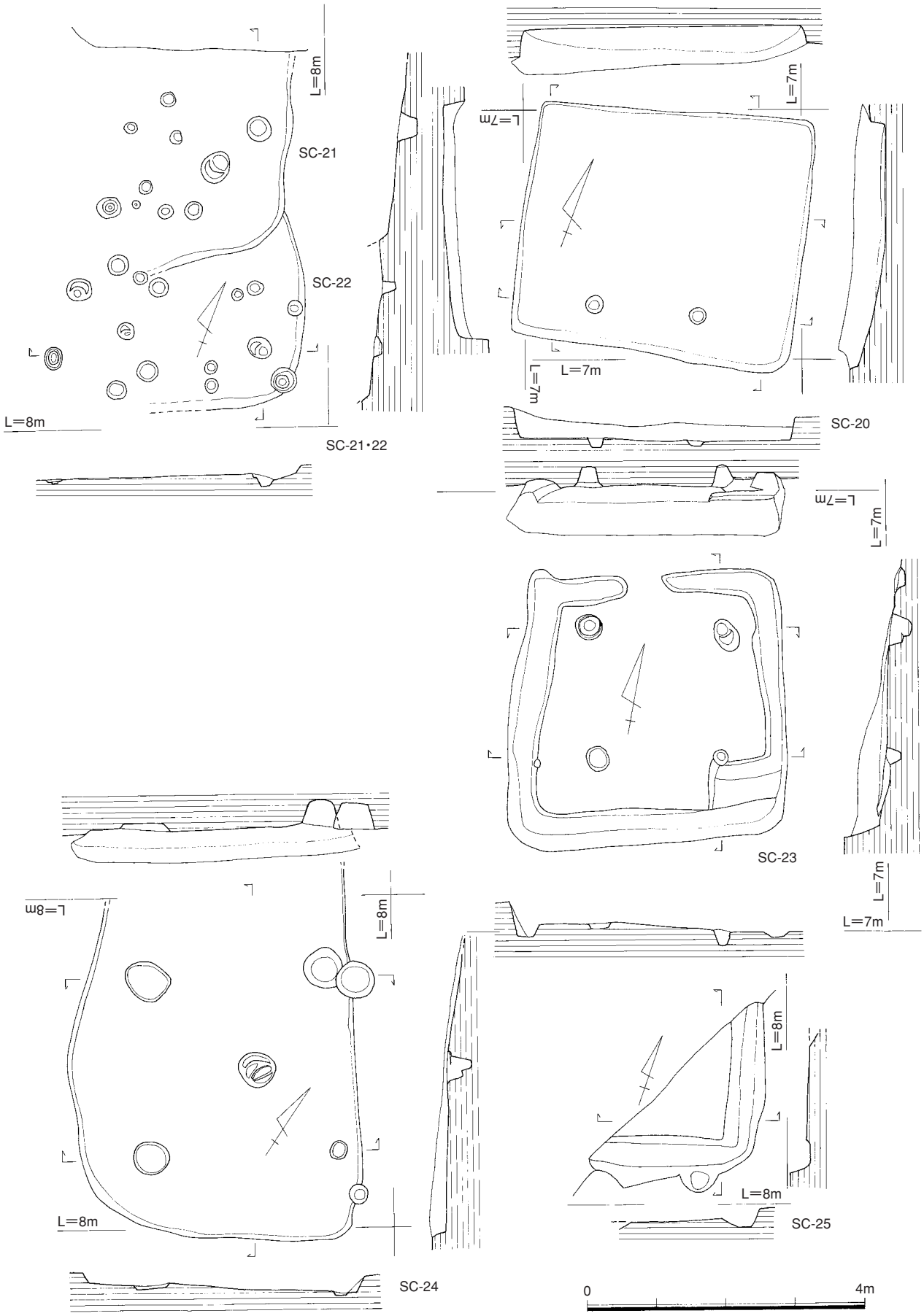


Fig.12　住居址－6（SC-20～25）実測図（縮尺1/80）

2）掘立柱建物

18棟の掘立柱建物が検出された。柱穴はまだたくさんあるが、精査すればもう少し増えるかもしれない。ただ、明治から昭和にかけて耕地整理によって大部分がかなり削平を受けており、特に奈良から平安時代の遺構は上部にあるだけに、かなり削平されたと推察できる。規模的には１×１間が９棟、１×２間が６棟、２×２間が２棟、１×３間で梁行を持つ物が１棟である。時期的には切り合い関係もあるが、古墳時代が殆どで、一部奈良時代の物が含まれる可能性がある。

SB-01（Fig.4・5・13　PL.1～5）

SC-17の東側から検出した。切合い関係はSC-15・17を切り、SB-02・07・09によって切られる。１×１間であるため、竪穴住居址の柱穴の可能性もあるが、竪穴住居の場合、柱間が２mを超えるものは少なく1.8m前後で推移する。梁行2.1m、桁行2.6m。柱穴の大きさは50～80cmで、ほぼ竪穴住居の柱穴と同じである。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、古墳時代中頃と考えられる。

SB-02（Fig.4・5・13　PL.1～5）

SB-01と切合い関係がある。１×１間で、梁行2.4m、桁行2.7m。柱穴の大きさは60～80cmで、揃っている。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、土師器片・須恵器片であることから古墳時代中頃と考えられる。

SB-03（Fig.4・5・13　PL.1～5）

SC-12の西側から検出した。切合い関係はSD-11から切られ、SB-05を切る。１×１間で、竪穴住居址の柱穴の可能性もある。梁行1.8m、桁行2.4m。柱穴の大きさは80cm前後である。

SB-04（Fig.4・5・13　PL.1～5）

SC-23の北側から検出した。切合い関係はない。１×１間で、梁行2.0m、桁行2.3m。柱穴の大きさは70～100cmで、大きい。出土遺物は少量出土しているが、実測に耐えるものはない。

SB-05（Fig.4・5・13　PL.1～5）

切合い関係はSB-03・SD-11によって切られる。１×１間で、梁行1.8m、桁行2.0m。柱穴の大きさは80cm前後で、揃っている。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、土師器片須恵器片であることから古墳時代中頃と考えられる。

SB-06（Fig.4・5・13　PL.1～5）

SB-03の西側から検出した。切合い関係は無い。北側が削平されているため定かでないが、１×２間の可能性が高い。梁行1.6m、桁行3.6m。柱穴の大きさは25～40cmで、今までの建物より小さい。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、古墳時代中頃と考えられる。

SB-07（Fig.4・5・13　PL.1～5）

SB-01の南側から検出した。切合い関係はSC-15・17を切る。１×１間と思われるが、南西隅の柱穴が新しい溝により切られている。梁行2.1m、桁行2.8m。柱穴の大きさは40～80cmである。出土遺物は少量出土しているが、実測に堪えるものはない。

SB-08（Fig.4・5・13　PL.1～5）

SC-17の西側から検出した。切合い関係はSC-17を切り、SK-13によって切られる。１×１間で、梁行2.0m、桁行2.5m。柱穴の大きさは60～80cmで、しっかりしている。出土遺物は少量出土したが、実測に堪えるものはない。古墳時代中頃と考えられる。

SB-09（Fig.4・5・14　PL.1～5）

SD-10の北側から検出した。切り合い関係はSB-01から切られる。１×１間で、梁行2.3m、桁行2.5m。柱穴の大きさは60cmで揃っている。出土遺物はないが、切合いから古墳時代中頃と考えられる。

SB-10（Fig.4・5・14　PL.1～5）

SB-11の南側から検出した。切合い関係はSK-12によって切られる。１×２間で、梁行1.4m、桁行3.0m、1.6＋1.4m。柱穴の大きさは25cm前後と小さい。出土遺物は少量で、実測に堪えるものはない。古墳時代中頃と考えられる。

SB-11（Fig.4・5・14　PL.1～5）

SB-10の北側から検出した。切合い関係はSB-14、SK-12によって切られる。１×２間で、梁行1.4m、桁行3.0m、北側は1.8＋1.2m、南側は１＋１＋１m。柱穴の大きさは30cm前後で、出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、土師器・須恵器片が出土している。古墳時代中頃と考えられる。

SB-12（Fig.4・6・14　PL.1～5）

SD-01の東側から検出した。切合いはSB-13との関係がある。１×２間で、梁行1.0m、桁行2.4mと小型である。柱穴の大きさは20cmと小さい。出土遺物は無い。

SB-13（Fig.4・6・14　PL.1～5）

SD-01の東側から検出した。切合いはSB-12との関係がある。１×２間で、梁行1.3m、桁行1.6mと小さい。柱穴の大きさは20cmで、出土遺物は無い。

SB-14（Fig.4・5・14　PL.1～5）

SB-10の北側から検出した。切合いはSB-11との関係がある。２×２間で、梁行2.6m、桁行3.0m、梁行2.6mは両方とも1.6＋1.0m、南北の桁行３mは両方とも1.3＋1.7mと同じである。柱穴の大きさは20～40cmで、主柱穴が大きく、柱間部は20cmと小さい。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、土師器・須恵器片であることから古墳時代と考えられる。

SB-15（Fig.4・5・14　PL.1～5）

SC-15・17の東側から検出した。切合い関係はSC-15・17を切り、SB-01・02・07・09との関係がある。１×１間であるが、大型である。梁行2.8m、桁行3.4m。柱穴の大きさは60～80cmで、方形の柱穴も見られる。出土遺物は少量出土している。実測に堪えるものはないが、須恵器片であること、切合い関係から古墳時代と考えられる。

SB-16（Fig.4・5・14　PL.1～5）

SC-15の南側から検出した。切合い関係は無い。やや不規則な２×２間で、梁行2.0m、桁行3.2mである。梁行2.0mは、北側か1.2＋0.8mと南側が1.0＋1.0m、東西の桁行3.2mは、両方とも1.6＋1.6mと同じである。柱穴の大きさは30～40cmである。出土遺物は少量出土しているが、図示する物はない。切合い関係はないが、土師器・須恵器片が出土していることから、古墳時代～平安時代と考えられる。

SB-17（Fig.4～6・14　PL.1～5）

SD-01・SB-12・13の東側から検出した。切合い関係はSC-18、SB-18を切り、SK-12によって切られる。1×3間であるが、北側に3間分の妻をもつ。梁行1.6m、桁行6.0m。東西の桁行6.0mは、東から２m＋1.6m＋2.4mである。妻は間隔が50cmで、柱間の距離は２m＋1.6m＋2.4mと桁行間隔と同じである。柱穴の大きさは15～40cmである。削平が著しい部分であることから、梁行が２間及び３間程あった可能性が考えられる。出土遺物は無いが、奈良～平安時代と考えられる。

SB-18（Fig.4・6・14　PL.1～5）

SC-18の東側から検出した。切合い関係はSB-17を切り、SB-17・SK-18によって切られる。１×２間で、梁行1.8m、桁行2.6mを計る。南北の桁行2.6mは、東側は南から1.2m＋1.4mである。西側は南から0.6m＋1.4m＋0.6mである。西側は４本の柱で、中央部は1.4mと広く、両サイドは0.6mの間隔である。柱穴の大きさは25cm前後で、出土遺物は無いが、切合い関係等から奈良～平安時代と考えられる。

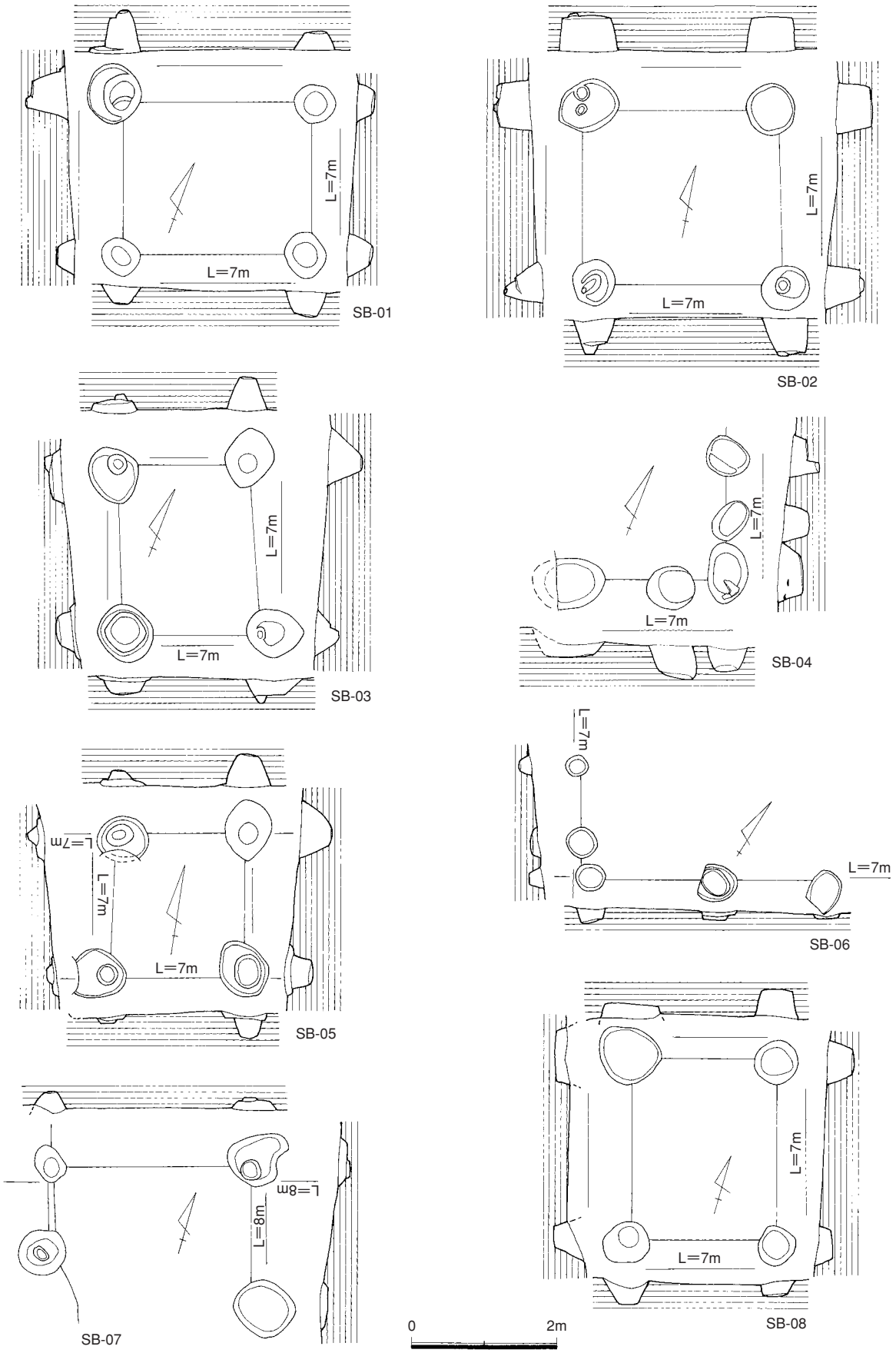


Fig.13　掘立柱建物ー１（SB-01～08）実測図（縮尺1/80）

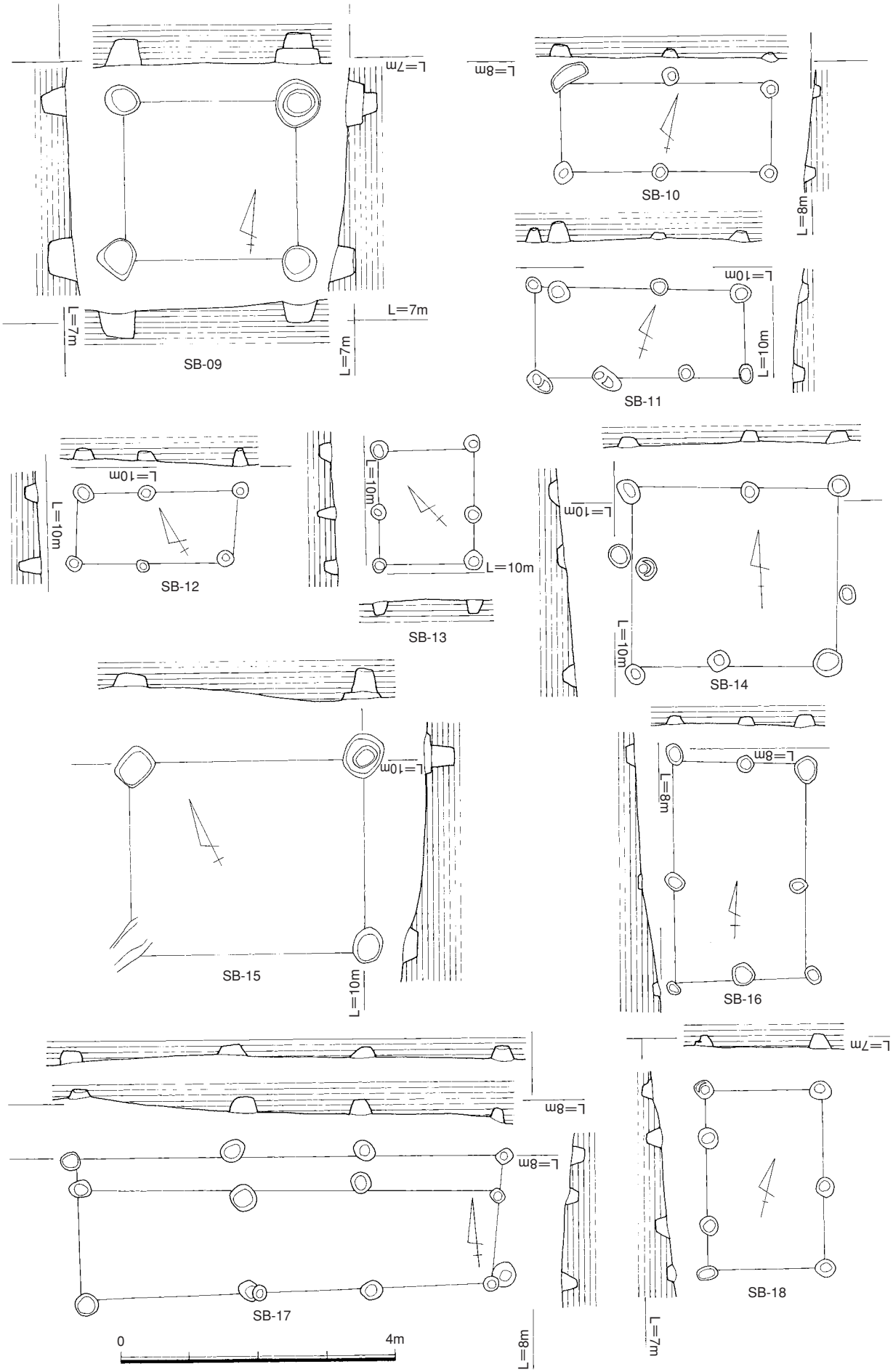


Fig.14　掘立柱建物ー２（SB-09～18）実測図（縮尺1/80）

3）土壙（Fig.4～6・15～17）

伏焼土壙1基・鉄滓を出す土壙9基・土器等を含む用途不明の土壙22基を検出した。この他に意味不明の土壙も数基検出したが、図示していない。

伏焼土壙　SO-01（Fig.15）SC-01の西側から検出した。壁面は赤く焼け、覆土は炭で詰まっていた。出土土器はないが、元岡・桑原遺跡群に数多く検出されるものと同じで、奈良～平安時代のものと考えられる。大きさは74×68×14cmである。

鉄滓を出す土壙　SS-07・08（Fig.15）を図示した。**SS-07**はSC-25の南側SS-08の東側から検出された。不整形な楕円形を呈し、大きさは150×100×15cmである。二段の浅い窪み状に2個の円形の穴を配する。出土遺物は鉄滓のみである。**SS-08**はSC-25の南側SS-04に接するように検出された。不整形な楕円形を呈し、大きさは90×75×15cmである。上面に鉄滓が分布し、二段の浅い窪み状を呈する。土師器片が出土している。奈良～平安時代のものである。この他に鍛冶炉と思われるSS-03・05・09がある。

用途不明の土壙をSK（Fig.15～17）とした（SK-06は欠番）。代表的なものを記載する。**SK-01**はSC-19の西側に接する様に検出した。不整形を呈し、大きさは430×200×30cmである。二段の浅い窪み状を呈し、3個の円形の穴を配する。**SK-04～07**（PL.3・12）は調査区の西側から検出した。04は円形を呈し、大きさは90×90×55cmである。SK-05～07は窯の可能性が考えられたが、階段状の施設や焚き口部分が見つからないことと壁面がまったく焼けていないことから不明土壙とした。すべてに土器が出土しており、時期も奈良～平安時代のものである。05の大きさは190×100×110cm、07は430×470＋α×125cmである。**SK-08～10・19・20**はSC-18・19を切る形で検出した。全体的に残りが悪く、その中でも土器が出土しており、時期も奈良～平安時代のものである。08の大きさは180×265×25cm、09は520×250×15cm、10は320×130×20cm、19は165×170×15cm、20は145×145×25cm。**SK-12**はSB-17を切る形で検出した。削平が著しく、二段の浅い窪み状を呈している。全体的に残りが悪い。12の大きさは260×260×35cm。形状は方形を呈す。**SK-13**はSB-08を切る形で検出した。削平が著しく、浅い窪み状を呈している。全体的に残りが悪い。13の大きさは320×280×10cm。形状は方形を呈す。**SK-15～17**はSD-02の北側から並んで検出した。15は削平を受けており、全体的に残りが悪い。15の大きさは270×210×30cm、16は300×300×30cm、17は250×410×30cm。

SK-21はSC-20の東側にある壁溝状の溝の東から検出した。この溝が住居址の溝である可能性が高いが、そうなると柱穴と考えた方が良い。方形を呈し、大きさは115×80×30cmである。須恵器と土師器が出土している。**SK-22**はSC-25の南側、SS-01の西側から検出された。楕円形の形状を呈し、大きさは105×100×25cmである。上面に鉄滓が広く分布しており、浅い窪み状に二段の掘込みがある。出土遺物は鉄滓のみである。

4）溝状遺構（Fig.4～6・17）

溝状遺構は約35条ほど検出したが、出土遺物のないもの、時期的に新しいものには番号は付していない。番号を付したのは25条である。その内、8条を図示した。**SD-04・10・25**は竪穴住居址の壁溝と思われ、この他に**06・07・08・18・19**も壁溝であろう。又、遺物が出土しなかったため番号は付していないが、壁溝と思われるもの、例えばSB-16の南側、SB-03の南側、SK-21の西側等がある。

SD-01はSC-18を切る形でSB-13の西側に南北方向に長く検出された。120×770×15cmを測る。北側は削平されたものと考えられる。**SD-02**はSK-13の西側からSK-09までの間に東西方向にある。850×80×5cmを測る。**SD-09**はSC-11の北西側からSC-14の西側方向にある。壁溝とも考えられる。110×700×30cmを測る。**SD-13**はSD-15の西側から南北方向に検出された。630×170×10cmを測る。

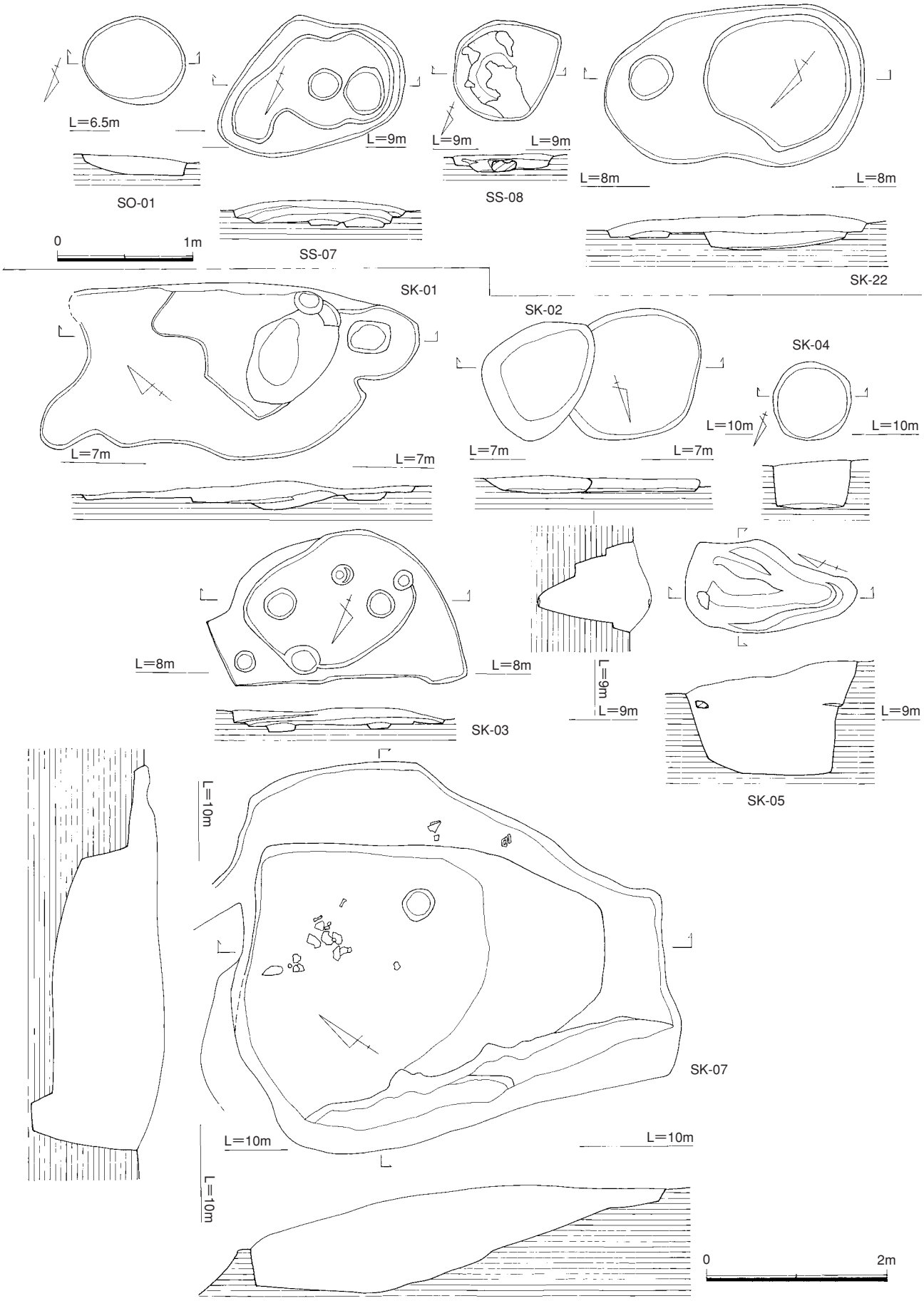


Fig.15　土壙状遺構ー1（SO-1,SS-7・8,SK-01～5・7・22）実測図（縮尺1/40・1/60）

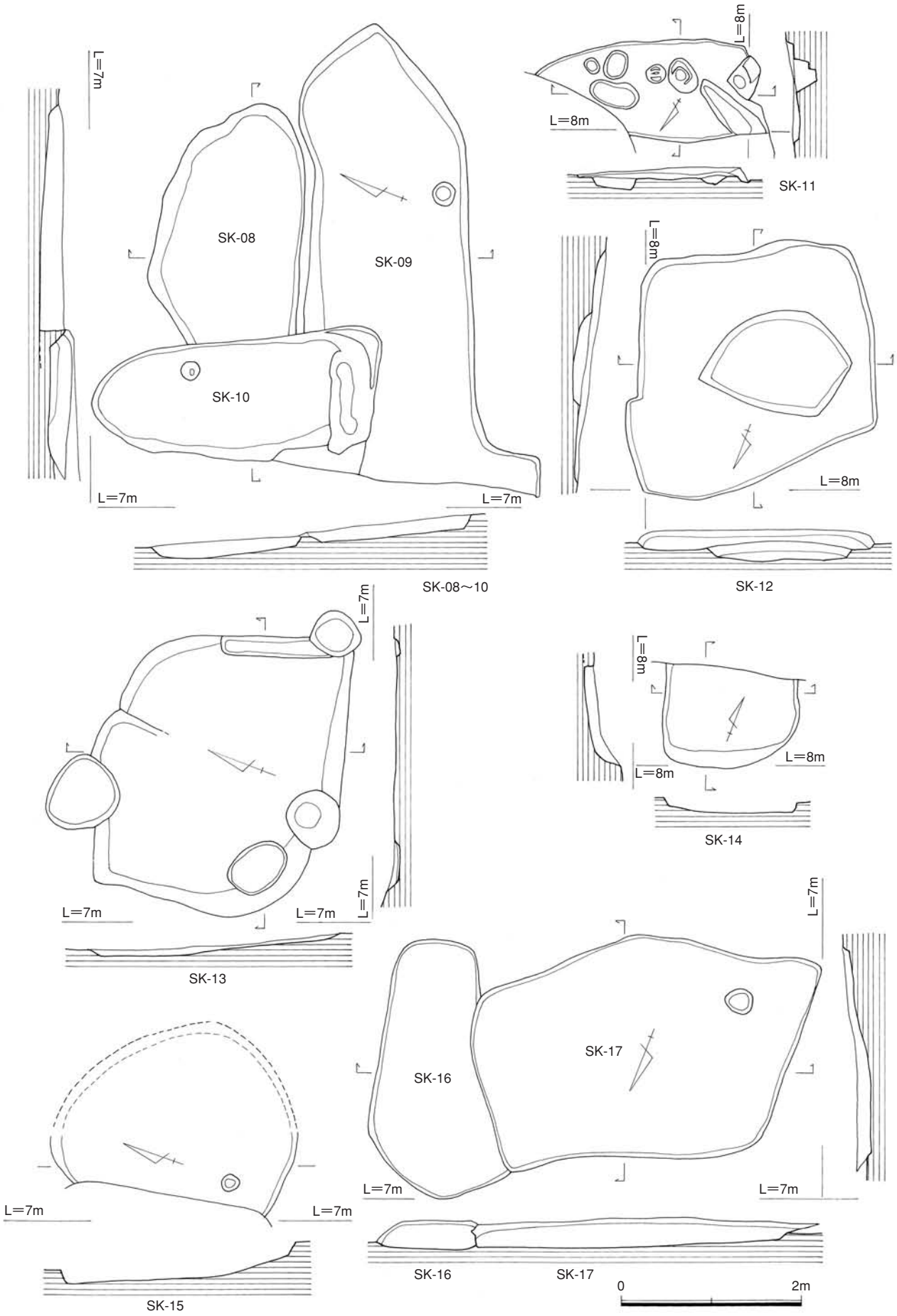


Fig.16　土壙状遺構ー２（SK-08～17）実測図（縮尺1/60）

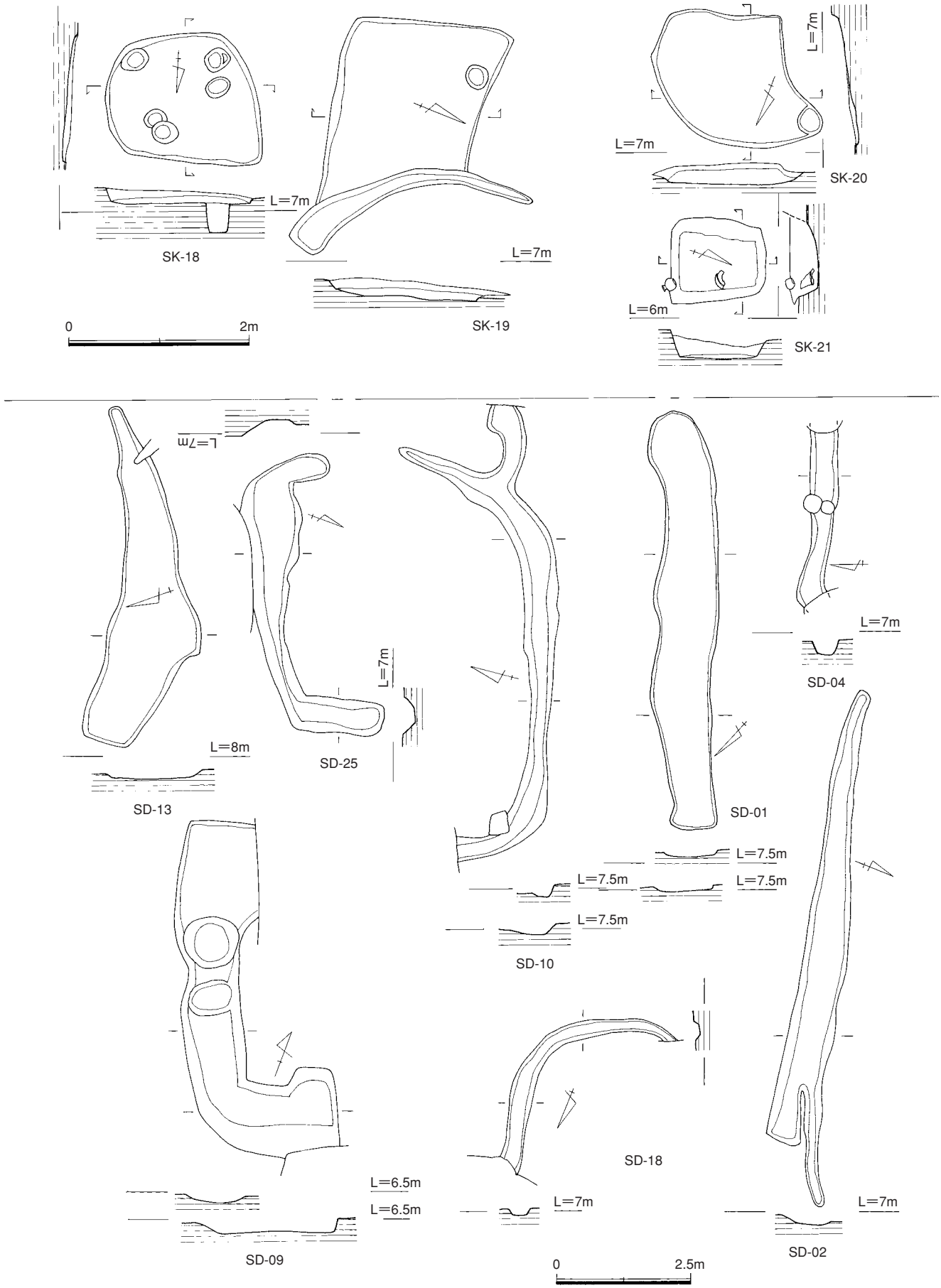


Fig.17　土壙状・溝状遺構（SK-18～21・SD-01・02・04・09・10・13・18・25）実測図（縮尺1/60・1/100）

3．出土遺物

遺構内からと包含層内から土器・石器・陶磁器・鉄器・鉄滓等が出土した。遺物から後期旧石器時代のナイフ形石器、台形石器、細石核等が出土している。元岡・桑原遺跡群には包含層及び遺構検出として、第３次調査地点があるが、他からは明確な遺構及び包含層の検出はない。27次調査でも遺構検出時からの出土である。縄文時代の遺物として、後期の粗製深鉢（SC-11、Fig.21-74）の破片や石鏃等が出土しているが、これは対岸の桑原飛櫛貝塚の時期と符合する。弥生時代の土器・石器も出土している。しかしながら、この周辺部には弥生時代の遺構は検出されていない。古墳時代、奈良時代に周辺部が開発されたために遺構が消滅した可能性が高い。この27次調査地点も現代において著しく削平されている。このため、深い遺構だけが残り、浅い遺構は削平されている。このため奈良から平安時代の遺構は殆どが削平されたと考えられる。遺構別に住居址から記載していく。

１）住居址内土器（Fig.18～26　PL.14～17）

SC-01出土土器（Fig.18　1～13　PL.15・16）

3・**4**は弥生時代遺物であるが、後は古墳時代の遺物である。**1**は小型丸底壷で、内外面とも赤褐色を呈し、調整方法はナデ仕上げで、丁寧な造りである。口径10.8cmを測る。**2**は口縁部が直立する甕形土器片である。調整方法は器面が荒れているため定かでない。内面は暗黒褐色を呈し、煤が付着している。**3**は弥生後期甕形土器口縁部である。**4**は同じく甕形土器底部で、平底を呈し、端部が丸みを持つ。**5**は土師器の高坏片で内外面とも赤褐色を呈する。**6**～**12**は須恵器の坏蓋・身である。坏身の口径は12～13cmとほぼ揃っている。口縁受身は0.9～1.5cmと幅がある。又、立上りが鋭角なのは10・12で、このタイプが最も古い。**6**は坏蓋で口径15.4cmと最も大きい。**7**は口径15.0cm、**8**の口径は14.2cm、器高4.8cm、表面に煤が付着している。**9**は坏身で口径12.4cm、器高4.0cm、受部径が14.7cm、受部高が0.9cm。**10**は坏身で口径12.6cm、器高4.6cm、受部径が15.0cm、受部高が1.3cmを測る。生焼けに近い白灰色を呈す。**11**は口縁部が僅かに欠損する坏身で、口径12.8cm、器高3.7cm、受部径が15.2cm、受部高が1.0cm。SC-05の破片と接合する。床面に近い状態で出土したSC-01の方に図示した。**12**は口径12.8cm、器高4.2cm、受部径が14.6cm、受部高が1.5cmを測る坏身である。**13**は生焼けの須恵器高坏片である。底径10.4cmを測る。床面出土の8～12の内、9・11が放棄時期と考えて良い。古墳時代中期である。

SC-02出土土器（Fig.18　14～16　PL.15・17）

14～16が出土した。すべて床面出土の遺物で、**14**は土師器の両耳甕形土器である。「くの字」状口縁に耳を付着させたものであるが、非常に珍しい。内面調整は削り、外面はナデ仕上げである。口径12cmを測り、内面に煤が付着している。**15**は甑の把手である。**16**は口径13.9cm、器高4.8cmの須恵器の坏蓋である。これらの土器から古墳時代中期と考えられる。

SC-03出土土器（Fig.18　26）

SC-03は26の甕形土器1点だけの出土である。**26**はSC-02と03から出土した破片が接合したもので、大半は03からの出土である。ほぼ直立した口縁が、口唇部で外反するタイプで、最大径は26cmと胴部下位にある。底部は丸底であるが、僅かに平坦面も有する。表面剥落で調整方法がわかりにくいが、胴部中位・底部に刷毛目を施している。内面はナデ仕上げである。口径18cm、器高35cmを測る。

SC-04出土土器（Fig.18　17～25）

SC-04からは、17～25が出土した。**17**は「くの字」状口縁を持つ土師器片で、口径15.6cmを測る。**18**は甑の把手、**19**は土師器椀の破片で、胴部には刷毛目を施すが、僅かに赤色顔料が認められる。

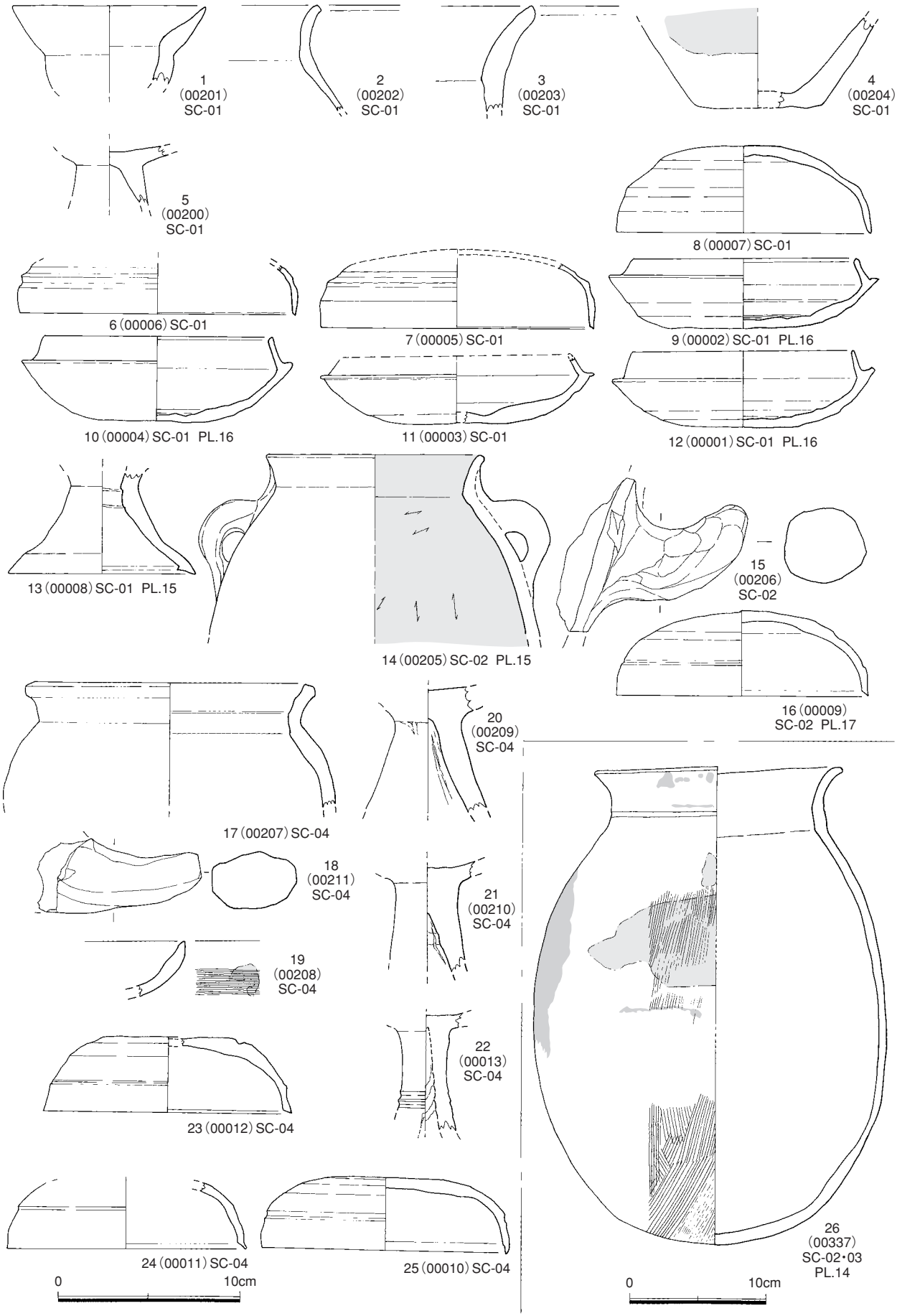


Fig.18　住居址内出土土器－1（SC-01・02・04）実測図（縮尺1/3・1/4） ※アミ部分は黒斑

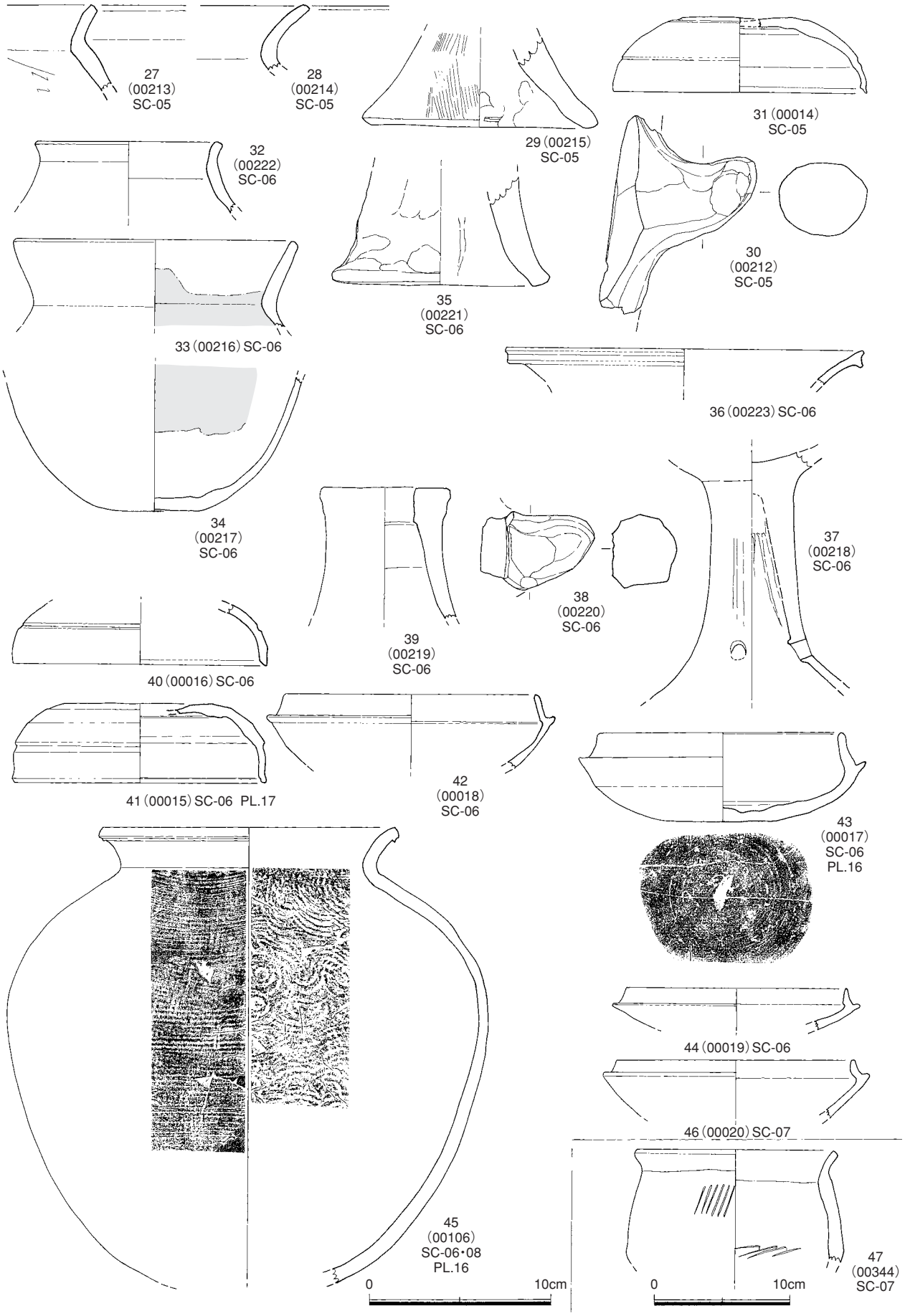


Fig.19　住居址内出土土器ー２（SC-05～07）実測図（縮尺1/3・1/4）

20～**22**は土師器の高坏脚部である。**23**～**25**は須恵器の坏蓋である。**23**は口径13.8cm、器高4.2cm、**24**は口径13.4cm、**25**は口径13.8cm、器高4.0cmの坏蓋で、23とほぼ同じである。古墳時代中期である。

SC-05出土土器（Fig.19　27～31）

27～31が出土した。**27**は「くの字」状口縁を呈する土師器片である。内面は淡褐色を呈し、煤が付着している。内面胴部はヘラ削りで、整形している。**28**は「Cの字」状を呈する土師器片である。**29**は弥生時代後期の支脚片である。外面は縦刷毛目を施し、内面は指押さえを施す。底径13.2cmを測る。**30**は土師器の甑の把手である。**31**は口径14.2cm、器高4.2cmの須恵器の坏蓋である。天井部が平坦面を有し、轆轤回転は逆時計回りで天井部まで達する。口縁端部は精巧な造りである。SC-02から05は切り合い関係がある。調査時点では、古い順から05→04→03→02であるが、遺物的には明確な差異は認められない。これらの土器から古墳時代中期と考えられるが、4軒の住居址の時間的差異は認められない。

SC-06出土土器（Fig.19　32～45　PL.17）

SC-06から32～44が出土した。**32**は口縁が直立するタイプの壷形土器の土師器片である。内面は淡黒褐色、外面は赤褐色を呈する。内外面調整はナデ仕上げである。口径10.4cmを測る。**33**は「くの字」状を呈する甕形土器片である。内面は暗褐色を呈し、胴部下に煤が付着している。煮炊きを思わせる付着物がある。外面は赤褐色を呈する。内外面調整はナデ仕上げである。口径15.4cmを測る。**34**は33と同一個体と考えられる甕形土器の底部片である。丸みが強い平底である。底径5.2cm。33と同様に内面は暗褐色を呈し、煮炊きを思わせる付着物がある。外面は赤褐色を呈する。内外面調整はナデ仕上げである。**35**・**39**は弥生時代の支脚である。**35**は脚裾で、内外面とも指押さえとナデ仕上げである。裾径が12cmで、明褐色を呈する。**39**は受部が平坦で、中穴がある。径は7.0cm、中穴径は3.0cmである。

36は高坏の口縁部片である。精製された粘土を使用しており、丁寧な造りである。内外面ともナデ仕上げで、明淡褐色を呈する。口径20.2cmを測る。**37**は高坏の脚部である。円形の透かしを3個配する。表面が剥落しているため、調整は不明。明赤褐色を呈する。**38**は甑の把手である。**40**は須恵器の坏蓋である。口径14.2cm。**41**は坏蓋で口径14cm、器高4.3cm、轆轤回転は逆時計回りで、淡白灰色を呈する。**42**は坏身の破片で口径14cm、受部径が16cm、受部高が1.2cmを測る。生焼け状態で、白灰色を呈する。**43**は坏身の完形品で口径13.4cm、器高5cm、受部径が16.0cm、受部高が1.4cmと高い。生焼けに近い白灰色を呈する。底面外部に一条のヘラ記号を配する。**44**は坏身の破片で、口径12.2cm、受部径が13.8cm、受部高が0.9cmを測る。色調は淡白灰色である。**45**はSC-06・08から出土したものが接合したもので、一応SC-06の中にいれた。「くの字」口縁を持つ器高推定27cm程度の須恵器の甕形土器で、内面は同心円紋のタタキ、外面はタタキの後カキ目を施している。色調は内面が淡暗黒色、外面が暗黒色を呈する。口径16.4cmを測る。これらの土器から古墳時代中期と考えられる。

SC-07出土土器（Fig.19　46・47）

SC-07からは２点出土した。**46**は須恵器の坏身の破片で、赤焼土器に近い。口径13.2cm、受部径が14.8cm、受部高が0.6cmを測る。色調は暗褐色である。**47**は口径14.6cmの土師器の甕形土器である。「くの字」口縁を呈し、外面にタタキを施し、内面に篦削りを施している。内外面とも暗褐色を呈する。

SC-08出土土器（Fig.20　48～56　PL.15～17）

48は緩やかな「くの字」口縁で、内面調整は指押さえとナデ仕上げ、外面は横ナデ仕上げである。口径16.8cmを測り、内面は暗褐色、外面は明赤褐色を呈する甕形土器である。**49**は口縁端部が大きく外反する「Cタイプ」の壷形土器で、口径12.8cmを測り、色調は内外面とも暗褐色を呈する。器面調整は外面が刷毛目、内面が篦削りとナデを施す。**50**は口縁が「直立するタイプ」の甕形土器片である。口径13.8cmを測る。内外面ともナデ仕上げ、赤褐色を呈する。**52**は高坏の脚部で、受け部と

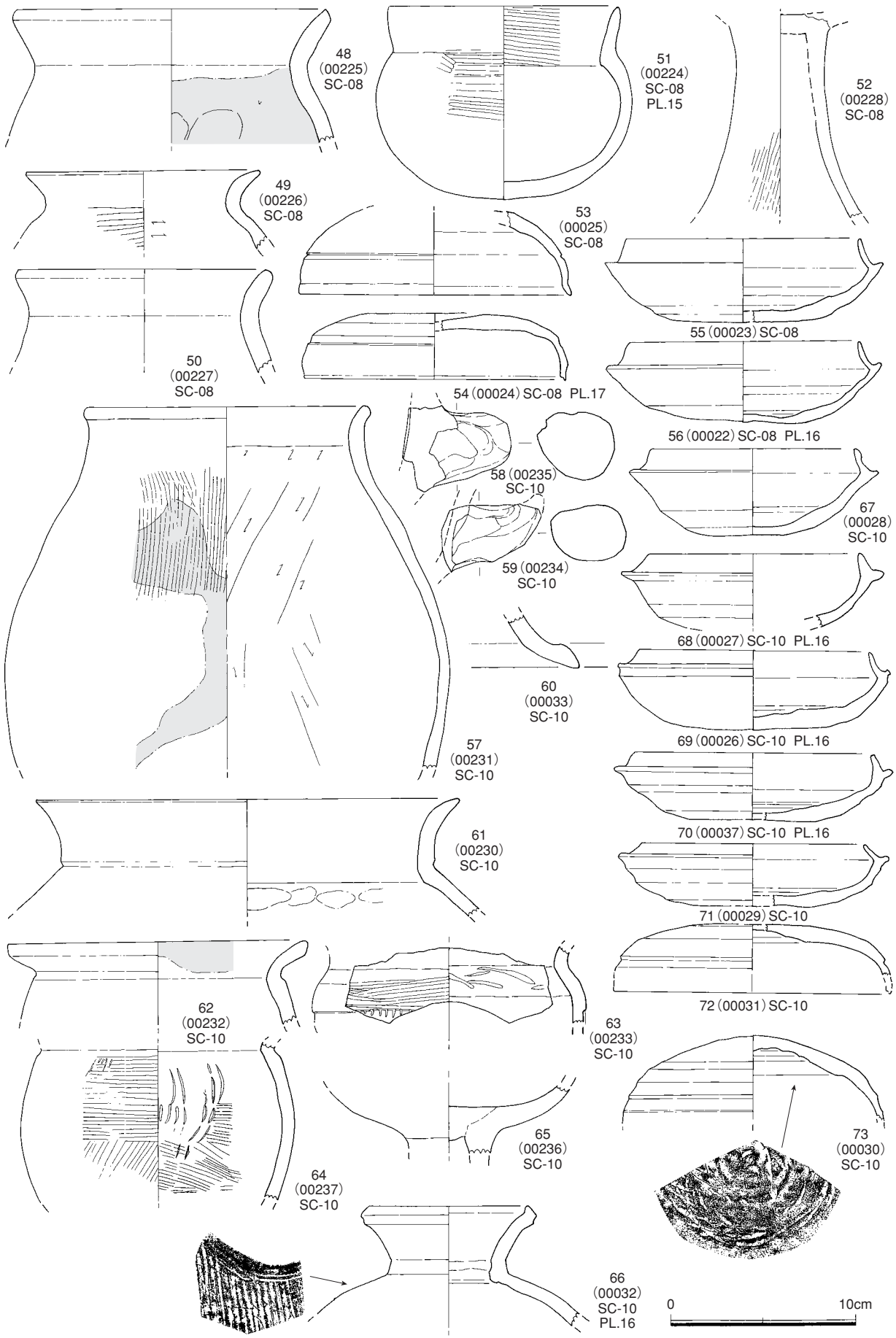


Fig.20　住居址内出土土器－３（SC-08・10）実測図（縮尺1/3）

脚裾を欠損する。これら4点は弥生後期末の時期である。**51**は口縁が直立するタイプの土師器の壷形土器である。器面の上部には内外面とも刷毛目を施し、下面はナデ仕上げである。色調は内外面とも赤褐色を呈し、口径12.6cm、器高10.6cmを測る。53～56は須恵器の坏蓋・身である。**53**は坏蓋で口縁端部か外反する特徴を持ち、口径14.8cm。色調は灰色で、焼成は良好である。**54**も坏蓋で口径14.2cm、器高3.5cm、内外面とも黒灰色を呈する。**55**は坏身で口径12.6cm、受部径15.2cm、受部高1.3cm、器高4.6cmを測る。**56**も坏身で口径12.6cm、受部径15cm、受部高1.2cm、器高4.4cmと55とほぼ同じである。55は灰色を呈し、焼成は良好であるが、56はやや軟弱で淡灰色を呈する。SC-08は須恵器と土師器の時期と考えてよい。

SC-06～08には切り合い関係がある。調査時の判断は古い順から07→08→06である。遺物を見ると08→07→06で、07は遺物が少ないことから判断は難しいが、ほぼ調査時の判断で良いと考えられる。SC-09から土器は出土しなかった。

SC-10出土土器（Fig.20　57～73　PL.16）

57～73が出土した。**57**は口縁直立し端部が僅かに外反すし、最大径が胴部下位にある弥生後期の甕形土器である。内面調整は篦削り、表面は篦ナデ、縦刷毛目を施す。口径15cmを測る。**58**・**59**は甑の把手である。**60**は須恵器の高坏の脚部。**61**は口縁が直立し、端部が外反する壷形土器で内面は指押さえとナデ、外面はナデ仕上げである。口径23cmを測る。**62**は頸部から大きく外反する口縁部で、「Cの字」状を呈するタイプの部類である。口径16.4cmを測る甕形土器。63・64は胴部片であるが、**63**は壷形土器、**64**は甕形土器である。両方とも内外面の調整はタタキを施している。**65**は高坏の受部片である。**66**は直立した口縁が端部で内に入る「嘴状」を呈する須恵器の壷型土器である。外面胴部は縦方向のタタキを施している。内面はナデと篦押さえを施す。口径8.6cmである。67～73は須恵器の坏蓋・身である。**67**は口径11.0cm、受部径13.6cm、器高4.6cm、受部高が1.2cmの坏身。**68**は一部に自然釉が掛かる口径11.6cm、受部径14.2cm、受部高1.0cmの坏身。**69**は床面出土の完形品で、受部「コの字状」を呈する坏身。口径12.6cm、受部径14.8cm、器高4.3cm、受部高が0.8cmを測る。色調は灰色で、焼成は良好である。**70**はやや焼成が悪い灰色を呈し、口径13.0cm、受部径15.2cm、器高3.6cm、受部高が0.8cmの坏身。**71**は一部に自然釉が掛かる灰色の色調を呈し、焼成は良好である。口径12.2cm、受部径14.6cm、器高3.4cm、受部高0.6cmの坏身。**72**は坏蓋で一部に自然釉が掛かる。推定口径は15cm、器高3.6cmを測る。**73**も表面に自然釉が掛かる白灰色で、焼成は良好。内面に同心円紋の工具を当てた痕跡を残す坏蓋である。これらの須恵器から古墳時代中期と考えられる。

SC-11出土土器（Fig.21　74～80　PL.14）

74～80が出土した。**74**は縄文時代後期の粗製深鉢の口縁部で外面に貝殻条痕を施す。調査地点から約350mの対岸に桑原飛櫛貝塚が有ることから、こちらにも遺跡が有った可能性もある。内面は煤が付着している。外面は暗黒褐色を呈する。**75**は口縁が直立するタイプで、内外面とも淡明褐色を呈する土師器片である。**76**は「くの字」状口縁を呈する土師器片で、内外面とも煤が付着している。色調は明褐色。**77**は弥生時代の甕形土器の蓋である。**78**は口径14.8cm、器高3.8cmの須恵器の坏蓋である。外面に自然釉が掛かり、轆轤回転は時計回り。**79**は轆轤回転が時計回りの坏蓋破片で、色調は灰色を呈す。**80**は生焼け状態の須恵器の坏身である。色調は淡灰色を呈する。口径12.6cm、受部径14.8cm、器高3.3cm、受部高が0.8cmを測る。須恵器から古墳時代中期末と考えられる。

SC-12出土土器（Fig.21　81～90　PL.16・17）

SC12から81～90が出土した。**81**は土師器の高坏片である。内外面は赤褐色を呈する。**82**は須恵器の坏身の底部片である。生焼けで、内外面とも白色を呈し、底部外面に篦記号「W」に近いものがある。**83**は手捏土器で、口径3.6cm、器高4.0cmである。内外面は赤褐色を呈する。**84**は高坏の坏部で

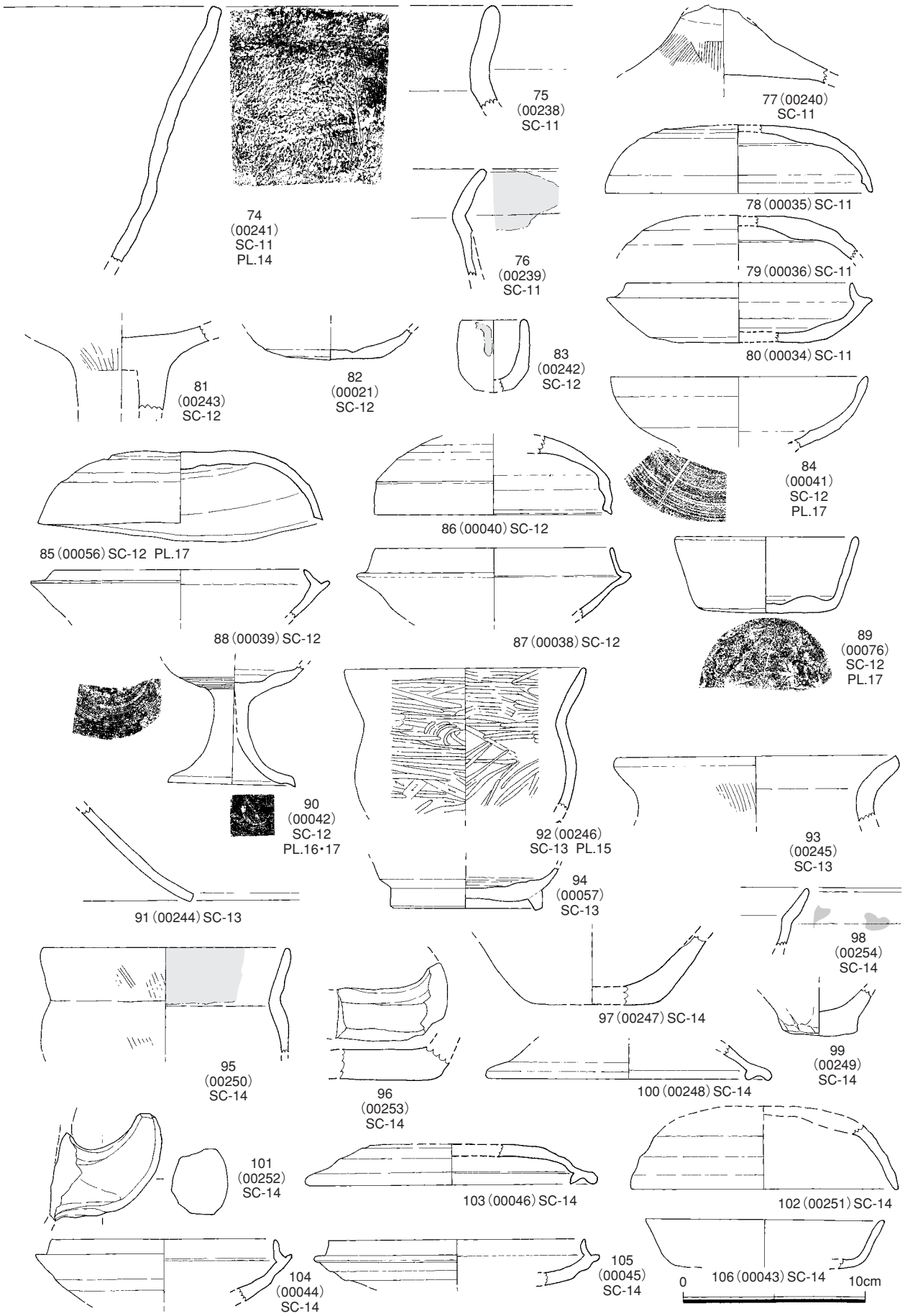


Fig.21　住居址内出土土器－４（SC-11～14）実測図（縮尺1/3）

※98のアミは赤色顔料、他のアミは黒斑

外面底部近くにカキ目を施し、箆記号「一」がある。口径14.2cmで、内外面とも暗灰色である。**85**はSC-16の破片と接合する須恵器の坏蓋で、捻れている。口径15.8cm、内外面とも白灰色で、焼成は良好である。**86**は口径13.2cmを測る須恵器の坏蓋である。削りが1/3程あり、内外面とも灰色を呈す。**87**は自然釉が外面に付着している須恵器の坏身である。内外面とも白灰色を呈し、焼成は良好で、床面出土である。口径13.2cm、受部径15.4cm、受部高は1.6cmを測る。**89**は須恵器の椀で、造りが雑である。底部に箆記号（PL.17）を配する。口径10.0cm、器高4.2cm、底径7.4cmを測り、内外面とも暗灰色を呈し、焼成は良好である。**90**は坏部の口縁が欠損している須恵器の高坏である。坏部下にカキ目を施し、脚部にネジリを施している。色調は内外面とも赤褐色＋黒褐色を呈する。脚径は7 cm、脚部内側に箆記号（PL.17）を配する。

SC-13出土土器（Fig.21　91～94）

SC-13からは4点図示した。**91**は土師器の高坏脚部片である。色調は内外面とも褐色である。**92**は丁寧に内外面とも箆磨きした土師器の壷形土器片である。口径13.4cm、残存高8 cm、内外面とも赤褐色を呈する。**93**は「くの字」状口縁を呈する土師器の口縁である。外面に刷毛目施し、内面はナデ仕上げ。外面色調は赤褐色、内面は煤が付着して暗褐色を呈する。**94**は高台を有する須恵器椀の底部である。色調は内外面とも灰色で、焼成は良好である。底径8.4cmを測り、高台の造りは丁寧である。

SC-14出土土器（Fig.21　95～106）

95～106を図示した。**95**は口縁が直立する土師器片である。内外面とも赤褐色を呈し、内面には煤が付着している。調整は外面に刷毛目、内面はナデ仕上げである。口径13.5cmを測る。**96**は甑の底部である。**97**は弥生後期の甕形土器の底部片で底径7cm。**98**は口縁が直立する土師器片である。外面に赤色顔料が付着している。**99**は手捏土器の底部片で底径4.2cmを測る。**100**は赤焼土器で、須恵器の坏蓋の口縁である。内側に返りを持つタイプである。口径15.8cmを測る。**101**は甑の把手である。**102**は赤焼け土器で内外面とも茶褐色を呈し、口径14.6cmの坏蓋である。**103**は100と同じで、内側に返りを持つタイプで口径16.2cmを測る。色調は内外面とも暗褐色。**104**は須恵器の坏身で床面から出土した。口径12.6cm、受部径14.2cm、受部高0.8cmを測る。外面に自然釉が掛かり、内面は灰色を呈する。**105**も同じで、外面に自然釉が掛かり、内面灰色を呈す。口径14.2cm、受部径16cm、受部高1.1cmを測る。**106**は須恵器の坏身で、受部が逆転する時期のものである。口径13.2cmを測り外面灰色、内面灰褐色を呈する。SC-14はこの土器が最も新しいが、床面からは104が出土している。この時期と考えたい。

SC-15出土土器（Fig.22　107～113　PL.15）

SC-15からは107～113を図示した。**107**は口縁が大きく外反する「Cの字」タイプの壷形土器の土師器片である。内外面は淡赤褐色を呈する。**108**は土師器の口縁部の細片である。**109**は手捏土器で、高台部分しか出土していないが、椀形が上部につくものと思われる。**110**は直口した口縁が端部で大きく外反するもので、内外面とも荒い刷毛目を施す。内面には煤が付着しており、暗褐色を呈し、外面は赤褐色を呈する。**111**は胴部に自然釉が掛かる須恵器の壷形土器である。口径9.4cmを測る。**112**は口径11.6cmを測る須恵器の坏蓋である。内面灰色、外面黒灰色を呈する。**113**は口径12,6cm、器高3.2cm、底径6 cmの須恵器の坏身である。底部に横・縦の刷毛目を施している。内外面とも暗灰色呈す。

SC-16出土土器（Fig.22～25　114～155　PL.14～17）

SC-16は他の住居址と異なり火災を受けた痕跡を残し、そのため屋根の上に粘土を覆い被せる方法が用いられていることが判明した。この状態から出土品は多く、一軒の道具の保有個数も考察する材料を提供できる資料である。SC16から114～155を図示した。

弥生土器　出土遺物の中に弥生土器が数点上部で検出した。これは流れ込みによるもので、115、

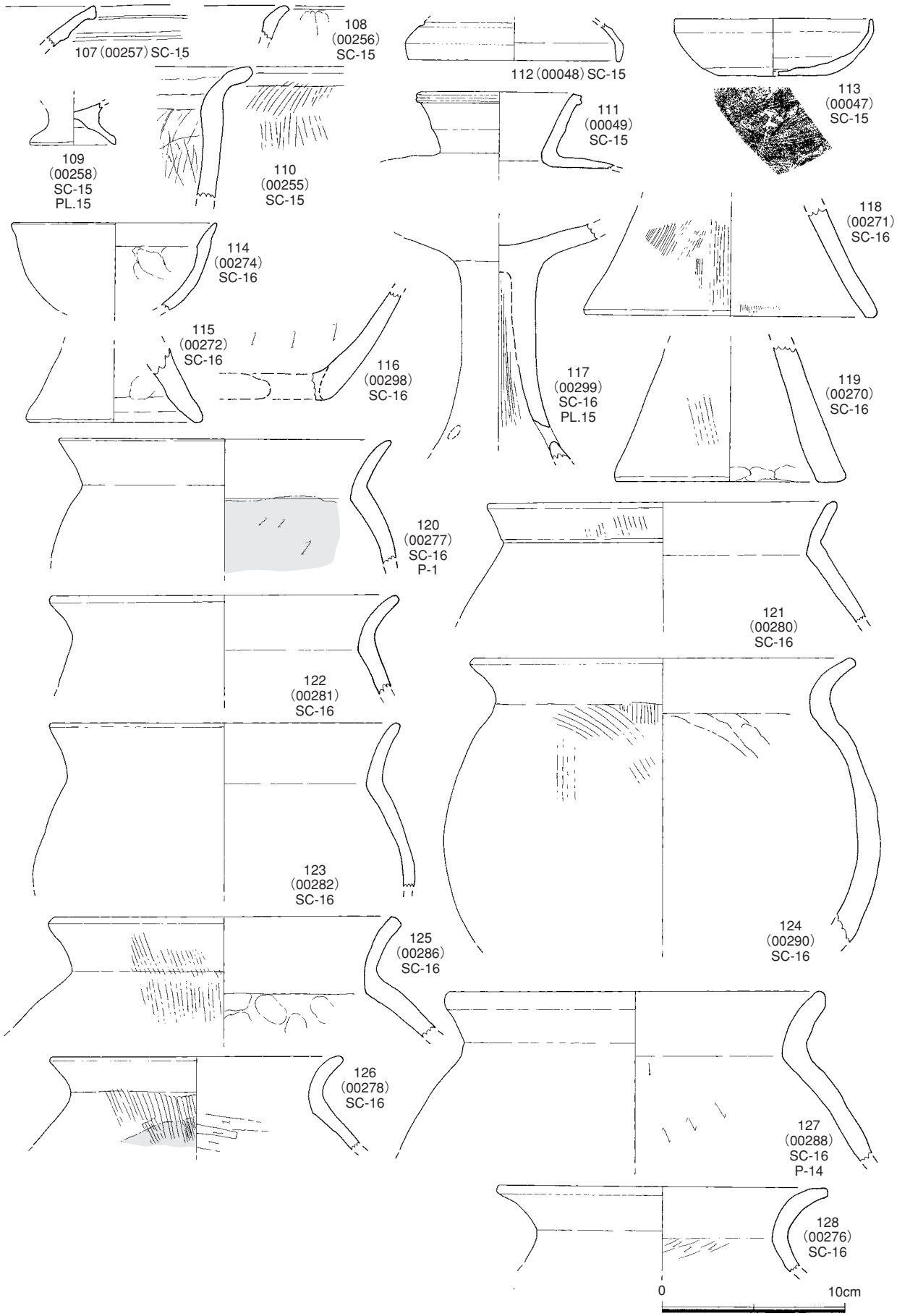


Fig.22　住居址内出土土器－５（SC-15・16）実測図（縮尺1/3）

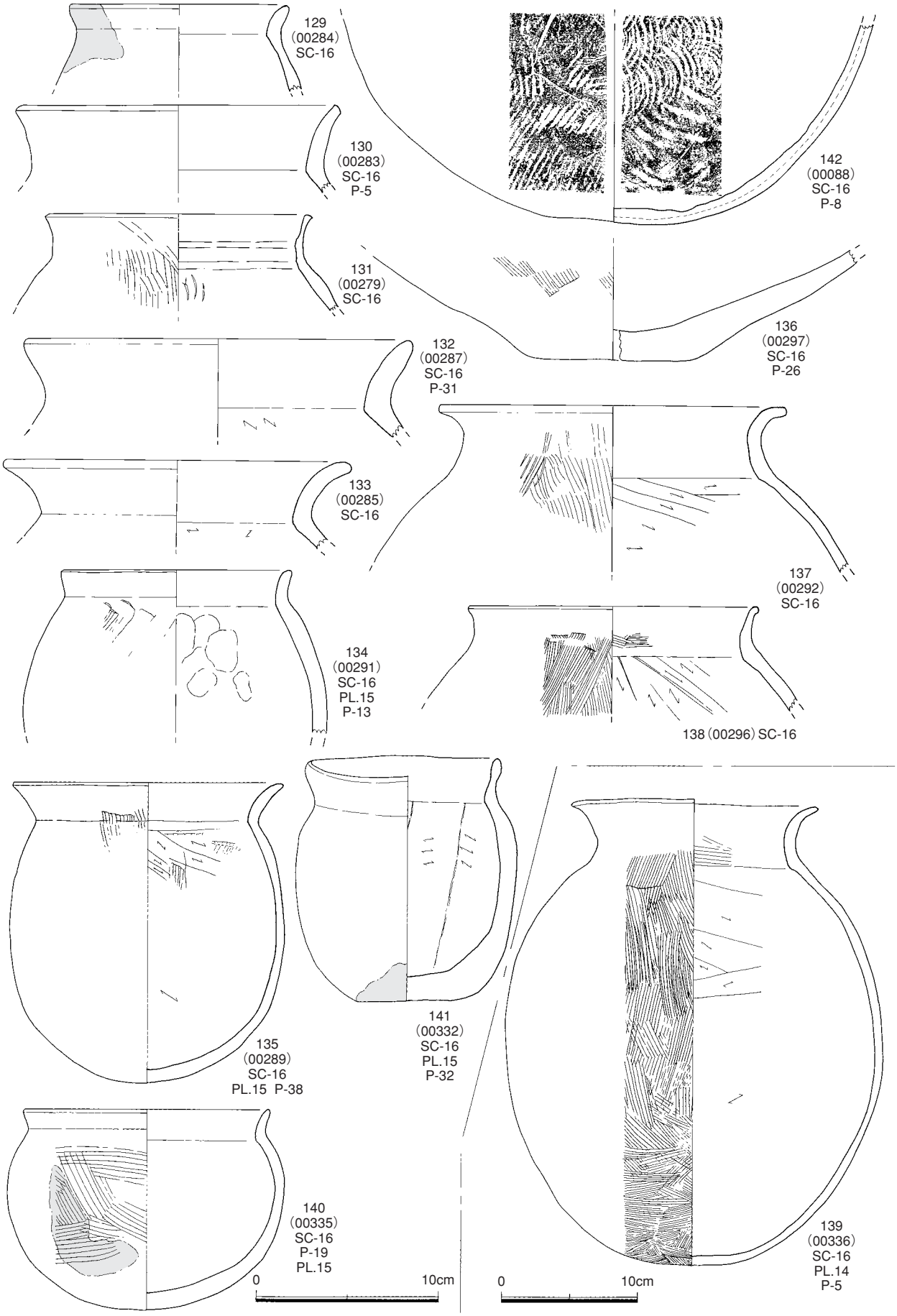


Fig.23　住居址内出土土器ー6（SC-16）実測図（縮尺1/3・1/4）

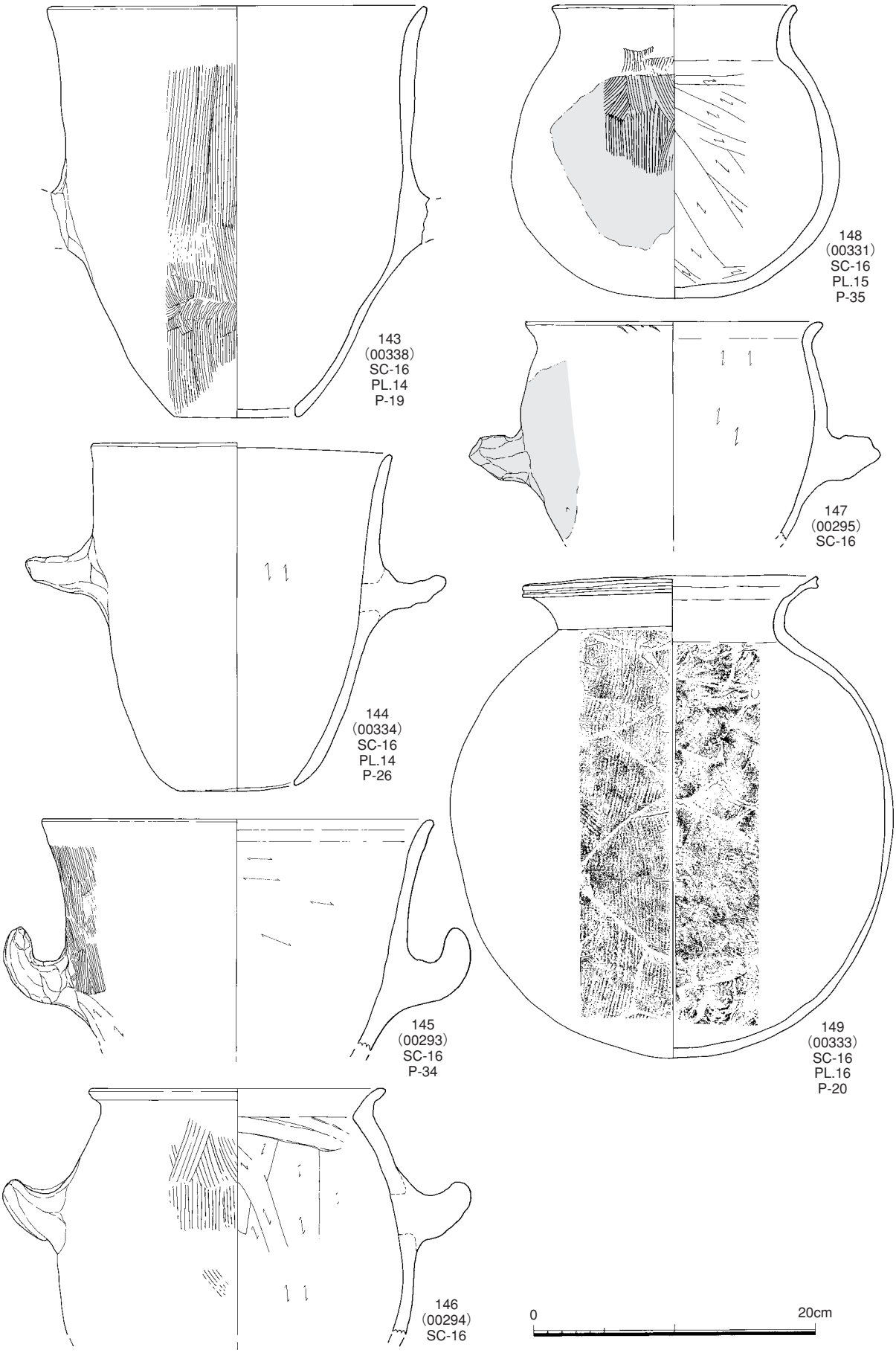


Fig.24　住居址内出土土器－７（SC-16）実測図（縮尺1/4）

117～119、136の５点である。**115**、**118**、**119**は支脚の脚部である。３点とも外面が丁寧な刷毛目を施す。色調は内外面とも赤褐色を呈す。**117**は大型高坏の脚部である。脚の下部に三個の円の透かしを配する。**136**は大型甕形土器の底部で、後期末に見られるタイプである。底径９cmを測る。

土師器　**114**は椀形土器片である。口径11.4cmを測り、色調は内外面とも淡褐色を呈す。調整は外面がナデ仕上げ、内面はナデと指押さえを施す。**116**は甑の底部である。色調は内外面とも赤褐色を呈す。Fig.22・23に甕形土器・壷形土器の口縁部を図示した。紙面の都合上、口縁の形状で説明していく。口縁部の形状は大きく分けて三タイプに分けられる。**１は頸部が締まり、大きく外反しながら立ち上がる、いわゆる「くの字」状口縁と呼ばれるタイプで、120～123、125～127、129・130・132・135の11点を図示した。甕形土器によく見られる。２は頸部から直立し、口縁端部が大きく外反し、形状が「Cの字」状を呈する口縁部で、124・128・133・137・139の５点を図示した。３は口縁部が頸部から直立した形状を呈し、131・134・138・140・141・148の６点を図示した。**

120の内面は黒褐色を呈し、胴部下に煤が付着している。外面は赤褐色。内面調整はナデと篦削りを施す。外面は表面剥落のため不明。口径18.4cm。**121**は外面刷毛目調整、内面ナデ仕上げ。内面は暗褐色、煤が付着。外面は暗褐色。口径19.4cm。**122**は器面が荒れ調整は不明。内外面とも赤褐色。口径19.2cm。**123**は口径19.6cm。器面調整は不明。内外面とも暗褐色。**124**は内外面とも淡褐色を呈し、外面調整は刷毛目、内面調整はナデと篦削り。口径21.4cm。**125**の色調は内外面とも赤褐色、外面調整は刷毛目、内面はナデと指押さえを施す。口径19.6cm。**126**の内面は淡明褐色、外面は淡褐色。内面調整はナデと篦削り、外面調整は刷毛目。口径16.4cm。**127**は内外面とも淡白褐色。内面調整はナデと篦削りを施す。外面調整は表面が荒れ不明。口径21cm。**128**は内外面とも淡白褐色を呈し、外面調整は不明、内面調整はナデと篦削り。口径18.4cmを測る。**129**の内面は暗黒褐色、外面は暗赤褐色。内面調整はナデと篦削り、外面は表面剥落のため不明。口径12.2cm。**130**の外面調整は不明、内面ナデ仕上げであるが、精製した粘土を使用している。内面は暗褐色、煤が付着。外面は赤褐色。口径18cm。**131**の器面調整は内面篦削り、外面刷毛目調整。内外面とも明赤褐色を呈する。口径15cm。**132**は口径21.4cmを測る。器面調整は不明。内外面とも淡明褐色。**133**は内外面とも赤褐色を呈し、外面調整は不明、内面調整はナデと篦削り。口径19.44cm。**134**の色調は内外面とも明褐色、内面に煤付着。外面調整は刷毛目、内面はナデと指押さえを施す。口径12.8cm。**135**は復元完形品の甕形土器である。色調は内外面とも暗黒褐色と暗赤褐色。内面調整はナデと篦削り、外面調整は刷毛目。口径15.2cm、器高16.6cm、最大径は胴部中位で15.4cmを測る。**137**は内外面とも明褐色。内面調整はナデと篦削り、外面は荒い刷毛目。口径19.4cm。**138**は内外面とも赤褐色を呈し、外面調整は細かな刷毛目、内面は刷毛目と篦削り。口径16.2cm。**139**は口径18cm、器高34.4cm、最大径が胴部下位にあり28.2cmの完形品である。内外面とも赤褐色を呈し、外面調整は細かな刷毛目、内面は刷毛目と篦削り。**140**の色調は内外面とも赤褐色を呈し、外面調整は荒い刷毛目、内面はナデ。口径13.8cm、器高11cmの壷形土器完形品である。**141**は手捏土器の完形品である。器厚があり、平底を呈する。内外面とも淡明褐色、内面調整は篦削り、外面はナデ。口径10.8cm、器高13.4cm、底部径5.4cmを測る。**148**は口径17.6cm、器高22cm、最大径は胴部中位で23.4cmを測る壷形土器の完形品である。色調は外面が暗茶褐色と黒班、内面が茶褐色。外面調整は刷毛目、内面は篦削りを施す。143～147は甑を図示した。**この甑も口縁・把手の形状で二種類に区別できる。１つは口縁が「くの字」を呈する146・147で、口縁が直立する143～145である。**把手は水平に付く形状と内に入るタイプがある。**143**は内外面とも淡明褐色。内面調整はナデ、外面は刷毛目の後ナデを施す。底部は抜けた状態で、この部分に加工はない。精製された粘土を使用。口径27cm、器高29.2cm、底部９cmを測る。**144**は完形品で、把手が水平に付く形状で、底部は抜けている。色調は内外面とも赤褐色、外面調整はナデ、内面は篦

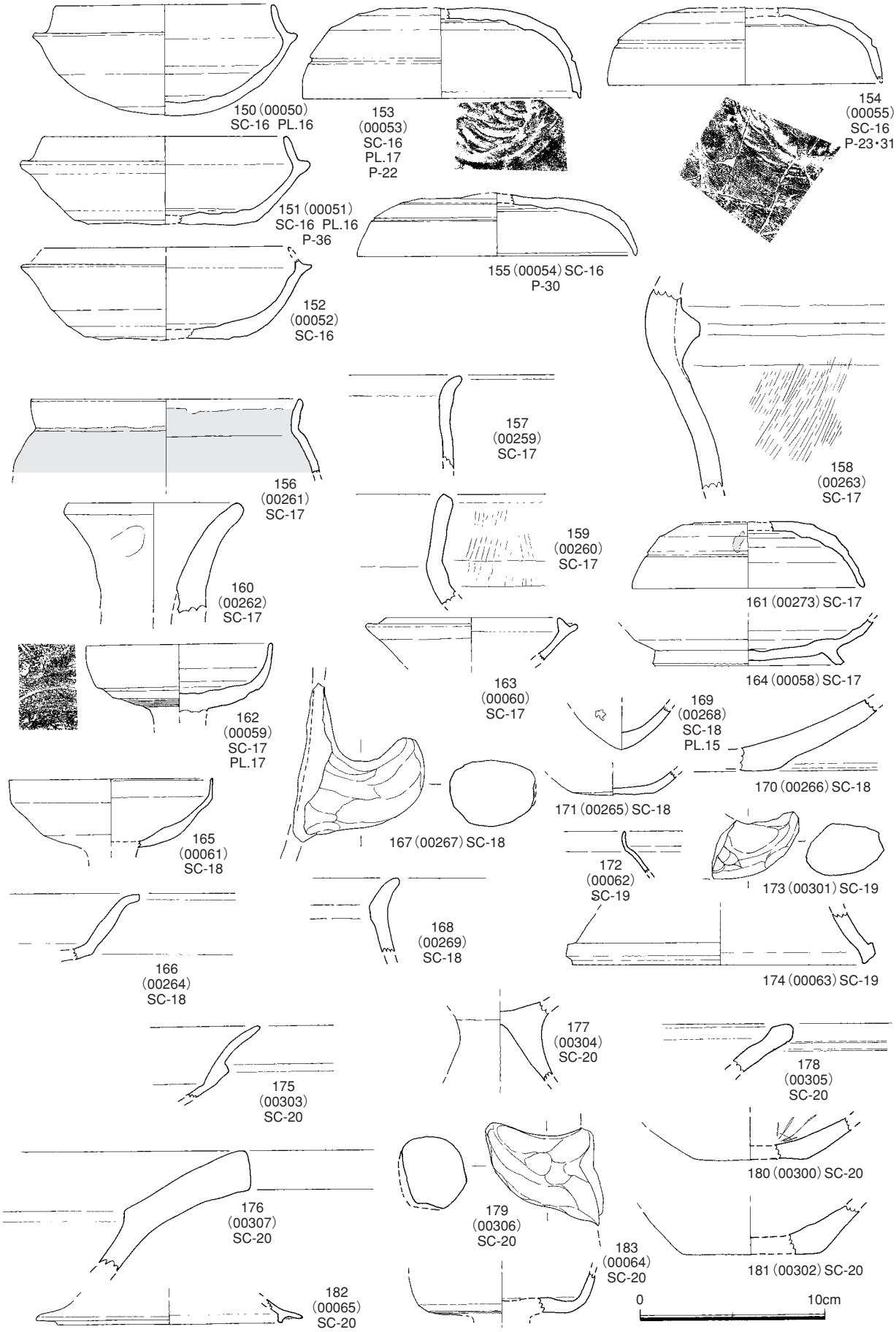


Fig.25　住居址内出土土器－８（SC-16～20）実測図（縮尺1/3）

削りである。口径21.6cm、器高24.6cm、底径8.5cm、最大径胴部中位で20cm、把手間は30cmを測る。**145**は口径28cm、把手間は33.5cm。把手は内に入るタイプ。色調は外面が淡茶褐色、内面が赤褐色。外面調整は刷毛目と把手は削り、内面は篦削りである。**146**は口径21.4cm、色調は内外面とも暗赤褐色、外面調整は刷毛目、内面は篦削りである。把手は内に入る。把手間は33.5cm。底径5.2cm。**147**は水平に付く形状で、色調は内外面とも赤褐色、外面に黒班。外面調整は器面が剥落不明。内面は篦削り。口径21.4cm、把手間は29.6cmを測る。

須恵器は142・149・150～155の８点を図示した。**142**は大型甕形土器の底部である。色調は内外面とも淡灰色、外面調整は横長平行叩きの後ナデ仕上げで、叩きの間隔が２mm、長さ８～10cm、幅３～４cmの原板を用いている。内面に同心円紋の叩き。**149**は赤焼土器で、口径21.2cm、器高34.2cm、最大径は胴部中位で31.8cmを測る。色調は内外面とも暗赤褐色。外面調整は横長平行叩きで、幅３cmに11本の刻み、１本の幅が２mmである。内面は同心円紋の叩き。**150**は口径11.6cm、器高６cm、受部径14.6cm、受部高1.5cmの須恵器の坏身である。内外面とも白灰色を呈す。**151**も口径13.4cm、器高4.6cm、受部径15.8cm、受部高1.3cmの須恵器の坏身である。内面は小豆色、外面は黒味の強い小豆色を呈す。**152**は口径13.4cm、器高5.2cm、受部径16cm、受部高１cmの須恵器の坏身である。内外面とも灰褐色を呈す。**153**は須恵器の坏蓋で、口径15.2cm、器高4.9cm。内面に同心円紋の叩きがある。色調は内外面とも明るい青色を呈す。**154**も内面に同心円紋の叩きがあり、口径15cm、器高4.2cmの坏蓋で内外面とも白灰色を呈す。**155**は口径15.2cm、器高3.5cmを測る坏蓋である。色調は内外面とも灰色を呈す。

SC-17出土土器（Fig.25　156～164　PL.17）

156～164を図示した。**158**と**160**は弥生終末の土器である。**156**・**157**・**159**は口縁が直立する土師器片である。内面は黒褐色を呈し、煤が付着、外面は赤褐色。内外面調整は不明。口径14.8cm。**161**は口径12.6cm、器高3.6cmの須恵器の坏蓋である。生焼けの状態で、内外面とも白灰色を呈す。**162**は須恵器の高坏坏部片。脚部との接点にカキ目を施す。口径10.2cm、坏高3.8cm、内面は暗小豆色、外面が暗黒褐色を呈す。**163**は口径9.6cm、受部径11.4cmの須恵器の坏身である。内外面とも暗青灰色を呈す。**164**は高台付きの須恵器椀である。底径10.4cm。色調は白灰色で焼成は不良。

SC-18出土土器（Fig.25　165～171）

165～171を図示した。**170**は弥生終末の土器である。**165**は高坏の坏部で、焼成の甘い須恵器である。内外面とも白灰色を呈す。口径11.2cm。**166**は土師器の高坏坏部片で、内外面とも茶褐色を呈する。

167は甑の把手である。**168**は土師器甕形土器の口縁部で、内外面とも黒褐色を呈する。**169**は手捏土器で底部が尖る。茶褐色を呈する。**171**は土師器椀の底部で、色調は明茶褐色、底径４cmを測る。

SC-19出土土器（Fig.25　172～174）

SC-19は３点を図示した。**172**は須恵器の小型壷形土器の口縁部で、器厚が非常に薄い。内外面とも黒褐色を呈し、焼成は良好。**173**は甑の把手で内に入るタイプ。**174**は床面から出土の高坏脚部の須恵器片である。内外面とも灰色を呈し、底径15.8cmを測る。

SC-20出土土器（Fig.25　175～183）

176・**178**・**180**・**181**は弥生終末の土器である。**175**は土師器の高坏坏部の口縁端部である。内外面とも黄褐色を呈す。**177**は土師器高坏の脚部である。内外面とも赤褐色を呈す。**179**は甑の把手である。ほぼ水平に付くタイプである。**182**は色調暗灰色を呈する須恵器坏蓋の口縁部片である。口径14.8cm、受部径12.4cmを測る。**183**は須恵器の高坏坏部片で底面にカキ目を施す。色調は内外面とも灰色。

SC-21出土土器（Fig.26　184）

SC-21は削平がひどく**184**だけが出土した。上端部・下端部が欠損するが、支脚である。

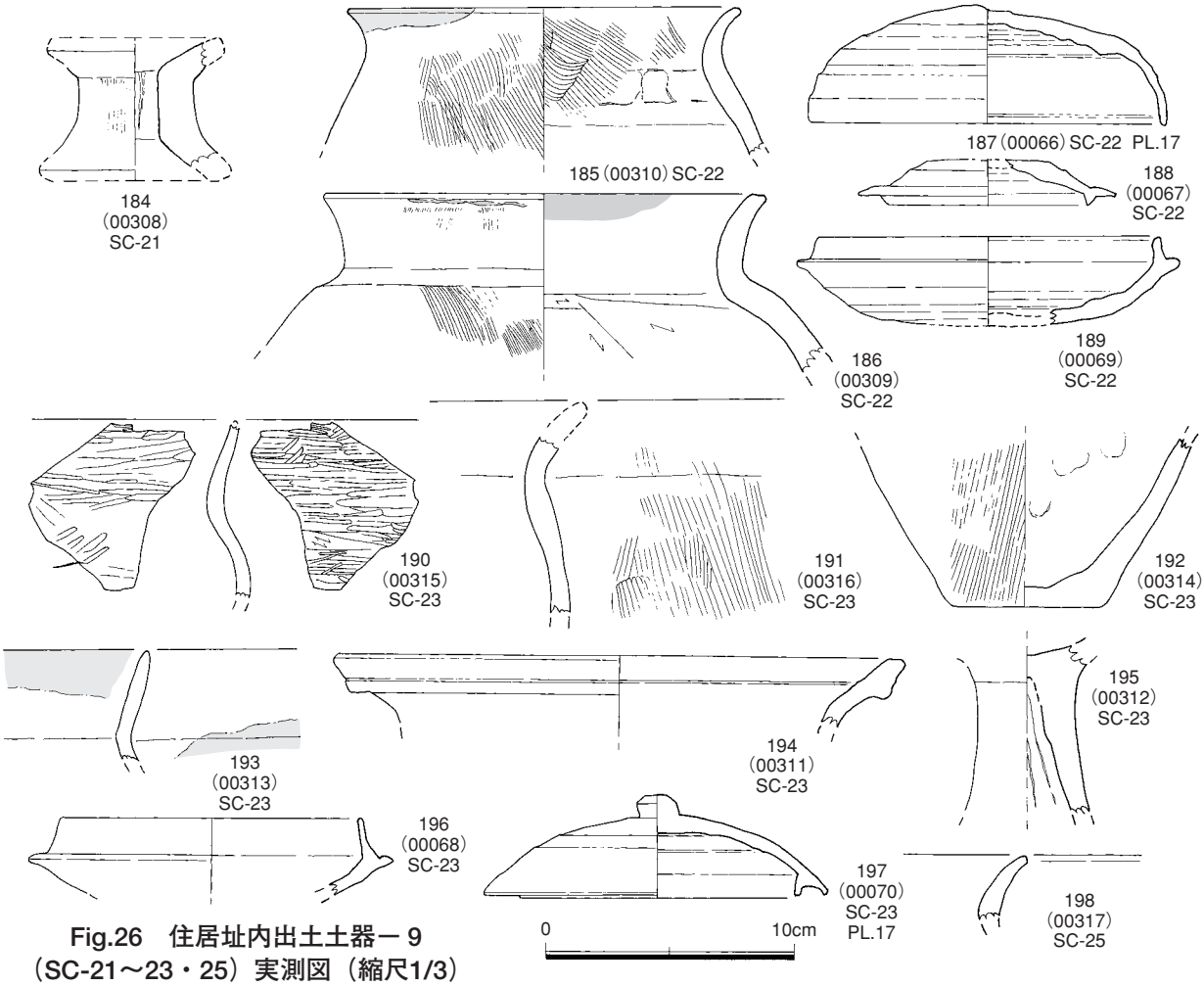


Fig.26　住居址内出土土器－９
（SC-21～23・25）実測図（縮尺1/3）

SC-22出土土器（Fig.26　185～189　PL.17）

185～189を図示した。**185**は「くの字」状口縁を呈する甕形土器の土師器片である。内面は黒褐色を呈し、外面は赤褐色を呈する。内外面とも荒い刷毛目を施す。口径16cmを測る。**186**は「くの字」状を呈する壷形土器の土師器片である。胴部が張ることにより「くの字」状を呈するが、口縁自体は直立するタイプである。内外面とも淡赤褐色、内面に赤色顔料が僅かに観察できる。外面の調整は細かな刷毛目を施し、内面はナデ仕上げと篦削りである。口径18cm、頸部が16.2cmと締まる。**187**は完形品で、口径14.6cm、器高4.8cmを測る須恵器の坏蓋である。内面に同心円紋が当具として利用したことが伺える。色調は内外面とも白灰色を呈し、焼成は良好である。**188**は返りが付く須恵器の坏蓋で、外面に自然釉が掛かる。口径8.2cm、受部径が10.8cm。**189**は口径14.2cm、受部径が15.8cm、受部高が１cm、器高3.6cmを測る須恵器の坏身。内外面とも白灰色を呈し、焼成は良好。口縁・受部端が丸みを持つ。

SC-23出土土器（Fig.26　190～197　PL.17）

SC-23から８点を図示した。**190**は内外面丁寧に篦磨きした壷形土器の胴部である。**192**は甕形土器の底部で、底径6.2cmを測る。外面調整は刷毛目を施し、内面は指ナデ押さえを施す。**195**は高坏の脚部で、内外面とも赤褐色を呈する。以上３点が弥生時代後期の遺物である。**191**は「くの字」状口縁を呈する土師器の甕形土器口縁部片である。荒い刷毛目を外面に施し、内面はナデ仕上げ。内外面とも赤褐色を呈する。**193**は口縁が直立するタイプの甕形土器の土師器片である。内外面とも暗褐色。**194**は口径23.2cmを測る高坏の口縁部片で、内外面とも黄褐色を呈する。内外面調整はナデ仕上げである。**196**は口径12.2cm、受部径15cm、受部高1.5cmの須恵器の坏身である。内外面とも白灰色を呈する。**197**は口径14cm、器高4.2cmを測り、天井部につまみが付く。内外面とも灰色で、焼成は良好。

SC-25出土土器（Fig.26　198）

SC-25から１点図示した。**198**は口縁が「くの字」状を呈するタイプの甕形土器の土師器片である。内外面とも褐色を呈する。

2）土壙・溝状遺構内土器

土壙（SK）・溝状遺構（SD）から出土した土器をFig.27～28に図示した。

SK-01出土土器（Fig.27　199～201）

199～201を図示した。**199**は須恵器の坏蓋で赤焼け土器である。轆轤回転は時計回りで、色調は内外面とも赤色を呈す。口径12cm、9.4cm、1.8cmを測る。**200**は須恵器の壷形土器で、外面に自然釉がかかり内外面とも暗黒灰色を呈する。調整は外面がカキ目、内面が同心円紋を施す。口径13.4cm、頸部12cmを測る。**201**は須恵器壷形土器の胴部片で、器面調整は外面カキ目、内面はナデ仕上げである。色調は内外面とも暗灰色を呈す。

SK-05出土土器（Fig.27　202）

202は「くの字」口縁を呈する土師器の甕形土器口縁部片である。外面の器面調整は表面剥落のため不明である。内面の器面調整は、口縁部がナデ、胴部が横の篦削りを施す。色調は内外面とも赤褐色を呈する。口径13cmを測る。

SK-06出土土器（Fig.27　203・204）

203は土師器の丸底に近い平底を呈する壷形土器の底部片である。器面調整は外面がナデ、内面が指ナデ・指押さえを施す。色調は内面が暗褐色を呈し、外面が白褐色を呈する。焼成は良好。**204**は甑で、把手を欠損している。口縁部は直立するタイプで、口唇部がやや外反する。底部は空洞のままである。器面調整は外面がやや細かな刷毛目を施し、口縁部周辺はナデ仕上げ、内面調整はやや荒い刷毛目とナデ仕上げを施す。色調は外面が淡褐色と黒班が大きく広がる。内面は暗褐色を呈する。口径17.8cm、器高16.4cm、胴部中位径22cm、底径６cmを測る。第27次調査で出土した甑の特徴は、底部が空洞であること、把手の形状が二種類、口縁部の形状も二種類あることである。

SK-07出土土器（Fig.27　205～216　PL.14・15・17）

SK-07から12点を図示した。208～211は弥生終末の土器である。**208**は大型壷形土器の口縁部である。口唇部外面に横に二条の凹線を引き、下線下に篦工具による刻みを施す。器面調整はナデである。色調は内外面とも暗褐色を呈す。**209**は大型壷形土器の底部である。底径が８cmで、器面調整はナデ仕上げで、内面に指押さえを施す。色調は内外面とも赤褐色を呈す。底部周りは鋭利さが無くやや丸みを持つ。これらの形状・特徴から弥生時代後期である。**210**も弥生時代後期の大型壷形土器の底部である。底径が９cmで、器面調整はナデ仕上げである。色調は外面が赤褐色、内面が暗褐色を呈す。底部周りは鋭利さが無くやや丸みを持つ。**211**は支脚で、下部を欠損する。上部口径10.4cm、器面調整は外面がナデ仕上げ、内面がナデと篦削りを施す。色調は内外面とも赤褐色を呈す。**205**は口縁が「くの字」状を呈する土師器の甕形土器である。口径19.2cm、器面調整は外面が刷毛目、内面がナデ仕上げ、色調は内外面とも白褐色を呈する。**206**も口縁が「くの字」状を呈する甕形土器である。口径19cm、器面調整は外面が細かな刷毛目、内面がナデ仕上げと胴部が篦削りを施す。色調は内外面とも白褐色を呈するが、外面口縁部に黒班がある。**207**は土師器の甕形土器である。底部は破損しているが、器高は23.2cm程度で、口縁は「Cの字」タイプで、口唇部が大きく外反する。口径15cm、頸部径17.2cm、最大径は胴部上位で23.6cmを測る。器面調整は外面が刷毛目、内面がナデと指押さえを施す。色調は内面が淡褐色、外面が褐色、底部付近に煤が付着。**212・213**は甑の把手である。**212**は内に入るタイプで、**213**は水平に伸びるタイプである。色調は212が内外面とも淡褐色、213は内外面とも白褐色を呈する。**214**は須恵器の坏蓋である。口径13.8cm、受部径10cm、推定器高2.5cm、つまみが付くタイプで焼成が甘い。色調は内外面とも白灰色を呈し、轆轤回転は時計回りである。**215**もつまみの付く須恵器の坏蓋である。口径14.4cm、器高2.4cmで、受部が消滅するタイプで、焼成は良好。色調は外面

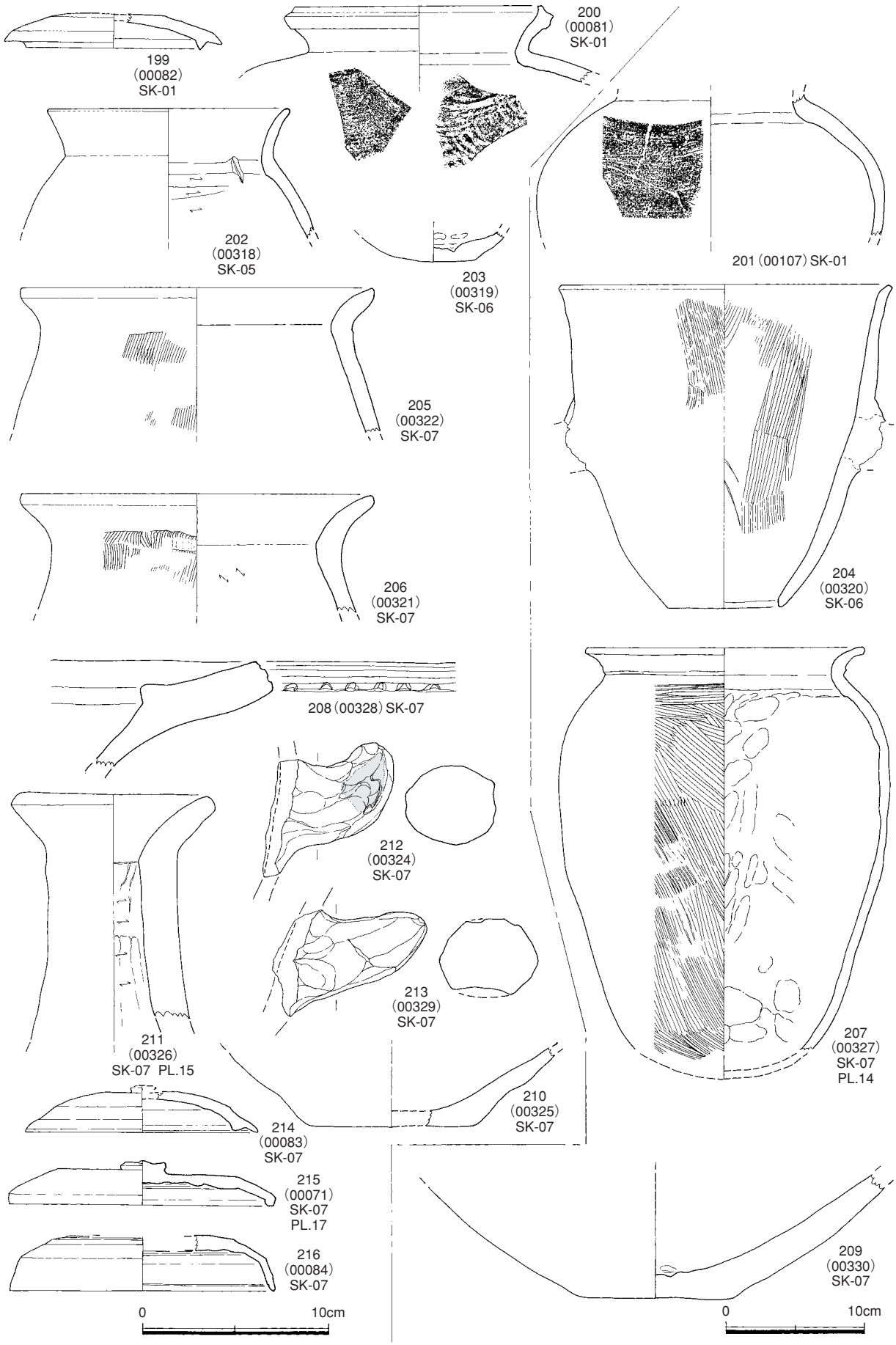


Fig.27　土壙状遺構他出土土器ー1（SK-01・05～07）実測図（縮尺1/3・1/4）

が灰色、内面が暗灰色を呈し、轆轤回転は時計回りである。**216**は上部が破損してその形状は不明であるが、口径14.4cmを呈する須恵器の坏蓋である。色調は外面に自然釉がかかり、内面は灰色を呈す。

SK-10出土土器（Fig.28　217）

SK-10は**217**だけが出土した。須恵器の坏身で、口径10.2cm、受部径12.2cm、口径3.5cmを測る。外面は自然釉がかかり、内面は灰色を呈す。轆轤回転は時計回りである。

SK-12出土土器（Fig.28　218　PL.15）

218は支脚と考えられる遺物で、支脚上部は内側に傾斜を持って座りの部分を造り、下部はやや外に開き気味に納める。上部口径8.4cm、下部口径7.4cm、器高６cm、上部中穴は2.2cmを測る。色調は内外面とも暗褐色、器面調整は外面がナデ、内面がナデと指押さえを施す。

SK-17出土土器（Fig.28　219・220　PL.14）

219は弥生後期終末の大型甕形土器の口縁部である。口縁に刻みを施す。**220**は須恵器の坏身である。口径10.1cm、受部径12cm、受部高0.9cm、器高3.2cmを測る。内外面とも酸化鉄が付着している。

SK-21出土土器（Fig.28　221　PL.16）

221は赤焼土器の平瓶である。復元完形で、外面はナデとカキ目、内面はナデ仕上げ。口径8.4cm、最大径が17cm、底部9.4cm、器高15.8cmを測る。外面は黒褐色と赤褐色、内面は赤褐色を呈する。

SD-01出土土器（Fig.28　222）

222は弥生時代後期の高坏脚部片である。内面が褐色、外面が暗褐色を呈す。

SD-04出土土器（Fig.28　223・224）

223は須恵器の壷形土器の底部片である。底径は９cm、内外面とも暗黒褐色。外面に箆記号がある。**224**は口径11.8cmの須恵器の坏蓋である。外面が黒灰色、内面が灰色である。

SD-09出土土器（Fig.28　225）

225は須恵器の大型壷形土器の口縁部で、口縁部が「Cの字」状を呈し、口唇部が三角の突帯を持つ。口径23.6cm、頸部径が17.8cmを測る。外面の調整は、カキ目、内面が同心円紋を施す。外面には自然釉がかかり、内外面とも暗黒灰色を呈する。

SD-10出土土器（Fig.28　226　PL.17）

226は須恵器の坏蓋である。口径13.4cm、器高4.3cmを測る。内面の色調は灰色を呈し、外面は自然釉がかかる。天井部に箆記号がある。轆轤回転は時計回りである。

SD-13出土土器（Fig.28　227・228　PL.16・17）

227は長頸壷の胴部片で、赤焼土器。胴部外面に波状紋を二ケ所に配し、内面がナデ。胴部中位に円形の穿孔を施す。外面が暗褐色、内面が赤褐色。胴部径20cm。**228**は須恵器の盤である。口径30cm、底径23.8cm、器高4.2cmを測る。調整は外面がナデ仕上げ、内面がナデで底面に同心円紋の痕跡がある。色調は内外面とも灰色を呈す。

SD-18出土土器（Fig.28　229・230）

229は須恵器の坏蓋である。口径11.2cm、色調は外面が黒灰色、内面が灰色。**230**も須恵器の蓋である。口径10.2cm、色調は内外面とも黒灰色を呈す。

SD-25出土土器（Fig.28　233～236）

233～236は弥生後期終末の高坏、甕形土器の底部である。

Pit-1025・1060出土土器（Fig.28　231・232　PL.15）

231はPit-1025から出土した焼成の悪い須恵器の高坏の脚部である。脚径10.6cmを測り、内外面とも白灰色を呈す。**232**はPit-1060から出土。弥生時代の甕形土器の底部片である。底径８cm。

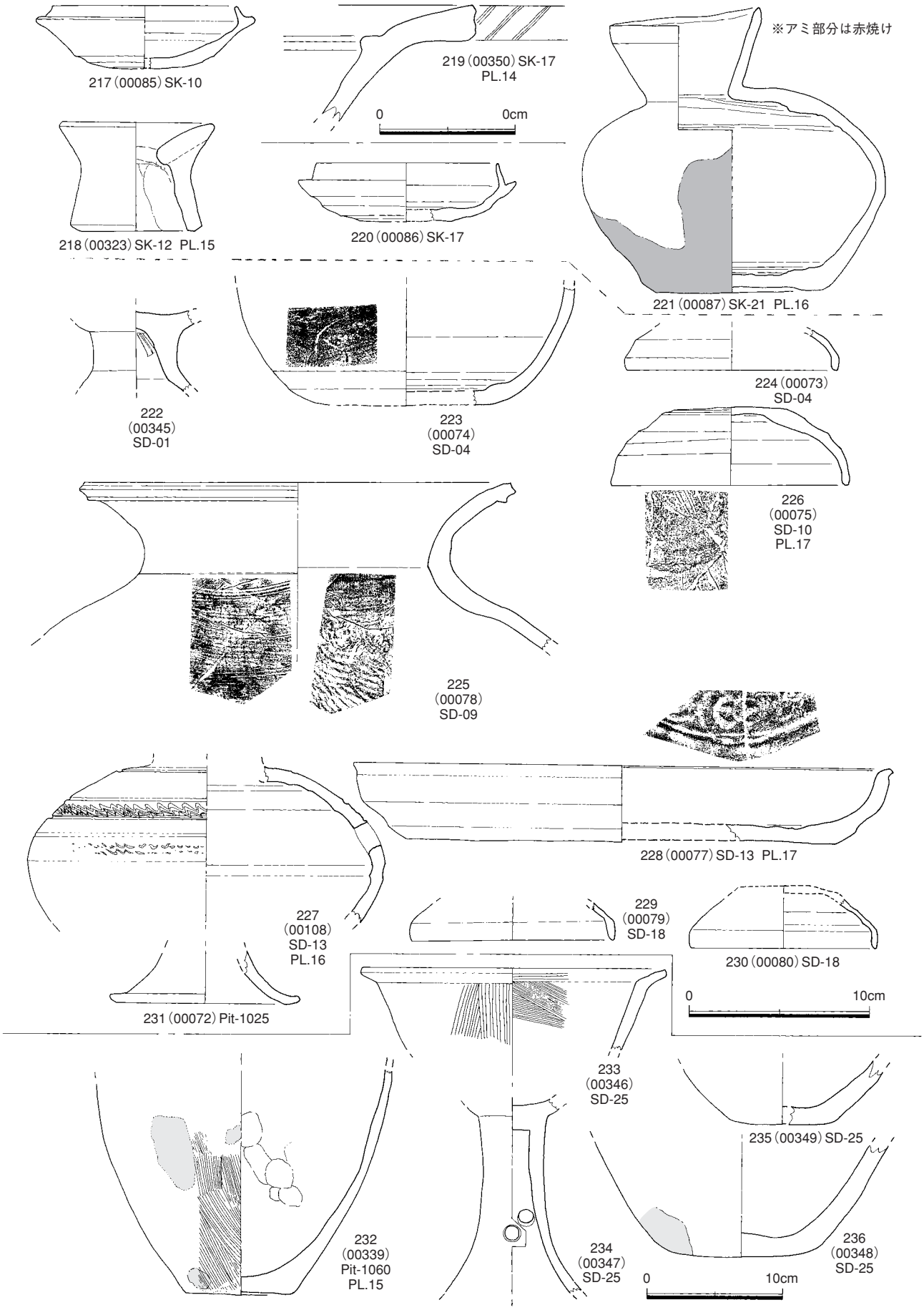


Fig.28　土壙状遺構他出土土器ー２（SK-10・12・17、SD、Pit出土）実測図（縮尺1/3・1/4）

3）包含層の土器

包含層から多数の土器が出土した。その内の数点であるが、Fig.29に図示した。

弥生時代の土器（Fig.29　237～239　PL.15）　237～239を図示した。**237**は弥生後期に見られる「逆くの字」状口縁を呈する壷形土器である。口径は23.4cm、口縁最大径27.1cm、頸部径15.2cmを測る。色調は内外面とも明褐色を呈する。器面調整は内外面ともナデと刷毛目を施す。**238**・**239**は弥生後期の高坏脚部である。**238**は脚径18cmで、色調は内外面とも明褐色。**239**は脚径が19.2cmを測る。色調は内外面とも明褐色。脚長は238が16.1cm、239が17.5cmで、238は坏部まで筒状を呈するが、239は途中11.5cmで止まっている。調整は238がナデと篦削り、239がナデ仕上げである。

古墳時代の土器（Fig.29　240～252　PL.16・17）　**240**は土師器の高坏脚部片である。脚径７cm、脚長４cmと小型である。調整は外面が刷毛目とナデ、内面がナデと押さえを施す。色調は内外面とも暗褐色を呈する。**241**は底径14.2cmの須恵器の大型鉢形土器である。色調は内外面とも青灰色を呈し、調整は内外面とも轆轤回転時計回りのナデ仕上げ。**242**は瓹の胴部で、口縁部・底部を欠損する。胴部中位に二条の沈線内に斜めの刻みを施し、胴部中位上に一穴の穿孔を上向きに施す。頸部径は2.4cm、この頸部から口縁部にかけて捻れを施す。このため内部でも同様の捻れがある。色調は内外面とも暗赤褐色、所謂「赤焼土器」と称するものである。**243**は坏部が欠損する「赤焼土器」と称する須恵器の高坏脚部である。脚径8.2cm、脚長5.3cm。色調は内外面とも赤褐色。器面調整はナデ仕上げ。**244**は底部と頸部が欠損する瓹の胴部である。外面胴部中位上に二条の沈線を配し、内部に斜めの刻みを施す。沈線上部にカキ目。下位は篦削り、色調は内外面とも青灰色を呈す。胴部最大径は9.1cm。**245**は口径12.2cmを測る生焼けの須恵器壷形土器の口縁部である。色調は外面が黒赤褐色、内面が青灰色を呈し、所謂「赤焼土器」とは違う。**246**は口径12cm、器高3.8cmを測る所謂「赤焼土器」と称している須恵器の坏蓋である。天井部付近にカキ目を施しているところから高坏の坏部の可能性もある。色調は内外面とも茶褐色。内外面ともナデ仕上げ。**247**は口径10cm、器高3.5cmを測る生焼けの須恵器の坏蓋である。天井部に横平行線を配する叩き痕が認められ、内面に「ノ」字状の篦記号がある。色調は内外面とも白灰色。**248**は口径7.8cm、受部径10cm、器高1.4cmの須恵器の坏蓋である。色調は内外面とも青灰色。**249**は口径8.5cm、受部径10cm、器高２cmの須恵器の坏蓋である。外面に篦記号（PL.17）があり、色調は内外面とも暗青灰色を呈す。**250**は口径10cm、受部径12cm、器高3.5cmの須恵器の坏身である。底部に篦記号（PL.17）がある。色調は内外面とも暗赤褐色を呈す。焼成は悪く「赤焼土器」の生焼けである。**251**は口径8.1cm、受部径10cm、器高2.1cmの須恵器の坏身で、平底を呈する。その部分に格子目の圧痕がある。色調は内外面とも白灰色。**252**は口縁が直立する須恵器の壷形土器である。口唇部が僅かに外反し、外側に粘土帯を巡らせる。口径10.7cm、頸部径が10.5cmで、胴部最大径は上位にあり17.9cmを測る。器面調整は外面が刷毛目、内面が回転ナデを施す。色調は内外面とも黒色＋灰色を呈す。

奈良・平安時代の土器（Fig.29　253～257　PL.17）　**253**は京都府亀岡市の篠窯跡群から出土した土器に類似する。緑釉素地須恵器椀で、口径12.2cm、器高５cm、底径5.8cmを測る。底部は回転糸切りで、その上に僅かに高台を巡らせその高さは0.1cm程度である。色調は内外面とも灰色で、口唇部のみに瓦器様に黒灰色を巡らせる。九世紀初頭か。**254**は越州系青磁の底部である。底径７cm、高台が0.4cm。内面に目跡痕が付く。色調は内外面とも深藍色。高台の造りは丁寧で全体に釉がかかる。**255**は内面に乳白色の釉がかかり、外面には釉がかからない白磁である。底径は6.3cm、高台が0.2cmの高さを持ち稜を削り落す。**256**は白磁の底部のみの出土で、内面に乳白色の釉がかかり、外面には釉がかからない。底径は7.2cm、高台が0.3cmの高さを持ち、稜を僅かに削り取っている。**257**は全体に乳白色の釉がかかった白磁の口縁部である。口径は12cmを測り、口唇部の一部分の釉がはげ落ちている。

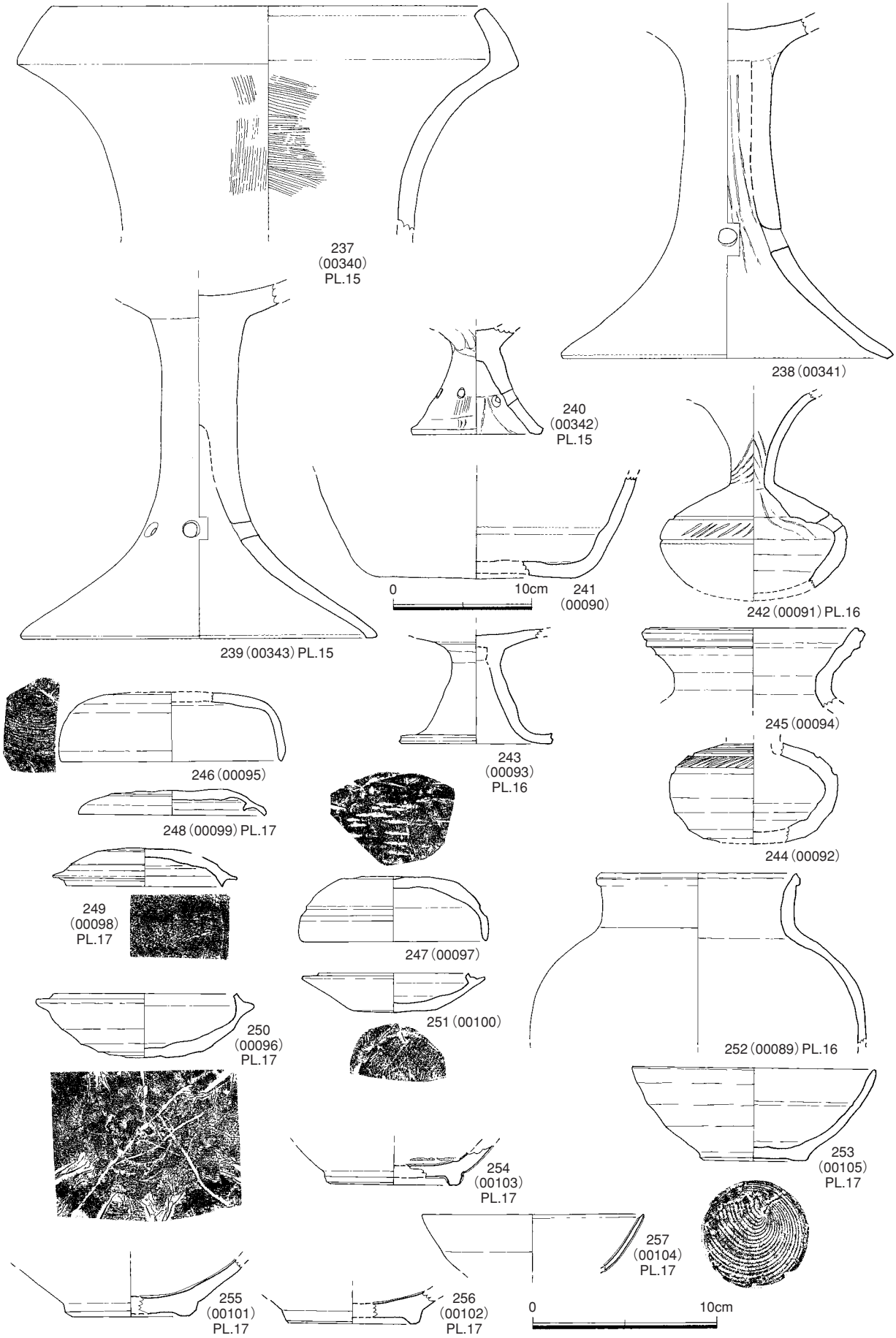


Fig.29　包含層出土土器実測図（縮尺1/3・1/4）241のみ1/4

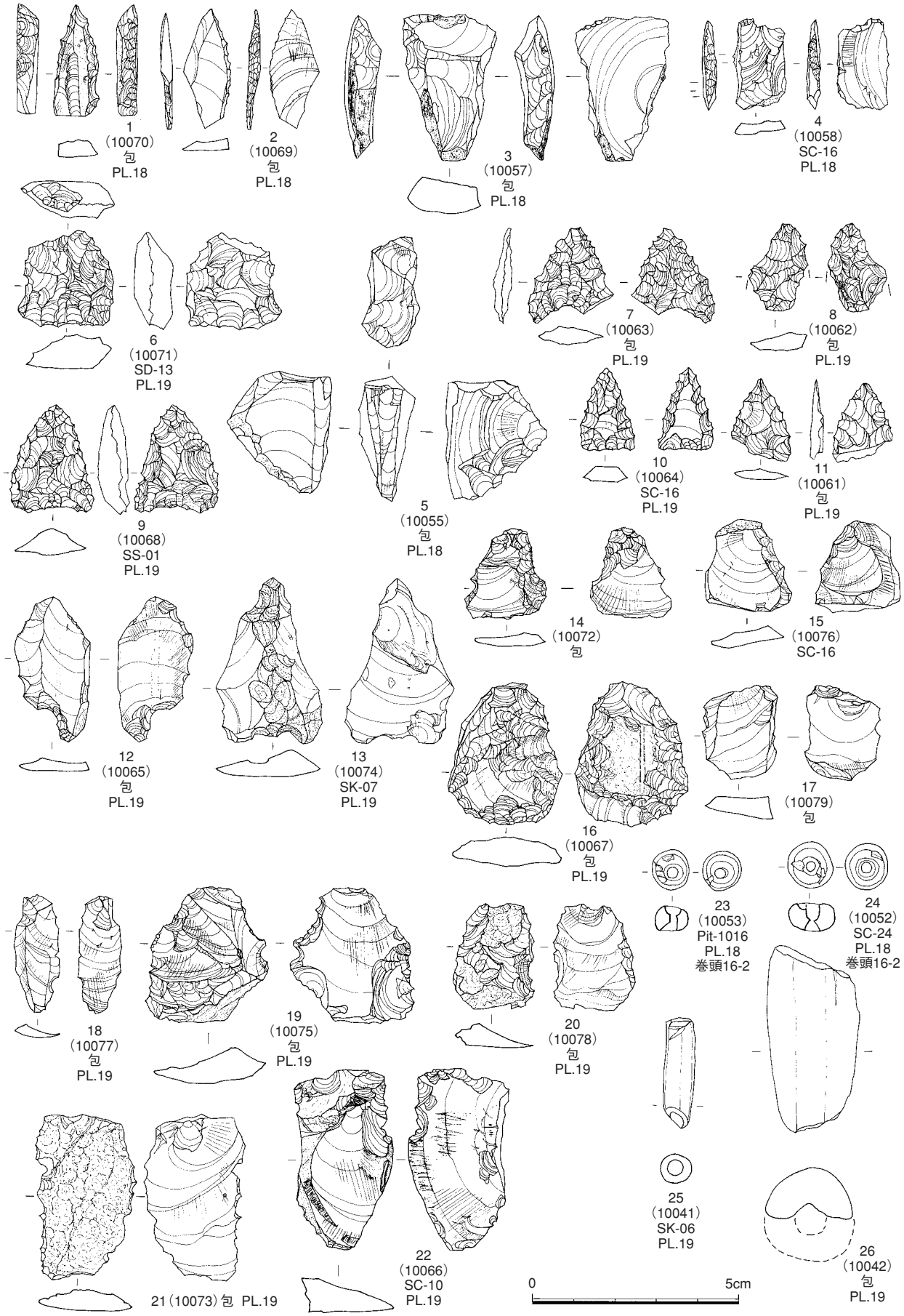


Fig.30　出土石器ー1 実測図（縮尺3/4）

4）出土石器

石器は遺構別ではなく、器種別に記載した。出土遺構は挿図に表示しているので、本文中にはふれない。後期旧石器時代から縄文時代・弥生時代の石器まで各種出土している。縄文時代の遺物が混入していることは、桑原飛櫛遺跡が調査地区から北に250mに位置していることから理解できるが、後期旧石器の遺物が出土することは、この周辺に何らかの遺構が存在していたことが考えられ、この地点以外でも数多くの石器が出土している。弥生時代の石器に関しては調査地区から800m東側に弥生時代前期の磨製石斧の生産地である呑山遺跡があることから理解できる。

後期旧石器時代の遺物（Fig.30　1～5　PL.18）

彫器（1）・ナイフ形石器（2）・台形石器（3・4）・船底形細石核（5）である。**1**は先端部に細かな剥離を施し、鷹の嘴状に仕上げ彫器としている。周辺部には細かな剥離が認められ、使用頻度が高かったことが伺える。もう一つの見方はナイフ形石器の基部の可能性である。両側辺部に刃潰し加工を加えているが、背の刃潰しは裏面に対し垂直に施し、刃部は斜めからの剥離を持つ。下部左側辺が刃部であり、この部分は鋭利である。縦長剥片のバルブ付近に刃部を形成している。一応、ここでは彫器として上げておく。**2**は小型ナイフ形石器で、刃部下と背部に刃潰しを行い、先端部を鋭利に仕上げている。2は縦長剥片の先端部を利用し、バルブ側に加工を加え基部としている。**3**は縦長剥片のバルブ側を利用した台形石器で、両側面に刃潰しを行い二等辺三角形に形成し、その底辺部を刃部としている。石材は飴色をしたハリ質安山岩である。**4**は小型の縦長剥片の両端部に刃つぶしを加えた台形様石器である。**5**は舟底型細石核で、打面は両方からの大きな剥離を行っており、端部の細調整は無い。一方向からの剥取で、現在3本の剥取痕が残る。側面は、下方向と右方向により大きく剥取された面が残る。肉眼観察であるが、1・2・4は黒曜石製、3・5はハリ質安山岩製である。

縄文時代の遺物（Fig.30　6～24　PL.18　巻頭図版16-2）

石鏃・楔形石器・二次加工のある剥片　7～13は石鏃である。小型の石鏃、剥片鏃等がある。石材は11・13のハリ質安山岩を除いてすべて黒曜石である。**6・14～16**は楔形石器である。両端部に剥離痕が見られ片方はつぶれているものもある。すべて黒曜石である。**17～22**は剥片及び周辺部に二次加工のあるもので、17はハリ質安山岩、他はすべて黒曜石である。

玉　23・24は緑色の玉である（注1）。23がPit-1016、24がSC-24から出土した。この玉を分析した比佐陽一郎の所見は「24は径11.20mm、厚さ6.50mm、孔径2.43mm、重量1.17g、23は径9.55mm、厚さ5.50mm、孔径2.40mm、重量0.69gである※。孔は2点とも両面穿孔で、石材を含めよく似た外観である。石材は深みのある緑色で、部分的に白色の脈が入る部分もある。質感は脂肪光沢を有し、ごく僅かに透明感を持つ。水中重量の測定から得られた見かけの比重は、24が2.82、23が2.85と近い数値を示す。蛍光X線による含有元素分析では双方ともマグネシウム（Mg）、アルミニウム（Al）、珪素（Si）、カリウム（K）、チタン（Ti）、クロム（Cr）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）などが検出された。特にカリウムのピークが強い他、クロムが特徴的に現れる点なども一致しており、分析からも同一の石材と考えられる。古代の装身具に用いられる緑（青緑）色の石材には、硬玉をはじめとして、軟玉、碧玉、緑色凝灰岩、蛇紋岩、珍しいところでは天河石（アマゾナイト）などがある。しかし比重、色調、質感、含有元素といった諸要素でこれらに当てはまるものはなく、現状では同定不能である。ただし過去の調査、分析事例では、芦屋町の山鹿貝塚出土大珠（縄文時代後期中葉）や福岡市大原D遺跡3次調査出土の管玉、小玉、勾玉（縄文時代後期末～晩期初頭）と外観・比重・組成など多くの点で一致しており、同一の石材であると考えられる。」

※計測値は径、厚さはノギス、孔径はキーエンス社製：ビデオマイクロスコープの50倍観察での計測機能、重量は電子天秤による。

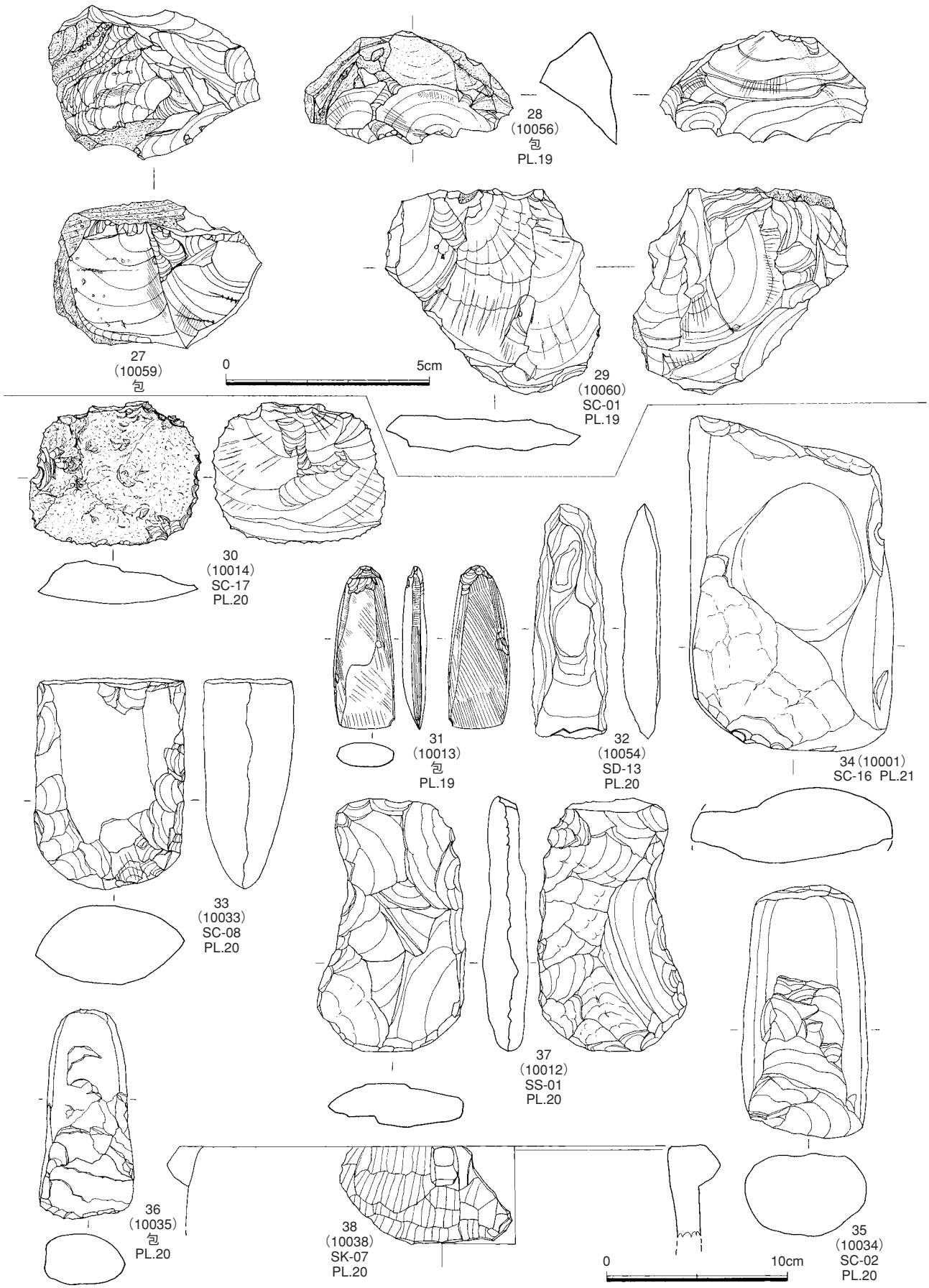


Fig.31　出土石器－２実測図（縮尺3/4・1/3）

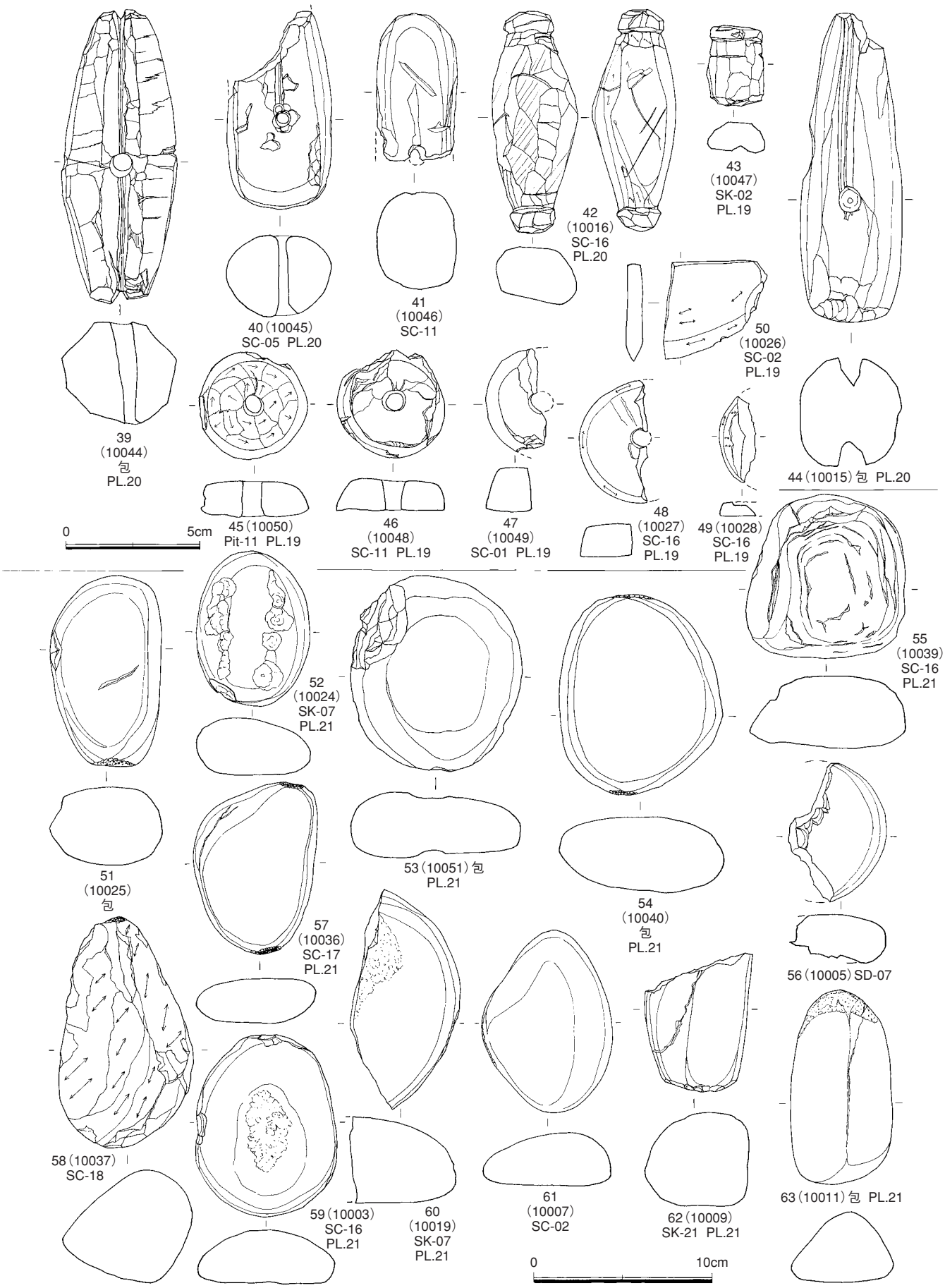


Fig.32　出土石器－3 実測図（縮尺1/2・1/3）

（注１）脱稿した後に(独)奈良文化財研究所岡村道雄氏、熊本大学小畑弘己助教授から鹿児島県大坪遺跡から同様の石器が出土していることをご教授していただいた。報告書によるとその石材は結晶片岩様緑色岩と報告されている。ただ、大坪遺跡の石器を実見していないし、今回の分析では結晶片岩様緑色岩については、分析を行っていないため、今後分析を行い報告していきたい。

石核　**27・28**は黒曜石製の石核である。27は剥取途中であるが、28は残核か側辺調整剥片の可能性もある。両方とも黒曜石である。

剥片　**29・30**は剥片で、側辺部に二次加工を加えている。両方ともサヌカイトである。

縄文時代磨製石斧　31・32・36・37は縄文時代の石斧である。**31**は蛇紋岩製の小型磨製石斧で、全面に研磨を施している。刃部断面は鋭利でノミ型の形状を呈する。**32**は風化が著しいが偏平の磨製石斧と考えられ、刃部断面は鋭利でノミ型に近い形状を呈する凝灰岩製磨製石斧である。**36**も同じ凝灰岩製磨製石斧で、刃部を破損し、再生のため加工を施している。**37**はバチ形の形状を呈する細身に仕上げた打製石斧である。上端部は節理面が残っているが、全体を細く幅広く仕上げる扁平打製石斧で、安山岩製である。

弥生時代以降の遺物（Fig.30～33　PL.18～21　巻頭図版16-2）

弥生時代磨製石斧　33・35は弥生時代の玄武岩製磨製石斧である。**33**は小型の刃部で、中間部から上端部は欠損している。再利用のため周辺部に加工を加えている。**35**は刃部を欠損した磨製石斧で小型である。これも刃部を再加工するために加工段階である。**34**は凝灰岩の石材で、大きく剥離し、石斧の素材とした形跡がある。加工途中で終了している。

石鍋　**38**は石鍋の破片で復元口径26cmを測る。

土錘　25･26は土錘である。**25**は小型で現長2.7cm、径0.7cm、**26**は大型で現長4.7cm、径2.2cmを測る。

石錘　**39～44**は石錘である。形状・用途等様々であるが、遺跡の周辺部（川・湾・干潟）を考えると理解できる。滑石製である。

紡錘車・石包丁　**45～49**は滑石製紡錘車である。**50**は石包丁の破片でSC-02から出土した。輝緑凝灰岩製である。

磨石・打石・凹石　**51～73**は磨石・打石・凹石である。磨石のみを用途としているもの52・55・56・61・64・65・66の7点、磨石と打石の両方を用途しているもの51・54・57・62・63・68の6点、凹石が53・59・60・67・69～73の9点である。石材は玄武岩が54～56・59・60・65・67・69～72、花崗岩が51～53・57・61～64・66・68・73、凝灰岩が58である。

砥石　74～78は砥石である。**74**は砂岩製の粗研ぎ用砥石で、上下が破損している。全面を使用した痕跡がある。**75**は中央部が僅かに窪むがほぼ四面を使用した砥石である。石材が砂岩で、粗研ぎ用砥石と思われる。**76**は大型の粘板岩製の仕上げ用砥石である。板状に剥離している面を段差があるにもかかわらず丁寧に仕上げ段差を無くしている。上下面を使用している。**77**は全面をもれなく使用した硬質砂岩製の仕上げ用砥石である。流砂から中研ぎ用と考えられる。**78**は全面をもれなく使用している粘板岩製の仕上げ用砥石である。

台石　**79**はSC-16（P-27）床面近くから出土した。大型で、据わりも良い。玄武岩製である。

鉄滓について

住居址・溝状遺構・土壙等から多くの鉄滓が出土した。又、SSとした鉄滓が集中的に広がりをもった土壙状遺構の鉄滓は図示していないが、図版PL.22に写真を掲載した。この中で、鉄分が僅かに残っているものを調べるために磁石を使用した。その結果、SC-14が１点、SC-19床面から１点、SK-07からは７点、SK-12からは１点、Pit-11からは２点、SS-03からは１点、SS-04からは４点、SS-07からは２点、SS-08からは２点検出できた。図版PL.22内にFuの文字を挿入した。今回は写真報告だけにとどめておく。

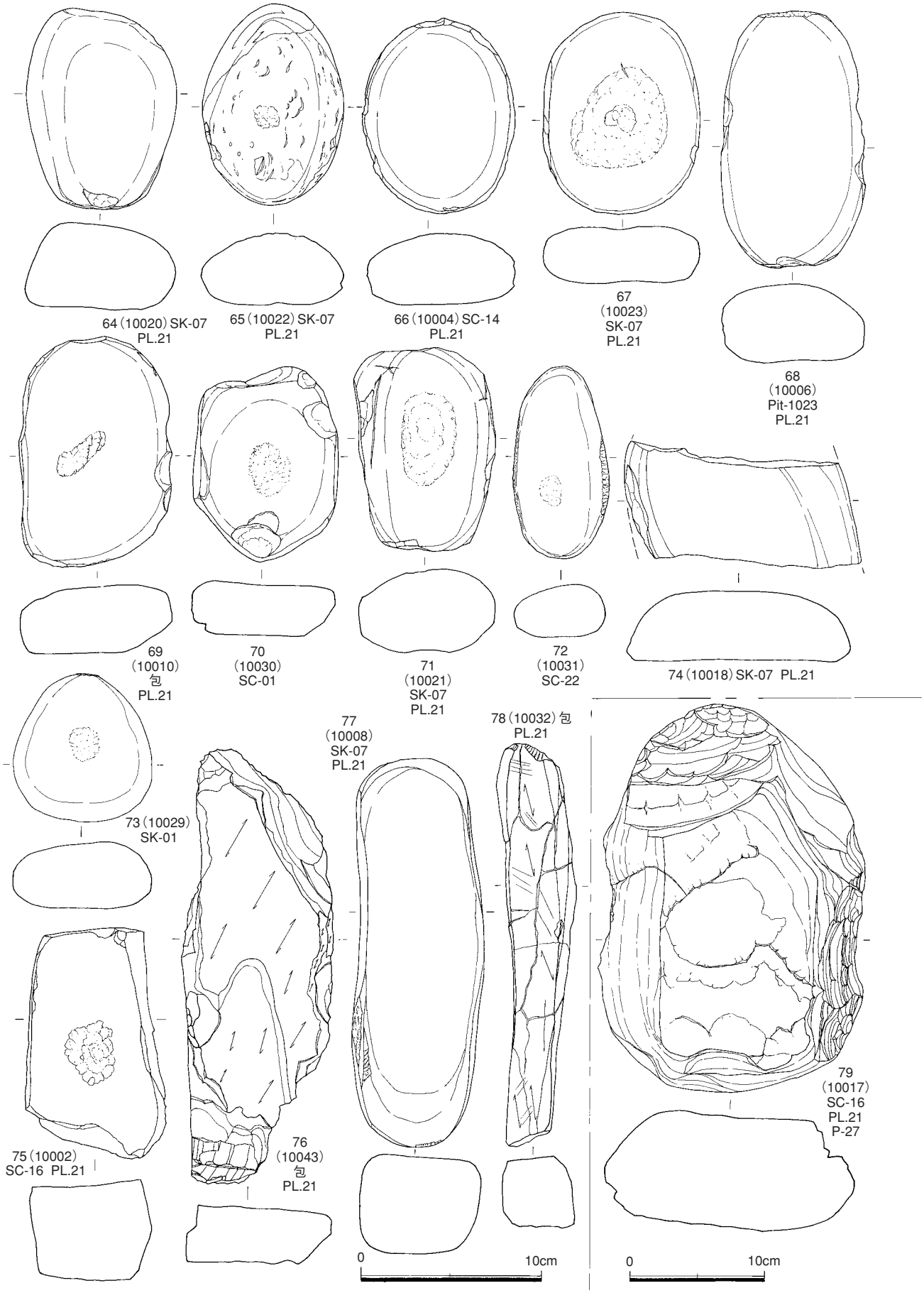


Fig.33　出土石器－４実測図（縮尺1/3・1/4）

5）金属器

今回の調査では２点の金属器が出土した。資料の概要と保存処理作業について記す。

鉄鎌（Fig34・巻頭図版16-2）　竪穴住居址SC-16内から出土した鉄製の鎌である。出土直後は土と錆に覆われ大きく膨らんでいたが、保存処理によって本来の姿に近づくことができた。いわゆる曲刃鎌で、腐蝕のため刃部先端と基部下端、身の一部を欠くが、全容を知るには十分である。現存長18.6cm、刃部の最大幅2.6cm、基部の身幅2.9cm、背部の厚さ２mm前後を計る。基部は「６」の字状に折り返されている。古墳時代の鎌としてはやや細身で華奢な感はあるものの、通有の形状であり実用品として問題ないと考える。しかし基部の周辺に木質の残存は見られなかった。

なお資料はエアブラシ、グラインダーによるクリーニングの後、アクリル樹脂（パラロイドB-72）を塗布し、セルロース系接着剤（セメダインC）により接合。欠損部はエポキシ樹脂FRP板を芯にして、鉄粉入りエポキシ樹脂（国際ケミカル：ポップメタル）を補填している。

耳環（Fig34・巻頭図版16-2）　遺構検出面での出土である。著しい腐蝕により心材は痩せ細り、開口部端部も失われている。表層を覆っていた金薄板も環体内側を除き大半が剥落し、辛うじて残っている部分も浮き上がって今にも剥落寸前の状態である。その状況などから見て銅の心材に金薄板を被せた構造であったと考えられる。クリーニング作業の後、蛍光Ｘ線分析装置による材質調査を行ったところ、心材は極めて純度の高い（不純物を含まない）銅、金薄板は僅かに銀を含む金であることが明らかになった。更に剥落した微細な金薄板についてエポキシ樹脂に包埋、研磨して、電子顕微鏡により薄板の厚さを測定した結果、概ね40ミクロン前後との結果が得られている。これは、過去同様な調査を行った那珂67次出土資料でも35～40ミクロンとなっており（比佐他2001）、この数値の近似が偶然か、或いは金工技術に基づく規格性か、今後の類例調査が注目される。

耳環は墳墓の副葬品としての出土が一般的であるが、集落遺跡からの出土例も希にあることから、この耳環も日常生活との関連で考えることも不可能ではない。しかし遺構に伴う出土ではなく、遺跡周辺は多くの後期群集墳が存在していることがこれまでの調査でも明らかになっていることから、この耳環もそれらの副葬品が盗掘や破壊に伴って紛れ込んだ可能性が強いと思われる。

資料はクリーニング、分析調査の後、ベンゾ・トリ・アゾールを溶かしたアクリル樹脂（パラロイドB-72）に浸漬し、安定化と強化を図っている。（比佐　陽一郎）

比佐陽一郎・片多雅樹2001「那珂遺跡群67次調査出土資料の保存科学的調査について」『那珂27－那珂遺跡群67次調査の概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第672集　福岡市教育委員会

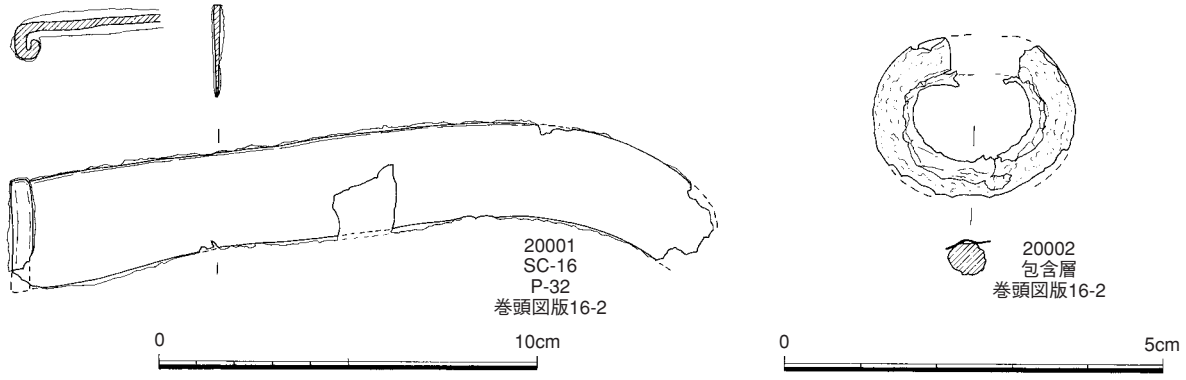


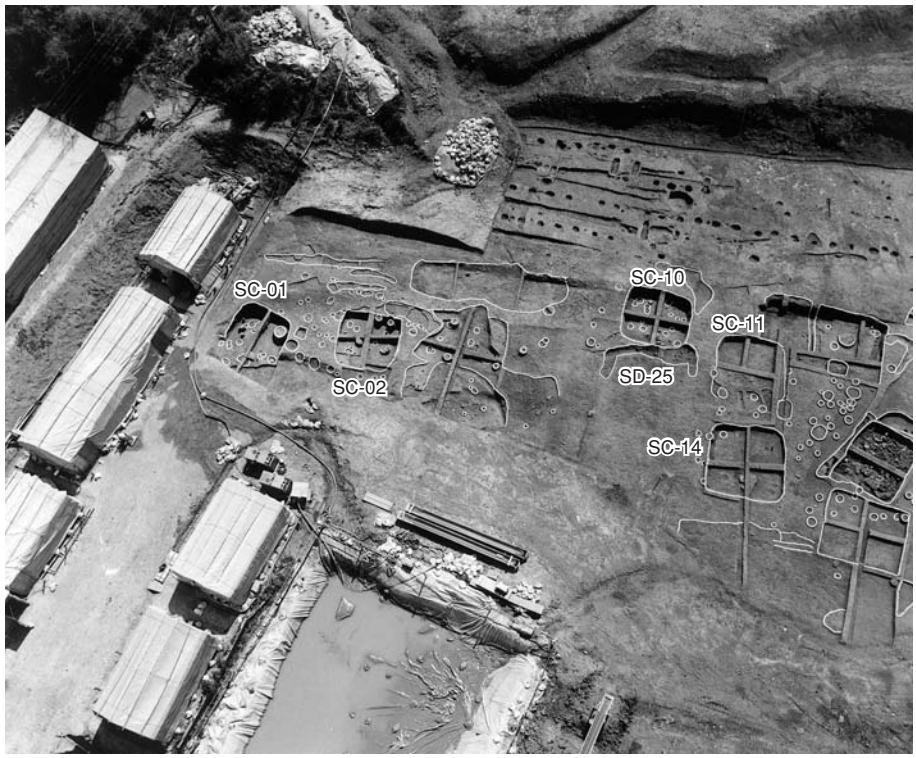
Fig.34　金属器実測図（縮尺1/1・1/2）

図　　版

西側調査区20次調査
西山側金屎前方後円墳

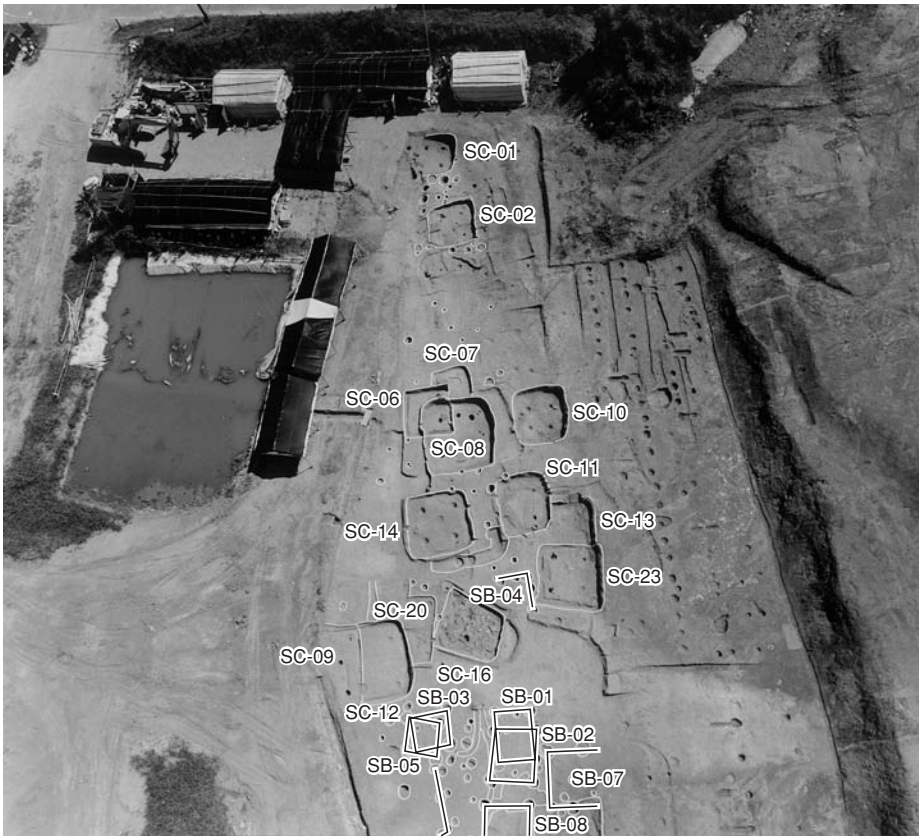
1. 第27次調査全景（北東から）

2. 第27次調査全景（北西から）

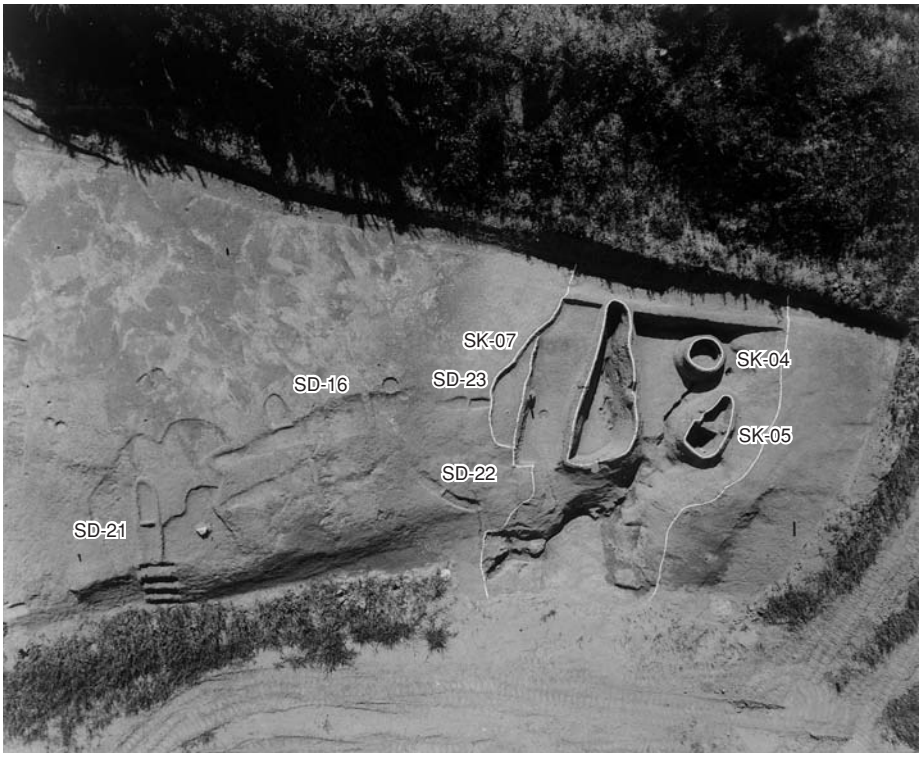


1. 東側調査区遠景（北西から）

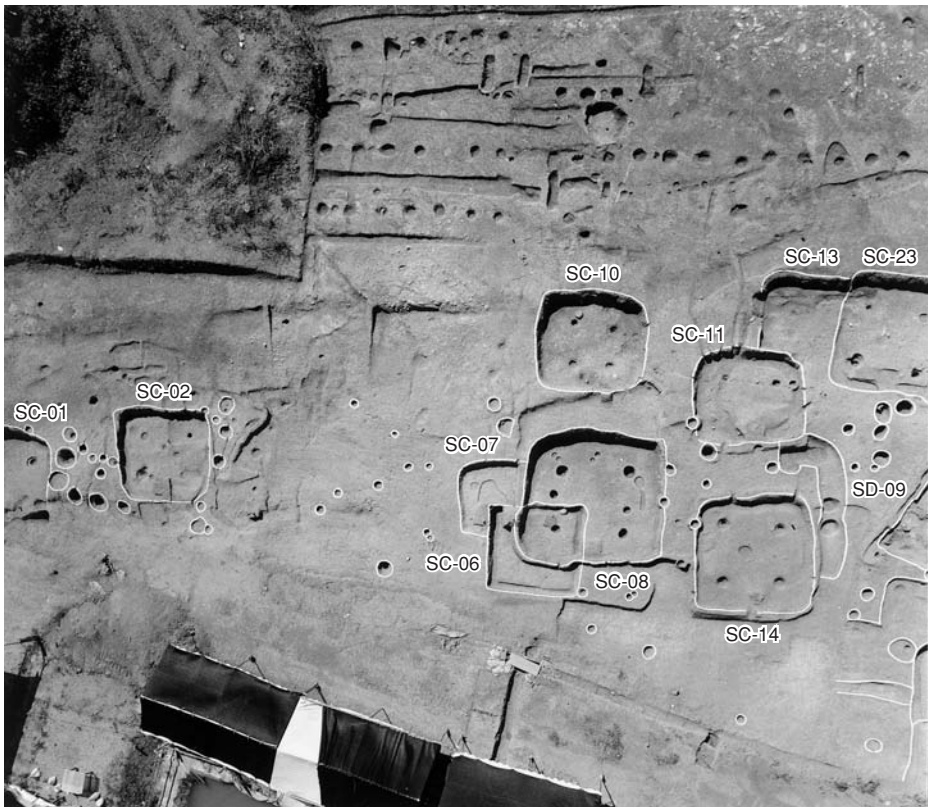
2. 中央部調査区遠景（北西から）



1. 東側調査区遠景（西から）



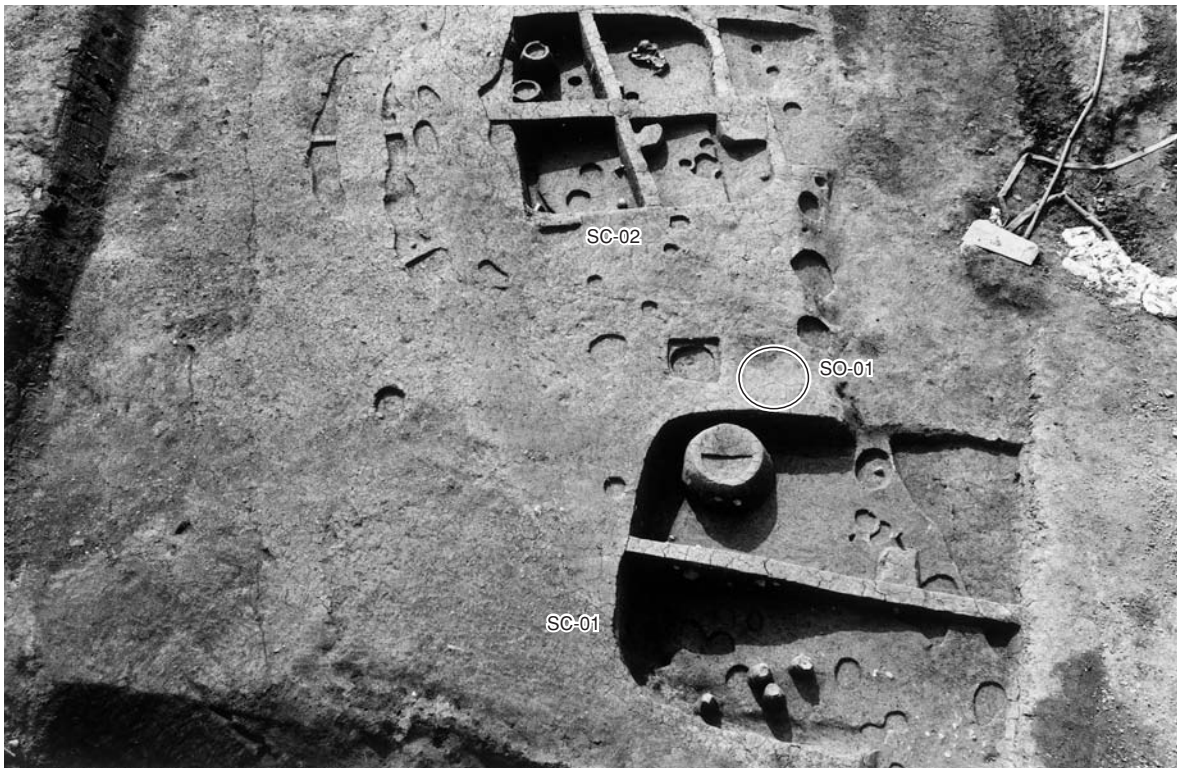
2. 西側調査区遠景（北西から）



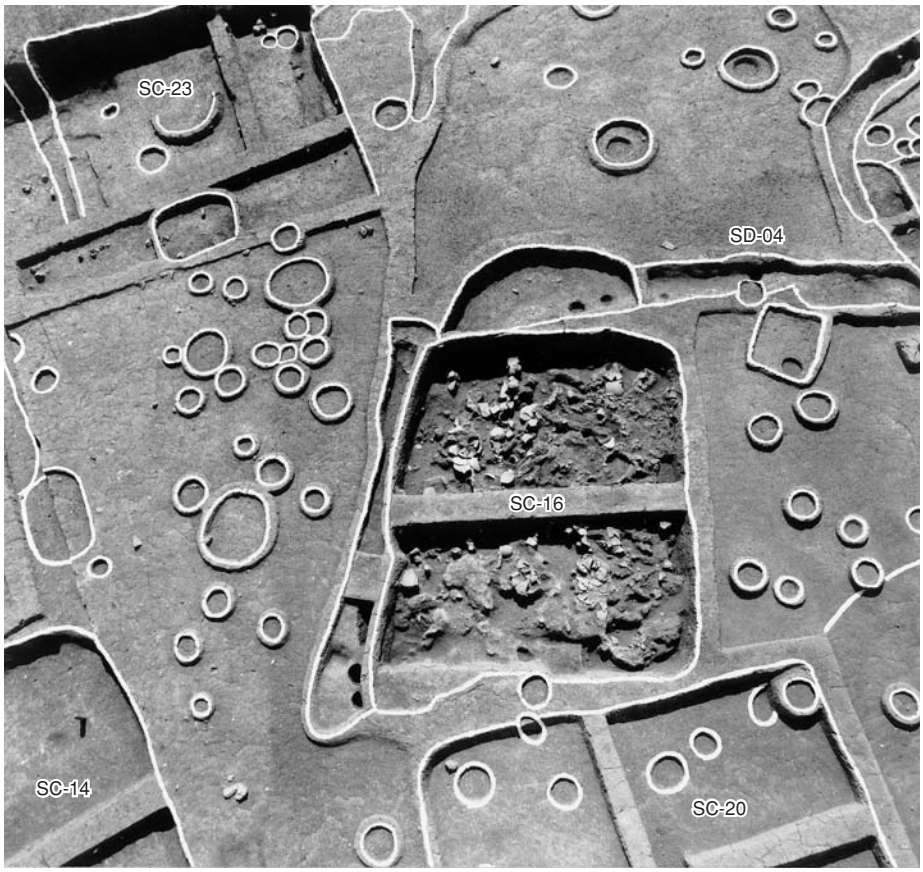
1. 東側調査区近景（北西から）

2. 中央部調査区近景（北西から）

1. SC-10～14・16・23（東から）



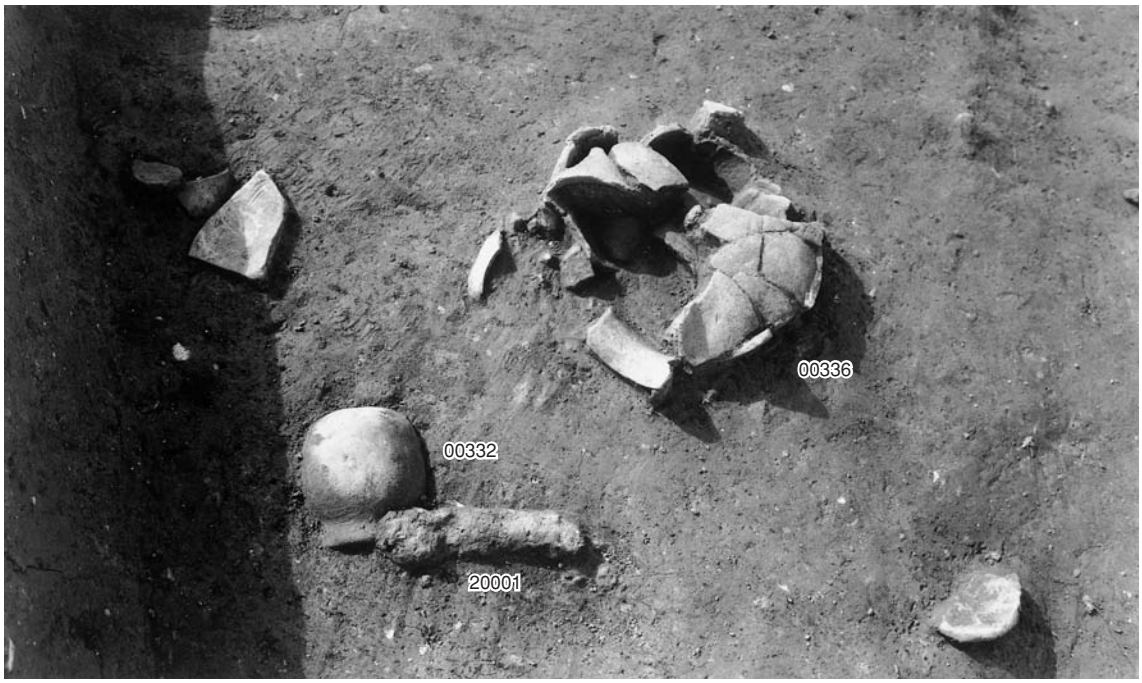
2. SC-01・02近景（東から）



1. SC-16と柱穴群（北から）

2. SC-16焼土と土器検出状況（南から）

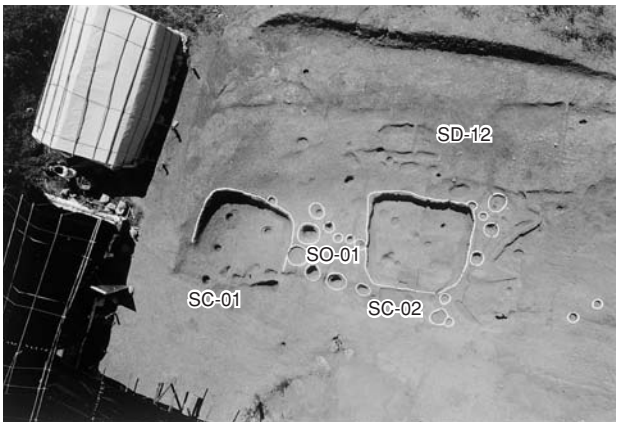
1. SC-16焼土と土器検出状況（東から）



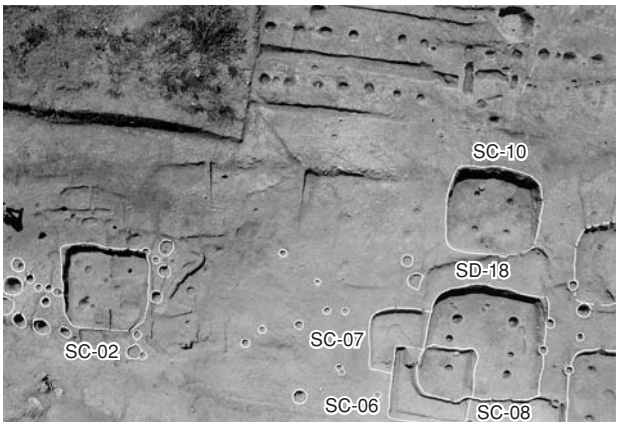
2. SC-16鉄製鎌と土器出土状態（東から）

1. 調査区全景（北西から）

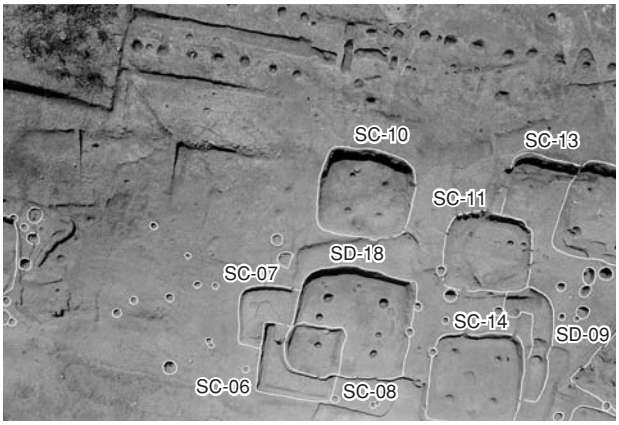
2. 調査区東側全景（北西から）



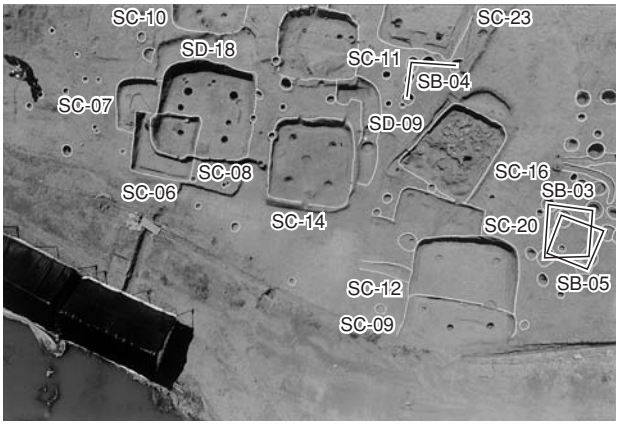
3. SC-01・02完掘状況（北西から）



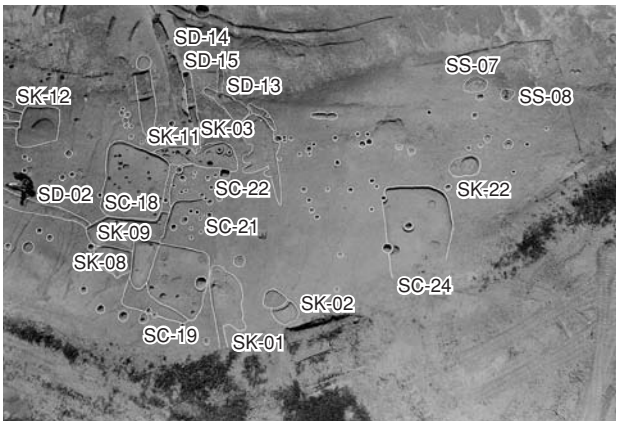
4. SC-02～10完掘状況（北西から）



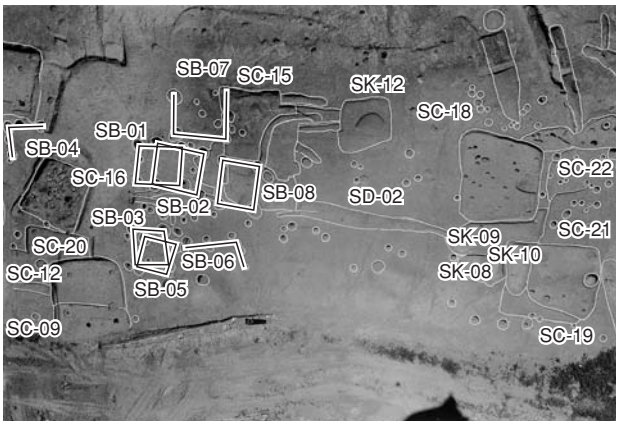
5. SC-06～08、10～14完掘状況（北西から）



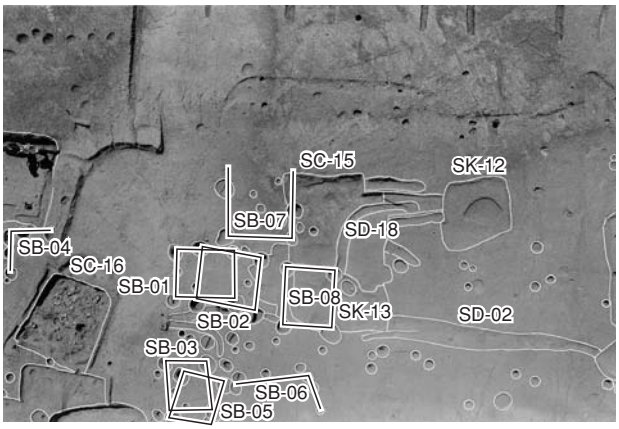
6. SC-06～14、16・20・23完掘状況（北西から）



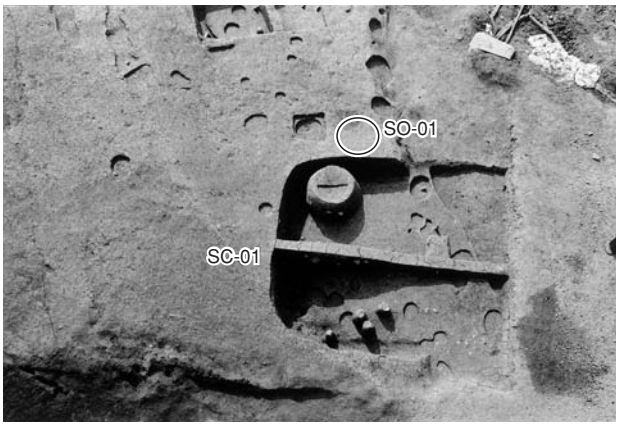
1. SC-18・19・21・22・24、SK-01～03他（北西から）



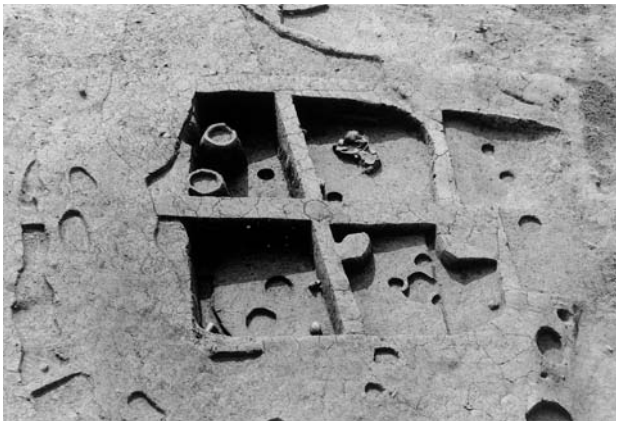
2. SC-09・15～22、SD-01～03他（北西から）



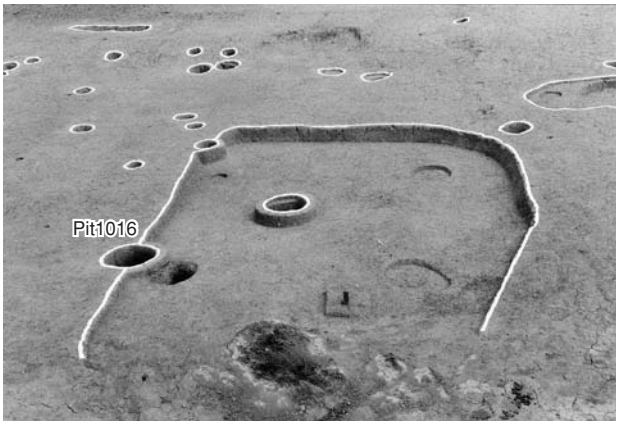
3. SC-15～17、SD-01～03、SK-12・13他（北西から）



4. SC-01、SO-01近景（東から）



5. SC-02調査状況（東から）



6. SC-24完掘状況（北西から）

1. SC-16　焼土と土器検出状況（東から）

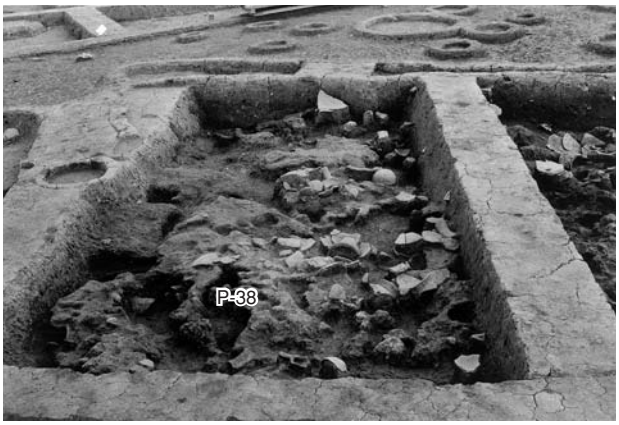
2. SC-16　焼土と土器検出状況（南から）

3. SC-16　南側焼土・土器検出状況（東から）

4. SC-16　南側焼土・土器検出状況（東から）

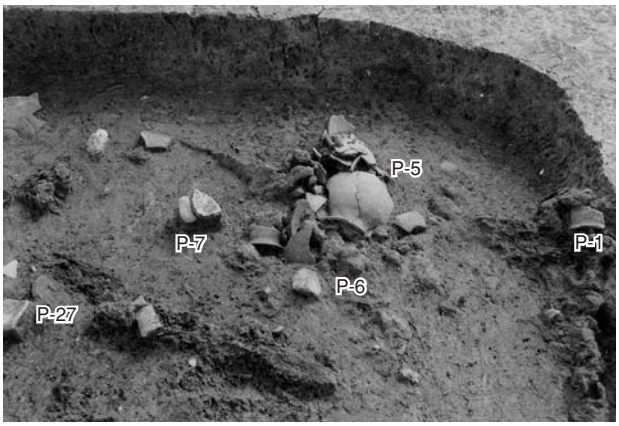
5. SC-16　南側焼土・土器近景（南から）

6. SC-16　南側焼土・土器近景（西から）

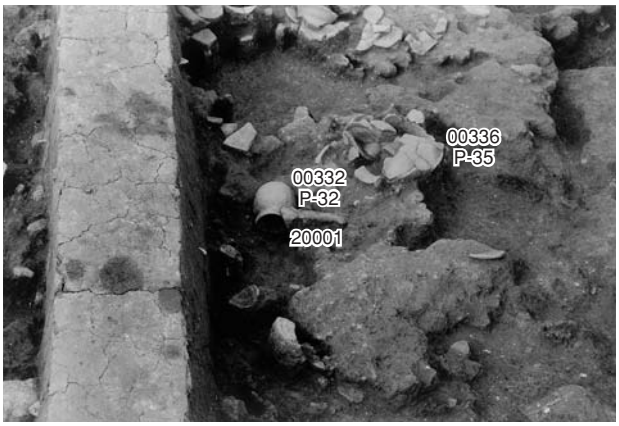


1. SC-16　北側焼土・土器近景（西から）

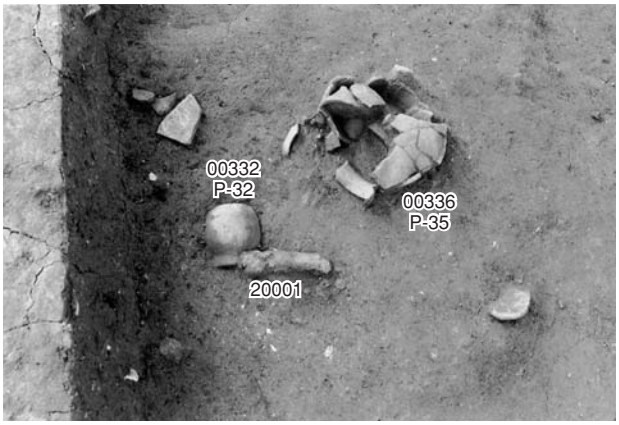
2. SC-16　北側焼土・土器近景（東から）



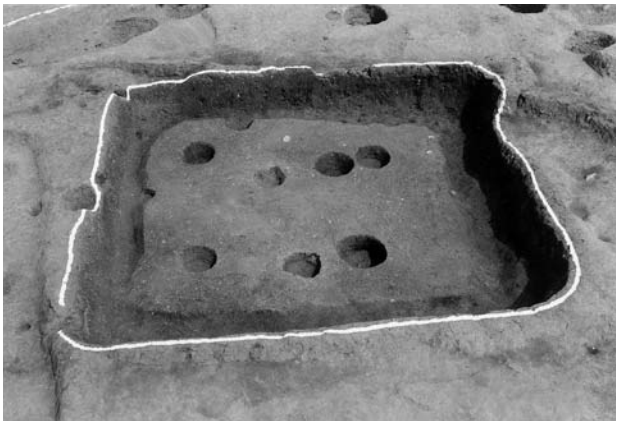
3. SC-16　南側焼土・土器検出状況（南から）



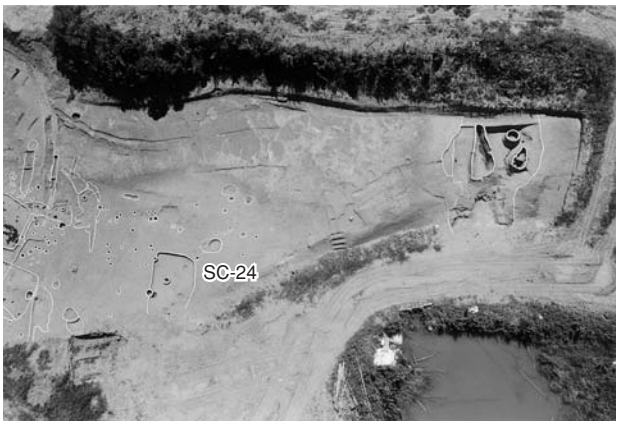
4. SC-16　北側焼土・土器検出状況（東から）



5. SC-16　鉄製鎌・土器出土状況（東から）

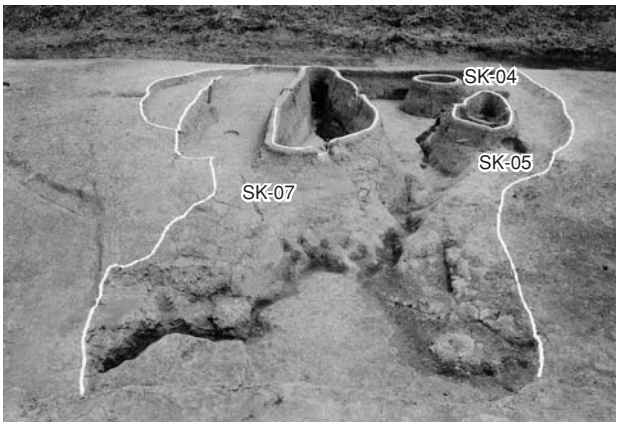


6. SC-16　完掘状況（西から）

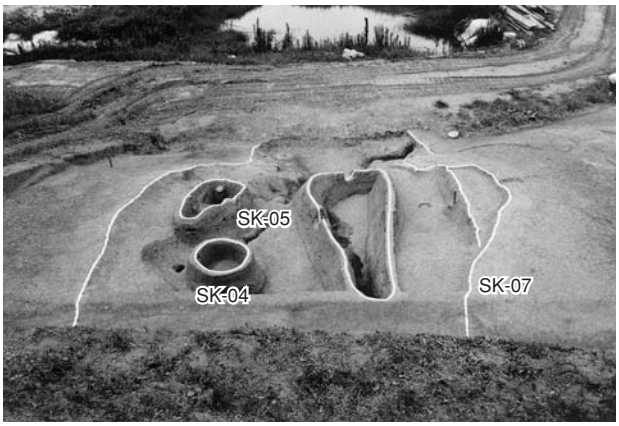


1. 西側調査区全景（北西から）

2. SS-05全景（北から）



3. SK-04～07検出状況（北西から）

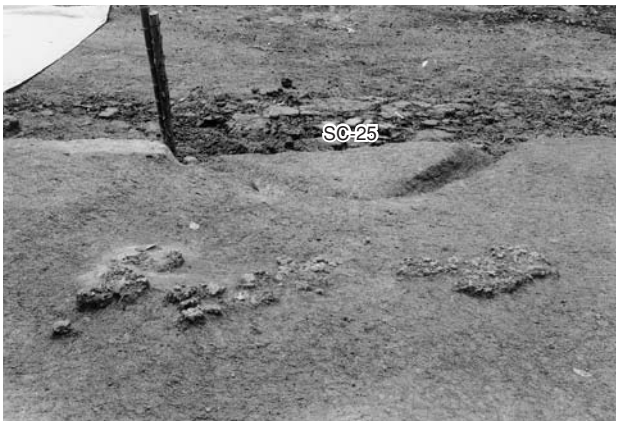


4. SK-04～07全景（南から）

5. SK-01検出状況（南から）

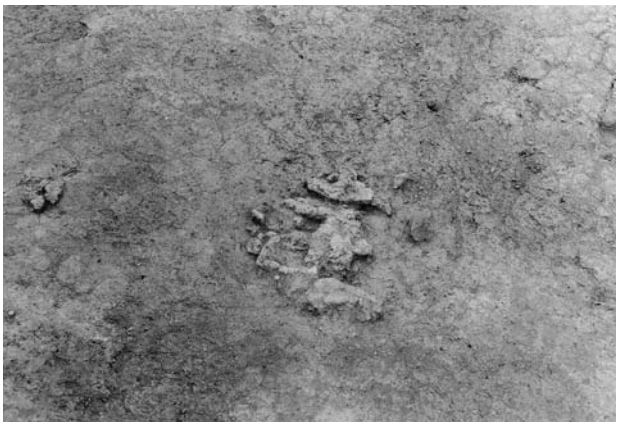
6. SK-01内出土土器検出状況（南から）

1. SC-25と鉄滓検出状況（北から）



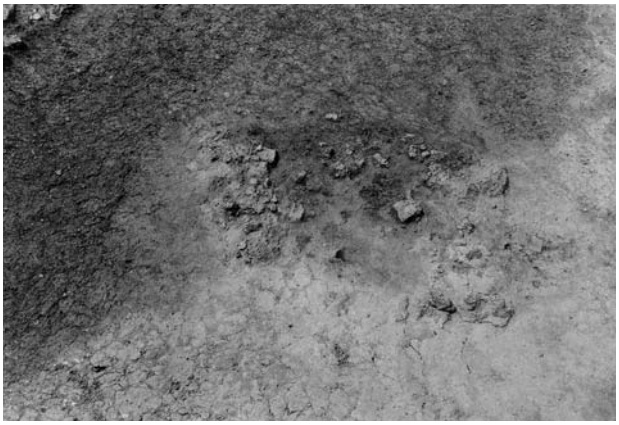
2. SC-25と鉄滓検出状況（南から）

3. SS-04検出状況（東から）



4. SS-03検出状況（北から）

5. SS-08検出状況（西から）



6. SS-04検出状況（北から）

74
(00241)
SC-11
Fig.21

219
(00350)
SK-17
Fig.28

26
(00337)
SC-02・03
Fig.18

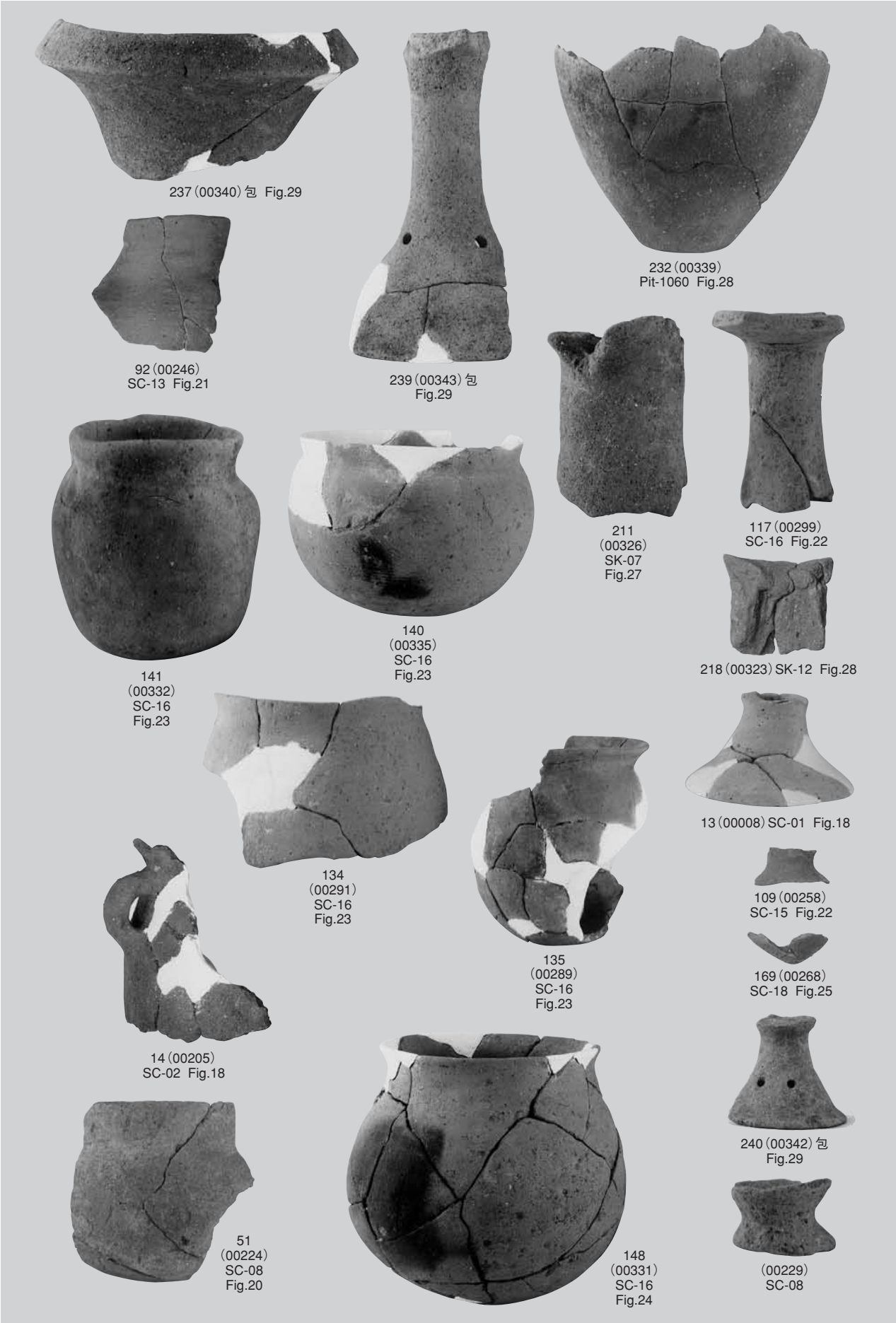
139
(00336)
SC-16
Fig.23

207
(00327)
SK-07
Fig.27

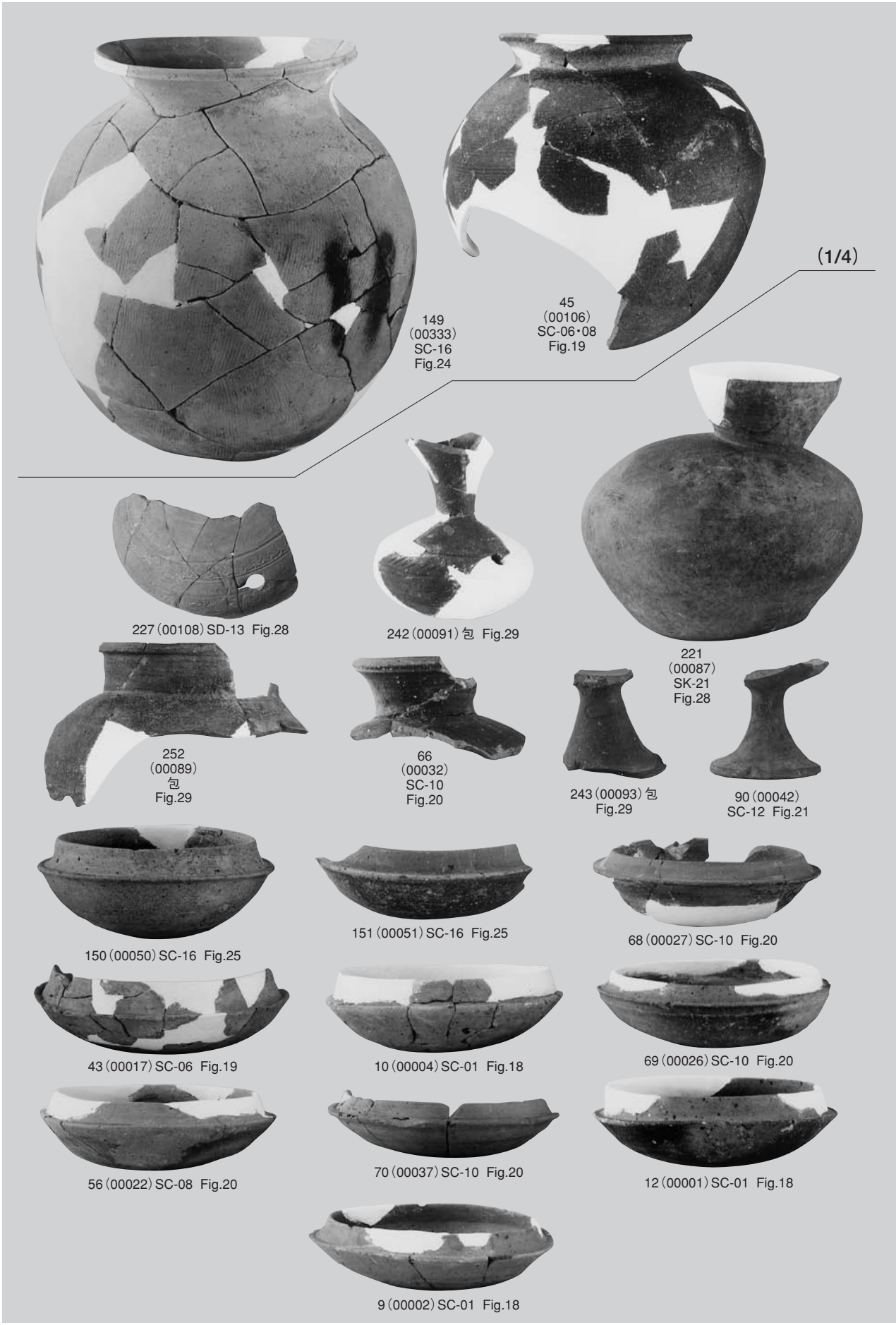
143
(00338)
SC-16
Fig.24

144
(00334)
SC-16
Fig.24

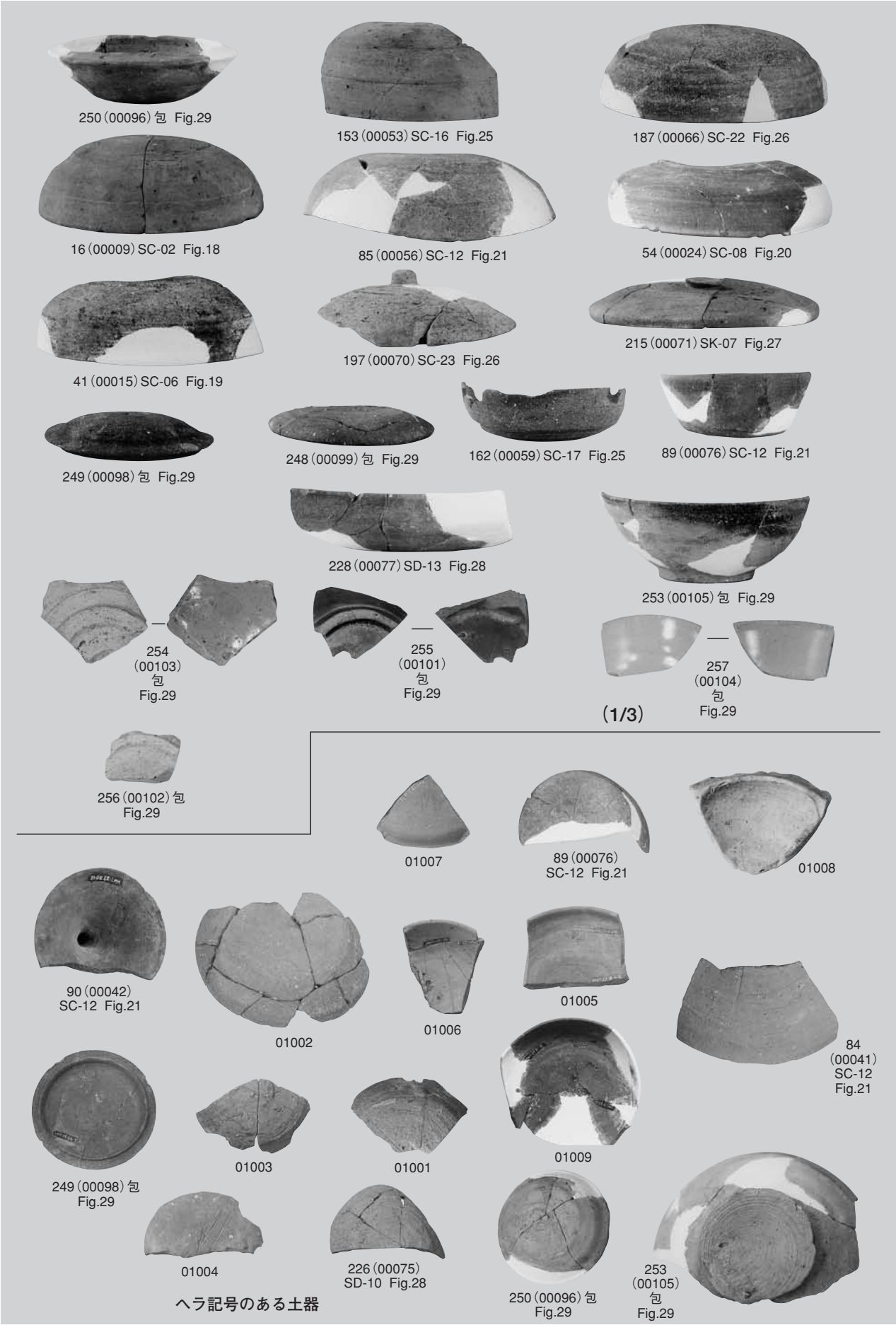
出土土器－１（縮尺1/4）



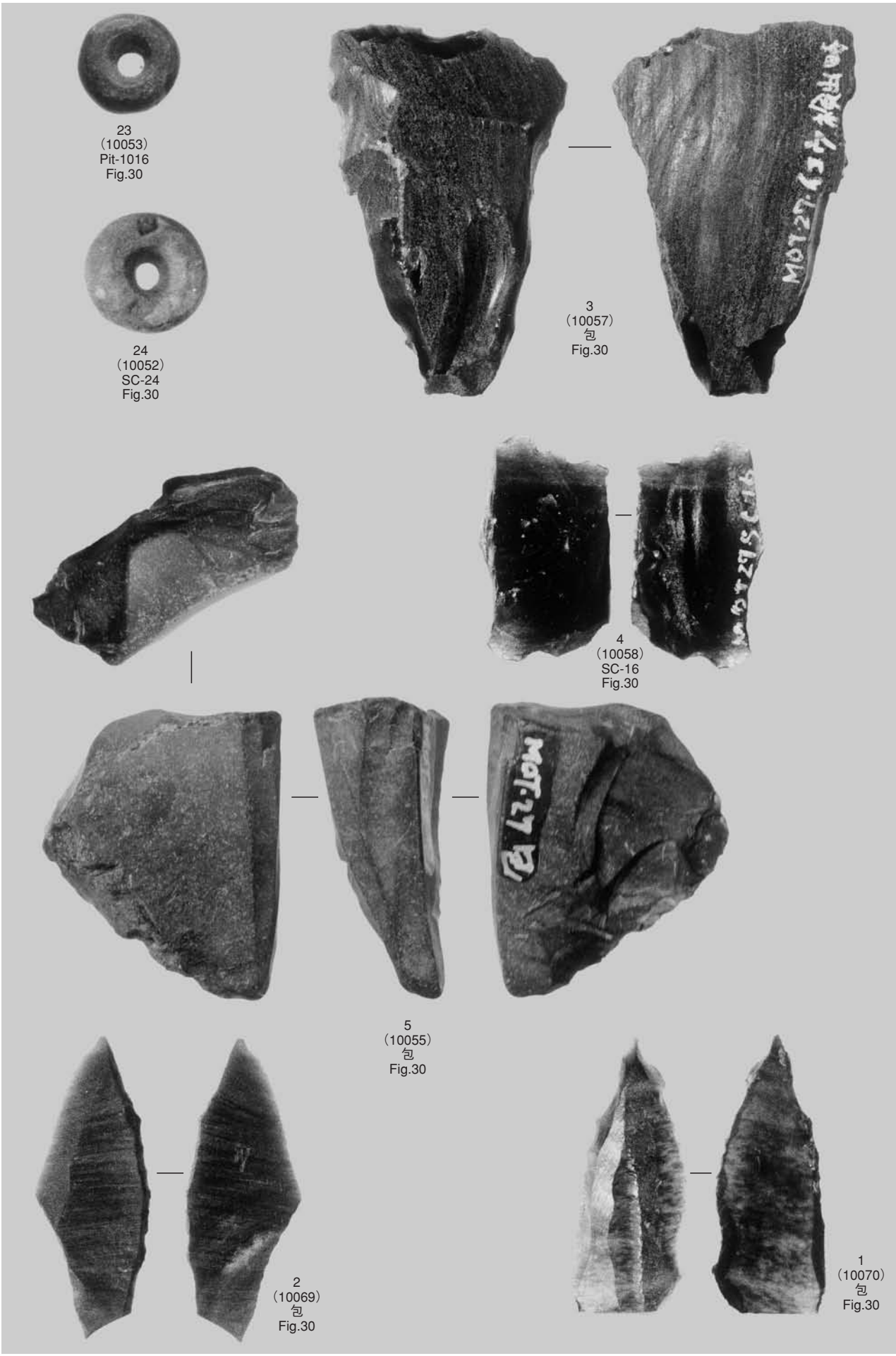
出土土器ー２（135・148・232・237は縮尺1/4、他は1/3）



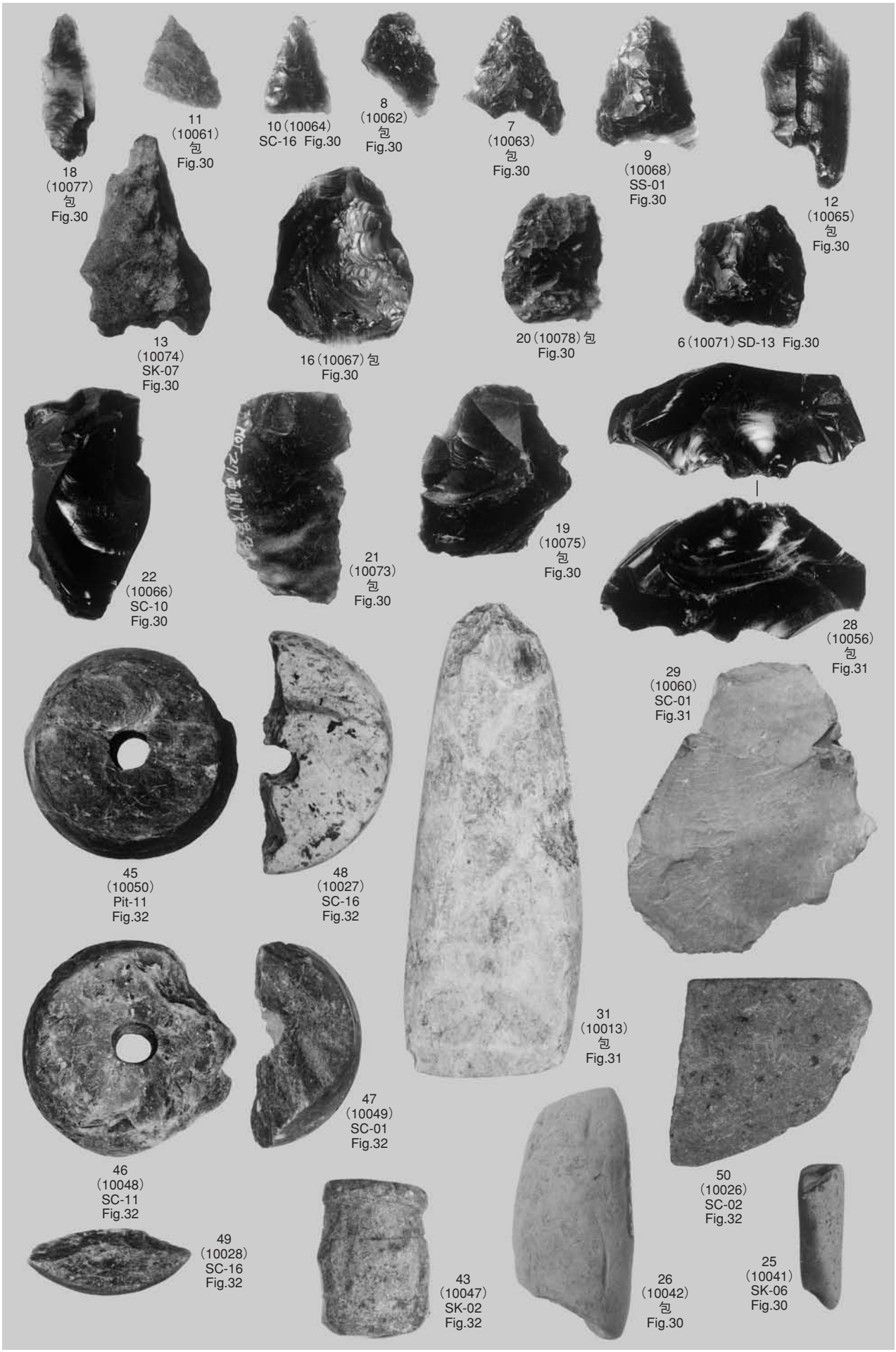
出土土器ー 3（縮尺1/3・1/4）



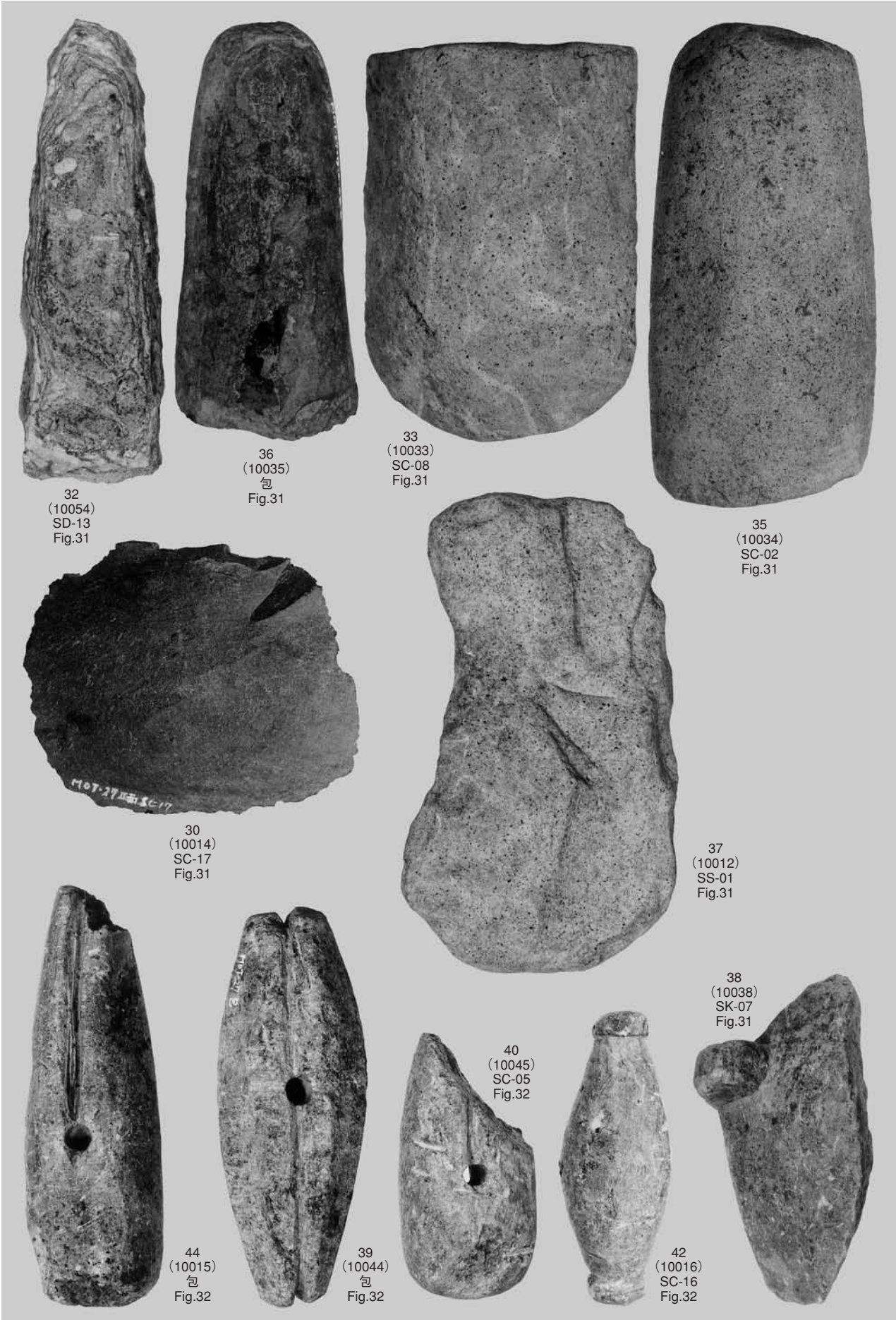
出土土器ー４（縮尺1/3・縮尺不統一）


23
(10053)
Pit-1016
Fig.30
24
(10052)
SC-24
Fig.30
3
(10057)
包
Fig.30
4
(10058)
SC-16
Fig.30
5
(10055)
包
Fig.30
2
(10069)
包
Fig.30
1
(10070)
包
Fig.30

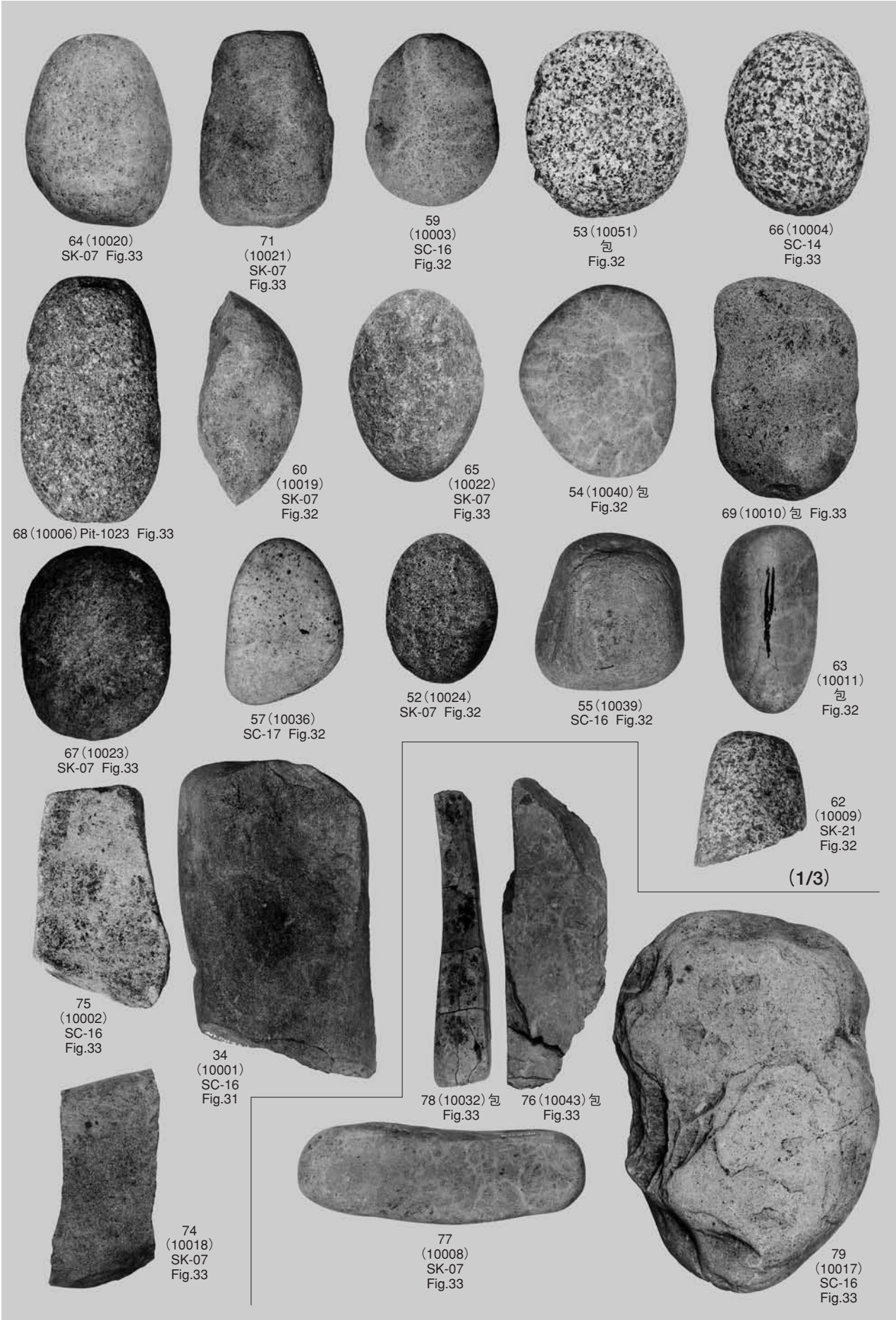
出土石器－１（縮尺2/1）


18
(10077)
包
Fig.30
11
(10061)
包
Fig.30
10(10064)
SC-16 Fig.30
8
(10062)
包
Fig.30
7
(10063)
包
Fig.30
9
(10068)
SS-01
Fig.30
12
(10065)
包
Fig.30
13
(10074)
SK-07
Fig.30
16(10067)包
Fig.30
20(10078)包
Fig.30
6(10071)SD-13 Fig.30
22
(10066)
SC-10
Fig.30
21
(10073)
包
Fig.30
19
(10075)
包
Fig.30
28
(10056)
包
Fig.31
29
(10060)
SC-01
Fig.31
45
(10050)
Pit-11
Fig.32
48
(10027)
SC-16
Fig.32
31
(10013)
包
Fig.31
46
(10048)
SC-11
Fig.32
47
(10049)
SC-01
Fig.32
50
(10026)
SC-02
Fig.32
49
(10028)
SC-16
Fig.32
43
(10047)
SK-02
Fig.32
26
(10042)
包
Fig.30
25
(10041)
SK-06
Fig.30

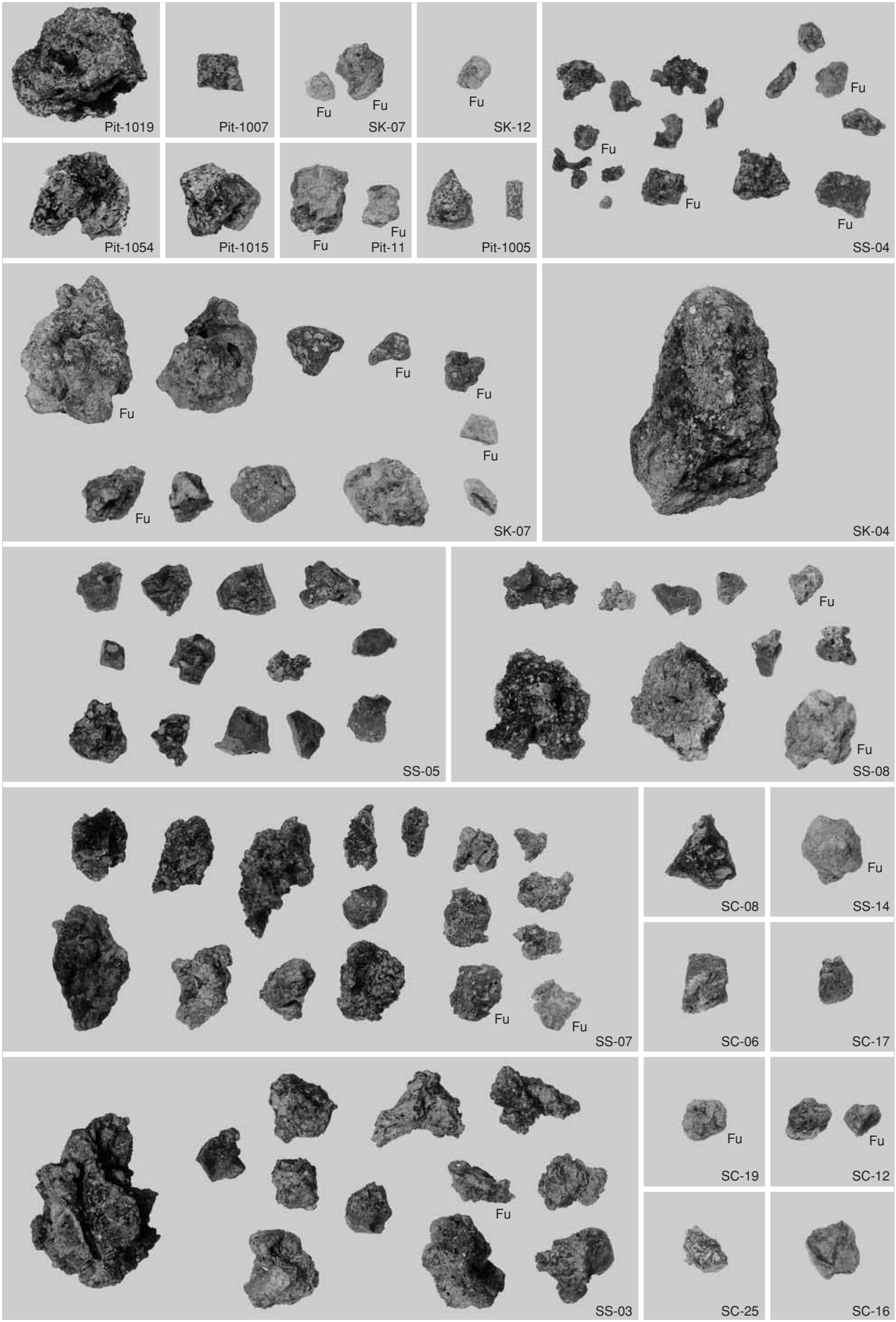
出土石器－２（縮尺1/1）


32
(10054)
SD-13
Fig.31
36
(10035)
包
Fig.31
33
(10033)
SC-08
Fig.31
35
(10034)
SC-02
Fig.31
30
(10014)
SC-17
Fig.31
37
(10012)
SS-01
Fig.31
38
(10038)
SK-07
Fig.31
40
(10045)
SC-05
Fig.32
44
(10015)
包
Fig.32
39
(10044)
包
Fig.32
42
(10016)
SC-16
Fig.32

出土石器－３（縮尺2/3）



出土石器ー 4（縮尺1/3・1/4）



※Fuは鉄分を含む鉄滓

出土鉄滓（縮尺不統一）

Ⅵ　第28次調査の記録

（調査番号　０３１０）

例　言

1．本報告書は西区大字元岡字池の浦において九州大学の移転に伴い、2002年２月１日～６月30日にかけて福岡市教育委員会が発掘調査を行った元岡遺跡第28次調査の調査報告書である。

2．本書に収録した調査のうち試掘調査と発掘調査の2002年２月１日から４月までを吉留秀敏が、それ以降の発掘調査を屋山洋が担当した。

3．遺構実測の作成は土井良伸・吉留・屋山が、周辺測量は土井良・吉留・屋山が、遺構の写真撮影を吉留・屋山が、遺物の実測・写真撮影は吉留・屋山が行った。

4．本書で用いた方位は磁北で真北より6°21”西偏する。

6．遺構遺物番号はそれぞれ通し番号とした。

7．本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

調査番号	0310	遺跡番号	022782	分布地図番号	129　桑原
地　　番	福岡市西区大字元岡字池の浦地内				
遺跡略号	MOT-28	調査面積	2,214㎡	調査原因	大学移転に伴う造成
調査期間	2002年2月1日～2002年6月30日			担 当 者	吉留秀敏・屋山　洋

Ⅵ　第28次調査の記録

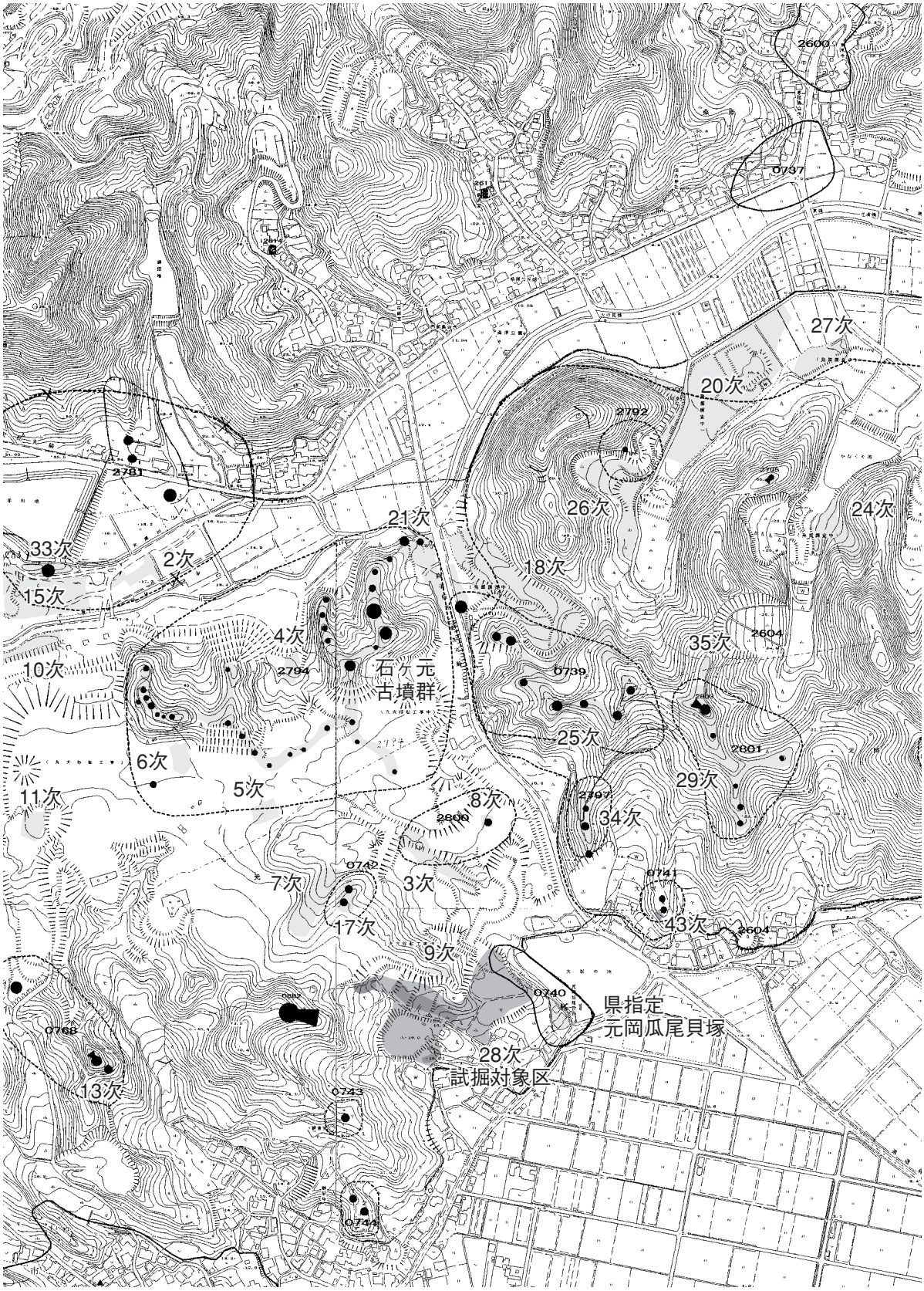


Fig.1　第28次調査地点位置図（1/8,000）

1．はじめに

第28次調査地点は大坂池の西側に位置しており、池の浦前方後円墳から東南に向かって伸びる丘陵とそれを挟む谷部を含む。現在東南側を通る道路から南側は３mほど低くなっているが、少なくとも古代ぐらいまでは道路下まで今津湾が入り込んでいた可能性が高く、28次調査区の南側には広大な今津湾とその干潟が広がっていたものと思われる。28次調査区は造成の予定面積が20,000㎡と広かったため、まず2002年の２月から３月にかけて吉留が遺構の密度や分布状況と時期などを確定させるための試掘調査を行った。その結果については後述するが、大坂池北西岸で貝層を含む縄文時代の包含層、９次調査西側谷部（Fig.2のT1～T3）で弥生時代から中世の遺物を含む谷、西端部（T4・T21）で中世と思われる土坑や柱穴を確認した。このうち大坂池北西岸で検出した縄文時代の貝塚に関しては協議の結果現地保存をすることが決定し、盛土と擁壁工事は貝塚を避けて行った。残りの地点は池の浦前方後円墳から延びる丘陵上に古墳の可能性がある高まりが確認されたのでそれをＡ区とし、９次調査西側の谷をＢ区、西端の谷部をＣ区とし、調査面積はそれぞれＡ区が300㎡、Ｂ区2500㎡、Ｃ区290㎡を測る。

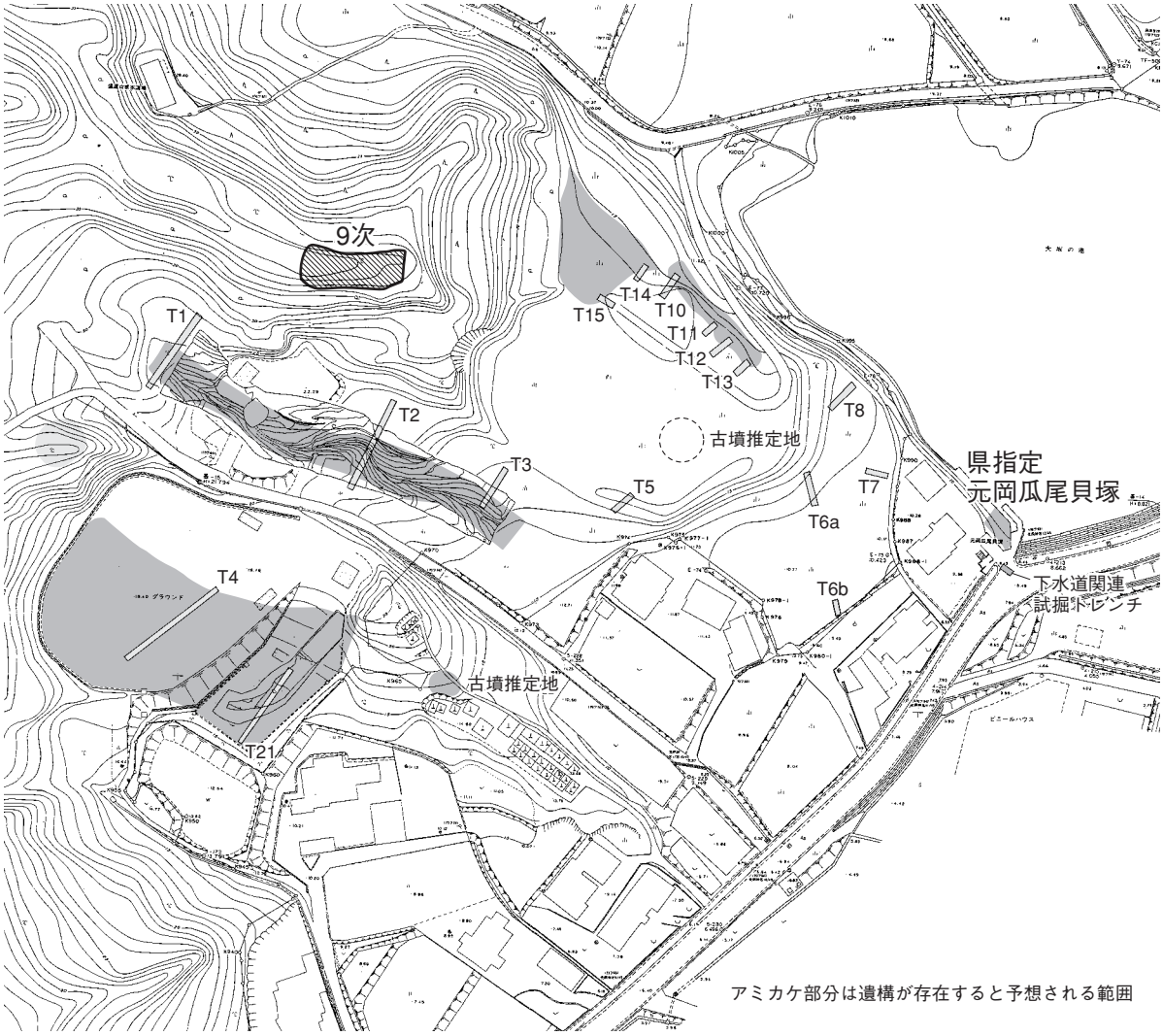


Fig.2　調査区トレンチ配置図（1/2,000）

2．28次周辺（瓜尾西地区）試掘調査の報告

1）調査の経過

九州大学移転地内の西区大字元岡字池の浦地内において学内体育講義用グラウンド造成工事が予定されたことを受け、2002年２～３月に周辺の試掘調査を実施した。この付近は農業用溜池である大坂池の西岸であり、県指定史跡「瓜尾貝塚」の隣接地並びに後背地にあたることから、特に縄文時代遺跡や遺物の有無に注意した。また瓜尾貝塚西側丘陵上に20年以上前までは、横穴式石室を有する古墳が存在していたことが伝えられ、その再確認にも留意した。対象地は試掘調査前に雑木林と畑地跡の荒れ地であり、伐採を行い調査に備えた。なお現地では各所に基盤の花崗岩真砂土採掘を目的とする土砂採掘の跡があり、相当の遺跡破壊が予測された。

2）調査の結果

試掘調査は重機を用い工事予定地の全体にトレンチを設けた。

トレンチＴ１～３は旧畑地にあたる。試掘で直線的な谷部１を検出し、斜面などから縄文時代から古代の包含層と柱穴などを検出した。包含層の上位には全体に１～２mの表土や造成土がある。

トレンチＴ４、Ｔ21は旧グラウンド、ゲートボール場の範囲である。試掘の結果埋没谷２があり、古代から中世の包含層と柱穴などを検出した。

トレンチＴ５～８は瓜尾貝塚の西側丘陵である。現在は比高差約５mの南北２段に造成された畑地跡である。試掘の結果ではどの地点も深さ２～３m以上に掘削され、コンクリートやアスファルト等が堆積していた。ある時期に全体が土砂採掘で掘削され、その後に石材の基礎等を投棄、整地して現況の地形となっていた。推定さ

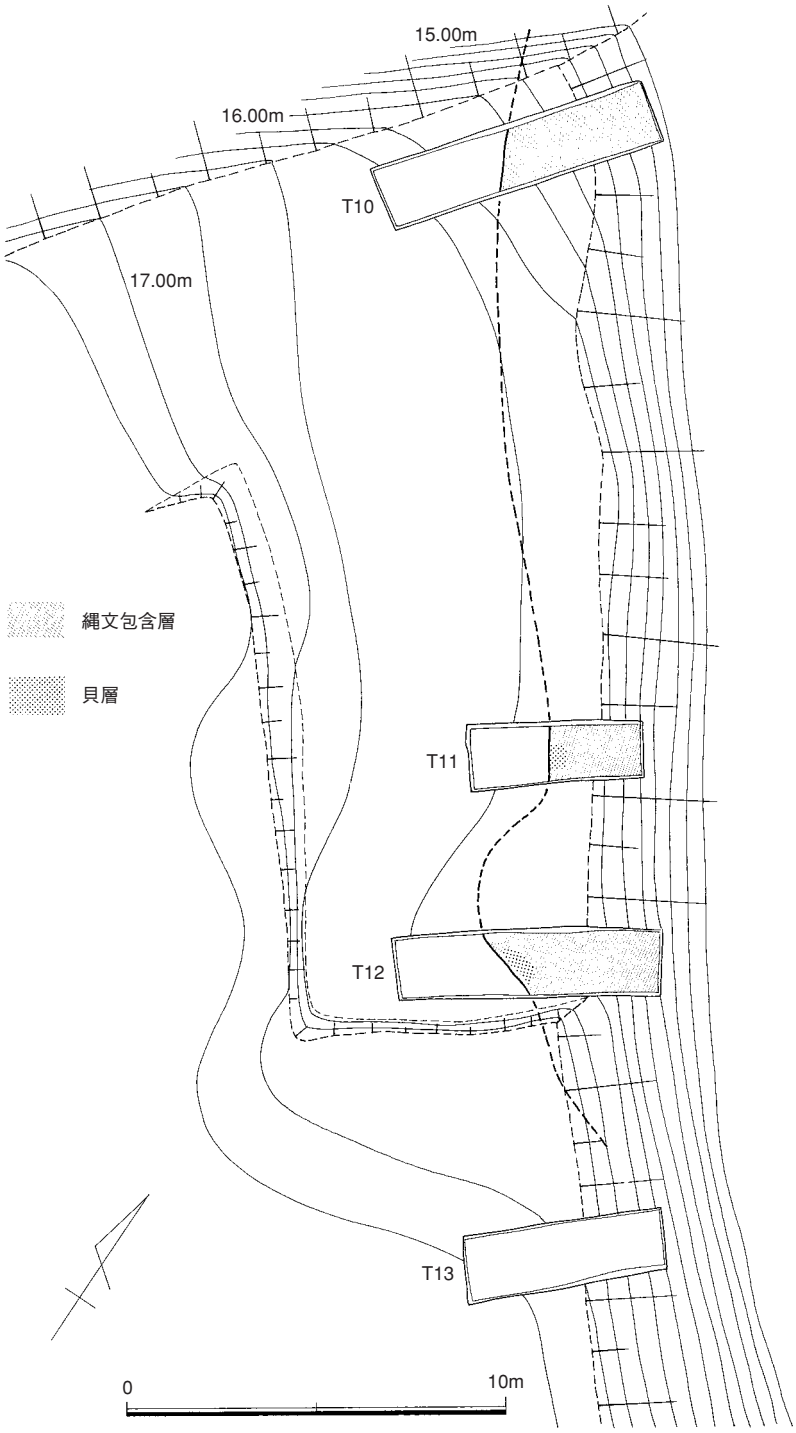


Fig.3　試掘トレンチT10～13（1/200）

れた縄文時代遺構や古墳などの痕跡は全く検出されなかった。

トレンチＴ10～15は対象地北側にあたり、大坂池西岸の斜面に沿った畑地跡である。ここでは上部は削平されていたが、斜面に縄文時代の包含層や遺物を検出した。包含層の中には一部に貝層が認められた。その成果については後述する。

以上の調査結果を踏まえて、Ｔ１～３地区は造成後に包含層埋没深度が深く影響が避けられないことから発掘調査を実施して記録保存することになった（元岡桑原遺跡群第28次調査）。Ｔ４、21地区は、造成後の包含層の埋没深度が深いＴ21付近については同様に発掘調査を実施し、包含層上面が浅いＴ４付近は造成工事の影響が少ないことから現状にて保存することになった。また、縄文時代の貝層や包含層が確認されたＴ10～15地区は、当初の造成計画では新設のグラウンドの擁壁となる防災堤の基礎構造物がかかる範囲であった。破壊が懸念されたが、当局との数回の現地協議と設計協議を行い、基礎構造物を約10m西にずらし、保存措置をはかった。

３）縄文包含層の調査（Fig.3・4）

ここでは試掘トレンチＴ10～15地区において検出した縄文時代包含層について記しておきたい。Ｔ10は上段畑地の北側、大坂池に面する斜面に向かって幅1.5m、長さ7.5mの範囲で設けた。全体に約１mの造成土が被覆し、南西側は造成土直下はすぐ基盤の花崗岩風化土となる。北東側ではローム質土が残り、トレンチ中央付近から池側にかけて茶褐色の包含層が現れた。包含層上面は標高約15.3mである。一部の掘り下げでは約30cmの層厚が認められた。検出面から少量の縄文土器を採取した。Fig.4-3・10は土器片であり、粗製深鉢の胴部破片である。外面に貝殻条痕調整が認められる。

Ｔ11はＴ10の南東約15mの畑地端部に幅1.5m、長さ4.5mの範囲で設けた。Ｔ10と同様の堆積状況を示し、トレンチ中央付近から池側にかけて茶褐色の包含層が現れた。包含層の南西側で１カ所のブロック状の貝層が現れた。包含層と貝層の検出面は標高約15.4mである。包含層や貝層の厚さなどは未調査のため不明である。検出面から少量の縄文土器・骨片・貝殻類を採取した。Fig.4-5は小型粗製の鉢口縁部である。内湾し口縁径約14cmと復元される。Fig.4-9～11は粗製鉢類の小破片である。Fig.4-12は粗製深鉢の底部である。底部径８cmでやや歪んでいる。

Ｔ12はＴ11の南東約５mの畑地端部に幅1.5m、長さ７mの範囲で設けた。Ｔ10、11と同様の堆積状況を示し、トレンチ中央付近から池側にかけて暗茶褐色の包含層が現れた。包含層の南西側で２カ所のブロック状の貝層が現れた。包含層と貝層の検出面は標高約15.5～15.8mである。平面的位置ではＴ10からＴ11に直線的に延びる包含層がこのＴ12付近で西側にせり出している。これが保存状況によるものか、何らかの遺構があるのかは判断し難い。包含層や貝層の厚さなどは未調査のため不明である。検出面から少量の縄文土器・骨片・貝殻類を採取した。Fig.4-2・７は粗製深鉢の胴部破片である。外面に板状工具調整痕がある。Fig.4-4は粗製深鉢の胴部破片である。内外面に貝殻条痕調整がある。Fig.4-6は鉢類の胴部破片であり、沈線が認められる。

Ｔ13はＴ12の南東約８mの畑地端部に幅1.5m、長さ５mの範囲で設けた。ここでは造成土直下はすぐ基盤の花崗岩風化土となり、包含層は存在しない。

Ｔ14はＴ10の北西８m、Ｔ15はＴ10の西15mの位置にそれぞれ設定した。トレンチの上部は造成土が厚さ１m以下堆積していたが、その下は暗褐色の包含層となり、少量の土器片が出土した。包含層はＴ15で約30cm、T14で１m以上あり、下部は湧水のため調査困難となった。こうした点からＴ14・15の位置は旧地形として谷部が形成され、Ｔ10の北側で急激に落ちていたと推定される。包含層の遺物は少ないが、下部では有機質遺物の埋没も予想された。

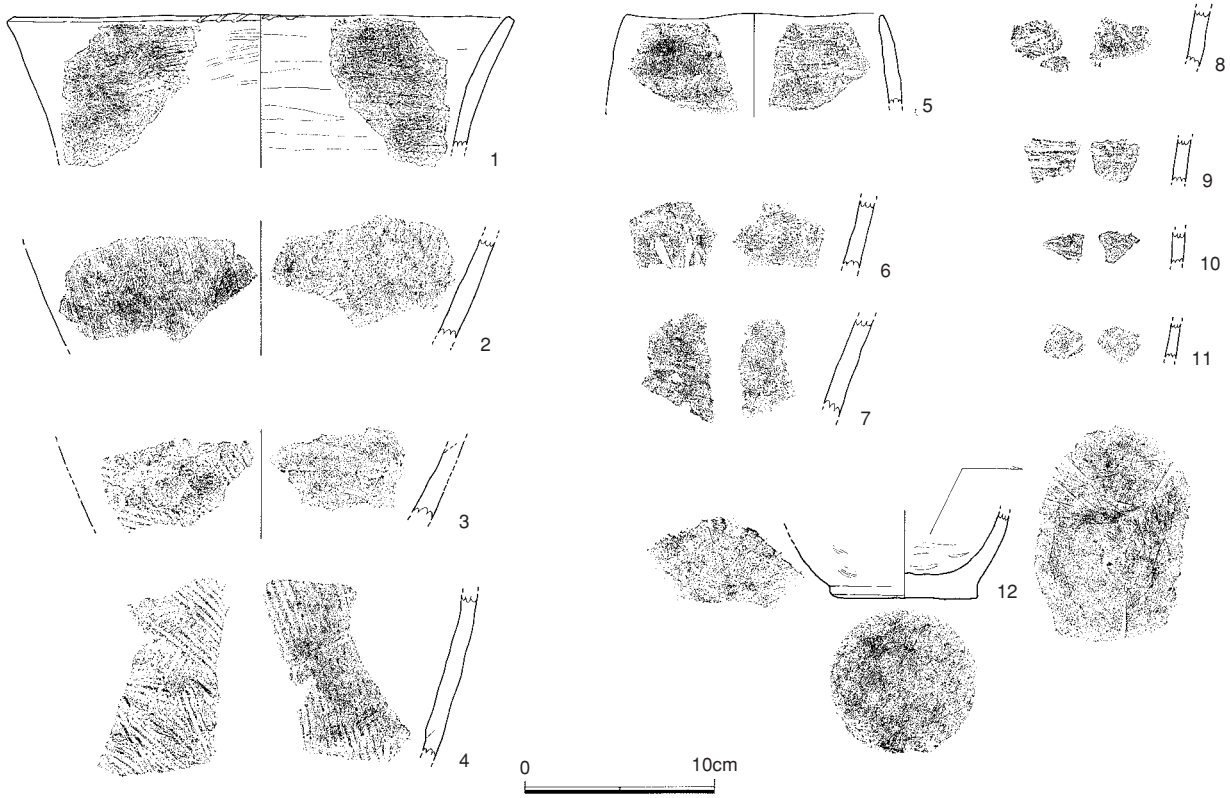


Fig.4　試掘トレンチ出土土器（1/4）

なお、周辺採集遺物としては大坂池の池岸で採集された粗製深鉢の口縁部破片がある。Fig.4-1は外面貝殻条痕後工具調整、内面は工具横調整があり、口唇部に斜めの刻目が施される。

以上の試掘調査を踏まえて、このＴ10～Ｔ15付近に縄文時代の包含層と貝層が存在することが判明した。包含層や貝層は保存のため調査しなかったが、検出時に少量の遺物を採取した。その遺物の時期は判断に苦しむ。土器類はほとんど粗製土器であり、型式的特徴を示す部位がない。採集品も含めてみるなら縄文時代後期中葉の北久根山式土器段階の範疇と考えておきたい。貝層は検出状況としてはブロック状で、点在貝塚の一部をなすかのように思えるが、包含層を掘り下げると一連の貝層となる可能性も否定できない。なお、この地点と現在県指定史跡として保存されている貝塚部分は同じ大坂池西側斜面にありながらも、直線で約100m離れている。池岸部の踏査や、これまでの調査などから鑑みて今回発見の貝層が連続した貝塚をなすことは考え難い。指定地区の貝塚を中心とし、周辺に今回発見したような小規模な貝塚が点在していると考えられる。さて、この貝塚を形成に関わる集落については現時点では不明と言わざるを得ない。貝塚西側丘陵は早く土砂採掘により基盤層深くまで破壊され、旧地形すら復元困難である。ただし丘陵の北西側は９次調査などから険しい斜面で縄文時代遺構は存在しない。居住域が想定されるのは丘陵先端域であろう。なお、この丘陵を挟んで西側に設けた発掘調査区第28次地点では、縄文時代石斧や土器片、黒曜石原石や分割礫の埋納状態などが検出された。この丘陵先端域は縄文時代後期の活動拠点となっていたことが考えられる。

28次調査SX001出土石器について（Fig.5）

１はＦ区上層出土の黒曜石製石鏃脚部破片である。両面に剥離調整の後に研磨調整を施す。２はＩ区上層出土の黒曜石製石錐である。左側縁に二次調整を施し、錐部を造り出す。また右側縁に微細剥離がある。３・４はＨ区中層出土の黒曜石製縦長剥片の基部破片である。５はＧ区下層出土の黒曜石

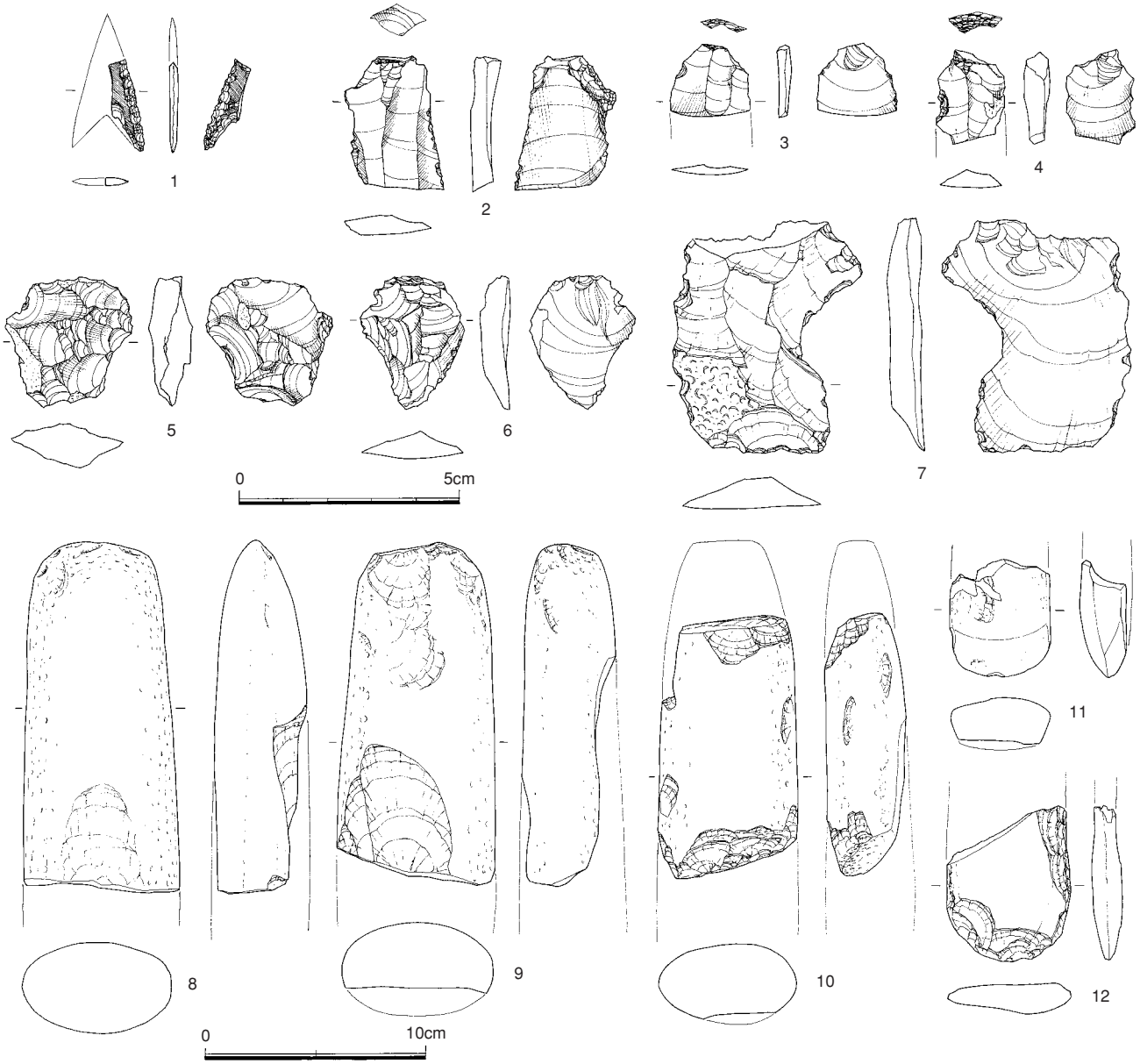


Fig.5　SX001出土石器（2/3・1/3）

製両面加工石器もしくは石核である。両面に入念な調整（剥離）を施す。６はＦ区下層出土の黒曜石製使用痕有剥片である。背面には主軸方向と90度振った先行剥離がある。右側縁に微細剥離が認められる。７はＧ区下層出土の安山岩製使用痕有剥片である。８～10は今山産玄武岩製太型蛤刃石斧である。８はＪ区上層出土で先端を欠損する。９は上層出土で先端を欠損する。10はＥ区西側出土で基部と先端を欠損する。敲石に転用されている。11はＦ区上層出土の今山産玄武岩製の小型磨製石斧である。基部を欠損する。横断面形は逆台形を呈する。12はＦ区上層出土の結晶片岩製の扁平打製石斧である。基部を欠損する。

石器形態から推定される時期は、６・７が旧石器時代、１・５が縄文時代早期であり、２～４は鈴桶型石刃技法による剥片を素材としており、縄文時代後期後葉～晩期前葉の範疇に位置付けられる。この時期は瓜尾貝塚との関係も考えられる。12の扁平打製石斧もこの時期に比定されよう。８～11の石斧類は弥生時代前期末～中期中葉に位置付けられる。

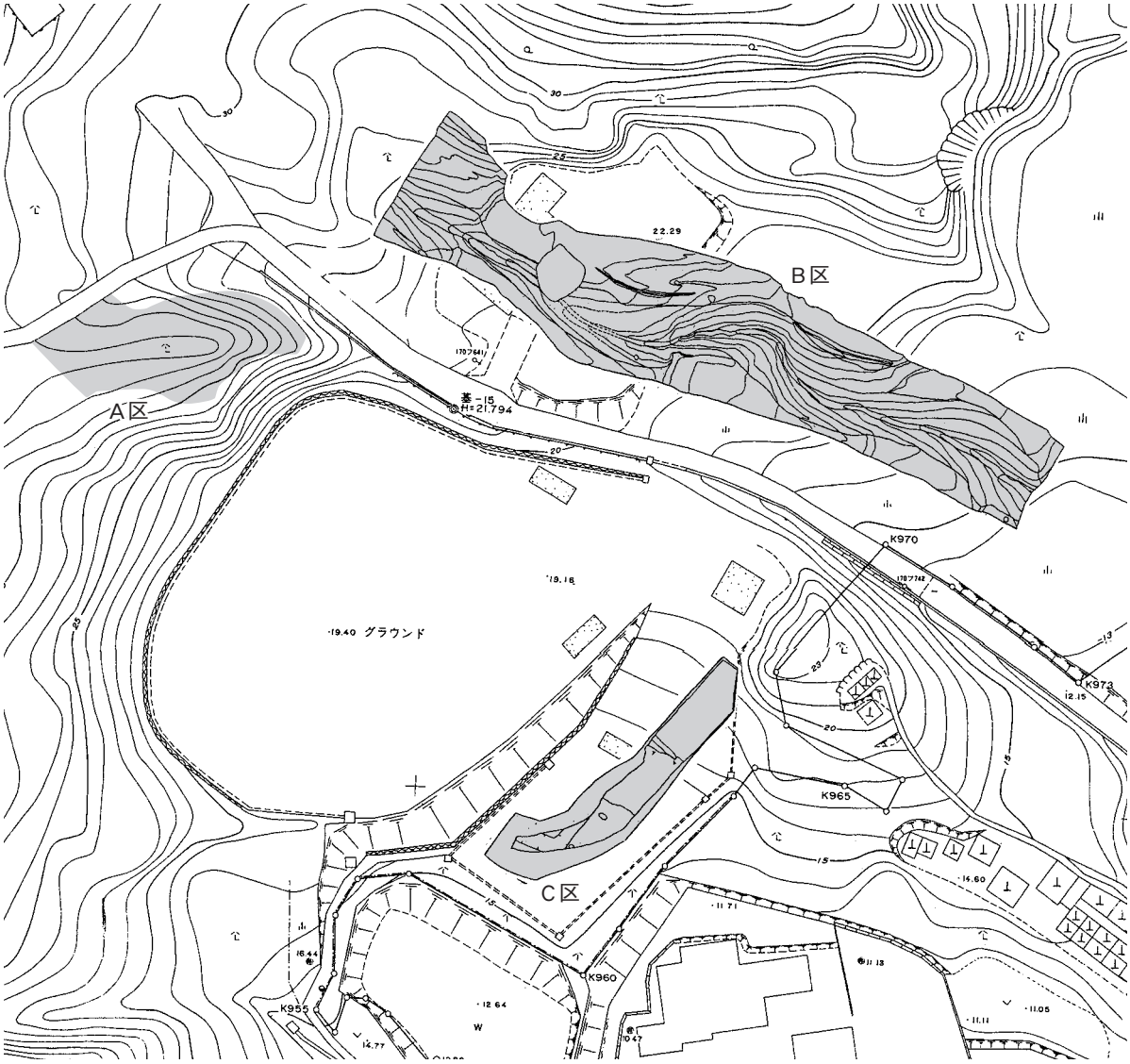


Fig.6　調査区配置図（1/1,000）

3. 調査の記録

1）A区の調査

A区は池の浦前方後円墳が位置する丘陵と同じ丘陵上に位置し、池ノ浦前方後円墳からは南東方向に100mの地点にあたる。丘陵のさらに南東に150m下がった地点でも古墳の石室らしき窪みが確認できる。A区は丘陵が舌状に伸びた先端部分で古墳の可能性がある高まりが確認されたことから調査を行った。尾根の長軸に沿って東西方向のトレンチを設定し、石室の可能性がある部分には直交するトレンチを設けた（Fig.7）。また東南側の崖面も削って精査したがいずれも表土直下で花崗岩の風化層になり、盛土・石室・遺物はどれも確認できなかった。自然丘陵の削り残しと思われる。

2）B区の調査

B区はA区から続く東西方向の狭い丘陵の北側に接する谷部の調査である。試掘調査では谷部から古代を中心とする遺物が出土した。B区周辺には北側に接する尾根上に弥生時代後期の竪穴式住居が

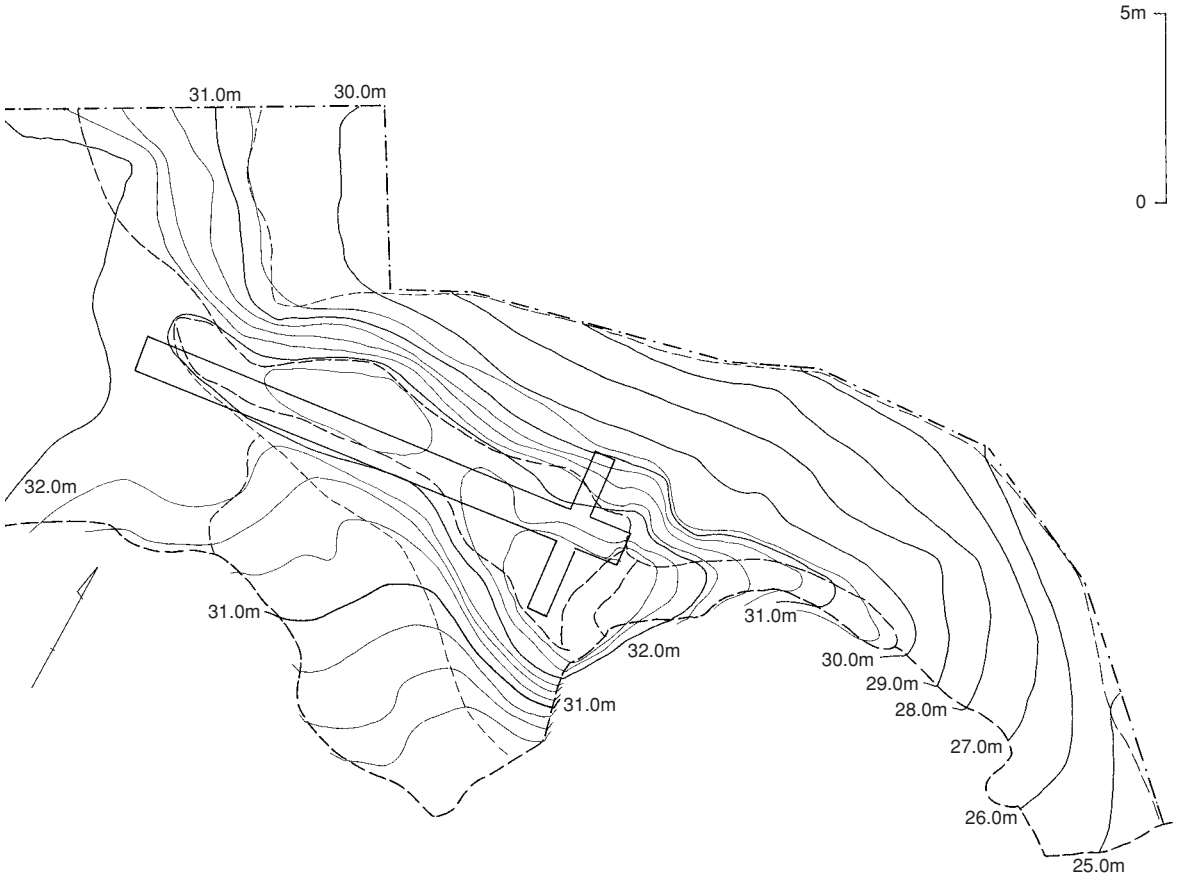


Fig.7　A区測量図（1/200）

出土した第９次調査区が、またやや離れて６世紀代の円墳が２基出土した17次調査区があり、丘陵を挟んだ北側谷部の３次調査区では縄文早期の文化層の他に弥生時代中期の集落や６世紀代の円墳が出土しており、また７次調査区では縄文早期と後期の包含層のほか古墳時代後期の竪穴式住居や古代の大規模な製鉄遺構が確認されている。

Ｂ区は幅約10mの南東に流れる谷を中心とし、その両岸で溝や焼土坑などを検出した。

（1）SX001（Fig.8）　調査区中央を流れる谷である。調査区内を緩やかに蛇行する。断面は上流北側では逆三角形を呈し、幅5.2m、深さは1.1mを測る。中央部土層Ｂでは断面は逆三角形、幅9.5m、深さ２mを測る。谷底面の標高は上流側で22.6m、下流側で12.4mを測る。谷の上流側は調査区北側で西に折れ、池の浦前方後円墳の東側傾斜面を谷頭とする。谷は土層観察から水が流れていた痕跡はみられない。出土遺物（Fig.10）。遺物はパンケース50箱分出土した。001～004は越州窯青磁碗である。001は内底面に重ね焼きの目痕が残る。002と004は輪花碗である。005と006は白磁碗で、006は太宰府条坊跡XV陶磁器分類ではⅣ類である。007・008は緑釉である。器種は不明。009～013は須恵器で009・010は高台付碗、011は坏蓋、012と013は長頸壺である。014は滑石製の石鍋、015・016は鉄製品で015は鎌。016は不明。当初太刀と思われたが、断面では刃が確認できない。017は磨製石斧である。蛇紋岩製。018は縦長剥片である。安山岩で一部自然風化面がのこる。縁部にこまかな剥離があり、石器として使用か。019～021は石鏃である。019が安山岩製で020・021は黒曜石製である。019は完形で長さ2.7cm、幅2.05cm、重さ1.44gを測る。020は先端を欠損。022は黒曜石製の石器である。石鏃か。両端に浅い抉り状のくぼみがあることから組み合わせ式の石器の可能性も考えられる。023は細石刃である。黒曜石製で長さ1.15cm、幅４mmを測る。谷上流側左岸斜面途中にテラスを形成する礫層直上

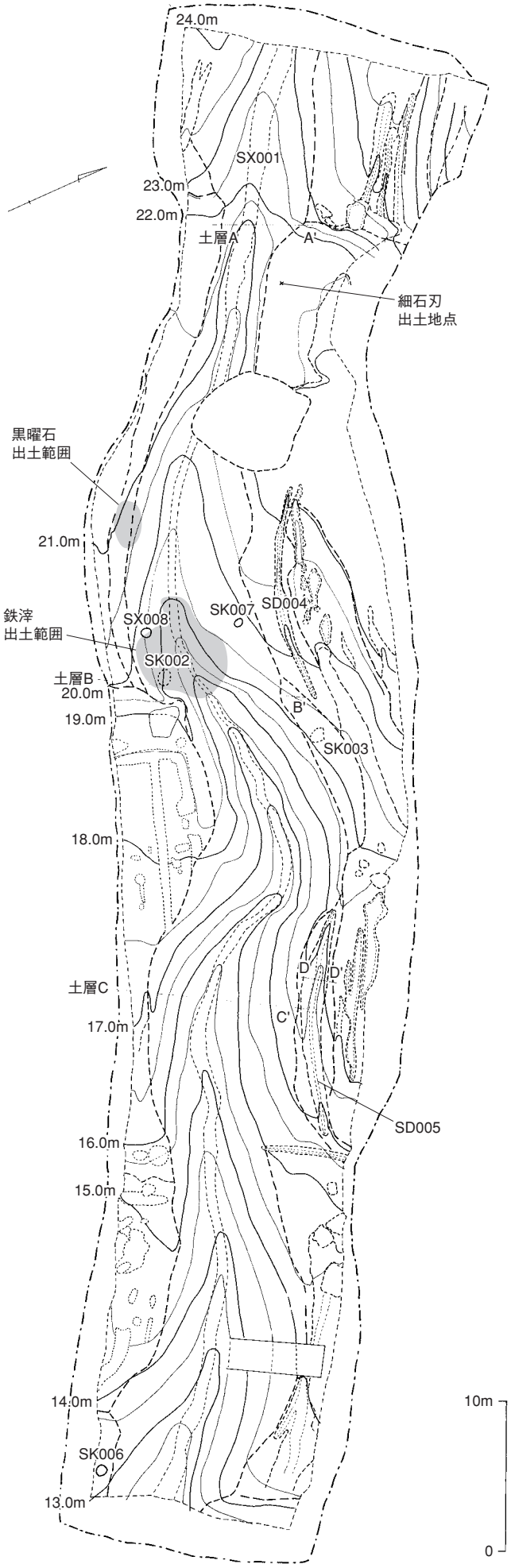


Fig.8　B区全体図（1/400）

で出土した（PL.3−1・2）。

遺物は上層では古代を中心とし、中層から下層では縄文土器、弥生土器、須恵器等が混在して出土した。縄文土器は後期後半と思われる粗製の深鉢片が数点出土した。また調査区中央やや西よりの右岸では黒曜石の原石が８点出土した。径３mほどの範囲から出土しており、元々埋納遺構があったものが、後世に崩落したものと思われる。重さは50〜170gほどで、ほとんどに自然風化面がのこるが、若干調査中についた新しい剥離のほか古い剥離面がみられる。古い剥離も自然な割れなどで生じたものと思われ、明らかに人為的な調整などは見られない。弥生土器は数は少ないが後期を主とし、甕や高坏などの他、後期の甕棺片も数点出土している。古墳時代は須恵器の坏や提瓶等が出土している。また、７〜８世紀代になると須恵器長頸壺や高台付坏などが多く出土するようになり、その後は土師椀、黒色土器椀が多く出土する。貿易陶磁の白磁、青磁は数点出土しているものの、数は少ない。調査区中央部では鉄滓がパンケース３箱分ほどと羽口が多数集中して出土した。右岸側に炉があったと思われ、鉄滓を谷へ廃棄している。遺物で多いのは土師器椀と黒色土器で10世紀後半から11世紀頃と思われ、それを過ぎると谷は完全に埋没し遺物は激減する。

(2) 炉　SX001埋土上で１基検出した。

SX008（Fig.12）。調査区中央やや西側に位置する。谷の埋土を掘り窪め、白色粘土を貼り炉底となす。白色粘土の範囲が径20cm、周辺の焼けた範囲が径40cmを測る。SX001が完全に埋没した状態で築かれていることから11世紀後半以降と思われる。

(3) 焼土坑　2基検出した。

SK003（Fig.12）。調査区の中央部で検出した。主軸をN-6°-Wにとり、平面形は五角形を呈す。長径88cm、幅73cm、底面ま

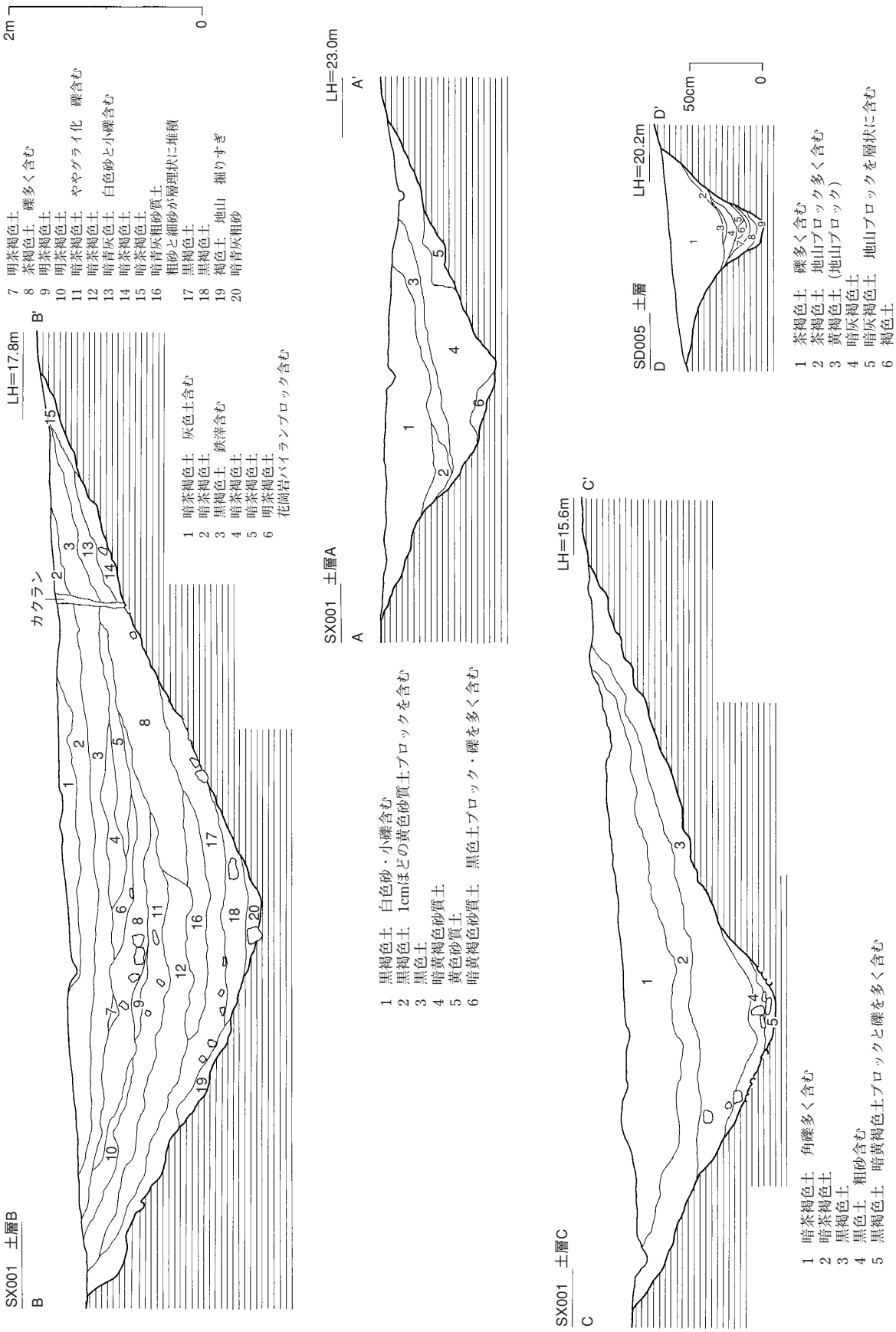


Fig.9　B区溝土層図（1/60・SD005は1/40）

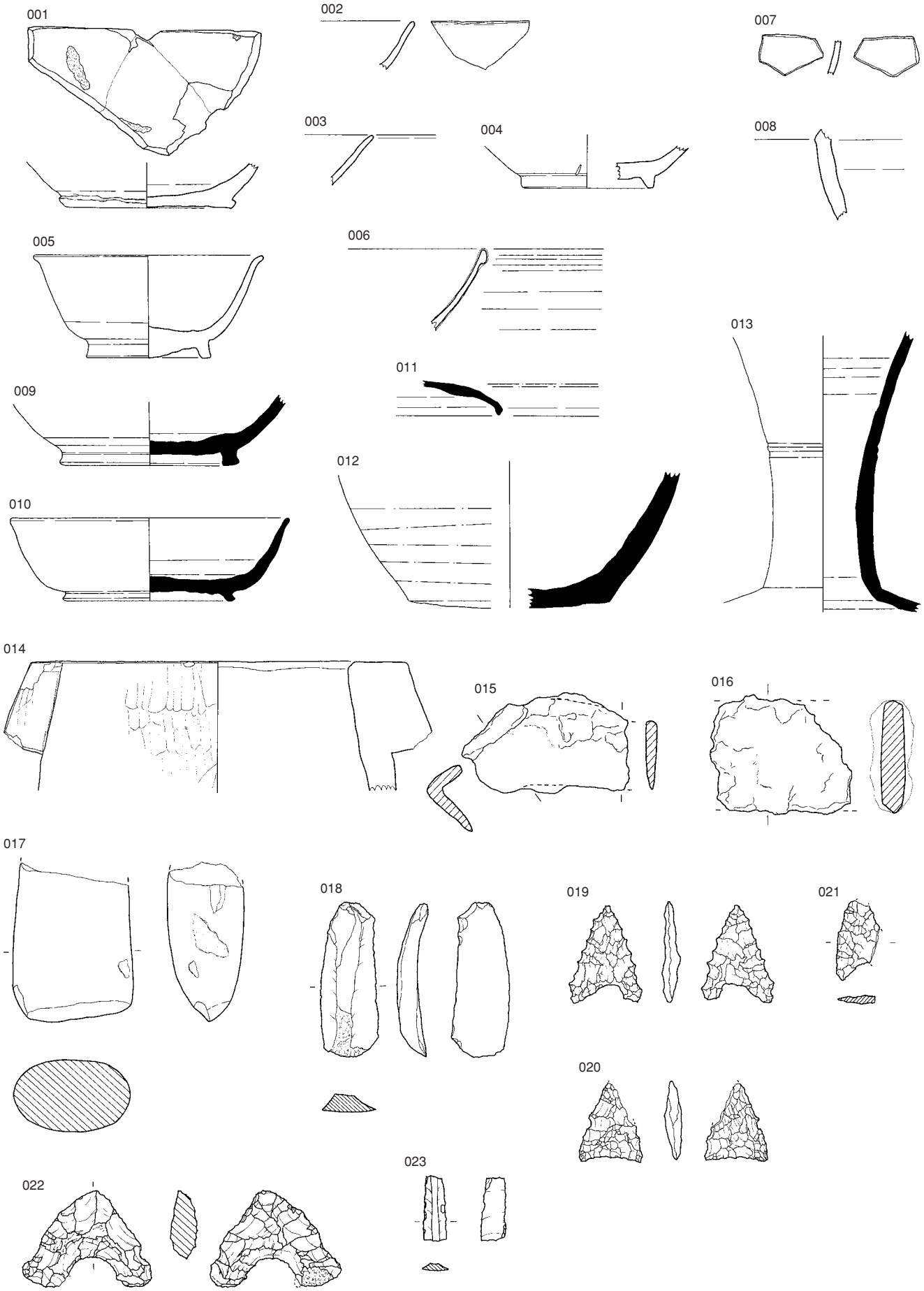


Fig.10　B区溝出土遺物１（1/3、015・016・019～022は2/3、023は1/1）

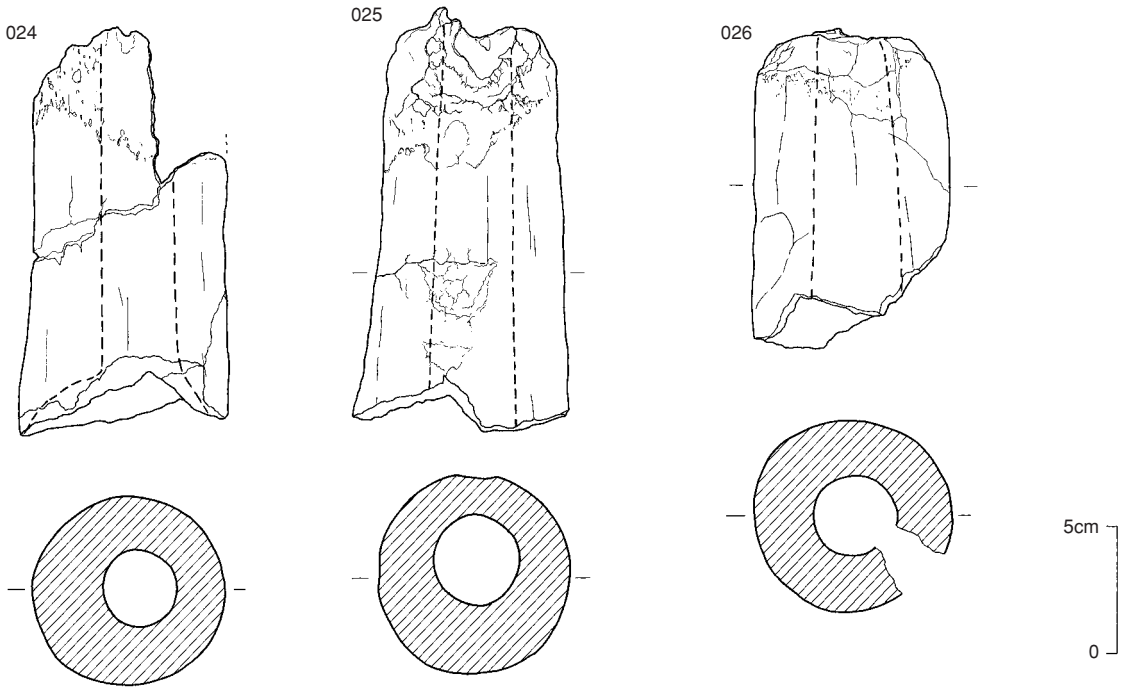
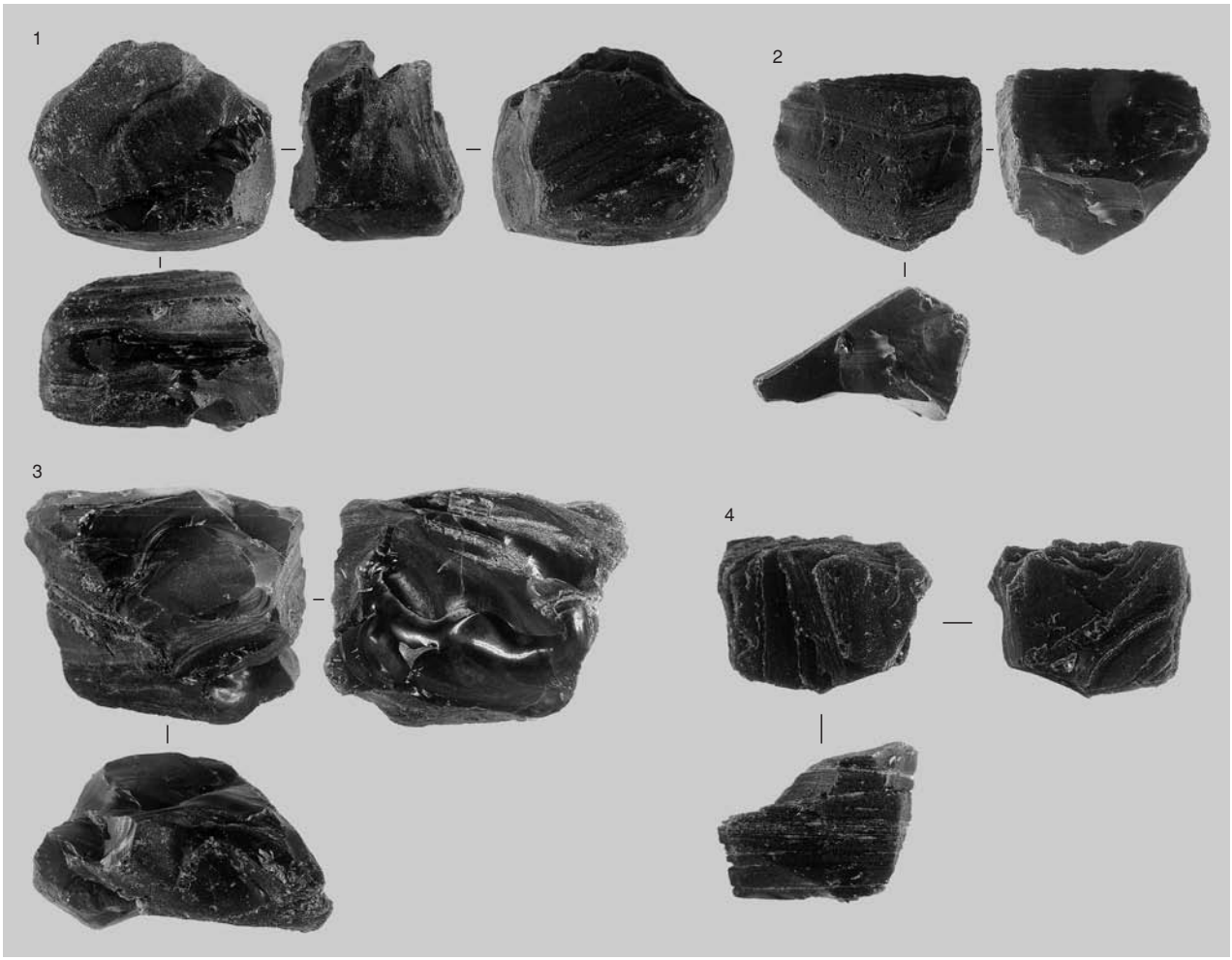
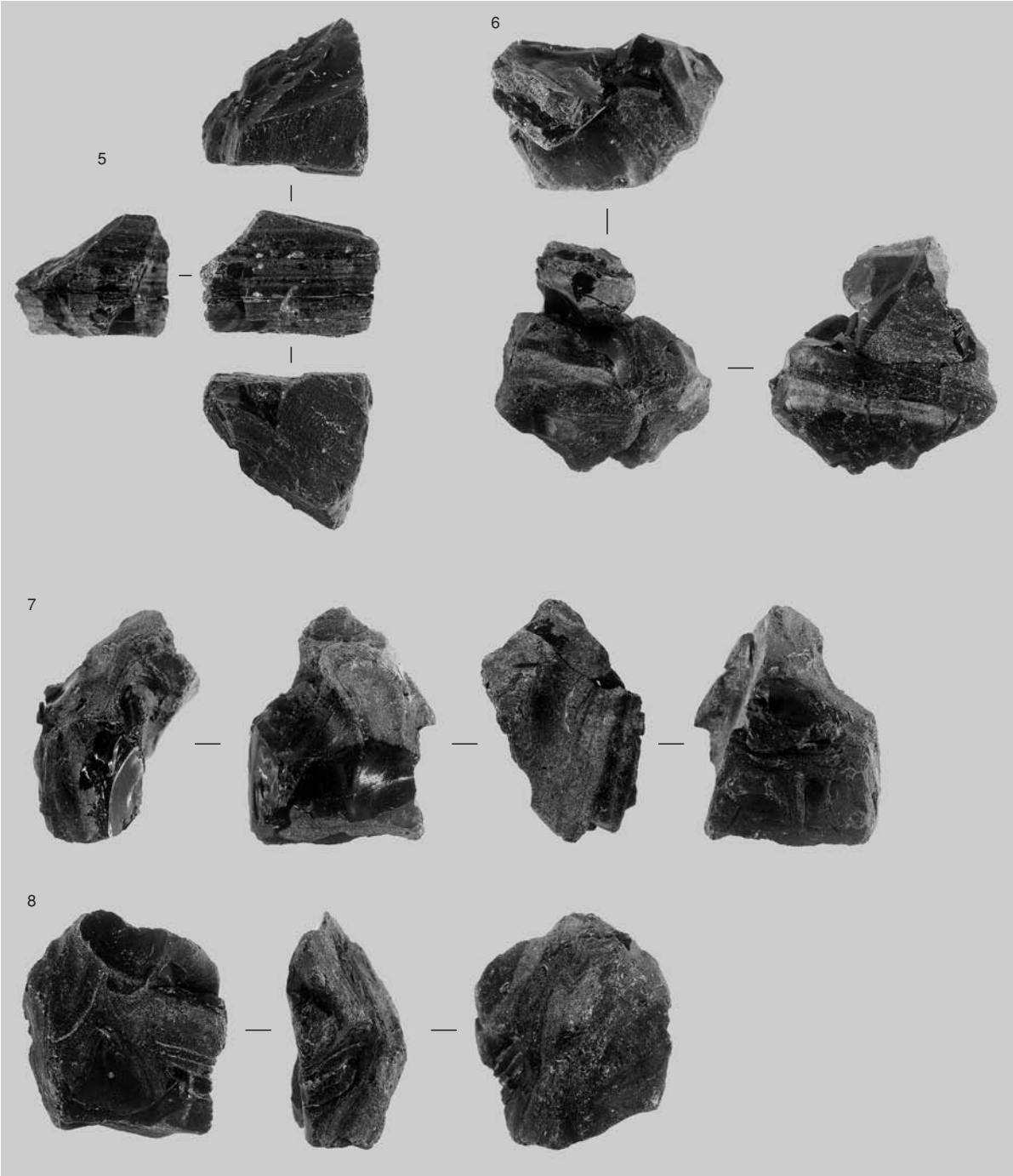


Fig.11　B区溝出土遺物２（1/3）



Ph.1　B区出土黒曜石１



Ph.2　B区出土黒曜石２

	大きさ（cm）	重さ（g）	備　　考
1	5.96×5.08×3.28	132.91	全面自然風化面。調査時に一部剥離。
2	7.11×5.84×3.94	178.78	３面が自然風化面。残り３面は古い剥離。
3	5.29×2.94×3.54	55.00	４面が自然風化面。残り２面も古い剥離。
4	5.22×3.81×3.68	75.00	全面自然風化面。わずかに調査時の剥離有り。
5	4.84×4.62×3.35	77.48	４面が自然風化面。１面が古い剥離。
6	6.48×6.24×4.10	150.11	調査時に３個に分離。全体に調査時の小さな剥離有り。 ほぼ全体が自然風化面だが１点古い剥離がみられる。
7	6.95×5.50×4.80	126.50	全面が自然風化面。調査時の剥離２ヶ所。古い剥離１ヶ所。
8	6.01×6.10×3.43	119.20	全面自然風化面。２ヶ所古い剥離あり。

Tab.1　黒曜石計測表

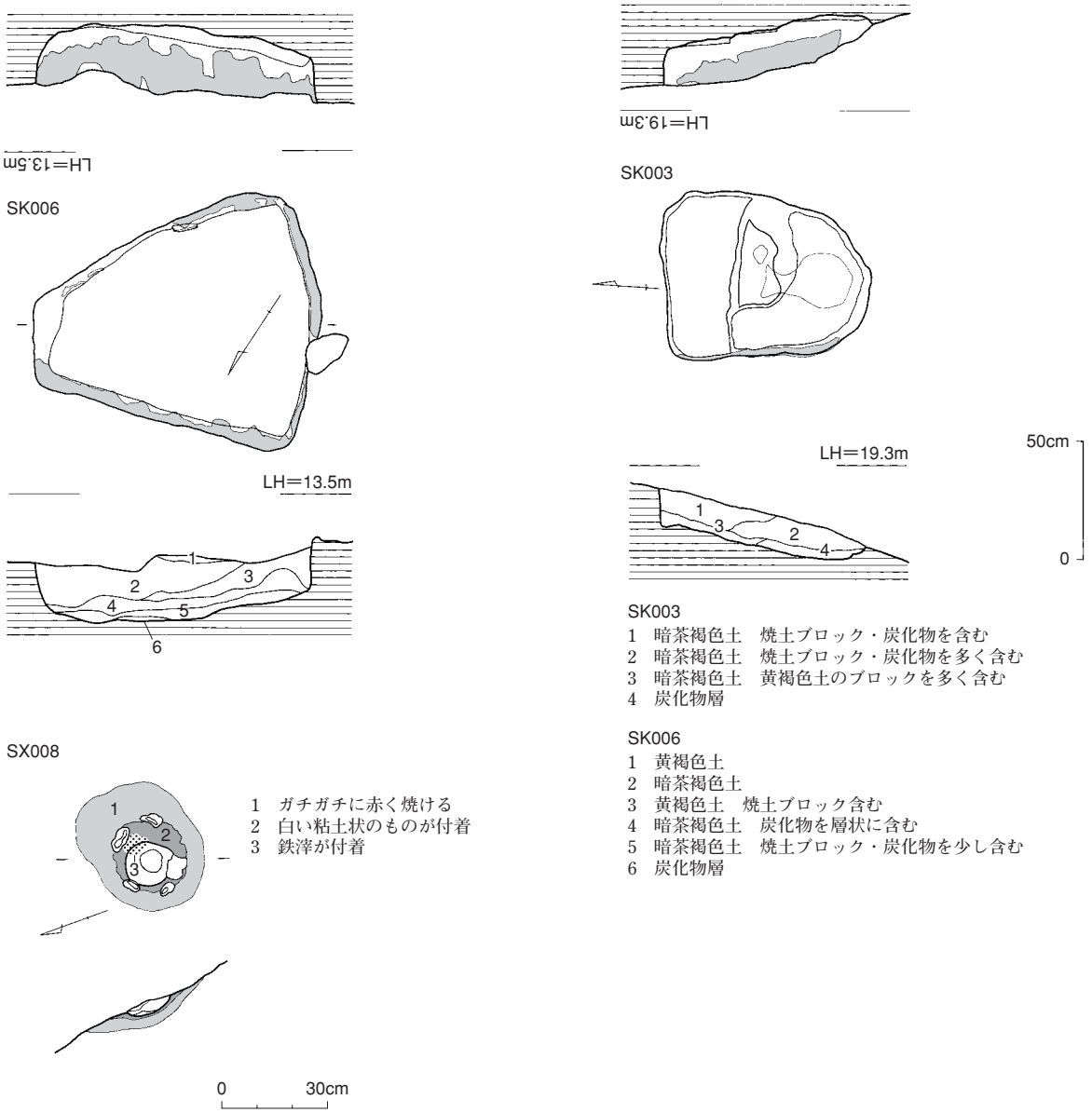


Fig.12　B区遺構実測図（1/30・SX008は1/20）

での深さ19cmを測る。底面直上に薄い炭化物層が堆積する。炭化物は小さなブロックをなし、繊維の方向は一定しない。焼土ブロックを含む。出土遺物無し。

SK006（Fig.12）。調査区の東端で検出した。主軸をN-56°-Eにとり、平面形は二等辺三角形に近い。長径120cm、最大幅107cm、深さ30cmを測る。壁に一部白色化がみられ、全体が赤く焼け締まる。出土遺物なし。

（4）溝　SX001に沿って８条検出した。SX001に平行するものと直交するものがみられ、直交するものは近現代の畑を囲む溝の一部で、平行する溝も埋土に耕作土が含まれるため、同じ用途か。

SD004（Fig.8）。調査区の中央西側、SX001の左岸に沿う。現状で長さ14.5m、幅0.7mを測る。

SD005（Fig.8・9）。SX001の左岸に位置し、SX001に沿う。SD004と同一の溝か。現状で長さ15m、幅1.5cm、深さ70cmを測る。覆土は下層は細かな堆積で上半は一気に埋没している。流水の痕跡はみられない。遺物は細かな白磁片を含む。

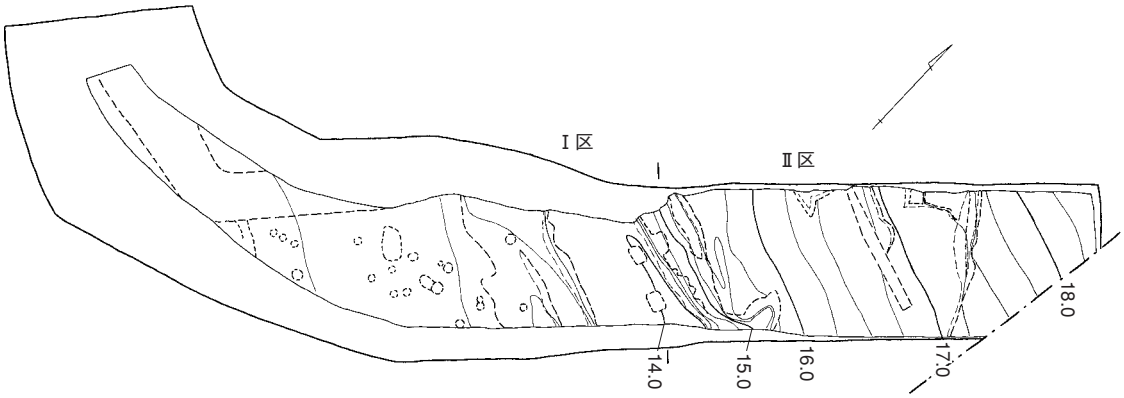


Fig.13　C区全体図（1/300）

3）C区の調査

C区はA区からのびた尾根の南西側傾斜面と谷部である。試掘調査によると傾斜部には遺構は薄く、谷部で柱穴等を確認している。試掘で確認した遺構の分布範囲は1800㎡であるが、調査は盛土の擁壁基礎部分の307.4㎡を対象とする。擁壁以外の盛土部分についても４m以上の盛土を行うため本来は発掘調査が必要な部分ではあるが、協議により調査を行わず保存とすることが決定していた。

調査区は擁壁の基礎部分の幅６m、長さおよそ40mについて行った。北端から30mで西に折れ、逆L字型を呈す。土置き場の関係から調査区を北側のⅡ区と南側のⅠ区に分けて打って返しを行った。

調査の結果西側に傾斜するⅡ区では遺構は確認できなかった。薄い表土直下で花崗岩の未風化土に達するためかなり削平されていると思われる。Ⅰ区との境界の溝は近現代である。Ⅰ区では溝、土坑、柱穴群と縄文後期の包含層を確認した。溝と柱穴の多くは中世以降に属すると思われる。調査区は現表土から2.1mと深く、そのほとんどが最近の盛土でしまりが弱かったため崩落の危険性があり、作業員が調査区に降りることができなかった。そのため平板による略図を作成しただけで、遺構の掘り下げなどはしていない。遺構面は擁壁の基礎底面より1.5mほど下になるため、保存とすることにして埋め戻した。

4）小結

B区谷（SX001）から縄文後期から古代末（中世初頭）までの遺物が出土した。遺物は弥生中期～古墳時代と古代を中心とし、古代は谷埋土上層から黒色土器B類と土師器椀、底部ヘラ切りの土師坏が多く出土する。同時に羽口、鉄滓も出土するため、製鉄関連の集落か。弥生時代の遺物は上層からも出土するため、谷上部に甕棺墓地を含む中～後期集落があったと思われる。C区では中世の遺構とともに縄文時代の遺物も出土しており、瓜尾貝塚を形成した集落が遺存する可能性がある。

4．瓜尾西試掘調査出土動物遺存体について

元岡遺跡第28次調査に伴う試掘トレンチのうち第11・12トレンチで貝層を確認した。場所は元岡瓜尾貝塚指定地域の北側に隣接しており、出土遺物の時期からも貝塚の続きと考えられる。その後、2003年に行われた大坂池南側に接する道路の試掘（Fig.2下水道関連トレンチ）においても貝層が確認されたため、貝塚の範囲が南側にどれだけ広がるか確認が必要である。

今回出土した動物遺存体は１．貝類、２．甲殻類、３．魚類、４．哺乳類で

１．貝類はアサリ、オキシジミ、カガミガイ、カキ類、ハイガイ、ハマグリ、イボニシ、ウミニナ、スガイ、フトヘタナリで、その他ツノガイとシマヘタナリらしき破片も出土している。これらの多くは内湾や河口域などの砂泥底から岩礁域に生息しており、現在でも今津干潟から糸島半島にかけて多く生息する種が多い。特に今回の資料ではハイガイとカキ類が多く出土しているがカキは殻長が２～３cmが61%、ハイガイは殻長２～３cmが76%を占め、２cm以下の貝もあるなど小型のものが多い。またカワニナやタニシなどの淡水性巻貝はカワニナと思われる螺底部の破片が２点のみ出土した。

２．甲殻類はウニの棘が１点とフジツボの周殻板が多く出土した。ウニ・フジツボとも種は不明である。フジツボは殻径が１cm程の小型種で蠣殻等に付着して持ち込まれたと思われるが、ハイガイがかなり小型のものまで採取していることから、食用の可能性も棄てきれない。

３．魚類はマダイの血管間棘やタイ類の前上顎骨とボール状を呈す歯の他、種は不明であるが椎体径が1.5～2.5mmの小さな椎骨などが出土している。

４．哺乳類はイノシシ・シカの胸椎片やイノシシ頭骨片が出土した。

元岡瓜尾貝塚についてはハイガイが主でその他にハマグリ、オキシジミ、カキなどの淺海砂泥や岩礁性の貝で成り立っており、イノシシ・シカの動物遺存体を含むとされる（元岡瓜尾貝塚現地説明板より）。今回の同定結果はこの報告に沿うものである。瓜尾貝塚は瑞梅寺川の河口に広がる今津干潟に面した斜面に位置しているため目の前に汽水域が広がっており、貝類、甲殻類のほとんどが、そこに生息する生物である。しかし、現地の状況を見ると背後の低い尾根を越えると元岡川があり、現場の水たまりではマルタニシやカワニナなど淡水性の生物も多く生息しており、これらの資源をどれぐらい利用していたのか、今後桑原飛櫛貝塚などと比較する必要がある。

分類	種　名	個　　数
甲殻類	フジツボ類	
斧足類	アサリ	左殻２　右殻１
	オキシジミ	左殻10　右殻９
	カガミガイ	右殻２
	カキ類	左殻56　右殻83
	ハイガイ	左殻87　右殻98
	ハマグリ	左殻１　右殻２
腹足類	イボニシ	4
	ウミニナ	28
	スガイ	13
	フトヘタナリ	17
	カワニナ	2
	ウニ	棘小片　1
魚　類	タイ類	歯
	不明	椎骨
哺乳類	不明	

ハイガイ右殻長

殻長（cm）	個数	%
1以下		
1～1.49		
1.5～1.99	10	16
2.0～2.49	22	34
2.5～2.99	27	42
3.0～3.49	3	5
3.5～3.99	2	3
4.0～4.49		

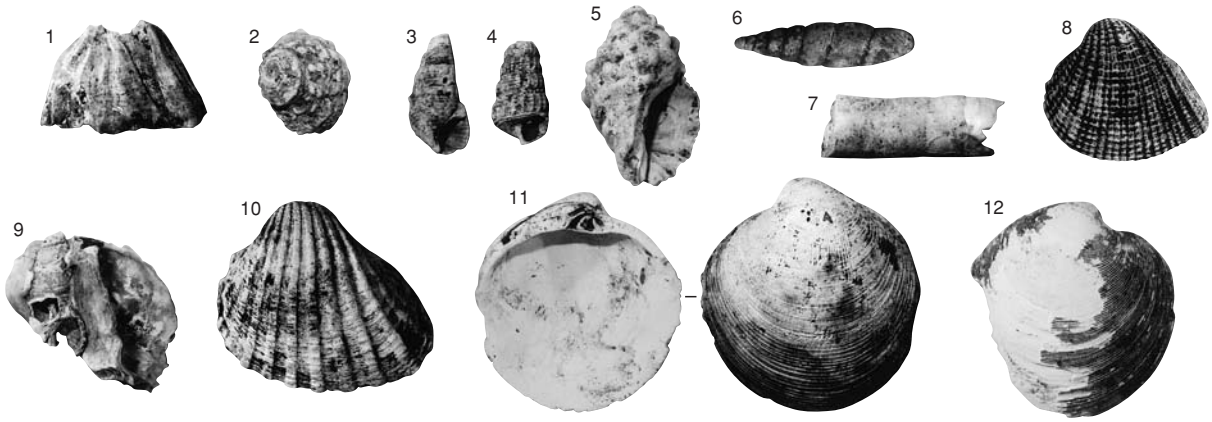
計測可能64固体

カキ類殻長

殻長（cm）	個数	%
1以下	1	2
1～1.49	3	6
1.5～1.99	7	14
2.0～2.49	16	31
2.5～2.99	15	29
3.0～3.49	8	16
3.5～3.99		
4.0～4.49	1	2

計測可能51固体

Tab.2　出土動物表



1　フジツボ類
2　スガイ
3　ウミニナ
4　フトヘタナリ
5　イボニシ
6　キセルガイ科
7　ツノガイ？
8　アサリ
9　マガキ
10　ハイガイ
11　オキシジミ
12　カガミガイ

Ph.3　試掘トレンチ出土動物遺存体

1　B区全景（東から）

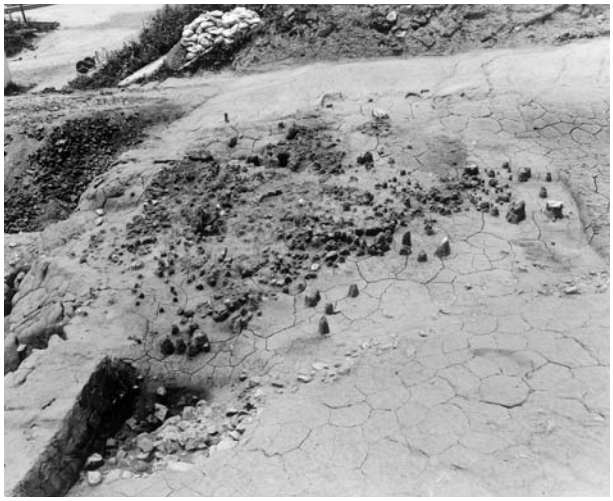
2　B区全景（西から）

1　Ｂ区西側（北東から）

2　Ｂ区東側（北西から）

3　SX001土層Ｂ（東から）

4　SX001土層Ｃ（東から）



5　SX001　鉄滓出土状況（北から）

6　SX001　右岸黒曜石出土状況（北西から）

1　SX001　細石刃出土土層　中央礫層上面から出土した

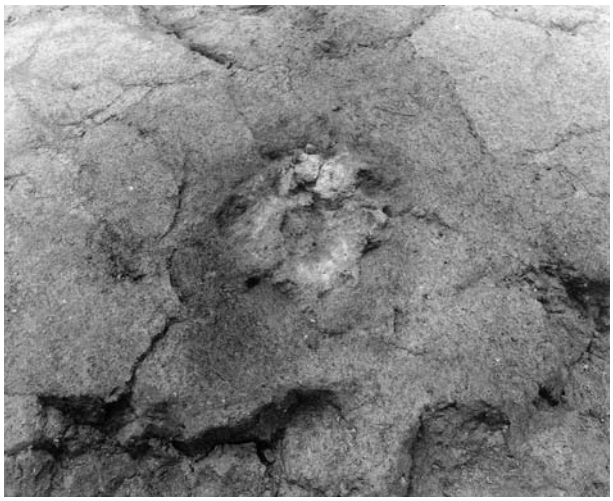
2　細石刃出土礫層上面（東から）

3　SD005（東から）

4　SD005土層（東から）

5　SK003（南から）

6　SK006（東から）

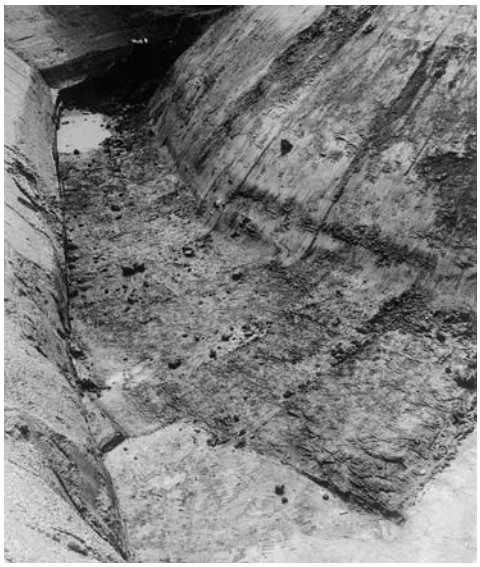


1　SX008（北から）

2　A区全景（北から）

3　A区トレンチ（西から）

4　C区－Ⅱ区（南西から）



5　C区－Ⅰ区（東から）

6　試掘11トレンチ貝層確認状況（南から）

Ⅶ　第34次調査の記録

（調査番号　０３１０）

例　言

1．本報告書は九州大学の移転に伴う造成工事と道路整備事業に伴って、西区大字元岡字石ヶ原で行われた元岡古墳群Ｊ群を発掘調査した第34次調査を主とする調査報告書である。また、３基の古墳のうち１号墳は1968年８月15日から10月18日に民間の土取りに伴い主体部の発掘調査が行われており（桑原古墳群１次調査)、今回はその調査の成果も併せて記載した。

2．第34次調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。

3．本書に収録した調査のうち試掘調査は2002年12月から2003年１月まで、発掘調査は2003年４月１日から2003年８月12日まで行った。

4．遺構実測図と周辺測量図の作成は土井良伸・屋山が、遺構の写真撮影や遺物の実測は屋山が行った。

5．本書で用いた方位は磁北で真北より6°21”西偏する。

6．遺構遺物番号はそれぞれ通し番号とした。

7．本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

調査番号	0310	遺跡番号	022797	分布地図番号	129　桑原
地　　番	福岡市西区大字元岡字石ヶ原地内				
遺跡略号	MOT-34	調査面積	7,000㎡	調査原因	大学移転に伴う造成
調査期間	2003年4月1日～2003年8月12日			担 当 者	屋山　洋

1．はじめに

34次調査区は当初25次調査の７号墳から南側に延びる尾根とその西側谷部を合わせた約15000㎡を対象とした。全体が一度畑として段々に造成されており、谷から尾根上にかけて車が通行可能な未舗装の農道が通るなど大規模な地形の改変がみられた。遺跡は周辺の調査結果から縄文時代後期後半の集落や古墳、古代の集落、中世山城等多彩な性格の遺構が存在する可能性があったため、本調査に先んじて遺構の存在する範囲と性格を把握するための試掘調査を、重機を使用して行うこととした。対象地には九州大学の移転用地と福岡市の道路拡幅という用途の異なる土地が含まれていたため、まず平成15年１月に道路部分の試掘を１日かけて行い、その数日後九州大学移転用地部分の試掘を１週間かけて行った。試掘は古墳が存在することが判明している尾根上を除いて谷部を中心に、重機を使用して試掘用のトレンチを設定し、また、地形が平坦な部分は面的に広げ、作業員による清掃を行った。その結果判明したことは、古い地形は畑の造成によりほとんどが削られて残っておらず、ほとんどのトレンチでは表土直下で花崗岩の風化土に達した。谷の中心部には幅２～３mの雨裂が残っていたため、地山まで掘り下げたが、遺構・遺物とも確認できなかった。遺構としては谷斜面に大石が顔を出し、握り拳大の礫が散乱している１ヶ所が古墳の可能性があると考えて本調査の対象とした。また尾

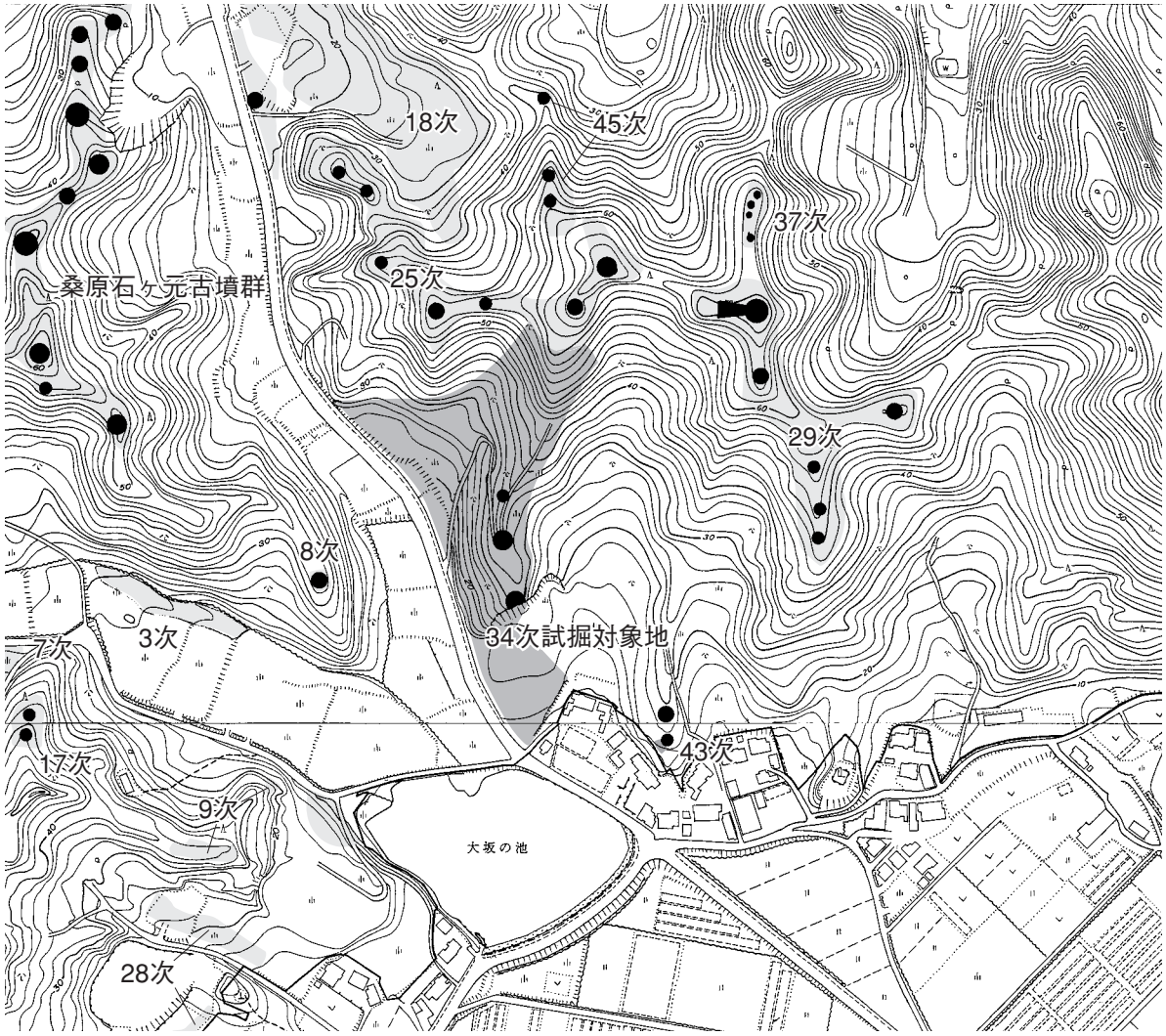


Fig.1　34次調査地点位置図（1/4,000）

根上は一部に古墳が存在することが確実だったことや、重機が尾根上に上るときに遺跡を破壊する恐れがあり、また一部には重機が入れない急な斜面があったため、重機を使用した試掘調査をあきらめ、本調査開始後に作業員の手掘りによる試掘を行うこととなった。そのため本調査の対象は尾根上の7000㎡と谷部50㎡となった。この結果を福岡市土地公社に報告し、平成15年度当初からの調査開始に向けて協議を行った。本調査には平成15年４月１日から着手し、８月12日まで行った。まずもともと谷部にあった農道の出入り口を崩落防止用の柵で塞いでしまったため、南側の丘陵先端側から車の入る道を重機で造ることから始め、その後、谷部に作業員休憩用のテント等を設営してから作業を始めた。古墳が分布する尾根上は真竹が密生していたが、遺跡を壊す恐れから機械を入れることができず事前の伐採ができなかったため、当初は竹の伐採を行った。作業員約40名による約7000㎡の伐採が５月後半までかかり、５月頭から一部平行する形で尾根部の試掘調査と谷部の古墳の可能性がある石組みの調査を開始した。谷部の石組みはトレンチを入れた結果、畑耕作土の上からの掘り込みの中に入っていることが判った。畑を作っていて出てきた石を穴を掘って埋めたものと思われる。遺構でないことが判った時点で調査を終了した。

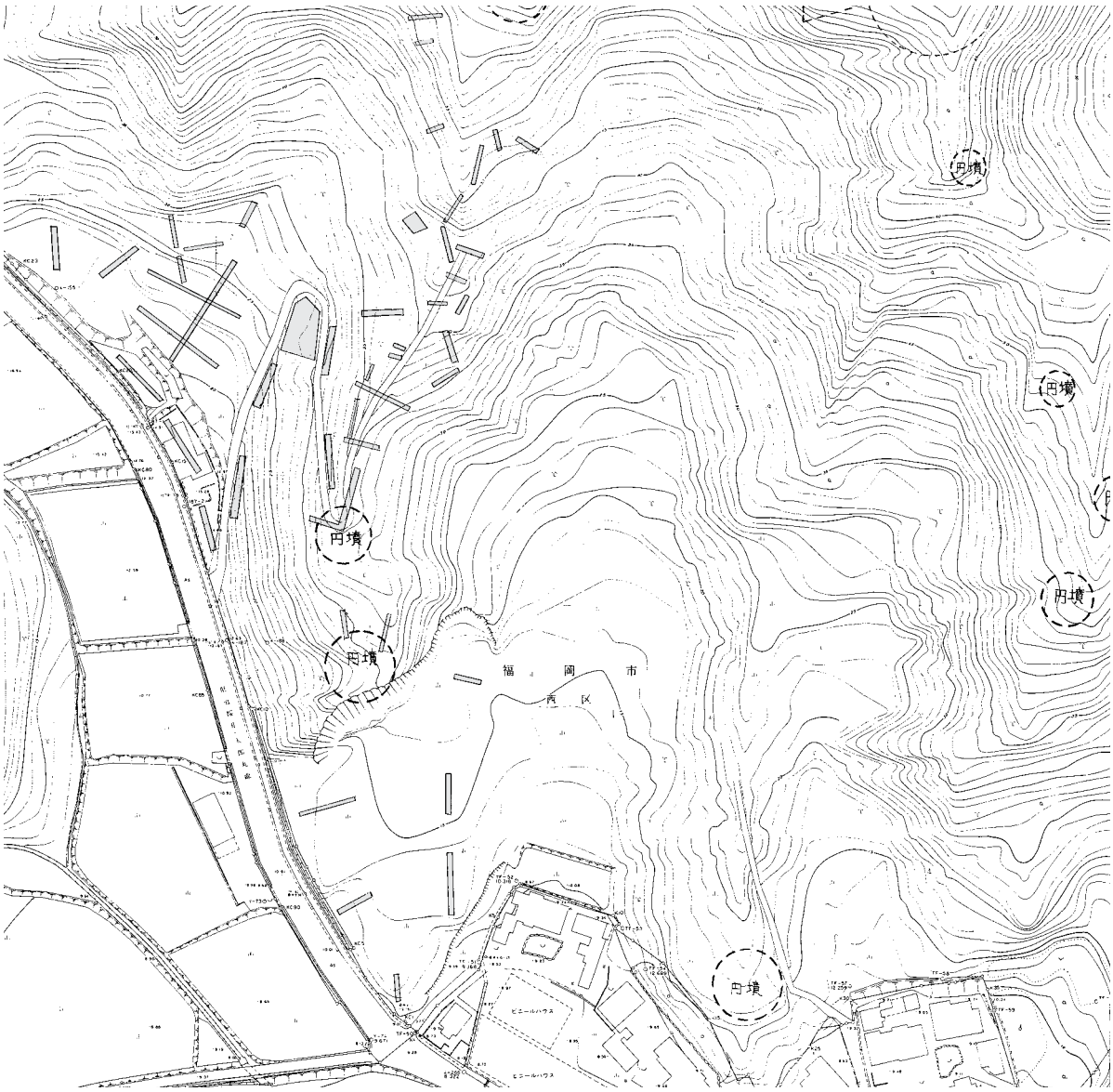


Fig.2　調査区周辺図（1/2,000）

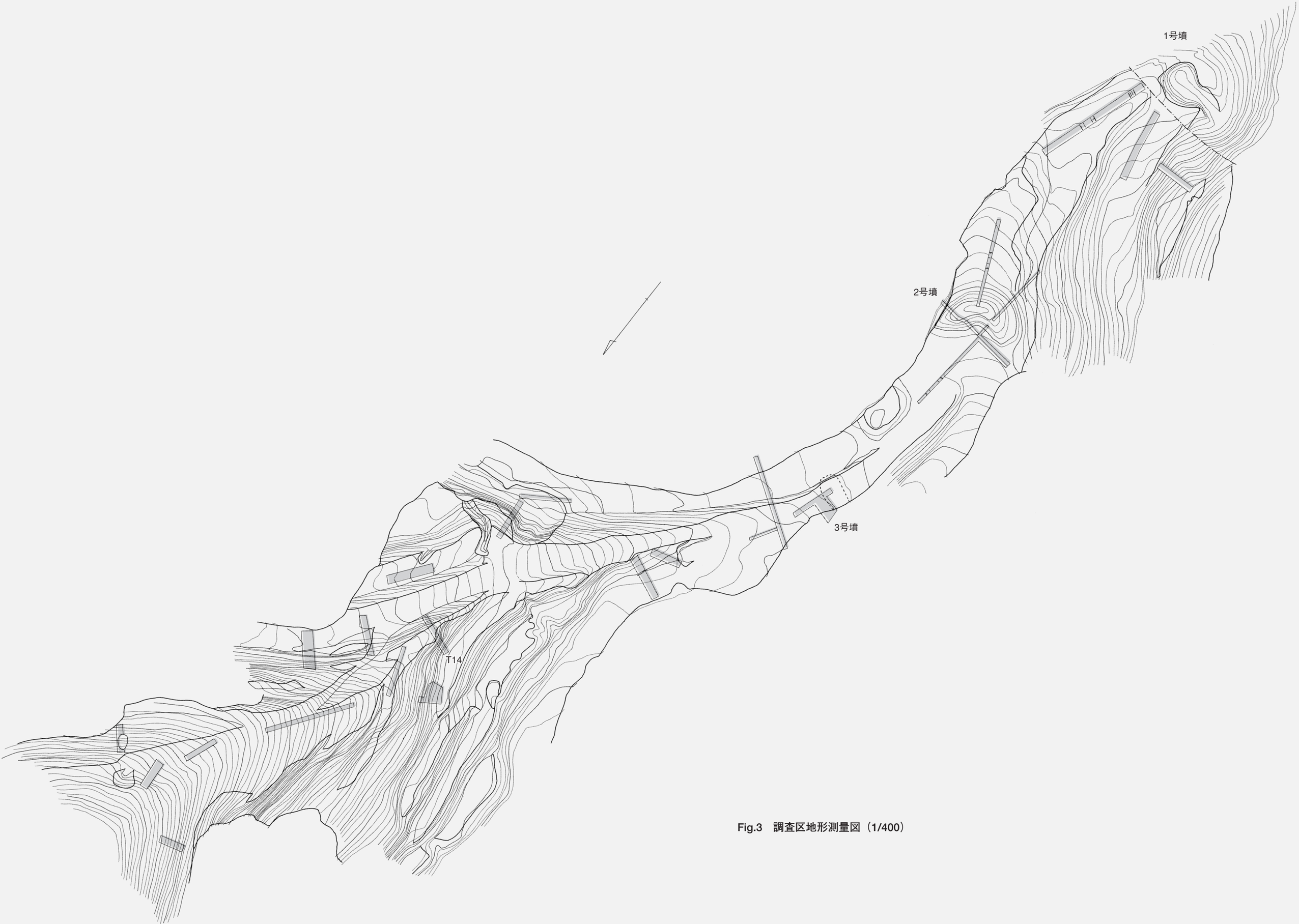


Fig.3　調査区地形測量図（1/400）

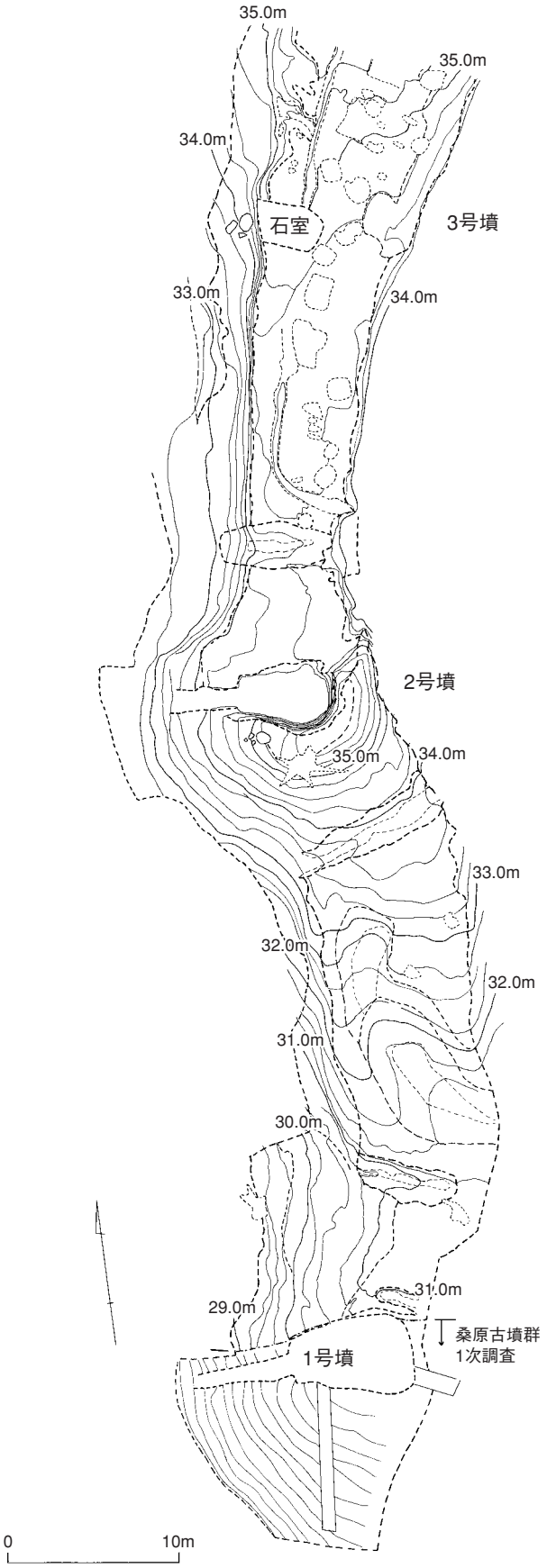


Fig.4　墳丘遺存図（1/400）

2．昭和61年の調査に至る経過

昭和61年、福岡市西区元岡の平野に面する丘陵で土取りが進み、古墳が崩壊する恐れがあるとの通報があった。当該地は「福岡市文化財分布地図」では桑原古墳A群として尾根上に4基の古墳が登録、掲載されている。このうち南側の3号墳についてはすでに土取り工事で消滅している。事前審査担当が現地踏査したところ、土取りは残っている4号墳の間近に迫り、崖面の崩落が起こるものと予想された。このため土取り業者と保存についての協議を行ったが、土取り工事の中止は不可能と言うことになり、隣地所有者の了解を得て昭和61年9月8日より調査に着手することにした。

急斜面の安全確保や連日の長雨で思わぬ日数を要したが、10月8日に無事故で終了した。

調査終了後、図面、写真など記録類の整理、出土遺物の実測図作成などを済ませ、福岡市埋蔵文化財センターに仮収蔵を済ませたものの、調査報告書は未発行のままであった。

その後、この地を含む275haが九州大学統合移転地となったことから、福岡市教育委員会では、大規模事業等担当課を組織し、移転地内の踏査、試掘を経て平成8年度から本調査を開始することになった。この移転地内の遺跡名を「元岡・桑原遺跡群」と総称し、調査地点ごとに次数を付けている。2005年度末までに48次に達し、毎年大きな調査成果を上げている。

崩壊の危機に瀕していた桑原古墳A群の土取り工事は幸いにも中断されていたものの、新たに九州大学新キャンパスの造成工事範囲内となり、平成15年度より34次調査として尾根全体の本調査を行うことになった。この34次調査によって17年前の測量杭やトレンチなどが見つかり、古墳群（現在は「元岡古墳群J群」と呼び、昭和61年調査の4号墳を1号墳とする）の様子が明らかになった。今回、元岡古墳群J群の古墳群の報告書作成に当たり、掲載について福岡市土地開発公社や九州大学側の了解を得ることが出来たので、未報告であった1号墳も合わせて報告することにした。

調査の組織

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課

課長　柳田純孝　第２係長　飛高憲雄

調査担当　力武卓治　　調査庶務　岸田隆　松延好文

発掘作業員　有吉サダエ　池弘子　池田由美　柴田シズノ　藤野フジ子　古井モモコ　津田和子　瀧良子　末松信子　中村千里　塩手鶴子　松本雅子　森友ナカ　柳井順子

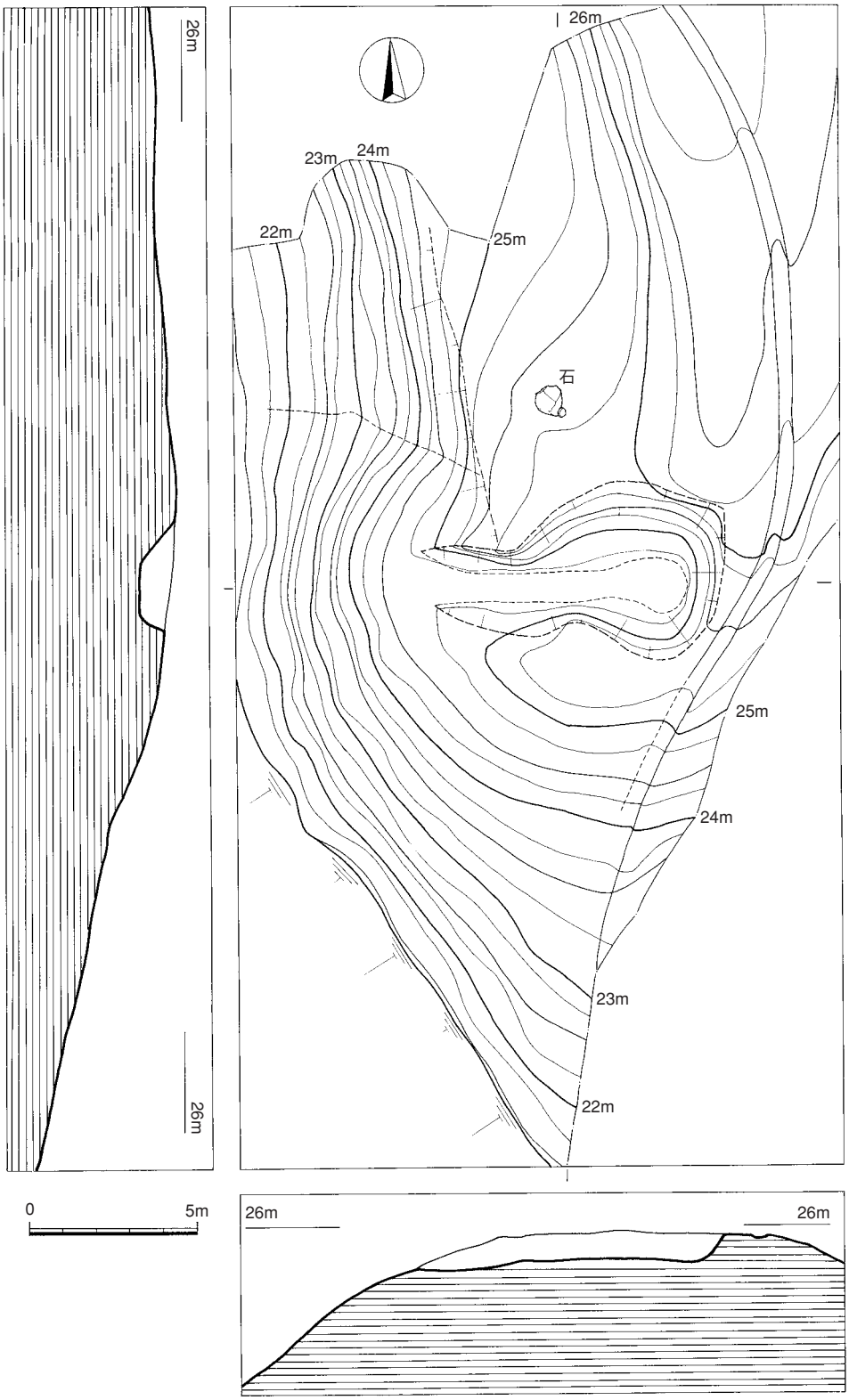


Fig.5　１号墳現況測量図（1/200）

３．古墳群の位置と立地

先述したように昭和61年の調査時には「桑原古墳Ａ群」と呼んでいたが、九州大学統合移転地決定後の詳細な踏査によって、275haの敷地内に７基の前方後円墳と70基を超す円墳が確認された。この結果を得て新たな遺跡分布地図作製に伴い古墳群の名称変更が行われ、昭和61年度調査の「桑原古墳Ａ群」は「2797　元岡古墳群Ｊ群」（以下、この名称を使う）となった。

昭和61年度市内西域の調査は、埋蔵文化財課第２係が担当しており、力武と常松は西区吉武遺跡後に常松が西区野方久保遺跡、力武が西区女原遺跡に分かれて調査を行っていた。野方久保遺跡では、甕棺墓から細形銅剣や

把頭飾り、勾玉など豊富な副葬品が出土し、女原遺跡の調査を終えて合流する予定であったが、急遽、元岡古墳群Ｊ群１号墳（当時は桑原古墳Ａ群４号墳）を力武が調査することになった。

現在、新キャンパスの造成工事が進み、平成17年10月には工学部が東区箱崎から移転してすっかり一変しているが、昭和61年当時は、まだのどかな田園風景が広がっていた。しかし土取りの重機やダンプの騒音が都市化の波がここにも忍び寄っていることを感じさせた。

Ph.1　調査前の崖面（昭和61年）（南より）

調査対象の１号墳の周辺はすでに雑木の伐採が済んでおり、近隣への挨拶、境界確認と発掘区の設定、柵や通路などの安全対策を済ませ、現況測量を始めた。発掘作業員の安全確保だけでなく、斜面下が元岡小、中学校の通学路になっていることから、特に土砂流失や落石防止に注意した。

４．１号墳の調査

１）墳丘

１号墳の乗る尾根は、かっては幅80m程の細い尾根で南側に約200m延びていた。この尾根下の県道を挟んで南東方向に開く谷部があり、大坂池が築堤されている。この池の西岸には縄文時代後期の元岡瓜尾貝塚が残っている。１号墳は、尾根線上を通る山道の南に接して深さ約１mの凹地となっている。最も高い部分の標高は26m前後である。この凹地は羽子板状のプランで、西の斜面側に向かって開いている。凹地の北側５mには石室石材のような花崗岩が露出している。明らかに盛り土と思われる高まりはないが、西～南側にかけて等高線が弧状に回っていることから、古墳らしい姿をどうにか留めている。地元ではこの地の古墳石室の多くが、黒田藩福岡城の築城の際、石垣用に抜き取られ搬出されたとの言い伝えがあり、平野部に近い１号墳もその被害を受けている恐れが強く、破壊程度が危惧された。このため凹地を中心にして４本のトレンチを設定し、石室掘り方、石室構造、羨道の有無、墳丘盛り土、地山整形などを慎重に調査することにした。

凹地長軸に対しほぼ直角に南方向に設定した３号トレンチでは、地山、盛り土の状況を最も良く観察できる。この尾根の地山は、花崗岩風化土である。この上の第７層は黒色土で旧表土と思われるが、凹地中心より約3.6mで途切れている。地山上の第４～６層が墳丘盛り土と考えられ、厚さは約５～30cmである。この盛り土は２号トレンチでは第７層、４号トレンチでは第５層に当たり、凹地中心からおおよそ半径６～８m程に盛り土が残っていることになる。盛り土の厚さや墳丘の大きさは、石室の高さに対応するものであるが、後述するように石室の構造が不明のために、盛り土の高さや墳丘の大きさを直接知ることは出来ない。

３号トレンチの地山は、凹地中心より約6.5～8.5m付近に２段の段落ちがあり、また等高線も中心に向かって湾曲せず斜面方向に流れていることから、積極的な根拠を欠くがこの付近に墳丘裾を推測した。凹地北側は隣地のために現表土を剥がしていないが、等高線は回っていないことからすると、墳丘は標高の低い南側斜面に特に顕著に盛りつけていたと思われる。これは尾根下からの視覚的な効果を意識したもので、合わせて墳丘の安定にも適した築造方法であったろう。

Ph.2　作業風景（北東より）

4号トレンチ土層
1　茶褐色土
　石材抜き取り時？
　淡茶褐色土
2～4は石室裏込め土
2　赤茶褐色土
3　赤茶褐色土
4　黄茶色土
5　灰色を帯びる

2号トレンチ土層
1　暗灰茶褐色土
2　茶褐色土　やや砂質
3　黄茶褐色土
4　褐色土
5　褐色土
6　灰茶褐色土
7　黄茶色土
8　黒色土　旧表土
9　赤茶色土

2号トレンチ土層
1　淡黄茶色土　山土の下層
2　淡黄茶色土
3　茶色土　わずかに灰色粒土が混入
4　茶色土　地山の赤茶色土粒が混入
5　茶色土　4層とほぼ同じ
6　灰茶色土
7　黒色土　旧表土
8　灰黒色土　樹根か
9　淡黄茶色土　2層と同じか
10　茶色土　3層と同じか
11　茶褐色土
12　茶色土　3、10層に同じか
13　灰黒色土
14　灰茶色土
15　赤茶色土
16　灰茶褐色土　現地表
17　灰茶色土　やや赤み
18　赤茶色土　地山のブロック
19　赤茶色土
20　赤茶色土　やや砂質
21　赤茶褐色　粘質
22　赤褐色土
23　暗茶褐色土
24　赤茶色土
25　灰茶色土　砂質
26　灰茶色土　やや赤み
27　赤茶色土　やや赤み
28　赤茶褐色土　よごれ
29　灰茶色土　砂質
30　灰黒茶色土　花崗岩の砂粒
31　暗灰茶色土　角礫

Fig.6　1号墳測量図（1/100）

2）石室掘り方

凹地の掘り下げ作業の途中で、何度か扁平な自然石が現れ石室床面と思う場面があったが、埋土は攪乱されており、深さ約180cmでようやく地山面に達した。結局、石室側壁は腰石の１個も残さず完全に持ち去られていた。ただ４号トレンチでは奥壁の裏込め土層を確認出来た。

石室掘り方の北側は隣地に入り込んでいるために、平面プランを完全に掘り出してはいないが、長軸7.2m、奥壁幅4.8m、玄門幅3.6mのやや長めの台形状を呈している。壁はほぼ直に近いが、掘り方底面のコーナーは上面よりも丸みがあり不整形となっている。これは石材抜き取りの影響であろう。奥壁側には20cm程の浅い落ち込みがあり、奥壁石材を据えた痕跡と思われるが、両側壁や袖石部は平坦になっておりその痕跡は認められない。

羨道は玄門部で幅1.15m、西端部で0.8m、長さ６m測る。底面は玄門より3.5mまで平坦に延び、手前2.5mは地山斜面と同じ傾斜で落ちている。羨道の残りが意外に良好であることから、石室石材の抜き取り移動は、この羨道を掘り下げ拡張したのではなく、石室から直接持ち上げ、尾根斜面を利用して搬出したのであろう。

これらの所見から大まかであるが、１号墳は直径約16m前後の墳丘で、西に開口する横穴式石室の埋葬施設を持つ古墳。石室は長さ5.4m、幅2.6m前後の長方形、幅１m、長さ６m程度の羨道が付いていたと推測できる。

3）出土遺物

須恵器、土師器、鉄製品、金製耳飾りが石室掘り方（１～24）の埋土と墳丘（25～39）から出土した。これらのすべてが原位置を示すものはなく、また時期の異なるものが混在していた。先に石室掘り方より出土した遺物について記す。なお金製細型耳環については福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏に金属分析を依頼し、その結果を掲載した。

石室掘り方の遺物（1～24）　**1**～**17**は須恵器。**1**～**5**は坏蓋。**1**は生焼けで淡茶色、口径142cm、器高4.4cmで、稜部は横ナデでわずかに窪んでいる。天井部のヘラ削りは約1/2を占める。ロクロ回転は時計回り。**2**は口径12.8cm。濃灰色の堅緻な焼成である。口縁部はほぼ直に立ち、その高さは約1.2cm。ヘラ削りは天井部の約1/2。**3**は口径が11.2cmと小さくなる。口縁部と天井部の境はなく、ヘラ削りしている。全体に調整は粗雑。ヘラ記号のようなキズがある。**4**はかえりを持つ蓋。天井中

Ph.4　３号トレンチの土層（南西より）

Ph.3　石室掘り方（北西より）

Ph.5　３号トレンチ（南より）

Ph.6　羨道より玄門（西より）

Ph.7　玄室より羨道（東より）

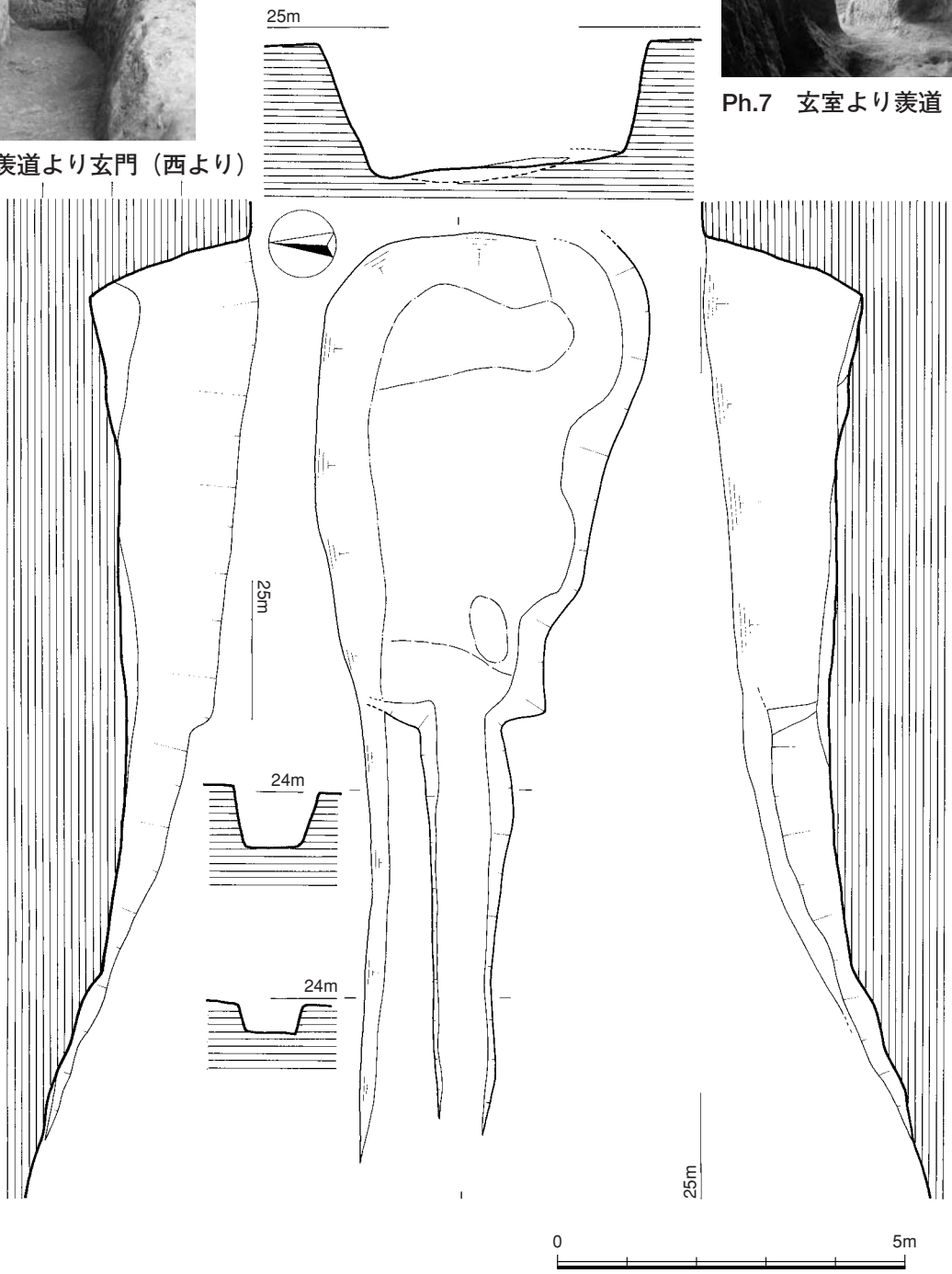


Fig.7　1 号墳石室実測図（1/100）

心部を欠いているが尖り気味の器形である。かえり部径は 8 cm。天井部にヘラ記号がある。 5 も同じようにかえりを持つ蓋。天井部は扁平で、つまみを付けている。ヘラ削りは1/2以上を占め、器壁の厚い作りである。 **5** 、 **6** は坏身。 **5** は口径12.6cm、たちあがりは直線的に内傾し、水平な受部は短い。焼成は良好だが、胎土に小砂粒を多めに含む。 **7** は口径9.2cm、器高3.8cm。底部は内外ともナデ調整。 **8** は小型坏。口径8.0cm、器高3.4cm。口縁部は薄手の作りで、外底部はヘラ状工具で強く

ナデている。**9**は無蓋高坏で口径8.4cm。口縁部は緩やかに小さく外反する。内外面とも横ナデ調整。堅緻な焼成で灰色を呈する。**10**は高坏脚部。大きく開き屈曲して裾部を作る。裾径は8.8cm。**11**は底部を欠き全形が分からないが高坏の坏部とした。たちあがりは微かに湾曲しながら内傾しており、受

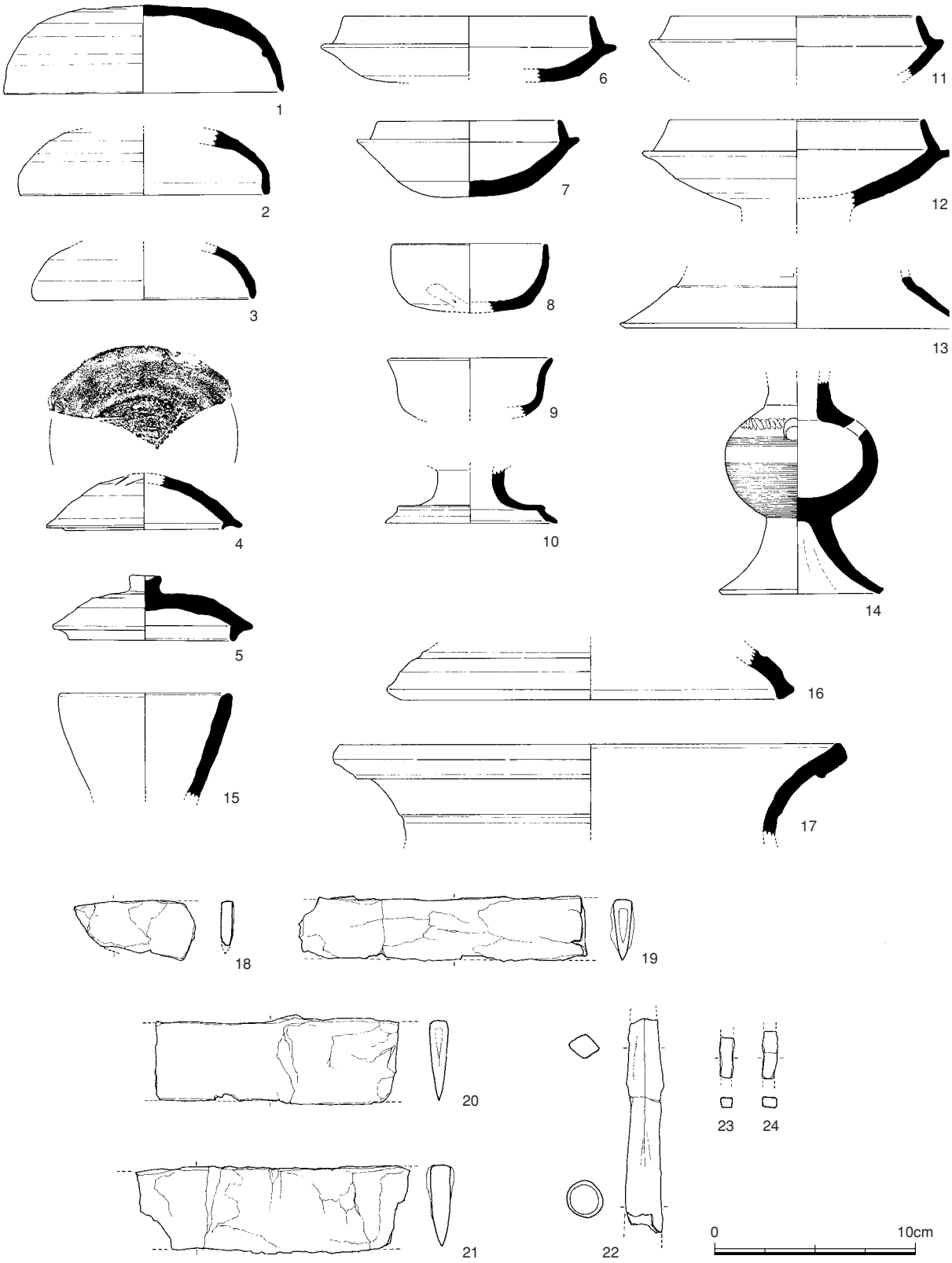
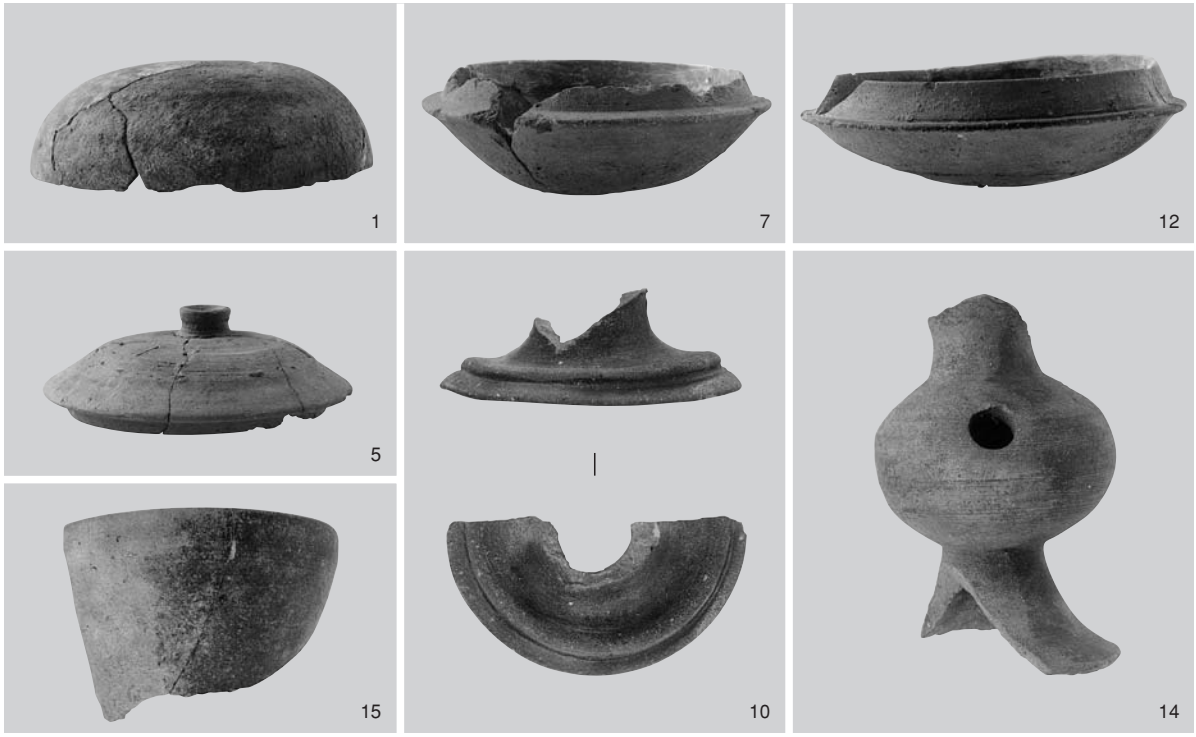


Fig.8　1号墳石室掘り方出土遺物実測図（1/3）



Ph.8　掘り方出土の遺物

部の突出は弱い。口径13cm、小砂粒が表面に露出してざらついているが調整は丁寧である。**12**は底部に脚部との接合痕が見られることから高坏の坏部である。たちあがりは11とよく類似しているが、受部は水平に突出している。底部のヘラ削りは約1/2を占め、ロクロ回転は時計回り。**13**は高坏の脚裾部。裾端部径は18cmで、器壁の薄い作り。弱い段の上に透かしか。**14**は台付き甕で口頸部を欠く。球形に近い胴部はカキ目調整で上方に16×15mmの孔を穿っている。胴部最大径は7.4cm。脚部は内外面とも横ナデ調整。**15**は瓶の口縁部で口径10.4cm。灰を被っており内面は自然釉が流れている。**16**は径18.8cm。内部に自然釉が見られることから、器台の坏部と考えたが、やや深さが足りない。元岡・桑原遺跡群では類例がなく、ここでは脚裾部とした。堅緻な焼成で、調整も割りに丁寧である。**17**は甕の口頸部。大きく外湾し、端部を幅広く肥厚させている。内外面とも微妙な凹凸がある。**18**～**24**は鉄器で、鉄刀（18～21）、鉄矛（22）、鉄鏃（23、24）が出土した。鉄刀は接合後に計13片となり、刀身幅には３cm（18・19、他1片）、４cm（20、他６片）、4.3cm（21、他２片）に大きく分けることが出来る。３分類の中で保存良好の破片を選んで図示した。残念ながら刀身全体を接合、復元出来ないことから、何口であったかを推定することは難しい。刀身は鋒から関部にかけてやや幅広くなることを考慮する必要があり、刀身幅４cmと4.3cmの破片は同一刀身の可能性が高い。とすると２口以上か。**22**は鉄矛。鋒と袋端部を欠く。現存長10.7cm、袋部は径1.84×1.78cmの円形、厚さは1.9mm。身部は断面菱形で錆が進んでいることもあって鋭利ではない。鎬は鈍く、袋部の上半に達している。関は明瞭でないが現存先端より3.4cmの両側に見られる。**23**、**24**は鉄鏃、木質部が認められないことから茎ではないだろう。**23**は5.8×5.4mmで方形に近い断面。**24**は6.5×5.0mmの長方形断面。この他に金製細型耳環が出土した。

墳丘の遺物（25～39）　**25**、**26**は土師器の高坏脚部。**25**は赤茶色で外面は縦のナデ調整。内面は逆時計回りの横ナデ。**26**は脚裾部まで残っており、脚裾部径9.2cm。脚柱外面はヘラ状工具で縦ナデ後に丹塗り。坏部にも丹塗り痕が見られる。**27**、**28**は坏身。**27**はの口径10.4cm。受部はわずかに上を

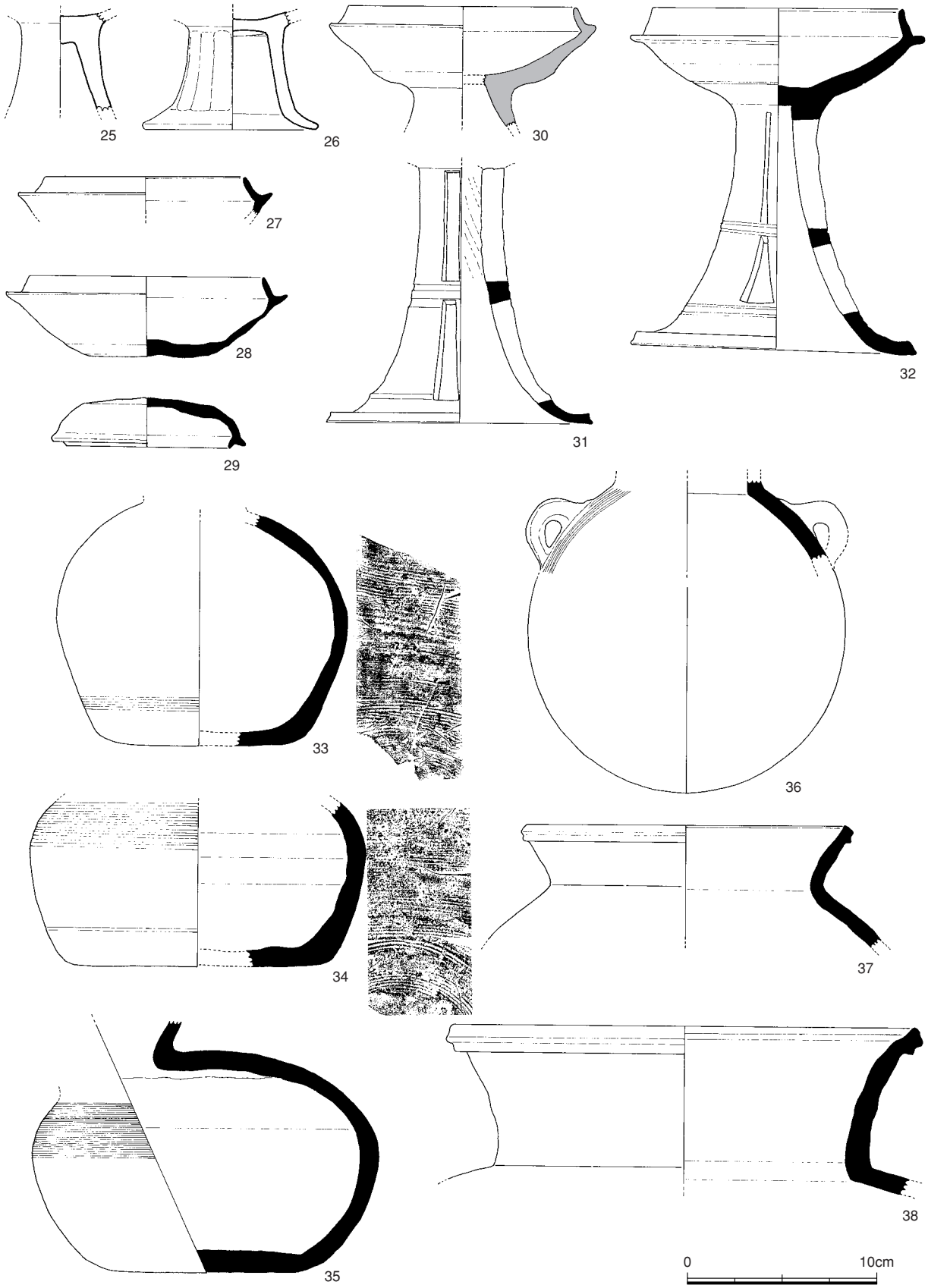


Fig.9　1 号墳墳丘出土遺物実測図 1（1/3）

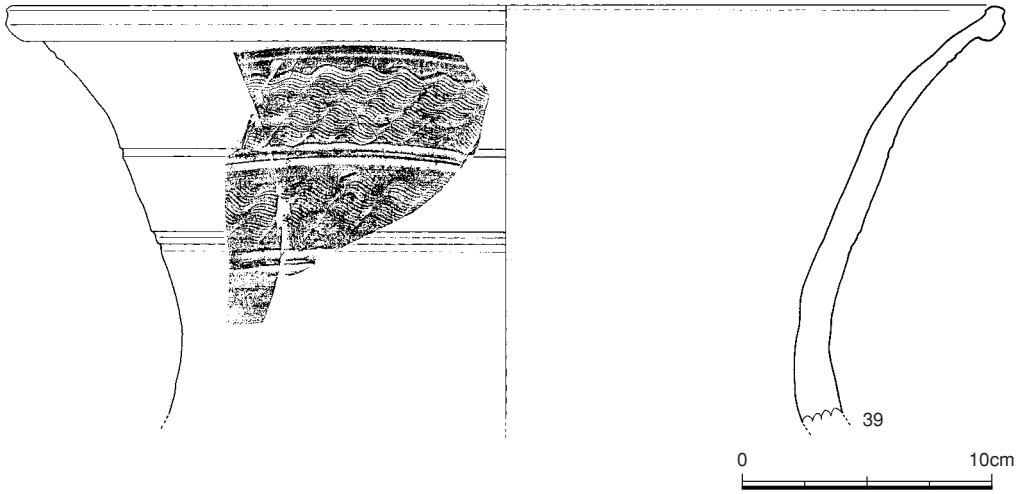


Fig.10　1号墳墳丘出土遺物実測図2（1/3）

見ている。**28**は口径13.2cm、器高4.2cm。きわめて薄手の器壁で、受部とたちあがりの先端は細くなっている。**29**は口径cm、器高2.5cm。かえりは小さく、天井部のヘラ削りは約1/2を占める。**30～32**は高坏。**30**は有蓋高坏。生焼けで脚部下半を欠く。坏部の口径は12cm。脚部の広がりからすると長脚ではない。**31**は長脚二段高坏。口径13.2cm・器高17.9cm。脚部高12.9cm。透かし窓は上段が長方形、下段が三角形で、切り離しは雑。坏部立ち上がりの高さは1.5cm。胎土に1～2mm大の砂粒を多めに含んでおり、全体的に粗雑な調整である。**32**は同じような長脚二段高坏で坏部を欠く。脚裾径は14cm。脚部高13.3cm。脚部中位に浅い2本の凹線を巡らせ、その上下に透かし窓を入れているが、31と異なり下段の透かし窓は三角形ではなく台形となっている。外面は濃灰色で焼成良好。胎土の砂粒も少ない。**33**は周縁部が丸みを持つ底部にやや張りのある胴部がつく。口頸部を欠いて全形が分からなが、長頸壷か。器面の調整は内面が横ナデ、外面がカキ目をナデ消している。胎土に砂粒少なく焼成良好。内外面とも灰色を呈する。**34**は底径13.2cm。内面は凹凸が目立ち、砂粒が露出している。外面は灰を被っている。胴部の上下部にカキ目調整。35のような平瓶と考えたが、胴部に丸みがない。**35**は平瓶。底径は約20cm、胴部はやや上位に張りがあり、最大径18.2cm。生焼けで内面は灰茶色、外面は茶色となっている。頸部屈曲部は丸みがあり、その径は3.3cm前後である。胴部上半はカキ目、下半はナデ消している。**36**は提瓶把手部の小破片。胎土は砂粒少なく堅緻な焼成となっている。把手は鍵形ではなく輪状で、その接合は割りに丁寧。胎土は密で焼成も良好。**37～39**は甕。**37**の口縁部はく字形に強く屈曲している。口縁部外側に小さく断面三角形の凸帯が巡っているような断面である。口径17.6cm。内外面とも横ナデ調整で、胴部は叩きではない。器面に小砂粒が浮き出ており、外面は灰を被っている。**38**は口径24.4cm。頸部は大きく外反しながら延び、口縁端部は強く横ナデして上方に小さく突き出し、外側は口唇状の断面としている。胴部外面は平行叩き、内面は同心円文叩き。小破片であるが、堅緻な焼成だけでなく、成形、調整とも確かな技で作られていることが分かる。**39**の口径は40cmの大型甕。緩やかに外反して延びる頸部は、その中位より口縁部への3か所に浅い凹線で2区画し、その間を細かな波状文で埋めている。内面は横ナデの凹凸がやや目立つ。外面は濃灰色、内面は灰色を呈している。

4）小結

古今津湾の南に展開する今宿古墳群では、前方後円墳や群集墳が調査され、その形成過程が明らかにされつつある。これに対して、本古墳は元岡・桑原地区では最初の調査であったことから、対比する上

でも興味がある事であった。しかし、残念ながら埋葬施設である横穴式石室の石材は完全に抜き取られ、その構造すら明らかに出来なかった。このため出土遺物については小破片でも実測し、図示するように努めた。これらはすべて原位置を留めず、時期の異なるものが混在しているが、本古墳の副葬遺物とほぼ断定出来るであろう。須恵器は6世紀終わりを主にして7世紀に降りるものがあり、これは追葬の期間を示すのだろうか。また本市で7例目となる金製細型耳飾りは、朝鮮半島に近い糸島半島という地理的な位置からして、今宿古墳群に並ぶ重要な古墳群の存在を予想させるに十分であった。現在進められている九州大学新キャンパス造成に先立つ調査で十分にその重要性を明らかにしつつある。

Ph.9　墳丘出土の遺物

福岡市内における「金製細型耳環」の出土事例と耳環研究に関する問題提起

比佐陽一郎（埋蔵文化財センター）

耳環は装身の目的から、基本的に金銀といった貴金属の輝きをもった外観を有するが、それを得るにあたっては金や銀だけではなく様々な金属素材や加工技術が駆使されている。これまで外観から金環、銀環などと単純に分類されていたが、近年、自然科学的手法を援用した調査が進み、その材質や構造解明が進んでいる。筆者も保存処理担当者として福岡市内出土の資料を中心にこのような視点からの調査を行っているが、先学の研究成果も併せると概ね別図のような分類が想定される。

耳環に関する細かい材質や製作技法のデータは、多くの事例の比較検討により時期的な変遷や地域的な傾向の抽出が期待される。古墳時代の金工品として普遍的な耳環から導き出されたこれらの内容は、技術的に関連の深いと見られる馬具や装飾付大刀など、威信財の製作や配布といった政治的問題にまで言及できる可能性を秘めていると言えよう。その一方、使用者側、つまり装着状況を見せるという視点に立つと、耳環の外観や構造に対する解釈は単純ではない。なぜなら当時の金属に対する価値観や、耳環の持つ諸属性の差異が示すものなどが十分に解明されてるとは言い難いからである。

元岡古墳群Ｊ群では、１号墳で１点、３号墳で２点、計３点の耳環が出土しているが、これらは先の区分に当てはめると金で芯（環胎）を成形し表面に加飾を施さない、いわゆる金製細型タイプに分類される。埋蔵文化財における価値判断では、この金製細型耳環は漠然と上位に位置付けられるが、そこには金無垢（芯まで金）、つまり金がより多く使われているという現代的な価値観も少なからず作用しているように思われる。筆者はかつて、福岡県内を対象にこの種の耳環を出土する古墳について検討し、その所有者像を上下の意味合いではなく職能や生活基盤としての特徴（海上交通や交易、半島との直接、間接的な関与）を反映したものと想定した（比佐2003）。ただ、その際にも疑問として提示したが、外観上差違のないと思われる金無垢の細環と、銅の細環に鍍金や金板で加飾したものが同列であったのか、金の使用量により優劣が認識されていたのかという前提が構築されないままの検討であった。仮に外観が優先されるのであれば、材質的要素を排した「金色の細型耳環」という括りでの検討が必要なことになる。更にいえば金製細型耳環といっても100％の純金ではなく、中には銀の含有比が50％に及ぶものもある。このような「金製」細型耳環と銀製細型耳環の差異も、当時の人々が如何に認識していたかという問題もある。これらについてこの場で検証することはできないが、福岡市内での新たな類例発見や、製作技法、構造に関する新知見が得られたこともあり、今後のための基礎データとして元岡Ｊ群のデータを含め、改めて金製細型耳環の出土事例を整理しておきたい。また元岡古墳群内ながら出土地点が不明確な同タイプの耳環に関してもこの場を借りて紹介する。

別表には福岡市内で確認されている金製細型耳環について、各個体の計測値、分析データを示している。分析は福岡市埋蔵文化財センターの蛍光Ｘ線分析装置によるものである。蛍光Ｘ線分析法は、試料表面にＸ線を照射し、含まれる元素から生じる各元素特有のエネルギーを持つ二次Ｘ線（蛍光Ｘ線）を検出器でとらえ、その種類や量をピークとして表すものである。量に関しては得られた二次Ｘ線の強度を元に、付属のコンピュータが各元素の比率合計を100％になるよう計算することが可能であるが、これはあくまでその装置内でしか通用しない数値であり、異なる仕様の装置で得られた数値との比較は無意味且つ誤った結果に導かれることになる。これを防ぐには予め組成比の明らかな標準試料を測定した校正を要する。資料の大半は以前、奈良文化財研究所において標準資料を用いた分析を行っているが（村上他2002）、福岡市の装置による標準化されていないデータとは当然異なっている[註1]）。しかしその後出土した資料は標準化されたデータが無く、この場で全点を比較するには標準

化されていない数値を用いるしかない。この様な数値の提示が招く混乱の危険性は再三指摘されているが致し方ない。なお分析にあたっては、付着物や手づくり故の元素偏析等によるイレギュラーを確認する意味で、各資料ごとに複数箇所の分析を行い、結果は平均値で示している[註2]。

まず寸法を見ると、太さは２mm前後、３mmは超えない。環の大きさは15mm程度の小型品から35mmに及ぶ大型品まで様々であるが、18mm程度と30～34mm程の部分に分布の空白を見いだせないこともなく、小、中、大というグルーピングも可能かもしれない。次に組成であるが、一見バラバラのようで、やはり幾つかにグルーピングされるようにも見える。石ヶ元４号墳例のように金が95％を超えるものが一つ、次に80％後半～90％前半まで、そして75～80％、最後に70％以下ということになろうか。しかし繰り返すようにこれらは標準化されない数値であり、特に70％以下と出ているものは実際には金が半分以下しか含まれない可能性がある。この様なものまで果たして「金製」と呼ぶことが妥当か、銀を多く含むと色調が白味を帯びてくるが、銀製耳環と外観上の差違が果たして見えるのかといった疑問が生じてくる。

そして更に、ここまで記しながらこれまでの記述を覆すような事例を示しておくことにする。未報告資料のため詳述できないが、福岡県内のある出土例では、表面上通有の金製細型耳環でありながら半分に折れていることで内部構造が観察できる資料があり、これによれば破断面が黒色に変質し、その表面に薄い金が被さった構造であることが看取される。黒色部分は分析によって銀であることを確認しており、銀の細環に金の薄板を被せた構造ということになる。金製細型タイプは破損したものがほとんど無く内部構造が確認できないこともあり単一素材と判断しがちであるが、安易な判断が危険なことを示す資料といえる。しかし他方で、元岡出土地点不詳資料のように、やはり半折しながら芯まですべて均質（単一素材）であるものも存在する。この違いが所有者にとってどんな意味を持つのか、新たな課題といえる。また蛍光Ｘ線分析では表面から数百ミクロンの厚さの元素情報が取得されることから、この様な事例ではデータに芯材の影響が反映されることとなり、この点からも分析データのみ単純に比較することの難しさを物語っている。破損が無ければ基本的に芯材の材質を確認することは不可能で、一部で試みられている方法も特殊な装置と高度な知識が要求され一般化できるものではない（村上2001）。表面分析と比重測定結果の比較から類推するのが手近なところであろうか。

この様に耳環の調査が進むとともに製作技法の部分で複雑な様相を呈しており、金製細型耳環という区分の意味も改めて考えざるを得ない状況といえる。

註１）数値の違いの幾つかを示す。

			福　岡　市			奈文研（標準化）		
No.	遺跡名	資料No.	Au	Ag	Cu	Au	Ag	Cu
1	猿の塚古墳	701801045	91.44	7.71	0.85	75.88	23.81	0.30
5	吉武S-9号墳	841635056	77.28	20.50	2.57	50.50	48.52	0.99
8	桑原石ヶ元４号墳	965630031	95.59	2.20	2.16	91.05	7.91	1.04

註２）今回の分析では部分によって大きく数値が異なることはなかった。

・比佐陽一郎　2003「金製細型耳環の考古学的検討」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』同志社大学考古学シリーズⅦ　同志社大学考古学シリーズ刊行会

・村上隆　2001「SPring-8を用いた高エネルギーコンプトン散乱Ｘ線分析法による金・銀製耳環の非破壊分析」『日本文化財科学会第18会大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

・村上隆・比佐陽一郎・片多雅樹　2002「金製細型耳環の製作技法に関する考察」『文化財保存修復学会第24回大会研究発表要旨集』文化財保存修復学会

No.	遺 跡 名	調査No.	報告書	掲載Fig	時　期	計測値（計測部位はFig12参照）									分析結果		
						Point:A	Point:B	Point:C	Point:D	Point:E	Point:F	Point:G	重量	比重	Au	Ag	Cu
1	猿の塚古墳	701801045	18	96-33	6世紀後半	25.10	21.75	2.60	24.85	21.80	1.70	1.80	2.52	15.64	91.44	7.71	0.85
2	猿の塚古墳	701801046	18	96-34	6世紀後半	25.90	22.35	3.00	25.50	22.30	2.00	1.75	2.63	15.84	91.29	7.96	0.75
3	吉武L-7号墳	790607083	54	67-2	6世紀前葉～末	21.70	18.20	0.50	21.25	17.70	1.80	1.85	2.23	15.39	86.62	11.18	2.20
4	吉武L-7号墳	790607084	54	67-3	6世紀前葉～末	21.30	18.00	0.50	20.90	17.55	1.80	1.80	2.16	15.23	87.06	10.93	2.01
5	吉武S-9号墳	841635056	775	50	5世紀末～6世紀前半	17.00	13.55	0.40	15.35	12.25	1.70	1.65	1.28	13.62	77.28	20.15	2.57
6	吉武S-9号墳	841635057	775	50	5世紀末～6世紀前半	17.20	14.00	0.90	15.40	12.55	1.65	1.50	1.24	13.67	77.33	20.26	2.41
7	元岡J-1号墳	8633-仮1	本報告		6世紀後半?	35.75	32.00	―	36.00	32.40	1.95	2.05	5.04	16.46	91.10	5.68	3.22
8	桑原石ヶ元4号墳	965630031	744	14―33	6世紀後半	28.00	24.40	3.25	25.90	22.50	1.70	1.70	3.53	17.92	95.59	2.20	2.16
9	桑原石ヶ元8号墳	965630765	744	未図化	7世紀初頭(～8世紀)	20.70	17.70	―	23.55	20.25	1.50	1.60	2.14	17.23	92.31	6.17	1.52
10	桑原石ヶ元8号墳	965630766	744	65―25	7世紀初頭(～8世紀)	22.15	19.05	0.95	22.35	19.20	1.55	1.55	2.08	16.93	92.01	6.45	1.54
11	桑原石ヶ元9号墳	965630961	744	74―79	6世紀後半	23.95	20.35	0.00	23.95	20.55	2.85	2.85	2.45	15.24	89.11	9.31	1.59
12	桑原石ヶ元9号墳	965630962	744	74―81	6世紀後半	35.30	31.35	―	33.65	29.80	2.25	2.20	4.35	13.30	76.40	21.18	2.42
13	桑原石ヶ元9号墳	965630963	744	74―80	6世紀後半	34.40	30.35	0.15	34.35	31.70	2.10	2.00	4.19	13.37	76.03	21.57	2.40
14	桑原石ヶ元19号墳	965630186	744	123―3	5世紀末～6世紀前半	19.15	14.95	1.20	14.80	19.00	2.30	2.20	2.61	12.62	76.47	21.91	1.62
15	羽根戸南F-2号墳	974430227	661	213-1	6世紀前葉・末	24.10	19.30	0.85	25.40	20.70	2.25	2.45	4.43	15.94	91.02	6.54	2.44
16	桑原A-2号墳	005200060	861	35―61	6世紀中葉～7世紀初頭	30.05	25.80	3.00	28.10	24.30	2.10	2.05	4.63	17.26	93.61	6.00	0.39
17	浦江5次3区3号墳	014404032	792	30―17	6世紀後半	17.00	13.25	0.00	17.00	13.55	1.95	1.70	1.92	14.01	80.72	18.98	0.31
18	浦江5次3区4号墳	014404046	792	39―27	6世紀中葉～末	14.90	12.25	1.75	14.15	11.30	1.50	1.45	0.71	11.75	69.42	29.71	0.87
19	浦江5次5区2号墳	0144-仮1	792	99―169	6世紀中葉～7世紀初頭	17.10	14.30	0.45	16.60	13.70	1.85	1.45	1.56	15.40	88.34	10.81	0.86
20	浦江5次5区2号墳	0144-仮2	792	99―170	6世紀中葉～7世紀初頭	19.95	16.90	1.85	20.00	17.00	1.45	1.45	1.63	16.98	92.18	6.10	1.72
21	元岡J-3号墳	0310-仮1	本報告			27.80	25.00	3.55	26.60	24.20	1.40	1.55	2.06	16.50	92.58	6.68	0.74
22	元岡J-3号墳	0310-仮2	本報告			―	―	―	―	―	1.40	1.45	2.00	16.63	92.71	6.62	0.68
23	元岡(出土地不詳)		本報告			17.90	14.50	―	18.20	15.10	1.60	1.50	1.31	13.66	67.51	30.50	2.00

この他、東京国立博物館展示資料に東平尾出土とされるものがある。

No.23は中央部で断裂しているため計測値は開口部が閉じた状態で計測。
分析装置は微小領域用エネルギー分散型蛍光X線分析装置（エダックス社製：Eagle-μprobe）
対陰極：モリブデン（Mo）／検出器：半導体検出器／印加電圧：40kV・電流値：任意／測定雰囲気：真空
測定範囲：0.3mmφ／測定時間：120～300秒

Tab.1　福岡市内出土金製細型耳環一覧

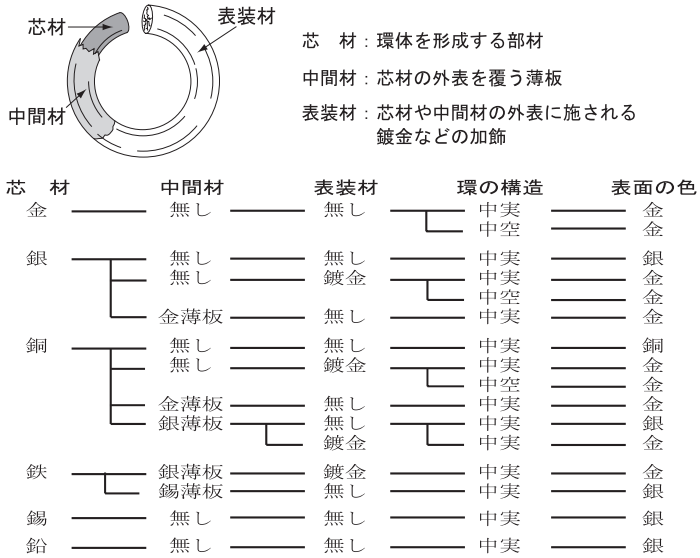


Fig.11　想定される耳環の構造と種類

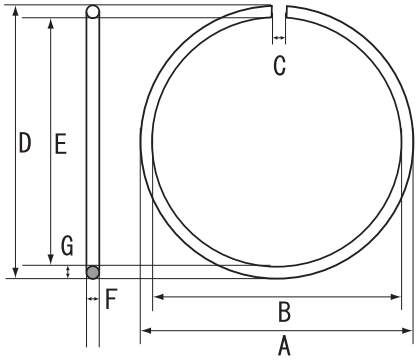
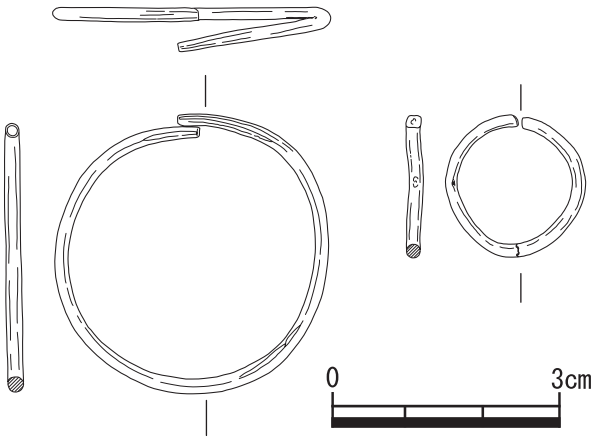
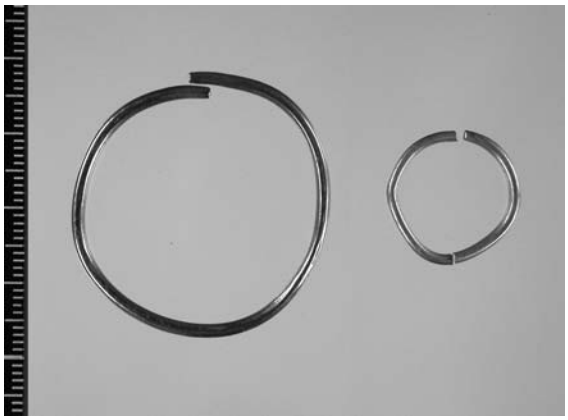


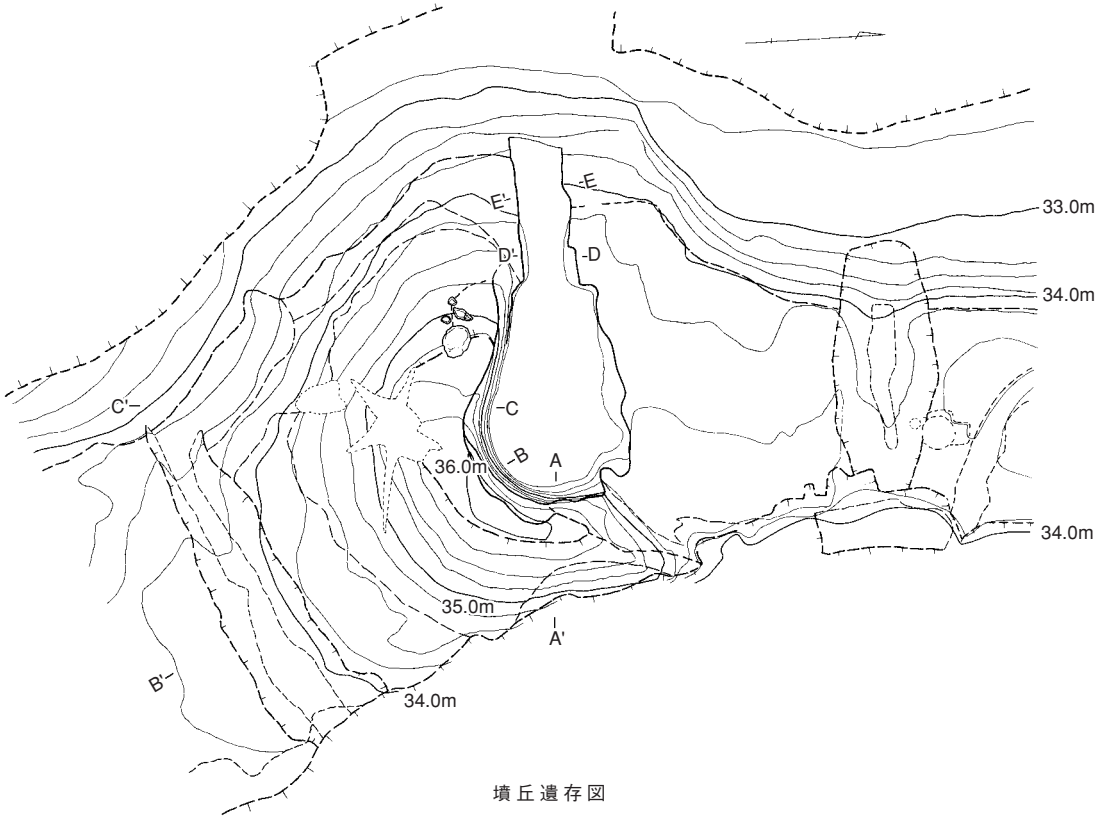
Fig.12　耳環の計測部位模式図



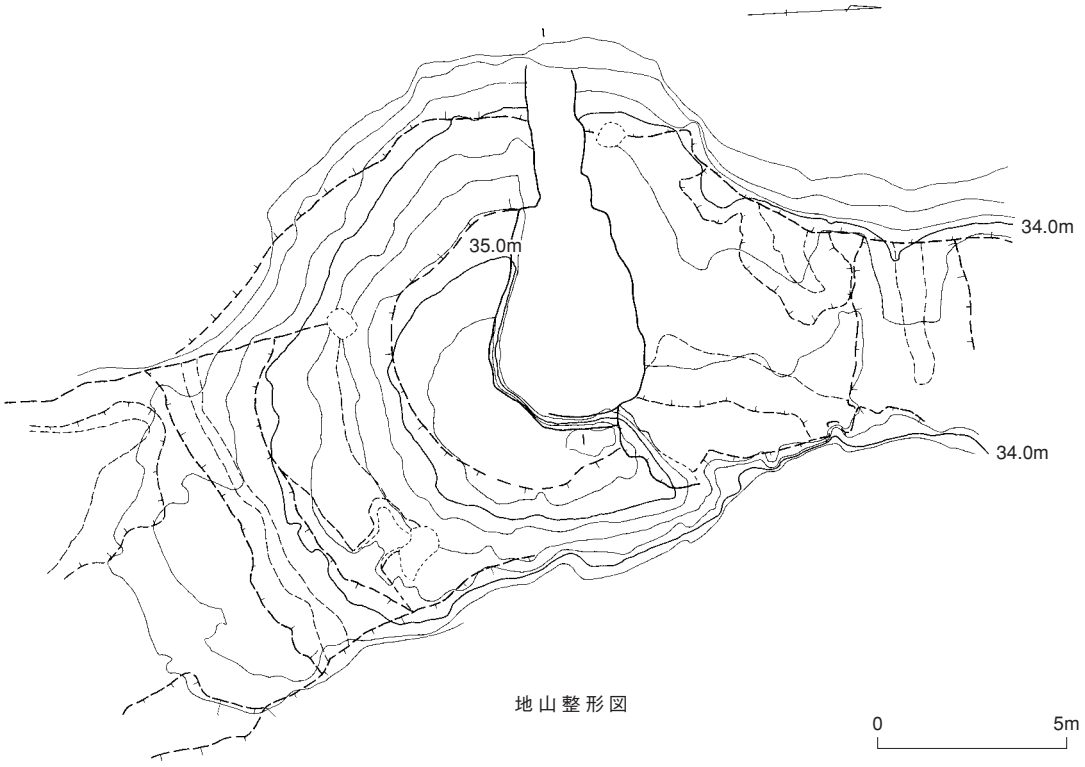


元岡J-1号墳出土資料（左）・元岡出土地点不詳資料（右）

Fig.13　金製細型耳環実測図（1/1）　　**Ph.10　金製細型耳環写真**



墳丘遺存図



地山整形図

Fig.14　2号墳墳丘遺存図・地山整形図（1/200）

5．平成15年度の試掘結果と調査

尾根上の試掘は全体で25本のトレンチを設定した。25次調査のＡ群とＪ群がつながる可能性もあるため、古墳を探すために尾根上に多く設定し、また岩が露出した部分にもトレンチを設定し、またその他の遺構も探すために、平坦面にも数本設定した。試掘は７月前半まで調査と並行しながら調査をおこなった。トレンチは土層の写真と図面を作成し、位置を平板測量図に落としてから埋め戻した。試掘調査の結果は谷部の結果と同様に表土直下で花崗岩風化土に達し、激しい削平をうけていることが判明した。その中で14トレンチ（T14）では須恵器坏蓋が１点出土した（Fig.25　001）。やせた尾根上で上の古墳から100mも離れているため、古墳からの落ち込みは考えにくい。他の生活遺構などがある可能性も薄いが、現場は比較的傾斜の緩い地点であることから古墳があった可能性はある。

しかし試掘の結果、新しく遺構が確認できたトレンチはなく、今回報告する遺構としては元岡古墳群Ｊ群の１号墳から３号墳の３基である。

1）１号墳

(1) 現状

調査開始前に現在Ｊ群の１号墳が1986年に調査された古墳である可能性があると指摘を受けた。当時は北側の民有地（現２号墳近辺）に立ち入りが困難だったためか、古墳群内の位置関係が不明瞭であった。しかし伐採後踏査し86年の図面と比較したところ、石室掘り方中央から南側が削平されるなど地形は大きく改変している部分もあったが、当時のトレンチが埋まりきらずに残っていたことや、平板測量図に出てくる石や山道との関係が矛盾しないことから1986年調査の古墳はＪ群１号墳であると判断した。１号墳は石室が境界線であったため、1986年の調査後に石室掘り方中央から南側は大きく土取りされ、高低差14mの垂直な崖面であった。北側は畑として利用された後、放置されており調査開始時には真竹や灌木が密生していた。

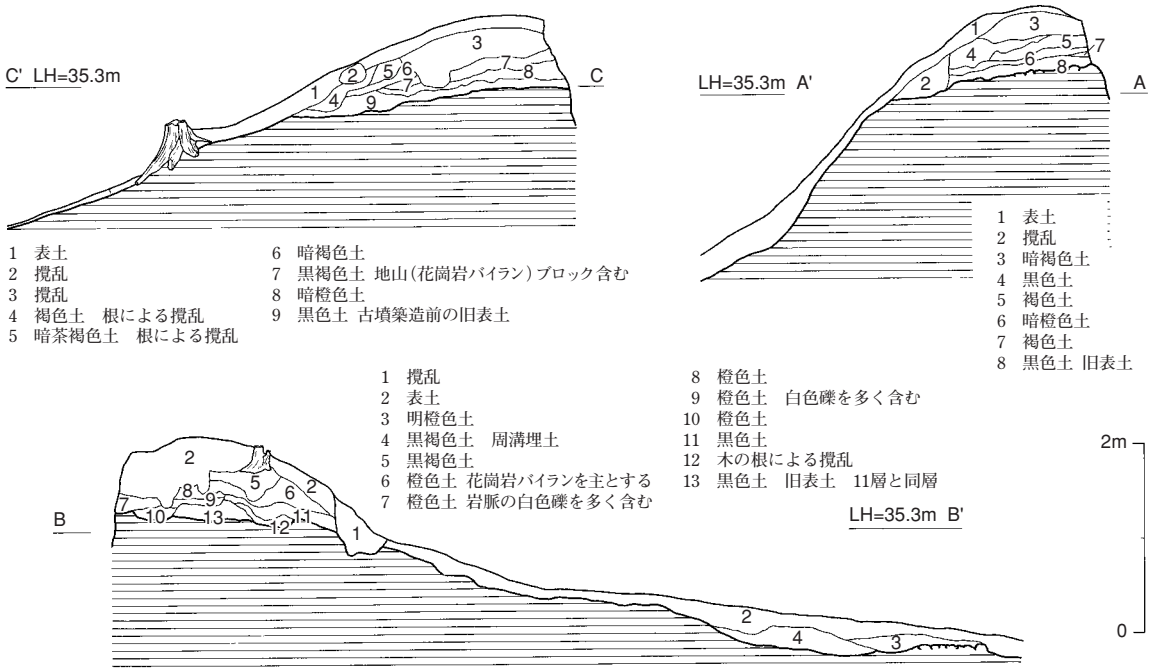


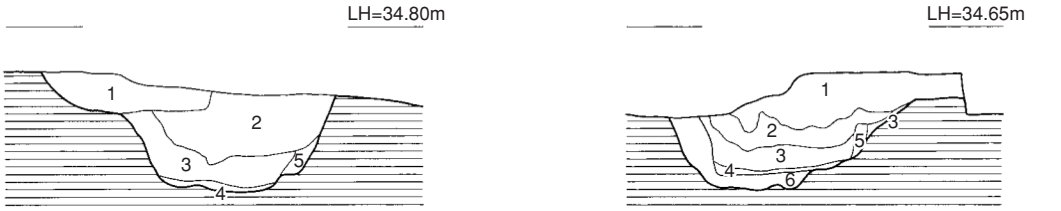
Fig.15　２号墳墳丘土層図（1/80）

1　暗橙色土　赤褐色土ブロック・灰褐色土を含む
2　暗橙色土　黒色土ブロックを層理状に含む　白色砂を多く含む
3　明橙色土　白色礫多く含む

Fig.16　２号墳石室実測図（1/60）

(2) 周溝

尾根上のトレンチで２条の溝を確認した。１本は通常見られる周溝で石室推定中心から11m離れており、幅2.2m、深さ0.5mを測る。埋土は黒褐色を呈す。もう１条は石室掘り方から0.5m離れた溝で幅1m、深さ0.4～0.6mを測る。石室奥壁部分に沿うように巡るが86年の調査では確認されておらず、部分的な溝か。遺物は出土していないが、石室を囲むような形状から古墳に伴うものと思われる。



1　暗褐色土　攪乱
2　黒褐色土　白色砂を含む
3　黒褐色土　1cm以下の橙色土ブロックを多量に含む
4　暗黄褐色土
5　黒褐色土　橙色土ブロック含む

1　暗褐色土
2　黒褐色土
3　黒褐色土 地山ブロックを多量に含む
4　暗茶褐色土 地山ブロックを含む
5　根による攪乱
6　暗茶褐色土 細かな地山ブロックを含む

Fig.17　２号墳羨道・墓道土層図（1/40）

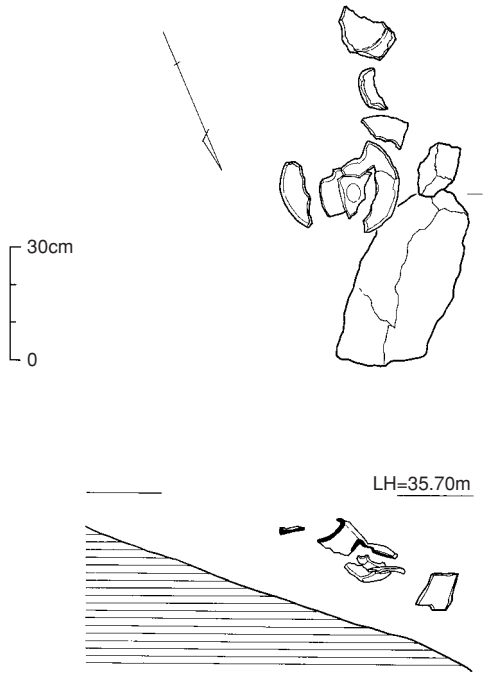


Fig.18　墳丘上遺物出土状況（1/20）

2）２号墳

(1) 位置と現状

２号墳は南へ延びる丘陵の頂部に位置し、１号墳の北側に位置し石室間の距離は39m、周溝外側の距離は16mを測る。近代の畑造成時に造った車用農道により墳丘北側は完全に削平されている。石室はほとんどすべての石を抜かれていた。石室は他の古墳同様西側に開口し、石室基底面の標高は33.9mである。

(2) 墳丘

墳丘の規模は周溝外径では約21m、周溝内径では16.5mを測る。墳丘は全体的に地山整形による削出しである。地山整形の範囲は墳丘南側では半径４～4.5mの平坦面を残し、それから外側の半径約15mの範囲を掘り下げて墳丘状を為している。盛土は石室端から３m程度で高さは１m弱である。盛土最下層は黒色土層で、古墳築造以前の旧表土が遺存する。

(3) 周溝

古墳の南北両側で検出した。北側周溝は幅2.7m、深さ0.4mを測る。覆土は黒色土でしまり強い。南側周溝は幅2.3m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色土を呈す（Fig.15　土層BB’の４層）。土師器高坏が出土した。

(4) 埋葬施設

２号墳の埋葬施設は主軸をN-87°-Wにとる単室の両袖型横穴式石室で、西側に開口する。石室掘り下げ中にかなりの礫が出てきたことから石室床面の敷石の可能性を考えながら掘り下げたため、石室の掘り下げにはかなり手間どった。

石室掘り方

石室掘り方は地山整形面からの深さ1.7mを測り、断面は逆台形を呈す。

玄室

石をすべて抜かれているが、抜穴からの推定では奥壁幅1.6m、袖部幅1.7m、右側壁長2.4m、左側壁長２m、で平面プランは長方形を呈す。敷石が一部残っていたが径10～15cmほどの平たい礫を使用している。羨道との間を区切る仕切石の掘り込みは長さ1.9m、幅65cmを測る。中近世から現代までのものと一緒に須恵器坏や鉄滓が出土した。

羨道

側壁抜き穴からの推定で幅0.8～１m、長さ2.4mを測る。床面は地山の上に厚さ15cmほどの盛土を施し、その上に径５～10cm前後の角礫を敷石として使用する。角礫は白色を呈す花崗岩の岩脈で調査区内でも普通にみられる石である。墓道との間に幅10cm強の溝を確認した。仕切り石の掘り方か。

墓道

石室主軸にまっすぐ連結する。幅は70～90cmで、地山を50cmほど掘り込み、断面は逆台形を呈す。土層から１回の追葬が確認できる。羨門から長さ3.2mのみ遺存している。鉄製太刀片が出土した。

遺物（Fig.19）。001～006は須恵器坏蓋である。001は石室から出土した。暗青灰色を呈し調整は丁寧である。復元口径15.5cmを測る。002は石室と墳丘裾部の破片が接合した。復元口径16.2cmを測る。

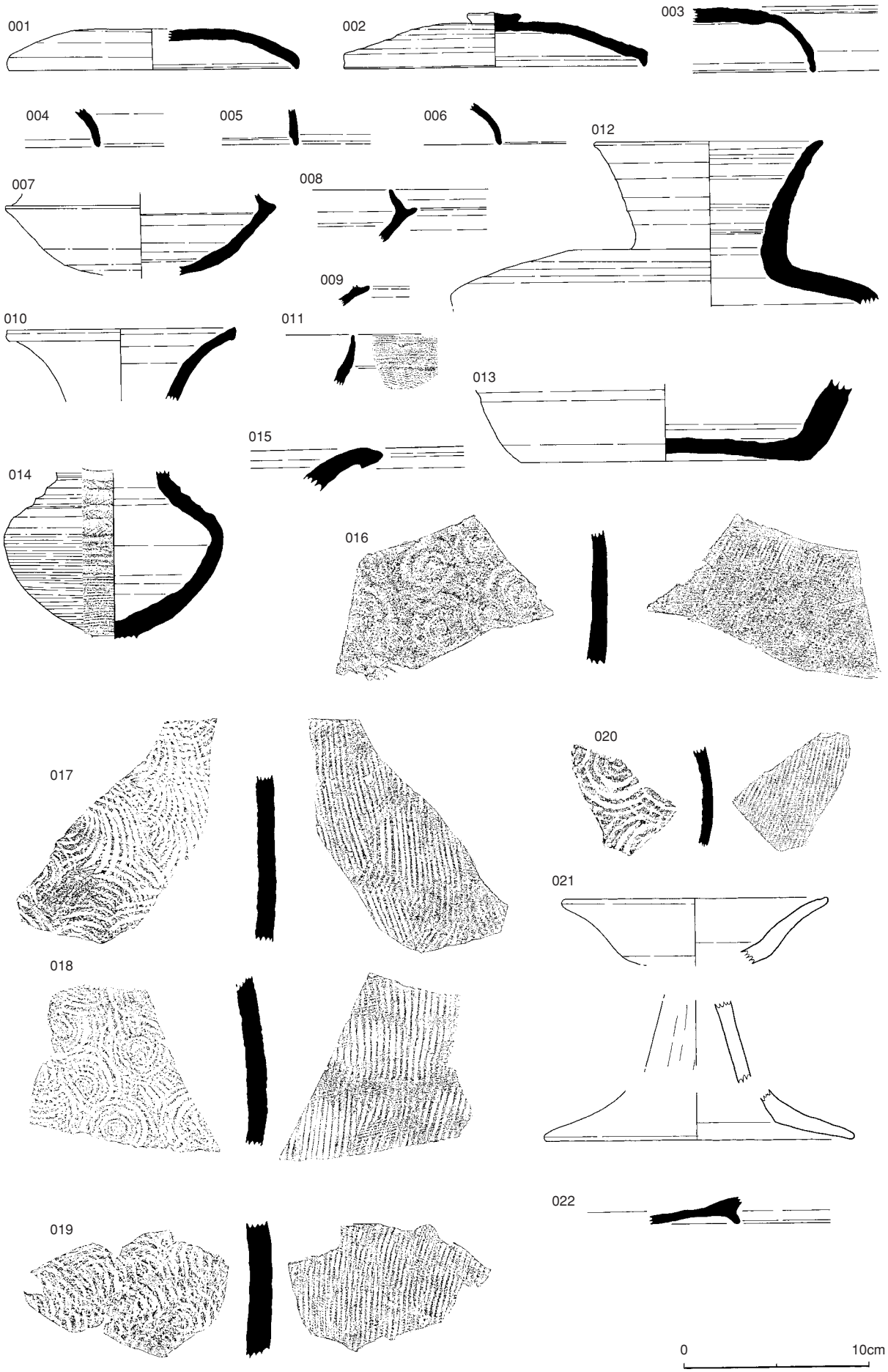


Fig.19　2号墳出土遺物実測図（1/3）

外面と内面口縁部に灰釉を施す。003～005は墓道から出土した須恵器坏蓋である。003は外面は黒褐色を呈し胎土は細かく焼成も良好である。006は石室から出土した。灰白色を呈し、胎土は粗い。007～009は須恵器坏。007は墳丘裾部と墓道から出土した。最大径は14.6cmを測る。008は墓道から出土した。胎土は粗く、微少な雲母片を含む。表面に径３mmほどの円形剥離が見られる。009は石室から出土した。010は須恵質口縁である。復元口径12.2cmを測る。外面は灰釉で黒褐色を呈し、砂を少量と微少な雲母片を含む。011は墳丘上で出土した。須恵器瓹の口縁である。暗灰褐色を呈し細かな砂を少量含む。口縁したに波状文を施す。012・013は提瓶である。墓道脇の墳丘から出土した(Fig.18)。復元口径12.4cm、最大胴径23cmを測る。全体にナデを施す。外面暗青灰色を呈し１mmほどの砂や雲母片を含む。014は墳丘表土中から出土した。須恵器台付壺である。胴部はカキ目を施し、肩部は段状をなし平坦部に縄文を施す。015～020は須恵器大甕である。015は口縁部で外面黒褐色、内面暗赤橙色を呈し胎土は精良である。021は土師器高坏である。周溝から出土した。復元口径14.2cmを測る。破片は小片で接合しないが同一個体と思われる。胎土は微小な雲母片を含む。022は石室から出土した須恵質の高台付坏である。灰白色を呈し、胎土は砂を多く含む。焼成は軟質である。石室・羨道とも床面まで盗掘をうけており、出土した須恵器や鉄滓も紛れ込みの可能性がある。墓道と周溝は攪乱をうけていない。

３）３号墳

(1) 位置と現状

３号墳は２号墳の石室から27m北側に位置する。1982年発行の分布地図には白抜きで記載されており、すでに墳丘は削平されていた。調査開始時には農道の一部になっており完全な平坦面であった。西側谷部に石材が露出していたことから試掘トレンチを入れたところ、石室の一部が遺存していることが判明した。石室は奥壁と右側壁は抜かれ、左側壁の奥壁側は石室床面を掘り下げた穴に落とし込んでいる。右袖石は小型の重機か何かで動かそうとした痕跡があり、数cm動いた状態であった。

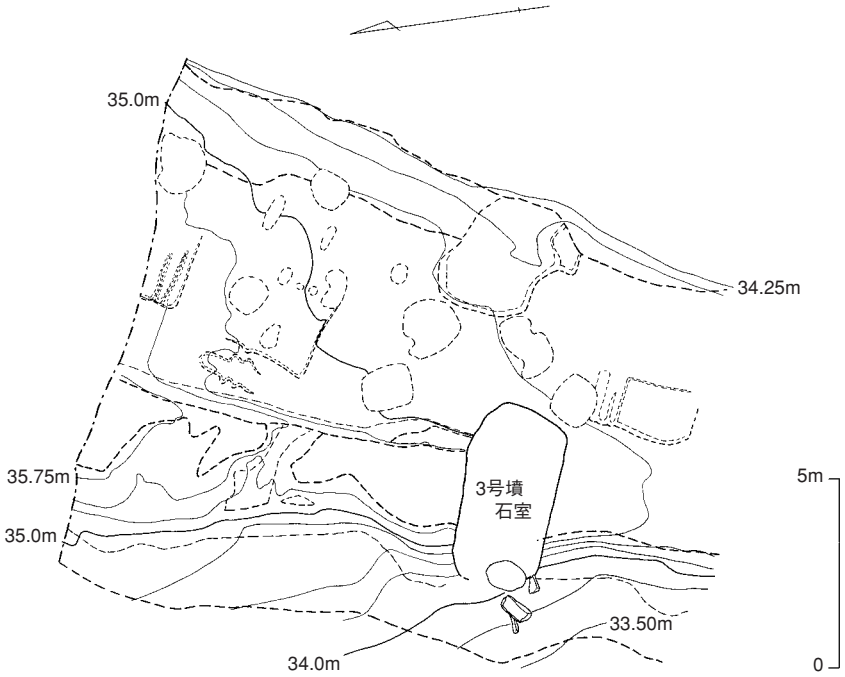


Fig.20　３号墳墳丘遺存図（1/200）

Fig.21　石室上面敷石実測図（1/40）

(2) 埋葬施設

石室は主軸をN-75°-Wにとる単室の両袖型石室で他の古墳同様西側に開口する。

玄室

現状で遺存しているのは左側側壁の腰石が２個と袖石２段である。床面は左奥側壁を倒す穴を掘ったため大きく削られているが全体の2/3程度遺存している。石室の奥行きは不明。幅は袖部側で1.35mを測る。床面は２面確認した。上下とも敷石を施す。下面は径10～15cm前後の礫、上面は径５～10cm前後の角礫を使用している。下面床面は入り口側が高くなっており、凹凸が激しい。下面敷石上面での出土遺物はない。上面は下面敷石の凹凸を径２～３cmの円礫である程度平らにした後に角礫を敷いている。このとき入り口側では下面敷石の一部が上面に露出している。羨道との間を区切る仕切り石は長さ78cm、幅14cmを測る。遺物は上面敷石直上まで一度掘り下げられているため残りが悪かったが、床面と側壁抜き穴から須恵器などが数点出土した。また、金製細型耳環が２点とガラス小玉が42点出土した。耳環の１点とガラス小玉のうち数点は奥壁抜き穴に落ち込んだ状態で出土した。

羨道

幅0.7mを測る。削平がひどく長さ0.5mのみ遺存している。中心部は削られているが袖部際には敷石の円礫が遺存している。

出土遺物（Fig.24　001～048）。001は須恵器坏蓋である。石室床面から出土した。口径10.7cm、器高2.9cmを測る。外面暗青灰色を呈し、整形は丁寧。全体に丁寧なナデを施すが外面上部平坦面の回転ヘラ削りは雑である。002は側壁抜き穴から出土した。土師質片で器種は不明である。赤橙色を呈し１mm以下の砂と微小雲母片を含む。内底部はナデ、外底部は回転ヘラ削りである。003は須恵器壺で青灰色を呈し、破片は石室の床面と抜き穴から出土した。口径12.1cm、器高17.1cmを測る。胎

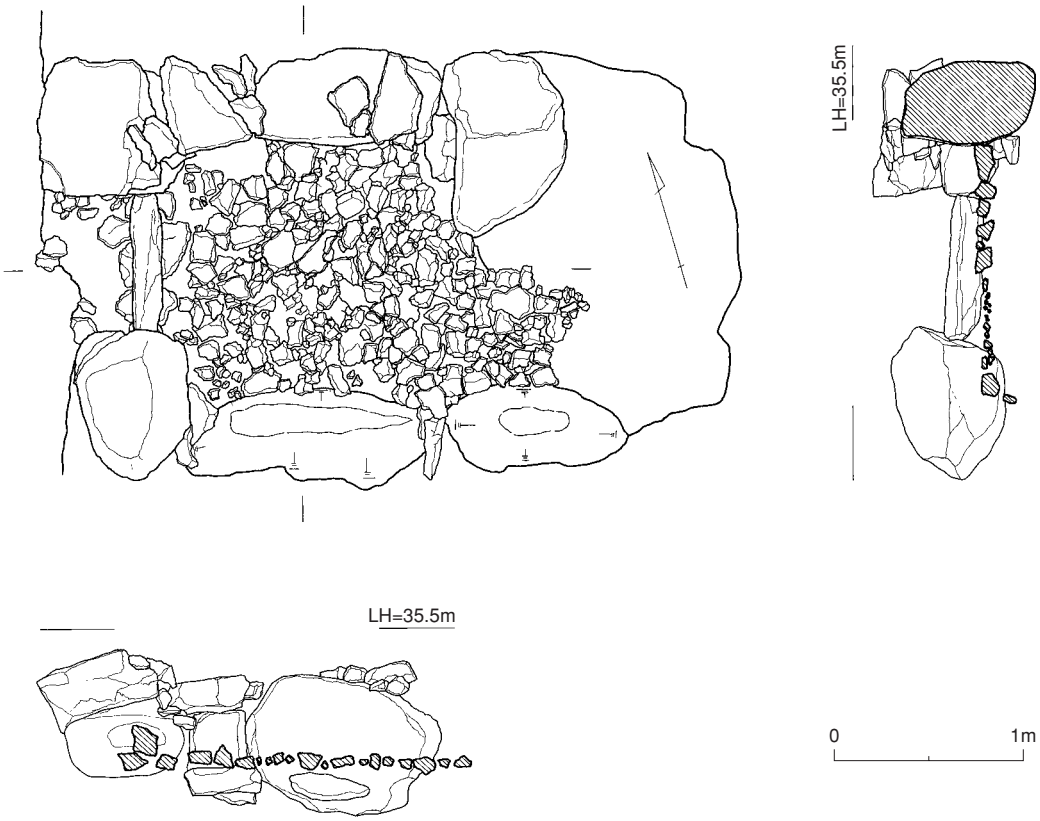


Fig.22　石室下面敷石実測図（1/40）

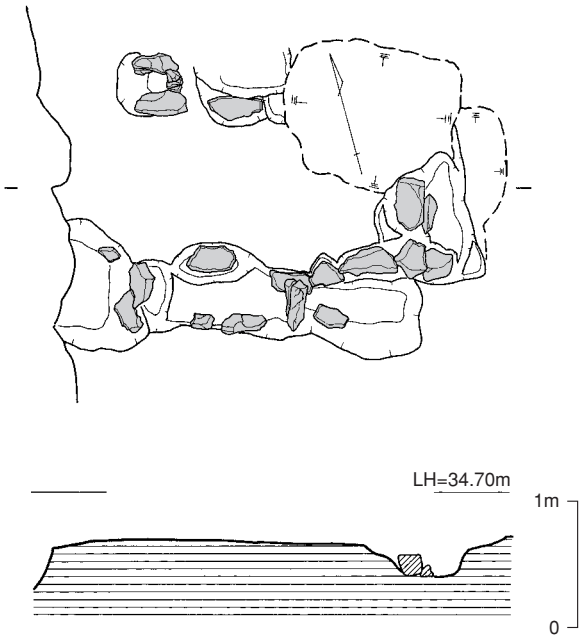


Fig.23　側壁掘り込み実測図（1/60）

土は１mmほどの砂を多く含むが整形・調整は丁寧である。焼成はやや軟質である。004は須恵器提瓶で外面の半分は黒褐色を呈す。口径8.9cm、器高20.8cmを測る。白色砂を多く含み、回転ヘラ削りなどの調整は丁寧である。また005・006は金製細型耳環である。005は床面から出土した。006は石室の抜き穴から出土したため変形している。007～048はガラス小玉である。007～014と044は石室の上面敷石上から、015～039は敷石下に貼った赤褐色土から出土した。040～043・045～048は石室埋土を篩ったところ出土した。床面刀子１点と圭頭鏃群Ｂ類（杉山1988）の破片が出土した。

参考文献　橿原考古学研究所論集８「古墳時代の鉄鏃について」杉山秀宏

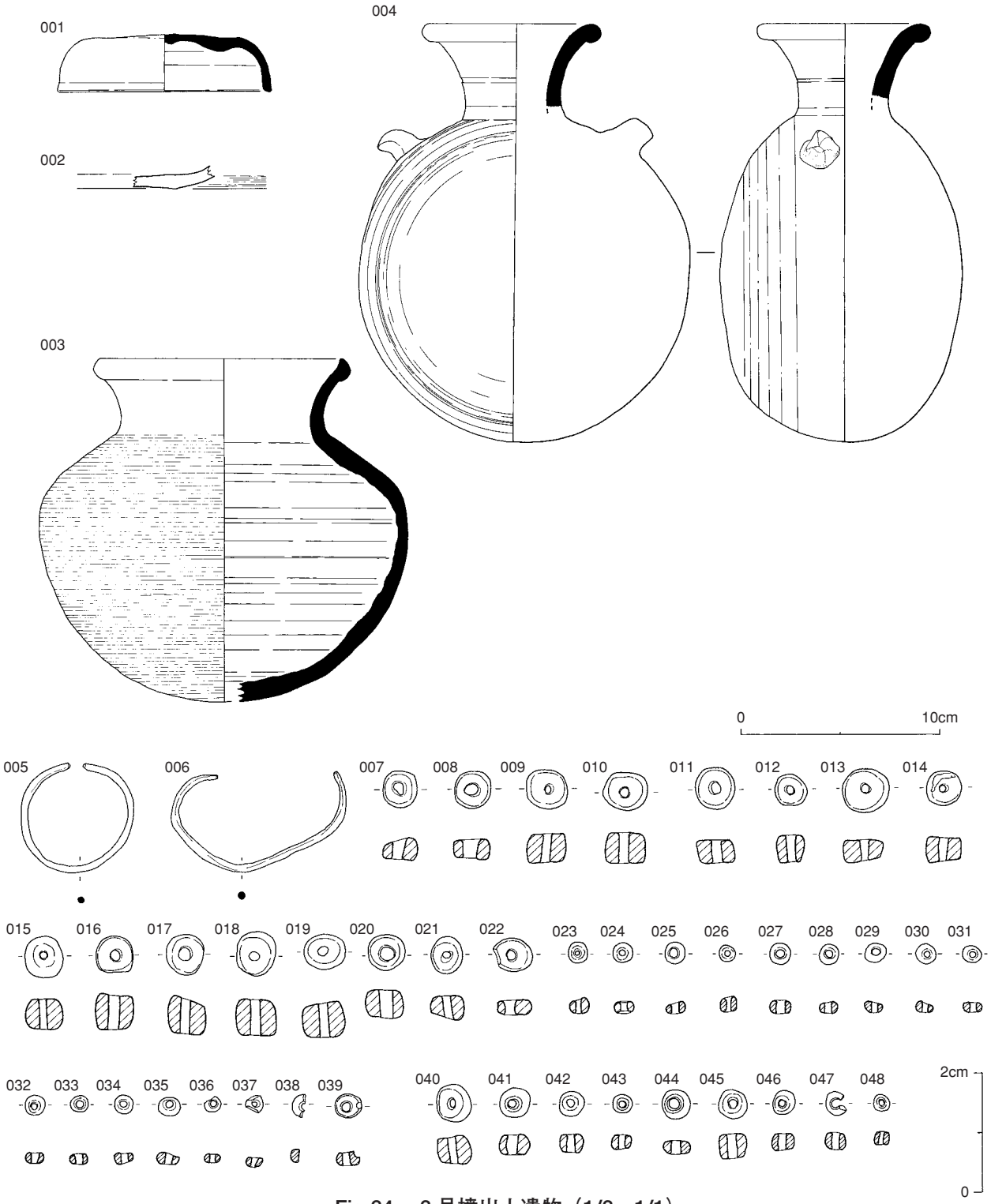


Fig.24　3 号墳出土遺物（1/3・1/1）

Fig.25　T14出土遺物（1/3）

4）小結

今回の調査では１号墳の墳丘北側と２号墳・３号墳の調査を行った。１号墳は前回の調査が石室のみの調査であったが今回北側にトレンチを設定したところ、周溝を確認することができた（Fig.4とPh.11）。これにより１号墳の規模を推定すると周溝外径で約23m前後になるものと思われる。２号墳は周溝外径で21mを測り、墓道土層からは少なくとも１回の追葬は確実である。墓道出土遺物から６世紀後半から末と推定される。３号墳は墳丘規模等は不明である。石室床面が２面確認された。下面は遺物が残っていない。上面敷石の時期は出土遺物から６世紀中～後半と考えられる。

Tab.2　ガラス小玉計測表

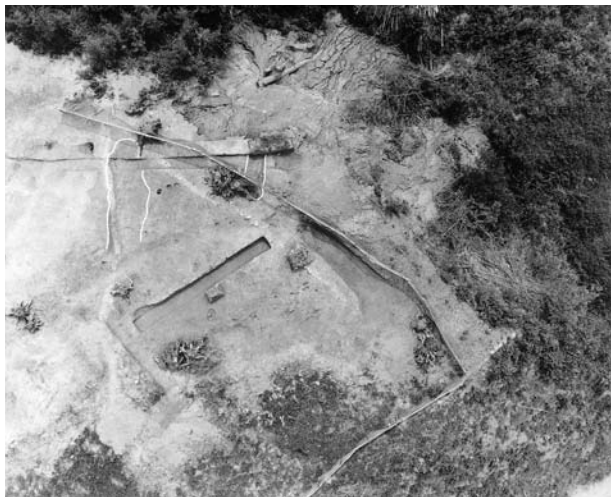
遺物番号	出土位置	取上番号	色	直径×高さ(mm)	孔径(mm)
007	石室床面	No.1	紺　不透明	6.3×3.9	2.8
008	石室床面	No.2	紺　不透明	5.9×3.6	2.1
009	石室床面	No.3	紺　不透明	7.0×4.3	2.1
010	石室床面	No.5	紺　不透明	7.1×5.3	2.0
011	石室床面	No.6	紺　不透明	6.5×4.2	2.4
012	石室床面	No.7	紺　不透明	5.3×5.0	2.4
013	石室床面	No.9	紺　不透明	7.4×3.7	1.9
014	石室床面	No.9	紺　不透明	6.2×4.4	2
015	敷石下赤褐色土		紺　不透明	7.5×5.0	1.3
016	敷石下赤褐色土		紺　不透明	5.5×6.0	2.5
017	敷石下赤褐色土		紺　不透明	6.5×6.0	2.7
018	敷石下赤褐色土		紺　不透明	7.5×6.0	1.8
019	敷石下赤褐色土		紺　不透明	7.0×6.0	1.9
020	敷石下赤褐色土		紺　不透明	6.5×4.5	2.7
021	敷石下赤褐色土		紺　不透明	6.3×4.1	2.3
022	敷石下赤褐色土		紺　不透明	5.5×2.4	2.1
023	敷石下赤褐色土		紺　不透明	3.1×2.7	1.3
024	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.2×2.0	1.4
025	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.3×1.9	1.6
026	敷石下赤褐色土		水色　透明	2.8×2.5	1.2
027	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.3×1.9	2.1
028	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.0×1.8	2.0
029	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.2×2.0	1.5
030	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.5×2.1	1.6
031	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.1×1.5	1.4
032	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.3×1.8	1.8
033	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.2×1.8	1.5
034	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.2×1.6	1.4
035	敷石下赤褐色土		水色　透明	3.7×1.9	1.6
036	敷石下赤褐色土		水色　透明	2.8×1.8	1.2
037	敷石下赤褐色土		水色　透明	2.8×1.6	1.4
038	敷石下赤褐色土		水色　透明	4.0×2.2	不明
039	敷石下赤褐色土		緑　不透明	4.3×2.4	1.5
040	石室内土		紺　不透明	6.1×5.0	2.1
041	石室内土		水色　透明	5.0×3.1	2.5
042	石室内土		水色 不透明	4.3×3.2	1.6
043	石室内土		水色　透明	3.1×2.2	1.6
044	石室床面		水色　透明	8.4×2.3	2.1
045	石室内土		紺　不透明	5.1×3.9	1.9
046	石室内土		水色　透明	3.7×2.6	1.3
047	石室内土		水色　透明	3.8×2.7	1.2
048	石室内土		水色　透明	2.4×2.1	1.4

Ph.11　1号墳周溝（北から）

1　調査前遠景（西から）

2　調査区全景（西から）

3　1号墳調査前全景（西から）



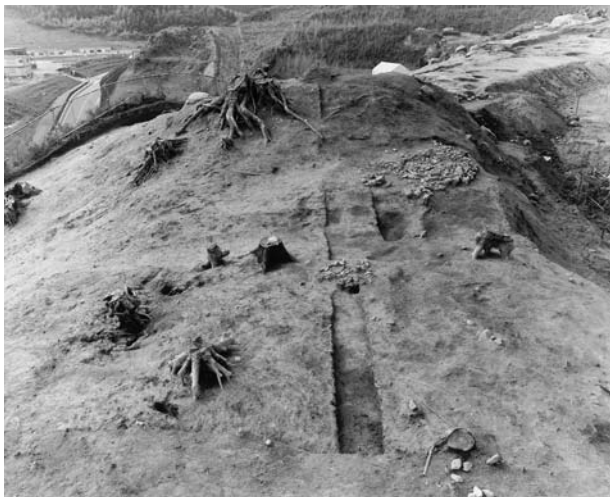
4　1号墳北側周溝（西から）

5　2号墳調査前全景（西から）

6　2号墳地山整形面全景（西から）

1　２号墳調査前（北から）

2　２号墳全景（北から）



3　２号墳全景（南から）

4　２号墳土層Ｂ（南西から）

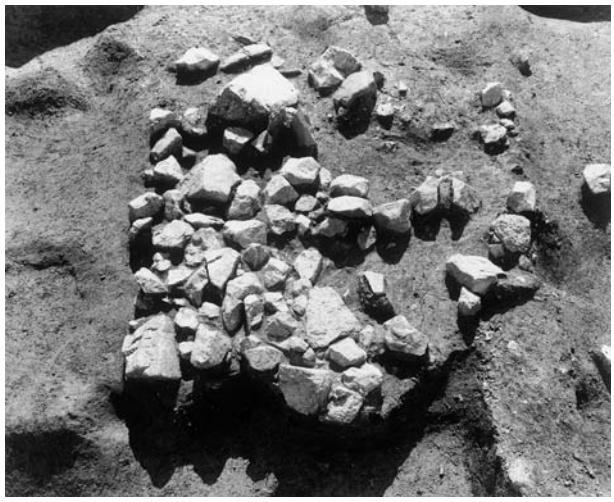
5　２号墳土層Ａ（北から）

6　２号墳墳丘遺物出土状況（西から）

1　2号墳地山整形状況（北から）

2　2号墳北側周溝土層（南西から）

3　2号墳石室（北から）

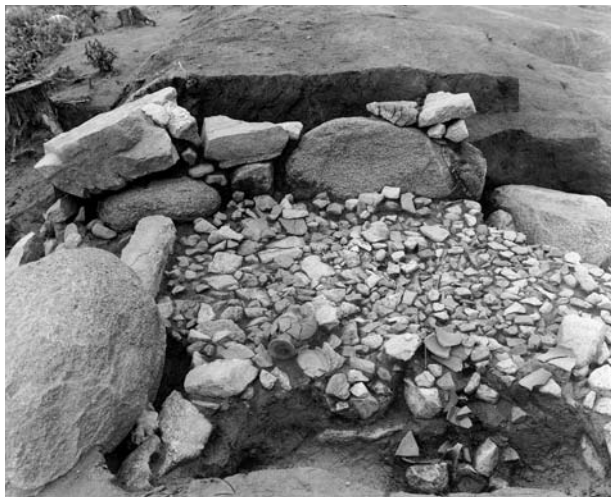


4　2号墳羨道部敷石遺存状況（東から）

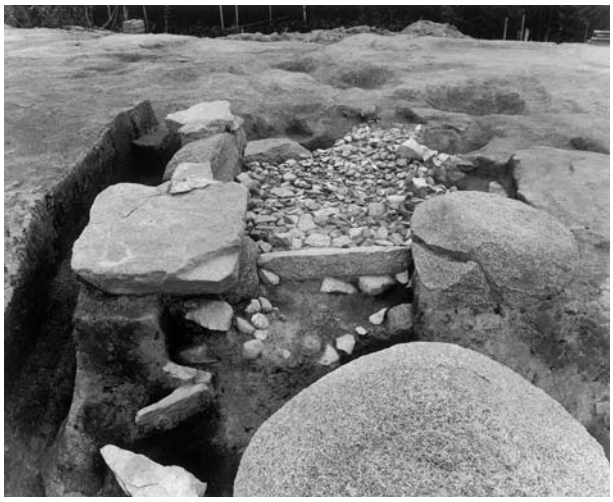
5　2号墳墓道土層E（東から）

6　3号墳上面敷石（東から）

1　3号墳下面敷石（東から）



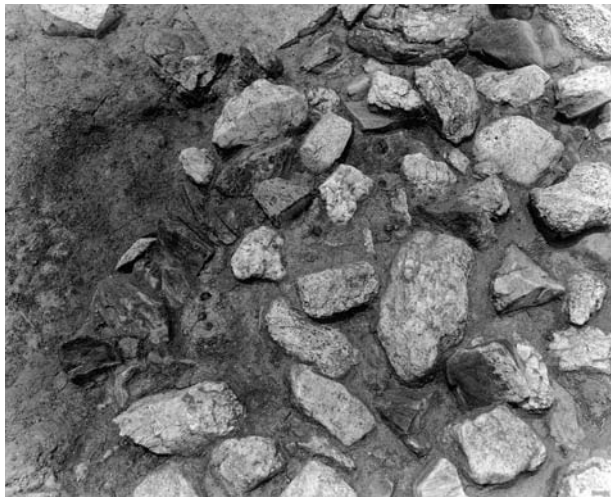
2　3号墳側壁（南から）



3　3号墳石室（西から）

4　3号墳上面遺物出土状況（南から）

5　上面鉄鏃出土状況（東から）



6　上面ガラス小玉出土状況（北から）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	もとおか・くわばらいせきぐん　ろく
書 名	元岡・桑原遺跡群６
副 書 名	九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	６
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	909
編 著 者 名	久住猛雄（編集，Ⅰ・Ⅱ）　菅波正人（Ⅰ・Ⅲ）　松村道博（Ⅳ）　二宮忠司（Ⅴ）　大庭友子（Ⅴ）　屋山洋（Ⅵ・Ⅶ） 吉留秀敏（Ⅵ）　力武卓治（Ⅶ）　片多雅樹（Ⅱ）　比佐陽一郎（Ⅱ・Ⅴ・Ⅶ）（※Ⅰ～Ⅶは章を表す。）
編 集 機 関	福岡市教育委員会
発 行 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神１丁目８－１　TEL 092-711-4667
発 行 年 月 日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	（調査次数）	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間	調査面積 （㎡、古墳　基）	調査原因
もとおか・くわばらいせきぐん 元岡・桑原遺跡群	ふくおかけんふくおかしにしくおおあざもとおか・くわばら 福岡県福岡市西区大字元岡・桑原	40130	2782	22次	33°36′5″	130°13′49″	2000.4.13～2000.10.20	3,890㎡	大学移転
				27次	33°36′7″	130°13′41″	2001.12.1～2002.8.29	4,495㎡（一部現地保存）	
				28次	33°35′41″	130°13′27″	2002.2.1～2002.6.30	2,214㎡	
				34次	33°35′49″	130°13′31″	2003.4.1～2003.8.12	7,000㎡	
くわばらかなくそこふん 桑原金屎古墳	ふくおかけんふくおかしにしくおおあざくわばらあざかなくそ 福岡県福岡市西区大字桑原字金屎		2795	１次	33°36′4″	130°13′40″	1996.8.20～1996.11.29	586.55㎡、古墳３基（現地保存）	
もとおかいしがはらこふん 元岡石ヶ原古墳	ふくおかけんふくおかしにしくおおあざもとおかあざいしがはら 福岡県福岡市西区大字元岡字石ヶ原		2803	１次	33°35′55″	130°13′37″	1996.8.27～1996.11.29	1,280㎡、古墳１基	
				２次（元岡・桑原35次）			2003.5.20～2005.1.12	1,853㎡、古墳１基	
くわばらこふんぐんえいぐん 桑原古墳群Ａ群	ふくおかけんふくおかしにしくおおあざくわばらあざおおさか 福岡県福岡市西区大字桑原字大坂		0739	１次（元岡・桑原34次で再調査）	（元岡・桑原34次に同じ）		1986.9.8～1986.10.8	古墳１基（桑原古墳群Ａ群４号墳＝現・元岡古墳群Ｊ群１号墳）	土砂採取

遺跡概要（調査地点）	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桑原金屎古墳１次	古墳	古墳時代	（１号墳）前方後円墳１基、粘土槨、割竹形木棺 （２・３号墳）方墳２基（１基は不明確）	（１号墳）銅鏡２面（菱雲紋鏡１面、芝草紋鏡１面）、ガラス小玉１点、古式土師器片、赤色顔料（ベンガラ、水銀朱）	全長約24mの前方後円墳、古墳時代前期末、後円部三段築成・前方部二段築成（一部三段築成）、晋代の中国鏡２面、方墳２基を付設、粘土槨、割竹形木棺、構築墓壙、銅鏡付着繊維（麻・絹）
元岡石ヶ原古墳１・２次（元岡・桑原35次）	古墳	古墳時代	前方後円墳、横穴式石室	須恵器（坏蓋、坏身、高坏、瓶、台付壺、壺、甕、瓶、大型器台、鉢、皮袋形瓶、鹿形瓶、台付子持瓶）、土師器、鉄製品（鉄刀、鉄鏃、鉄矛、絞具、辻金具、桂甲？小札、鋲付留金具）、青銅製品（鏡？）破片	古墳時代後期（６世紀中頃）の首長墓、全長約49mの前方後円墳、後円部二段築成・前方部一段築成、後円部整形溝、後円部一次墳丘・二次墳丘、盛土地滑り跡、横穴式石室（両袖式単室）、追葬、特異な須恵器（皮袋形瓶、鹿形瓶、台付子持瓶、大型高坏形器台）、TK10～TK43
元岡・桑原22次	集落生産	古墳時代 古代 (8～9世紀)	掘立柱建物８棟、製鉄炉２基、鍛冶遺構１基、井戸２基、不定形土坑（溝状土坑）２基、焼土坑２基、溝状遺構２条	須恵器、土師器、刻書土器、越州窯系青磁、緑釉陶器、鞴羽口、滑石製石鍋、石製品	古墳時代後期（６～７世紀）、古代（８～９世紀）、製鉄遺構（古代）、総柱建物、側柱建物
元岡・桑原27次	集落生産	弥生時代 古墳時代 古代 (8～9世紀)	竪穴住居25棟、溝状遺構24条、鍛冶炉４基、伏焼土坑１基、鉄滓出土土坑５基、土坑22基、掘立柱建物18棟	土師器、須恵器、越州窯系青磁、白磁、篠窯系須恵器、鉄滓、弥生土器（弥生時代後期）、石製品（磨製石斧、石鍋、石錘、紡錘車、石包丁、磨石、打石、凹石、砥石、台石）、土錘、鉄鏃（古墳時代後期）、耳環（金銅製）	竪穴住居群（古墳時代後期、６世紀前半～７世紀）、掘立柱建物群（古墳時代後期～８世紀）、焼失住居（古墳時代後期）、鉄滓出土土坑（８世紀）、古墳時代後期（６世紀）の土器一括出土
	散布地	旧石器時代 縄文時代		（後期旧石器）彫器、ナイフ形石器、台形石器、船底形細石核（縄文時代）石鏃、楔形石器、二次加工有剥片、青緑色石（結晶片岩様緑色岩？）製玉、黒曜石製石核、磨製石斧	
元岡・桑原28次	貝塚散布地	縄文時代 旧石器時代	貝塚、遺物包含層	縄文土器、動物遺存体（貝類、甲殻類、魚類、哺乳類）、石器、石器（石鏃、石錐、縦長剥片、黒曜石製石核、使用痕有剥片、扁平打製石斧、蛇紋岩製石斧、細石刃）、黒曜石原石	県指定史跡「元岡瓜尾貝塚」の隣接地貝塚（試掘調査）、縄文時代後期（北久根山式）、鈴桶型石刃技法、黒曜石原石出土（埋納遺構を推定）、動物遺存体
	集落生産散布地	弥生時代 古墳時代 古代 (8～11世紀)	遺物包含層（谷）、溝状遺構８条、焼土坑２基、製鉄炉１基	弥生土器（弥生時代中期～後期）、須恵器、土師器、黒色土器（Ｂ類）、鉄滓、白磁、越州窯系青磁、緑釉陶器、鞴羽口、太型蛤刃石斧・小型磨製石斧（今山産玄武岩製）、滑石製石鍋、鉄製品（鉄鏃、鉄刀？）	古墳時代後期（６～７世紀）、古代（８～11世紀）、鉄滓多数出土（製鉄関連集落か）
元岡･桑原34次（元岡古墳群Ｊ群）	古墳	古墳時代	（１・２・３号墳）円墳３基、横穴式石室	須恵器、土師器、鉄製品、ガラス小玉、金製細型耳環	古墳時代後期（６世紀中頃～末）、群集墳、金製細型耳環、耳環研究
桑原古墳群Ａ群１次	古墳	古墳時代	（１号墳）円墳、横穴式石室掘り方	須恵器、土師器、鉄製品（鉄刀、鉄矛、鉄鏃）、金製細型耳環	（元岡・桑原34次１号墳と同じ）金製細型耳環、耳環研究

元岡・桑原遺跡群６

－桑原金屎古墳、元岡石ヶ原古墳、元岡・桑原遺跡群第22・27・28・34次調査の報告－
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集

2006年3月31日

発行　福岡市教育委員会（福岡市中央区天神一丁目8-1）

印刷　株式会社 西日本新聞印刷（福岡市博多区吉塚八丁目2-15）

付図　元岡・桑原遺跡群第22次調査遺構全体図（1/300）